
ジョジョの奇妙な冒険 part6異聞録 ストライカーズ・オーシャン

オレの「自動追尾弾」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョジョの奇妙な冒険 part6 異聞録 ストライカーズ・オーシャン

【Nコード】

N2315I

【作者名】

オレの「自動追尾弾」

【あらすじ】

聖王教会から盗まれた『矢』を探すため、スバル達は第97管理外世界の麻帆良学園に行く。そこでスバルが出会ったのは、『立派な魔法使い』を目指すネギ・スプリングフィールドと、『自分と同じアザ』を持つ空条 徐倫だった…。

ジョジョの奇妙な冒険第六部の、クロスエピソードストーリー！

2 / 1 0 小説情報の欄がいっぱいになってきたので、挿し絵挿入の更新は、活動報告の方に記載することにします (^ ^ ;)

プロローグ く夢く (前書き)

初めまして！初投稿でおかしな点が多々あると思いますが、頑張
て書きました。

ご指摘や感想等、お願いします。

プロローグ く夢く

炎に包まれた、船の機関室と思われる場所。

そこに、二つの人影があつた。

一人は、左肩に「星形のアザ」が見られる大男。
もう一人は、小柄な老人だ。

その老人が、一抱えもあるガラスケースを掲げた。
なかには、ガラスケースを満たす液体と、

金髪の男の「生首」が入っていた。

ふいに、生首の目がかつと「開かれる」と、ガラスケースは勢いよく破裂する。

生首は切断面から無数の太い「血管」を伸ばし、大男に襲いかかる。
生首は血管の数本を首に巻き付け、数本を突き刺すと、止めと言わんばかりに、男に突進してくる。

機関室の至る所で、爆発が起こった。

爆発した破片が男の元へ飛んでくると、男はその破片を掴み、突進

してくる生首に突き刺した。

瞬間、機関室を大爆発が襲い、船は爆発とともに、ゆっくりと沈没した

「……っていう夢を見たんだけど……」

「「「「」」」」」

「……あ、あれ？」

ショートカットの青い髪の少女　スバル・ナカジマは、自分の話を聞いていた四人がひきつった顔をしているのを見て、若干慌てた。

ここは遺失物管理部対策部隊「機動六課」の「食堂」。

今はちょうど「昼休み中」であり、彼女らは「昼食」をとっていた。……まあ、食事中にするような話ではなかったため、そうなるのは仕方ないが……。

実際、生首の辺りで年少の二人　エリオ・モンディアルとキヤロ・ル・ルシエは、食べる気をなくしてしまった。

「…なるほど、つまりその『夢』が気になって、訓練に身が入らなかったってことかな？」

「え、あ、はい…」

少し困ったような笑みを浮かべるサイドテールの上司　高町なのはの質問に答えるスバル。

彼女の言うとおり、午前の訓練でスバルの様子がおかしかったため、このように昼食時に聞いてみたのだが、内容が内容だったため、少し失敗だったかな？と思っていた。

「…あれ？でもその『星形のアザ』って…！？」

オレンジの髪をツインテールにした少女　ティアナ・ランスタールは、ある事に気づく。

「うん…だから気になってたんだ…その人　」

そう言いながら、スバルは自分の左肩を触る。

「その人、『私と同じアザ』があつたから……」

スバルの制服から覗かせた左肩には、夢にでてきた大男と同じ『星形のアザ』が見えていた

数分後

「機動六課」部隊長室

「……搜索任務？」

「第97管理外世界に……ですか？」

スバルたちは目の前のショートボブの女性　八神はやてから聞かされた任務の内容に、疑問符を浮かべた。

スバルの『夢の話』を聞き少し重い空気になっていた彼女らは、隊員呼び出しの放送を聞き、部隊長室へ来ていた。

そこには部隊長八神はやての他にライトニング分隊長であるフェイト・T・ハラウオン、そして、部隊長補佐リインフォース2（ツヴァイ）がいた。

そして、そこで彼女らに告げられたのは、なのははやて達の故郷でもある第97管理外世界へ、ロストロギアの搜索任務であった。

「うん。みんなに探してほしいんは…」

そう言いながらはやては、コンソールを操作し、全員の前に画面を出す。

画面には、古めかしい『石の矢』が映し出されていた。

「この『矢』なんやけどね、数日前に『聖王教会』から盗まれたものなんよ。」

「聖王教会から……!!」

はやての話の聞き、スバル達は驚く。

「…それではやてちゃん、この『矢』はどんなロストロギアなの？」

なのはは、ふと疑問に思った事を聞く。

すると、はやては困ったように、

「それが…全く『用途不明』なんよ……」

そう答えた。

「……はい？」

五人の声が重なった。そして目が点になる
そりゃそうだ。

使い道が分からないものを探せと言われれば、誰だってそうなる。
筆者だってそうなる。

「…よ、『用途不明』って、どうゆうことですか!？」

「使い道分らないのにロストロギアって認定されるものなの？」

「さ…さあ？」

いち早く復活したティアナが、はやてに疑問を投げ、キャロはエリ
オに聞くが、エリオも困った様子だ。

「ま、まあ、みんながそう思うんはわかるけどな…」

「実はこの『矢』はね、少し『厄介な』代物なんだ…」

「『厄介な』…？」

慌てる全員を静めたのは、フェイトの一言だった。

「この矢を見つけた時、教会の人が二人、矢の鏃やじりで手を怪我をした
んだけど、その後、二人は原因不明の病気に感染して死んじゃった
んだ…」

フェイトの話に息をのむ五人。

「二人は全身に水泡のような腫瘍ができて、四十八時間以内にトマ
トソースのようになって死亡したって報告があった。医師団は『矢』
でついた傷口から血液に『なにか』が入り、二人にウイルスを感染
させたんじゃないかって断定したそうだよ。」

話を聞いていたなのは、今日は気持ち悪い話ばかり聞くなあと
思ったが、言わないでおいた。

「しかも、二名中一名は、信じられない事に意識のない状態で突然、
指先からスタンガンのような火花を放電し、治療する医師の指を焼
き切ってしまったって報告も残ってる…」

この事件から、この『矢』には『人の肉体を変質させる』力がある
のではと考えられて、ロストログアとして認定されているんだ…」

フェイトの話聞き、黙ってしまう五人。だが、エリオはある事に
気がついた。

「…ちよつと待って下さい！その矢が盗まれたって事は、盗んだ犯
人は…」

「うん、『矢の使い道を知っている』可能性が高いねん！
そして、犯人はわざわざ足取りを『残しとる』！」

はやてはさういうと、再びコンソールを操作し、画面を切り替える。
切り替わった画面には、三つの映像が映し出されていた。

一つは顔写真で、網のようなものの付いた帽子をかぶり、顔に奇抜
なメイクをした若い男のものだ。

後の二つは、多分監視カメラの映像と思われるもので、写真の男が
写っていた。

「男の名前は『オエコモバ』！爆破テロをいくつもの世界で起こし
たテロリストや！何故こいつが矢を盗んだかは本人を捕まえてから
聞けばいいとして、やつはわざわざこれを残したうえに、行き先も

既に分かっている！しかも！向かった先は管理局にとって重要な場所、97管理外世界にいくつかある『魔力溜まり』ポイントの一つなんや！」

はやての言葉に、スバル達は気を引き締める。

ほぼ同時刻

第97管理外世界

アメリカ テキサス州 ダラス 某所

とある建物のロビー、そのソファアに、一人の男が腰掛けていた。2m近くある身長に、ラグビー選手のようながっしりとした体格をし、鎖のようなものをぶら下げたコートを着込み、星のマークの入った帽子をかぶっている。その男は、手元の資料を見ながら、隣に立つ研究員と思われる中年男性に声をかける。

「…つまり、日本で『矢』の目撃が確認されたんだな？」

「はい、既に数名が『射ぬかれた』痕跡があり、内一名は…」

研究員は申し訳なさそうに口を渋らせた。資料には、中学生と思われる前髪の長い少女と、簡単なプロフィールが書かれていた。

その少女の所属する学校名を見て男 空条 承太郎は呟いた。

「…まさか『あいつ』の学校とはな…やれやれだぜ」

さらに同時刻

イギリス メルディア魔法学校

ここでは、まさに卒業式が行われていた。

そして、卒業した生徒たちは、卒業証書に書かれた修行先で修行を行い、『立派な魔法使い』を目指すのだ。

さて、その内の一人、赤毛でメガネをかけた少年 ネギ・スプリングフィールドの修行内容は…

「ええー！？ に、『日本で先生をやること』 おおおー！？」
であった。

「こ、校長！…いくらなんでも先生なんて！何かの間違いでは！？」

ネギが姉と慕う女性 ネカネ・スプリングフィールドは、校長に
取り合う。

確かにネギはまだ10歳である。慌てるのも無理はない。

が…

「…しかし、すでに決まったことじゃ。マキステル・マキ立派な魔法使いになるには、
頑張って修行してくるしかない…」

校長は、そう答えるしかなかった。

「ああっ」「くらっ」

「あっお姉ちゃん！」

校長の答えに倒れかかるネカネを心配するネギと、幼なじみのアー
ニヤ。

「まあ、安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。
まあ、がんばりなさい。」

不安そうなネギに、校長は、優しく励ました。

「…はい！」

ネギは決心し、力強く答えた。

「それで、やつが逃げた場所は？」

そう聞くなのはに、はやては答えた。

「…仕方ない、行くか。『あいつ』のいる」

承太郎は立ち上がると、呟いた。

「それで、修行地は？」

ネギの質問に、校長は答えた。

『麻帆良学園。』

スバルは知らない。自分の『星形のアザ』の『因縁』を

承太郎は知らない。自分の『娘』が巻き込まれる『事件』を

ネギは知らない。『黄金の意志』を持つ者たちとの『出会い』を

そして、『彼女』は知らない。『自分たち一族』の『宿命』を

これは、一世紀以上にわたる、ディオとジョースター家の因縁の物語である…

ジョジョの奇妙な冒険 part 6 異聞録
ストライカーズ・オーシャン

始まります。

プロローグ ～夢～ (後書き)

プロローグです。

なんか六課サイドの描写が多くなっちゃいました(^ | ^ ;)

ちなみに冒頭のスバルの夢は、ジョジョのOVAのOPが元ネタです。

今回は、スバルやネギ達の出会い、そして徐倫の登場を予定しています。

#01 / 出席番号11番 空条 徐倫(前書き)

1話を投稿します。感想、ご指摘等、お願いします。

#01 / 出席番号11番 空条 徐倫

2007年 2月末

第97管理外世界

日本 埼玉県 麻帆良市
麻帆良学園 学園長室

今、ここには四人の男女がいた。

一人は、人とは思えないくらい後頭部が長い老人。
もう一人は眼鏡に髭を生やした三十代ほどの男性。
そして後の二人は

「管理局より来ました、フェイト・T・ハラオウンです。」

「お、同じくスバル・ナカジマです。よ、よろしくお願いします！」

そう、執務官の制服を着たフェイトと、
麻帆良学園中等部の制服に身を包んだスバルだ。

#01 / 出席番号11番 空条 徐倫

「ふおつふおつふお、そんなに緊張せんでもよいぞ、スバルくん。」

老人　麻帆良学園学園長にして関東魔法協会理事、近衛　近右衛門は、スバルに話しかけた。

「　まあ、『中等部に潜入し、学園内を捜索しつつ生徒を護衛』なんて任務任されたら、緊張して仕方ないからね。」

眼鏡の男　タカミチ・T・高畑の言うとおり、スバルはこの麻帆良学園中等部に『生徒』として潜入する事を任命されていた。一年が近いスバルが、この任務に適任だったためだ。

「は、はい。それもありますけど…」

スバルは口ごもる。

彼女は別に緊張したわけではない。彼女がかんてしまった『理由』、それは

(…スバル、学園長はれっきとした『人間』だからね。エイリアンとか、シリとかの妖怪の類じゃないからね。)

(わ、分かっています。分かっていますけど…)

念話でスバルに注意するフェイトと、学園長を見ながら答えるスバル。

て来る。彼女の目の前には、ツインテールの少女に驚いたスバルとフェイトがいた。

「あ、た、高畑先生！？わ、私つたらなんて事を！？」

「あ、タカミチ久しぶりー。」

「や、やあ。大丈夫かいネギくん？」

「えっ？知り合い！？」

タカミチを見て頭を冷やした少女だが、持っている赤毛の少年ネギとタカミチの会話に驚く。

「おお明日菜くん、こちらはわしの知り合いのフェイトくんと、今日からこの学園の生徒になるスバルくんじゃ。」

「は、初めまして、スバル・ナカジマです。」ペコリ

「あ、そうなんだ。『神楽坂 明日菜』です。こちらこそよろしく。」ペコリ

少女 - 明日菜は少年を下ろし、スバルと挨拶をする。

「はわー、先生と転入生がいつぺんに来たんかー。」

初めましてスバルちゃん、ウチは『近衛 木乃香』や、よろしゅうなー。」

おっとりとした少女 木乃香も、明日菜に続き挨拶する。

「あ、よろしく。ってあれ？近衛って…？」

ふと、あることに気づくスバル。

「うん、このかは学園長の孫なのよ。」

「えっ？」

説明する明日菜に、驚くスバルとフェイト。

(…養子か何か?)

さらっとヒドいことを考えるスバル。だが、

(洗脳?まさか、『プロジェクトF』で…?)

フェイトも意外とヒドかった。

「まあ、二人の紹介はこれ位にして、ネギ君には、まず教育実習という形で『2年A組』の担任になってもらうかのう。今日から3月までじゃ。」

「…はあ。」

「え?担任?しかも2年A組って…?」

スバルが、今聞いたことに疑問を持ち、少年を見る。どう見てもエリオくらいの年の子だ。

この子が先生?しかも、先ほど自分が行くことになったクラスの担任??

「あ、自己紹介がまだでしたね。この度、この学校で英語の教師をすることになりました、『ネギ・スプリングフィールド』です。」

「ええーーーーー!!!!!!」

スバルの叫びが、学園にこだました。

「まあ、驚くのも無理は無いがのう。では指導教員の『ブルーマリ

ン先生』を紹介しよう。ブルーマリン君。」

「…はい。」

学園長が呼ぶと、明日菜が開けて、そのまま開けっ放しのドアから、背の高い男がぬつと入ってきた。よく見ると『爪先立ち』だ。

黒いスーツはボタンを全部はずし、ネクタイはしていない。白い髪は上に盛るようにセットしており、角が生えている。…角？

「指導教員の『ウエス・ブルーマリン先生』じゃ。分からないことがあったら、彼に聞いてくれ。」

「ウエス・ブルーマリンだ。生徒や親しい者からは『ウエザー』と呼ばれている。」

「は、はい、よろしくお願いします。（あの角はいつたい…？）」

「ああ、一応言っておくが、ウエザー先生のそれは帽子じゃよ。」

「…あ、そうなんだ。」

安心するスバルたち三人だった。

十分後

「へえ、スバルさんも魔導士なんですかー。」ひそひそ
「うん、ネギくんも、『こっちの』魔法使いだっただね。」ひそ
ひそ

「いえ、まだ修行中の身でして…」ひそひそ

ウエザー先生に聞かれないように小声で話す二人。

あの後、先に教室へ向かった明日菜達と別れた二人は、ウエザー先生に連れられ、自分たちの教室へ向かっていた。

「…ここだ」

「えっあ、どうも…」

いきなりウエザーに話しかけられて、驚く二人。この人は、基本的に無口らしい。

ネギは、廊下の窓から教室の様子を覗く。

(…あれ?)

ふと、スバルは『何かを』感じ取る。教室の方からだ。
スバルは、ネギと一緒に教室を覗いてみた。

2年A組

「ん？」

スバルと同じ『何かを』感じ取った少女は、読んでいたライトノベルから目を離し、廊下の方を見た。

「……どうした？」

斜め前に座るルームメイト 赤みがかった長い髪を後ろで縛り、眼鏡をかけている が彼女の様子に気づき、声をかける。

「……いや、何でもない。（何だ？今は……？）」「？」

彼女は『何か』が消えたため、ライトノベルをまた読み始めた。

(消えた…何だったんだろ？今の？)

『何か』が消えたため、スバルは六個くらい疑問符を浮かべ、首を傾げる。

「どうしました？スバルさん？」

「あ、ううん、何でもないよ！」

「……？」

心配するネギに答えるスバル。エリオ達位の子に心配されては情けない。

「じゃ、じゃああけますよ。」

「う、うん。」

「……」

ガラガラッ

「し、失礼しま」

ネギがドアを開けた。すると、上からチョークの粉たっぷり、黒板消しが

ばしっ

「「「「「「「「「「「「「「「」

「…ふう、危ない危ない。大丈夫ネギくん？」
「あれ、スバルさん？」

ネギの頭上に落下する前に、黒板消しをキャッチするスバル。
なかなかの反射神経だ。
が、

「すみません、全然気づきませんでしたっ！？」

ズゴツガボンパスパスパスツゴガガガッ

メメタア

「ドベエーッ!？」

「ネ、ネギくーん!？」

「「「「「「「「「「「「「「「」
あははははは!」「」「」「」「」

黒板消しには気づいても、他にトラップがあるのには気づかなかっ
たらしい…

「…ってあれ？子ども!？」

「「「「「「「「「「「「「「「」
ええっ!?!」「」「」「」「」

そこで、やっとネギが子どもである事に気づく生徒たち。いや、遅いよ。

「ごめーん！新任の先生かと思ったから…」

「いや、そいつが新任の先生だ。」

「え？ウエザー先生？」

「全員席に着け！ネギ先生、自己紹介をしてくれ。」

「あ、はい。」

全員が席に座ると、ネギはこほんとせきをした。

「きよ、今日からみなさんに英語を教えることになった、ネギ・スプリングフィールドです。よ、よろしくお願いします。」

緊張でガチガチになりながらも、ネギは自己紹介を終える。

「で、こっちが転入生の」

ウエザーはスバルを紹介しようとするが、

「………かわいいー！！」「………」

「え？え？」

「お、おいお前ら…」

「うわー！？」

生徒たちの声に遮られてしまった。

「ねえ、君頭いいの？」

「どこから来たの？」

「ほんとにもらうていいんですかウエザー先生？」

次の瞬間、ネギは生徒たちにもみくちやにされていた。

「あー、おまえ等のじゃないからなー。食うんじゃねーぞー（性的に）。」

一応注意するウェザーだが、生徒たちは九割近く聞いてなかった。そこに、

「いいかげんになさい！」バン！！

「……………?!?!?」「……………」

騒がしいクラスを静めたのは、机を叩く音と、高めの怒声だった。

「皆さん、もうおやめになって。先生がお困りになってるでしょう。」

「

声の主　　2年A組委員長・雪広　あやかは、クラスメイト達に言う。

「それに、」

言いながら、あやかはスバルに手を向ける。

「新しい」クラスメートの紹介がまだでしょう?」

「……………あ……………」

「ひどいやみんな…まあ、子ども先生に比べたら、私なんてインパクト薄いよ…でも、気づかないのはヒドくない?」

クラスが見たのは、若干涙目のスバルだった。

「……………すみません」「……………」
クラスの全員が謝った。一切のブレなくハモった。ある意味心が一つになった。

「改めて、このたびこのクラスに転入してきた、スバル・ナカジマです。よろしく!」

「……………よろしくー!!」「……………」

ようやくスバルの紹介が済み、クラスにある程度の落ち着きが戻った。

「それじゃあ、ナカジマは長谷川の後ろの席に座ってもらおう。ちよとど空いてるしな。」

「あ、はい。」

ウエザーがスバルの席を指示する。中央の列の最後尾、その廊下側の席だ。

ふと、指示された席の隣の生徒に目がいった。

まず、背が高い。座っているが、170cm以上はあるのではないだろうか。

肌は白く、欧米の方の血が混ざってると思われる。髪は、前髪は金髪で、後は黒。左右で団子にし、前髪の一部を後ろに回し、三つ編みにしている。瞳はブルー系で、スタイルも良い。

個性豊かなクラスでも、結果目立っている部類に入るのはないだろうか。

席に着き、その少女に挨拶をする。

「スバルです、よろしく。ええっと…」

スバルが挨拶すると、少女はスバルに顔を向け、自己紹介をする。

「空条 徐倫よ。よろしくスバル。」

「うん、よろしく。(空条さんか…変わった名前だなあ。)」

これが、スバル・ナカジマと空条 徐倫の出会いだった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

#01 / 出席番号11番 空条 徐倫（後書き）

1話です。サブタイトルの通り、徐倫の出席番号が11番なので、釘宮以降の番号が1個ずつずれます。

後何で2007年が舞台かというと、第六部時の徐倫の歳を逆算したら、ちょうど2007年に徐倫が15歳になるからです。アニメ第二期とかぶったのは、偶然です（笑）

#02 / 教師スプリングフィールドの秘密 (前書き)

2話を投稿します。

感想、ご指摘とっお待ちしています。

#02 / 教師スプリングフィールドの秘密

放課後 麻帆良学園女子中等部 校内

「どうだ？慣れてきたか？」

「うん。…でも大丈夫かなネギ君…」

「…まあ、自信をなくさなきゃいいがな…」

校内を話しながら歩くスバルと徐倫、そして徐倫のルームメイトの
『はせがわちさめ長谷川 千雨』の3人。

あの後、明日菜とあやかがケンカをするわ、他の生徒があおるわで、結局授業らしい授業が出来なかったネギ。本当に、自信をなくさなければいいが…

そして放課後、校内を案内してやると徐倫たちに誘われたスバルは、こうして案内してもらっていた。まあ、二人には『別の目的』もあったが。

「あ、この先が音楽室で」ガラッ

「やあ徐倫。ん？その子は誰だい？」

不意に廊下の窓が開き、長髪にトゲつきの帽子をかぶった男が顔を
だす。

「…こつちが第二理科室だ。」

「え？これスルーしちゃうの？」

「ナカジマ、関わらない方がいいぞ…」

「ま、待ってくれよ徐倫ーん！」

スルーする徐倫に驚くスバルと、スバルを男から遠ざける千雨。あわてた男は窓から乗り出してくると、初めて男の全身がわかった。見た感じではスバルたちより3〜4歳年上で、背は180位はあるだろうか。体格はいい方で、陸上選手のように引き締まっている。網シャツを着込み、下はレザーのズボンだ。

徐倫に追いつき、肩を掴む男だが、

「オラアー!!」

ドグオ

「ぐぼっ」

振り向いた徐倫に殴られ、情けない声を上げながら廊下に倒れる。

「『アナスイ』!! てめえ懲りずにまた堂々と不法侵入しやがって!!」『高畑』にでも通報されたいか!？」

男 アナスイを怒鳴りつける徐倫。

「またつて…なんなのあの人？」

「…あいつは麻帆良大学2年の「ナルシソ・アナスイ」ってやつだな、徐倫のストーカーなんだよ…」

アナスイについて説明する千雨。大学生が中学生をストーキング…なるほど、変態以外の何でもない…

「ち、違っただ徐倫! 実は、これを君に渡してくれって!」

そういうとアナスイは、ポケットから手紙を出し、徐倫に渡す。

「手紙？誰からだ？」

「ああ、『財団から』だ。中身は知らないがな。」

「財団…！」

「…そう、わかったわ。」

「？」

手紙の差出人を聞いた徐倫と千雨は、険しい表情をする。スバルはそんな二人をみて、首を傾げる。

「じゃあ徐倫、オレはこれで！今度食事にも行こうな！」

そう言つて、アナスイは来たとき同様窓から外に出る。

そしてスバルは、あることに気づく。

「…あれ？ここ『3階』じゃなかったっけ？」

「ふう、さすがに『3階』からは派手すぎたか？」

着地して、そう呟くアナスイ。

徐倫たちがいたのは、『3階の音楽室の近く』だった。そこまで登るのに、彼の『能力』なら可能だ。

使い方を制限されているが、ばれなければ問題ない。そう判断したアナスイは、『能力』を使ったわけだ。

が、

ガシィ

「うおっ！？」

ズドオ！
「んがっ」

世の中、上手いこといかないものだ。
立ち去ろうとしたアナスイの足を「雲」が掴み、彼は盛大にすっ転んだ。

「イツテエ！なんだよ一体…」
「アナスイ、あれほど目立った『使い方』はするなと言ったはずだが…？」

転ばせた張本人　ウエザーは、アナスイに話しかける。

校内　噴水前付近

「まったく、『財団』からの手紙なら、俺に渡せばいいものを…そんなアプローチしても、空条はお前にたなびかないぞ？」
「うるせえ！お前に徐倫の何が分かるってんだ！？」

注意をするウエザーに反発するアナスイ。

「…そのセリフ、お前にそのまま返すぞ…それより、『財団』から連絡が来たってことは…」

「…ああ、恐らくは『矢』についてだな。」

ウエザーの言葉に答えるアナスイ。

彼らが言う『矢』とは、スバルたちが探しているものと同一なのだろうか…

「となると厄介だな、少し警戒した方が…ん？」

ふと、ウエザーは階段の方を向き、そこにいた者に気づく。

「あれは…ネギくんか？」

「あん？知り合いかウエザー？」

「ああ、2年A組の担任だ。」

「……………は？」

アナスイは疑問を持つ。まあ、仕方ないことだが。

「どういうことだよ担任って？まだガキだぞ？」

「まあ、頭はいいらしいからな、問題ないだろ。」

「いや、そうじゃなくせ」「きゃあああああああ！」

アナスイの言葉は、少女の悲鳴によりかき消された。振り向くと、階段から少女と無数の本が落ちていく真っ最中だ！

「な、何い！」

「くー！間に合うか！？『ウエザー・リポ』」

『能力』を発現させようとするウエザーだが、

フワアア

「「!!!?!」」

突然、少女の体が「浮いた」!

驚く二人だが、すぐさま、『浮いた原因』にたどり着く。

ガシイ

ズシヤアアア

「あたた…だ、大丈夫ですか『宮崎さん』…?」

浮いた原因 ネギは、少女をキャッチすると、2mほどスライディングして止まる。そして少女 宮崎 のどかは、どうやら気絶してしまっただけらしい。

数分前

中等部 3階 女子トイレ

「つまり、この麻帆良で『矢』が目撃されたっていうんだな？」

『ああ、しかも何人か『射ぬかれている』らしい。』

女子トイレの個室で、「糸」を指で摘み話す千雨。相手は徐倫だ。

二人は現在、『手紙』の内容を確認するため、スバルと別れ、このトイレにいた。わざわざ『糸』で話しているのは、ほかの者に怪しまれないためだ。

「…内の一人が『2年A組』^{うちのクラス}にいるってえのが気になるな。だれだ？ そいつは？」

『……それが、「宮崎」らしいんだ…』
「な!？」

思いもしなかった名前を聞き、千雨は立ち上がる。

宮崎？ あいつが射ぬかれた？ あいつが『矢』に「選ばれた」???

「…それは、マジなのか？徐倫？」

『確認は得られない。だから、今後「確認を」とる！とりあえず、これは決定だな。』

「ああ…で、誰がやるんだ？」

『私がお前のどっちかだな。ウエザー先生は彼女に近すぎるし、アナスイはアレだ…』
ガチャリ

「まあ、確かにな。でも、私はパスだぞ！メンドイし。」

「…まあ、お前はそうだろうな。」

それぞれ個室から出て、最終確認をする。

ムー、ムー、

「っと、どうやら『むこうの準備』が出来たらしい。」

携帯のバイブを聞き「準備が」出来たと確認した徐倫は、千雨と共に女子トイレを出る。

「よお、悪いなスバル、待たせちゃまって。」

「あ、大丈夫だよ空条さん。長谷川さんも。」

外で待っていたスバルと合流する二人。

「あれえ〜？ごめん二人とも、私『定期入れ』教室に忘れちゃった〜。一緒に取りに行ってくんない？」

「え？別にいいけど…」

少しわざとらしく言う千雨と、同意するスバル。徐倫は、千雨の大根役者っぷりを見て、つぶやいた。

「…はあ、やれやれだわ。」

同時刻

校庭

「う…う…う…」
「ずーん」
「す、すいません…」

落ち込む明日菜と、謝るネギ。

あの後、問いただす明日菜に対して『記憶消去魔法』を明日菜に行

「だ、だから皆さんには秘密に」
「……………だったら、私のこと、ちゃんと責任とってよね……………！」
「…へ？」

2年A組 教室前

「あれ？明日菜にネギ……………先生。」
「あ、本当だ。おーい。」

教室前で、明日菜たちに気付く徐倫たち。なお、徐倫が呼び捨てにしようとしたことについては流しておく。

「あれ？徐倫に千雨ちゃん、それにスバルも……………」
「皆さん、どうしたんですか？」
「ん？明日菜も『メール』来たから教室に来たんじゃないのか？」
「『メール』？……………あ、そうか！」
「…？」

『メール』と聞いて思い出す明日菜。だが、ネギとスバルには何のことだかわからない。

「ま、教室入れば分かるよ。」

「そういうことだ。ネギ先生、ドアを開けてくれ。スバルも。」

「え？あ、はい…？」

未だに何か分からない二人だが、言われた通り教室のドアを開けると

パパパパーーン！

「ネギ先生！スバルちゃん！ようこそー」

「」

「へ？」

クラッカーの音と、明日菜たち三人以外の生徒たちが二人を出迎えた。

「二人の歓迎会をやることになってね。これ買出しね。」

「その間、二人を教室に近づけないように遠ざけてたのよ。」

説明する明日菜と徐倫。そう、徐倫と千雨は、スバルを教室に近づけないよう、校内を案内していたのだ。

まあ、予想外の事態はあったが…。

「ほらほら、主役は真ん中に！」

「飲み物何飲むー？」

(え？何今の！？魔法！？)
(魔力は全然感じなかったのに！？)

驚く明日菜とスバルをよそに、徐倫は手に持ったコーラをグイッと飲んだ。

「…空条、こいつは俺が呼んだんだ。だから、いるのには何の問題もない。」

「な！？正気かよ！？こいつが何するか分かったもんじゃねーぞ！」

「ジヨ、徐倫、そんな人を変質者みたいな言い方しなくても…」

「……………変質者じゃん……………」

「なっ……………」

クラス全員に言われ、落ち込むアナスイ。それを見て、全員が笑った。

そんな光景を見て、スバルは思った。

この笑顔を守るためにも、『矢』を見つけないければ
と

ナルシソ・アナスイ 精神的に再起不能
スバル・ナカジマ この後、肉まん83個を完食し、クラスに「
大食い」を認識させた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#02 / 教師スプリングフィールドの秘密（後書き）

2話です。

明日菜には魔法がばね、ウエザーやアナスイには、怪しまれるネギ。
この後しばらくは、魔法使いVSスタンド使いの構図が続きます。

#03 / 空条 承太郎！高町 なのはに会う（前書き）

今回、ついにあの人が登場します！

感想、ご指摘等、お待ちしております。

#03 / 空条 承太郎！高町 なのはに会う

午後9時38分 女子寮 徐倫と千雨の部屋

「はあ！？あの子供先生が！？」

「ああ、『ウエザーとアナスイ』が、能力らしきものを使った所を見たらしい。見ただけだと、『風を操る』能力らしい。」

歓迎会もお開きになり、帰宅した二人は、ウエザーたちが見たネギの「能力」について話していた。

「……つまり、しばらくは先生に『警戒』しろってことか？」

「そうだ。どっちにしろ、ネギが『矢』に関係してる可能性がないとは言い切れないからな。『みんな』にも、連絡は入れてある。まあ、危険な能力じゃなけりゃいいが……」

そう言う徐倫。だが、彼女らは知らない。

ネギが、自分たちの『想像』を超越した力をもつことに……

翌日 午前10時13分 成田空港

観光客やビジネスマンで賑わうここに、ある男が降り立った。

「…やれやれ、久しぶりの日本だな。」

#03 / 空条 承太郎！高町 なのはに会う

同日 午前8時39分 2年A組

「き、起立ー、きおつけー、礼ー」

「…………おはようーいままーす…!…………」

「えー、では1時間目を始めます。教科書の27ページを開いてください。」

“Two men look out through the same bars: One sees the mud, a

nd one the stars.”……」

（お、今日は頑張ってるね〜。）（ヒソヒソ）

（昨日失敗続きだったからな。）（ヒソヒソ）

昨日の失敗を挽回すべく、頑張っているネギを見て、小声で話す徐倫とスバル。

「じゃあ、今のところ、誰かに訳してもらおうかなー？」
そう言うと、クラス中を見渡すネギ。だが、誰一人目を合わせよう
としない。
するとー

「じゃあ、アスナさん。」
ズルッ

「な、なんで私なのよ!？」

「え?だってアスナさん『ア行』だし……」

「私は『力行』よ!」

「それに、感謝の意味とかも兼ねて……」

「どんな感謝よ!？」

文句を言う明日菜だが、はたから見たら漫才をしているようだ。周
りからくすくすと笑い声が聞こえる。

「ーもっつ!分かったわよ!やるわよ!やればいいんでしょ!
?」

そう言って、席を立った明日菜は、英文を訳し始めた。

「えーつと……『2の男たちが』……『見る』？『外の棒たちを』……
……？えーつと？」

「アスナさん、英語ダメなんですね。」

ネギが言った瞬間、クラス中が爆笑した。

「……………やれやれだわ。ネギ、そういうのははっきり言わないほうが良いわよ……………」

「え？あ、す、すみません……………」

謝るネギだが、明日菜は震えている。

ガシイイ

「ひっ!？」

「こ、こんのガキイイ!!」

「な!ちよつと明日菜さん!!」

ネギに掴みかかる明日菜と、止めようとするあやか。

だが、

「ふ、ふあ……………」

「げ……………」

掴みかかった事で明日菜の髪がネギの鼻をくすぐり、そして

「はつくしよん!!」

ブワアアア

「き、きやあああ!!」

ネギは『くしゃみ』をしてしまう。そして、『くしゃみが』原因で「風の魔法」が暴発してしまい、明日菜は下着姿になってしまう。

(((((?!?))))

「きゃー!」

「ちょっと、何やってんのアスナ!!!?」

騒ぐ生徒たちだが、誰も、スバルすらも気付かない。

この現象に異変を感じたものが『5人』いたことに……

午後4時2分 商店街 「スーパー布菜」前

「えーっと、後買う物はありませんね。」

「うん、じゃあ、帰ろっか。」

買出しに出たのはとティアナは、両手に買った食材や日用品の入った袋を下げ、麻帆良で拠点としているマンションへと向かった。

「いやー、安く買えてよかったねー。」

「はい……」

「……やっぱり心配？スバルが」

「……ええ。まあ、たった『2日』でバレルなんてドジやらかすとは思えませんが。」

たった1日でバれた子供先生はいるけどね（笑）

そんな風に話していたため、自分の前に『地図を見ながら歩く男』がいるのに、なのは気づかなかった。

「……なのはさん！前！」

「え？」

ドシン

「きゅっ」

ティアナが注意するも間に合わず、なのはは男と衝突してしまい、買い物袋の中身をぶちまけながら転んでしまう。

だが！

ドキユ！ドキユ！

「え！？」

「あ！！？あれえ……？」

なんとなのはは『立っていた』！袋の中身も『無事』だ！

「お、おかしいな…今ぶつかって『転んだ』と思っていたのに…？」
「い…今のは…？」

「余所見しててすまなかつたな…この町の地図を見ていたんでな。」

男に謝られて、2人は男の方を見る。

190cm以上はある身長にガツシリとした体系、顔立ちは整っている。

服装は、襟に鎖のようなものついたコートに、星のマークの入ったシャツ、ズボンは蛇のウロコのような柄だ。

そして、もっとも目を引くのが、男のかぶった帽子だ。これにも星のマークが入っており、『左手形』のアクセサリーがついている。それはいい。だが、よく見ると、後ろのほうが、髪と『一体化』しているように見える。どういう原理なのだろう？

以上のように、風貌はワイルドだが、知性と、物静かな態度がある男だった。

「い、いえ。こちらこそ、余所見をしてすいませんでした…。」

なのはは、男の射抜くような眼差しに一瞬ビクついたが、何とか平常を保ち、男に謝った。

「…ま、お互い不注意だったってどこか。ところで、ひとつ尋ねたいんだが、『麻帆良学園』はこの先でいいの？」

「え？…ええ、そうですか…？」

「…そうか、すまないな。」

ティアナに道を教えられた男は、指された方向に歩いていった。

「……………なんだったんだろう？今の人……」

「……………ティアナ、とりあえず帰ろう？ね？」

疑問に思っティアナとなのはだが、とりあえず、買ったものをマンションに持って帰ることにした。

この男との出会いが、何を意味するかを知らないままに……………

住宅地 『グリーンドルフィンストリート麻帆良』

このマンションの206号室は、スバルたち六課の拠点として、学園長に提供された部屋だ。この部屋には今、ティアナ以外のフォワード3人と、フェイト、そしてスターズ分隊副隊長 赤い三つ編みおさげの少女ヴィータと、捜索任務のサポートとして来たリインフォース2と眼鏡の女性 シャリオ・フィニーノに加え、ネギと明日菜がいた。

今、リビングではスバルとネギは正座をさせられ、2人の前ではヴ

イータが仁王立ちしている。

「まったく！何やってんだお前等は！！！」

「すみません……」

ヴィータに怒鳴られ、縮こまる2人。

「…ねえ、あのちっちゃい子の方が偉いの？」

「うん、スバルたちよりは…」

明日菜の質問に答えるフェイト。

そこに、リビングのドアが開かれる。

「ただいま帰りました。」

「どうかしたのヴィータちゃん？大声何か出して。」
入って来たのは、買い出しから戻ってきた、なのはとティアナだった。

「おう、なのは！このバカ、やらかしたんだよ！」

「…や、やらかしたって、何を…？」

「じ、実は……」

さかのぼること1時間ほど前

校庭 『慈愛の女神像』の前

「はあー、またアスナさんにひどいことしちゃった…」

「うーん、こっちの魔法は誰でも使える分、制御が難しいって聞いてたけど…」

「まさかここまでとは思いませんでしたね。」

落ち込むネギと、何て言ってもいいか分からないスバル、そして呆れる彼女の相棒 『マツハキヤリバー』。

あの授業中、昨日のようなことはなかったものの、明日菜が睨み付けてくるため、彼女の視線が痛かったネギ。

「まあ、『我々の魔法』は、プログラムを元に作られた術式を發動しますからね。例えるなら、自動車と自転車くらいの差はあると言えます。」

「……自分の性能の良さ自慢してない？」

「いえ、そんなことは。それより相棒^{ハナイ}。」

「ん？何？」

マツハキヤリバーの自慢にツッコミを入れるスバルだが、マツハキヤリバーが何かに気づいたらしい。

「先ほどから誰かが我々のやり取りを聞いておりますが…」

「え？」

「……2人で何話してるのかなあ〜って思ったら……』そついつこと
だったのね〜」

『慈愛の女神像』の陰から、明日菜が出てきた……

「……つまりこついつこと？ 『潜入2日目でいきなり魔法がバレた』
？」

「Exactly(そのとおりです)……」

顔を引きつらせながら聞くティアナに、汗をだらだら垂らしながら
答えるスバル。途端、

ドグシヤア

「ぎゃあアアア！」

ティアナの跳び蹴りが飛んできた。すぐさま、ティアナは『海老固
め』をかける。

「この馬鹿！私をナメてんのツ！何たった2日で！バレるようなくとしてんのよ！この！ド低脳がアーツ！」

「痛たたた！ギブギブギブウ~~~~！！！」

『！』ごとに『海老固め』を強めるティアナと、痛がるスバル。はたから見ると、コントのようだ…

「ティ、ティアさん！もうその辺で…」

「さすがにやりすぎですよ~~~~！」

「止めないでエリオにキャラ！こいつは！こいつだけはー！！！」

止めるエリオとキャラだが、ティアナは海老固めの手を弱めない。先ほど自分が「やらないだろう」と信じたことを、あっさりと裏切ったのだ。怒るのも無理はない。明日菜やネギは、ただ呆然と、4人のやり取りを見ることしか出来なかった…

30分後

「…つまり、その『矢』を探すために『麻帆良』に来たってこと？」

「うん、何人か犠牲者も出てるみたいで…」

ティアナがようやく海老固めからスバルを解放し、明日菜はスバルたちが麻帆良に来た理由を聞き出していた。『六課』にも、犠牲者が出ていたという情報は入っているようだ。

「まあ、こんな派手なカツコしたやつなら、すぐ見つかりそうね！」
手元に差し出された『オエコモバ』の写真を見てそういう明日菜。
だが、

「いや、普段からこんな格好な訳ないでしょ……」

「……うんうん」「……」

「え？」

呆れるティアナと頷くスバルたちに、明日菜は不思議そうな顔をす
る。なのはたちは苦笑いだ。

そんな時だった。急に、部屋のすみにに設置されたアラートが鳴り
響いたのは……

t o b e c o n t i n u e d

#03 / 空条 承太郎！高町 なのはに会う（後書き）

3話です。

今回ネギが明日菜に訳させた英文は、ジョジョ一巻に書かれていた、フレデリック・ラングブリッジの「不滅の詩」の原文です。中学生には難しかったかな？（ハ―ハ；）

次回は、いよいよ『魔法使いVSスタンド使い』です！オリジナルスタンドが、六課＋ネギと戦います！では、また次回！

#04 / グロウン・キッド ? (前書き)

いよいよ、『魔法使いVSスタンド使い』の戦いが始まります！
果たして、その能力とは！？

#04 / グロウン・キッド ?

『グリーンドルフィンストリート麻帆良』から2000mほど離れた道道を走る6つの影があった。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロのフォワードと、ネギと明日菜だ。

なお、キャロの竜フリードリヒは、さすがに町では目立つので、キャロの背中リュックに押し込められている。

「この先を左だったわね！アスナ!?!」

「ええ！それが一番『近道』よ!」

ティアナに聞かれ、返答する明日菜。彼女は、麻帆良（こゝろ）の地理に詳しくないティアナたちのために、道案内をしていた。ネギは、明日菜いわく『おまけ』みたいなものだ。

先ほどのアラートは、「麻帆良公園」に機動兵器 通称『ガジェット』が20機近く現れたというものだった。麻帆良の「魔法使いたち」はガジェットとの『戦い方』を知らない。そのために、スバルたちフォワードが出動した訳である。ヴィータも、上空から向かっている。

「いい!?!さつきも言ったけど、あんたたちは到着次第、どっかに隠れてんのよ!」

「は、はい!」

「分かってるわよ!相当『危ないん』でしょ!?!」

ティアナは、確認をとるように、明日菜とネギに言う。

ネギは「魔法使い」とはいえ、ガジェットの『アンチ・マギング・フィルター』の対抗策を知らないし、明日菜は一般人であるためだ。

「ほら！この道を左よ！」

「分かった！」

明日菜に言われ、曲がる6人は、「麻帆良公園」へと駆け抜けていった。

『グリーンドルフィンストリート麻帆良』 206号室

カーテンを閉め、証明を落としたリビングは、「司令室」と化していた。

中央にはモニター、テーブルにはコンソールが『浮かび』、そこにラインとシャーリーがついている。

なのはとフェイトは、後ろからガジェットの動きをみていた。ラインは今、どこかと連絡しているようだが。

「フォワードの皆さんと明日菜ちゃんたちは、最短距離で『麻帆良

公園』へと向かっています。ガジェットたちは、公園の『中央広場』へと集まっているみたいですが……」

「…そこに、『レリック』級の『ロストログア』があるってことかな？」

「多分…まさか『矢』がそこに？」

憶測を立てる二人。そこに、通信を終えたらしいリインが、なのは達に言う。

「なのはさん！『学園側』が、麻帆良公園に『結界設置』を承認してくれたです！」

「ありがとう。シャーリー！スバルたちに連絡を！」

「はい！……え？」

振り向き、通信をしようとしたシャーリーは、信じられないものを見た。

「そんな……どうして……！？」

#04 / グロウン・キッド ?

「やれやれだわ……何だったのこいつら？」

徐倫は、自分たちを襲ってきた機械の『残骸』を見て呟いた。周囲にいた千雨やウエザー、そして、中等部の制服を来た「二人」も機械を倒したらしく、徐倫の周りに集まってくる。

「はあ、『矢』のこともあるのに、何かすっげー面倒なことに巻き込まれたんじゃないか？私ら」

かったるそうに、千雨は手に持った『透けている小太刀』を弄びながら愚痴る。

「……長谷川、そう言わない方がいいよ。こいつら、『矢』が絡んでるかもしれないし。」

制服の少女のうち、黒髪の少女が千雨に注意する。彼女の両手には、野球のボールほどの大きさの『鉄球』が二つ、『回転』していた。

「ん？」

「どうしたのウエザー先生？」

ウエザーが何か気づいたらしく、それをもう一人の少女　髪を左
右で留めている　は聞く。

「誰か来たな。人数は…7人！」

「何！？」

「…『こいつら』のご主人様か？」

ウエザーの言葉を聞き、5人に緊張が走る。

「多分な。で、どうする？全員で出迎えるか？」

「……いや、『こいつ』で十分だろ。」

徐倫は、髪を左右で留めた少女を指しながら言った。

「え？私!？」

「ああ、おまえの『グロウン・キッド』なら、「7人」くらい楽に倒せるだろ？」

「………うっ、わかったよ。」

嫌々承諾した少女は、鞆から『布』を取り出した。

司令室

「フェイトさん……わ……私はち……ちよいと目を離したんです………
あなたもそばにいました。ライン曹長やなのはさんもそばにいまし
た。でも……誰も見ていないんです………」

シャーリーは言い終わると、気を落ち着かせようと、ガタガタ震えながらコーヒーを飲もうとする。だが、

「飲んだる場合ですかシャーリーツ！」
ガシャン

何故かリインに怒鳴られ、カップを落としてしまう。

「リ、リイン、落ち着いて、ね？」

「……………どうなってるの？」
リインを宥めるフェイトと、シャーリーに聞くなのは。

「ほ…ほんの少しの間でした……私が目を離していたのは、たったの数秒だったんです……でも、あそこで何が起こったのか分かりません！信じられません！」

ほんの数秒目を離れたうちに！『20機近くいた』ガジェットが！
1機残らず『破壊されていた』んです！！」

「な……何だよこれ……？」

「誰がこんなに沢山のガジェットを……？」

スバルたち7人が見たのは、破壊されたガジェットが『散らばる』中央広場だった。

何発も殴られたようなへこみがあるものや、輪切りや袈裟掛けにされたもの、何か『球体』をぶつけられたものに、強い力で『締め付けられた』ようなもの、さらには、外傷がないのに『機能停止』になったものと、様々な壊され方をしていた。

「……これだけ『壊され方』が様々なのは、『集団で戦った』ってことでしょうか？」

「多分ね。それも、『魔力を持たない連中の』ね。」

推測するネギと、それに付け足すティアナ。そこに、明日菜の疑問が飛ぶ。

「え？なんで『魔法使いじゃない』って分かるの？」

明日菜の質問に、エリオが答える。

「……ガジェットには、『AMF』という、魔力を消すフィールドを発生させることができます。『こちらの』魔法使いたちは、AMFの環境に慣れていないから、『魔力強化していないただの刃物や拳でこれをやったのけた』ことになります。」

「……ふ、ふ……ん……？」

「……その様子じゃあ、あんま分かってないわね……」

明日菜の反応に、ため息をつくティアナだった。

「キユク？」

「どうしたの？フリード？」

「ん？」

リュックから出たフリードが、何かに気づいたらしい。フリードが見た先を見るキャロとヴィータが見つけたものは、

『緑色の布』だ。

大きさは2・5m四方と、意外と大きい。それが、バサバサと音を立てながら、ヴィータたちから少し離れた場所に落ちた。いきなり現れた布に警戒する7人。

「……何か妙ですね。誰かに見られているような……」

「確かに……だが、周りに隠れるような場所はない！だが……まさかだよな……！」

そう言って、布に近づくネギとヴィータ。そして、ヴィータが布を

めくってみる。

布の下には

何もなかった。

「……だよなあ……」

「そんなことありませんってえ……気のせいですよ……」

ヴィータが布をポイツと放ると、ほっとしたのか、笑い出す二人。

だが！

「二人とも！後ろ！」

ドギヤアアン

「え？うわっ」

「なんだ！？」

いきなり、二人の間を『パンチ』がすり抜け、思わず避ける二人！
そのままパンチは近くのカジエットの残骸に突き刺さる！

「じ、これは!？」

「何だよ!この『腕』は……!？」

そこにあつたのは「緑色の右腕」だった。肩の付け根に穴があいており、中は『空洞』だ。

ふいに、肩が『ほどけた』と思うと、みるみるうちに腕は『布』になってしまった。よく見ると、中央にはエジプトの壁画のような「一つ目」が浮き出て、ぎよろりとこちらを睨んできた。

その目のあたりがボコツと膨らんだかと思うと、布はまるでてるてる坊主のような形になり、そのまま頭にあたる部分が「右手」になり、そこから下が腕、二の腕、肩と変形していき、布は再び『右腕』になる。

「まさか!？さっきの『布だ!？』」

「他のガジェットも、こいつがやったの!？」

驚愕する7人。右腕は器用に『立って』おり、今にも飛び出しそう
だ。

ふと、スバルの耳に「バサツバサツ」という音が聞こえた。恐る恐る
る周りを見ると

「……………嘘でしょ？」

スバルの声を聞いたティアナたちは、周りを見て、戦慄した。

彼女たちの周りは、

「6枚の緑色の布」に

『困まれていた』！

麻帆良公園 入り口付近

「　　ありやく、バレちったか」

「……あれに気づいたのか：やろうと思えば野生のコウモリにさえ気づかれずに近づける『グロウン・キッド』に対して『妙だ』と思うとはね……」

「勘のいい奴がいるのかも……」

『グロウン・キッド』が気づかれたことに感心する徐倫たち。だが、彼女らは冷静だった。

「でも、まだ驚いてるみたいだし、かてるかもよ！」

「ま、確かにそうだな。おい、『グロウン・キッド』を「合体」さ

「せろ！一気にたたみかけるんだ！」

「りょーかい！」

「後、分かってると思うが、私たちの『目的』は……」

「うん！大丈夫！きりのいいあたりで解除するから！」

「彼女ら」と魔法使いたちの戦いが、ついに始まった。

能力名	グロウン・キッド
本体	不明

t o b e c o n t i n u e d

#04/グロウン・キッド ? (後書き)

4話です。今回は早かったなあ…

今回は、「ジヨジヨ的な恐怖」を意識して書きました。ちなみに私は、「シビル・ウォー」が一番ゾクゾクしました。

スタンド名は、SOUL・d OUTの「GROWN KIDZ」から。「VOODOO KINGDOM」のC/Wです。

次回も、「グロウン・キッド」戦の後編になります。では！

#05 / グロウン・キッド ? (前書き)

グロウン・キッド戦の後編をお届けします。

謎の存在『グロウン・キッド』、果たしてその実態とは!?

#05 / グロウン・キッド ?

司令室

「こちらロングアーチ、スターズ、ライティング、応答願います！」
司令室と姿を変えたりビングに、シャーリーの悲痛な声が響く。
ガジェットの影響がなくなっただけから、スバル達と連絡がとれないでいた。

「ダメです！公園内に奇妙な『電磁波』が流れてて、みんなに通信ができません！」

「そんな……！」

「もしかして、妨害電波の類？……だったら、麻帆良の「魔法使い」の方に頼んで、確認を……」

「そ…それが……」

公園に結界を張るためこの道走っていた、金髪に黒い肌のシスタ
ー シャークティは、目の前に「カエル」が落ちてきたため、急
停止をしていた。

「な、何でカエルが2月に？こんな時期もう『冬眠』から目覚めたの？ん……
？」

カエル嫌いな彼女は、ふと、体の色があざやかなこのカエルを、ず
いぶん前に図鑑で見た覚えがあった。

「このカエルの体の色は…『ヤドクカエル』じゃあ…？たしか吹き
矢に使われ、ひとかすりしただけで致命傷になる猛毒が皮膚のすぐ
下にある…」

そう思っていると、カエルが2匹、シャークティから少し離れた所
に落ちて、彼女はそちらを見る。

だが、そのあたりにはカエルが上れるような場所はない。

そう思っていると、次から次へと、カエルが道に落ちてくる。不思
議に思っ、空を見上げた彼女が見たのは

「な……………！」

空から大量の『ヤドクカエル』が、彼女に向かって『降ってくる』
光景だった。さすがのシャークティもこれを見て平常を保てず、

「嫌アアアあああ！」

回れ右をして、泣きながら『全力疾走』するしかなかった……

#05 / グロウン・キッド ?

麻帆良公園から南方150m離れた道

「いや、参ったねこれは。」

応援に駆けつけようとしてここまで来たタカミチは、困ったようには聞こえない風に電話をかけていた。相手はなのはだ。

「公園に誰も近づけないつもりらしいよ……近づくものなら、容赦なくカエルが降り注ぐ。」

そっぴいなながら、道を見るタカミチ。

彼の見た先には、大量の『ヤドクカエル』が道でうごめいていた。どうやら、カエルは「公園に近づいたもの」にしか降らないらしい。

「……カエルが『降ってくる』んじゃあ、上空からも近づけない……なかなか頭のキれるやつですね……！」

「ああ、多分『天候操作魔法』の応用だね。相当な実力者だよ。こうなったら、もう無事を祈るしかないね……」

「……」

公園の方を見ながら、そう言うタカミチだった。

麻帆良公園 中央広場

6枚の緑色の布と、緑色の右腕に囲まれたスバル達は、動けずにした。いきなり現れた布に対する『恐怖』もあつたし、何よりも、先ほどの右腕のこともある。

そう思っていると、急に「右腕」が『跳んだ』！

腕を足で跳ぶように曲げ伸ばしして、指をまるでイカやタコが泳ぐように動かして、布のいるあたりまで跳躍した！

「ううっ」

「こいつら、何を……」

驚いた明日菜とティアナがそう呟いていると、他の布にも動きがあった。

布の1枚が『左腕』に変わり、他の2枚がそれぞれ右脚、左脚に変わり、それが合わさって『下半身』になる。先端が尖り、反り返った靴を履いたような下半身だ。

そして、1枚が一番大きい変化を遂げた。

まず浮き上がったのは『頭』だ。口と鼻のないのっぺりとした顔に、目が一つ、口にあたる部分にはくりりと巻かれたどじょうヒゲを生やし、頭にはターバンを巻いている。

次に胴体だ。こちらは、まるで甲冑のようなデザインだ。

そして、それら4つの部品が一カ所に集まり、それぞれが合わさると、一つ目にターバンを巻いた『緑色の魔神』の姿になる。

最後に残った2枚が『剣』に変わり両手に収まると、『魔神』は剣を構える。

> i 2 4 5 2 — 4 0 6 <

「が、『合体したあ』!?!?」

「……向こうは敵意むき出しって感じね。」

「確かに、仲良くはなれそうにないね……」

そう感想を述べるティアナとスバル。こちらも、戦闘態勢だ。

『……フム、ナカナカイイ構エダナ。イクツモ『修羅場』ヲクゲツ
タ構エダ。』

不意に、魔神から声が発せられ、驚くスバル達。

「喋った!？」

「……………お前、何者だ？」

鉄槌　グラーフアイゼンを突きつけて魔神に問いただすヴィータ。
相当機嫌が悪い様子だ。

『フム、タシカニ名乗らナイノハ失礼ダ。我が名ハ「グロウン・キ
ツド」!見テノ通り、タダノ『布キレ』ダ。』

「……………いや、ただの布きれは喋ったり合体したりしないから……………」
魔神　グロウン・キッドにつっこむティアナ。だが、当の本人は
気にしてない様子だ。

『マア、挨拶ハコレ位ニシテ、私ハシバラクの間、オ前タチノ相手
ヲスルヨウ命ジラレテイル。悪イガ、行カセテモラウゾ!』

言うや否や、ヴィータに襲いかかるグロウン・キッド!

振り下ろされた剣をヴィータがアイゼンで受け止めるが、押されて
いる。

「ぐっ、こいつ、何てパワーだ……………!」

『フム、コノママ一人目を』

「はああ!」

グロウン・キッドがもう一方の剣を下ろす前に、エリオが槍　ス
トラードを構えて突っ込んでくる。狙うは頭だ!

グサアッ

「よし！命中！！！」

刺さったと確信するエリオ。
だが！

『アア、「命中」ダ。』
「はっ」

よく見ると、グロウン・キッドの頭が「左手になり」、ストラーダを「掴んでいた」！
そして、左の剣が『右腕』、左手が『胴体に』に変わり、

『タダシッ！！』
ドグシャア
「ぐわっ」

エリオは殴られ、吹き飛んでしまう。

『「私ノ拳」ガナ！』
「エリオ君！！」
「あいつ、何でもありなの！？」

胴体から、胴体と右腕が生えている奇妙な姿をした「グロウン・キッド」を見て、ティアナはそう漏らした。

ガギイン
「ぐっ」

『フム、ダガ、今の「一撃」ハナカナカ良カッタゾ少年。ホメテヤ

ロウ。』

ヴィータを払いのけエリオの一撃を誉めるグロウン・キッド。かなり余裕だ。

「くっ、態度が紳士なのが、逆にムカつくわね！でも！」

ティアナは、魔法弾の発射準備にかかる。

「これならどうー！！」

発射された魔法弾は、一斉にグロウン・キッドに襲いかかる。

が、

バララア

「なっ」

なんと、グロウン・キッドは再び部品パーツに分離し、魔法弾を避ける。

『フム、危ナイ危ナイ。』

「このおー！！」

胴体の一部をクモの脚のように変えて着地し、あまり危機感のないように言うG・キッドに、飛び上がったスバルが拳を振り上げる。

『オット。』

が、ひらりとかわされてしまう。だが、スバルは諦めず追撃しようとする、が…

「!?!?!?!?!え?!?!?!」

追おうにも、^{グロウソ}G・キッドの姿が『見当たらない』。キョロキョロとあたりを見渡すスバルだが

『ドコを見てイル?』

「はっ!」

ガシィ

いきなり『地面から』腕が生えて、スバルに掴みかかる!

それがG・キッドだとすぐに気づくが、色が「緑」ではなく、地面と同じ「薄茶色」だった。だが、指先からみるみるうちに緑に戻っていく。

「ほ……『保護色!』カメレオンみたいに体の色を変えて!地面に『なりすましていた』のか!?!」

ネギがG・キッドが消えた理由に気づくが、そう言っている間にも、G・キッドは再び合体して人型になり、武器 布2枚が合わさってできた『鎌』 をスバルに突きつける。

『フム、安心シロ。アル程度ダメージヲアタエル位デ許してヤル。』

そう言って鎌を振りかざす。そして

「ちよいやあああああ!!」

バグオオ

『フムオアア!?!』

明日菜の跳び蹴りを喰らった。

胴体と、鎌を持った右腕だけが吹っ飛ばされるG・キッド。先ほど同様に胴体の一部をかぎ爪に変化させて、無理矢理ブレーキをかける。

だが!

「フリード!」

「キョクルー!?!」

ボワアア

「魔法の射手 サキタ・マギカ 連弾・雷の17矢!」

ズババアツ

「クロスファイヤー!!シューート!!」
バシユウウン

『ナ!?!グアアツ!?!』

ドババアッ

フリード、ネギ、そしてティアナの技を喰らい、燃え上がるG・キッドー！

『……………フ…フム、ナルホド……………君たちノカガコレホドトハナ……………驚いたヨ……………』

体を燃やされながら話すG・キッド。口調は変わらないが、かなり無理をしているようだ。

『……………ダガ、忘れテ……………イナイカ？私ハ……………』

G・キッドは、最後の言葉を言い終わる前に燃え尽きてしまう……………

『……………コウイウ事ガデキルノヲ。』
「……………！！？」
「……………」

声がした方を見る7人。

そこは先ほどまでG・キッドがいた場所で、今は、左腕と下半身しかないはず！

だが、下半身が見あたらず、代わりに『頭と胴体』、そして両腕があった！足の変わりには、胴体の一部が変形したものを代用しているため、上半身のみだが…

『……フム、ダガ、君たちノ相手をスルノモモウ『オ終い』ダ。モウ、目的八達成サレタカラナ。』

「……『目的だと』？」

G・キッドの言っていることがわからないスバルたち。だが、彼はお構いなしだ。

『フム、デハ、サラバダ少年たち！機会ガアツタラ、マタ会おうデハナイカ！！』

言うや否や、また元の布に戻って、ひらひらと飛んでいった。追おうとするヴェータだが、『空の色』に色を変えられてしまい、見失ってしまった……

女子寮 入り口付近

G・キッドが入り口まで行くと、彼の本体が出迎えてきた。

『フム、ワザワザ出迎えテクレテスマナイナ。』
「うん、ご苦労様。」

彼女は、自分たちの為に戦ってくれた自分の能力に感謝すると、G・キッドを綺麗に折り畳んで、自分の部屋へ向かった。

そう、グロウン・キッド！彼の目的！

それは！

徐倫たちを『逃がすこと』だったのだ！！

麻帆良公園から東方150m離れた道

「いや〜、スゴいのみれちゃったな〜」

髪を後ろで束ねた少女は、手に持ったデジカメの画像を見ながら、ウキウキとしゃべる。

「それにしてもあの『布』……やっぱり『私の能力』と似てたなあ。

……これは記事にしないで、『カエル事件』だけにしよう！」

そういうと、彼女は女子寮への帰路についた。

後ろに「腕の生えたカボチャ」を引き連れて……

彼女の名前は『朝倉 和美』

彼女がスバルや徐倫と関わるのは、まだ先の話である。

住みよい街づくりをしよう！

麻帆良学園都市 名所その？ 「カエルが降ってくる道」

場所：麻帆良公園近くの道一帯

振ってくる原因は不明だが、「公園の『ヌシ』が降らせている」「、

「突発的な竜巻に飛ばされた」等、多数の意見が出ている。麻帆良公園の近くを歩いている時に、『ケロケロ』とカエルの鳴き声が聞こえたら要注意！（麻帆良学園新聞部発行『まほら新聞』より抜粋）

「くそっ！何だったんだあいつは……！」

ヴィータは地団太を踏みながら、悪態をつく。相当お怒りのようだ。

「ふ、副隊長、落ち着いて……」

「そうですよ！……とりあえず今は、このガジェットの残骸をうるせエ！これが落ち着いていられるか……！」

エリオとキャラロが宥めようとするも、ヴィータは聞く耳持たずだ。

「……ねえ、あいつから『魔力』を感じた？」

「えっ？そ、そういえば……！」

「全然ませんでした……」

ティアナの質問に、スバルとネギは、はっとする。

魔力を持たない未知の存在、『グロウン・キッド』あれは一体何なのだろう………？
謎は深まるばかりだ。

「ま、とりあえずもう帰っていいわよね？あ〜、私汗かいたやつた〜。」

「ア、アスナさん……」

「………のんきでいいわよねあなたは………」

明日菜の一言に、ティアナたちは脱力してしまう。まあ、おかげで緊張はほぐれたが。

「そうだね〜、あ！そうだ！一番近い「206号室」でシャワー浴びるついでに泊まっていかない！？ネギくんも！」

なんかスバルまで明日菜に賛同してしまう。そして、誘われたネギは……

「えっ？いや、僕は……その………」

いきなりしどろもどろになってしまった。

「ん？どうしたの？」

「じ…実は……「じよ」じよ」

「「？」」

急にスバルに耳打ちし始めたネギ。ティアナと明日菜は不思議そうに見ている。

「え？『風呂嫌い』？」

「「!」「」
プツッーーン

この時、明日菜とティアナ、二人の心が『一つになった』!!

「何言ってるんこの子供ガキイイイイー!!」

「「「ビクウ!」「」」

「来なさい!うちで全身『丸洗い』よ!!」

「うわーん!?!」「ずるずる

「……………」

二人のあまりの気迫に、ヴィータたちは驚き、スバルは黙ってしま
う。

ネギを二人が連れ去って、ようやくスバルが口を開いた。

「……………3人とも、先に帰ってるそうです。」

「「「そのようだね(ですね)。「」」」

グロウン・キッド 本体不明

再起可能

ネギ・スプリングフィールド ただでさえ心身ともに疲れてるの
に、さらに疲れた。

リンフォース2 何であそこでシャーリーを怒鳴ってしまった

んだらう?と反省。

シスター・シャークティ 今回の事がトラウマになり、しばらくの間外に出られなかった上に、『カエル嫌い』から『カエル恐怖症』^{ランクアップ}に昇格してしまった。

t o b e c o n t i n u e d

「P R I V I L E G E C A R D」

> i 4 2 9 6 — 4 0 6 <

スタンド名 グロウン・キッド

本体 不明（A組の誰からしいが…）

破壊力 A スピード C 射程距離 A

持続力 A 精密動作性 C 成長性 D

能力 布に取り付いて、実体化しているスタンド。

完全な人型になるには、5枚の布が必要だが、分離して操作することも可能。

また、部品がひとつやられても他の布で補える。^{パーツ}

自在に強度や形、さらには色を変えることができる。

自動追跡パワー型スタンドに近い射程距離とパワー

を持つが、本体と完全に離れている訳ではなく、『念話』のようなもので指示を受け取る。

スタンドのダメージ≡本体へのダメージではない。

#05 / グロウン・キッド ? (後書き)

5話です。

とりあえず一言……シャークティファンの皆様、ごめんなさい!!

m (|) m

公園に応援を近づけないためとはいえ、ヤドクカエルはやりすぎたと反省してます… (- | - ;)

朝倉はしばらくの間、『敵か味方がカウボーイ(敵かな?味方かな?)』な立ち位置になります(これ分かる人何人いるかな?)

『戦闘を書くのは難しい』とよく聞きますが、本当に難しかったです。キャラ全員出し切ろうと努力はしましたが…

今回は一休みして、『居残り授業』の話です。お楽しみに。では!

#06 / 居残り授業を受けよう！ (前書き)

一休みの6話です。

そして、ラストでは急展開が……？

#06 / 居残り授業を受けよう！

『グロウン・キット』との戦いから3日後の金曜日

昼休み

麻帆良学園 職員室

「『居残りさんリスト』？」

「ああ、高畑先生は、たまに小テストをやっている。あまりにも点数の低い生徒は、放課後に『居残り授業』をさせるんだ。それを、君に引き継いでほしいそうさ。」

そう言つてリストを渡すウエザー。リストには、6人の名前と点数が載っていた。その中には……

「あ、アスナさんもいる。アスナさん英語ダメだからなあ。」クスクス

「本人は居残り授業を楽しみにしていたみたいだが……だが3学期に赤点とる生徒が出るのは、『実習生』として問題だぞ。」

「う……た、確かに。」

ウエザーに言われ、反省するネギ。

(うーん……でも、アスナさんにはずっと迷惑かけちゃったから、これでお返しができるかも……よし！)

「分かりました！やらせて下さい！『居残り授業』の引き継ぎ！」
「……よし、分かった。『6人』には、オレから伝えておこう。」

そういつとウエザーは、職員室から出ていった。ネギは、早速居残り授業の準備を始めることにした。

#06 / 居残り授業を受けよう！

放課後 2年A組

「 というわけで……」

今、教室内には『7人』の生徒が居残り授業を受けるため、残っていた。

両サイドを三つ編みにし、後ろは二つに束ねた小柄な少女
夕映。^{ゆえ} 綾瀬^{あせ}

徐倫と同じくらいの身長、細目の少女
長瀬^{ながせ}楓^{かえで}。

金髪、色黒の中国系の少女
古菲。^{クフエイ}

髪を左右で束ねた少女 佐々木 まき絵。

そして、明日菜と徐倫、スバルの7人だ。

「A組の『バカ5人衆』^{レンジャー} + がそろったわけですが…」

「誰がバカ5人衆よ!!!」

「てか、私は小テスト当日に熱でブツ倒れたから『再テスト』受けるだけだろうが!!!」

意義を唱える二人。楓と古菲は気にしてない様子で徐倫に

「ジョジョ、そう言わないで欲しいネ。」

「そつでござるよ司令官^{コマンダー}ジョジョ。」

「誰が司令官だ!!!後ジョジョって呼ぶなっつってんだろ!!!」

火に油を注いだ。徐倫は、二人に怒鳴り散らすと、ゼーゼーと肩で息をする。

「……………で、何で私まで居残り授業を？」

口を開いたのは、今まで座って黙っていたスバルだ。彼女の名前は、リストには載っていないはずだ。なのに、帰りのHRに、急にネギに残るよう言われたのだ。

「あ、僕スバルさんの学力がどの位か知らないから、いい機会だし、ついでに知るところかなっと思って。」

「ってそれ要するに、私たちと比べるってこと!?!」

「うわっ、ネギくんが先生みたいなこと言うよっ」

「実際先生だがな……」

こうして、居残り授業が始まった。

「では、これから10点満点の小テストをしますので、『6点以上』
取れるまで帰っちゃダメです。」

言うと、ネギはテストのプリントを配り始める。

「えーっと、全員に行き渡りましたね？じゃあ、始めて下さい。」

ネギの号令と共に、全員が一斉に問題を解き始める。

そして5分後

「できましたです……」

「私もー」

「ほらよ。」

夕映、スバル、徐倫が、ネギに解き終わったテストを渡す。

「えーつと、綾瀬さん9点、スバルさんが8点、そして空条さんが10点！皆さん、合格です！」

「おっし！」

「まあ、こんなもんよ。」

「……」

三者三様でリアクションをする、一抜け組3人。夕映は普段と変わらないが。

「綾瀬さん、全然できるじゃないですか」

「……勉強キライなんです。」

「「へ………?」「」

リアクションに困るネギとスバルだった。

「………夕映、あんたいい加減ちゃんと勉強しなさいよ。」

「嫌です。」

「………やれやれだわ。」

徐倫のツッコミも、意味がなかった…

夕映は、待っていたのどかとメガネにアホ毛の少女 早乙女 八
ルナと共に、教室を後にした。

「できたアルよー」

「「「
……………」」」」
「あんたたちねえ……………」

もつと散々な明日菜。3人は黙り込んでしまい、徐倫は呆れてものを言えない。

「じゃ、じゃあ、ポイントだけ教えますね！終わったらもう一回やってもらいますから！」

「はい。」

「がんばれ〜」

ネギは、残った4人にテストのポイントを教える。スバルと徐倫は、残って見守るようだ。

「えっと、ここがこうなってこうなるから……………」

「ふんふん。」

一時間後

楓、古菲、まき絵も帰り、残るは明日菜のみだが……

「……」

「……もういいわよ……私バカなんだし……」

列んだテストの点数　1と4点　に、何て言ったらいいかわからない3人。明日菜はもういじけていた……

「おーい、調子はどうだいネギ君。」

そこに、高畑がやってくる。様子を見に来たようだ。

「お、例によってアスナ君かー！。あんまりネギ先生を困らせるんじゃないぞー。」

「た、タカミチ」

「た、高畑先生ー！！こ、これは……！！」

明日菜が弁解しようとするも、高畑は「じゃあがんばって」と言い残して、行ってしまった。

「……」

「ア……アスナさん……」

「アスナーー？」

ふるふると震えている明日菜に、何とか声をかけるネギとスバル。徐倫は黙ったままだ。

次の瞬間。

「うわあああ——————ん！」

「ああ!？」

「お、おい!？」

「アスナ!？」

いきなり教室を飛び出す明日菜。追おうとする3人だが…

ドヒューーン

「っつて速っ!？」

「アスナさ————ん!!！」

本当に人間か!?!というスピードで、既に教室2つ分位遠くまで行ってしまった明日菜。ネギは『杖を持って』明日菜を追いかける。スバルも一緒だ。

「……………もう帰っていい?」

1人教室に残った徐倫はそう呟くと、帰る準備を始めた。

麻帆良学園 湖の西側の道

ジョギングをする人たちのコースにもなっているこの道を、男は歩いていた。

特に意味はない。単なる気分転換にだ。

『矢』のことで麻帆良この街に来たが、なかなか良い街だと、男は思っていた。自然も豊かで、街の雰囲気もいい。やはり、『娘』をここに入れたのは、正解だったな。

男がそう思っていると……

「……この『杖』……自動車くらいの速度……出るんですけど……」
「……マジ？」

どれだけ足が速いんだこいつは？という目で明日菜を見る2人だが、相当疲れたらしく、明日菜と共にその場に座り込んでしまう。

「……あなた、何でそんなにがんばるのよ？」

「え？」

ふと、明日菜はネギにそう聞いた。

ネギは未だ10歳だ。この間会ったエリオやキャロもそうだが、何でそんな歳の子供が、そんなに頑張るのか、明日菜には不思議だった。

「……僕、憧れている人がいるんです。」

ネギは語り始めた。自分が頑張る理由を……

「……ただ、みんなはその人は死んだんだって言います。でも……僕にはあの人が死んだとは思えない！あの人は……千の魔法を使いこなす最強の魔法使い……『千の呪文の男』サウザンド・マスターは……この世界を旅しながら、たくさんの不幸な人を救ってるんです……！」

ネギはそう言って、自分の……あの日、父から授かった杖を見つめる。

「……だから僕は、あの人のような立派な魔法使いになりたいんで

す！そうすれば、この広い世界のどこかであの人に会えるかも知れないから……！」

ネギは、力強くそう答えた。

スバルは思った。ネギのこの憧れは、自分のなのには対する憧れに近いものだ。

明日菜は、力強く答えたネギを見て、言いようのない感情が沸いてきた。そして……

「あ—————！！もう！！分かったわよ！！やればいいんでしょ勉強……！」

「え？」

「アスナさん……」

いきなりそう叫ぶ明日菜に驚く2人。明日菜は、何故か持つてきてしまったプリントを解きはじめる。

「あんたがそのマジ……何とかになるには、今の先生の仕事をうまくやんなきゃいけないんでしょ？……協力するわよ。」

「ア……アスナさん……」

「アスナ……」

ネギとスバルは、明日菜の一言に、涙腺が緩む。なんだか、うれしい気持ちでいっぱいだった。

「ありがとうアスナさん！！……あ、もうこんな時間だ！今日の続

きは帰ってからに

「

ドスウウ

「.....え？」

何が起こったのかわからなかった。

明日菜にも、

スバルにも、

そして、ネギにも……

「ネ………」

ネギが立ち上がった瞬間、

古めかしい『石の矢』が、

ネギの胸を『貫いていた』……

「ネギイイイイイ――――！！！！」

明日菜の悲痛な叫びが、湖に響き渡った。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

#06 / 居残り授業を受けよう！（後書き）

6話です。

何というか、ネギ『スタンド使い化』です。

二つの勢力に、三人の主人公、片方に二人いたんじゃあバランスが悪いと思い、ネギは中間です。ソンの理由（笑）

能力は、次回判明する予定です。では！

#07 / 空条 承太郎！ネギ・スプリングフィールドに会う（前書き）

前回、『矢』に射抜かれたネギ！果たして、その運命は！？

#07 / 空条 承太郎！ネギ・スプリングフィールドに会う

麻帆良学園 とあるビル 屋上

ガチャリ

「……どうだった『サルシツチャ』？『矢』は彼を射抜いた？」

屋上のドアから入ってきた少女は、先に来ていた男に話しかける。

「問題ありません。わが能力、『アンダー・ザ・レーダー』は正確無比！確実に少年の胸を貫きました！」

サルシツチャと呼ばれた男は、先ほど少年を射抜いた『矢』を構えながら、自信たっぷりにそう言った。

彼の近くには、このあたりの『地図』があり、それを覆うように、彼の能力が立っていた。

「そう……彼の能力、私たちの役に立てばいいけど……」

そついうと彼女は、少年がいたであろう「湖」の方を見た。

ネギが射抜かれてから2時間後

麻帆良総合病院 集中治療室前

今、集中治療室の前には、3人の人物がいた。一人は明日菜、もう一人はスバル。そしてもう一人は……

「スバルッ！」

「アスナーー！」

ふと、二人を呼ぶ声と、ドタドタと騒がしい足音がした。そちらを見ると、A組のクラスメートたちに加え、ティアナ、エリオ、キヤロたちが、かけてくる所だった。

「ネギ先生が矢に刺されたって、本当なんですのっ!？」

「ネギくん、大丈夫なん!？」

「アスナ!?!どうなの!?!答えてよオオオオ!!！」

あやか達に聞いたただされる二人。全員、ここが病院という事を忘れて、ギャーギャーやかましく話している。

そこへ

「やかましいッ！！病院内では静かにしやがれッ！！」

先ほどからいた男が怒鳴り、やかましいA組の面子がピタリと黙った。

ふと、ティアナは気づいた。この男は、先日会った人物だ。

「あ、あなたはこの間の……」

「なッ！！何で親父がこんな所にいるんだよ！？」

ティアナが言い終わる前に、徐倫が叫んだ。

「……………つてええー……ッ！？」「……………」

徐倫の言葉に、明日菜やスバルたちは驚く。

「じ、徐倫のお父さんッ！？」

「マジで！？何この偶然！？」

「ていうか、失礼だけどあんまりジョジョに似てないじゃん！？」

男の正体を知り、再び騒ぎだす明日菜たち。だが、男がギロリと睨むと、再びピタリと止んだ。

「……彼はまだ治療中だ。運び込まれてからまだ1時間だが、そう長くはかからないだろう。」

男はそう彼女らに言い聞かせる。それを聞いて、全員つらそうな顔をする。

そんな時、『治療中』のランプが消えた。

ガチャ

「！！先生！ネギは……！？」

医師が出てきて、全員が詰め寄る。全員、不安そうな面もちだ。

「……矢は心臓近くを貫いていたみたいですが、一命はとりとめました。回復も早いので、数日中には完治するでしょう。今はまだ目覚めないのです、今日は入院したほうがよろしいかと。」

それを聞いて、全員に笑顔が戻る。今にもハシャギそうな勢いだが、徐倫の父にまた怒鳴られそうなので、我慢する……

#07 / 空条 承太郎！ネギ・スプリングフィールドに会う

麻帆良総合病院 待合室

「……それで、ネギくんを射抜いたのは、あの『矢』だったのね？」
みんなが帰った後、ティアナは明日菜とスバルに聞いた。もしもあの『矢』だったら、犯人たちはあれを使った犯罪を、今も続けていることになる。

「うん…でも、回収はできなかった。」
「……？」

「いや、回収しようにも、できない状況にあつて……あ…ありのまま、起こったことをはなすよ！『私たちが気付いたときには、『矢』はすでに、ネギくんの胸から消えていた』……」

スバルの話を聞いて、ティアナは絶句した。

「な…何を言っているか分からないと思うけど、私たちにも、何が起こったのか分からなかった。魔法だとか、超スピードだとかそんなチャチなものじゃあ断じてない……もっと恐ろしいものの片鱗を味わったわ……」

明日菜も、スバルに続く。どうやら、ネギを射抜いた犯人は、自分たちの魔法に関する常識を超越した『能力』ちからを持っているらしい…

そこに、トイレに行っていたエリオたちがやってくる。

「テイ……ティアさん!!」

「どうしたの二人とも？そんなにあわてて？」

「い……今トイレの方で、徐倫さんたちが……」

「「「???」」」

エリオたちの話では、徐倫とその父、そして、顔は影で見れなかったが、あと『6人』が、『矢』について話していたという。しかも、話の内容から察するに、徐倫たちは矢について詳しく知っている様子だったらしい。

「それって……!!!?」

「……い、いや、ありえないわよ!!だって、徐倫は、ずっと同じクラスだったのよ!!そんなことするような子じゃあ……!!」

エリオたちの話を聞いて、信じられないという面持ちの明日菜とスバルだった。

「……いずれにしても、彼女たちについて調べる必要があるわね。明日にでも、問いただして見ましょう。」

ティアナがそう決定し、明日菜たちは帰宅することになった。

翌日 午後2時30分

ネギの病室

「いやー、皆さん、すいません…僕のために色々してもらって。」
ネギは、見舞いに来た明日菜、木乃香、スバル、ティアナたちに、
申し訳なさそうに感謝する。

午前中は他のクラスメートたちが見舞いにきたらしいが、ものすごく騒がしくなってしまったため、婦長さんに追い出されることになったらしい……まあ、あの面子なら仕方ないが。

「いいのよ。それより、胸のほうは大丈夫なの？」

「はい、回復のスピードがあまりにも速いって、お医者さんが驚いてましたが……」

「そうみたいやなく、月曜日にはもう退院できるんやろ？」

花瓶に花を生けながら、木乃香が言う。

矢が胸を貫通するほどの重傷だったにもかかわらず、ネギの回復力は凄まじく、もう月曜日には退院とのことだ。

「ええ、アスナさんとスバルさんが、早くに救急車を呼んでくれたおかげですよ。」

「えっ、いや、私たちなんて……ねえ？」

ネギにお礼を言われ、複雑そうな顔をする二人。

「……………私たち、あの時、何が何だかわからなくなって……………」
『承太郎さん』があの時来てくれなかったら……………」

「……………」
『ジョータローさん』？」

知らない名前に、首を傾げるネギ。その謎は、すぐに解けた。

コンコン

「ういーっす。って…」

「なんだ、神楽坂たちも来てたのか。」

入ってきたのは、徐倫と千雨だ。だが、後ろには、知らない大男がいた。

「あ、承太郎さん、ちょうどいい所に。ネギくん、この人がさっき言ってた」

「初めましてネギ君、娘が世話になってるみたいだな。俺の名は空条承太郎。ま、名前の通り、徐倫の父親だ。」

「えっ？く、空条さんの！？は、初めまして…」

意外な人物の登場に驚くネギ。とりあえず、こちらも挨拶する。スバルの話によると、偶然通りかかった承太郎が、的確な指示をしてくれたらしい。

「……それで、胸はもう大丈夫なのか？」

「えっ……ええ、月曜日にはもう退院できて…」

承太郎にいきなり言われて慌てるネギ。

何故か明日菜たちも、少し苦手そうな顔だ。承太郎から、無言の圧力が掛かってくる。何だか、叱られている気分だ。

徐倫と千雨は平気そうだが……

(……あー、全員親父の無言に耐えきれそうにないなあー。)

(初めてじゃあ仕方ないな。)

意外とのんきだ。

徐倫たちが退室し、木乃香が売店へ行くと、『魔法使い組』は、先ほどの空条親子たちについて話し始めた。

「矢について、あまり話しませんでしたね…もっと聞いてくると思っただのに……」

「向こうも警戒してるのかしら？」

「さあ？でも、エリオたちの話じゃあ、矢に射抜かれる事が重要だったみたいだよ？」

「……やっぱり、あの『矢』には、何かあるみたいね……」

全員がそれに頷く。考えれば考えるほど、『矢』の謎は深まった。

チュミィィーン

「ん？」

ふと、ネギは何か声のようなものを聞いた気がした。

「……………？どうしたのネギくん？」

「……………今、何か聞こえたんですが……………」

「え？……………何も聞こえないけど？」

全員耳をすましてみるが、何も聞こえない。だが、

チユミ……………チユミイ……………ン

「ほら、また！！」

「……………ここって、『出る』の？」

「いや、そんなこと聞いたことないけど……………」

引きつった顔のティアナが明日菜に聞くが、明日菜はそんな噂聞いたことなかった。

ふと、スバルは気づいた。ネギの肩に、何かが乗っている！

「……………！！ネギくん、それは！？」

「えっ？」

スバルに言われ、自分の肩を見たネギが見たものは

『チユミイ〜ン』

ウサギの精霊のようなものだった。

全長は15cm前後、色は全体的にピンク色で、体のあちこちに星マークが浮かび、目は困ったような形だ。鼻は尖っていて、先端が額の大きな星マークと糸のようなもので繋がっている。胴体はクリオネのようで、足に当たる部分には、四本の触手が生えている。

そんな、一見かわいいようなものが、まるで歯医者ドリルのような、それでいて動物のような鳴き声を発していた。

「うわっ!?! な、何これ!?!」

驚いて後ずさるネギ。『精霊(仮)』は、その場にふよふよと浮きながら、ネギを見ている。

「な、何かウサギっぽいけど……」

「さっきまでこんなのいた?」

明日菜とスバルは、不思議そうに精霊(仮)を見る。

「……ねえ、ウサギなんてどこにいるの?」

ティアナの一言に、三人はティアナを見る。その顔は、『驚愕』だった。

「え?ティア、『これ』が見えないの?」

「……てか、あんた達には何が見えてるの？」

ティアナは、三人が何を見ているのかが不思議だったし、三人には、ティアナに精霊（仮）が見えないのが不思議だった。ふと、スバルはあつことき気づく。

「もしかして、『矢』に射抜かれたのが原因？」

「『あつ！？』」

全員気がはつとする。なるほど、これがあの『矢』の力なのか。

「……問題は、あんた達に見える『精霊（仮）』が何なのか
つてことよね。」

「そうね……それに、徐倫たちが何でそれを知っているのかもね……」

矢の能力は分かったが、新たな謎が生まれたのだった……

ネギが退院した日

午後6時過ぎ

クラスメートの一人、超・鈴音チャオリンシエンの経営する飲茶屋「超包子」チャオパオズで、クラス全員参加のネギの退院祝いをした後、ネギ、明日菜、スバル、ティアナ達は帰路についていた。

「いや、本当に盛り上がったねえ」

「スバルは食べてばっかだったけどね……本当にあなたの胃袋どうなってるの……？」

「まあ、前衛ってカロリー消費激しいらしいし……」

スバルの暴飲暴食っぷりを思いだし呆れていると、ふと、目の前に見慣れた二人がいた。エリオとキャロだ。だが、様子がおかしい。曲がり角の物陰に隠れて、道の先を見ている。

「……………あなた達、何やってるの？」

「「うわッ!？」」

いきなり話しかけられて、驚く二人。だが、話しかけたのがスバル達だと気づき、ホッとする。

「おっ、脅かさないでくださいよっ」

「あー、ごめん。ってあれは……………」

そこで4人は、エリオ達が誰を見ていたか気づいた。道の100mほど先に、徐倫と千雨、そして、長い髪をポニーテールにした、背の高い少女　大河内　アキラ、さらには、まき絵と承太郎までいた。

「あの5人、さっき偶然見かけたんですけど、何かこそそ話していたんです。それで気になって付けていたんですけど……」
「なるほどね。」

「でも、それだけで疑うのはどうかと思うわよ？」
「でッでも………!!」

注意する明日菜に、エリオ達は反論しようとする。だが、

「はッ!?!」

ティアナは気づく。一団の中に、『千雨がない』!?

「一つ、言わせてもらおうが……」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

急に、後ろから声がする。振り向くと、100m先にいたはずの千雨が、彼女らの『後ろ』にいた!?!!

「そんなお粗末な『追跡』じゃあ、私たちは追えないぜ………!」

道の方を振り向くと、徐倫たちもこちらに向かって来ていた。後50m位だろうか。

「まッ待って!! 私たちは別に……」

そんな時、ティアナのもつ『クロスミラージュ』から、通信音がし

た。ティアナは回線を開くと……

「みんな!!今、そっちの方にガジェットが……!!」
「ん?何だよそれ……?」

だが、千雨が質問し終わる前に、ガジェットたちが彼女らを囲んでいた。『転移魔法』の反応もなしに、だ。

「な!?いきなり現れた!?!」

「こいつらは……!」

スバル達は戦闘態勢に入ろうとして、躊躇った。

(どうする?このまま行く?)

(でも、それじゃあ徐倫たちに……)

そうこうしている内に、ガジェットたちが千雨に迫る。だが、千雨は動こうとしない……

「はッ長谷川さん!!」

「あんたッ!早く逃げ」

ティアナが言い終わる前に、

ガジェットが、一瞬で『輪切り』になった。

「……………え？」

「……………は？」

呆けた表情のティアナ達。だが、ネギ、明日菜、そしてスバルの三人には、『見えていた』！

千雨が！いつの間にか握っていた「二本の小太刀」で！！ガジェットの『斬り裂いた』のを！！！！

「……………お前等との話は『後』だ。」

千雨は、小太刀を構えて言う。左手を逆手に持ち、前方で縦に交差させる、独特の構えだ。

「今は！！！」

瞬間、千雨に迫っていた一機のガジェットを、左で逆胴、右で唐竹割りと、交差するように斬る。

「こいつらを全部『ぶった斬る』！！！」

千雨は、十数機いるガジェットに向かって、かけていった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

#07 / 空条 承太郎！ネギ・スプリングフィールドに会う（後書き）

7話です。

ネギのスタンドが「タスク」なのは、今後魔法拳士の道を選んだ際に役立つと思ったからです。「魔法の射手」に乗って発射される爪とか、私の中では、色々案が浮かんでいます。

千雨のスタンドの詳細に関しては、もう少し後になる予定です（＾
| ￣ ; ；）

後、ネタバレを一つ。サルシツチャは、イタリア語でソーセイジって意味です。

今回は、前半はスタンド無双、後半はスタンドについて魔法使いに解説という流れになる予定です。では！

#08 / 精霊(仮) その正体! (前書き)

スタンド使いVSガジェット!

……何か今回早かったなあ…… (^ | ^ ;)

そして、『あいつ』がとんでもないヤツを引き連れて参戦!!

#08 / 精霊（仮） その正体！

午後6時5分頃

麻帆良学園近くの大通り

「ねえ、今千雨ちゃんの近くにいるのって……………！」

「ああ、『この間の』ヤツらだ！何故かスバルたちもいるみたいだが、恐らくは『能力者』だろう！」

「そして『ネギ君』！彼がいるということは！恐らく連中は『矢』の関係者！」

「……………とにかく、やつらを『ぶちのめす』！聞き出すのは、それからだ！！」

徐倫たち4人は、立て続けにそう話しながら、千雨たちの所にかけていった。

同時刻

大通り近くのビル

「戦闘が開始されました。」

自分の能力 『アンダー・ザ・レーダー』で様子を見ていたサルシッチャは、後ろで椅子に座りながら猫の背中を撫でている少女に報告する。

「そう…… 『彼の能力』を知るには、やはり『戦闘』をさせるに限る……」

「………しかし『ルル・ベル様』、もし、彼が能力に目覚めていなかったら……?」

ルル・ベルと呼ばれた少女は、少し不機嫌そうな顔をする。猫はそんな彼女を察し、むずがった。

「……何を言ってるのサルシッチャ? 『矢』が彼を『選んだのなら』、確実に「目覚めている」わ!!……さっさとガジェットを追加で『転送』しなさい。」

ルル・ベルはそういうと、テーブルに置いておいた紅茶を飲む。……が、

「もう温くなってる……はぁ………」

#08 / 精霊(仮) その正体!

「はあああああああ!!!」

叫びながら、千雨はガジェットに斬撃を喰らわせる。その動きは、まさに『目にも留まらない』! だが、何機か撃ち漏らしてしまい、それが千雨の後ろに回りこむが、

「おおおおおおお!!!」

それを、『リボルバーナックル』を装備したスバルが『ぶん殴り』破壊する。

「……ナカジマ……なんだよその格好!？」

「……長谷川さんが『小太刀^{それ}』のこと教えてくれたら、私も教えてあげるよ。」

「……………へっ、言うじゃねーか……………よっ!!!」

皮肉っぽくそう言いながら、近くのガジェットを袈裟懸けに斬る。

そのとき、攻撃が『上から』来た。見上げると、空戦用の『ガジェット?型』が攻めてきていた。さすがの千雨も上空からでは手が出

せない。

『千雨は』……だが。

ドグシヤア

「「「「「「「!!?!?」「」「」「」

いきなり?型が飛んできたと思ったら、?型に激突し、両方とも破壊される。?型が飛んできた方向を見ると、空条親子がいた。

「じよ、承太郎さんたち!?!」

「い、今のはいつたい……?」

ティアナやエリオには、何が起こったのかさっぱりだったが、ネギたちには見えていた。承太郎と徐倫の側に、『誰か立っている』!!

承太郎の側には、黒い髪を逆立てた、青い肌に筋肉の『鎧』を纏った古代ローマの拳闘士のような男が立ち、徐倫の方は、水色で、どこか無機質な印象の肌をした、サングラスをかけた亜人だ。

「……ネギ君、君には『見えるか』?俺の『スタープラチナ』が……徐倫の『ストーン・フリー』が……!」

「……ええつと、2人の側に立ってる人……?なら見えますが……?」

「……やれやれだぜ……ま、「これ」については後で話すとして、

「ガ、ガジェットたちが……独りでに壊れていく……!?!?」

ティアナやエリオは、呆けた顔をしている。彼らの『守護霊』が見えない者からすれば、「ガジェットたちが空条親子に近づいたら、独りでに凹んで吹っ飛んでいく」ようにしか見えない。

だが、そんな時でも、ガジェットは襲ってくる。いち早く復活したティアナがそちらを向くと……

ドガア

「「!?!?!?」」

『鉄球』が飛んできて、ガジェットに命中する。鉄球は回転を続けながら、ガジェットにどんどんめり込んでいき、最終的に、ガジェットの機能を停止した。

パシィッ

「よそ見は禁物だよ? まあ、あれ見たら仕方ないけど……」

バウンドしてきた鉄球をキャッチしたアキラが、ティアナに言った。

「い、今のは……?」

「……我が一族伝統の『鉄球の回転』! 原理や回し方は門外不出ゆえに、詳しくは話せないけど……はあっ!?!」

アキラは照れくさそうに話すと、鉄球を別のガジェットへ投擲する。

「そっ……なら聞かないわッ!?!」

ティアナも、魔法弾を放った。

エリオとキャロは押されていた。ガジエットの攻撃でティアナたちから離されてしまい、明日菜たちを守るのに精一杯だったためだ。だが、ガジエットは容赦なく彼らに襲い掛かった。

「くっ、このままじゃあ……」

(……せめて僕にもガジエットあいつに対抗する力が……)

自分の非力に嘆くネギ。その時、？型が三機、彼らに向かって特攻してきた！

「なっ！マズイ!!！」

「!?!? エリオくん!!?!?」

三人を守るように、前に出るエリオ。？型が自分に当たると思った瞬間、彼は目を瞑ってしまう。

だが、痛みはなかなかやってこない。不思議に思い、目を開けると

……

『フム、少年ヨ、君のソノ『精神』、私ハ敬意ヲ賞スル!』

両手に剣を持ち、切り捨てられたガジェットの上に乘った、『緑色の魔神』がいた。

「なツ……………あ、あなたは……………!!?」

『フム、ダガ最後ニ『目を瞑ツタ』ノハヨクナイな……………80点。』

緑色の体、一つ目にどじょうひげ、そして頭に巻いたターバン!

そう、こいつは…こいつは…!

「『グロウン・キッド……………!』」

『YES、I AM!! チツ チツ』

某炎の魔術師みたいなポーズとセリフで、魔神 『グロウン・キッド』は返事をした。

「おーい、ネギ君たち大丈夫ー?」

そこに、リボンを持ったまき絵がやってきた。

「あ、ってまきちゃん!？」

「まき絵さんっ、何であなたまで!？」

『……フム、まき絵ヨ、コチラハカタツイタ。ダイブ数も減ってキタシ、ソロソロ徐倫タチト合流シヨウ。』

「OK!!」

グロウン・キッドの提案に、賛同するまき絵。そして、行こうとして、

ガシイ

「待ちなさいよ!何であんたがまきちゃんと顔見知りなの!?!？」

『フム?』

明日菜に止められた。まあ、確かにこんな得体の知れないものがクラスメートと顔見知りだったら、疑問に思っただけだが……

「あーい、そのことなんだがな、神楽坂。」

そこへ、同じくガジェットを倒した千雨や徐倫たちが、集まってきた。

「G・キッドの『本体』はまき絵だからな。別に何にも不思議じゃあない。」

明日菜たちに説明する徐倫。だが、明日菜は首を傾げたままだ。

「……………その『本体』について、詳しく説明してもらえるかな？」

声が聞こえて振り向くと、なのはとフェイト、そしてヴィータの三人がいた。

「結構な数がいたから応援に来ただけど……………いらなかったみたいだね？」

少し困ったように、フェイトは言った。周りには、ガジェットだった大量のスクラップが散らばっていた。

「……………その前に、お前たちは何者なんだ？俺たちのような『能力者』ではないようだか……………」

「……………そうですね、あなたたちの前に、私たちから説明させてもらいます。」

承太郎に聞かれて、なのはたちは、説明しだした。

承太郎たちから少し離れた草陰

「どうやら、あんたを追ってきた魔道士は、あいつらで全員みたいだな。」

「ああ、相手は強敵ぞろいだが、オレとあんたのコンビなら勝てる！！」

「へへっ久しぶりだぜ！あんたみたいなパートナーとめぐり合えたのは！行くぜ！」

「魔法使いだあ！！？」

なのはたちの話を聞き、自分の予想の斜め遙か上をいった内容に、千雨はすっとんきょうな声を上げた。声には出さないが、徐倫やアキラも、似たような反応だった。

「……やれやれ、まさか魔法が実在するとはな…道理でネギ君が『矢』に選ばれたわけだ。」

「……ちよッ、『超能力』うう!?」「……」

今度は、明日菜、スバル、ティアナ、そしてネギがすつとんきょうな声を上げる番だった。いきなりクラスメートが、「自分は超能力者です。」と言ったのだ。無理はない。

「……まあ、スタンドは普通スタンド使い以外には見えないからな。佐々木の『グロウン・キッド』みたいに、物質に融合したやつとかは別だが。」

千雨が、グロウン・キッドを見ながら言う。

「……………で、そこにいるやつ! さっさと出てこいッ!」

承太郎が言うと、草陰から男が出てくる。

テンガロンハットをかぶり、口には禁煙パイプ、薄茶色のシャツを着込み、ブーツには滑車が着いている、カウボーイ風の40代くらいの男性だ。

「よお、久しぶりだな承太郎!」

「…………お前は!」「ホル・ホース!」

男　ホル・ホースに驚く承太郎。だが、彼はすぐに気づく。ホル・ホースが『一人で掛かってくる訳がない』!!

「気をつける! どこかにヤツの仲間がいるぞ!」

承太郎の言葉に、全員警戒する。

そして、ヴィータは気づいた。なのはの後ろのガジェットの陰から、

『腕が伸びている』ことに！

「なのはッ！！」

「！？」

なのはは慌てて飛び退く。

陰から出てきたのは、奇抜なメイクに、網の着いた帽子、そして帽子から飛び出た髪の毛　オエコモバだ！

「オエコモバ！」

「まさか、自ら出てくるなんて……！！」

「……ちつ、まあいい。高町　なのはは『始末した！』後はてめえらだけだ！」

「……？」

なのははオエコモバの言葉の意味が分からなかったが、気づいたことがあった。自分の左手に、時計のようなピンが、数個着いている！

それがピンツと音をたてて外れると……

ドグオオオオオオン

「……………！！？」
「……………」

なのはの左手が『爆発』したッ！！

左手の爆発が、体にもダメージを与える！

「か……………はっ……………」

「なのはッ!?!」

「そんなッなのはさん!?!」

「なのはああああ!?!」

全身から爆煙と血を吹き出しながら倒れるのは、
彼女が薄れていく意識の中で聞いたのは、親友と教え子たちの、悲
痛な叫びだった……………

t o b e c o n t i n u e d . . .

#08 / 精霊(仮) その正体! (後書き)

8話です。

グロウン・キッドの本体はまき絵でした。まき絵〓リボン攻撃〓布製のリボンで攻撃〓布操作という感じで思いついた能力です。

そして、なのはさん退場。一応言っておくと、まだ生きてますので
ご安心を (^-^;))

今回は、ホル・ホース&オエコモバとの戦いです。

では!

#09 / 遠い世界（くに）から来たテロリスト（前書き）

ついに姿を現したオエコモバ！

そして、なのはの運命は！？

#09 / 遠い世界(くに)から来たテロリスト

薄暗い廊下を、一人の『男』が歩いていた。

室内だというのにコートを着込み、顔以外を頭巾で覆い、頭頂部に開いた小さな穴から、髪を一房だけ出した、垂れ目の男だ。

彼は、目的の部屋の前に着くと、ノックをして、部屋に入った。部屋には、数人の男女がいた。

本を読むもの、仲間とトランプをする者、『角砂糖』を食べている者など、各々が好きなことをしていた。

「すいませェン奥様、オエコモバが勝手な真似をしているようですが…」

男に『奥様』と呼ばれた女性は、読んでいた本から男へと目を移した。他の者達も、男を見ている。

「全く、しよオがねエなアアっあいつも。」

「何ならオレが始末するが…どうする？」

トランプをしていた二人が『奥様』に聞くが、彼女は『右手』をあげて、制止のポーズをとった。

「いいえ、『彼』の方が適任よ。送り込んできなさい『ブラックモア』」

男　ブラックモアに命ずると、彼は頷き、静かに部屋から出てい

った。

「あれは……………確かオエコモバ！」

『アンダー・ザ・レーダー』で様子を見ていたサルシツチャは、出てきた男に驚いた。

確かあいつは、『あの人』の配下で、「矢」を盗んだ張本人！
それが何でツ！？

「……………オエコモバは『あの男』といるみたいね？…これは使えるわツ！『ガジエツト』じゃあ、彼のスタンドはみれなかったし、あいつらを利用するのよ！」

ルル・ベルは興奮気味にそう言って立ち上がった。膝から猫が落ちたのも気にせずに……………

#09 / 遠い世界くから来たテロリスト

「なのはああああーッ!」

オエコモバの攻撃を喰らい倒れるなのは。フェイトの悲痛な叫びが響く中、千雨はある事に気づいた。

(……………あれ?あいつ……………?)

「オエコモバツ!テメエ!」

ヴィータが叫びながらオエコモバに向かっていく。だが、振りかぶ

ったアイゼンが、後ろから引つ張られるような感覚を得て『止まった』。見てみると、アイゼンに「糸」が絡みつき、それにより引つ張られていた。

「バカッ！むやみに近づくなー！」

「徐倫！？何しやがるー！あいつは、あいつはアー！」

糸を持った徐倫が制止しようとするも、ヴィータは頭に血が上って、冷静な判断が出来なくなっていた。

そんな時……

『……………フム、モウ少し君ハ「落ち着く」トイウ事ヲ覚えた方ガイイナ。』

グロウン・キッドの声だ。なのはの方から聞こえる。

見てみると、なのはの体の一部が徐々に「緑色」になっていき、ちようど腹のあたりからG・キッドが頭を出した。

「グロウン・キッド！？」

「な……………なのはさんの……………体の色に化けて……………防御したのッ！？」

『フム、イカニモ。オカゲで、胴体ト左腕ガ犠牲ニナツタガナ……………』

全員が驚き、なのはの近くに行く。承太郎がなのはの容態を見る。

「……グロウン・キッドのおかげで命に別状はないが、『重傷』には変りないな。」

「じゃあ、今すぐここから……」

「させると、思っかい？」

ホル・ホースは言うと、右手をスバルたちに向けて伸ばす。すると、右手から『拳銃』が姿を現す。

これこそ、ホル・ホースのスタンド！タロット四番目のカードの暗示！

その名は、『^{エンペラー}皇帝』！

(……！私には『スタンドは見えない』けど！あの「手の形」！そして「動作」！まさか………！)

スタンドが見えないティアナだが、ホル・ホースの「右手」をみて、どんな『スタンド』かを理解した！

「やばい！何か撃ち出すスタンドッ！」

ティアナが叫んだのと、ホル・ホースが『皇帝』の引き金を引いたのは、ほぼ同時だった。

(くっ……弾丸まで『見えない』なんて！でも、手を見れば『軌道を読む』はず！)

そう思ったティアナは、弾丸の軌道と思われる所の「正面」に、シールドを張る。だが、

「ティアアー!!」

ボゴオ

「ッ!?」

ティアアナは、「右側から」足を被弾した!!

「そ……………そんな……………!ぐうッ!」

「悪いなあ〜お嬢ちゃん、スタンドってのは、そんなに甘くない訳よオ!『弾丸もスタンド』って事は、「軌道を変えてもおかしくない」って考えなきゃなあ〜!」

(そ……………そうよ……………『スタンドはスタンド使いにしか見えない』ってことは、スタンド使い以外は倒せないって意味じゃないッ……………!!)

ホル・ホースの言葉に、ティアアナは唇をかむ。初めて、スタンドの恐ろしさを思い知った瞬間だった。

「……………やつの言うとおり、甘く考えない方がいい。……………このなかで、『こいつが』見えるヤツはいるか?」

承太郎は、自分の背後を親指で指しながら聞いた。手を挙げたのは、スバル、明日菜、ヴィータ、そしてネギの4人だ。

「よし、今手を挙げたヤツは残れ!後の奴らはまき絵たちと怪我人を運び出せ!」

徐倫は、全員に指示をする。

「は、はい！」

「くっ……情けないけど、後はあんたらに任せるわ……」

ティアナは、悔しそうにそう言う。

まき絵は『グロウン・キッド』のパーツを分解して、布に戻すと、なのはとティアナを乗せる。このまま病院まで運ぶようだ。

「逃がしはしねえ！」

ホル・ホースは再び弾丸を放つ。今度は三発だ。

「ストオオーン・フリーイイー……！」

シュババア

「何いい!？」

だが、弾丸は徐倫のスタンド 『ストーン・フリー』が体の一部を「ほどいて」、それを何重にも編み込んだ『防弾チョッキ』ではばかれる。

『糸』 これが『ストーン・フリー』の能力らしい。

徐倫に逃がされたまき絵たちは、グロウン・キッドの『魔法の絨毯』で戦線から離脱する。護衛にエリオやキャロ、さらには千雨とアキラも着いていった。

「ちい！逃がしたか！！」

「仕方ねえ……行くぜホル・ホース！」

オエコモバが、杖型デバイスを構えてそう言うと、周りにいくつもの魔法陣が現れ、ガジェットが転送されてきた。中には大型ガジェットのもの？型が8機もいた。

「？型まで！？」

「ちいッ！まずは私が……」

ヴィータが向かおうとするが、承太郎が制した。

「俺が行く。離れている。」

「承太郎さん！？」

承太郎に？型が1機迫ってくる。承太郎は背後を親指で指さし、自分のスタンドを『呼んだ』。

「スタープラチナ星の白金！！」

承太郎の背後から現れた『スタープラチナ』は、？型をぶん殴った！だが、

ピンッピンッ

「！！」ドグオオオン

殴った反動で、ガジェットから『ピン部品』が飛び出し、爆発した。

「承太郎さん！？」

「『ヘルズ・マリア』……ガジェットにピンをつけた！まずは一人

「！」

オエコモバは、勝ち誇ってそう言った。彼の側には、ボロ切れをまとったカラスのようなスタンドが立っていた。

「やれやれだわ。あんた、親父のこと、何も知らないみたいね？」

「……………」

だが、徐倫が余裕そうなのをみて、疑問が浮かんだ。なぜ、そんなに余裕なのか……………？

「……………なるほど、てめえの能力は、『ピンをつけて、外れたら爆発する』って訳か。」

不意に、背後から声がして振り向くオエコモバ。彼の後ろには、承太郎が『無傷で立っていた！！』

「やれやれだぜ。ま、無傷ってわけじゃないがな。4万円もするコートが破けちまったぜ。」

見ると、確かにコートの袖が一部破けていた。

「な……………今、何をしたの？」

「！！！？アスナさん！」

驚く明日菜だが、ネギの叫びに我に返った。彼女の背後から、？型が2機、迫っていた。ネギは明日菜を守るように前に立つ。だが、AMFに慣れていないネギには、ガジェットを相手するのは危険だ。しかし、ネギには考えがあった。魔法が使えなくても、勝てるかもしれない考えが。

（僕には、奴らを倒す魔法は持ち合わせていない……だけど、君なら！君が、僕的能力なら！……だから頼む！力を貸してくれ！僕の『生徒たちを守る』力を！！）

ネギがそう願っている間にも、ガジェットは迫る。ネギは、一か八か、呪文を詠唱する。

「魔法の射手！」

だが、魔法の射手は出ない。しかし！

スパア

「！！？」

ネギが『右手を』上げた瞬間、？型のアームが『斬り裂かれた』！

！ネギと明日菜だけでなく、徐倫たちも驚いている。

ふと、ネギは右手からシルシルという音を聞いた。手の『指先』からだ。不思議に思い、手をひっくり返すと……………

爪が『回転』していた。

まるで、フリスビーや円ノコのように！指から離れて、回転していた！

「ぼ……………僕の手……………爪が……………何だこれ……………！？爪が回転している！！！」

「これは……………まさか……………これがネギ君の！！」
「スタンドか！！！」

驚く一同だが、ネギは理解した。これが、あの『精霊』の力だと！

ネギは依然と迫るガジェットに向けて、右手を振り下ろすと、回転する爪が、カッターのようにガジェットを斬り裂く！

だが、もう1機も迫る。ネギは今度は左手を向けて、弾丸のように爪を5発『発射』した！着弾した爪は、ガジェットを貫通し、そのまま5 m後ろにいたオエコモバにまで迫った。

「何イ！？」

ズドドオ

「ゲウウ！」

オエコモバは、何発か避けるが、2発腕に喰らった。他のガジェツトも、破壊されたようだ。

「くそっ！」

オエコモバはナイフを数本取り出すと、投げる体制に入る。が、

ブワワワワワ

「……………え？」

ガシィ

いきなり周りを『ロープ』が囲い、そのまま近くの木に縛り付けられてしまう。ロープを握っているのは……………徐倫！

「よし！ジヨセフじいちゃん直伝のロープマジック成功！……………悪いな、ネギに気をとられているうちに、ロープを張らせてもらった！後は頼むぞ、スバル！」

徐倫が言い放ったと同時に、スバルは円を描くような構えを取った。円の中心には、空色の魔力が『溜まる』！

「この一撃はッ！なのはさんとティアの分だ！！ディバイイイイー
ーン！！」

「うわぁああああ……………」

オエコモバが悲鳴を上げるが、スバルはお構いなしに、解き放つ！！

「……スバルよお、確かに私は『頼んだ』って言ったわよ……でも……」

徐倫は、スバルの『デイベインバスター』の破壊跡を見て、呆れたように言った。

「明らかにやりすぎでしょ……」

「い、いやあ……ちよっと気合い入りすぎちゃって……ってへっ」

「『てへっ』って何『てへっ』って!?!?こんだけ破壊しといて『てへっ』ですませちゃったよこの子!?!?」

「っーかオエコモバは無事なのか……?」

明日菜が叫び、承太郎はオエコモバの安否を気にした。

「まあ、『非殺傷設定』だから大丈夫だろ。さて、後はてめえだけだぜ!」

ヴィータはホル・ホースに向かってそう言うが……

ダッダー

「……って逃げてるしッ!?」「……」

「悪いなあーお嬢ちゃんたちッ!ここは出直させてもらうぜ!オレは誰かとコンビを組んで実力を発揮するタイプだからなあー!」一番よりもNo.2!」これがホル・ホースの人生哲学!文句あつか……」

言い訳みたいな捨てぜりふを残して、ホル・ホースは逃げていった

……

「ほっておけ。どうせあいつ一人じゃあかかってこないしな。今はオエコモバってヤツが先だ。」

そう言うと、承太郎は近くの噴水まで飛ばされてピクピクしているオエコモバに近づいていった。

「!」

だが、ネギは気づいた。噴水の水面から、『サメの背鰭』が出ていることに!

「承太郎さん!スタンドです!噴水に『サメがいます』!」

「……!!」「……」

承太郎たちも気づいたが、一手遅かった。サメは、オエコモバに襲いかかり、のどを喰い破った!!

「な……なんだとおおー!?!」

「くっ！『爪弾』！！」

ネギがサメに爪弾を放つが、サメは噴水にすでにおらず、爪は噴水に沈んだだけに終わった。

「消えた！？」

「くっ、恐らく『水から水へ移動する』遠隔操作スタンド！オエコモバは『捨て駒』か！」

徐倫は理解した。オエコモバなど、単なる下っ端という事に。

承太郎はオエコモバの様子を見るが…

「…死んでいる……即死だな。」

承太郎の言葉に、全員が戦慄した。

逃げるため街道を走っていたホル・ホースは、いきなり『ビルの床』に倒れ込んだ。

「いったあゝッ！おいおいサルシツチャさんよおゝゝ、呼び出す

んなら、もう少しタイミングを考えてくれよぉ〜!」

ホル・ホースは、自分を『連れてきた』男に目をやる。

腰まで伸ばした銀髪に、鋭い青い瞳、藍色のスーツに、黒いコートを着込んだ男　サルシツチャダ。

「……ホル・ホース、君が動き回るから我が『アンダー・ザ・レーダー』で捉えにくかったんだ。文句を言うな。」

> i2482—406<

「……はっ相変わらず冷たいねえー」

「二人とも、話はすんだ？さっさと行くわよ。」

声が出た方を見ると、銀髪というよりも、白髪に近い色の髪を縦ロールにした、勝ち気そうな翠色の目の、ゴシッククロリータ服を着た14歳位の少女　ルル・ベルがいた。足元には、ロシアンブルー種の猫もいる。

「はい、ルル・ベル様。」

「仰せのままに、お嬢様。」

三人は、先ほどまでいた部屋から、静かに出ていった。

オエコモバ

スタンド名：ヘルズ・マリア

死亡

再起不能

ホル・ホース スタンド名：皇帝 再起可能
高町 なのは デバイス名：レイジングハート・エクセリオン
 重傷 全治2ヶ月半
ティアナ・ランスタール デバイス名：クロス・ミラージュ 全
治2週間

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CARD」

スタンド名 ヘルズ・マリア
本体 オエコモバ
破壊力 A スピード C 射程距離 C
持続力 B 精密動作性 D 成長性 D

能力 触れた物に『部品』を付ける。ピンが外れると、爆発する。

#09 / 遠い世界（くに）から来たテロリスト（後書き）

9話です。オエコモバが弱く見える…

オエコモバのスタンド名って原作に出てなかったから、ALIEP
PROJECTの楽曲から取りました。

次回は、図書館島の話を予定しています。
では！

#10 / 学園長からの第一指令：「学年最下位を脱出せよ！」（前書き）

期末前に、ネギに学園長から指令が！？

今回は、図書館島編の導入部です。

#10 / 学園長からの第一指令：「学年最下位を脱出せよ！」

オエコモバの襲撃から数時間後

ミッドチルダ 機動六課隊舎 部隊長室

「なのはちゃんが重傷でティアナが負傷、おまけにオエコモバは『始末』されて、矢の行方もわからない、か……」

フェイトからの通信を受け、八神 はやてはため息をついた。管理局でも認知していなかった能力 「スタンド」。今回の事件は、このスタンドが関わっているという……

「うん……なのはの輸送とその話をするのに、承太郎さんと明日ミッドチルダに向かうことになったよ。」

ティアナの傷は幸い浅かったが、なのはは左腕を含む重傷だ。麻帆良では手に負えないらしく、ミッドの病院に輸送されるらしい。

「さよか……分かったわ。じゃあ、そんな時にな。」

そう言って通信を切ると、はやてはさらに山積になった問題に、再びため息をついた……

3日後

麻帆良学園 学園長室

「そうか、ネギ君はうまくやっとなるねか。」

「はい、生徒とも打ち解けていますし、授業内容も頑張ってます。この分なら、指導教員の俺としても、合格点を出してもいいかと…

…」

ネギについて話す学園長とウェザー。どうやら、四月から正式な教員として採用されそうだ。

「ご苦労じゃったウェザー君。」

ただし、もう一つ……」

「？」

「彼には『課題』をクリアしてもらおうかの。才能ある『立派な魔法使い』の候補生として……」

#10 / 学園長からの第一指令；『学年最下位を脱出せよ！』

「ネギ君、あんなことあったのに頑張るね。」

「ああ、普通あの歳でアレ見たらトラウマだぞ。」

「実際私はトラウマになったわ……」

「……大丈夫か？」

昼休み、食堂でスバル、明日菜、徐倫、千雨の4人は、木乃香が自分の料理を取りに行っている間、この間の話をしていた。

あの後、『魔法先生』たちが事後処理を行い、オエコモバの死体やガジェットは片づけられ、このことは『無かったこと』になった。もちろん、明日菜たちは口止めをされ、徐倫たちはスタンドについて知っている事を話すよう求められた。

ここで、事情聴取を引き受けたのが、承太郎だ。彼は、「自分はこの中で一番スタンドについて詳しい」と、フェイトたちに申し出たのだ。

そして承太郎は、『矢』の調査をスタンド使いを全面サポートする『スピードワゴン科学医療財団』のエージェントに任せ、フェイトと共に『ミッドチルダ』へと向かったのだ。

「……まあ、『期末』近いから助かったっちゃあ助かったがな。」
「うう……イヤなこと思い出させないでよ……」
「うへー、この忙しい時に？」
「ま、学生だから仕方ないだろ。」

そう、来週から『期末試験』なのだ。

そしてそれは、ネギの耳にも入っていた……

同時刻

ネギは、日直であるまき絵と、その友人 髪を右側でサイドテールにした明石^{あかしゆうな} 裕奈と歩いていると、ふと、他のクラスに目が止まる。

「何か、他のクラスの皆さんピリピリしてますね……？」
「あー、期末テストが近いからね。来週の月曜からだし。」
「へー、大変だなあー………って！2^{うち} Aもそうなんじゃあ

!？」

「あー、麻帆良学園女子中等部ってエスカレーター式だから、あんまり関係ないんだよー。」

「特にうちのクラスは『学年最下位』だけど大丈夫大丈夫。」

笑いながらいうまき絵たちに、ものすごく不安になるネギだった。ふと、あるクラスに置いてある花のようなトロフィーを見つめる。裕奈に聞いたたら、期末学年トップに送られるらしい。

(うーん、何とかした方がいいのかな…あんなトロフィー欲しいけど、無理かな?……無理だよなあ……いや、確かそういう時に効く魔法が……)

「ネギ君。」

「わっ、ウエ、ウエザー先生ツ!？」

いきなりウエザーに話しかけられて、ネギは驚く。まあ、彼の場合は仕方ないかもしれないが……

「これを。学園長からだ。」

「えっ?学園長から?」

ウエザーから封筒を受け取るネギ。封筒には、『ネギ教育実習生への最終課題』と書かれていた。

「ええっ!?!僕への『最終課題』!?!」

(こっこんなのがあるなんて……最終課題って何をやれば……?)

恐る恐る封筒を開けて、中身をみるネギ……

ネギ君へ。

A組が学年最下位から脱出したら、正式な先生にしてあげる。

近衛 近衛右衛門

「が、……………学年最下位脱出うううー!?……………な、なーんだ!意外と簡単そうだー!」
「そ、そうだな……………」

ネギは簡単そうだとホッとしますが、ウエザーは微妙な表情だ。

(……………言えない!ものすごく難しいなんて言えない!)

「ええつと、今日のHRは期末試験に向けて大・勉強会にします！
今回A組が学年最下位だと、（僕が）とても困ることがあるので皆
さん、頑張りましょう！」

（どうしたんだろうね、急に……？）

（さあ？）

（学園長に何か言われたんじゃない？）

ネギの提案に、何があったのかと話す徐倫たち3人。千雨はあなが
ち間違っではないが。

「はいはい！私にいい考えがありません！」

「あ、はい、桜子さん。」

手を挙げたのは椎名^{しじななへん} 桜子。A組屈指の能天気少女だ。

「ここは「英単語野球拳」がいいと思いまーす！」

「おおー！」「それだー！」

「なっ、ちょっと！皆さん！？」

桜子のぶっ飛んだ提案に、悪ノリするクラス一同。

が、

（なるほど、『野球』を取り入れた勉強法かな……何となく面白そ

うだ。)

「分かりました！やりましょう！」

「こらー！？」

「……………アイツ、『野球拳』って何か知らないでOK出したな…

…」

「だな……………」

「おー、楽しそー！」

「お前も悪ノリするな！」

目を輝かせるスバルに突っ込む二人。なんだかんだで仲がいい三人だ。

結局、勉強らしい事は何一つできなかったそうなの……

「はあ、どうしよう……」

元氣なく、とぼとぼと歩くネギ。どうしたら、学年最下位から脱出できるのだろうか……？さつきから、そればかり考えている。

先ほどの光景を見て、この『課題』がどれだけ困難なものか、はっきりと理解した。あそこまで能天気な人たちとは、思っても見なかった。

ふと、ネギはあることを思い出す。

「……………そうだ！3日間だけとても頭の良くなる『禁断の魔法』があっただ！それをつかえば……………！」

思い出すと、早速杖を取り出して詠唱にかかる。

「副作用で1ヶ月ほど頭が『パー』になるけど……………仕方ない……………ラス・テル マ・スキル……………」

「何をやってんだああああああああああ！！！！」「メメ
タア！」

詠唱しようとしたら、偶然通りかかった明日菜と徐倫に飛び蹴りをお見舞いされた。

「あ……………二人とも……………」

「おめーよー、いい加減魔法に頼るのやめろよな！今までどうだったかは知らないけど……………」

「そもそもバレたら即刻帰国なんでしょ！？使いすぎよへボ魔法使いー！」

「あつ……でも、このまま最^く下位だったら、僕………」

二人にぼろくそに言われ、へこむネギ。明日菜は、そんなネギに、ぼろぼろのノートを渡す。

中には、小テストの答案が挟まっていた。

「あつ……まあまあできてる！まだ悪いけど………」

「こいつだってアレからちよつとはがんばったんだよ。まだ悪いけど………」

「二人してまだ悪いって言うな！！………まったく、マジ………何とかを目指してるのか知らないけどさ、そんな風中途半端な気持ちで先生やってる奴が担任なんて、教えられる生徒だって迷惑よ！」

「……！」

明日菜たちが去っても、なぎはさっきの明日菜の言葉で、動けないでいた……

そして、

「……うん、さすがは明日菜さんだ。安易に魔法に頼ろうなんて、甘い考えだった！……よし！期末テストまで、魔法を封印しよう！」

そういうと、ネギは人目につかない場所に移動する。

トリア・フィーラ・ニガラ・プロミッシュ
ミヒ・リーミタチオーネムト&ルス・ディエス
「誓約の黒い三本の糸よ 我に三日間の制約を！」

呪文を詠唱すると、ネギの右腕に黒い三本の黒い線が現れる。

「よし、これで僕は三日間『ただの人』だ！ さて、明日の授業の準備を……」

『チヨミ?』

ふと、声がして振り向くと、自分の『精霊(スタンド) 仮』がいた。どうやらこのスタンドには『自我』のようなものがあるらしく、時々こうして勝手に発現することがよくある。

「あ、そうか……魔法が使えないから、今は「スタンド使い」って事になるのかな？」

そう言いながら、ネギは寮に向かって歩く。そして思った、この『スタンド』の名前を早く決めなければ、と。

その日の夜

女子寮 大浴場

「ええーっ最下位のクラスは解散〜!?!?」

「うん、あくまで噂なんやけどな……」

大浴場で、木乃香が話した事は、あくまで噂だが、信じられない事だった。しかも、特に悪かった生徒は『留年』どころか『小学生からやり直し』などの噂も立っていた。

「いやさすがにそれはないでしょー！？」

(…いや！昼間ネギも言ってたし……『大変な事』ってこれのことじゃあ……?)

「……さすがにそれはないよな？」

「全く、くだらない噂を真に受けやがって……」

バカレンジャーから離れた場所で、彼女らのやり取りを見ていた徐倫と千雨は呆れていた。

しばらく聞いてみると、『図書館島』にある『読めば頭が良くなる魔法の本』を探しに行く事になったようだ。

「いや、さすがにそんなのは……あ」

「……実在するんだっただな……『魔法』……やれやれ、それで真に受けたのかアスナは……」

恐らく、『魔法の本』とやらも、本当にあってもおかしくないという推測で判断したのだろう……

「やれやれだわ。そういうバカは」

「徐倫………?」

徐倫は湯船から出て、明日菜たちに近づぐ。

「放っておけないのよね！」

「徐倫!!!」

「ジョジョ!!!」

「コマンド司令官!!!」

バカレンジャー、始動!!

「いや、何上の文!!!?」

午後10時

麻帆良学園 図書館島

今、こここの裏手にある秘密の入り口には、バカレンジャーの5人と司令官徐倫、図書館探検部の3人、そして、ネギがいた。

「これが『図書館島』か……」

「でも、大丈夫かな?下の階は危険なトラップがあるから、中等部

部員は立ち入り禁止なんだよ……」

「なんで図書館にそんなものが……?」

「大丈夫、それは『アテ』があるから。」

「へー?」

明日菜のアテ　　ネギは、寝ぼけ眼でついてきていた。明日奈に呼ばれ、近寄るネギ。

(ほらネギ! いざという時は、魔法で守ってね!)

明日菜はネギを頼る。が……

「あの……魔法なら僕封印しましたよ。」

『チユミ。』

のん気に言うネギと、頷くスタンド。

「ええーっ!?!」

明日菜の悲鳴が、閉じていく扉の中に響いた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「 P R I V I L E G E C A R D 」

【出席番号11番】

空条 徐倫

1992年4月7日生まれ

血液型：B型

好きな物：ガトー・ショコラ、ライトノベル、ロープマジック

嫌いな物：親父、アナスイ

所属：文芸部

学年順位：21位タイ

スタンド名：ストーン・フリー

#10 / 学園長からの第一指令：「学年最下位を脱出せよ！」（後書き）

10話です。

承太郎さんミッドへ。これがどう物語に影響するか、お楽しみに。

今回、原作通りの筋道だから、あまり進展はなかったかな？

後、徐倫の誕生日は、徐倫って四月生まれだろうなあって理由で4月7日に。つまり適当です。血液型は承太郎と同じ。

では！

#11 / ウルトラセキュリティ図書館 ? (前書き)

図書館島編バカレンジャーサイドをお送りします!

果たして、魔法の本は見つかるのか!?

#11 / ウルトラセキュリティ図書館 ?

『図書館島』は明治の中頃、学園創立と共に建設された世界でも最大規模の巨大図書館！

二度の大戦中、戦火を避けるべく、世界各地から様々な貴重書が集められたここは、蔵書の増加に伴い、『地下』に向かって増改築が繰り返され、現在ではその全貌を知るものはいない！

「　　そこでこれを調査するため、麻帆良大学の提唱で発足したのが、私たち、『麻帆良学園図書館探検部』なのです！」

「中・高・大合同サークルなんよ。」

「「「うわーっ!?!」」」

夕映に解説されながら一同がたどり着いた扉を開けると、目の前には本、本、本　　見渡す限りの本棚と、それに収まった大量の本だった。

間一髪で徐倫が矢を掴んだから良かったが、今度は何が起こるか分からない……………全員の気が引き締まった。

「ええ！？読めば頭の良くなる魔法の本！！？」

「そーらしーえー。」

「手伝ってネギくーいん。」

ようやく自分が置かれている状況を聞いたネギは、明日菜と徐倫の元に駆け寄る。

（あ、明日菜さん、僕に「魔法に頼るな」ってあんなに言ってたのに……………！空条さんも……………！）
「「うっ……………」」

言葉に詰まる二人。明日菜は謝るポーズをとって、

「ゴメン……………でも、今回は『緊急事態』だし、許してよ……………」

「学年最下位だと、大変なことになるらしいしな。」

『大変なこと』と聞いて、自分の「最終課題」のことであると気付いたネギは、少しウルツとした。実際は違うのだが……………

「うひゃー、広っ!？」

「こんな本あってどうするんだよ…?」

ある部屋に着いたネギたちは、無駄に広い部屋に大量の本を見て、
そう感想を漏らした。

「へー、「本棚の上」を歩くんですかー？」

「何考えて作ったんやるね、ホント。」

「ここ、結構高いよー……落ちたら怪我じゃすまないんじゃ……」

「そこ気をつけてです。」

夕映が注意をするのと、

バコンッ

まき絵のいる「本棚と本棚の間の足場」が開いたのは、ほぼ同時だ
った……

「えっ……キャー……!」

「まき絵!?!？」

「まき絵さー……ん?」

落ちていくまき絵を見て、驚くネギたちだが……

「えいつ」
シユルルルル…ビソツ

まき絵は、袖の下に装備していた「新体操のリボン」を振るうと、リボンはインディー・ジョーンズよろしく、天井の「ハリ」に巻きついた！

「あわわわわ~~~~、びつくりしたー！ー」

キリキリとリボンを巻き取り、本棚の上まで上ってくるまき絵。ふと、ネギはあることに気付く。

(あの、空条さん、もしかしてまき絵さんのあの「リボン」って…
…)
(…ああ、お察しの通り、『グロウン・キッド』が取り付いている…
…)

そう、あのリボンは「布製」だ。それなら、あんな芸当ができてもおかしくはない。有効に使っているのか、無駄な使い方なのか…
ネギと「スタンド」には分からなかった。

2時間半後

魔法の使えないネギをかばいながら、何とか目的地までたどり着い

たネギたちバカレンジャー！。

そこは、今まで通って来た道と比べると、『神聖』な場所に思えた。上座にあたるところは台になっており、左右には3m以上はある「石像」が、中央の『本』を守るようにたっていた。

「つきました！ここが『魔法の本の安置室』……………！！」

「……………なんでこんな場所が学校の地下に……………？」

「今は深く考えないでおこうな……………」

驚きを通り越して呆れている明日菜と徐倫。ネギは、石像が守っている本を見て、それが何かに気づいた。

「あつ……………あれは！？伝説の『メルキセデクの書』！？何であれがこんな所につ！！??？」

「え？つて事は本物！？」

「ええ！！確かにあれなら、ちょっと頭を良くするくらい簡単に！！」

「ネギ君詳しいなあー。」

ネギの言葉に、ハシャギ出すバカレンジャー。そして、我先にと本へ向かい走り出した。

「あ、待って下さい！あれだけ貴重な魔法書です！絶対毘があります！」

ネギが注意するも、台の前にある橋が左右に開き、全員そこへ落ち

てしまう。

ズーン

「うわっ!?!」

「キヤアッ!?!」

だが、橋の下には、また『足場』があつたため、打ち身程度ですんだ。足場には、64この円と、文字が描かれていた。
そう、これは

「……………ツイスターゲーム？」

そう、ツイスターゲームだ。

全員が疑問に思っていると、本を守るように立っていた石像が『動き出した』!

『ふおおおおお、この本が欲しくば、わしの質問に答えるのじゃー!。』

「うっ、動いたーっ!?!」

(「っ、動く石像!?!それに、この声って…!?!」)

『では第一問、“difficult”の日本語訳は?』

「ええー!?!」
「何それえー!?!」

ゴーレムの質問、というか問題に文句を言うバカレンジャー一同。
だが、ネギが全員に言った。

「みなさん、落ち着いて下さい!ちゃんと問題に答えれば、畏は解けるはずです!落ち着いて“difficult”の訳をツイスタゲームの要領で踏むんです!」

「ええーっ!?そんなこと言っても!?!」

「デ、『ディフィコルト』って…何だっけ!?!」

だが、相手は所詮バカレンジャー。英単語訳が簡単にできる訳がなかった……

「ええつとだなあ……」

『答えを教えたら失格じゃぞー。』

「い……“easy”の反対です!」

「ええつと、簡単じゃない!?!」

「そ、そうだ!えーと」む」

「そうそう!」

「『!?!』『い』『ね!」

『むずい』……正解じゃ。』

「ヤッター!」「本ゲッター!」

正解に喜び一同。だが、彼女らは忘れていた。さっきゴーレムは『第一問』と言っていたことに。

『第二問“cut”』
「「「「「つてまだあるんかい!?!」」」」」

その後も、

『第七問“remember”』
「あ、これわかるよ!」お「…」
「なんかキツいわよこれ…」も「」

バカレンジャーたちは

『第十一問“baseball”』
「つづく」
「や」
「お…」お「お」
「」

問題を解き続けた。

『第十九問“massacre”』

「いや、それ中学で習わないだろ!！」

「どこの『灰の塔』!?」

massacre: 皆殺し

高校でも習いませんでした。

その結果、めっちゃくちゃキツイ体制になったが、全員耐えた。

『では最終問題!!“dish”!』

「あ!分かった!『お皿』ね!『お』!」

夕映が『お』を踏む。

「『お』!」

楓が『さ』を踏む。そして、

「『さ』!」

まき絵と明日菜が『る』を踏んだ。

.....『る』？

「.....おれん？」

『残念ー！』
バガアッ

ゴーレムが、手に持ったハンマーを振り下ろし、ツイスターゲームごとネギたちを落とした。

「イヤアアアア」

「アスナのおさるー！」

「……やれやれ、やはりこうなるのか……」

「何でジヨジヨは冷静アルかあー!?」

各々がリアクションを取りながら、下へ、下へと落ちていった……

t o b e c o n t i n u e d . . .

#11/ウルトラセキュリティ図書館 ? (後書き)

11話です。

今回はスバルの出番なし(笑)その代わりに、次回活躍させますので
(^| ^ ;)

massacreは、ジョジョ第三部から。灰の塔は、第二の刺客
にしては気持ち悪い上に外道でしたから、結構印象強かったです。

では！

#12/ウルトラセキュリティ図書館 ? (前書き)

三日連続投稿！これにはオレもびっくりだ！！(デネブ?)

今回からしばらく、スバルと千雨サイドです。

#12 / ウルトラセキユリテイ図書館 ?

翌朝

期末試験まで後2日

2年A組

教室に入ってきたスバルは、隣に徐倫がいないことに気づいた。

「おはよー。……あれ？長谷川さん、空条さんは？」

「それが、昨日『図書館島』行っただけ、帰ってこないんだよ。

……まあ、あいつなら大丈夫だろうけど……。」

特に心配していない様子の子の千雨。彼女と、彼女の『ストーン・フリー』を信頼しているからだろうか。

そんな時、雪広 あやかのかき声は聞こえた。

「何ですって！？A組が最下位脱出しないとネギ先生が『クビ』にいいー！？どーしてそんな大事なこと言わなかったんですの裕奈さん！？」

見てみると、あやかが裕奈に掴みかかっていた。ふと、千雨は昨日の事を思い出した。

「……なるほど、『大変なこと』ってこれが……。」

「ね、ねえ、ネギ君がクビってことは、ネギ君も……！？」

「まあ、バカレンジャーがいるとはいえ、学年トップが三人もいるし大じ」

大丈夫だろと言いかけたが、突然ドアが勢い良く開いたため、途中で途切れてしまう。

「みんなーッ大変だよーッ！！」

「ね、ネギ先生とバカレンジャー達が「行方不明」に……………！！！」

「……………すまんナカジマ……………やっぱダメかもしれん……………」
「ええ〜〜ッ!?!？」

#12ノウルトラセキュリティ図書館 ?

午後7時40分

図書館島 橋の中ほど

「……で、何でこうなるんだよ!?!?」

私服 Tシャツにズボン、薄手のジャケットを着た千雨は、スバルに連れられてここまで来ていた。後ろからは、困った様子のエリオとキヤロ、フリードもついてくる。

「だーかーらー!ネギ君たち助けるためって言ったじゃん!」

「バカッ!アイツ等は図書館島の地下にいるんだぞ!?!」

その? どこにいるか分からない。

その? 図書館島には、どんな危険があるか分からない。

その? おまけに、道も分からない。

見る!分からないことだらけじゃないかッ!唯一解決してるのはその?だけだぞ!!--」

「つまり、『どんな危険でも大丈夫』だと?」

「よけいなこと言っちなちびっ子ッ!!--」

そう言っている間にも、千雨たちは図書館島の入り口まで来てしまった。

「で、どうやって行くの?」

「ちったあ『考えてから』行動しやがれッ!つたく………まあ、その?と?の『解決策』は、もう呼んどいてあるがな。」

「」「え?」「」

「……………遅かったなお前ら。待ちくたびれたぞ。」
「あ、な、ナカジマさんに長谷川さん…………と、後ろの子たちは……………?」

図書館島の入り口前にいたのは、ウェザーとのか、そして…

「徐倫がピンチなんだってな!!」

サムズアップするアナスイだった。

「……………^{アイツ}アナスイは呼んでないぞ……………頼りになるっちゃあなるが……………」

「そ、そう…………で、でも、何で二人に…………?」

「この二人は　まあ、アナスイもだが　『図書館探検部』な上に、『スタンド使い』だからだ。」

「……………!?!?!?」

「え、…ええつとー、ナカジマさんも、スタンドに近い「能力」を持つてるって聞きましたかー？」

「まあ、ある程度期待はするぞ。」

「あ、うん…」

（二人には『魔法』のこと話してないんですか？）

（ああ、いきなり話しても、信じないだろうし…）

（超能力は信じるのに？）

スバルと話すウェザー達から下がり、千雨とエリオ達は小声で話していた。魔法の事は、後でゆっくりと話した方が良さそうだ。

「よし、ここらで、『搜索手段』を話すぞ！宮崎。」

「はっ、はい。イツ、『イノセント・スターター』！」

千雨に呼ばれたのどかは、自身のスタンドを発現させた。

現れたのは、人の女性とウミガメを組み合わせたような、機械的な『蒼い』スタンドだ。

頭にはバイザーのようなものが上げられており、耳に当たる部分はアンテナのように伸びている。

肩には、二の腕までを包むような亀甲型の肩アーマーがつけられ、左手には亀甲型の箱のようなものがあり、先端部分は、まるで換気扇やエアコンの口のようなシャッターになっていた。

「こいつの名は『イノセント・スターター』。つい一週間くらい前

に『矢』に射抜かれて発現した。能力は、探査機になる『子亀』を
発射することだ。」

「探査機？」

スバルの疑問に答えたかのように、イノセント・スターターの左手
のシャツターが開き、中から何か飛び出した。

見ると、甲羅が片眼鏡モノクルみたいになった「ウミガメ」だった。

「ええつとー、こ、この「子亀」のレンズに映ったものや、聞いた
事を、私が見たり聞いたりできるんですー。あ、後、子亀の位置を
把握できますー。」

少しおどおどしながらも、自分のスタンドの説明をするのどか
ふと、スバルはあることに気づいた。

「もしかして、ネギ君たちにも!？」

「は、はい。『子亀』を一匹付けましたー。」

「そうか! その位置をつかめば!」

「救出『可能』って訳ですね!」

「ああ、おまけに、探検部の中等部顧問のウエザー先生が『地図』
を持ってきてくれた! これでその? と? は『解決した!』行くぞ!」
「……何故お前が仕切る?」

ウエザーが千雨につっこみを入れつつ、一同は図書館島へ入った。

数十分後

図書館島 地下5階 第78閲覧室

図書館島内部を歩いていた一同は、ふと、視線を感じていた。

(……………ねえ、長谷川さん……)

(ああ、十中八九、『敵スタンド使い』だな……)

だが、周りには人影がない。

(……………任せろ。『ウエザー・リポート』！)

ウエザーの背後に「水蒸気」が集まり、人の形になった。

角が生えたような頭に、マスクをかぶったような外見。体のあちこちからは、『雲』のようなものが吹き出していた。

「先生のスタンドは『天候を操る』　　ウエザー・リポート！」

千雨が言うと同時に、周囲に『雨』が十数秒間降った。

「……………急に雨が降ったから、驚いてのぞき込んだな。」
見ると、水たまりに『男が』映っていた。

雨に驚いた男が気づくと、追跡対象はすでにいなかった。慌てた男は、対象たちを追うことにした。

カエルのような体制をとり、ヒタヒタと奇妙な歩き方のため少し遅いが、対象のうちの三人　青い短髪の少女と、眼鏡の少女と、変な帽子の男　に追いついた。

追いついた男は、青い短髪の少女に、ツバを吐きつけた。

しかし、角を曲がった際に、再び見失ってしまった。

「……………何とか撒いたみたいだな。」
「何だったのあいつ…？変な歩き方だったけど……………」

千雨たちは、本棚の『上』から、男が立ち去るのを確認して、降りた。

アナスイにエリオ達を任せて二手に分かれた彼女達は、スバルの固有魔法『ウイングロード』を使い、本棚の上に隠れたのだ。

「まあ、深追いは禁物だな。奴に立ち向かうのは、アイツの力を探つてからだ。」

「ああ、だが、本来の目的も忘れてはいけない。まずはアナスイ達と」

そこでウエザーは、スバルの姿がないことに気づいた。

「……………ナカジマ？」
「まだ降りてきてないのか？」

恐らく、本棚の死角にいるだろうと考える千雨。だが、スバルは今、降りるところではなかった。

「じつ………これはツーン！」

スバルは『宙に浮いていた』！いや、スバルだけではない。周囲にあった『本』も、一緒に浮いている！

スバルが本棚に捕まろうと手を伸ばすも、バランスが取れずに、その場で回ってしまう。

「わっ、わああ！な！これは………私が触れたものが………どんどん浮き上がって来ている！私自身も！これが、あいつの能力！？」

ふと、突然弾丸のようなものが飛んできたため、スバルは防御するが、防御した反動で、さらに回ってしまう！

そして、スバルは気づいた。これは『浮き上がっているんじゃない』
『い』！

「わ、私は今！漂っているんだ！上もしたもなくなっている！私の周りから！私の触れるものから『重力がなくなっている』という事ッ！これはッ！『無重力』だ！」

ふと、ヒタヒタという足音が聞こえ、そちらを向くと、さっきの男が、こちらまで来ていた。

円柱のような奇妙なマスクにゴーグル、ツナギを着て、何故か裸足に足首に靴を縛り付けた男だ。

男は、足に力を込めて、スバルまで一直線に『跳びかかった』！！

t o b e c o n t i n u e d . . .

「 P R I V I L E G E C A R D 」

> i 2 5 7 8 — 4 0 6 <

スタンド名 イノセント・スターター

本体 宮崎 のどか

親亀

破壊力 B スピード B 射程距離 C

持続力 C 精密動作性 C 成長性 E

子亀

破壊力 E スピード A 射程距離 A

持続力 A 精密動作性 E 成長性 C

能力 スタンド本体である「親亀」の左手から、偵察機の「子亀」を発射する。

「子亀」の背中のレンズが見たものや聞いた音を、本体が見たり聞いたりできる。また、「子亀」の位置を把握することもできるため、探知機としても使える。

子亀のダメージは本体へのダメージではない。

#12/ウルトラセキュリティ図書館 ? (後書き)

12話です。

・のどかのスタンドお披露目。のどかはサポート系ですが、自分でも戦えるなど、若干変則的です。スタンド名は、無印のOPから。デザインイメージは、電王ロッドフォームを女性的にした感じ。

・ラング・ラングラー登場。ラングラーは図書館島だと絵が栄えるなあと思ひまして。

・次回は、ラング・ラングラー戦をお届けします。

では！

#13 / ウルトラセキュリティ図書館 ? (前書き)

謎の男に襲われたスバルたち!

図書館島の戦いが、今始まる!!

#13 / ウルトラセキュリティ図書館 ?

図書館島 第62閲覧室 日本の文学エリア

「さてと、そろそろあいつ等と合流するぞ。」

アナスイが、後ろに着いてくる三人に話しかけると、のどかは『インセント・スターター』のバイザーを下げ、『索的モード』に切り替えた。千雨に付けた「子亀」を探知するためだ。

のどかの『前髪』には、リーダーが映し出され、千雨たちの位置を表示する。今の自分たちから、100mくらい離れているようだ。

「ルートは外れてないみたいだな…よし、そっちに向かうぞ！」

「は、はい………えっ？」

「どうしました？」

のどかが何か感じたらしく、エリオは聞いてみた。

「あっ、あの……長谷川さんが」

「あー宮崎、聞こえるか？いや、私は聞けないから、一方的に話すぞ……」

子亀を掴んで、トランシーバーのように話しかける千雨。

「しばらく私らに『近づくな』！ナカジマがヤバい状況にあるらしい……」

そういう千雨とウエザーの視線の先では、

天井まで届くような巨大な『本棚』が

『浮かんでいた』……

#13 / ウルトラセキュリティ図書館 ?

「くっ、リボルバーシュート!!」

カードリッジを一発消費し、飛び掛ってくる男に衝撃波を放つスバル。男はスタンドの腕　筋肉質で、手首に球体が付いているで防御するが、無重力下のため、後ろに吹っ飛んでしまう。撃ったスバルも同様で、本棚に叩きつけられてしまう。

「ちい、てめえはもう始末したが、今ので下の二人に気付かれたみたいだな……」

「？」

男の言うことが分からないスバルだが、ふと、自分の背後に気配を感じた。振り向くと、いつの間にかウエザーと千雨が『立っていた』。

「ふ、二人とも！？いつの間に!!??」

だが、二人は答えない。男がスタンドの全身を出したからだ。

まるで月面や火星のような無機質な肌に、ロケットのような模様が入った胴体。顔は円柱の一部をカットしたような形で、口に当たる部分に呼吸用の穴が数個あいており、目の部分にはベルトが巻かれている。

そして、先ほどの腕の球体が『回転』していた。

「『ジャンピン・ジャック・フラッシュ』!」

「二人とも！こいつの能力は「重力」をなくす！重力がない場所で

どんな攻撃や動きをしていいか分からない。それに、やつの飛ばすものに触れてはいけない！『無重力に』される！」
「なるほど……」メルスイ・ポーク「ありがとな」！」

小太刀を構え、何故かフランス語で感謝する千雨。

「『無重力』……おまえらもスタンド使いなんだろうが、それがどんなことを意味するのか……お前らに見ることができかな？」

男が言い終わると、回転している球体から、何かが「発射」され、ウエザーに迫る！

だが！

グオオオオオオオオオ

「「！！！？」「」

ウエザーの周囲に「雲」が発生し、弾丸の軌道を『逸らした』！

「飛ばしたのは……ガラクタの部品か……」

「く……空気の層で弾の軌道を……！？」

「ああ、そして、敵の『攻撃手段』が分かった！『遠心力』だ！『重さ』がないというなら、回転する力でどこまでも加速できる！」

今のをみて、即座に分析する千雨。

男は、ウエザーに近づき、戦闘体制をとる。そして！

「『ウエザー・リポート』！！」

「『ジャンピン・ジャック・フラッシュ』ッ！！」

二人が、同時に拳を振るう！だが、男の腕がウエザーの雲に突っ込んだ瞬間、『炎上した』！！

「こ、この炎はッ！？『空気抵抗摩擦』か！マズイ！どんどん燃え移ってくる！『無重力解除』だッ！！」

ドグシャア

男が周囲の無重力を解除すると、浮かんでいたハードカバーの本が十数冊、一斉にウエザーに降り注いだ！本の落下のダメージで、ウエザーは倒れ込んでしまう。男は、腕を振り、腕の炎を消すと、ウエザーに狙いを定める。

「とどめだッ！！」

そして、男は弾丸を放とうとすると

ドグオオオン

「「「!!!??」」」

男の両腕が『爆発』した!

だが、爆発の原因はすぐに分かった。男に向かって、『子亀』が飛んできたからだ!!

ドガツドガガツ

「何っ!?!くそッ!」

「あれって、『宮崎さんの』……?」

「ああ、『イノセント・スター』の『子亀』だ!多分、私に付けた子亀で狙いを定めて!ほかの子亀を『ミサイル』みたいにあいつに当てたんだ!」

そう言う千雨の胸では、『子亀』の背中の中の片眼鏡がキラリと光っている。いつの間にか千雨の背中から移動したようだ。

「チイッ」

男は派手に舌打ちすると、弾丸を推進材に上の階に飛んだ。

「逃げた!」

「マズいぞ…あいつが今飛び込んだ通路は……!」

シリリリリリリリ

ウエザーが言い終わる前に、非常ベルがけたたましく鳴り響いた。

「野郎……!『装甲防火扉』を閉めやがったッ!」

「『何で装甲防火扉が図書館にッ!?!』」

千雨とスバルがつつこむが、今はそんな場合ではない。

『装甲防火扉』という事は、そう簡単に開くようにはできてないはずだ。スバルの力なら壊せるかもしれないが、今スバルは無重力の支配下にあるため、力を出せない状況だ。

どうしようかとスバルが悩んでいると、

ガツシイ

「!？」

「確か、お前が触れるものは、全て『無重力』にさせられる……だったな。」

ウエザーと千雨が、スバルを『掴んだ』。もちろん、二人も無重力になる。

すると、足元に『大気』が発生し、それを『推進材』に、三人は閉じていく装甲防火扉に突っ込んだ！

閉じていくギリギリだったため、男がいると思われる部屋へ到着した際、スバルのハチマキが扉に挟まってしまう。

着いたのは、ほかの閲覧室に比べると小さい部屋だった。どちらかと言えば、普通の学校の図書室のような場所で、本棚と机がいくつもあり、壁一面本棚になっている。

入り口は四方の壁に一つずつあるが、どれも堅く閉ざされている。

「と…とりあえず、閉じこめられなかったけど…二人も『無重力』の支配を…」

ハチマキを外しながら、二人の心配をするスバル。

「…まあ、いずれあいつは私らも無重力にするつもりだっただろうよ。」

「それに、ここは非常時のシェルターになるようになっていている部屋だ。そう簡単に扉を破ることはできない。逆に閉じこめられたのはあいつの方になる。」

ウエザーが説明するが、スバルは『別のこと』が気になった。

「一つ……さつきから困ったことがあるの……ギリギリで防火扉を通り抜けて、さつきの敵が今……ここどこかにいる……こんな状況でちょっと言いにくいんだけど……個人的な事で……でも、結構切羽詰まったことだから困って……緊急に解決しないと……その……かなりマズくて……」

スバルが切羽詰まったように言うので、何事かと見る二人。

「私に…なぜ急に起こったかわからないんだけど……えと、その……どこの誰だつて起こりうると思う！聖王だつて絶対に自分ではコントロールできないはず！」

「いや、さつきから何の話を……！　な、なるほど！分かったぞナカジマ！私も今『そうだった』！」

どうやら、千雨にも同様の問題が発生したらしい……

「?…どういう事だ?」

「だからさあ、『大きい方』と『小さい方』があつて、「シ」で始まる下半身関係の言葉!もう漏らしちゃうよ!」

「いや、『大きい方』じゃなくて本当良かったって思うよ!きつと無重力と因果関係があるはずだ…すぐに解決しないと別な意味でかなり最悪!」

二人の言葉で、ようやくウエザーは言いたいことが分かったようだ。つまり、二人は

「『小便』がしたいのか?」

「顔近づけて言うなや…すげーマジなんだよ…ガマンできない…どうしていいか分からない…」

「…その辺でするしかないな。」

「ううゝ相談しなきゃ良かった…」

ウエザーに相談した事を後悔する二人…

何というか、デリカシーがかけていた。

「オレはもう済ませた。今そこの空中でな。」

「え?」

ウエザーの爆弾発言に、信じられないという顔の二人。

「『無重力』になると、体内の血液は急に頭部にたくさん集まってくる。普段は『重力』があるから体の下のほうにある血液がな。」

解説するウエザーがスバルの額を指で触ると、ブヨブヨという触感が伝わった。

「触ってみる…額の皮膚と骨の間が血液でブヨブヨに膨れている…
…『ムーン・フェイス』ってやつだ。だが、頭部に血液が行き過ぎると『危険だ』というので、君らの体内の腎臓は自動的に血の量を減らそうと活発に働き始める。それで利尿作用が激しく起こってるんだ。小便で塩分を出して、血を薄くさせようとな。確かにどうしようもない。空中へしる。オレはもうその影でした。」
「おい！何でこういうことになったかは分かったが、今どこで何をしたって！！？」
「心配するな…雲が吸い取ってくれるよ。君らがパンツを下げるなら……」

千雨の言葉を見無視して『雲』を出すウエザー。スバルと千雨は顔を見合わせて、仕方なく『することにした……』

「うおおっ！ちよっ、ちよっとお！空中に浮いてるこれなにイイ
~~~~~！？」  
「こぼれてる！雲からこぼれてるってこれええ~~~~~」  
「……………」

後ろから声がするが、見ないようにするウエザー。デリカシーがあるのかなのか……………

シユン！シユン！シユン！  
「……………！？」

ふと、二人は見た。空中に浮く「水滴」が、壁の溝に『吸い込まれ

た』!!!?」

だが、変化はそれだけではなかった。急に鼻血が出始め、溝に吸い込まれていった!

「こ!これは………いたい………!?!?」

「か………壁がおかしい………溝に………鼻血が吸い込まれていく!」

「オレの………さっきの怪我也だ………血が空中にどンドン吹き出していく………」

「『!!!』」

見ると、確かに血がどンドン『溝』に吸い込まれている。それに、スバルは感じた。さっきから、なんだか息苦しい!

そのとき、スバルたちに向かって、弾丸が飛んできた!スバルはあわてて防御するが、腕にかすってしまふ。すると、その『かすり傷』からも、血が吹き出していく!?

「き………『気圧』が下がっているッ!」

スバルは気付いた。

『自分が触ったものは全て無重力になる』………ならば、自分は『何に』触った?扉や床………壁にも触った。そして、さっきから触っているもの………「空気」!!!」

「わ………私、空気にずっと触れ続けている………空気は重力があるから、私の周囲にずっとある………でも、それが無重力になったら………『どこへ行くの』?壁も………床も無重力になっている!『無重力』に囲まれているとしたら………」

「周りの空気は、どう入行ってしまうの……？」

スバルの悲痛な叫びが部屋中にこだまするが、その問いに答えるものはない。

その様子を、男はじっと、影から見ていた……………

t o b e c o n t i n u e d . . . .

### #13 / ウルトラセキリティ図書館 ? (後書き)

13話です。

・基本的に「サヴェジ・ガーデン作戦」のストーリーを、図書館島に置き換えただけです…

・ムーンフェイスのくだりは、本当はティアナにやらせたかった(笑)

・イノセント・スターターの応用攻撃「小亀ミサイル」。『小亀』のダメージは本体へのダメージではないので、そこに注目した攻撃です。

・次回は、ラング・ラングラー戦の決着です。

では！

#14 / ウルトラセキュリティ図書館 ? (前書き)

無重力の支配下に置かれたスバルたち三人！  
果たして打開策は！？



## #14 / ウルトラセキュリティ図書館 ?

千雨の母「長谷川 百香<sup>もてか</sup>」は二十年前、ニューヨークに住む『リサ  
リサ』という女性の元で、「波紋」と呼ばれる力の修行をしており、  
1990年に彼女の息子 ジョセフ・ジョースターの紹介で、あ  
る「男性」と知り合った。

彼と何度か食事をしたり、彼の家へ遊びにいたりしているうちに、  
お互い惹かれ合い、1992年に結婚。翌年には千雨を出産した。

だが、千雨は父親と遊んだ記憶などは、ほとんどない。彼はどうい  
う訳か、家をよく空けていたからだ。

妻にも訳を言わないため、たまに帰れば口げんかが絶えない。そん  
な関係が長く続き、千雨が四歳の時、父親は『音信不通』となった。

その内、千雨が父親の顔を忘れてしまった頃、2001年の春、イ  
タリアで父親が『変死体』となって見つかった。

父は、心臓付近に大きな『穴』を開け、死んでいたそうだ。

葬儀は、彼の祖国で、親族と、親しい友人のみで行われた。

その中には、母の師匠とそのひ孫、

そしてその娘もいた。

これが、長谷川 千雨と空条 徐倫の出会いであった。

千雨は今になって思う。

「あの出会いが、私のスタンド使いとしての『災難』の始まりだった」と……………

#14 / ウルトラセキュリティ図書館 ?

そして今、千雨に「災難」がまた降り注いでいた…

「ふ……………ふさがないと！！隙間をツ！目張りしないと！！このままでは窒息してしまうツ！」

隙間に浮いてきた本やダンボールを当てながら、スバルは叫んだ。栓を抜いた浴槽の水のように、空気が隙間へと流れていくためだ。

「いや、違うぞナカジマ…水の中じゃないんだ…窒息じゃない。」

ウエザーは、冷静にスバルへ言う。

「心配しないといけないのは、その前に体内の血液が沸騰して死ぬことだ…気圧がどんどん低くなると、室温なのに血液は熱湯のように沸騰する…無重力で真空なら、人間の体は窒息より前に、20秒で血液はカラカラに『干からびて』しまつらしい……」

ウエザーが話す中、弾丸が飛んできた。

スバルはシールドで、千雨はスタンドの『小太刀』でそれぞれはじき返すが、はじいた弾丸が、目張りしていた本やダンボールに着弾してしまい、空気が流れる量が増えてしまう！

「うあああつ！！」

「弾丸を……補給するかな……」

男は、持っていた箱からガラクタを腕の球体へ入れた。彼はすでに、勝利を確信していた……

「ナカジマ！扉から離れる！ねらい撃ちにされる…とにかく、どこかに身を隠すんだ！」

千雨が、スバルに向かって叫ぶ。

男の弾丸は正確に自分たちを狙い撃つてくる。扉近くの広い場所では、いいのだ。

「でッ…でも！空気を止めないとッ！はー鼻血がこんなにッ！」

「……『ウエザー・リポート』！」

「！」「」

ウエザーがスタンド名を静かに言うと同時に、三人の体を『雲』が包み込んだ……………

「！」「」

弾丸を補給して、撃とうとした男だが、三人の姿が見当たらない。どこかに隠れたのだろうか……………？いや、有り得ない。すでにあの傷だ。持って後1分、いや、30秒で死ぬはずだ。ならば、どうやって、そしてどこに行ったのか……………？

「ハアー、ハアー……」

「あまり大きく呼吸するな……この部屋の残り少ない空気を取りあえず集めて、体の周りだけ『雲』で囲んで気圧を高めただけだ……部屋の中は真空に近く、この「雲」の量しかない……。」

近くの本棚の陰に隠れ、千雨とスバルに今の状況を説明するウエザ

今、三人の体は『雲』に囲まれている。しかも、それは「服」の形をしていた。

たとえるならこれは

「く……『雲のう……宇宙服』？これって……！！」

「で……でも、どの程度『呼吸』もつんだ？これ？」

千雨の質問に、ウエザーは渋い顔をする。

「……答えたくない質問だが、2分程度つてところか……ひん死の『雲のスーツ』だ……」

「……その間に敵に近づいてあいつを倒さなきゃ、今度は確実に真空に放り出されるってこと？」

スバルは、周りを見るウエザーに聞く。鼻血は止まったようだ。

「そういう事だ。だが、くそ……ヤツもさっきの場所にいないぞ……隠

れられた……」

「ちっ、探さないと、このままじゃヤツの攻撃は『完成』しちまうな……」

千雨とウエザーが話す。

だが、スバルは「ある事」に気づいた。

「ねえ、鼻血が止まった今、ひとつ気になる事があるんだけど。」

「……何だ？ヤツを探さなきゃあならないから、手短かに話せ。空気ももたない。」

スバルは、ある一点を指さす。そこには、『角川文庫』と書かれたダンボールが『山積み』になっていた。

そして、千雨とウエザーも気づいた。

『山積み』？『無重力』下で??

「私はこの部屋の扉と壁と床に触った…それで、部屋中が『無重力』になっていろんな物が浮き上がっている。空気もいすも本もゴミ箱も……でも、何であそこのダンボールは浮き上がらずに床に『ひつついて』いるの？そしてその向こうの本棚の本…ガムが底にひつついてるわけ？」

それにあの敵…あいつはどうやってこの真空で『呼吸』をしてた？ヤツの血液だって真空中ではブクブクと沸騰するんじゃないの？「……！そうかッ！あれは『射程距離』だッ！この「無重力」には射

程距離がある！部屋全部じゃあないんだ！！」

「そう、私が今触っているこの本棚から20m弱！『無重力』はそこまで！あのダンボール箱の所は今…普通の『重力のある世界』！空気は私の周りからだけどんどん出ていき、無重力エリアの中に入ってくることはない。見えないけれど、囲まれているんだ…半径20mの外！敵も無重力の『外』だから今、呼吸を普通にできている！」

「……あそこまで行けば、真空が終わり、気圧も普通の空気があるという訳か……ならば！」

ウエザーが納得すると、千雨に向き直る。

「長谷川！お前のスタンドを『全開』にするんだ！お前の能力なら、『雲のスーツ』が飛んでなくなる前にヤツを倒せる！！」

「スタンドを……全開に？」

「……………」

ウエザーの言うことが分からないスバル。だが、千雨は『はあ』とため息をつく、すくつと立つ仕草をする。

「仕方ねえ、『緊急事態』だからな……だがなナカジマ！これだけは最初に言うておく！これから見るものは、『誰にも言うな』！いいいな！？」

「う……うん………？」

スバルに忠告した千雨は、自分のスタンドの『全身』を出す

シユン

「……………」

自分の背後を何か動いた気がして、男は振り向いたが、何もいない。

だが、直ぐに気のせいだと考えた。

自分の『ジャンピン・ジャック・フラッシュ』は無敵だ！無重力の外には、自分以外誰もこれない！

そう考えた時、

コオオオオオオオオオ

「！！！？？」

奇妙な『呼吸音』が、背後から聞こえた！



振り向いた男が見たのは

「て…テメエ、何だよそのスタンドはッ!?」

「へっ悪いな、企業秘密だ!」

千雨は剣を構えて、壁を蹴る!

「双燕天翔流仙道剣術 八大奥義が一つッ!」

そして、すれ違い様に男を何度も『斬った!』!!

「疾風月華!!」

かつて、「柱の男」に敗れた『波紋の一族』の一部が、日本に逃げ延びた。

彼らは、チベットやヴェネツィアほどではないが、日本で『波紋』の一派を作った。

時が経ち室町時代、『波紋』と『剣術』を組み合わせた『仙道剣術』を生み出した者が現れ、徳川に仕えた。

後にこの剣術は時代の裏で活躍し続け、幕府に迫る妖怪の類を討伐したという……

その内の一つが、裏社会で京都の『神鳴流』と並び、『江戸の隠し刀』と謳われた流派、その名も『双燕天翔流仙道剣術』である。

(メツシーナ著「波紋世界史」 民明書房刊 税込み 1850Y  
EN)

「……と、どうやら無重力も終わりみたいだな！」

急に自分の体を「重く」感じ、敵の『再起不能』を確信した千雨。だが、

ドガガガアッ

「ん？」

「は……長谷川さん……無重力が解除されて助かったけどさあ……」

「……いきなり解除させないでくれ……」

「1」……「1」めん。」

ただでさえダメージがひどいのに、無重力解除で本が降り注ぎ、さらにダメージを負った二人がいた……

「こいつの財布に『免許証』があつたぜ。名前は『ラング・ラングラー』……国籍はアメリカか……」

財布から男　ラング・ラングラーの身元を暴いたアナスイ。直ぐ横では、ラングラーをエリオが縛り、のどかとキャロは、スバルたちの手当をしていた。

ラングラーを千雨が倒した後、アナスイ達が『装甲防火扉』を開き、どうにか脱出できたスバルたち。今はネギ達を探す前に、ラングラーの処置をどうするかを考えていた。そこでウエザーは、自分達でラングラーを運び、残りでネギ達を探すことを提案した。

「こいつは六課に引き渡して、誰の差し金か吐かせる。こいつらを頼めるか？アナスイ。」

「いいぜ。そつちこそ、任せたぞ。」

ラングラーを運ぶのはウエザー、キャロ、のどかの三人、残りはネギを捜索することになった。

「よしっ！早速行くぞッ！！」

意気込むアナスイに、手当を終えた二人とエリオが続く。

が、

カチッ

「「「「」」」」……「カチッ」？」「」「」

アナスイの足元から、嫌な音が聞こえ、

バクンッ

床に『穴』が開いた………

「ウソオオオオオオ!!??」  
「アナスイテムエエエエエエ!!」

四人の叫び声は、閉じた穴の蓋により、聞こえなくなった……

「だ……大丈夫ですかね?皆さん……」  
「分からん……」  
「ええー!?」

ラング・ラングラー      スタンド名:ジャンピン・ジャック・フラ  
ツシュ      再起不能

t o b e c o n t i n u e d . . .

#14 / ウルトラセキュリティ図書館 ? (後書き)

14話です。

・千雨の過去をちらりと書いてみました。千雨の父親とスタンドは、いずれちゃんと書きます。

父親のヒントはジョセフの紹介と、千雨の前回のセリフ。

・ラング・ラングラー再起不能。ちよつとあっけなかつたかな？

・後二回位で、図書館島編も終わりです。

では！

#15ノウルトラセキュリティ図書館 ? (前書き)

トラップにはまったスバルたち!

一方、バカレンジャーたちは……!?

#15 / ウルトラセキュリティ図書館 ?

数時間後

期末試験まで後一日

「……………うん……………」

「あ、君、大丈夫？」

エリオが目を醒ますと、目の前にあったのは『女性の顔』だった。まだ若く、二十代前半位だろうか。金髪のウェーブヘアに、ぷっくりとした唇。背は小柄なほうだろうか。

そして彼は気づいた。自分がその女性に「膝枕」してもらっている事に……………

「うわわっ!?!」

顔を真っ赤にして、慌て起きあがるエリオ。起きた衝撃で、自分に乗っていた「白い何か」が飛んでいったが、そんなの気にしてられなかった。



「……………それだけ元気なら、大丈夫ね。」  
「は……はあ……………」

くすくすと笑う女性に、照れくさそうに返事するエリオ。彼女の足元には、さっきの白い何か　ウサギが丸くなっていた。

そして、今気づいたが、スバルや千雨、アナスイの三人も、そばのベッドで寝ていた。

彼女の話では、彼女は図書館島の『司書見習い』で、図書館島内を見回りしていたら、エリオたちが倒れていたらしく、自分が手伝っている司書の人を呼び、自分が使わせてもらっているこの部屋に運んだらしい。

しばらくするとスバルたちも目覚め、軽く食事をもらい、スバルたちは、『人を捜している』ことを話した。

すると彼女は、「昨日から、この部屋の先にある図書室が騒がしい」と教えてくれた。

千雨はバカレンジャーだと確信し、彼女に道を教えてもらい、そこへ向かうことにした。

彼女に別れを告げ、四人はその図書室を目指す……………

「問題

『CONTRAST』の日本語訳は？

A 対称

B 対象

C 対照

はい、どれ？」

まき絵の目の前には、ABCとそれぞれ書かれた三つの箱があり、箱の反対側には、問題を出題した徐倫がいる。

「えっと……C……かな。」

「……………」

まき絵は答えるが、徐倫は黙ったままだ……

「正解！なんだ、結構できるじゃないか！……はい、ゆで卵。」

「わーい」

この箱から出したゆで卵をまき絵に渡す徐倫。

よく見ると、他の三人　古菲、楓、夕映も、ゆで卵をもぐもぐと食べていた。明日菜だけは、手に持った『セツケン』を見つめていたが……

「　　って、何で正解したらゆで卵なんですか！？別に他の食べ物でもいいでしょう!？」

「うまいじゃん、ゆで卵。」パラパラ

「板　英二さんですかあなたはッ!？」

「てか私『セツケン』なんて食べれないわよッ!ていうか、食べたら死ぬからッ!」

つつこむネギと明日菜に対して、カラを剥いたゆで卵に塩をかけながら答える徐倫だった。

徐倫が提案した、問題に一問正解したら正解の箱の食べ物を食べられる『英単語クイズ』。徐倫によると、この方法で叔父の友人が英語のテストで百点満点を取ったらしいのでやっていたが、明日菜だけは、やはりダメだった……

今、徐倫たちがいるのは、夕映いわく『幻の地底図書館』という場所。地底なのにあたかい光に満ちて、数々の貴重品にあふれた、本好きにとってはまさに『楽園』!だが、ここを見て生きて帰ったものはいないとか……とにかく、今彼女たちは『脱出困難』な状況

だった。

そんな中、ネギが諦めずに助けを待とうと励まし、期末に向けて勉強しようと言ったのだ。

幸い、テキストや食料があったため、勉強や食事には困らなかったため、ネギたち八人は何とか無事だった。

そして現在

「よし、次正解したら『チーズ味のペンネ（木乃香作）』が食べれるぞ！がんばれ！

問題

『Hail to you!』の日本語訳は？

A 君に扉を

B 地獄を君に

C 君に幸あれ」

「えつと………B?」

「……………はずれ。正解はCの『君に幸あれ』だ。はい、Bの箱の「英単語カード」だ。」

「食べ物じゃない上にさらに勉強しろとッ!?!?」

神楽坂 明日菜 連続五問不正解+腹ぺこのため、さすがに可哀

想だということだ、「仕方なく」と徐倫にゆで卵を五個＋塩小さじ一杯もらった。

「ん？何してんだ、ネギ？」

「あ、空条さん。いや、ここの『本棚』の本について、気になって……」

「確かに……ずっと水に浸ってたはずなのに、全く本が『痛んでない』な……これも『魔法』なのか？」

「多分………一体誰がこんなモノを……？」

『チユミ〜ン？』

そう言いながら歩く徐倫とネギ。傍らには、『精霊』スタンドもいた。

この学園には、魔法先生や魔法生徒なる者がいることは、先日の『オエコモバ』の一件で分かった。となると、この『麻帆良学園都市』そのものも、『魔法使いたち』が作ったと考えれば、今自分たちがいる『地底図書室』地下や、この間のゴーレムにも、納得がいく……

「……あゝ、難しい事考えるのは後だ。

あ、そういえばネギ、お前の『スタンド』なんだが

キャツキャツ

「ん？」

話しかけた徐倫だが、ふと、はしゃぐ声が聞こえ、そちらに気が向く。

声をしたほうを見ると

「ん？」

「へ？」

「あ……」

『チヨミ？』

まき絵、古菲、楓の三人が、『裸』で水浴びをしていた……

「やーん、ネギ君のエッチ〜」

「うわわ〜、じ〜ごめんなさいー！」

慌てて駆けだそうとするネギだが、楓に捕まれてしまい、じたばたするだけになってしまう。

「くすくす、顔真っ赤にしちゃって、カワイ〜」

「ネギ坊主、10歳なのに、女の子の裸に興味あるアルか？」

三人にいじくられるネギ。だが、

「あのっ……僕、お姉ちゃんで見慣れてるしっ……女の人の裸とかには『全然』興味ないですからっ！英国紳士として……」

「「なっ……」」

「「……」」

ネギから衝撃の発言に、固まる四人。

「うわーん、ヒドいよネギ君ー！ー！」

「ワタシたちよりも楓やジョジョみたいな体しか興味ないアルかー

ー！ー！」

「え、いや、そういうわけじゃあ……そ、その………ごめんなさ

ー！ー！」

「あ、おい、ネギ！……ったく、あんまりからかうなよなお前らッ！」

大声で謝り、脱兎のごとく走り去るネギ。徐倫は、まき絵たちに注意して、ネギを追うことにした。

「くす、『興味ないですから』だって〜。」

「『英国紳士』アル〜〜」

まあ、あんまり反省はしてないようだが……

そんな風にふざけていたからだろうか。

彼女たちは、自分たちの背後に忍び寄る『陰に』気づかなかった……

……

## 数分後

「えっ？クラス解散とか、小学生からやり直しとかは？」

「いや、僕がクビになることしか聞いてないですけど……」

「…………… やれやれ、やっぱりデマだったのね……………」

明日菜と二人は、『ネギの最終課題』の話になっていた。

まあ、留年はともかく、小学生からやり直しはあり得ないが……

「ああーもうツ！それならこんな謎の図書館なんか来なかったわよツ！」

「ええっ！？そんなあ〜」

「全く、あんたが来てから踏んだり蹴ったりよ！」

「明日菜、それはないだろ……………」

なんかひどいことを言う明日菜につっこむ徐倫。



と、

「「「あああああー！」「」「」

「「「ん？」「」

ザツバアアーン

「「「なッ！？」「」

上から声が聞こえたと思ったら、近くに水柱が立った。

「……………結局落ちるんですね……………」

「あっー、変なところ打った〜」

「よし、全員無事らしいな！」

「ツベボガベビガボツ！ベビブガババボゲ！ビギバベビベベツ！（訳：っておまえのせいだろツ！っていうか早くどけ！息ができませんッ！）」

落ちてきたのは、エリオ、スバル、アナスイ、そして、三人の下敷きにされて水に沈んだ千雨だった…

「なッ！？何でスバル達が降ってくるわけ！？」

「あ、空条さんにネギ君に明日菜ー！みんな無事ー！？」

「ていうか千雨が無事じゃないぞッ！？早くどいてやれよッ！！」

聞けば、バカレンジャーを助けようと図書館島に来たが、四人は落とし穴に落ちてしまい、『司書見習い』の女性に介抱してもらい、

道を教えてもらったらしい。

だが、『地底図書室』まで来るのに、アナスイがまたトラップを発動させて、落ちるはめになり、現在にいたる……

「…………… どんだけ落ちれば気が済むのよ、あんたたち……………」

「好きで落ちてんじゃねえよッ！全部こいつのせいだよッ！！」

アナスイを指して叫ぶ、ずぶ濡れの千雨。本当に探検部なのだろうか、この男…？

「アスナー！！ってあれ？何でスバルちゃんたちまでおるん？」

と、そこへ木乃香がやってきた。

「あ、このか、それよりどうしたの？」

「あ、そや、大変なんよ！はよう！」

木乃香に連れられて走る一同が見たものは…

「誰か助けてーッ！」

『フオフオフオーー』

「…………… 何あのデカいのーッ!?」「……………」

「またあいつ!?」

「ゴーレムッ！一緒に落ちてたんだ！」

ゴーレムにとらわれたまき絵だった。

だが、ピンチの時こそ冷静になる！それが空条家…いや、ジョース

ター家！

「スバル！古！ヤツの『脚を狙え』ッ！」

「えっ、う、うん！」

「アイよジョジョ！」

「というか、何故ナカジマさんがここに……？」

スバルと古菲に指示を飛ばす徐倫。二人は、ゴーレムの足元に近づ

く。  
「アイ……ハイッ！」

「ウリイイヤアアッ！」

ドゴオ！

『フオオ！？』

脚に強烈な一撃を喰らい、ゴーレムは倒れる！その衝撃で、まき絵は離され、それを楓がキャッチする。

ひゅ……ドサッ

「ん？何この本……？」

足元に落ちてきた本を拾うエリオ。その本は……

「あ！そ、それは！」

「メル……何とかの魔法の書！？」

「ゴーレムと一緒に落ちてたんだ！」

「よし！それが手に入れば、こんなとこ用かないわ！」

メルキセデクの書を手に入れ、全員の志気が高まる。だが！

ズズーン

『逃がすと思うてかー！ッ！』

「キヤー！」

「つて、あいつまだ!?!」

「どうすんのよ!?! 打つ手ないわよ!?!」

ゴーレムが起き上がり、再びパニックになる一同。だが、

「いや、あるわ!」

「……………えっ!?!」「……………」

「たった一つの策が! やつの『脚』をみる! スバルたちにやられて、かなりのダメージだ! おまけにあの『巨体』だ! 早く動けないはず! そこが『つけめ』だ!」

徐倫の言うとおり、ゴーレムの脚はひび割れて、今にも崩れそうな感じた。

「そ…それで、たった一つの策とは?」

夕映が徐倫に聞く。徐倫は、自分の右太ももをバシッと叩き、

「こつちも『脚』を使うんだ!」

「脚だつて!」

「……………!なるほど、あれか!」

「千雨ちゃん、何か知つとるん?」

「あ…脚をどうやって!?!」

スバルが聞くなか、徐倫はアキレス腱を伸ばす。

そう!これこそ、ジョースター家伝統の戦法! それほ!

クル

「逃げるんだよー!」

ダッダー

「……つてええー!?!」

「わあッ!!なんだこの二人ー!」

回れ右して走り出す徐倫と千雨。明日菜、スバル、木乃香、まき絵、古菲は驚愕の声をあげ、エリオとネギは叫ぶ。夕映と楓、アナスイは、ドイツ軍人みたいな呆れ顔だ。

「つて、あんたたち道わかるの!?!」

「ああ!『司書見習い』のお姉さんに、『帰り道』聞いているからな!こつちだ!」

「先にそれ言つてよ!二人の人格疑つちゃうから!」

二人を追いかけながらにつっこむ明日菜とまき絵。まあ、いきなりあんな行動取つたら、誰でも驚くが…

だが、ここで予想外の事態が起こる。ゴーレムが、高く『ジャンプ』したのだ!

「なッ!?あいつ、まだあんな力が!?!」

「くッ!」

ネギが『爪』をスタンバイするが、ゴーレムの後ろに『人影』があるのに気がついた。アナスイだ！しかも、スタンドを出している！

6つの穴が開いた仮面のような頭部に、レギュレーターを噛み、酸素ボンベを背負ったダイバーのようなデザインのスタンド。その名も！

「『ダイバー・ダウン』！！」

ズボオオ

『ふお！？』

『ダイバー・ダウン』の腕がゴーレムに「めり込む」！いや、『体内に潜入した』と言った方がいいだろうか…？とにかく、ゴーレムにダメージを与えたようだ。

(……………むっ？これは……………？)

だが、ダイバー・ダウンを潜入させて、アナスイは『ある事』に気づいた。それは

「アナスイ！」

「徐倫！こいつはオレにまかせて、先に行けッ！」

「わかった。」

ダッダー

「一切の躊躇も無く！？」

いつものこととはいえ、かなりショックを受けるアナスイだった。

「アナスイ…おまえの事は忘れない! ……三分くらい。」  
「短ツ!?!」  
「おいおい徐倫、三分はないだろ。五分くらいにしとけ!」  
「それでも分単位なんだ!?!」  
何とも不憫な扱いのアナスイだった。

バカレンジャー+数名      この後、無事脱出。だが、メルキセデク  
の書を落としてしまう…

ナルシソ・アナスイ      不明

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #15 / ウルトラセキュリティ図書館 ? (後書き)

15話です。

・冒頭の『司書見習い』の正体は、みなさんのご想像にお任せします(笑)

・ネギのスタンド名は、次回徐倫から発表されます。

・ジョースター家の伝家の宝刀は、オラオラでも、知的トリックでもなく、『逃げる』だと考えてます(笑)

・あつさり見捨てられるアナスイ(笑)ぶつちやけアナスイは、銀魂の近藤さんや、ハルヒちゃんでの谷口的ポジションだったりします(笑)

・次回、図書館島編もクライマックス!

では!



**#16 / 高得点コードなし！期末試験に挑め（前書き）**

いよいよ、期末試験当日ッ！果たして、ネギは最終課題に合格できるのかッ！？

図書館島編、クライマックスッ！！

## #16 / 高得点コードなし！期末試験に挑め

翌日

期末試験当日

試験開始まで後5分

「……遅刻！遅刻ウ！」「……」

明日菜たちバカレンジャーと図書館探検部四人に、徐倫と千雨、ネギ、そしてスバルは走っていた。

「あ〜ん！一時間で起こしてって言ったのに〜ッ！」

「思いつきり爆睡しちゃったアル〜ッ！」

「ごめ〜ん！私も寝ちゃったあ〜〜ッ！！！」

ギリギリまで徹夜で勉強していた一同。一時間ほど仮眠するつもりが全員爆睡してしまったため、思いつきり遅刻していた……

「お……遅れてすみません……」

「ああ、君たちか。遅刻組は別教室の方で受けなさい。」

「は……はい、すみません……」

ちょうど通りかかった、眼鏡をかけた年配の先生　新田先生に連れられ、一同は別教室へ向かう。

寝不足と、昨日までの疲れでフラフラとした足取りの彼女たちを、

ネギは後ろから心配そうに見ていた……………

#16 / 高得点コードなし！期末試験に挑め

「では始め。試験時間は50分です。」

試験が始まり、教室には、カリカリという書く音以外は聞こえなくなる…

別教室で試験を受ける明日菜たちの様子をこっそり見るネギ。

中では……

「……うう、やっぱり難しい……」

「それに……眠いアル……」

「やっぱり徹夜は失敗だったかなあ……」

「コラ、私語をしない！」

三日間の探検と勉強による疲労で、とても集中できていなかった。

(……よし、ようやく魔法の『封印』も解けたんだし！)

そう思うと、ネギは花を取り出し、それを『触媒』に、呪文を唱える。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

フラーグランティア・ヌイトリスミキス・ウイゴレム  
花の香よ、仲間に元気を、

ウイターテスウラム・サルターレム  
レフエクテイオー  
活力を健やかな風を。

活力全快……」

ふああっ……

ネギが『詠唱』をし終わると、花の香りが、教室中に漂った……

(……ん？)

(あれ……)

(……何か、頭すっきりしてきた)

(やる気出てきたアルよ)

(僕にできるのは『活力全快』くらいだ………みんな、頑張っ！)

全員の集中が戻ったのを見ると、ネギは教室から離れた。

(………やれやれだわ。ま、今回は目をつむってあげるわ。ありがとうね。)

唯一気づいていた徐倫は、心でネギにそつと感謝した。

数日後

六課のマンション

「では、『ラング・ラングラー』は、依頼者について何も知らなかったのだな……？」

「はい………分かったのは、「依頼者が女性」ということだけで、後は何も……」

悲痛な表情で、ウエザーと電話をするティアナ。『ホル・ホース』

にやられた足がまだ痛むのか、傍らには『松葉杖』が立てかけられている。

「分かった。手間をかけさせてすまなかったな。後は『SPW財団』スピードフロンに任せて、調査をやり直そう。」

「はい…では。」

ウエザーがそうしめて、電話を切る。

リビングに戻ると、エリオとキャロ、ヴィータ、そしてリインシャーリーは、フェイトについていったためいない。　　が、モニター前に集まっていた。

「って副隊長、四人して何見てるんです？」

「あ、ティアさん。ほら、クラス成績の『順位』が、もうすぐ発表なんですよ！」

「……あ。そういえば、そんなこと言ってたわね……『ラングラー』にかまってたせいで、忘れてたわ……」

そう、今日は『クラス成績発表日』、つまり、ネギの『最終課題の結果発表の日』でもあるのだ。

しばらくすると、発表が始まった。

だが……

「……うう、全然『A組』出てこないですよ……」

「もう『20位』ですね……」  
「後『4クラス』……」

麻帆良学園女子中等部

昇降ロロビー

「えー、次は下から三番目の『22位』  
2 Pツ!!70・8  
点ツ!」

「ひいッ!」

「ま……マズいよ!次出てこないと、『最下位』決定に……」

ロロビーで発表を聞いていたバカレンジャーとネギ、そして徐倫とスバルたちは、なかなか出てこないA組の名前に、ハラハラしていた  
……

「……」

「ネギ君……」

「ネギ……」

「次は下から二番目、ブービー賞です。」

そして、ついにブービー賞の発表が……

「えーと……これは……」

「『2K』ですね。平均点69.5点。」

「え……」

「……」



「最下位確定イイイイ〜ッ!?」「」「」「」  
「……………」

一同が『最下位』という結果に呆ける中、ネギは、静かに一同から離れた……………」

### 麻帆良学園中央駅

（お姉ちゃん…今から故郷くにに帰ります。『立派な魔法使いマギステル・マギ』になる「夢」はダメだったけど……………でも、みんな頑張ってくれて、嬉しかったな……………」

課題失格を知り、少し悲しげな表情のネギ。まとめた大荷物を持ち、故郷へ帰るつもりだった……………」

『チヨミ〜…………』

傍らには『精霊』スタンドが漂い、ネギを心配そうに見ていた。

「ネギ！」

「ネギ君！」

そんな時、ネギがないのに気づいたのか、明日菜とスバルが駆け寄ってきた。

「ご、ゴメンツ！本当にゴメンツ！私たちのせいで最終課題に落ちちゃって……」

「そ…それに、魔法の本もなくしちゃったし…私も……」

「いえ…そんなことないです…誰のせいでもないですよ。『魔法の本』なんかで受かってもダメですし……結局僕が『教師』として未熟だったんです。」

「ネギ君……」

「クラスのみなさん、特に五人のみんなには感謝してます。短い間

だったけど、すごく楽しかったし……さようなら！」

タツ

「「あつ！」」

二人に背を向け、ネギは電車に向かい駆け出す。

「もうツ！」

バツ

「ってアスナ!？」

ガツシイイ

「ひゃ…!？」

いきなり、自動改札を飛び越え、ネギを捕まえる明日菜。いきなりの行動に、捕まえられたネギと見ていたスバルは、驚いていた。

「バカっ！行っちゃダメって言うてるでしょおおー！…そりゃ、最初はガキでバカなことするから怒ったけど…私なんかよりちゃんとするもって頑張ってるから感心してたんだよ！なのに…」

「ア…アスナさん…」

「アスナ……」

明日菜が思いをネギにぶつけ、ネギとスバルが驚いていると…

「ネギくーんツ！」

「ネギ坊主ーツ」

「ネギーーツ待てエエエ！」

まき絵たちバカレンジャーや徐倫が走ってきた。心なしか、その顔は笑顔だった。

「ネギくーんツ！私たち『最下位じゃない』よーツ！」

「むしろ『学年一位』だツ！！だから帰るなツ！！」

「「「……………えツ！？」」「」」

## 学園長室

慌てて学園長室へ来たネギたち。学園長の話によると、バカレンジヤーたち『遅刻組』の採点を学園長が行い、うっかり『2 A全体の合計』と合わせるのを忘れてしまったらしい。そして、遅刻組の点数と合計すると、平均点が0・2点の差でA組が『学年一位』になった。

「え……でも、「魔法の本」がないのに、一体どうやって…!？」  
「あゝ、これのことか?」「ひょいっ  
「アアッ!?!」

学園長が、『魔法の本』を取り出した。だが、本がここにあるということは…

「魔法の本こんなもので簡単に頭が良くなったら苦労はせんて。今回のことはな、すべてみんなの『実力』じゃよ。」

「え…じゃあ、『図書館島』でのことは全部……?」  
「うむ。最終課題では、子供のネギ君が『今後も先生としてやっていけるか』を見たかったのじゃ。図書館島の数々のトラップにもめげずに、よう頑張ったのお。」

ガチャリ

「全く、よく言っぜ。脱出出来なかったら、どうする気だったんだ?」

いきなりドアが開いたと思ったら、アナスイが入ってきた。

「アナスイさんッ!?!」

「生きてたの!?!」

「ああ、あの時、ゴーレムの中の学園長を『掴んじまって』な。大体のことは検討がついたわけだ。で、学園長と一緒に、あそこから脱出したわけよ!心配かけたな!」

「いや、心配してないし…!」

「なっ!?!」

明日菜の発言に、落ち込むアナスイ。まさに『orz』な状態だ。

「……まあ、脱出方法はちゃんと考えてあったから。ともかく、合格じゃよネギ君!これからは、さらに精進じゃな。」

「あ……はいッ!」

学園長から『合格』を言い渡され、力強く返事をするネギ。これで、正式に『先生』としてやっていけそうだ。

「ははっ、良かったねネギ君!」

「ま、とりあえず、新学期からよろしくね。」

「は、はいっ…:よろしくお願いします!」

スバルと明日菜に言われ、すこし照れたように言うネギ。

そこへ……

「 Bannon! 」

「 アスナーーツ! 」

「 大変アルツ! じよ、ジヨジヨが……! 」

「 えっ……? 」

いきなりまき絵と古菲が入ってくる。かなり必死な表情だ。

「 お、話終わった? 」

「 じよ、徐倫? 」

と、彼女らに続いて、徐倫が入ってくる。が、何故かジャージに竹刀という装備に、明日菜は何やらいやな予感がした……

「 ……と、その前に、今回はおめでとうネギ。正式に「先生」として任命された祝いに、お前の『スタンド精霊』に「名前」をプレゼントしてやる。 」

「 えっ? 」

「 そうだな……その『爪』は、もはや『爪』を超えている……  
…『爪を超越し、「牙」となった爪』……これからは、『タスク牙』と呼ぶといい! 」

「 『タスク牙』………はいッ! ありがとうございます! 」

スタンド 『タスク』を見つめ、徐倫に感謝するネギ。

「 さて『明日菜』……『おまえらバカレンジャー』にも、私からプレゼントがある。ちなみに『拒否権』はない! 」

「え……………?」  
「ひいひい……ッ!」

いきなり話しかけられて、一瞬ビクつく明日菜。まき絵たちは完全に怯えていた。

「今から、『勉強道具』をもって、私の部屋に集合だッ!!これよ  
り、『大・勉強会』を行うッ!!!!」  
「はあッ!!!!?」

「そもそも今回は、おまえら五人の日頃の成績が良かったら、こんなにハラハラしなくてすんだんだ!よって!反省会を含めた『勉強会』だッ!!全員できるまで帰れると思うなよっ!!!!」  
「ひいひい……」  
「ズルズル」

三人の悲鳴がドブプラー効果で遠ざかっていく中、ネギたち三人は、ぽかんと見ていることしか出来なかった……………

午後7時17分

六課の部屋

「 というわけで、私邪魔らしいから、しばらく厄介になるぞ。おかわり。」

「 ってどういう訳よ!? 後これご飯『三杯目』よッ!」ポフポフ  
「 以外とご飯進むんだよ、この野菜炒め。」

文句を言いながらも、千雨の分のご飯を善そうティアナだった。

バカレンジャー ヤバい「SWITCH」が「IN」! した徐倫  
により、8日間缶詰めにされ、終了式も欠席した。

ネギ・スプリングフィールド 2007年4月2日付けで、A組  
の担任として採用! 「立派な魔法使い<sup>マキステル・マキ</sup>」としての第一歩を踏みしめる。

長谷川 千雨 結局、一週間スバルたちの部屋に泊まった。

t o b e c o n t i n u e d



「……………そうですね……わざわざありがとうございます。…はい、それは、僕の部下にやらせますから。はい、では。」

電話を切った男は席を立つと、待ち合わせのレストランへ行くため、部屋を出た。

おそらく、あの「二人」はもう来ているだろう。ひよっとしたら、もう食べ始めているかもしれない。

そう思いながら店へ入ると、案の定、二人はもう食べ始めていた。

「お……………遅かったじゃねーか。先に食べてたぞ。」

「すみません、ちよつと『電話』が入ってしまったものですから……」

二人のうちの一入 室内にも関わらず、『矢印』のついたニット帽をかぶった男に言われ、簡単に謝る。

「電話……………？何かあったのか？」

金髪に、穴だらけのスーツを着たもう一人が言う。すでに料理は半分くらい食べたようだ。

「……………『十代目』からの情報ですが、『サルシツチャ』たち三人の居場所がつかめたようです。」

「……………」

「サルシツチャ」の名前を聞いた途端、二人の手が止まる。

「サルシツチャだと……………ッ！？マジなのか『ボス』！？」

「ええ、何でもサルシツチャは『日本が好きなギャングランキング』第一位らしいから、日本を調べたようです。」

「どんな調べる理由だよ……?」

「ていうか、どんな情報?」

「そしたら、日本の『マホラ』という場所で目撃されたそうです。」

二人のつつこみを無視して、『ボス』と呼ばれた男は話を進める。

「どうやら、『スタンド使い』を目覚めさせている様子らしい……  
そこで、何人が日本へ向かわせたいのですが……」

「……………分かった。『サーレー』と『ズツケエロ』のコンビを調査  
に向かわせる。やばそうだったら、俺たちで向かわせてもらうぜ!」

「ええ、頼みましたよ『ミスタ』、『フーゴ』!」

「ああ、俺たちがいないからって、無理すんなよ、『ジヨルノ』!」

運命の齒車は、ゆっくりと回る

ほかの齒車を巻き込み、それを広げながら

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
. . .

**#16 / 高得点コードなし！期末試験に挑め（後書き）**

16話です。

・ネギ、正式にA組の担任として任命。まあ、バカレンジャーもよく頑張ったけど、本当の地獄はここから……（笑）

・そして、パッションエネ始動。情報元については、イタリア繋がり  
つてことで（笑）

・次回はみなさんお待ちかね（？）、千雨のあの話です（笑）

では！

#17 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい ? (前書き)

みなさんお待ちかねえー！ (Gのあの人風) 千雨のあの話です！

#17 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？

終了式から3日後

女子寮入り口

「あ、空条さんにネギくん！」

「ん、スバルか。」

「あ、こんにちは、スバルさん。」

ネギと徐倫が外に出ると、スバルとティアナと会った。スバルたちは私服だが、ネギはスーツ、徐倫は制服だ。

「あれ？二人とも、春休みなのに学校？」

「あ、はい。実は今日、来年度から来る『新任の先生』が挨拶に来るらしくて、僕も来るようにって。」

「そうなんだ。」

「私は、この間借りた『竹刀』を、剣道部に返しに行くんだ。」

「……それ、借り物だったのね……」

「当たり前だろ。文芸部の私が、竹刀を持ってるわけないだろ。」

全くだった。

あの後、バカレンジャーに大・勉強会をさせた徐倫。  
8日後、バカレンジャーたちは一人残らず真っ白になり、しばらく機能停止状態に陥ったという。  
実際、明日菜やまき絵などは、いまだに復活仕切れていない状態だった……………

## 閑話休題

「で、あんたたちは？」

「あ、そうそう！長谷川さんが『下着』忘れたから、届けにきたの！」

「……………大声で言うんじゃないのツ！バカッ！！」

パコンッ

「へうっっ」

言っで、スバルをひっぱたくティアナ。ネギたちは苦笑いだ。

「……………千雨なら部屋にいるぞ。鍵は閉めてないと思うから、勝手に入ってくれ。」

「うん、ありがと。」

そう言っで、4人は分かれた。

だが、分かれた後に徐倫は気づいた。

「……………あ、あいつ『アレ』の最中だったか……………?」

#17 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい ?

女子寮

徐倫と千雨の部屋

「ふ…ふふふふ…徐倫が『一週間』も部屋を占領していたからな…すつかり「うつぶん」が溜まりに溜まったたらありやしない……………!」

鏡の前で、不気味に笑う千雨。端から見たら、完全にアブナイひとだ……………

「特に最近は、『矢』のことや、『魔法』やらで、めちやくちな日々が続いたからなアアア…か…な…り派手にいかせてもらおうぜッ!!」



そう言うと、メイクと衣装をキメて、眼鏡を外す。そして……………

「おっけー 今日も『ちう』は、綺麗だっぴよ〜ん」

『かわいい衣装』に身を包み、完全にスイッチが入れ替わった千雨<sup>ちあめ</sup>  
……………否、千雨<sup>ちう</sup>が、そこにいた……………

『ちう』は、早速パソコンのスイッチを入れ、自分のホームページを開くと、チャットのページへとアクセスした。

「おハロー（．．）qみんなお久しぶりー！  
ごめんね〜、今まで顔出せなくて〜（<>）i  
ちよつと用事があって、お家を離れてたんだあ〜（-.-;）」

しゃべりながらキーボードを打つという、ちよつとイタい感じを醸し出しながら書き込む『ちう』。彼女が打ち終わって数秒後、チャットルームに書き込みがされる。

ちうファンHIRO>気にしないでちうたん！待ってたよ！  
通りすがり士>いや〜、一日千秋の思いでまっておりますぞ！  
無敵要塞>気にしないで！僕らはいつでも君を待っていたから！

「わー！ありがとみんなー（ ）ノ  
今日はお礼に、ニコニコ 스튜디오お披露目するよ」

そう言って、自分を撮影し始める千雨。

これこそ、普段目立たぬように過ごす『千雨<sup>ちうりゅう</sup>』が、『スタンド使い』  
以外に隠していた裏の素顔！

インターネット界を牛耳るスーパーハッカーにして、No.1ネット  
トアイドル！『千雨<sup>ちうりゅう</sup>』！！

デジカメで『自己撮影』！フォトショップで『肌』を修正し！！F  
TPで写真を『アップロード』ッ！！！！

己の『美貌』を画面の向こうの男どもに見せつける！これこそ、千  
雨の『至福の時』！

「よしッ！キタキタキタキタ北アアア！『ネットアイドルランキ  
ング』でも、ぶつちぎりの一位ッ！！ヒヤホホオオオッ！私は『  
女王』なのよッ！いずれはNET界のNo.1カリスマとなって！  
全ての男たちが！私の前に跪くのよオオオオオッ！！！！」

気分がノリに乗って、叫び出す千雨。彼女の今の気分は、最高に「  
ハイ！」ってやつだ。

だが、千雨の『至福の時』は、「ノックの音」で終了を告げた……

コンコン

「ノックしてもしもお〜〜し。ごめん、鍵あいてたから勝手に入  
っちゃったんだけどさあ〜…」

いきなり『自分以外の声』がして、ビクリとする千雨。まるで油の  
切れたロボットのようになりぎぎと後ろを向くと……

「……………あんだ、普段そんなことしてるの……………?」

『なんて声をかけたらいいか分からない』顔のスバルと、呆れ顔のティアナがいた……………

おっぱアアアーツ

「ん?今なんか聞こえへんかった?」

「あー、多分、 $(x+1)(y-1)$ が室町時代で、二酸化アルミニウムな倒置法なんじゃない?」

「……………アスナー、まだ寝ときー。今お粥さんできるからなー。」

「いつ……………いいいいいつからいたんだよツ!??」

「ええつと……………『かゝなゝり派手にいかせてもらっぜツ!』のあたりから?」

「結構最初の方じゃねえかアアアーツ!」

顔を真っ赤にして叫ぶ千雨。自分のこの趣味を知っているのは、ルームメイトの徐倫だけだ。それ以外にバレる<sup>2</sup>「自分も変人集団<sup>A</sup>の仲間入り！それだけは、絶対に避けたかった。

「うわー、何かすごいねこれ……」

「普段はこんなことするようには見えないのに、この趣味を隠して生活してたのね……」

「何でわざわざ隠してんの？」

「こんな趣味、人に話せるわけないでしょ……で、あんたはその『にんじん』で私たちに何をする気？」

スバルが振り向くと、大きなにんじんのクッションを持ち上げた千雨がいた。

そして、ぎくりとして、わなわなと震えたかと思うと……

ガシッ

「ひっ!？」

「なっ!？」

「はなすなよッ!？絶対に誰にもはなすなよッ!？」  
ブンブン

「わっ、分かったから!そんなに振るんじゃ……」

「あばばばば……」

二人につかみかかり、ブンブンと振りだした。

10秒後、千雨が「はなすなよ」を13回いったあと、ようやく二人は離してもらった。

## 寮の近くの道

千雨は、二人が話さない代わりに、二人に昼食を奢ることになった。だが、千雨は『話さない』ことに安心をしたが、スバルの暴食っぷりが不安だった……

「ほら、早く早く」

「お前……あんまり食うんじゃないぞ……って、聞いてないな……」  
「……人生、諦めが肝心よ……」

一応励ますティアナ。ふと、道ばたに何か、『棒のようなもの』が落ちているのに気がついた。

「ん？何これ？」

拾ってみると、それは鞘に納まった「刀」だった。結構重く、『本

物』ではないかというリアリティだ。

「ん？なんだそれ？『演劇部』の落とし物か？」

「多分……でも、それにしても結構リアルね……まるで本物みたいな重みよこれ……」

不思議に思ったティアナは、刀を抜いてみると、まるで冷たい水に濡れてるような美しい刀身が現れた。

「！おいおい、こりゃあ本物だぞッ！何でこんなところにマジものの刀があるんだッ！？」

「わッ……私に聞かないで……よ……」  
「……？ランスター？」

ティアナの様子がおかしいことに気づいた千雨。何か、ぼーっとした感じた。

「おい、二人ともどうしたのー！？」

そこへ、スバルが駆け寄ってくる。

その時ッ！

ドシューウーッ

「！！？」

刀を持ったティアナが、千雨に『斬りかかってきた』！！

千雨は何とか「スタンドの小太刀」で防ぎ、バックステップで下がる。

「ランスター！テメエ、何を……………！」

ティアナに怒鳴る千雨だが、ティアナの目つきを見て、ヤバい事に気がついた。

「は、長谷川さん！一体……………！」

「ヤベエぞ……………ランスターのやつ、操られてやがる」！恐らく、原因はあの『刀』だッ！！」

千雨が仮説をたてると、ティアナは感心したようなそぶりをみせる。

「……………ほう、初見でわたしの正体に気づくとは……………貴様、できるなッ！」

「お前……………『スタンド』か？」

「いかにもっ！！我こそは『エジプト9栄神』が一人ッ！冥府の神！墓地の守護神を暗示するカード！『アヌビス神』ッ！！」

「！！ア……………『アヌビス神』だとッ！？」

刀 『アヌビス神』の名前を聞いて、驚愕する千雨。

「知ってるの雷で……………長谷川さんッ！？」

「雷 っって呼ぼうとした！？今明らかに 電って言いかけたよなッ

！？……………『アヌビス神』って言えば、承太郎さんや『父さん』が戦って、再起不能リタイアしたって聞いたが……………」

「ん？貴様の『父』だと？」

千雨の話聞き、疑問に思う『アヌビス神』。彼女の父親と自分が

戦った……………？

「……………お前は、『一度戦った相手は憶える』らしいな……………  
なら、憶えているはずだ。」

千雨は、アヌビス神を見据えて、話した。

「『ジャン ビエール J・P・ポルナレフ』だ！」

「！！ポ……………『ポルナレフ』だとおー！？」

ポルナレフの名前に驚くアヌビス神。

確かに自分は、『シルバー・チャリオッツ 銀の戦車』のポルナレフと戦った。だが、今自分の目の前にいる少女が、そのポルナレフの「娘」だと……………？

「……………ふっ、面白いッ！貴様がポルナレフの娘というならばッ！！  
相手にとって不足なしッ！！このアヌビス神、絶対に、絶対に、  
絶……………絶対に……………」

『絶対』を、溜めに溜めるアヌビス神。そして……………

「…………………………対に！負けなアアアッ！！」

言い切ると同時に、千雨に襲いかかるッ！！



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

#17 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？（後書き）

17話です。

・千雨のネットアイドル活動。『ちづ』モードの千雨は、書いてて楽しかったです。

・「ノックしてもしもお〜し」から「はなすなよ」までは、結構想像通りにかきました（笑）

・アヌビス神登場。今後の展開を考えて、ティアに憑かせました。

・多くの方の予想通り、千雨はポルナレフの娘です。スタンドは彼から受け継ぎました。

・次回、いよいよ千雨のスタンドの全貌が明らかに……！？

では！

#18 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい ? (前書き)

千雨に襲いかかる妖刀『アヌビス神』!

一方、『ある男』が、麻帆良へ来ていた……

#18 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？

麻帆良学園

職員室

「え？新任の先生、まだ来てないの？」

「ああ、さつき連絡があつたんだが、どうやら降りる駅を間違えたらしいんだ……」

職員室でタカミチと話すネギ。近くには、新田先生やウエザー、そして若い細目の先生 瀬流彦もいた。

「しかし、その先生の経歴を見たが……大丈夫なのかね？」

「確かに……前の学校で『男子生徒七人』の顔を「変形」するまでボコボコに殴つてクビになつたとか……」

「え……」

新田と瀬流彦の話聞いたネギは、耳を疑つた。

生徒の顔をボコボコに？

いったい、何が彼をそうさせたの？

ていうか、何で学園長そんな人採用したの???

「……しかも、『A組』の『副担任』にしようとは……学園長は何を考えているんだ……」

「ええーッ!？」

ウエザーからトドメの一言を聞き、ネギは目に涙を浮かべて叫んだ。主に、『不安』と『恐怖』で……………

### 女子寮から最寄りの駅

「只今、『東麻帆良駅』で人身事故が発生したため、運転を見合わせて」

「ガーーンッ！ダブルバッドッ！！降りる駅間違えた上に『人身事故』！これだけついてないなんて、今日は厄日かあ~~~~！？」

男は、オーバーリアクションをとりながら叫んだ。これでは、確実に『挨拶』には遅れてしまう。

男が頭を抱えながら天を仰ぐと

「……………」

『あるもの』を見つげ、目を疑った。

慌て目をこすり、再度さっきの場所を見る。

だが、『あるもの』は実在していたため、見間違いではなさそうだ。

「……………」『人身事故』ならよー、ちょっと寄り道してもバレねえよなああー。」

誰に言う出なくつぶやいた男は、さっきの見たあたりまで走り出した。

#18 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？

時間は前後して5分ほど前。

「絶……………対に！負けなああい！」

ティアナに取り憑き、千雨に『唐竹割り』を繰り出す『アヌビス神』。千雨はそれを受け流し、高く飛び上がると、空中で『前転』をしながら斬りかかる！

「双燕天翔流！弧牙車こがくるま！！」

ガキイイン

「！！！」

いきなり頭上からの攻撃に驚いたが、何とか防いだアヌビス神。そのまま千雨をはじき返すと、今度は横なぎに斬りかかってくる！

カイイイイン

「くっ！」

「なかなか面白い技を使うな………だが、今のはもう『憶えた』ぞ！」

つばぜり合いになるも、千雨が明らかに押されていた。

(ぐ……強い………さすが承太郎さんや父さんとやり合っただけのこととはある………)「だがッ！！！」

ドゴオッ

「!?!」

無理矢理蹴りを入れて、アヌビス神から離れる千雨。すぐさま、左から突きを繰り出し、同時に右から袈裟掛けで斬りかかった！

「だからって負けられるかっ！」

慌てて防ぐアヌビス神だが、千雨の攻撃は止まらない！

左から逆袈裟、逆風、右切り上げ、右からは左薙、唐竹、突き、…

…ものすごいスピードで、連続で様々な方向からの斬撃を繰り出す！

ザシューウウ

「ぐっつッ！」

そして、右からの袈裟掛けを喰らってしまつアヌビス神！たまらず後ろに下がった！

「双燕天翔流八大奥義！戦嵐月華！！」

構えを解かずに言い放つ千雨。

アヌビス神は、千雨の連続攻撃に驚いたものの、すぐに冷静な顔になる。

「なるほど……………目にも留まらぬ速さで連続攻撃を、しかも様々な方向から繰り出す技か……………初見で見切るのは難しいが、確かに憶えた！！」

「ちっ……………今で見切ったか……………！！」

自分の渾身の技を初見で見極められて舌打ちをする千雨。恐らく、もう『戦嵐月華』は通用しないだろう……………

「ならばッ！」

「！？？」

すかさず後ろの木に飛び乗り、一気に蹴る！

そう、『図書館島』で『ラング・ラングラー』を倒した

「疾風月華！！」

すれ違い様に連続斬りを放つ！！

だが！



ガギギギギギイーン

「何ッ!？」

ザシユウウ

「ぐわっ!」

全ての斬撃を受け止められてしまい、逆に一撃喰らってしまった!

「長谷川さん!」

「千雨と言ったな……………貴様のスピードと太刀筋は、さっきの技で『憶えた』!もう、貴様の技とスピードは、わたしには通用せんぞ!!!」

千雨に駆け寄るスバル。ふと、『ある事』を思いつく。

「ねえ、長谷川さん、『アレ』を使えばいいんじゃないか……………」

「!!!」

「『アレ』?千雨、貴様何か『奥の手』でももっているのか?」

スバルの一言で、少し躊躇する千雨。

確かに『アレ』ならば、アヌビス神を倒せるかもしれない。だが、やつに『アレ』を憶えられたらヤバい!そういう考えが、千雨の頭を巡る。

しかし、

「大丈夫!長谷川さんならできるって!!」

『どこにそんな根拠があるんだ?』と聞きたくなってしまつようなスバルの真つ直ぐすぎる一言と、『明るい未来』しか見えないよう

な輝く目で、千雨に言うスバル……  
そんなスバルにため息を一つつくと、千雨は立ち上がる。

「お前みたいな生き方だと、気楽でいいかもな……おい、アヌビス神！」

切っ先をアヌビス神に向け、言い放つ千雨。

「お前の言つとおり、私には『奥の手』がある。今からそれを拝ませてやるから、しかと見る……！」

言つと、深く踏み込む千雨。そして

ドンッ

「な……にやに……!?」

跳んだ!

だが、『高さ』がおかしい。明らかに『10m以上』は跳んでいる……!!

「ばっバカな!何だあの『跳躍』はッ!??」

アヌビス神が驚くのも無理はない。

『波紋』で身体能力を強化しているとはいえ、人間が『10m以上』も跳ぶのは不可能だ。

スタンドを使えばできるだろうが、千雨のスタンドは『小太刀』の

象だ。<sup>ヴァイジョン</sup> 承太郎の『スタープラチナ』のような『人型』なら可能かもしれないが、刀のような『道具型』では不可能なはず！  
ならば、どうやって……………！？

その謎は、すぐに解けた。高く跳んだ千雨が、『旋回』してこちらに向かってきたからだ！

その時、千雨の姿を見たアヌビス神は、全てを理解した！

「あ、あの『姿』はッ！！くっ！！」  
ガキイン

「……………ちっ、防いだか！」

突進してくると同時に一太刀喰らわせた千雨だが、防がれてしまう。

「くっ……………なるほど、今のは『跳んだ』のではなく、『飛んだ』  
ということか……………！」

「ああ、これが私のスタンド」

千雨は、「甲冑」を、白金と金色に輝く「甲冑」を『身にまとって  
いた』！！

女性的なフォームで、『騎士』というよりは『戦乙女』<sup>ヴァルキリー</sup>に近い。肩には『鍵穴』型の肩当てをつけ、肘当てや籠手、腰のバックルには、『蒼く輝く燕』の装飾がある。頭には頭部を覆い、猛禽類のくちばしのような型をした水色のバイザーのついた兜を装着している。そして、その背中には、白金に輝く『鋼鉄の翼』が生えていた。  
これこそ千雨のスタンドの『真の姿』！その名を

「『アニバーサリー・オブ・エンゼル』だ！」

スタンド  
甲冑 『アニバーサリー・オブ・エンゼル』を身にまとい、高らかに千雨は叫んだ。

本体名 長谷川 千雨  
スタンド アニバーサリー・オブ・エンゼル

t o b e c o n t i n u e d . . .

#18 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？（後書き）

18話です。

・新任の先生の正体は、次回明らかに……？

・アヌビス神VS千雨。チャンバラシーンは、『るろうに剣心』片手に書きました（笑）

・千雨の使う『双燕天翔流』の技名は、奥義は『風』や『雨』などの天候、それ以外は『数の単位』からとってます。『弧牙車』は『恒河沙（10の52乗）』から。

・千雨のスタンド『アニバーサリー・オブ・エンゼル』。名前はALIPROJECTの楽曲『Anniversary of Anger』から。『白アリ』の中では、特に気に入ってます。デザインは、ポルナレフの『銀の戦車』を女性的にしたイメージです。

・次回、『アヌビス神』戦も決着です。

では！

#19 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい ? (前書き)

V S アヌビス神も、ついに決着!!

果たして勝つのは! ?

#19 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？

さかのぼること18年前

1989年

エジプト ナイル川の川岸

午後02:32

ある川岸で、『奇妙』な出来事が起きた。

川岸に『カニ』が数匹上がってきた。

いや、これはおかしな出来事ではない。

奇妙なのは、そのカニたちが、『折れて、刀身のみになった刀』を運んできた事である……

(クツ、おのれ承太郎……！貴様のせいで、オレはナイル川の川底に沈む羽目になったのだぞ……！！この恨み！必ず晴らしてみせるッ！！)

刀 『アヌビス神』は、承太郎への恨みで、闘志をメラメラと燃やしていた。自分の不運で川底へ沈んだことを忘れて……

(……とりあえず、川底でサビる事は避けられたが、刀身では何もできない……誰かが拾ってくれるのを待つしかないか……)

そう思い、誰かを待つ事にしたアヌビス神。そんな時、川岸に一人

の少女が現れる。

マントを頭からかぶっているので表情は分からないが、肌は黒く、服装は薄手のワンピースを着ており、地元の者ではない事がわかる。恐らくは旅行者だ。

(むっ！こんな時間に女が……………？いや、そんなことより、こいつを操って、承太郎に復讐だっ！！)

だが、彼女が『左手』でアヌビス神を拾ったとき、信じられない事が起きた。

(にゃ！！ニヤニヤ……？あ、『操れない！』この女を操ることができないイイーツ！?)

「……………残念ねアヌビス神……………私の『左手』で触れたものは、全て『無効化』される……………これが私の『スタンド能力』。」

少女は静かに告げると、右手でアヌビス神に布を巻き始めた。

ふと、アヌビス神は自分のおかれている状況がおかしいことに気づいた。

(……………あれ？オレは『左手』でこの女に持たれているのか？だが、これは明らかに『右手』だぞ！……………まさか！こいつは『左手』が

)

「だが、私のこの『無効化』の能力のみでは、ジョースターどもには勝てない……………集めなければ……………私の復讐のための軍団を……………」

ぶつぶつと呟くように言いながら、彼女はその場を立ち去った。



現在

「あの時、アヌビス神を拾い、優秀な刀鍛冶に直させたのは正解だったわ。」

紅茶に砂糖を入れながら、女性      あの時の少女は言った。  
彼女の目の前のモニターには、アヌビス神と戦う千雨が映し出されていた。

「おかげでお兄様を殺した男……………ポルナレフの娘にたどり着いたんですもの……………帰ってきたら、磨いてあげようかしら……………」  
そう言うと、彼女は紅茶を手元に持ってくる。

だが、彼女の手をみると、おかしいことに気づく。彼女の左手の

親指』は、手の甲を外を向けているのに、『下側』にあった。

そう、よく見なければ、誰も気づかない。

彼女の『左手』が、

『右手』であることに……………

#19 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい ?

(こ…………この『アヌビス神』!……………今まで様々なスタンド使  
いと戦ってきたが……………「スタンドを身にまとう」……………こんな  
タイプ初めて見るぞ!)

「さあ、決着をつけようか!アヌビス神ツ!!」

言うと同時に、高く飛び立つ千雨。そのまま木に飛び乗ると、アヌ  
ビス神に向かって飛びかかる!

「疾風月華・隼ツ!!」

「バカめツ!その技はすでに」

ズババアツ

「なツ!?!」

見切つていると言う前に、全ての斬撃を喰らうアヌビス神。その顔  
は驚愕だ。

「バツ、バカな!……………スピードが……………増しただと……………

……………!?!」

「……………『疾風月華・隼』は、私が『勝手に』作った、『疾風月  
華』の派生技だ。私のスタンド、『アバーサリー・オブ・エンゼ  
ル』での戦闘を想定してな!」

説明しながら、『エンゼル』の翼をパタパタと動かす千雨。その時、  
アヌビス神は気づいた。

「!そうか……………踏み出すと同時に『飛行する』ことで、先ほどより  
もスピードが増したというわけか!?!」

「ああ。『疾風月華』みたいな突進技は、『エンゼル』の『飛行能力』で加速できるからな。だが、もうお前に『憶えられた』………  
…次で決めるッ！私の最も得意とする奥義で！！！」

そう言うと、両腕を後ろへ持っていき、飛び出すような構えをとる。

「……………面白いッ！」

アヌビス神も、両手持ちの構えをとり、千雨の出方をみる。

緊迫した空気が辺りを包み込み、両者は全く動かない

二人の間に木の葉が、ひらり、ひらりと、何の前触れもなく舞い落ちてくる

だれが決めたでもない

二人が決めたでもない

だが、それが地面に落ちるのが、二人の合図となった！

ドン！

「ア！ホッ」

ビュオ！

かけ声とともに、千雨に斬りかかるアヌビス神！！

「双燕天翔流八大奥義！！時雨月華ッ！！！！」  
シバババババ

一方の千雨も、両手からの連続突き 「時雨月華」を放つ！！

そして

ガギギイイイ……………ン

辺りに、刀と刀がぶつかり合う音が響く。

両者は、すれ違った形で動かない。

勝ったのは

「……………フツ、なるほどな……………貴様は剣術とスタンド  
を併用して……………戦うタイプか……………確かに……………  
……………憶えた……………ぞ……………」

途切れ途切れに言いながら、アヌビス神は倒れていった……

「……………ふう、ギリギリだったな……………」  
「長谷川さんッ!」

『アニバーサリー・オブ・エンゼル』を解除し、アヌビス神に斬られた右わき腹を押さえながら言う千雨。そんなに深くはないようだ。アヌビス神に操られていたティアナの方は、傷だらけだが……………

「長谷川さん、て、ティアは……………?」

「ああ、急所は外しておいたから大丈夫だろ。問題は、『アヌビス神』だな……………」

そう言つてティアナの方を向くと

茶色い『ダイバースーツ』のようなものを着た男が、『アヌビス神』を握っていた。

「?!?」

「千雨よ……………今回は引いてやる。だが、次に会うときは絶……………  
……………対に負けないツ!!」

言つと、まるで水泳選手のように地面へと飛び込む。男が地面に接すると、地面は『泥化』して、そのまま潜つていった。

「な……………今のは……………?」

「ちっ！逃げたか……………!」(『エンゼル』を憶えられたのは厄介だな……………今度やり合つときは『アレ』を使う羽目になるかもしれない……………)」

「と、とにかく、今は二人を病院に……………」

アヌビス神に逃げられ、ティアナと千雨を病院へつれていこうとするスバル。

だが

「駅から『天使』が見えたと思ったたらよおー」  
「『！！！』」

いきなり、男の声が聞こえ、振り向く二人。

「すっげー戦いが見られたぜ。『達人同士の戦いは一瞬で決まる』  
つてよく聞くが、いやはや、見事な戦いだっただぜー。」

木の陰から、やたらとデカイ男が現れた。軽く190cmはありそ  
うだ。

黒いスーツを着ているが、スーツの襟に『ピースマーク』のアクセ  
サリーをつけている。ネクタイにも、ピースマークやハートの模様  
が入っている。

だが、男の身なりで最も目を引くのは、その『髪型』だ。まるで宇  
宙船や軍艦を彷彿とさせるリーゼントが、ビシッと決まっていた。

「……！あ、あんたは……………」

「よお千雨！久しぶりだなあーおい！何年ぶりだ？」

「え？長谷川さんの知り合いなの？」

驚く千雨と、千雨に対してフレンドリーに話しかける男を見て、ス  
バルは疑問を持つ。

「とりあえず、お前とそいつの『傷』、見してみるよ。」

「あ……………ああ。」

男に言われ、千雨はティアナと自分の傷をみせる。すると

ズギャアアーン



「！え！？え?!」

男から『腕』が伸びて、二人に触れたかと思うと、二人の傷が一瞬で『治った』!!

まるで、『最初から傷なんてなかった』かのようだ!

「……………あれ?……………私……………??」

「ティアア!!」

「よお、痛みはないか?」

ティアナが目を覚まし、駆け寄るスバル。ティアナはいつの間にかいる男に警戒するが、男に言われて、自分の体に異変がないか調べる。

「……………痛みはないけど……………私どうしてたの?刀を抜いたあたりから、記憶がないんだけど……………」

「あの刀、スタンドだったんだよ。で、操られて私と戦ってたんだ。」

「えっ?」

千雨に事情を説明されて、驚きを隠せないティアナ。

「で、この人に傷を『治してもらった』所だ。」

「え?え?ていうか、誰この人!??」

「ああ、悪いーな。遅ればせながら、自己紹介させてもらっせ。」

言っと、男は三人に向き直る。

「この度、『麻帆良学園女子中等部』で『数学』を担当することになった、<sup>ひがしかた</sup>『東方仗助』<sup>じょうすけ</sup> ツス！以後、お見知りおきを！！」

アヌビス神 逃亡 再起可能

t o b e c o n t i n u e d . . .

「P R I V I L E G E C A R D」

> i 2 8 7 3 — 4 0 6 <

スタンド名 アニバーサリー・オブ・エンゼル

本体 長谷川 千雨

破壊力 B スピード A 射程距離 C

持続力 A 精密動作性 C 成長性 B

能力 本体である長谷川 千雨が身に纏っている、甲冑のようなスタンド。背中に『翼』が生えており、空を飛ぶなどの機動力に優れている。また、翼や甲冑の一部を脱ぎ捨てることにより、防御力は低下するが、より素早い動きが可能になる。

#19 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい？ (後書き)

19話です。

・今回の黒幕、『左手が右手の女性』がちらりと登場。ルル・ベルとの関係などは、後々判明します。

・『アニバーサリー・オブ・エンゼル』は、シンプルに『飛行能力』を持つスタンド。後は、『銀の戦車』とあまり変わらないです(^^) | ^ ; ) 千雨は『剣術』で戦うので、これくらいシンプルなのが丁度いいと考えての能力です。まだまだ隠し玉はあるようですが…

・そして、仗助参戦！木乃香が覚醒するまでの間、『治療担当』が必要でしたので、出番は四部での承太郎くらいになるかもですが…

・今回は、ミッドチルダでの承太郎の様子を書く予定です。

では！

#20 / ミッドチルタのジョジョ ? (前書き)

承【しょう(じょう)】

? きき入れる、つけたまわる? つける、受けつぐ、伝える

仗【じょう】

? 刀や鉾などの武器? たよりにする? まもる、護衛する

徐【じょ】

? ゆっくりと、しずかに

倫【りん】

? 人の守るべき道? なかま

書くところが見当たらないので、今書きます(笑)

## #20 / ミッドチルダのジョジョ ?

グリーンドルフィンストリート・麻帆良  
206号室

「「ええー！ー！ー！ー！く、空条さんの『親戚』いいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

部屋中に、スバルとネギの声が響いた。近くにいたリインとティアナは、あまりの声の大きさに耳を押さえる。

「……………ああ。私のひいじいさんの『ジョセフ・ジョースター』が浮気して産まれたのが仗助おじさんだ。」  
「複雑なのね、あんたの家族……………」

ジョースター家の複雑な家系に哀れむティアナたち。

あの後、仗助は何か先生方と挨拶をしてきた。なお、その際新田先生が仗助の『髪型』について言いそうだったのを、偶然通りかかった徐倫が必死に止めたことを、ここに明記しておこう……

そしてその後、スバルやネギたち（ようやく復活した明日菜も）に、『スタンド使い』としての仗助を紹介するため、ここへ集まってい

た。

「ま、オレの紹介はこれくらいにして、次はそのオレンジのやつ  
ティアつつつたか？ そいつの『後遺症』についてだな

……………」  
「……………」後遺症？「……………」

「うん、実は、『アヌビス神』に操られたのが原因だと思うんだけ  
ど……………」

「私、『スタンド』が見えるんです……………」  
「……………」ええッ！？「……………」

そう、ティアナには、「スタンド」が見えるようになっていた。

原因はアヌビス神だと、仗助たちは推測しているが、これには訳が  
あった。

「『アヌビス神』の本体は、600年前に死んだ刀鍛冶『キ  
ヤラバン・サライ』ということが判明していますわ。つまり、『ス  
タンドのみが生きていて、刀を抜いた人物を本体にする』というこ  
とになりますわ。」

「つまり、ティアは一時的とはいえ、『スタンド使い』になっただ  
け事だ。だから、スタンドが見えるようになったって、オレたちは  
考えている。」

「なるほどー……………」って、ちよつと待ってー!!」

仗助たちの説明を聞いていた明日菜は、ある疑問が浮かんだ。ネギ  
やスバルたちもだ。

それは

「何で『いいんちよ』が話に参加してるのよッ!?!?」

そう、仗助や徐倫の座る席には、『いいんちよ』こと、『雪広 あやか』も同席していたのだ。

「あ、そういえば、言ってませんでしたわね。」

「あやかのとこの「雪広財閥」は、「スピードワゴン財団」と深い関わりを持っていてな。有事にはあやかをエージェントとして派遣してくれるんだ。」

「「「「「ええーッ!?!?」「」「」「」」」」

衝撃の事実にも、スタンド使い側以外の全員が驚く。ふと、ヴィータはあることを思い出す。

「そういえば、財団のエージェントが『矢』について調べてるって聞いたけど……………」

「ええ、わたくしの指揮下で働いている方々がおりますの。わたくし、スタンド使いではありませんが、みなさまのお力にはなりませんわよー!。」

ホホホと優雅に笑いながら言うあやか。  
そんな様子を、全員がぼかんと見ながら、全員同じことを考えていた。

『こいつが財団のエージェントをあごで使っているのか……………』

#20 / ミッドチルダのジョジョ ?

時間は少しさかのぼり

スバルたちが『図書館島』で『司書見習い』と別れた頃

ミッドチルダ

機動六課 食堂



「ここ、座つても大丈夫か？」

朝食をとっていた承太郎の向かいの席から、女性の声がした。承太郎がそちらを見ると、何回かすれ違った女性だった。

ピンクの髪をポニーテールにし、『美人』とも言える整った顔立ちにつり上がった翠の目、そして、男が十人いたら十人の視線を集めるような巨乳の女性だ。

「……………別に構わんぞ。」

「ありがとう。」

だが、既婚者で子持ちな上、日本的な女性が好みの承太郎には、彼女のスタイルなど興味がなかった……

「そういえば、何回かすれ違っただけで、自己紹介をしていなかったな。ライトニング分隊副隊長の『シグナム』だ。」

「ああ、はやてから聞いている。」

女性　シグナムに話しかけられても、相手にしないような態度で返す承太郎。

元々感情を表に出さないタイプなために、周りの隊士たちに<sup>プレッシャー</sup>圧力を与えていたが、そこは歴戦の騎士シグナム、ものともしていなかった。

「しかし、管理局の上の人等は、徹底的に『スタンド』を調べたいらしい。今回の事件が解決するまで、『六課』の運用期間を延長すると言ってきたぞうだ。」

「らしいな。オレとしては、貴重生物扱いされてやれやれって感じだがな。」

本来、機動六課の運用期間は今年の四月までのはずだったが、管理局の上層部から、今回の『矢』の事件が解決するまで、運用期間を延長すると言ってきた。

これには、今まで管理局が認知していなかった『スタンド』が関連していると、はやてたちは読んでいた。

「で、お前は『そんな話』をしに来たのか？」

「……ふふつ、さすがだな。」

「当たり前だ。目をそんなに輝かせていたら、誰だって分かる。まどろっこしいのは嫌いな『タチ』なんだ、さつさと用件を言え。」

先ほどよりも、いつそう強いプレッシャーを放つ承太郎。周りの隊士たちは、圧倒的なプレッシャーに耐えられず、承太郎たちからさらに離れていく。

「では、単刀直入に言おう。私と『手合わせ』してほしい。」

「……………手合わせ？」

「ああ。聞けば、お前は相当強いスタンド使いらしいではないか。いずれ私もスタンド使い達と戦う事になる可能性が高い。その時に備えて、特に強いお前と手合わせをしたいのだ。」

承太郎に説明するシグナム。だが、そんなものは建前であり、実際はただ単に承太郎と戦いたいだけである……………

「別に構わんが、オレは午後から陸士108部隊とやらに行かなくちやならない。早めに済ませるぞ。」  
「分かった。では、食べ終わって一時間したら、『訓練場』に来てくれ。」

手合わせの約束を済まし、二人は黙々と朝食を食べ始めた。

一時間半後

訓練場

今、六課隊舎の外、海上に浮かぶ訓練場は、『砂漠』と化していた。周りには大きめの岩が点々とあり、サボテンまで生えていた。そして、中央には

「……………ピラミッド……………か……………」

あまり表情が変わらないため見分けがつかないが、承太郎をよく知る者が見たら、彼が『浮かない顔』をしているのに気づくだろう。彼は砂漠、とりわけエジプトには、いい思い出がなかった。

『一晩中』照りつける『太陽』に襲われたこともあった。

砂に潜む『水』や『塵気楼』、『電車』にも襲われた。

そして、『友』を失ったのも、砂漠だった……………

「さて、始めようか……………」  
「……………ああ、そうだな。」

ピラミッドの中腹にまで登り、騎士服に身を包んだシグナムが切り出した。

「改めて自己紹介させてもらおう。ヴォルケンリッター 守護騎士“烈火の将”シグナム  
そして」

シグナムは、手に持った剣を鞘から抜き、承太郎に向けた。

「わが魂、『レヴァンティン』だ。」

「どうぞよろしく。」

シグナムの紹介に、レヴァンティンも挨拶する。

「……………海洋学者 空条 承太郎。そして」

承太郎も、『肉体』という鞘から、己の『剣』スタンドを抜く。

「タロット大アルカナカードの17番目、『星』のカードの暗示を持つスタンド！『星の白金』スタープラチナ！！」

スタンド 『スタープラチナ』は、発現と同時に戦闘態勢をとる。

「『星』のカードか……………確か意味は『希望と未来』、だったか？」

「ああ、オレのスタンドは、今までいくつもの『未来』を切り開いてきた。」

「ふふっ、それは楽しみだ。」



れる。

だが、シグナムが剣を『レヴァンティン両手で持っていた』のに対し、承太郎は『右拳のパンチ』による一撃。つまり！

「オラオラオラアーーッ！」

承太郎は『スタープラチナ』の『左拳のパンチ』を放った！

「くっ！」

痺れが取れず、仕方なくバックステップで下がるシグナム。『スタープラチナ』の左拳はそのままピラミッドの側面へ向かい

バゴオッ

「！！！」

ピラミッドの壁を『破壊』した！だが、破壊だけでは終わらない！

ズドドオ

「ぐっつ、こ、これが狙いかッ」

『壁の破片』が勢いよく飛んできて、シグナムを襲う！不意をつかれたため、シグナムは数発食らってしまう。

恐らく承太郎は、シグナムが左のパンチを避けるのを予想していた





だが！

ガシィッ

「なっ！ひ……………飛竜一閃を……………」

「『掴んだ』あああッ!？」

『スタープラチナ』が予想斜め上に行く行動を取ったため、「これで決まった」と確信していたシグナムとはやては驚き、フェイトはスタンドが見えないため、空中で止まったレヴァンティンとはやてのセリフで、ようやく状況を理解した。

「やれやれだぜ。まさか『連鎖刀』になるとはな……………『相手が勝ち誇った時、そいつはすでに敗北している』……………つまりッ!」  
グオオン  
「!?!」

言いながら、承太郎はシグナムをシュランゲフォルムのレヴァンティンごと綱引きの如く『引き寄せる』!!

「最後まで油断するなって事だ!!」

そして、シグナムとの距離が1mまで縮まると、

「オラア!!!」

グオオン

「わああああ!?!」

ズドオ

背負い投げの要領で、シグナムを地面に叩きつけた!

「くっ!まさかあんな荒技を……………」

「まあ、お前があれを出さなかったら、分からなかったがな。で、そいつをもとの状態に戻すのに何秒かかる?2秒か?3秒か?」

起きあがるシグナムに、着地した承太郎は問いかける。

「戻ったと同時にスタープラチナの拳をたたきこむ!かかってきな!決着をつけるぜ!西部劇のガンマン風に言うと、『抜きな!どっちが素早いか試そうぜ』というやつだぜ……………!」

「!!!ああ…!」

言うと、シグナムはシュランゲフォルムのレヴァンティンを構える。

「シュベルトフォルム」

「紫電」

「オオオオオ……………」

カートリッジをロードし、レヴァンティンに炎を纏わせるシグナム。承太郎も、スタープラチナの右拳に力を溜める。

そして

「一閃!!!!」

「オラア!!!!」

二人の渾身の一撃が、同時に放たれる！

だが、シグナムはある事に気づく。スタープラチナの右拳だ。

スタープラチナの右拳は、人差し指と中指をまっすぐに伸ばした形をしている。

なぜ、そのような形をとるのか？

シグナムがそう考えた時

この戦いを見ていた八神 はやては、こう語る。

「承太郎さんの『勝因』は

シグナムのおっぱいを『突っついた』ことやッ!..!」

「スターフィンガー流星指刺!..!」

ドギャン

「なっ!」

ボゴオ

「か.....はッ」

勢いよい指が『伸びて』、シグナムの胸を穿ち、シグナムはそのまま吹っ飛び、気絶してしまった……………

空条 承太郎VSシグナム

WINNER 空条 承太郎！

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #20 / ミッドチルダのジョジョ ? (後書き)

20話です。

・いつまでも戦力外なのは可哀想なので、ティアナにスタンドが見えるようにしました。ちなみに見えるようになる過程は『シャーマンキング』の木刀の竜が元ネタ。

・そして『財団』のエージェント『いいんちよ』。雪広財閥くらいでかかったら、SPW財団と繋がっても何の不思議もないはず…

・承太郎VSシグナムは、連載当初から考えてました。シュランゲフォルムを引っ張るシーンがお気に入り。

・流星指刺は、原作では二回しか出なかった技なので、使っちゃいました。はやての語りは、間違ってはいません(笑)

・次回は、連載当初からの謎が明らかに ?

では!

#21 / ミッドチルタのジヨジヨ ? (前書き)

今回、色々と衝撃的な事実が明らかに………！

## #21 / ミッドチルダのジョジョ ?

スタンドとは

- ・スタンドとは、生命エネルギーが具現化したものである
- ・スタンドは、スタンド使いにしか見えない。(例外として、物質と融合したものは、スタンド使い以外にも見える。)

・スタンドが傷つけば、本体も傷つく。

・スタンドが消滅したら、本体も死ぬ。

・逆に本体が死ねば、スタンドも消滅する。(ただし、『アヌビス神』のような例外もある。)

・スタンドのパワーは、その距離に反比例する。本体から近ければ、パワーは強く、正確性もスピードもあるが、二つの距離が遠ければ遠くなるほど、動きのスピードも遅く、大雑把な動きになっていく。

・スタンドは、一人につき一能力である。

・スタンドの由来は、二つある

? そばに立つように現れることから (STAND

BY ME)

? 運命や困難に立ち向かう力 (STAND UP



「これが、スタンドについて今までで分かった事か……………」

はやてから送られてきた資料を見て、白髪を短く切りそろえた中年の男　ゲンヤ・ナカジマは呟いた。

「……………オレも、今まで何人か『そういう力』を持った奴に出会ったことがある。多分、そいつらも『スタンド使い』だったんだろうな。」

ゲンヤの向かい側に座る赤毛の男は、そういつと自分に出された湯呑みから茶を飲んだ。

「そうかい。で、おまえさんは、今回の事件をどう思う？」

「さあな。オレには難しい事は分からないが　　」

男は、湯呑みをテーブルにコンツと置いた。

「『アイツ』のオヤジと、ジョースター一族の『因縁』が、また再燃したって事は、確かだぜ。」

#21ノミッドチルダのジヨジヨ？

陸士108部隊

駐車場

ボタンッ

「悪いな、送ってもらって。」  
「いえ、これ位の事。」

108部隊の隊舎に到着した承太郎とフェイト。車の運転はフェイトだ。

「お、来たか！あつちで局員が待ってるぜ！」

「え？あ、はい……？」

「……………何だ、お前は？」

いきなり赤毛の男性に言われ、きよとんとするフェイト。承太郎も、男を不振に思い、ギロリと睨みつける。

「じゃ、オレはこれで。また機会があつたらな〜」

だが、承太郎のプレッシャーをもともせず、男は立ち去って行った……………

「……………今の人は一体……………？108部隊の隊士ではないようだけど……………」

「さあな。だが、ずいぶんと『肝』が座ってたな。かなりできるやつだぜ……………」

承太郎がそういうと、フェイトは首を傾げながら、隊舎へと歩いていった。

局員に部隊長室へと案内された二人。そこで待っていたゲンヤと二人は挨拶を交わす。

「陸士108部隊部隊長のゲンヤ・ナカジマだ。わざわざ来てくれてありがとう。」

「空条 承太郎だ。ところで、『ナカジマ』って事は……」

「ああ、スバルは俺の娘だ。」

「やはりか……」

握手を交わし、自己紹介をする二人。

ソファーに座ると、承太郎から話を切り出した。

「で、オレに『直接聞きたいこと』ってのは？」

「スタンドについての資料は、はやくから送られたはずですが……」

「……？」

そう、ゲンヤは承太郎に直接聞きたいことがあると予備出したのだ。

「いや、あなたに聞きたいことってのは」

「あんたらスタンド使いの中には、『時を止める』事ができる奴はいるのか？」

「!?!?」

「『時を……………止める』……………?」

ゲンヤの質問に、承太郎はショックを受けたような顔（といっても、あまり違いは分からないが……………）をし、フェイトは訳が分からないという顔をする。

「……………なぜそれを聞く？」

「俺の妻のオヤジさん　つまり、俺の義理のオヤジは、『時を止める』事が出来たらしい。最初は信じられなかったが、今回の事でその人は『スタンド使い』じゃあないかと思ってな。で、どうなんだ？」

ゲンヤは聞くが、承太郎はまるで『信じられない』という表情で、黙ってしまふ。

しばらく黙ったままだった承太郎だが、ふつつとため息を吐くと、話し始める。

「……………確かに『時を止める』能力のスタンド使いはいた。だが、そいつは18年前、オレが殺した……………名前は、『ディオ・ブランドー』……………」  
「「!?!?」「」

承太郎の話を、今度は二人が信じられないという表情になる。

今、この男は何と言った？

『殺した』……………？殺したと言ったのか？

今この男は、『殺した』と言ったのか？

「ちょ、ちょっと待ってくれ……………！こ、殺したってのは、どういう事だ……………？仮に敵対していたとしても、なぜ……………？」  
「……………そうだな、お前等にははなした方が良いかもしれないな。我がジョースター一族と、ディオの『因縁』を……………」

承太郎は語り始めた

ディオ・ブランドーが100年前、『柱の男』と呼ばれる『究極生物』が作り出した『石仮面』をかぶり、『吸血鬼』になったこと

世界征服の野望を果たさんと、生きた人間や死体を『死屍人<sup>ゾンビ</sup>』に変え、軍団を作ったこと

承太郎の先祖であるジョナサン・ジョースターが、『波紋』と呼ばれる力でディオを倒したこと

だが、ディオは頭部のみで生き延び、海上でジョナサンの肉体を乗っ取り、100年間海底で眠っていたこと

そして22年前、トレジャーハンターにより、ディオの『棺桶』が

引き上げられ、ディオが復活したこと

4年後、ディオの影響でスタンドに目覚めた承太郎と彼の母ホリイ。だが、ホリイはスタンドの影響に耐えられず、命の危機に陥ってしまったこと

母を助けるために、ディオのいるエジプトへ、仲間と共に旅に出たこと

エジプトへ着いたものの、ディオの配下のスタンド使いたちや、ディオのスタンド、『ザ・ワールド世界』の前に、仲間が次々に命を落としていったことを

「オレが奴と同じ能力に目覚め、奴を殺していなかったら、今頃奴は世界を支配していただろうよ。」

「！じゃあ、承太郎さんも時を……」

「ああ、『止められる』。最近止めてないから、2秒が限界だな。」

「そんな体を動かす感覚で止められるもんなのか……？」

「ていうか、『時が止まっている』のに「2秒」……？」



二人の疑問は、的を得ていた……

「まあ、『人間の感覚で二秒くらい』って意味だ。だが、一つだけ分からないことがある。」

承太郎は、右の人差し指をピンとのばして言う。

「さっきの話通り、DディオIOが目覚めたのは『22年前』だ。『15歳』の娘の母親なら、計算が合わないんだが………？」

確かにそうだ。スバルの母親なら、どう考えても30代後半のはずである……

「……いや、おまえさんの話で、全部『繋がった』。」  
「？」「」

「実は、『ゼスト』の残した戦闘機人に関するデータに、ある事が書いてあったんだ。」

『戦闘機人』について、承太郎ははやてから聞いていた。「戦うため」に生み出された『人体兵器』で、六課と深く関わっているという。

「これがそうだ。計画の立案者の『日記』なんだが……」

ゲンヤに見せられたモニターには、二十年位前の日付の日記が映し出されていた……

40年前のある日、私は『時を止められる男』とその部下『又ケサク』と呼ばれていたと出会い、仲良くなった。彼によると、部下を自分と同じような能力に目覚めさせたら、急に光に照らされて、気づいたら『ミッド』にいたらしい。

彼に管理局の話をする、部下の能力は『時空を超える』能力だと、彼は考えた。恐らく、能力が暴走したためだと、彼は言っていた。彼は数週間ミッドに滞在し、部下の能力で帰っていった。

私は彼らの『能力』に憧れた。

そして、戦闘機人計画に、彼らの能力を再現した力『インヒューレント・スキル』を取り入れた。

そして数週間前、偶然彼の『娘』の遺伝子を手に入れた私は、それを元に『戦闘機人』のプロトタイプを作り上げた

「……ちょっと待て。これが本当なら、お前の娘は……」  
「……ああ、「戦闘機人」だ。だが、あいつが『あの道』を選んだのは、自分の意思だ……俺は、そうなってほしくなかったがな……」  
「……」

長い沈黙が流れる。  
話を再開したのは、承太郎だった。

「……オレがお前の娘に合ったとき」  
「？」  
「あいつの目に、『黄金の意思』を見た。黄金に光り輝く、正義の意思を……安心しろ、お前の娘は、お前の意思や、オレたちジョースターの意思を受け継いでいる……！」  
「……そう言ってくれれば、ありがたいね……！」  
ゲンヤが、少し照れたように笑う。フェイトも、なんだかうれしそ  
うだ。

そんな中、ゲンヤに通信が入った。

ピッ

「はい……」  
「お、お父さんッ!!」

モニターに映ったのは、青い髪をロングにした、18歳くらいの少女だった。

「ギンガ、どうしたんだ？」

少女　ギンガの慌てように、少したじろぐゲンヤ。娘がこんな  
に慌てるとは、ただ事ではないことは確かだ。

「じ、実は　」

この通信が、新たな事件の幕開けである事を、

この時誰も知らなかった……

t o b e c o n t i n u e d . . .

#21 / ミッドチルダのジョジョ ? (後書き)

21話です。

・この話で分かるとおり、スバルとギンガ、そしてノーヴェは、D  
IOの「孫」に当たります。プロローグの星のアザは、これが理由  
です。

しかし、承太郎の言うとおり、彼女たちにはジョースター家の『黄  
金の意思』が宿っています。

・冒頭の赤毛の男は、誰なんでしょうね？ (笑)

・次回からは、エヴァ編に突入です。

では！

#EX/幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第1回放送(前書き)

オレの「自動追尾弾」劇場

スバル「さあ、始まるザマスよ！」

ネギ「い、いくでガンス……」

明日菜「ふんがー！」

徐倫「まともに始めなさいよッ！！」

千雨「……………今回は、こんな感じでお送りします。」

## #EX/幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第1回放送

全員（以下：全）「幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第1回放送〜 イエー〜」

ドンドンパフパフ〜

徐倫（以下：徐）「皆さん、11月も終わりにさしかかり、いかがお過ごしでしょうか？パーソナリティーの空条 徐倫です。」

スバル（以下：ス）「スバル・ナカジマです。」

明日菜（以下：ア）「神楽坂 明日菜です。」

徐「えー、皆さまの応援のおかげで、前回この小説は第一章を終えることができました。」

ア「てか、第一章だったんだ、今まで？」

ス「うん、作者的に。」

徐「そこで今回は「インターワールド（間奏）」として『幕間ラジオ』と称し、今までの話を振り返ったり、次の章の予告をしたりします。」

ス「ちなみに今回は六課の部屋から、最近出したおこたでぬくぬくしながらお送りします。」

ア「物語では四月のはずだろってツツコミはなしの方向でお願いします。」

徐「いや、だらけてねーでさっさと最初のコーナー行くぞッ!」

幕間ラジオ

『ジョジョのリリカルな放課後』

第1回放送

(オープニングBGM：音石 明のライトハンド奏法)

【第一章を振り返ろう】

ア「いや、オープニングBGMがギター演奏だけってどういこと  
ッ!？」

ス「権利とか色々ヤバいかららしいよ。」

徐「音石さんありがとね。」

音石 明(以下：明)「おう!また呼んでくれよ!」ガラガラ

ス「って本人いたのッ!？」

ア「それで私カタカナ表記だったんだ!？もう退場したのに!？」

徐「さて、【第一章を振り返ろう】と銘打ったものの……」

ア「そもそも、作者の妄想の産物だもんね、この小説。」

ス「いや、二次創作なんてほとんどがm」



二人（以下：二）「ストップッ！！」

ス「す……すいません。」

徐「……まあ、『ネギま！』と『リリカルなのは』の原作キャラがほとんどジョジョに関連させていく』っていう、作者の考えは、少しずつ達成されてきてはいるかな。」

ア「確かに。A組にスタンド使いが数人いるし……」

ス「私はジョースター家の血を引いてるし……」

徐「ネギま！のストーリーを追いなながら、ジョジョ的なバトルをするってのは、結構大変だよな……」

ス「作者的には、所々にジョジョネタ組み込んだりするようにこころがけてるようだよ？」

ア「いや、やりすぎて『徐倫のテンションが高い』とか言われてたわよ？」

徐「作者もそれは反省してるから……」

ス「……何か、メメタアな話を中心にになってない？」

ア「いや、メ一個多いから……何でカエル殴っちゃったの……？」

徐「よし、次行こう。」

二「おiiiiっす。」

### 【重箱の隅をつついてみよう】

ア「って何これ？」

徐「あー、わかる人には分かるかもしれないが、この小説のサブタイトルは、ジョジョのサブタイトルをもじったものを使っている。」  
ス「うわあ、マジで重箱の隅だ……」

徐「で、次回から元ネタを後書きで表記することにしたんだが、前回までの分をここに書いておこうってなった。」

ア「いや、それ隅のさらに隅よね？」

徐「これを機に、元ネタ調べようって人が出るかもしれないだろ？」

ス「では、#01から順に表記します。」

全「どうぞッ！」

#01 / 出席番号11番 空条 徐倫 / 元ネタ：囚人番号FE4  
0536空条 徐倫（ストーンオーシャン 1（64）巻）

#02 / 教師スプリングフィールドの秘密 / 元ネタ：看守ウエスト  
ウツドの秘密（ストーンオーシャン 7（70）巻）

#03 / 空条 承太郎！高町 なのはに会う&#07 / 空条 承太郎！  
ネギ・スプリングフィールドに会う / 元ネタ：空条 承太郎！  
東方 仗助に会う（29巻）

#06 / 居残り授業を受けよう！ / 元ネタ：『ハンティング狩り』に行こう！（  
35巻）

#08 / 精霊（仮） その正体！ / 元ネタ：悪霊 その正体！（1  
3巻）

#09 / 遠い世界くから来たテロリスト / 元ネタ：遠い国から来たテ

ロリスト（SBR 4巻）

#10 / 学園長から第一指令；「学年最下位を脱出せよ！」 / 元ネタ：ボスからの第二指令；「鍵<sup>キ</sup>をゲットせよ！」（51巻）

#11～15 / ウルトラセキュリティ図書館 / 元ネタ：ウルトラセキュリティ懲罰房（ストーンオーシャン 7（70）巻）

#16 / 高得点コードなし！期末試験に挑め / 元ネタ：フライトコードなし！ボスの過去をあばけ（57巻）

#17～19 / 長谷川 千雨は静かに暮らしたい / 元ネタ：吉良吉影は静かに暮らしたい（37巻）

#20～21 / ミッドチルダのジョジョ / 元ネタ：ニューヨークのジョジョ（5巻）

徐「 とまあ、第二部からSBRまで、色々使ったもんだ。」

ア「 こうして見ると、六部と四部が多いわね。」

ス「 六部は徐倫がいるからだけど、四部は、この小説のイメージからじゃない？」

ア「 ああ、狭い範囲で巻き起こる感じが？」

徐「 確かにな。んじゃ、次は第二章の予告を、『だいたいこんな感じ』ってのをやるぞ。」

二「 どうぞッ！」

第二章 『EVAの世界』

新学期！

ネギに襲いかかる『敵』

「この世には……『いい魔法使い』と『悪い魔法使い』がいるんだよ……坊や」

エヴァンジェリンツ！

真祖の吸血鬼！

「すみません、ネギ先生、マスターの『命令』なので」

女性型ガイノイドロボット

絡操 茶々丸！

そして

「オレは、死んだはずの人間だ……」

蘇った男

三人が迫るッ！！

新たな仲間

「てめー……オレの髪がどうしただとコラッ！」

「お久しぶりでさあ、ネギのアニキッ」

襲いかかるスタンド使いたちッ！！

「知ってんだよオオオオッ！！国語の教師かっつ…っつ…っつおおお  
っおっオメーはよオオオオ」

「いえ、『英語』の教師です…」

「オレ『数学』ね。」

「『魂』を賭けます」

「グッド！」

「それは…逃げろ！」

「はいッ!？」

そして

「URYYYYYYYYY」

「はあああああああ」

決着の時！

果たして、エヴァンジェリンの『呪い』とは

t o b e c o n t i n u e d . . .

三「……………」

ス「ええっと……………またジョジョ勢が増えるの……………？」  
ア「ていうか、『蘇った男』って、どこサイド？」

徐「多分、死んだ男を一人一人チェックしていけばいいんじゃない？」

ア「てか、副題があつたよ？」

徐「ああ。第一章は「マキステル・マキぼくの夢は立派な魔法使い」だそうだ。」

ア「後付けってやつ？」

ス「……あ、もう時間みたい。」

ア「そうなの？てか、誰から聞いたの？」

徐「じゃあ、今回はこの辺で。」

三「では！次回の放送をお楽しみに〜〜」

(エンディングBGM：チーズの歌 by ジャイロ・ツェペリ)

t o b e c o n t i n u e d



#EX/幕間ラジオ『ジヨジヨのリリカルな放課後』第1回放送(後書き)

募集事項

『こんなのやったらどう?』というのを、募集します。ちなみに、修学旅行後には、刹那の似顔絵コーナーをやる予定です(笑)

では、次回からのエヴァ編をお楽しみに!

#22 / エヴァンジェリンが来る ? (前書き)

第二章 『EVAの世界』

始まります。

## #22 / エヴァンジェリンが来る ?

男が目覚ますと、そこは液体で満たされた、狭い筒状のガラスだった。

おかしい……オレはあの時死んだはずだ……なのに……なぜ……なぜ生きている……？

男がそう思っていると、白衣を着た男と、制服を来た女が歩いてきた。どちらも、にたような紫色の髪をしていた。

何かを話しているようだが、自分から遠いので、よく聞き取れない。

だが、近づいてきた時、ある言葉を聞き取ることができた……

実験は、成功したようだな。

それを聞いた途端、男は驚愕と同時に、怒りがこみ上げてきた。

『実験』だと？

まさかこいつらは！自分の「利益」のためにツ！オレを蘇らせ  
たのかッ！！？

！！？  
そんなことのためにツ！死者の眠りを！！魂を冒涇したのかッ

許さねえッ！！！

男は自分の『能力』を出して、叫んだ！

「ステイツキイイイイイ！フィンガアアアアアアアアアアズツ！！」

#22 / エヴァンジェリンが来る？

『2年A組』改め『3年A組』

「 という訳で、今日からこのクラスの副担任になる『東方  
仗助』だ！どうぞよろしく！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

黒板に名前を書き、自己紹介をすませる仗助。全員が頭に好奇の視線を送るが、口には出さなかった。いや、出せなかった。

(副担任ってマジだったんだな……………)

(まあ、A組のダブルスピーカー(ハルナと和美)に頼んで全員に連絡済みだから、髪型については大丈夫だろ。)

(そんなにヤバいの……………?)

仗助の髪型をけなすのはヤバいというのは、徐倫たちから聞いているスバル。だが、髪型をけなさなければ、極めて温厚な性格らしい。

「ん……………?」

ふと、隣の席の生徒が気になった徐倫。

明らかに自分よりも年下に見える容姿と身長。足下まで届くくらい長い、ウェーブのかかった金髪の少女。『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』だ。

だが、彼女はあまり教室にいるときがないし、徐倫も話したことは

少なかった。

その彼女が、何故かネギを強く睨んでいた……

コンコンッ

「ネギ先生、それに東方先生、今日は『身体測定』だ。A組も、すぐに準備をするように。」

「あ、そうでした。ここですか?」

「わかりました。わざわざありがとッス。」

ウエザーが来て、二人に言う。すると、

グイイ

「わっ!?!」

「聞いたなお前等。オレたちは『外出てるから』さっさと準備しろよ〜」

「……………は、はい……………」

ネギの襟をつかみ、そのまま外へ出ていった仗助。どうやらネギをからかおうとしていたのが数名いたらしく、落胆していた……

「あれ？今日まきちゃんは？」

「ん？そういえばいないね……………？」

「身体測定アルから、サボったとちがうか？」

「…前から思ってたけど、スバルって……………」

「スタイルいいです……………」

「本当……………何であんなに食べて、全然スタイルが崩れないんだろ……………」

身体測定が始まり、全員が下着姿となり、雑談をしながら体重計や身長計へ並ぶA組一同。

身長計を頭に強く「コンッ」と当てたり、体重を重くしたりするイタズラをする輩がおり、結構騒がしいことになっていたが……………

「ねえ、そういえば、最近寮で噂になってるアレ、どう思う？」

「ああ、アレね。」

「なんか胡散臭いよね。」

ウェーブの掛かった長い髪の少女 柿崎 美砂が桜子や

黒髪を短く切りそろえた釘宮 くきみやまじか 円と話すのを、偶然耳にするスバル。

「……………アレって？」

「ああ、スバルは寮暮らしじゃないから、知らなかったね。」

「結構前からウワサになってるんだが、満月の夜に寮の桜並木に、ポロポロのマントを着た吸血鬼が出るらしいんだよ。まあ、よくある怪談だとは思うがな……………」



スバルの疑問に、徐倫と千雨が答える。  
周りでは、吸血鬼の話で盛り上がっている。

「……バカらしい。吸血鬼なんている訳ないじゃない。」  
「そつだよねえ」

明日菜も話に加わり、スバルも賛同する。

だが、

「……いや、いるぞ吸血鬼。」  
「……!!?」

いきなり徐倫に言われ、明日菜たち二人は驚く。

「私ら『ジョースター家』の宿敵は吸血鬼だったらしい。実際、親父やじいちゃんは戦ったことがあるしな。」

「私の『波紋』も、元々は吸血鬼と戦うための技術だ。まあ、私は戦ったことないけど。」

「……ま……マジっすか?」

衝撃の事実が目が点になる二人。

実際、徐倫の曾祖父のジョセフ・ジョースターや、曾々々祖父にあたるジョナサン・ジョースターは、波紋を使い吸血鬼や屍生人<sup>ゾンビ</sup>を倒

しかし、さらには、それをも超える柱の男や、それから進化した究<sup>アル</sup>極生命体すら退けたという。

「…………でも、確かに魔法使いや異世界人、超能力者<sup>スタンド使い</sup>までいたんだから、吸血鬼がいてもおかしくないわね…………！」

「そこだけ聞くと、世界を大いに盛り上げる団長が泣いて喜ぶな……………」

明日菜に対して、千雨が訳の分からないこと（少なくとも、スバルにはそう聞こえた）を言っている。

「そのとおりだな、神楽坂 明日菜。」  
「……………」

いきなり幼い感じを残した声が出た。  
振り向くと、エヴァンジェリンがいた。

「ウワサの吸血鬼は、お前らのような元気で『イキ』のいい女が好きらしい…………十分気をつける事だ……………」

「え…………？」  
「はあ……………？はい……………」  
（……………珍しいな……………エヴァンジェリンから話しかけてくるなんて……………）

(あれ？何だろう……この感じ……)  
「ん？どうした、ネギ？」

何かを感じ取るネギと、それを気にかける仗助。そんな時

ダダダダダッ

「ん？」

「せ、先生ーッ大変やッ！まき絵が…まき絵がーッ」

保険委員の 髪と目の色素が薄い少女 和泉いずみ 亜子あこがかけてくる。

「…『和泉』？」

「どうしたんですか和泉さ  
ガラッ

「何！！？」

「まき絵がどーしたのッ！？」

「わああ〜！？」

「……………グレート」

二人が言い終わる前に、目の前に下着姿のA組一同が現れた……………

## 保健室

ネギと仗助、そして明日菜やスバルたちが保健室へ行くと、ベッドでは少し顔色の悪いまき絵が、すやすやと寝息をたてて眠っていた。

「ど……………どーしたんですかまき絵さん!？」

「何でも、『桜通り』で寝ているところを見つかったらしいわ……………

まあ、軽い『貧血』程度で、何の異常もないわ。」

(『桜通り』で……………?)

保険医の話聞き、『桜通り』という場所に、先ほどの話を思い出すスバルたち。ふと、スバルは自分の足に何か『つかれる』感触がしたので、足下をみる。足下には、「緑色のハンカチ」が落ちていた。それが、角の所でちよんちよんとスバルの足をつついていた。

「……あ。」  
「……」

徐倫や明日菜も気づき、スバルはハンカチを拾うと、ネギたちとアイコンタクトをとる。

保健室前の廊下

「で、お前がやられる程の相手だったのか？」

徐倫はハンカチ　否、ハンカチに取り付いた『グロウン・キッド』に話しかける。ハンカチに取り付いたため、手のひらサイズだが。

『フム、相手ハ「三人組」デ、一人ハ背ガ低ク、ボロボロノマントヲ着テイタガ、後ノ二人ハ顔ガ良く見エナカタガ、ソノウチ一人ハ『スタンド使い』ダ。近接パワー型デ、手強カタ。私ハソイツニヤラレタンダ。』

「三人組……それに、ボロボロのマントって、『吸血鬼』のウワサと一致するね……………」

「犯人は『スタンド使い』か……………」

『フム、能力マデ八分カラナカタガ、他ノ二人モソウダト考えラレルな……………』

「いえ、そうとも言い切れないんです。」

ネギの一言に、全員がそちらを向く。

「まき絵さんから、ほんの少しですが、確かに『魔法の力』を感じました。多分ですが、『魔法使い』と『スタンド使い』が手を組んで、何か悪いことを企んでるかと思えます……………」

「……………やれやれだわ。そうなると、かなりへヴィーな状況ね……………」

一応、ネギと仗助が『桜通り』あたりを見回ることになり、その場は解散となった。

夜の闇があたりを包み、街灯や、自販機の明かりのみが、狭い範囲を明るく照らすだけとなる。

夜空には月が浮かんでいる。今宵は満月だ。

そんな中、宮崎 のどかは、寮までの道を一人で歩いていた。元々気が弱く、引っ込み思案な彼女は、桜通りの吸血鬼のウワサを思い出し、ビクつきながら歩いていた。

「こ…こわくない〜 ……こわくないです〜 こわくないかも  
〜」

怖いのか怖くないのかよく分からない歌を口ずさみながら歩くのどか。

その時、

「ねえ」

「やひゃあッ!?!」

ビクウツ

いきなり背後から声をかけられて、思いっきり驚くのどか。話しかけた本人も、のどかの驚きぶりに、逆に驚いた。

「1」…「ごめん、脅かすつもりはなかったのよ…?」

のどかが振り向くと、知っている女性だった。

期末試験後に、スバルやネギたちから『魔法』について聞いたときに、一緒にいたオレンジの髪をツインテールにした人だ。

「あ、りゃ、りゃんすたーしゃんツ!？」

「いや、ごめん。一人で歩いてたから危ないなあって思って……」

まだ動揺しているのか、噛み噛みで話しかけた相手  
ティアナ  
と話すのどか。

「な、なんなら寮まで送るわよ？」

「あ、ありがとうございます」

その時、二人はただならぬ気配を感じ取った。

！何かいるツ!？

振り向くと、街灯の上にそれはいた。

魔法使いがかぶるようなとんがり帽子に、ボロボロのマント、そしてたなびく長い金髪。

「28番宮崎 のどかか……もう一人は知らないな……まあいい、悪いけど、少しだけその血を分けてもらおうよ!」

いうと、ソイツは二人に向かって飛び出してきた!

「なツ!？」

「キヤアアア!い、『イノセント・スターター』ツ!」



のどかは何か『イノセント・スターター』を呼び出し、左腕から『子亀』を三匹放つ！

だが、ソイツはひらりと子亀をよけて、さらに近づいてくる！

その時！

「待てええええッ！」

「ん？」

突然制止の声がして、踏みとどまる。のどかは完全に気を失い、テイアナがそれを受け止める。

「ぼ…僕の生徒に何をするだアーーーーッ（あ、噛んじゃった……

……）」

（噛んだ……）

（うわあ、大事なところで噛んだ……）

来たのは、杖で低空飛行するネギ！すでに呪文も唱えている！

「テイアナさん！」

「ええ！」

ティアナはのどかを連れて下がる

「魔法の射手・戒めの風矢!!!」  
サキタ・マギカ  
アエル・カプトウーラエ

風の矢を吸血鬼に向かい放つ!

しかし!

「もう気づいたか……………氷楯……………」  
レフレクシオー  
バキキキイイイン  
「!!!」

薬品のようなものを放ると、ネギの放った風の矢が、すべて跳ね返される!

「あ、あいつ!」  
「やっぱり犯人は……………」  
『魔法使い』ツ!?

吸血鬼の正体に驚く二人。  
その時、はじめた衝撃で、吸血鬼のとなり帽子が飛ばされる

「こ、子供……………?」  
ウチのクラス  
「えッ!?き、君はA組の…エヴァンジェリンさんッ!?!」

帽子の下にいたのは、ウェーブのかかった長い金髪に、幼い容姿の

少女 エヴァンジェリンだ。

「ふふ…十歳にしてこの『魔力』……さすがに『ヤツ』の息子だ  
けはある……」

出血した自分の手をなめながら、エヴァンジェリンは怪しく笑う…  
……

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #22 / エヴァンジェリンが来る ? (後書き)

22話、そして第二章の始まりです。

・サブタイトルは『ブチャラティが来る』から。サブタイトル通り冒頭で来ましたが(笑)

・手のひらサイズのグロウン・キッドはお気に入りに。布ならリボンでもOKなので、ハンカチでも可です。そこから思いつきました。

・「何をするだアー……ッ！」は、途中で思いつきました(笑)

・今回は、冒頭でブチャラティを出した理由が明らかに ?

では！

#23 / エヴァンジェリンが来る ? (前書き)

ネギを襲う『吸血鬼』エヴァンジェリン！  
果たして、その目的とは！？

## #23 / エヴァンジェリンが来る？

「ふふ…十歳にしてこの『魔力』……………さすがに『ヤツ』の息子だけはある……………」

(……………ヤツ……………？ネギくんのお父さんのこと？確か『サウザンド・マスター』って……………)  
「な……………何者なんですかあなたはッ！？僕と同じ魔法使いなのに、なぜこんなことを！？」

エヴァンジェリンに向けて杖を突きつけ、問いかけるネギ。ティアナも、待機状態の『クロスミラージュ』を取り出す。

「簡単なことだ……………この世には……………『いい魔法使い』と『悪い魔法使い』がいるんだよ……………先生。」

言うと、エヴァンジェリンは懐から小さなフラスコと試験管を取り出す。中には、それぞれ違う『薬品』が入っている。

フリーゲランネクサルマテイオー  
「氷結・武装解除ッ！！！」

それを投げつけ、魔法を発動させる！

「うあっ」

「きゃあッ！！」

パキイイイイン

『武装解除魔法』を何とか防ぐネギだが、服の一部が『凍り付き』そのまま砕けてしまう。ティアナはクロスミラージュを落としてし

まい、それどころか

「て、ティアナさん、大丈夫で……ってわあっ!？」

「って! デバイスはともかく、何で服まで脱がす必要があるのよオオオオオ!？」

のどか共々、『全裸に』なってしまった……

#23 / エヴァンジェリンが来る ?

桜通り近くの道

「<sup>うちのクラス</sup>A組の出席番号26番『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』………そいつが『吸血鬼』の正体か!」

バイクを脇に止め、またがりながらネギからの電話で吸血鬼の正体を聞いた仗助。どうやら、エヴァンジェリンはこちらに向かって逃走中らしい。後から来た明日菜やスバル、徐倫たちに二人を任せて、ネギも追跡しているとの事だ。

「分かった、オレもそっちに向かうぜッ!!」

そう言っつて携帯電話を切ると、桜通り方面へバイクを走らせる。

しばらく走らせると、歩道橋から『黒マントの少女』が飛び降りたかと思うと、そのまま飛んでいったのを見た。後ろからは、ネギも走ってきている。

「ムっ、あれだな！ネギッ!!」

「東方先生!？」

「そのまま杖で『飛べ』！オレも『そっちに行く』ぜ!!」

ネギは躊躇うも、言われた通りに飛んだ。心配になつて仗助の方を見ると、彼はスタンドを出していた。

力強い印象を持つ筋肉質な体に、メタリックブルーのプロテクターを身につけたようなデザインで、頭には上部がハート型になった兜をかぶり、首から肩にかけて『動力パイプ』らしきものが六本つながつているスタンドだ。

名を、「クレイジー・ダイヤモンド」という。

ネギは最初、仗助が『クレイジー・ダイヤモンド』を出した意味が分からなかったが、すぐに分かった。何故なら



「ドラァツ!!」

ドン!

「ええッ!？」

ガシィッ

バイクから、ネギの杖まで『跳び』、そしてそのまま杖をスタンドで『掴んだ』! 操縦者を失ったバイクは、そのまま壁にぶつかり、大破する。

「うわつとと……な! 何やってるんですかッ!？」

「ああ、バイクなら気にしなくて平気だぞ。中古だし。」

「ちっがーッ!」

仗助の的違いな返答に、思わず叫ぶネギだった。

「で、あいつ、エヴァンジェリンが吸血鬼なのか？」

「え、ええ。でも、何かおかしいんです。」

「『おかしい』?」

「はい……スゴ腕の魔法使いにしては、魔法の威力が弱かったんです。それに、さっきから魔法の発動にわざわざ魔法薬を触媒に使ってました……何でか分かりませんが、あの人は魔力が全然弱いんです。」

仗助には魔法のことは分からないが、いえることが一つあった。

「…………ネギ、『魔力が弱い』からってよお、油断したらケガするぜエ…………ドラァツ!!」  
ブオンッ

言うと、仗助はクレイジー・ダイヤモンドに『何か』を持たせて、それを投げさせた。

何かはヒュンヒュンと音を立てながらブーメランさながらに回転し

ゴキンッ

「タコスッ!？」

完全に油断していたエヴァンジェリンの脳天に命中し、エヴァンジェリンそのまま近くの建物の屋根へ落下していった。

「よしッアイツの所まで降りるぞ!」

「い、意外と無茶するんですね…………」

二人はエヴァンジェリンが落ちた建物まで降りると、エヴァンジェリンは後頭部にできたマンガみたいなタンコブを、涙目で押さえていた。  
周りには、割れた瓶やフラスコが散乱し、マントもどこかへ飛んでいってしまっていた。

「くっ…………東方 仗助かッ! 貴様、この私に何てことを…………っ!」

「へっ! 不良生徒に『教育的指導』だよ!! 『PTA』には内緒だ

「からな。」

「内緒ならやるなよツ!? 冗談抜きに痛かったんだぞツ!!」

さっきまでのシリアスな雰囲気はどこへやら、涙目で叫ぶエヴァンジェリン。完全に子供にしか見えない。

「え、……ええと、もう『マント』も『触媒』もないあなたに勝ち目はありません。教えてもらいますよ……何でこんなことをしたのかを……!」

少し入りづらい雰囲気だったが、エヴァンジェリンに再び左手の杖を突きつけるネギ。

だが、エヴァンジェリンは冷静な顔に戻ると

「ふ……『これ』で勝ったつもりなのか?」

「! そうだ……ヤツには二人の仲間が……!」

仗助が言つと同時に、

ボンッ

「「！」「」

ネギの左手が『切断』された！いや、切断ではない！

良く見ると、断面に『金具』がいくつもついており、その先には『取っ手』らしきものもある。そう、これは

「じ……………『ジッパー』……………？はっ」

見ると、建物の屋根にも同様に『ジッパー』がひっついており、そこから腕　　いや、『男』が出てきた。

おかつぱに切りそろえた黒髪に、両コマカミにはヘアピンをつけている。顔立ちは整っているが、一目で『日本人』ではないことが分かる。ジッパーがそこら中に付き、オタマジャクシのような水玉柄の白いスーツを素肌に着ている。見たところ、二十代ではないだろうか？

「てめえ……………スタンド使いかッ！」  
ドバババ！

返答を待たずに、仗助は『クレイジー・ダイヤモンド』の拳を放つ！だが、男もスタンドを出して防御する！

まるで、目元まで帽子をかぶったような頭部に、拳や首、腰や足にまでついたジツパーが印象的なスタンドだ。

「ネギツ『タスク牙』だ！牙で狙い撃て！！」

「は……………はい！」

ネギは残った右手の爪を回転させて、エヴァンジェリンを狙う。

だが！

ガシィッ

「なっ!?!」

いきなり後ろから右手を掴まれた。そちらを向くと、緑色の長髪に、機械的な耳飾り(?)をつけた少女がいた。

「き……………君はうちのクラスの……………」

「すみませんネギ先生……………」『マスター』の命令なので……………」  
「く……………どうということだてめえら……………」

驚愕する二人に、エヴァンジェリンの『勝ち誇った』声が聞こえた。

「ふふ、紹介しよう先生方。私の従者の『パートナー絡繰からくり茶々丸ちゃまゐる』とブ」「  
『ブローノ・ブチャラティ』だ。エヴァたちが世話になってるみた  
いだな。」

エヴァンジェリンの言葉を遮るように、男　ブチャラティは自

己紹介をする。

「ってブチャラティ！私を差し置いて自分で言うなッ！！」

「文句を言うんじゃない。こんなことに付き合っただけだ。」

「こ……『こんなこと』だと……？私はいいつの親父、『サウザンド・マスター』に魔力を極限まで封じられたうえに……も……『20年』もあのお気楽なクラスでお勉強させられてんだよ！！どーしてくれるんだッ！！！！」

「ええッ！？」

「って何でそこでネギに振るんだよ！？」

いきなりネギに掴みかかるエヴァンジェリンにつっこむ仗助。だが、これで事情は分かった。

「……つまりてめえは、ネギに親父の尻拭いをしろってのか？」

「……まあ、そんなところだ。このバカバカしい呪いを解くには、『ヤツ』の血縁者の血が必要なんだな。そのために、わざわざ危険を冒してまで血を飲んできた。」

「で、俺はそれにつき合わされてるってわけだ。しかたなくな……」

……

「大変だな……だがなエヴァンジェリン、こんな言葉を知っているか？」

「？」

エヴァンジェリンを見据えて、仗助は言った。

「『相手が勝ち誇ったとき、そいつはすでに敗北している。』！」

「……」

仗助が言い放った瞬間、エヴァンジェリンは『ある男』と仗助がかぶって見えた。そう、減らず口ばかり叩く、気に食わないあの『トッポイ男』と

「！マスターツ！！」

「！？」

茶々丸の叫びで我に帰ったエヴァンジェリンは、自分に向かって飛んできた『何か』を避けるも、そのせいでネギから離れてしまう。飛んできたそれは仗助の元まで行くと、

カシイイイン

仗助の持っていた『グリップ』と合体して、ようやくそれが何なのかが分かった。

「ば……………『バイクの』……………」

「『ハンドル』……………?」

「ああ……………さっきお前に投げたのもこいつだ。オレの『クレイジー・ダイヤモンド』は、『破壊されたものを治す』能力！だがなあー、こいつはお前に『攻撃するため』に治したんじゃあーねーぜえ〜」

仗助の言うことがいまいち分からないエヴァンジェリンと茶々丸だが、ブチャラティはある仮説を立てた。

(「治す能力」? …… 『バイクのハンドルを治した』? …… いや、まさか!)

「ウチの居候に何すんのおーーッ!!」  
ドグシヤア

「へぶうッ!?!」

いきなり後頭部(しかも、さっきコブができた位置)に跳び蹴りを喰らうエヴァンジェリン。蹴ったのは

「あ…………… 『アスナさん』!?!」  
「大丈夫ネギくん… ってその腕!?!」

来たのは、明日菜にスバル、そして、飛んできた『仗助のバイク』にまたがった徐倫だ。

「信じてたぜえ〜徐倫〜!」 『ハンドルのないぶつ壊れたバイク』を見て! そいつでオレたちのここに来るってよお〜!」



「まあ、振り落とされないように踏ん張ったから大変だったわよ……で、あんたたち、覚悟はいい？」

エヴァンジェリンに向けて『ストーン・フリー』の拳を向ける徐倫。完全に、エヴァンジェリン側の旗色が悪かった。

「くっ、おのれ神楽坂 明日菜……！今日は引いてやる……！だが、次はないと思えよっ……！」

そう言つて、ブチャラティが出てきた穴から退散するエヴァンジェリンと茶々丸。だが、ブチャラティは、ネギに近づいてくる。

「あ、あんた！ネギに何する気よ……！」

明日菜はネギをかばうように身構えるが、ブチャラティは、切断したネギの左手を拾うと、

「見せてみる……今から引っ付けるから。」

「え？」

言つと、ネギの左手の切断面同士をくっ付けて、ジツパーを『閉じる』ブチャラティ。「すまなかつたな……」とだけ言つて、穴へ行くと、同様にジツパーを閉じた。

「な……何だったの……あいつ……」

誰に言つてもなく呟いた明日菜の声は、夜の闇に消えていった……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
. . .

## #23 / エヴァンジェリンが来る ? (後書き)

23話です。

- ・サブタイトルは前回同様、「ブチャラティが来る」から。
- ・今回は、仗助の活躍と、ブチャラティの登場回です。「クレイジ
- ー・D」の能力を最大限に発揮させることができたと思ってます。
- ・ブチャラティはエヴァサイド。エヴァに付く理由等は、追々出す予定です。

・バイクに乗って援軍参上！は、「ハイウェイ・スター」を読んで思いついた展開です。結構お気に入りです。

・次回は、『あいつら』が麻帆良に上陸…？

では！

#24 / ナンバーズ 空条 承太郎への依頼（前書き）

エヴァンジェリンやブチャラティを退けたネギたち。一方、千雨たちは

#24 / ナンバーズ 空条 承太郎への依頼

グリーン・ドルフィン・ストリート麻帆良 206号室 玄関前

「今、徐倫から連絡メールがきた。エヴァンジェリンたちと交戦したが、逃げられたらしい……………」

エヴァンジェリンに『全裸』にされたティアナを送り届けに来た千雨。一応自分の服を着せて玄関前まで来たが……………」

「……………あのチビっ子がああああ……………次にあつたら……………次にあつたらああ……………」

「……………気持ちは分かるが、とりあえず落ち着け、な？」

全裸にされた怒りで、全く聞いてなかった……………」

(しかし『吸血鬼』か……………私の『波紋』が通用すればいいんだが……………)

そう考えながら千雨が玄関のドアを開けようとする

ガチャリ

「ん？千雨にティアナか……………今帰りか？」

「……………つて、え？承太郎さん！？」

「ミッドから帰ってたんですか？」

ドアが開き、中から承太郎が出てきた。その後ろの陰からは、フェ

イトが顔を出して来た。

「あ、ちょうど良かった。ティアナ、スバルが帰ってきたら詳しく話すけど、中でちよっと『任務の追加』の話があるんだ。」

「『任務の……追加』……ですか？」

（つて、おいおいおいッ！！また『やっかい事』が増えるのかよッ！？）

フェイトから告げられた『任務の追加』に、ティアナは疑問を浮かべ、千雨は『やっかい事』の追加にうんざりした心境となった。

#24 / ナンバーズ 空条 承太郎への依頼

翌日の放課後

駅前公園

「え？『任務の追加』ですか？」

「ああ、私は聞く前に帰ったから内容は知らないけどな。はあ、矢のことやエヴァンジェリンの事まであるのに……」

「ま、仕方ないだろ……」

「後でフェイトさんたちから話があるから、8時にうちに集合ね。」  
「りょーかい……………」 ダウン ウンDX、録画しとくか。」

徐倫とネギとスバル、そして仗助と千雨の5人は、公園を歩きながら『任務の追加』について話をしていた。明日菜は木乃香と何やら用事があるらしく、後から合流するそうだ。

その時、前から歩いてきた少年 黒いソフト帽をかぶり、ベストとネクタイをしている。 が、ドンツと仗助と肩がぶつかってしまふ。

「っと、わりいな、よそ見してて……………」

「いえ、すみません……………」

少年は仗助の顔をチラリと帽子の縁から見て、呟くように謝った。そして、立ち去る仗助たちをしばらく見た後、自分も歩きだした。

この時、少年が仗助を知っていたら、こんな事にはならなかっただろ……………」

だが、起こってしまった事を後悔しても仕方がない……………」

それはもう、起こってしまった事なのだから……………」

立ち去ろうと振り向いた少年は、こんな事を呟いてしまった。

「……………変な髪型。」

「えッ!?!」

「今……………あいつなんつった!?!」

徐倫と千雨は戦慄した。

今、あの少年は何といった?

今あの少年は、一番言っではいけない事を、仗助に言わなかったか?



いや、おそらくあの少年は、聞こえたとは思ってない……………  
だが、もう遅い！

恐る恐る仗助の顔を見ると

プツツーーーーーン

普段の温厚で人懐っこい雰囲気がなくなり、まるで封印を解かれた大魔神のごとく怒りを露わにした仗助が、そこにいた！

「ひ…東方先せ」「おいてめえッ！……………オレの髪型が何だとコ  
ラアッ！！」  
「えッ？」

仗助のドスの利いた声に、少年はビックリしたように振り向いた。  
そうとう困惑した表情だ。

「マズい！おじさんの髪型をけなすなんてッ！！」  
「おい、お前ッ！さっさと逃げろッ！！」

千雨が言うが、間に合わなかったようだ。仗助はゆらりと少年に近づいたかと思つと、

ドドドオッ！！



ブンッ

「!?!」

いきなり少年が消えて、帽子だけが残っている!?

「やれやれだぜ……仗助、お前まだその性格直ってねーから、前の学校クビになっただらろーが!」

いきなり右手から声が出たかと思うと、少年を掴んだ承太郎がいた。この時、スバルは少年の正体に気づいた。

短く切りそろえた茶髪に、何を考えているか分からない目。そう、彼……否、『彼女』は

「お………『オットー』?」

そう、戦闘機人『ナンバーズ』No.8、オットーがそこにいた。

さかのぼる事数週間前

ミッドチルダ 海上隔離施設

ここでは、数ヶ月前に起きた『J S事件』で保護された戦闘機人『ナンバーズ』の内、管理局に協力的な七人に加え、『レリッククウエポン』とされた少女、ルーテシア・アルピーノと、『ユニゾンデバイス』アギトが、『更生プログラム』を受けていた。  
現在は昼休み。ナンバーズとスバルの姉ギンガは、昼食をとっていた。

「そうか、スバルは今97管理外世界にいるのか。」

「うん、六課の運用期間を延ばすくらいの事件らしいから、心配で食事ものを通らなくて……………」

「……………いや、そんだけ食べられれば十分だと思うけど……………」

ギンガと同席する三人は、冗談のように山盛りになったナポリタンスパゲティを見て、そう呟くしかなかった……………

「しかし、管理局も認知していなかった能力、『スタンド』か……………」

銀髪の長い髪に、右目につけた眼帯が特徴の少女　チンクが言う。

10歳ほどにしか見えないが、5という名前の示すとおり、更生プログラムを受ける七人の中では一番年長なのだ。

「私たちのISは、インヒューレント・スキルスタンドを目指して生まれたっていうから、ドクターは知ってたのかな？」

「さあ……………？今、局員の人が調べてるみたいだけど……………」

隣に座る、長い茶髪を後ろで止めた少女　　ディエチに、少し曖昧な答えをするギンガ。

「まあ、知っていたにしろ、ドクターの場合は　　」

水色の髪のセインが言おうとするが

ズドオオオオオン

「「「!!?!?」「」」

突然発生した爆発により、遮られた……

爆発の40秒前

三階 女子トイレ

ガチャ

「うっっん……………」

「ん？ノーヴェ、便秘ツスカ？」

「ちげーよッ！ーいや、なんか今朝変な夢見てさ……………それがなー

んか気になるんだよ……………」

トイレの個室から出た短髪の赤毛の少女　　ノーヴェは、今朝見た夢が気になっていた。

なお、後日談になるが、このことをスバルに話したところ、スバルが以前見た夢と同じ内容であることが判明した……

「夢ですか？」

「ああ……………なんか不気味でグロい夢だったんだが、全部覚えてんだよ……………いやな夢なのに……………」

洗面台にいたオットーと、オットーの髪を伸ばして、胸を大きくしたような少女　　デイドにも話すノーヴェ。側には、赤い髪を後ろで束ねた少女　　ウエンデイもいる。

「で、どんな夢だったんすか？」

「出来れば食事の後に話させてくれ……………思い出しただけで吐きそうだ……………」

ノーヴェが気持ち悪そうな顔をしていると、トイレのドアが開いた。入ってきたのは、薄い紫色の髪をした、10歳位の少女だ。前髪を左右で止めており、額にはなにやら紋章のようなものが描かれている。表情は乏しく、見ただけでは感情を読みとることができない。

ルーテシア・アルピーノ

それが少女の名前だった。

「あ、お嬢様。アギトは？」

「先に食堂に行った。」

淡々と言い、ルーテシアが個室に入ろうとした時

ズドオオオオン

「「なああああッ!？」」

「「「!?!？」」」

便器が爆発した!それも、全部の個室の便器がだ!

「……………くっ、お前ら!無事かッ!？」

「だ……………大丈夫ツス……………」

爆発であたりに蔓延していた煙が窓から逃げていき、床一面水浸しになったトイレで、ノーヴェが全員の安否を確かめる。



「デイド、平気……?」

「うん……お嬢様はッ!?!」

デイドが気付き、全員がルーテシアのいたほうを見ると

「……………」

「……………事オオオオオオオオ!?!」

便器が頭にすっぽりと『ハマった』ルーテシアがいた……………

「いきなり爆発したと思ったら……………うまい具合にトイレが飛んできて……………そのままガポッと……………」

「あー、言わなくていいッスよ……………」

便器で顔が見えないが、心なしか涙声のルーテシアをなだめるウエンデイ。ノーヴェは何か便器を引き抜こうとするが、うまい具合にはまっているらしく、なかなか抜けない。

「だめだ、抜けねえ……………こりゃギンガを待ったほうがよさそうだな……………」

「私………一生このままなの………?」  
「いや、そんなことないから………ギンガなら一発で粉々にできるから………」

本来ならノーヴェエがやったほうがいいのだが、施設内での『力の使用』は禁じられているため、現在施設内で破壊できるギンガを待つことにした。

ノーヴェエがそう決定したときだった………

オットーは、水浸しの床に、何かを見つけた………

それは、まるで『鯨の背ビレ』のようなものだった………

そして、その背中には、『人間』らしきものが『掴まっている』  
が見える……………

オットーが何だろうと思ったとき

ガブウ

「「「「「！……！？」」「」「」

鯨が飛び出して、デートに『食らい付いた』！！

「が……………」……………「わは……………？」  
「デュードゥ……」



の事件と関連していると考えた。

そこで、六課にデイドの搜索を依頼しようとしたのだが、ここで問題が起きた。『ナンバーズ』たちが、自分たちに搜索させてほしいと願いだしたのだ。

「『妹』であるデイドが連れ去られて黙ってはいれない」とは、ノーヴェの談だ。特にデイドの『双子』の姉であるオットーは、自分の目の前で妹が連れ去られてしまったのが悔しいのか、その目には『漆黒の意思』が宿っていたと、ゲンヤは語った。

ゲンヤが上層部うへに申請したところ、人手不足だからか、『更正プログラムの一環としての『奉仕活動』』という名目で許可が下りた。こうして、ナンバーズ6名にルーテシアとアギト、そして『見張り役』を加えた計9名が、承太郎、フェイト、ギンガとともに、麻帆良に降り立った。

グリーン・ドルフィン・ストリート麻帆良 206号室

「まあ、そんなわけで、こいつらの妹探しに協力してやってくれ。」

承太郎がそういつてしめた。周りにはナンバーズや六課、そしてス

タンド使い組やネギ、明日菜、あやかと、かなりの大人数だ。普通ならガヤガヤとうるさいものだが、なにやら全員静かだ。特に普段からやかましいウェンディやセインは、借りてきたネコよりもおとなしい。というのも

(え？あんなたちも承太郎さんに？)

(ああ……………うっおとしって怒鳴られた……………)  
(……………『うっおとし』？)

まあ、承太郎が原因な訳で……………

「……………まあ、デートさんに関しては、エヴァンジェリンさんたちと平行してSPW財団と調べますわ。」

「ああ、頼む。」

「う……………そうだった……………エヴァンジェリンさん……………また襲ってくるのかな……………」

「まあ、吸血鬼相手なら千雨の波紋で何とかなるだろ。」

「人事みたいに言っちなよッ！」

千雨が『波紋使い』と言えど、師匠であるリサリサ曰く『まだまだヒヨッコ』である。スタンドによる補正はあれど、吸血鬼を相手にしたことはないのだ。

「……………まあ、こんだけ魔法使いやらスタンド使いがいるんだ。奴らもしばらくは手を出さないだろ……………」

「だといいんだが……………」

ふと、仗助はオットーが目に入った。彼女は、仗助の能力でまるで竜巻のように変形した帽子をじっと見つめていた。

「その……さつきは悪かったな……オレよ、この髪型をけなされると、ついキレちまうんだよ……」

仗助が隣に座り、オットーに謝るも、オットーは返事をせず、ただ帽子を見つめるだけだ。

「……『妹』のことか？」

「……はい」

「……ま、SPW財団が動いてるんだ。すぐに見つかるぜ！」  
バシィッ

「うっ……はい……」

仗助はオットーの背中をたたき励ます。強すぎたのか、オットーは痛そうな顔をしているが……

「で、『見張り役』ってのが……」

千雨がそちらを向くと、ネギや明日菜もそちらを見る。視線の先には

「……犬？」

そう、犬だ。

オレンジの毛並みで、額には宝石のようなものが着いている。大きさは子犬ほどで、床にべったりと寝そべっている。その犬が、千雨たちに顔を向けたかと思うと、

「『狼』だよ！」

「あ、そうなの？ごめんね。……………って！」

「……………喋ったアアアアアアアアアアッ！！？」「……………」

いきなり犬、いや、本人曰く狼が喋ったため、スタンド使い組＋明日菜は、驚愕の声を上げた。

「あ、紹介がまだだったね。私の使い魔のアルフ。今回は見張り役つてことで、来てもらったんだ。」

「え？所 ヨージ？」

「そっちじゃないよッ！！私メル ック星人じゃないからッ！！」

「あ、アルフ、落ち着いて……………」

明日菜のポケに律儀につっこむアルフ。

そんなアルフをなだめている時、フェイトは気づいた。アルフが何かを『抱え込んでいる』事に。



「アルフ……………それは？」  
「ん？ああ、さっきそこで捕まえたんだ〜」 後でオヤツにしよう  
と思つて」

見ると、白くて細長く、毛がフサフサしている。しかも良く見ると、  
手足や尻尾まであつた。

「……………アルフ……………それ、『オコジヨ』だよな？ダメだよ！そん  
なの食べたらツ！…誰かのペットかもしれないしツ！…！」

「う……………ごめんよフェイト……………」

「え？『オコジヨ』……………？」

オコジヨと聞いて、ネギはそちらを見る。そして気づいた。  
全身傷だらけだが、間違いない。あれは！いや、『彼』は！…

「カモくんツ！…」  
「ん？『カモ』？だれそれ？」

ネギがいきなり叫んだため、一同がそちらを向く。そして、ネギは  
オコジヨを抱き抱えると、アルフに噛まれたりなんなりされて、瀕  
死の状態のオコジヨは……………

「ネ…………ネギの兄貴ツスカ？へへっ…………情けないったら…………あ  
りゃしないが…………これでお別れみたいでさあ…………………がく  
っ」

「か、カモくウウウウんツ！……！」

一通り喋ると、自分で『がくっ』って言って気絶した。

………………あれ？

「……………喋ったアアアアアアアアッ！……？」「……………」

本日二回目の叫び声が、206号室に響いた。

この後、オコジヨは仗助に治療してもらい、一命をとりとめたそう  
な。

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #24 / ナンバーズ 空条 承太郎への依頼（後書き）

24話です。

・サブタイトルは「保安官 マウンテン・ティムへの依頼」から。  
・仗助の初の被害者はオットーでした（笑）ちなみにオットーの服装は、仮面ライダーWの翔太郎が元ネタです。何か、オットーに似合いそうだったので。

・デイド誘拐。それを探するためにナンバーズ（更生組）、麻帆良上陸。人数が増えて、にぎやかになった分、ちゃんと全員動かせるように頑張ります（^ー^；）

・アルフにつれられカモ登場。少し無理やりだったかなと反省。

・今回は、カモに挽回のチャンス！があるのか？

では！

#25 / オコジヨはネギ・スプリングフィールドが好き (前書き)

アルフに連れられてきたオコジヨ。彼とネギの関係とは……………？

## #25 / オコジヨはネギ・スプリングフィールドが好き

5年前

イギリス ウェールズの山中

「くつ…………『猫の妖精』にも並ぶ由緒正しい『オコジヨ妖精』の漢のおれっちが、こんなチンケな罾にかかるなんて…………情けねえ！」  
草むらをのぞくと、誰かが仕掛けた罾に脚を挟まれて動けなくなつたオコジヨがいた。そのオコジヨは、脚を挟んでいる罾に手をかけると

「こんな事じゃ！『漢の中の漢』にはなれねえべツ！一気に引っこ抜いてやんよおおお！！」

罾から脚を引っこ抜こうとし始めた。そんな様子を見てられなくなつたのか、少年が草むらから出てきた。

「あつ！嘘です！ごめんなさいッ食べないでッ！！」  
「大丈夫、罾を仕掛けた大人には僕が言い訳しとくからね。」  
「……………へ？」

オコジヨは最初、少年が言ったことが分からなかった。少年は『治癒呪文』をかけると、オコジヨに「もう引っかかっっちゃダメだよ。」  
と言い、オコジヨを逃がした。

しげらくするよ

「コラツネギ！エモノ逃がしただろツ！！」  
ポギヤツ

「アイテツ」

「……………」

大人に叱られる少年      ネギを遠くから見て、オコジヨは思った。

この人こそ…………『漢の中の漢』だ……………！

#25 / オコジヨはネギ・スプリングフィールドが好き

「　　ってというのが、おれっちとネギの兄貴の出会いなんですさあ  
ー。その後も色々とお世話になりやして。」

「へー？」

「『漢』……………ねえ……………」

「いや、懐かしいなあ。カモ君、大きくなったね。」

回復したオコジヨ　　アルベール・カモミール（通称：カモ）と  
ネギの馴れ初めを聞いていた一同。

なお、聞く前にアルフが「人間形態」に変身したため、先に見てい  
た承太郎以外のスタンド使い組が、大いに驚いていた。  
千雨曰く、

「スタンドも魔法も『非現実』ファンタジーだが、同族同士でも知らないことは  
多いため、驚くのは無理はない。」

とのことだ。

「ところで兄貴、ちっとも進んでねえみたいじゃないですか！」  
「え？何が？」



「パートナー選びツスよパートナー選びツッ！良いパートナー探さないよ」立派な魔法使いマジステル・マジになるにも、カツコつかないんでしょー！？」

「パートナー？」

「なにになにに……、恋人のこと……？」

「十歳ガキのクセに生意気ツスね……」

カモの『パートナー選び』を聞き、一同はネギを茶化す。だが、仗助は違った。

「……………そういやあ、エヴァンジェリンもあの二人を『パートナー』って呼んでたな……………何か『魔法使い』と関係あるのか？」

「まあ、簡単に言えば、『魔法使いをサポートする人』ってとこツスかね。魔法使いつてのは、呪文を詠唱する際にはどうしても無防備になるんで、その際に魔法使いを守る役割もありますよ。」

「そういう人を、魔法使いほくたちは『魔法使いマジステル・マジの従者』と呼んでるんです。特に、マジステル・マジになるんだったら、パートナーの一人もいないと、格好つかないんですよ。」

二人（？）の説明を聞き、仗助たちはこの間の状況を思い出した。

この間は、ブチャラティにネギの『魔法』を封じられ、茶々丸には『タスク』を撃てないように押さえられた。

「なるほど、確かに今のネギには必要かもな……………」

「……………実は僕も、これから探そうと思ってたんですが……………」

「そうスか……………でも、おれっちが来たからには、もー大丈夫！おれっちは、兄貴の姉さんに頼まれて、助っ人に来たんスよーッ！」

タバコをくゆらせながら言うカモ。直後にフェイトに「禁煙よ」と

消されたが……

「まあ、こん中にも、なかなか良い人材がいるみたいですし……」

と、部屋中を見渡すカモ。

「……確かに、ここには魔法使いやスタンド使いがわんさかいるからな……どうだネギ、こん中から選ぶか？」

「ええっ！？で……でも……」

仗助とカモの言葉に、オロオロしだすネギ。だが、約一名過剰反応した者がいた。それは

「ネ………ネギ先生のパートナーですってえええええッ！？」

「い………いいんちよ！？」

あやかだった。

どうやら彼女はネギに『恋愛感情』を抱いているらしく、A組内では、『いいんちよはシヨタコン』で有名である。

「そ………それでしたら、是非ともこのわたくしをッ！！」

「ちょ……落ち着きなさいよ……！」

「いや、兄貴はまだ子供なんで、『仮契約』を数人として、将来一人を選ぶ形になるツスね。ほんじゃま！一発『ブチュー』っと仮契約しますかッ！！」

「ええっ！是非ともブチューっと！……ブチュー？」

全員、『ブチュー』の単語にフリーズする。そして、きっかり十秒後

「つてえええッ！？ブチューつて……き……」

「……キス」ウウウウッ！！？」

「まあ、一番簡単な契約方法なんでさあ。」

『仮契約には『キス』が必要……それが、雪広 あやかの『恋』という炎に、油どころかガソリンを注いだ！

「な……なああんですつてええええええええええッ！！！！」  
ブシューウウウ

「興奮のあまり鼻血が噴水のごとくッ！？」

「あああッ！ネギ先生とキスができるとはッ！！では」

そう言うと、手元のラップトップパソコンをチャカカカッと操作し始めるあやか。そして、操作し終えたのか、モニターをネギの方へ向ける。

「では、先生はどれが好みなのか、番号キーを選んで押してください。なんでも、1500年前のインドの『カーマストラ』という本には、48以上もの『仕方』が載っているそうですが……」

見ると、モニターには9種類の『キスの仕方』が表示されていた……

「……って子供に何を聞いてるんだアアアッ！……」

ドグシヤア

「ヒャブッ」

何やらアブナイ雰囲気にあやかに、明日菜、徐倫、千雨の同時攻撃が決まった！

「全く………てか、何でキ……キスなのよ？」

「いや、他にもあるんすけど、色々と面倒なんで………」

「あいつ………一晩で手編みのセーター編み上げる勢いだっただぞ………」

「マジで危ないんじゃないッスか………？」

とりあえずあやかの心配をするノーヴェたち。

「じゃあさじやあさ、ティアなんてどう？ ラーメン真拳使えるよ？」  
「何で私！？ てか私そんなの使ったことないネ！ 適当に言うんじゃないアルよッ！！」

スバルの、空気が読めない上に『中の人ネタ』な発言に、ご丁寧にチャイナ口調でつつこむティアナ。横ではディエチが「あるの？ なの？」と不思議そうだが……

「まあ、無理に今決める必要はねえだろ。だがよおー、カモの話からすると、そこが『つき目』だな。」

「ああ、『呪文を詠唱する無防備な間を守るのがパートナー』なら、逆に『パートナーがいなければ、魔法使いはスキだらけ』ってコトだからな。」

「え？」

徐倫と仗助の話聞き、ネギ達はそちらを向く。

「茶々丸たち二人を討つぞ……！！」

「……ええっ！！？」

「まあ落ち着けや。討つつつてもよおー、『話してダメなら、ちよいとイタメつける』って意味だぜえー！。完全に再起不能にするってわけじゃあねえ。」

仗助の補足に、少しホツとするネギたちだった。

「いや、おじさんの場合、『ちよいとイタメつける』が恐ろしいんだけど……………」

「今は黙っとこうな……………」

翌日の放課後

校舎裏

「……………で、何で私とネギがッ!!?」

「そうですねよ!大体、これ以上アスナさんを巻き込むなんて……………!」

カモや仗助に反発する二人。隣には、スバルや徐倫、千雨もいた。

今日の昼に、仗助とカモが話し合った結果、明日菜とネギが仮契約

を結び、茶々丸たちを討つという話になったという。

「いや、けど、いざという時に守るには、逆に仮契約しといたほうがいいんスよ？」

「……………確かに明日菜は、一般人に比べりゃあ、運動神経いい方だが……………その分頭が悪いが……………」

「まあ、仮契約しといたほうが便利ってのはあるかもな。」

「二人とも、完全に他人事だね……………」

徐倫たちにやんわりとつつこむスバル。

「スバル、お前は誰か来ないか見張つとけ！あやかが『定例会』にでてるとはいえ、誰かに、特に朝倉に見られたらヤバいからな！」

「う……………うん。」

言われて、角の死角になった部分を見張りにいくスバル。

「ほんじゃま！いつちよ行きますか！仮契約バクティオ！！」

ブワアアアアアアア

「……………うわっ！？」

カモが叫ぶと、明日菜とネギの足下に、光る『魔法陣』が現れる。カモによると、仮契約に必要な魔法陣らしい。

「さあさあさあ！一発ブチューっっちゃってくだせえ、お二方

！…」

「う……………わ、分かったわよ……………」

「あ……………」

カモにせかされ、覚悟を決める二人。

二人の顔が近づき

唇と唇が重なる

その時だった



「ヤバい空条さんッ！誰か来たッ！！」

「「え？」」

くるっ

「おわわッ！？」

グラッ

いきなりスバルが叫び、明日菜がそちらを向く。徐倫は、明日菜たちのキスをドキドキしながら見ていた為か、スバルの叫び声に驚き、前に倒れる。

この時、明日菜は振り向いたため、少し横にずれていた。そして、徐倫は明日菜の少し後ろに立っていた。

そのため、徐倫の倒れた先にはネギがあり、徐倫の身長からか、徐倫の目の前にはネギの『顔』があった。

結果

ズキユウウウーーン

「「「なっ!?!?」「」」

徐倫とネギの唇同士が『重なった』!

「い……………いやいやいやいやいや、あり得ないだろッ!?!何だよこの奇跡ッ!?!?」

「わ……………悪いなネギ……………」

「いえ……………こちらこそ、何かすみません……………」

「お、おいカモ!この場合、どうなるんだッ!?!?」

「え、ええっとおお~~~~……………お?」

一同がパニックになる中、カモは魔法陣の範囲に「光」が集まるのを見た。光は薄い長方形の形になり、やがてカードになった。見ると、カードには指を指す徐倫と、背中合わせに立つ『ストーン・フ

リー』が描かれていた。

「ん？何だこれ？」

「あ、こりゃ『バックティオー仮契約カード』ツスね。魔法使いとの仮契約の証ッス。」

「……………つまり、先生と徐倫の仮契約が結ばれたってことか？」

「ええ。ツィ訳で、仮契約完了ッ！」

「ほ……………う、そりゃあよかったな……………」

いきなり後ろから声が出て、恐る恐る振り返る一同。そこには





## #25 / オコジョはネギ・スプリングフィールドが好き（後書き）

25話です。

・サブタイトルは「猫は吉良吉影が好き」から。

・暴走いいんちよ。あやかはこの時点で魔法について知っているの  
で、これくらい暴走させたら面白いかなと（笑）

・ティアナの中の人（中原 麻衣さん）が、ボーボボのメンマもや  
っていたと、最近知りました（笑）

・明日菜とみせかけて、徐倫と仮契約！ラブコメ要素全くないなあ  
と考えると、こうなりました。

・振り返ってみると、今回は完全にギャグ回でした……ですが、次  
回は、あいつの逆襲です。

では！

#26 / ヴェルファイヤーとオアシス ? (前書き)

ネギたちVS茶々丸&ブチャラティ!

だが、その陰で………

## #26 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

茶道部部室前

「ネギ・スプリングフィールドに『助言者』がついたかも知れん。お前たちを襲ってくる可能性もある。しばらく一人で行動するなよ。」

「はい、マスター。」

「……………」

部活を終え、迎えに来たブチャラティと茶々丸に注意を呼びかけるエヴァンジェリン。

「おーい、エヴァー」

(うつ……………タカミチか……………)

その時、後ろから声をかけられた。タカミチだ。

「……………何か用か？仕事はしてるぞ。」

「学園長がお呼びだ。『一人で来い』だってさ。」

「……………分かった。すぐ行くと伝える。茶々丸、すぐに戻る。ブチャラティ、茶々丸を頼んだぞ。後、必ず人目のある所を歩くんだぞ。」

「分かった。」

「お気をつけて、マスター。」



そう言つと、エヴァンジェリンはタカミチとともに歩いていった。

この様子を、一匹の『亀』が見ていたとも知らずに……………

#26 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

「よし、兄貴、二人がエヴァンジェリンから離れた今がチャンスだ  
！一気にボッコちまおうッ！！」

「うゝゝゝ、ダメだよゝゝ人目につくとマズいよゝゝ、もう少し待ってゝゝゝ」

カモに頼まれて、『イノセント・スターター』でエヴァンジェリン達を見張っていたのだから連絡を受け、茶々丸たち二人に追いついたネギ達。二人の後方の草むらに隠れて、様子をうかがっていた。なお、メンバーはネギ、明日菜、徐倫、千雨、スバル、仗助、カモに加え

「で、何でおめーまで付いてきたんだ？『チンク』……………」

仗助の目の先には、白いゴシッククロリータ調のワンピース（ナカジマ姉妹＋セインやウエンディがノリノリで選んだもの）を着たチンクがいた。何故か彼女は、仗助たちに同行を申し出たのだ。

なお、ナンバーズたちはアルフやギンガ、そして六課のメンバーと同行する事を条件に、買い物や見回り、戦闘が許可されている。

「……………少し、気になることがあってな……………」  
「……………ふうん。」

少し思いつめたような顔のチンクを見て、仗助はそれ以上追求しない事にした。

（名前を聞いて『もしや』と思っただが……………やはり  
）

「……………何か、『辻斬り』みたいでイヤね……………しかも片方は『クラスメート』だし……………」  
「ま、ネギ<sup>こいつ</sup>やまき絵、他にも何人かを襲った奴らだし、どちらにする何とかしなくちゃだし……………ん？」

見ると、二人の前で、木に風船を引っかけてしまった、小学校低学年くらいの子がえんえんと泣いていた。  
ブチャラティがしゃがみ込み、女の子に泣き止むよう慰め、茶々丸はというと

バクンッ

ポッ

ドドドオオッ

背中、『ハッチ』を開き、背中と足からの『ジェット噴射』で低空飛行し、風船をとってあげた。とる際に枝に頭を当ててしまっが、そんなに痛みはないようだ。  
女の子は、茶々丸にお礼を言うと、何度も振り返り、何度も手を振りながら、帰っていった。

「……………」

一部始終を見ていたネギ達は、しばらく口をポカンと開けていた。

「そ………そういえば、茶々丸さんって、どんな人なんです………？」

「えーと……………あれ？」

「あんまり気にしたことなかったな……………」

ネギの質問に、うまく答えられない明日菜と徐倫。答えたのは千雨たちだった。

「いや、ロボだろ。」

「さすが『日本』だよなー、ロボが学校通ってるなんてよう。」

「まあ、ロボが学校通うのか？って疑問はあるけど……………」

「ええっ！？じゃあ茶々丸さん人間じゃないのッ！！？」

「か、変わった『耳飾り』だとは思ってたけど……………」

「『関節』とか変だなあって思ったが……………」

「『『いや、気付よオオオツ!!?』『『『  
「『『か徐倫!何でお前までツ!?!?」

ネギや明日菜ならともかく、徐倫まで気づかないのに納得のいかな  
い千雨だった……………

その後も二人を尾行する一行は、二人の『人間性』を目の当たりに  
する。

歩道橋を上るおばあさんを茶々丸が負ぶったり、

不良に絡まれる女子中学生をブチャラティが助けたり、

ドブ川に流される仔猫を茶々丸が助けたり、

気弱な大学生に絡む当たり屋を、ブチャラティが話しかけただけで  
退散させたりと、

そして、猫にエサをやっている所も見た。

## 結論

「……いい人たちだ……」  
「……っておおおおいッ!?!?」

「ネギ、この光景を目に焼き付けとけよオオオオ………成績表書  
くときの参考になるから。」  
「うわっ『教師目線』ッ!?!?」

涙を浮かべるネギ、明日菜、スバル、徐倫につっこむカモと千雨。  
仗助に関しては、茶々丸の成績表の『校外活動』の欄の参考にしよ  
うとしていた。

「と、とにかく!人目のない今がチャンスっすよ!心を鬼にして、  
一丁『ボカーッ』っとお願いしやす!」

「で、でも………」  
「………やれやれだわ。」

かなりやり辛くなったが、二人は仕方なくやることにした。

茶々丸が猫のエサを片づけていると、ブチャラティがある方向を見  
つめているのに気づいた。

「誰かが付けてきているとは思っていたが、お前等だとはな………」

…」

見ると、杖を持ったネギと徐倫、そして、バリアジャケットに身を包んだスバルがいた。彼らの後ろでは、仗助たちが見守っていた。

「……………油断しました。ですが、相手になります。」

「で、『後ろの連中』はかかってこないのか？」

「……………後ろのみんなは『付き添い人』だ。私らの戦いを見届けるだけで、手出しはしない……………」

「そうか……………（しかし、後ろのあいつ……………どこかで会ったか……………？）」

ブチャラティがそう考えていると、ネギの申し訳なさそうな声があった。

「あの、お二人とも……………僕を狙うのはやめていただけませんか……………？」

「……………申し訳ありません、ネギ先生。私にとって、マスターの命令は『絶対』です。」

「オレも、あいつには『恩』があるから……………やりたくはないがな……………すまない。」

「うう……………仕方ないです……………」

（く、空条さん、あのブチャラティって人、任せて大丈夫なんだよね？）

（ああ、ジッパーの『対策』は考えてある。私ならまず『負け』はない！）

不安ながらも、徐倫のセリフに安心するスバル。



カモが考えた『作戦』は、ブチャラティと茶々丸の二人を徐倫とスバルが攻撃している内に、ネギが魔法の射手を放つという、典型的な魔法使いとパートナーの戦い方だ。

「……では」

「はい。」

「……ごめんね。」

「……行きます！契約執行10秒！！ネギの従者『空条 徐倫』！」

「んうっ……」（擬音大げさじゃね？）

何やら奇妙な心地よさを感じ、嬌声を上げてしまう徐倫だが、そのままブチャラティに向かって走り出す！途中でどうでもいいことが頭をよぎったが……

ドンッ

（……！何だこれ！？体がまるで『羽根』みたいに軽い………これが『仮契約』の効果ってことか………！？）

「わっ、空条さん速っ！？」

パクティオーの効果　魔法使いからの魔力供給による『身体能力の向上』により、普段よりもさらにスピードが上がった徐倫。そのまま

「オラオラオラオラオラオラア！！！」

ブチャラティにオラオラを繰り返す！

「ふんッ」

だが、ブチャラティもスタンド 『ステイツキイ・フィンガーズ』を出し、『ストーン・フリー』の両腕を殴り、防御と同時にジッパーをひつつけ、腕を切り離す。

「スタンド使いをパートナーにしたか。だが、だからといって

ズドオッ

「がッぐうっ!?!」

ブチャラティが言い終わる前に、ストーン・フリーの『手刀』が彼の首筋に叩き込まれ、ブチャラティは膝をつく！

「……………お前は『バカな、切り離したはずなのに!』と言う。」

「バ、バカな、切り離したはずなのに!……………はっ!?!」

「お前の敗因は、『私のスタンドを知らなかった』ことだ。」

言われて徐倫の腕を見ると、ジッパーで切り離された腕が、糸で縫い合わされて『いた!』

『切り離されたら、糸で縫い合わせる。』

これが、徐倫の『勝算』だった!

「い……………糸』で切り離された腕を……………!」

「あんな荒技で……………はっ!?!」

離れて交戦していたスバルと茶々丸も驚く。だが、茶々丸は気づいた。

「魔法の射手、セリエス連弾、ルキス光の11矢！」  
ドババアツ

詠唱を終えて、『魔法の射手』を放つネギ！

「よしっ！あれで決まったな！」

「ああ、徐倫の姐さんの腕が切り離された時はヒヤヒヤしたが、これぞ！」

(……ブチャラテイ、この程度なのか？)

「さて、あいつらの治療の準備を……ん？」

「あれ……？あのあたりの石畳……？」

仗助と明日菜は気づいた。ブチャラテイの足元が、『膨らんでいる』？

「……！あれはッ！」

ネギもそれに気づいた時、膨らんだ部分から『腕』が伸び、ブチャラテイをつかもうとしてきた！

「危ないッ！ま、『曲がれエエエ』……！」  
ギャギャギャアツ

「……！」  
ズドドドオツ

茶々丸たちに向かっていた『魔法の射手』を操作し、ブチャラテイ

に迫っていた『腕』へ全弾当てる！

「ネ、ネギくんッ！」

「今の腕は……それにこの『石畳』ッ！」

「こ……この『柔らかさ』……この現象はッ！まさかッ！  
！」

「あぐおああああ……な、……なんて事ヲオオオオ……しやがるんだー！こ、この……ガキイイイー！」

ブチャラティたちから少し離れたあたりから、茶色い『ダイバースーツ』のようなものを見にまとった男がでてきた。  
スバルと千雨は気づく。この男は

「あ、あいつはー！」

「『アヌビス神』をつれて帰った！あの時のー！」

「貴様は………『地下下を進む』スタンド      『オアシス』の  
ツー!」

ブチャラティも知っていた。この男は、ローマで戦ったスタンド使  
い!

「うぐうううっ!だが、ブチャラティイイイーっテメエに  
は会いたかったぜエエエエ!」

男はブチャラティに向け、恨みのこもった言葉を吐いた。

本体名    セッコ  
スタンド名    オアシス

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CARD」

徐倫のパクティオカード

名前 空条 徐倫

称号 誇り高き血統

数字 ?? (11)

色調 白

徳性 勇気

方位 東

星辰性 流星

アーティファクト 『コウウントユウキノツルギ』 (現時点では、  
名称以外は不明)

## #26 / ヴェルファイヤーとオアシス ? (後書き)

26話です。

・今回は、サブタイトルの元ネタはありません。グロウン・キッド以来です。

・徐倫VSブチャラティ。ストーン・フリーなら、ジッパー喰らっても縫いつけるから無問題だと考えてこうなりました。

・セッコ登場。実はセッコって、第五部で唯一生死不明なので、生きていてもおかしくないという妄想から。

・徐倫のアーティファクト『コウウントユウキノツルギ』。詳しい能力は修学旅行に判明予定。名前は言わずもがな(笑)

・今回は、セッコと彼の仲間との戦いです。

では！

#27/ヴェルファイヤーとオアシス ? (前書き)

強襲する復讐鬼セッコ!はたしてネギたちは勝てるのか!?



## #27 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

麻帆良学園 学園長室

「『密入国者』?」

「ああ、『オエコモバ』について調べたら、彼を麻帆良<sup>マホウ</sup>へ手引きした者がいるようですね。」

新たに入った情報を、承太郎とフェイトに渡すタカミチとあやか。タカミチが得た魔法使いサイドからと、あやか<sup>あやか</sup>が得たSPW財団サイドからの情報を照らし合わせた結果、その人物がオエコモバをスタンド使いにした可能性が高いらしい。

「それで、管理局の『密入国者リスト』を洗った結果、こやつが麻帆良にいる事がわかったのじゃ。」

学園長は言つと、モニターを呼び出す。承太郎はもはや見慣れた光景のため、いや、そうでなくても彼の場合はあまり驚かないが。モニターには、色黒で紫のドレッドヘアの男が映っていた。男を見た途端、承太郎は目頭を押さえた。

「どうかしましたか承太郎さん?」

「……………いや、最近奇抜すぎる髪の色<sup>髪の色</sup>の奴を見すぎて、目がチカチカしてな……………」

承太郎の一言に、四人は苦笑するしかなかった……………

「……………彼は『ランボ・ルギー』。職業は車の整備士だが、質量

兵器　ああ、この世界で言う拳銃とかのことだよ。そいつの大量所持や開発の罪がかけられている。」

「要するに、『大袈裟な銃刀法違反者』と解釈しても？」

「はい、構いません。」

「なるほど………で、『開発』ってのは？」

「それは　」

彼が開発しようとしたものを聞いて、承太郎はあきれろしかなかった。

「やれやれだぜ………」

#27ノヴェルファイヤーとオアシス　？



に、ダ、ダメージ与えられねえから、オレが行ったんだろぅがアアアアー!!」

男 『ランボ』に向かって怒鳴るセツコ。どうやら、彼の仲間らしいが……

「あんだ、何者だ……?」

「オイオイオイオイオイオイオイオイオイ、ガキがおれ様に向かってエラソーに聞いてんじゃねえーぞ」ああ、コイツは『ランボ・ルギニー』ってんだ。「ってセツコ!!何でオメエーがエラソーに答えてんだよッ!？」

(上手く噛み合っていないな。組んで間もないコンビか……)

二人のやりとりを見て、二人のコンビ歴の浅さを感じ取るチンク。

「……まあいい。おれ様はエラソーな管理局の奴をやる!」

「お、おおおお……おう!オレはブチャラティに、ドワツジだ……じゃなくて……ブリツジ……は違う……」

セツコは何か言おうとするが、ど忘れなのか、言うことができない。ネギたちは、その様子をじっと見ていた。

「うぐぐ……道明寺でもなくて、天 総司……」

「ひょっとして、リベンジですか?」

ネギが恐る恐る聞くと、セツコは信じられないという顔をした。

「知ってんだよオオオオツ!!国語の教師か……う……う……うおおお  
つおつオメーはよオオオオ」

「いえ、『英語』の教師です……」

「オレ『数学』ね。」

「仗助さん、今それはいいので……………」

二人に近づきつつ、どうでもいい事を答える仗助に、やんわりとつつこみをする千雨。すでにこちらにも戦闘態勢だ。

「……………っと、思い出した……………！！ブチャラティ以外に……………」

…『殺る』やつがいたんだ……………誰だったけな……………えーと……………」

セッコはポケットを探すが、仗助はそんなのを待つほどお人好しではない！クレイジー・ダイヤモンドの拳を叩き込む！

「『クレイジー・ダイヤモンド……………』」

ボギヤアアーツ

「……………！！？」「……………」

「ぐっうおあっ」

だが、クレイジー・ダイヤモンドの拳がセッコに命中する前に、セッコの蹴りが仗助を襲う！

「仗助さんッ！」

「東方！」

「い……………今のは！！このパワーとスピードは……………！！」

「メンドクセーなアアア……………仕方ねえ……………全員殺せば同じだ……………！！」

言うと、セッコは再び仗助に殴りかかる！

そのとき、仗助は気づいた。セッコが『地面に肘を打ちつけているのを！

(一)……………こいつ！地面を『弾力のあるもの』に変えて……………  
…その反動でスピードとパワーをあげているのか！)  
「オオオオオオオオアシイイイイイス」ツ！！！！」  
ズバババババ

セッコのラッシュをクレイジー・Dダイヤモンドで何とか防ぐも、何発か喰らって  
てしまう仗助！

「東方ツ！」

「東方先生ツ！！」

チンクは懐からナイフ 『ステインガー』を取り出し、セッコ  
に向けて投げつけ、ネギも『タスク牙』の爪弾を放つ！

「！……………ふんっ」

だが、セッコは余裕な様子で右腕を振るい、はじき返そうとする。

チンクが、その瞬間を待っていたとも知らずに

セッコの右腕がステインガーに触れる瞬間、

パチイン！

チンクが指を弾く。その瞬間！

バグオオオオオオン

「なっ！！？ぐアアッ」

ステインガーが『爆発した』！

爆発をモロに受けたセツコは、右腕を負傷し、さらに爪弾も何発か喰らう！

「私のインヒューレントスキルは『ランブルデトネイター』。金属を『爆発』させる能力！石畳は溶かしても、『爆発』は『溶かせまい』！！」

「な……なるほど……」

（ランブルデトネイター……『吉良』の能力が限定されたような能力だな……）

チンクの説明にネギは納得し、仗助は『ランブルデトネイター』を『金属に限定されたキラークイーン』と評価した。

「うおおおおあああ……」

「今だッ『ステイツキイ・フィンガーズ』！」

「ドラララアッ！！」

腕のダメージに苦しむセツコに、ステイツキイ・フィンガーズとク

レイジー・Dのラッシュが迫る！

ガキインツ

「コ！？」

だが、二人の拳は、突如表れたガジェット？型に阻まれてしまう！

「オイオイオイオイオイオイオイオイオイ！コイツらツエーゼえー、面倒くせえが、加勢してやるぜツ！！」

ランボが言うと、そこら中からガジェットが表れた。その数、ざっと見ただけで50機！

中には機関銃やミサイルランチャー、ドリルを装備したものが数体いた。さらに、何故か『車』を抱えた？型がいた。車の数は6台だ。

「が、ガジェットと……車？」

（あれ？あの車って……？）

「何をやる気だツ！？」

スバルたちは、突然表れたガジェットに慌てた。明日菜は、ある車に目がいったが。

「こつするのさツ！」

ランボが一台のオープンカーに乗り込むのを合図に、ガジェットたちが車に『集結』した。するとガジェットは、まるで『粘土に別の粘土をくつつけて、それを指でならす』ように、一つの固まりになっっていく！

それはある『形』になっていき、他の『部品』と合体する！最後に？型が三機、中央の部品の上に合体すると、それは動き出した！そ





は全然違うけど……………」

「車は多分『動力源』だな……………ガジェットだけじゃあ、あの巨体は動かせないんだろっよ。」

叫ぶ明日菜に対して、冷静に分析する徐倫と千雨。

「ふんっ！エラソーにおれ様の『ヴェルファイヤー』を語るな！おれ様は昔からこういうロボットに乗りたかったんだ！記念すべき最初の獲物はためーらだぜ！！」

言つと、『ヴェルファイヤー』の肩がバクンツと開き、ミサイルランチャーが顔を出す。スバルは慌てて広域型のシールドを展開するが……

シユウン

「え！？」

シールドは霧散してしまう！そして気づく。あのロボットは『何でできているか』に！

「！！そうかつガジェットを取り込んで合体してるから……………」

「AMFも健在ってことかッ！！」

「気づいたか！だがオセエゼ！『ヴェルファイヤー』！！」

『ヴェルファイヤー』の肩から、ミサイルが火を吹いた！

「くっ！『アニバーサリー・オブ・エンゼル』ッ！！」  
ビュオオッ

だが、間一髪でスバルたちを掴み、『アニバーサリー・オブ・エン

ゼル』で飛び去ることで回避する千雨。徐倫も茶々丸に掴まり、彼女のブースターで離脱した。

「は……………長谷川さん！」

「それが千雨ちゃんのスランド……………！」

「ちっ……………できればまだ見せたくなかったが……………」

『ヴェルファイヤー』から離れた場所に着地した千雨は、『ヴェルファイヤー』を睨みながら舌打ちする。

「……………セッコってやつは、地中に逃げたらしいな……………」

「あいつの狙いはブチャラティです。東方先生とネギ先生、それにチンクさんがついています。」

「となると、問題はこの口ボか……………やれやれだわ。」

徐倫は『ヴェルファイヤー』を見上げ、ため息をついた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「 PRIVILEGE CARD 」

> i 3 8 2 6 — 4 0 6 <

スタンド名 ヴェルファイヤー

本体 ランボ・ルギニー

破壊力 A スピード C 射程距離 B

持続力 A 精密動作性 E 成長性 C

能力 周囲の機械を取り込んで合体する、全長約12mの『巨大ロボット』のスタンド。ロボットのスペックや武装等は、取り込んだ機械によって変わる。

欠点として、巨体ゆえに素早い動作と精密な動きが苦手である。

## #27/ヴェルファイヤーとオアシス ? (後書き)

27話です。

・ 承太郎の目がチカチカするのは、仕方ないと思います(笑) 奇抜すぎるもん、ミッドの方々(笑)

・ サルシツチャ以来のオリキャラ、ランボ・ルギニーと、彼のスタンド『ヴェルファイヤー』。名前は自動車メーカーのランボルギーニと、トヨタのベルファイヤから。ミッド出身+某マフィアマンガで同名のキャラ繋がり(笑)  
シヤマルって最初聞いたとき、真っ先にこっち思い浮かべました(笑)

・ 巨大ロボットのスタンドは、一度やりたかったネタ。実体化したスタンドの中では、『カ』<sup>ストレンジス</sup>に次いだスケールです。喰った分デカくなる『ノートリアスB・I・G』は除きます( ^ | ^ ; )

・ 次回は、『ヴェルファイヤー』戦、その次にセッコ戦をお送りします。

では!

#28 / ヴェルファイヤーとオアシス ? (前書き)

かつてないスケールのスタンド『ヴェルファイヤー』が、徐倫たちに迫る！

## #28 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

麻帆良学園 駐車場

「あれ？私の車が……！」  
「僕のものないぞ……！盗まれたか……！！？」

話を終え、帰ろうと駐車場に来た一同は、フェイトとタカミチの車がないのに気づく。

「……『学校の駐車場』から車を盗むたあ、ずいぶん大胆な奴がいたもんだな。」  
「私のは借り物なのに……アリスに何て言えば……」  
「僕らのを含めて『6台』も盗んだようだから、まだ遠くまでは」

タカミチが推測をたてるが、それは珍入者の介入により妨げられた。

「た……大変でさあ！承太郎のダンナアッ……！」  
「ん？」  
「カモ君？」  
「お。君はネギ君の言っていた……」  
「あ、兄貴たちがスタンド使い二人組に……」  
「……！！」

#28 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

「くそっ！近づけねえ！」

徐倫は、『ヴェルファイヤー』の頭部から放たれる機関銃の雨を避けながら、悪態をつく。千雨やスバルも何とか避けてはいるが、同じように近づけそうにない。

「うっつ………思ったように動けない………」

「あれには50機分のガジェットが合体しています。その分、AMFの『濃度』も濃いようです。」

「つまり、魔法使うナカジマにはキツイ状況って訳か………用意周到な奴だなおい。」

そう分析する千雨。こういうスタンドは、『本体』をたたくのが一番いいのだが、本体であるランボは、ヴェルファイヤー内のコック



ピットだ。

その時、ヴェルファイヤーの拳が徐倫に向かい振り下ろされる！

「徐倫ッ！！」

「くっ！『ストーン・フリー』！！」

徐倫はストーン・フリーの糸を近くの『街灯』に結びつけると、そのまま自分を街灯まで引き寄せることで、拳から回避する！

「空条さんッ！」

「千雨！今だッ！」

徐倫が言う前に、千雨は動いていた。

「翼刀剣舞

」

両手とも逆手にした剣を構え、ヴェルファイヤーの腕に向かい、振り下ろす！

「深ふかしき色ッ！！」

ガキンッ

「武ぶりゆう竜！！」

ガギギンッ

「大おおすい吸ッ！！」

ガキギイインッ

「ン……こいつ、これだけ斬ったのに……けっこう堅いやつだな  
……………」

逆手小太刀二刀流で連続斬り技を放ったのに、ヴェルファイヤーのボディには、少し傷が付いた程度で全然ダメージがなかった。

「こんのガキイツ！よくも傷つけてくれやがったなッ！！」

だが、『ちよつと傷ついた程度』が、ランボの怒りを買うには十分だった！ランボは左腕で千雨を捕まえようとしてきた！

「おっと。」

ひよいつ

「ちつ、ちよこまかと……！」

だが、ヴェルファイヤーの腕が千雨に迫る前に、千雨は『アニバーサリー・オブ・エンゼル』で飛翔して回避する。それを茶々丸に連れられて遠くから見ていた明日菜は気づいた。

「あいつ、そんなに素早くないみたい……！」

「あの巨体です。素早い動きや精密な動作には向いていないと思われます。」

そう、全長約12mのヴェルファイヤーは、その巨体ゆえにどうしても細かい作業は苦手なのだ。

そしてそれには、徐倫たちも気づいた。

「　　つーことは、機関銃やミサイルは、それをカバーするための装備ってことか。」

「あれで誘き出して、そこにデカいのをぶち込むってわけだね……」

「気づいたか………だが、それが分かったからって、エラソーな面すんじゃねえ！」

言っと、ランボはヴェルファイヤーの右腕を徐倫たちに向ける。そ

して、

ドゥッ

「『ロケットパンチ』?!?!」

右手を『発射する』!ご存知、ロケットパンチだ!

「あんなもんまであるの!?!」

「あいつの『趣味』が、まんまスタンドに反映されてるのかッ!?!」

ヴェルファイヤーの多機能ぶりにつっこみつつ回避する二人。だが、それがランボの狙いだった!

キュイイイイ……

「『!?!』」

ロケットパンチを回避した徐倫たちが見たのは、胸部が開き、そこから顔を出した『ビームキャノン』がエネルギーをチャージしているヴェルファイヤーだった!

「喰らいやがれッ!『ブレイクバスターキャノン』ッ!」

「『技名付き!?!』」

ヴェルファイヤーの武装の多さに驚くが、今はそんな場合ではない

「逃げようにも、ビームキャノンは発射寸前で、間に合わない！徐倫があきらめかけたその時

「……やれやれ、いつになく諦めがハエーじゃねえか、徐倫。」

ドウッ

ビームキャノンが発射された……

「じよ、徐倫ッ！スバルッ！！」

「へっ！エラソーにしてた割には、大したことなかったなあ、おい」

ビームは辺りの地面をえぐり、徐倫たちは跡形もなく消えていた……

もう、彼女たちには会えないのか……

呆気なさすぎる……

あまりにも呆気ない……

明日菜が絶望に涙したその時

「おいッ！勝手に人の娘を殺してんじゃねえぞ。」

「……!?」「……」

ヴェルファイヤーの『背後』から、声がした。振り向くと

「やれやれだぜ……まさか、『こつち』に戻る前に『シグナム』や『シャツハ』にさんざん付き合わされた『模擬戦』が、こんな形で役立つとはな……久々に5秒も『止められた』ぞ……」

右肩にスバル、左脇に徐倫をかかえた承太郎がいた。

「承太郎さんッ！」

（時を止めたのか……だが、何で承太郎さんが？）

「大丈夫かい、アスナ君？」

「茶々丸！」

「た、高畑先生に……エヴァちゃん!?」  
「マスター！何故ここに？」

そこへ、タカミチとエヴァンジェリンが、明日菜達に駆け寄ってくる。

「スバルッ！」

「いや〜、ギリギリでしたね！」

「フェイトさん！と……カ、カモ君!？」

「お前……見かけないと思ったら、おやじ達を……！」

「ええ、でも……」

降りてきたフェイトの肩に乗るカモは、ヴェルファイヤーを見上げる。ただでさえデカイそれは、カモから見たら、さらに大きく見える。

「これは予想外ッスよ……」

「だろうな……」

「ええいッ！エラーソーに援軍かよ！『ヴェルファイヤー』ッ！」

ランボはイライラした様子で叫ぶと、ロケットパンチが承太郎に落ちてくる！

「あぶなアー……い！上から襲って来るッ！」

「スタープラチナッ！」

承太郎はスタープラチナを呼び出し、ロケットパンチへ向かわせる！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア……！」  
ズガガガッ

「！堅いな……………」

だが、スタープラチナのパワーでもロケットパンチは破壊出来ず、少しへこんだ程度のダメージしか与えられない。それでも、ロケットパンチの軌道を変えるには十分だったが。

「隙アリ！『スパイラルフィスト』 オオツ！」

だが、ロケットパンチを攻撃して隙ができた承太郎に、腕のない右腕からドリルを出したヴェルファイヤーが襲いかかる！

「ああ、確かに隙だらけだ……………承太郎さんはな！」  
「！」

だが、ドリルが承太郎に届く前に、千雨が前にでる！

「弧牙車ツ！」

ズガガガッ

「うわっ」

「危なッ！」

ドリルに攻撃し、軌道を変える千雨！その軌道上にいたスバルたちは、あわててよける。

「……………ずいぶんガンジョーな『スタンド』だな……………前に会った『シアーハートアタック』に匹敵する堅さだぞ……………」

「おやじのスタープラチナでもダメだなんて……………」

「つーか、もう別の漫画せかいの存在だろ……………もうお前SPA ボシリースに出ろ。そしてそのまま帰ってくるな！」

ロケットパンチを戻したヴェルファイヤーに、悪態をつく千雨。

(……………！そうだ、『アレ』なら！)

そんな時、スバルにある『考え』が浮かんだ。それは

「おいつナカジマツ！！」

「隙だらけだぜガキイイイツ！！」

だが、スバルが考えてる間にも、ヴェルファイヤーのパンチが迫る！  
だが、スバルは避けようとしない。それどころか、構えをとり、拳  
に向けてパンチを放とうとしている！

「はっ！パンチの『カ比ベ』か！エラソーに！！」

「スバルツ！！」

ヴェルファイヤーはパンチをやめようとせず、逆にさらに力を込め  
る！そして、スバルもパンチを打つ！そして、それが交わった瞬間



バグオオオオンッ

「……!?」「」「」

ヴェルファイヤーの拳が『破壊』された!

「な……………てめえ、何しやがったッ!!」

「あれは……………」

「スバル……………」

その時、徐倫は気づいた。スバルの目の色が 比喻ではなく、  
本当に 『緑』から『金』に『変わっている』!

「IS、『振動破砕』……………振動波を与え、破壊した!」

「『機人モード』……………確かにあれなら!」

スバルは、ヴェルファイヤーに向けて、ラッシュを放つ!

「ウリイイイイイアアアアアッ!!」

ズドドドドドド

「う……………うおおああああっ」

みるみるうちにヴェルファイヤーは破壊され、ランボは悲鳴を上げる。

そして、



「PRIVILEGE CARD」

名前 ランボ・ルギニー

年齢 29歳

好きなもの フライドチキン、ロボットアニメ、機械いじり  
嫌いなもの ほうれん草、エラーソールにしている奴

職業 自動車整備士

出身 ミッドチルダ西部

前科 質量兵器大量所持、質量兵器開発

備考 彼は子供の頃から、『ロボットアニメ』に出てくる『巨大ロボット』に憧れており、自分もこれに乗りたいと思っていた。彼が質量兵器に手を出したのは、自分が乗る『巨大ロボット』制作のためである。

スタンド名 ヴェルファイヤー

#28ノヴェルファイヤーとオアシス ? (後書き)

28話です。

・ロケットパンチにビームキャノン、そしてドリル！すみません、私の趣味全開です(笑)

・スバルが『振動破碎』を使わなかったのは、ヴェルファイヤーのインパクトが強かったからです。冷静になったら、気づきました。

・次回はネギ達VSセッコです。お楽しみに。

では！

#29 / ヴェルファイヤーとオアシス ? (前書き)

ヴェルファイヤーを倒した徐倫たち。

一方、仗助やネギたちは……

#29 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

「 向こうは終わったみてえだな……………」

「 そうですね……………後は」

「 こいつだけか……………」

明日菜達がいた地点から、少し離れた場所で戦っていた仗助たちは、『ヴェルファイヤー』が見えなくなったのをみて、ランボが倒されたのを確認した。  
残るは、自分達が相手をしているセッコだけだ。

「 ! 東方ツ!!」

ズボアア

「 !」

チンクが叫ぶが、仗助は泥化した地面に引き込まれてしまう!

(こいつ……………動きは速い……………しかも、奇妙な感覚だが、『クレイジー・D』で触れるこの地面は『硬い』……………硬い石畳のままなのに……………「オレは沈んでいく」!)

#29 / ヴェルファイヤーとオアシス ?

「ステイツキイ・フィンガーズ!!」

ブチャラティは『ステイツキイS・フィンガーズ』で地面にジッパをひっつけると、まるでカーペットのように地面を『めくった』!

「……………!!」

「そこだ!」タスク『牙』ツ!!」

「ランブルデトネイター!!」

ドババツ

めくった先にいたセッコに向かい、ネギとチンクが攻撃を放つ!

「……………!!」

プワアアアッ!

「……!?!」

ガガガツガアーン

だが、それをセッコは口にふくんだ『小石』を吐き出して、『はじきとばした』!ステインガーは少し離れた地点で爆発し、爪弾も爆発により破壊される。

ウヌース・フルゴル・コンキデンス・ノクテイン・メア・マヌー・エンス・イニミークム・エダット  
「闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ！」  
「!?!」

だが、爪弾を放った時から、すでにネギは『詠唱』していた！

「『フルグラティオー・アルヒカンス  
白き雷』ッ!！」

ズババアアアッ

「うばっああああ!！」

ネギの放った『雷』がセッコを襲い、セッコはたまらず地上に上がる！

「グレート！お前ら、結構『連携』とれるじゃねーか！」

「とっさだったがな……」

「ぐうううおおあああ……ま、またやりやがったなっガ  
キイイイッ！だが、接近戦なら、お、おおオレに分があるっ！喰  
らえ！『オアシス』ッ!！」

セッコの攻撃が、ネギに迫る！だが！

ズドドッ

「うげっ！」

「え？」

いきなりセッコの背後からステインガーが刺さった!?セッコが振り向くと



ピシッピシッピシッ

「なっナイフがッ」

「直っていくううううう!?!」

ギャーン

「うおおッ」

爆発したはずのステインガーが、空中で再生してセッコに迫った!

「すでに予想してたぜえー、てめえが二人の攻撃を『はじきとばす』ことはよおおー。だからネギが詠唱しているうちに!爆発したチンクのナイフの『破片』を!おめーに投げつけたんだよ!」

「ば……爆発したステインガーを『直した』のか……!」

(クレイジー・ダイヤモンド……『破壊と再生』が共存しているスタンド……マジで何をすらかわからないな……)

仗助  
クレイジー・Dの予測不能な動きに舌を巻く一同。セッコは、仗助を恨めしそつににらむ。

「て……てめええええ!」

「文句ゆーなよ……さっきの『蹴り』のお返しだ!」

「ちいっ!仕方ねえ」

……あのめ、『眼鏡』のヤツッ!あいつを殺して、退くとするぜッ

「!」

「「「「「!?!?!?!」」」」」

セッコの口から出た『眼鏡のヤツ』と聞いて、4人は目を見開く。

「眼鏡って……………『千雨』のことかッ？何で千雨を狙う!?!」

「オ…………オオ…………オレが知るかよおー!。とにかくあいつを殺したら、またの機会にテメーら皆殺しだッ!！」

そう言うと、セッコは地面に潜ろうとするが

スパアアアッ

「……………え？」

セッコの左腕が『切断され』、宙を舞った……………

「う……………うおおあああッオ、オレの腕がああああああ  
!！」

「……………すみません、少し『キレ』ちゃいました……………  
でも、もう平気です……………いたって冷静です……………」

「ネ……………ネギ……………?」

血に染まり、指先で回転する『タスク』を構えながら、ネギは暗く言う。本人は『冷静』と言ってはいるが、その目は『怒り』でメラメラと、静かに燃えていた……………

「でも……………僕の生徒に手を出すと言つのなら……………」のネギ、容赦はしないッ！！」

頭上で右手のタスクと、左手の杖を交差させて、ネギは叫ぶ。

「『魔法』 プラス『タスク』 二刀流ッ！！」

「……………このガキがあああああ！！」

セッコは残った右手でネギに迫る。すでに頭に血が上っているようだ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……………」  
ドババッ

それに向かい、ネギは爪弾を放ちつつ、詠唱を始めた！

「うおおッ」  
「魔法の射手、セリエス・ルーキス連弾光の11矢ッ！！」  
ズババアアアッ  
「なッウガアアアッ」

爪弾に氣をとられていたセッコは、ネギの魔法弾を喰らう！

「く……………クソガキがああああああ！覚えてやがれッ！！」  
ズボアア

セッコは捨てぜりふを吐くと、地中に潜る。

「逃げたか……………！」

「問題ありませんよ。東方先生、『治してください』。」

ネギは冷静に言う。その視線の先には

地中を潜行するセツコは、焦っていた。

『あの女』に頼まれた任務に失敗した上に、左腕を失ってしまった……………あいつに何て言おう。

そう考えていると、

急に左腕が『引っ張られた』ッ！！

「なツうわああっ!?!」  
ボゴオツ

左腕に引っ張られて、セツコは再び地上に出てくる。どつやら、石橋の上らしく、下には川の水がさらさらと流れている。

だが、セツコはそれ所ではなかった。切断された『左腕がある』!?

「左腕を『治して』……………奴を『引き上げた』……………!」  
「こ……………こんな真似するなんて……………に……………逃げッ!……………あれ?」

セツコは目の前の仗助たちにビビり、逃げようとした。だが、何かおかしい。左腕が地面に『埋まって』、動けない?

「いや、違う!……………お、オオオ……………オレの左腕が!『橋と一体化』してらううう!?!」

「さて、うちの生徒を狙った罪は重いぜ……………覚悟しな!」

「東方先生、後は頼みます。」

「い、iiiiiiiiいたいテメーら……………何をする気だあああー!ー  
ーッ  
ーッ

「ドLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL  
LLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL  
ドガガガガガガガガッ  
「うぎゃあああーッ」

クレイジー・ダイヤモンドのラッシュがセッコに、いや、『セッコと石橋』に叩き込まれる！

セッコの全身の肉が裂け、骨が砕かれ、石橋も破壊される！そして

「そこで反省してろ……………永遠にな！」

ドリュッドドリュッドドリュウウウッ

「う……………うがああああっ」

セッコはクレイジー・ダイヤモンドの能力により、『石橋と一緒に』治されて、完全に一体化してしまった……………

## 麻帆良学園都市新名所

『つめき橋』

場所 麻帆良学園 聖ヘレンズ教会付近にある石橋

元々は、『梅木橋』うめぎはしという名前だが、『夜になると、橋から男のうめき声が聞こえる』という噂が流れたため、本来の名前とかけて、こちらの名前が定着した。

怖い噂とは裏腹に、恋人や小学生たちの待ち合わせ場所として付近

の住人に親生まれ、また、夏には肝試しのスポットにもなっている。  
(麻帆良学園新聞部発行『まほら新聞』より抜粋)

「いや、これは明らかにやりすぎだろ……………」

石橋と一体化したセッコを見下ろしながら、ヴィータは呆れたように言う。

事後処理のために来た彼女は、セッコはどこにいるか聞いたら、この石橋まで連れてこられた。橋に男の顔があったためにビビったが、落ち着いて二人の話聞いて出たセリフが、これだった……………

「い、いやー、俺も頭に血が上ってたっつーか…なんか一時のテンションに身を任せちまつたっつーか……………」

「こんなことまでできるなんて……………」

「『治す能力』だから便利だなぁって考えてたけど……………」

「正に『クレイジー』な能力だね……………」

「う……つぎぎ……」

仗助が必死にヴィータに言い訳している中、フェイト、明日菜、スバルは、セッコを見下ろし、クレイジー・ダイヤモンドの恐ろしさを知った。

「なるほど……つまり、セッコ<sup>セッコ</sup>たちは、千雨を狙っていたのね？」

「ああ……確かにこいつはそう言っていた。」

「何で私が……？」

一方、徐倫、千雨、承太郎は、ネギとチンクから、セッコたちの狙いが千雨であったことを知らされる。

「それで気づいたんですけど、今までの敵って、最初から長谷川さんを狙っていたんじゃないでしょうか……？」

「……？」

「い……言われてみれば……オエコモバヤラング・ラングラ、アヌビス神……全員、千雨がいる時に襲ってきた！」

「単なる偶然とは思えないな……」

ネギの推測に、全員が息をのむ。

「……おいおいおい、じゃああれか？私は今まで巻き込まれないよーに巻き込まれないよーに『暮らしてきたけど、実は巻き込んでるのは私だったってことか！？』」

「まあ、そうなるな……飯に今までのやつらがおまえを狙っていたならの話だが……」

「そんな……」

推測とはいえ、狙われているのは自分という事実にはショックを受け



る千雨。すると、承太郎はこう切り出した。

「千雨が狙われているとはいえ、まだ奴らの『目的』はわからない  
ままだ……千雨、お前が殺されるほど『ヤワな』やつじゃあない  
ことは知っているが、今後は一人で行動するな。」  
「……………はい」

千雨は、彼女にしては珍しく、力なく答えた。

ランボ・ルギニー 再起可能

フェイトによると、管理局に協力することを条件に、罪は軽くなっ  
たらしい。

セツコ 再起不能

ブチャラティと茶々丸 エヴァンジェリンにより、勝負は次の満  
月までお預けにした。

フェイト達の車 この後、仗助に直してもらった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「……………なんてこったマンマミーヤ！おい『ズツケエロ』、俺は夢でもみてるのかッ！」  
「いや、『サーレー』……………俺にも見えてるぜ……………ブチャラテイだ……………」

陰からことの一部始終を見ていた、髪を左右でカニの足のようにセツトした男　　サーレーは、隣にいた相棒のズツケエロに訪ねる。

『サルシツチャ』たちを探すためにここ『麻帆良』に来たら、いきなり遠くの方で『巨大ロボット』が現れたのを偶然見かけたため、気になってそのあたりまで来てみたら、意外な人物　　ブチャラテイが、6年前に死んだはずのブローノ・ブチャラテイが、地中に潜る男と戦っている所だった。

「ど、どうするよサーレー!?!」  
「……………ビデオは撮ってあるな?とにかく、ボスに報告するぞ!」

サーレーはズツケエロにそういうと、その場を静かに立ち去った。

誰が言ったのか

スタンド使いとスタンド使いは

まるで、小指が赤い糸で結ばれた恋人同士のように『引かれ合っ』

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.. .

## #29 / ヴェルファイヤーとオアシス ? (後書き)

29話です。

・ブチャラテイ、チンク、ネギ、そして仗助の連携はお気に入り。  
ステインガーを直すシーンは、形兆兄貴戦で『バッド・カンパニー』  
のミサイルを直して形兆兄貴にブチ当てたシーンが由来です。

・ネギ、『漆黒の意志』に覚醒。ネギの場合は、『生徒を守るため  
なら殺人もやる』という、担任としての守る意志が、強くなりすぎ  
て『魔王なのは』みたくなるイメージです( ^ - ^ ; )

・セッコ再起不能。セッコはこれから、『麻帆良版アンジェロ』と  
して、近隣のみなさまに愛されるでしょう(笑)

・サーレーとズツケエロにより、ブチャラテイのことがジョルノ達  
に知らされました。

ラストの通り、スタンド使い同士は引かれ合う運命にあるので、そ  
れがさらに複雑に絡み合った一つの運命となります……………

・次回は、『あの一族』が麻帆良に……………?

では！

#30 / ほんの少し昔の話(前書き)

仗助の部屋に集まるネギたち。

SPW財団の調査内容とは……

### #30 / ほんの少し昔の話

セッコたちの襲撃の翌日

グリーン・ドルフィン・ストリート麻帆良 309号室

六課が拠点として借りているマンションの三階のこの部屋は、偶然にも仗助の部屋だった。曰く、家賃がよかつたらしい。

今この部屋には仗助以外に、フェイトや、フォワード4人にナンバーズ、そして、ネギや明日菜、徐倫、承太郎、千雨、あやかがいた。というのも

「ごめんね、今206に掃除の会社の人が来てて……………一応キレイにしてるから、早くには終わると思うから……………」

「構わないツスよ。」

「へえ、意外と片づけてんのねえ。」

「越してきたばっかだしな。」

「確かに、ダンボールが多いな……………ところで、何で私はこんな『椅子』なんだ……………?」

奇妙に歪み、椅子としての機能はほとんど失われ、どちらかといえば椅子よりも『オブジェ』に近い椅子に座りながら、チンクは文句を言う。

「いやあ、前にムシヤクシヤした時に……………」

「椅子にあたったのか……………」

「まあ、おめーんちの家具だから、おめーが何に当たろうと構わないがな……………」

呆れる一同だった……

「……あの、先生……」

「はい、何ですか長谷川さん？」

「長谷川さん、要件は手短にね。」

「千雨ちゃん、何か察知したの？」

「無駄に窮屈なんすけど……密着しすぎだから……」

一方、千雨が座る席の左右と後ろには、SPよろしく黒いスーツにサングラスを着用したネギ、スバル、明日菜の三人が囲んでおり、前方ではリインとカモ、そして赤い髪を四力所で止めたアギトが、同様の格好で仁王立ちしている。

なお、ルーテシアやエリオたちちびっ子組にも一式配られたが、エリオとキャロは着用せず、ルーテシアはサングラスをかけただけに止まっている。

「ねえ、あれは何の遊び？」

「いや、スバルが千雨を護衛するって言い出して、それで『まずは形から』ってあの格好を……」

「それにあいつらがノリノリで便乗した訳ね……やれやれだわ。」

「こちらも呆れるしかなかった。」



#30 / ほんの少し昔の話

「さて、皆さまに集まっていたいたのは、エヴァンジェリンさんたちに関することで、現時点でSPW財団が突き止めたことについて報告するためですわ。」

あやかが席から立ち、皆にいう。何人か、特にネギは真剣だが、他ノーヴェとかは、不真面目な態度だ。

「まず、エヴァンジェリンさんなんですが、カモさんに協力してもらって調べたのですが、20年前までは魔法界で600万ドルの『賞金首』だったそうです。その後にネギ先生のお父さまに『呪いをかけられた』ようですが……」

「ってなんでそんなのがうちのクラスにいんだよ!？」

「今はその『呪い』とやらで魔力は弱まっているからいいが、解かれたら厄介だな……実際、本人には解けねーようだがなあー。」

あやかの報告に、千雨と仗助はそれぞれリアクションをとる。

「さらに調べたのですが、SPW財団の過去の資料の中に、彼女の名前がありましたわ。」

「財団の？」

「はい、それによれば、エヴァンジェリンさんは『柱の男』との戦いに参加していたとか……………」

『柱の男』と聞いた途端、ジョースター家と千雨の目の色が変わった。

『柱の男』といえば、承太郎の祖父、ジョセフが倒した『究極生命体』だ。

それとの戦いに、エヴァンジェリンが参加していた……………？

「そつえば、『師匠』が言っていたな……………柱の男との戦いで、魔法使いが協力してくれたって……………」

「それがエヴァンジェリンっていつのか……………？」

「まあ、その辺は本人を問いただしやー良いだけの話だな。で、後の2人……………茶々丸とブチャラティに関しては？」

仗助はあやかに聞く。あやかは手元の資料をめくり、話し始めた。

「茶々丸さんは、麻帆良大学工学部で開発された女性型アンドロイドガイノイドだそうですね。開発にはA組の超さんや葉加瀬はかせさんが関わっているとか……………」

「マジでどうなってんのよ、あんたらのクラス……………」

「まあ、あの2人なら何ら不思議はないけど……………」

ティアナのつっこみに答える明日菜。超とハカセこと、葉加瀬はかせ、聡さと

美は、学園屈指の天才である。

「それと、ブチャラティさんなんですが……………」  
「?どうしたの?」

ブチャラティについて、何故か口ごもるあやか。意を決したように、口を開いた。

「死んでいるんです。六年も前に……………」

「……………!?」

あやかの言葉に、全員が息をのむ。いや、一人は冷静だった

「ちよ、死んでるって!?!……………でもあいつ、『幽霊』や『ゾンビ屍生人』  
なんかじゃあなくて、ちゃんとした人間だったぞッ」  
「いえ……………ですが、確かに六年前、イタリアの『コロッセオ』で

死体が発見されたと

「『コロッセオ』！？あいつは『六年前のコロッセオ』で死んだのか!？」

徐倫に次いで、千雨も声を荒げる。

『六年前』の『コロッセオ』……………千雨の父、ポルナレフが死んだのも、六年前のコロッセオだった……………あいつは……………ブチャラティは、自分の父となにか関連しているのか……………？

「……………そろそろ話してくれてもいいんじゃないか、チンク？」  
仗助の言葉に、全員の視線がチンクへと集まる。一斉に視線が集まったため、チンクは戸惑ったが、すぐに心を落ち着かせる。

「よく気づいたな……………」  
「当たり前ーだ。おめーのブチャラティを見たときの反応を見りゃーよおー、おめーとヤツが『顔見知り』だつてこと位簡単に推測できるぜえー。」  
「ふっ、教師よりも、『探偵』とかになった方がよかったんじゃないか？お前は……………」  
「チンク姉……………」  
「わかった、話そう。」

チンクは、静かに話し出した……………

五年前

『ジェイル・スカリエッティ』のアジト

実験プラント

薄暗く、培養液に満たされたポットの並ぶこの部屋を、2人の男女が歩いていた。

紫の髪を耳が隠れるくらいまで伸ばした、貧弱そうな痩せた科学者風の男、『犯罪者でなければ、歴史に名を残していた』と言われる男  
ジェイル・スカリエッティその人である。

「例の『彼女』に頼まれた『人造魔導士』、『6体』全ての起動は順調です、ドクター。」

隣を歩く、スカリエッティ同様の紫の髪を腰まで伸ばし、どこかの制服のような服を着た女性　　ナンバーズNo.1『ウーノ』は、スカリエッティにそう報告する。

今このプラントには、ある『女性』から依頼された6人の『希少能力持ち』の魔導士を、『人造魔導士』として蘇らせる実験が行われていた。

「ふむ、『以前』よりは内部機関に改良が加えられているし、早くにも実戦導入できるだろうな……………実験は成功だな。」

スカリエッティがそう口にした瞬間、

ドバシヤアアアア

「！？」

後ろから、まるで洪水のように勢いよく液体が流れる音がした。

2人が振り返ると、ポッドの一つに穴があき、そこから　ポッドに入っていたため　全裸の男が這い出てくる所だった。

「吐き気をもよおす『邪悪』とは……………なんにも知らぬ無知なる者を利用する事だ……………！！自分の利益だけのために……………利用する事だ……………なんにも知らぬ『死人』を！！てめーだけの都合でッ

「！」

男は立ち上がりながら、怒りを露わにして叫ぶ。

「そんな……………ポッドの強度は『管理局』のお墨付きで……………A  
AAクラスの魔法弾にも耐えられる構造なのに……………！」  
「まさかあれは……………それじゃあ『希少能力』<sup>レアスキル</sup>って……………！」  
「ゆるさねえッ！あんたらのやったことはッ！死者の魂の『冒瀆』  
でしかないッ！」

男は背後に自分の『能力』を出し、2人に迫る！そして

「ドクター！お逃げになっ……………」

「アリアアリアアリアアリアアリアアリアアリアアリアアリアアリア  
リアリ……………」

スカリエッティをかばい前に出たウーノに、ラッシュが打ち込まれた！

「アリーヴェデルチ！」

バカアアア

「がっ……………」

ウーノの体に『ジッパー』がひつつき、腕、二の腕、足、スネ、股  
胴体と頭の九つの部位に『分解』されてしまう！

「や……………やはりそうか！ISのもとになったという『才能』！『  
スタンド』！！この目で見る日が来るとは……………！」

「こいつはまだ死んではいない……………お前も同じ目に遭わせてもい  
いが、全裸<sup>全裸</sup>ではマズいんでな……………まずは！」

シユババババツ

「！！！」

「お前の『服』を頂こう。サイズは気にしないでおいてやる。」

いつの間にかスカリエッティは、男の能力により『全裸に白衣』の状態にされ、男は今までスカリエッティが白衣の下に着ていた服に袖を通してある所だった。

それが男の能力であると気づき男に近づこうとしたスカリエッティは、男の手刀を喰らい、意識を手放した。

緊急のアラートが鳴り響いた時、チンクは淹れていた紅茶をこぼしそうになった。

「クアットロ、何の騒ぎだ!？」

「あら、チンクちゃん。何でも、例のあの女性むすめ、『ヴィオレッタ』に頼まれた『人造魔導士』が1体逃げ出したらしいわあ。」

チンクは、ガジェットを数体引き連れて通りかかった短い三つ編み



の茶髪にメガネをかけた『クアットロ』に聞く。

「『人造魔導士』が？」

「ええ、トーレ姉さまが実験プラントでジッパーで分解されたウーノ姉さまと、素っ裸のドクターを発見したらしくて……………で、聞いたらその人造魔導士、『スタンド使い』だったらしいのよお。」

「スタンド？」

「ええ、ISのもとになったという、97管理外世界の才能よ。」

クアットロは『スタンド』について、ある程度なら知識があった。そのため、チンクに簡単に説明ができた。

「で、今そいつはどこに？」

「うーん、反応はこの当たりなんだけど……………」

クアットロが探知をかけている時

ズババツ

「……………はえ？」

クアットロの近くにいたガジェットから『パンチ』が飛び出し、クアットロの首を『切り離れた』！あまりにも突然の出来事に、クアットロはマヌケな声を上げた。

「クアットロ!?」

ドゴオッ

「ぐあっ」

チンクがクアットロに近づこうとするが、こんどはそのガジェットから男が出てきて、チンクを蹴り飛ばした。

「悪いが、ガキにかまっている暇はないんでな。さて、お前に2、3質問がある。ちゃんと『真実』のみを話せば、命は助けてやる。

もしも『嘘』を話したら、その時は

「は、話しますうう〜！話しますから、どうか命だけは〜〜〜！」

髪を捕まれたクアットロ（頭部のみ）は涙と鼻水を流しながら、男に命乞いをした……………

「……ク！おい、チンク！目を覚ませ！何があった！？」

チンクが目を覚ますと、目の前に青い髪が見えた。そして、それが姉であるトーレであると気づくと同時に、完全に覚醒した。起き上がり周りを見ると、ガジェットの残骸と「首のない」クアットロがいた。

「トーレ！クアットロが！」

「ああ、クアットロは「頭が」見あたらないが、どういう訳か『脈』は正常だ………ウーノの時と同じ状態だ！」

「……あいつはクアットロにいくつか質問していた。『ここはどこだ？』『何故オレは生きている？』といった質問をして、私が気を失う前には、『転移ポート』まで案内しろと言っていた………」

チンクの言葉に、トーレは目を開く。『転移ポート』は、念のためにと設置してある施設だ。もしも『異次元世界』へ逃げられたりなんかしたら、相当厄介だ。

「わかった、私はそちらに向かう。お前は他のガジェットを指揮して、アジトの周りを見張るんだ！」

「わかった！」

チンクはそう答え、トーレと別れた。

アジト内  
転移ポート

数体のガジェットを連れ転移ポートへ到着したトーレは、周りの機材を操作したが、使われた形跡は見あたらなかった。

「……………どうやらまだ到着していないようだな……………お前ら、念のために入り口を見張れ！ヤツが来たら、攻撃しろ！」  
そうガジェットに命令し、広い部屋にはトーレだけになった。

「さて、来るなら来い！返り討ちにしてくれる！！」

自分の固有武器「インパルスブレード」を展開し、強く意気込むト  
ーレ。

彼女は自分のIS「ライドインパルス」に自信があった。相手は強者とはいえ、倒したのは戦闘向きではないウーノとクアットロだ。戦闘向きの自分ならば、勝てるという自信があった。その時だった。

「そつか、ならば遠慮なく行かせてもらおう。」  
ズパアッ  
「！」

いきなり声がしたと思ったら、自分の体が上下で『分裂』し、クアツト口の頭を持った男が『自分の中から』出てきた！

「な……………なんだとおおおお！バカな！いつの間に『私の中に！！？』」

「お前が『チンク』とかいうガキと話している時だ。実はあの時、オレはまだあそこにいたんだ。そして、お前が『転移ポート』に行くと言っから、『連れてきてもらった』んだ。連れてきてくれてありがとうラッセンヘ……………とだけ言っておこうか。さて、『97管理外世界』とやらの座標を教えてもらおうか。」

「は、はいい……………（トーレ姉さまを手玉に取るなんて……………こんなやつ、勝てるわけがないい……………）」

男に一杯食わされて、トーレは戦慄し、クアツト口は戦意を失い、男に従った。

そして男は機材を操作し終わると、転移装置に立つ。

「あの変態博士に伝えてくれ……………『クソ食らえ』ってな！」

そう言うと、男は97世界へ転移していった……………

「私を知るのはいくらまでだ。」

「ってあいつ、めっちゃ外道じゃん!？」

「でも、『分解』しただけで殺してはいませんでしたよ?」

「私もブチャラティの立場だったら、同じことしたかも……………」

ウーノやトーレから聞いた話を踏まえたチンクの話が終えると、全員が感想を述べた。

「でも、そんな話ドクターやウーノ姉に聞いたことなかったよ?」

「お前等の中には機動していなかった者もいるし、ドクターは他の5体をその『彼女』に渡した後、その事件のことなどの資料を全て廃棄して、他言無用と言われたからな。」

「どおりで…………『JS事件』の後にアジトを調べてもそんなことに関する資料が見あたらないはずだね……………」

「そうだ。だが、私は97管理外世界へ転移した所までしか知らない。その吸血鬼の従者パートナーになった経緯は知らない……………」

チンクはそう閉めた。すると、ネギはあることを思い出す。

「そういえば、ブチャラテイさんはエヴァンジェリンさんに『恩がある』って言っていました。多分、その後何かあったのかと……」

「なるほど……」

「多分、起動したばかりで『調整』も不十分だったんだね……それをあの吸血鬼に助けられた、と。」

ネギの推測にフェイトが補足して、一同は納得する。

今後SPW財団がさらに調査するという事で、今回は解散となった。

翌日

麻帆良学園中央駅前通り

STARBOOKS COFFEE

「今日も収穫なしか……………」

「オットー、そう気を落とすな。」

「そうだよ、向こうもそう簡単に尻尾を出さないよ。」

デイドの情報を求め麻帆良を回っていたチンク、オットー、スバルは、ネギや千雨、徐倫と合流して一休みしようとしてここに来ていた。ネギによると、明日菜も別行動のウエンディとティアナの2人と一緒に、後から来るらしい。

なお、千雨がいる理由は、オットーが

「デイドをさらった犯人が千雨を狙っているのと『同一犯』なら、千雨といった方がデイドに近づける。」

と言ったからだ。

「おーい。」

「あ、ティア……………」

「あれ？2人は？」

「あつちで席取ってるわ。ジャンケンで負けてね……………」

「そう。」

頼まれた飲み物を買って、その席へ向かう。だが、2人はテーブルに伏せている。

「って何短時間で寝てんだよ……………」

「アスナさん、こんな所で寝たら風邪引きますよー」



言いながら明日菜を揺するネギ。だが

ドサアッ

「……………!!?」「……………」

明日菜はウエンディ共々、そのまま地面へ倒れてしまふ。

「アスナさん!?!」

「アスナッ!ウエンディ!!」

ネギとチンクが2人の容体をみる。だが

「み……………脈がない!?!」

「そんな……………!!」

悲痛な通告が、2人から告げられた……………

ヒュオッ

「!?!」

パシッ

背後から空気を切る音を聞き、振り向きざまに『それ』をつかむ干  
雨。それは

「……………トランプ？」

スピードのAだった。飛んできた方を見ると、投げたと思わしき「女」が、遠くにいた。

その女は、右手で手招きしたあと、クルリと背を向けて歩き始めた。

「……………誘ってんのか？」

「どうする？明らかに罠だよ？」

「……………行きましょう！アスナさんとウェンディさんを助けられるかもしれない！」

ネギはそのまま、女を追いはじめ、スバルたちもアスナたちを背負い、同行することにした。

t o b e c o n t i n u e d . . .

### #30 / ほんの少し昔の話（後書き）

30話です。

・サブタイトルは「ほんの少し昔の物語」から。特にひねりはありません（^| ^ ;）

・冒頭のSPなネギたちはお気に入り。スバルのSP姿は結構様になってるかも（笑）

・このエヴァンジェリンは、カーズたちと戦っている設定です。仗助にジョセフの面影をみたのは、そのためです。

・中盤はブチャラテイ祭り（笑）派手なバトルはないけど、こういう『知恵比べ』みたいな戦いも、ジョジョの醍醐味のひとつです。

・終盤で明日菜とウエンディをやった女の正体は、次回判明します。

では！

#31 / ダービー・ザ・リベンジヤー ? (前書き)

謎の敵に襲われた明日菜とウェンディ！果たしてその正体とは！？

### #31 / ダービー・ザ・リベンジャー ?

麻帆良公園 園内

「ええっと……………はじめましてルーテシアちゃん。私…私のどかです。よろしくね?」

「うん、よろしく。」

「のどか、こんな小さい子にまで緊張してどうするですか……………」

公園で偶然会ったルーテシア、アルフ（こいぬフォーム）とのどかが夕映。ちなみにアギトは、ルーテシアの服のポケットに隠れている。

「ナカジマさんから、『家にお姉さんと親戚が泊まっている』とは聞いてましたが、あなたがそうでしたか。日本へは、どのような用事で?」

「……………」

（る、ルールー、話合わせて!）

元々口数が少ないためか、あるいは突然の質問で困ったのか、ルーテシアは黙ってしまふ。

「あの……………」

「お父さんを……………」

「え?」

「お父さんが、こつち（97管理外世界）にいるって聞いて。」

「それでこつち（日本）に探しに来たですか……………」

（で……………出任せだよねえ?）

（さあ……………?ルールーのお父さんなんて、聞いたこと……………）



「……私たちも行くっ！」

言っと、ルーテシアとアルフも駆け出した。

#31ノダービー・ザ・リベンジヤー？

女を追っていたネギたちがたどり着いたのは、とある『ビル』だった。

「このビルに入りましたね……………」

「このビル……………確かどこにも買い取られないでそのままの『廃ビル』だぞ……………近々取り壊されるとか言ってたっけ……………」

徐倫はビルを見ながら言う。ネギとティアナが入り口の左右に周り、

中の様子をつかがう。

「フイヒートラッシュ 畏の類はなさそうですね……………」

「ええ……………行くわよ！」

ティアナが先陣を切り、全員がそれに続く。

一階は広いホールになっており、隠れられそうな場所はない。向かい側の壁を見ると、階段があった。その右の壁には

「……………分かりやすい畏だな……………」

「ここまで親切だと、逆に怪しいね……………」

「ご丁寧に、赤いペンキで『矢印』と『5Fまで』と描かれていた。ネギたちはあえてそれに乗り、階段を駆け上がる。」

「もうすぐ5階ですね。」

「このビルは『5階建て』だ。最上階まで呼んで一体……………」

徐倫が言い終わる前に、一同は5階へ到着した。

そこは他の階に比べて、非常に明るい階だった。

床は赤い絨毯が敷かれ、周りにはテーブルやスロットが所狭しと配置されている。テーブルにはルーレットやサイコロが置かれていた。ここはまるで



「……………『カジノ』?」  
「いつの間にこんなものを……………はっ!」

千雨が見つけた先で、その女は座りながらトランプをシャッフルしていた。

腰まで届く金髪を、後ろは先端で7カ所を、前髪も左右で一カ所ずつ三つ編みにした独特の髪型。顔立ちは整っており目は青く、その唇には、赤と黒の横縞になるように口紅を塗っている。服装はワイシャツに赤いベストを着用して、首には蝶ネクタイと、まるでカジノのディーラーだ。

ネギたちは女の座るテーブルを包囲しつつ、女に詰め寄った。最初に口を開いたのはオットーだ。

「お前……………デイドをさらった一味か!」

> i 4 3 1 6 — 4 0 6 <

「……………私にそれをタダで教える?」

「とぼけるな! アスナやウエンディ姉様を襲っておいて!」

「オットー、落ち着け!」

チンクがオットーをなだめる中、女はトランプを扇状にテーブルへ配置する。

「あなた、トランプの『マーク』には位があるのをご存知?」

「……………何?」

「一般的に上からスピード、ハート、クラブ、ダイヤ……………ポーカーでも、クラブのフラッシュよりもスピードのフラッシュの方が強いわ。」

「何が言いたい?」

オットーがしびれを切らして、女に詰め寄る。すると女は、トランプの中から一枚選び、手元に寄せた。

「私の選んだこのカードよりも、あなたがその山から選んだカードの方が位が高ければ、その『デイド』って子のことを教えてあげるわ。ただし、あなたには『魂』を賭けてもらっわ。どう？」

「……………わかった。選べばいいんだな」

「グッド！」

「オットー！」

チンクが止めるのも聞かず、オットーは女の持ちかけた『賭け』に乗ってしまっ。一方、徐倫はあることを思い出しかけていた。

（『魂』を賭けると……………確か前親父に聞いたような……………まさか！）

「オットー！今すぐ『賭け』を降りろ！！」

「空条？」

「もう遅い！すでに賭けは閉じられた！」

徐倫が叫ぶも、オットーはすでにカードを選び、開いていた。

選んだカードは『スペードのA』だ。

「……………ぼくの勝ちだ。これより『位の高いカード』はない。」  
「……………普通は『普通は』。」

女もカードを開く。カードは

「なっ……………」  
「ジョーカー」だと!？」  
「ふふっ、私の勝ちみたいね。ジョーカーはどこにも属さない故に、その強さは全カード中最強!！」

女の言葉に、オットーは絶句する。徐倫はすでに遅かったと、絶望に顔を染めた。

「ふふっ『ジョーカーがあるからトランプゲームは面白い』……………」  
「あなたもそう思わない?さて、では払ってもらいましょうか!」  
「……………えっ払う!?何を?」

「『魂』よ。あなたはさつき確かに賭けたわ。『魂』!我が『ダービー家』は代々『魂を奪うスタンド使い』!賭けというのは、人間の魂を肉体から出やすくする!そこを奪い取るのが私のスタンド『ポーカー・フェイス』!」

「……………!」「……………」

「ダービーだと……………確かそいつは!？」

女 「ダービー」が言うと同時に、オットーの背後にスタンドが現れた!

例えるなら、藤子・F・藤 が描くような細身のロボットのよう腕と下半身に女性的な胸部をもち、顔には目元のみが開いた白い仮

面を付け、両肩と胸、両腰にも同じ仮面がある。頭からはコードが髪のように伸び、それがオットーを捕まえていた。

「こ……………これは!?!?うわああああああああああ!?!?!」

「オットー!?!」

「私の名は『ルーニー・S・ダービー』。綴りは『L・U・N・Y・S・D・A・R・B・Y』。Dの上にダッシュがつく……………彼女、オットーは賭けに敗北した…!したがって、『魂』はいただく!」

スタンド 『ポーカー・フェイス』はオットーから『魂』を抜き取ると、グニグニと形を変え、最後にバースと押しつぶす!そして

コローーン

その手の中から、『チップ』が出てきた。チップには、目を瞑ったオットーの顔がある……………

「これがオットーの『魂』よ……………さつき手に入れた『神楽坂 明日菜』と『ウェンディ』を含めて、これで3人再起不能にしたわ。ふ

ふっ……………」

ダービーは懐からチップを二枚出す。チップには、明日菜とウエンデイの顔があつた。

「！アスナさん！ウエンデイさん！」

「やはり貴様、二人を……………」

「……………ダービーって聞いてようやく思い出した……………  
てめえ、親父と戦つた『博打打ち』<sup>ギャンブラー</sup>ダービーの……………」

「ふふっ、やつぱり知つてたわね空条 徐倫。ええ、私はあなたの父、空条 承太郎に敗れたダニエル・J・ダービーの娘よ！ここにいるのは依頼主と利害が一致したからでもあるし、父の無念を晴らすためでもあるわ！」

「貴様ツ！！」

チンクはスティンガーを取り出すが、ダービーは右手で征する。

「おっと、私を殺さない方がいいわ。私が死んだら、3人の魂は天へ行き、そのまま戻らない……………つまり、『死』を意味する！『魂』を取り戻したければ、私と賭けをするしかないのよ……………」  
「ぐ……………」

ダービーの言葉に、チンクは押し黙る。すると、徐倫がダービーの向かいの席についた。

「空条？」

「お前の狙いは私と千雨だろ？だったら『ポーカー』で勝負だ！」

「……………」

「賭けよう、私の『魂』を……………」

「グッド……………」

徐倫の行動に、全員が驚く。普通は『勇気ある行動』と思われるだろうが、ネギたちは『無謀』と解釈した。

「く、空条さん！一体何を考えているんですか!？」

「そつだ！もし負けでもしたら……………」

「大丈夫だ。ポーカーなら私にも勝ち目はあるし、それに、あいつが『イカサマ』しても、私なら見破れる。」

「ふふつ、ずいぶん自信があるのね？面白いわ!！」

ダービーは新しいランプのセキュリティシールを剥がしながら、徐倫に言う。

『魂』を賭けた戦いの火蓋は静かに……………」

そつ、まるで歩くように静かに切って落とされた……………」

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CARD」

名前 ルーニー・S・ダービー

年齢 32歳

国籍 アメリカ

好きなもの トランプゲーム（ポーカーも好きだが、ダウトやババ抜きなどのシンプルなものが好き）、イカサマ（する方）、サンドイッチ（ゲーム中も気軽に食べられるから）  
嫌いなもの イカサマ（される方）

備考 父親はかつて空条 承太郎に敗れたダニエル・J・ダービーで、彼と同様生粋のギャンブラー。  
他人を小馬鹿にする態度をすぐにとるため、よく人を不快にする。だが彼女は、「相手を不快にして、そこを突く。これこそがギャンブル。」という考えを持っているため、これはわざとである。

スタンド名 ポーカー・フェイス

### #31 / ダービー・ザ・リベンジャー ? (後書き)

31話です。

・サブタイトルは「ダービー・ザ・ギャンブラー」から。

・ルーテシアの父親の正体は、後に出ます。

・ダービー(娘)登場。前回も言いましたが、ジョジョはこういう頭脳戦も面白さの一つですので、代表格であるダービーを出しました。スタンド名はレディー・ガガの楽曲から。ルーニーはまだ秘密。デザインは電王クライマックスフォームを意識したわけではありません(笑)

・次回、徐倫対ダービーのポーカー対決です！

では！



#32/ダービー・ザ・リベンジャー ? (前書き)

徐倫VSダービーのポーカー対決!!

だが、その一方で………

#32 / ダービー・ザ・リベンジャー ?

徐倫がダービーに勝負を挑んだ頃

廃ビル1階

「ゆえ〜、あ、危ないよ〜〜帰ろうよ〜〜……………」

夕映に引つ張られる形でビルに入ったのどかは、夕映を必死に説得していた。怖いからというのものもあるが、ネギたちが入ったという事は、このビルには『敵スタンド使い』の罠があるに違いない。そんな場所に、魔法もスタンドもない夕映を巻き込む訳にはいかないからだ。

「何を今更。最近、あの人たちはよく一緒に行動をしていますし、怪我をして登校するのもしょっちゅうです。おまけに理由を聞いても『階段で転んだ』とか『天井からタライが落ちてきた』とか『ドーナツ作りに失敗した』とかありえない返答が返ってくるですよ！これは何かあるに違いないです！」

「何ハルナみたいなこと言ってるの〜〜〜〜〜〜〜!?!?」

だが、夕映も引き下がらない。気になってついてきたルーテシアたちも、後ろでため息をつく。

( どうするんだい？あの子、かなり強情だよ？ )

( ルーラー………… )

( 大丈夫……………いざとなったら『ガリユール』を呼ぶから。 )

念話で打ち合わせる3人（2人と1匹？）。『召喚魔導士』であるルーテシアの召喚虫『ガリユー』なら、並のスタンド使いに遅れをとることはない。そのときだった。

「ウウウ~~~~」  
「ガウウ~~~~」

犬のうなり声がした。

「へ？これって……………」

「野良犬のたまり場にでもなっているのでしょうか……………」

（アルフ……………）

（……………いや、「犬」の臭いはしない！この『臭い』は……………）

ビルの中に放置された鉄骨や材木の影から、何かがいくつも飛び出した。だがそれは、『野良犬』などというかわいらしいものではなく

「ウウウ~~~~」

「ハフツハフツハフツ……………」

「ば……………バルーンアートの……………」

「犬……………?」

もっとかわいらしいものだった。ピンクやオレンジのカラフルなバルーンアートの犬が、うなり声をあげながらフワフワとのどかたちに近づく。

だが、のどかは『かわいらしい』故に『恐怖』を感じ取った！

「ダービーに『援軍が来たら厄介だから見張っていてくれ』と頼まれた世界だが、どうやらそれは間違ってた世界のようなな。」

不意に階段の方から声がして、そちらを向く。

「一つ忠告をしておく、君たちがそれ以上近寄らない世界なら、我がスタンド『チューブラー・ベルズ』のバブル犬は君たちを襲わない世界だ。だが、近づいた途端、バブル犬は君たちを食い殺す世界となるだろう……………私も、できれば子供は殺したくない世界なんだ……………今すぐたちさるがいい。」

出てきたのは、黒い肌の男だ。

縮れた髪を短く切り、目元には渦巻きのメイクが施されている。服は茶色いコートを着て、ジーンズにはトゲのようなものがついていた。

「な……………何ですかあなたは……………?」

「スタンド使い……………!」

のどかは、『イノセント・スターター』を出し、戦闘態勢をとる。

ルーテシアも、ブーストデバイス『アスクレピオス』の準備をする。

「……………なるほど、立ち向かう世界というわけだな……………宮崎

のどか……………我々以外にスタンド使いを『生み出している』者が

いるとは聞いていた世界だが、君がそいつを知っている世界なら、

色々聞けたのだが……………」

「えっ!? (我々以外に……………?)」

「ゆけツ!!」『チューブラー・ベルズ』!」

のどかが迷う暇もなく、男のかけ声と共にバブル犬がのどかたちに向かって飛びかかる!

男の名は『マイク・O』<sup>オ</sup>

スタンド名は『チューブラー・ベルズ』

#32 / ダービー・ザ・リベンジャー ?

## 廃ビル5階

ポーカーは、配られた5枚のカードを一度だけ交換して相手よりいい役をそろえる、ポピュラーなトランプゲームである。しかし、ゲームに『賭け』の魅力が加わると一変して複雑な心理戦が始まるゲームでもある。

表情が読みにくい『ポーカー・フェイス』とは、このゲームが語源とされている。

「……ジョーカーは一枚…カードに異常はない。ごく普通のカードだな。」

「ふふっ、私がカードに細工をしたと思った？」

「……………いや。ただ、お前のオヤジは『セカンド・ディール』を使うくらいに熟練者だったらしいから……………やるんなら、お前は技術で来るだろう……………」

「どうかしらね……………ふふっ」

徐倫はカードを調べ終わると、カードを集めて山にする。2人の周りには、ダービー側からスバル、ネギ、ティアナ、千雨が囲み、イカサマがないか見張る。チンクは明日菜、ウエンディ、オットーを側のテーブルで寝かせて、3人を介抱していた。

するとダービーは『ポーカー・フェイス』を出し、3人の魂をそれぞれ六つに分けた。

「ポーカーには、チップ3枚じゃあ話にならないでしょ？それぞれ六つで一つの魂よ。そして、」

ダービーは、何も描かれていない真っ白なチップを六枚、徐倫に差し出す。

「その真っ白なチップが、あなたの『魂』よ。私が六枚すべて奪ったら、あなたの魂はなくなるわ。いいわね？」

「……………ああ。」

「ふふっ、では、始めましょうか！」

ダービーのかけ声で、ゲームが始まった！

ここからは、徐倫目線でお楽しみ下さい。

## 第1ゲーム

6：徐倫（以下徐）　ダービー（以下ダ）：18

ディーラー：ダービー

ダービーがカードを配り、私は手札をみる。カードはダイヤのA、

スペードの3、8、J、ハートの6だ。スペードのフラッシュが狙えるな……

「二枚チェンジだ。」

ダイヤのAとハートの6を捨て、チップを払う。引いたカードは

(ハートの3と………ダイヤの8か………)

2ペアだが、まあいい。役はそろった！  
ダービーも三枚チェンジして、勝負だ！

「2ペア。3と8。」

「2と6の2ペアよ………運がいいわね。でも、勝負はこれからよ！」

ふん、今の内に言っつてやがれ。

## 第2ゲーム

9：徐　　ダ：15

ディーラー：徐倫

次のカードは、ダイヤの4と8に、ハートの4とスペードのJと8で、8と4の2ペアができていた。別にイカサマはしてないからな！



ダービーも二枚チェンジして、とりあえず私は一枚だけチェンジしておこう。引いたのはダイヤのQだった。

「コール。8と4の2ペア。」

「悪いわね……………Qの3スリーカードよ！」

……………ちいっ！向こうのがよかったか……………

### 第3ゲーム

6：徐　　ダ：18

ディーラー：ダービー

カードはAがそろったただけのワンペアだったので、三枚チェンジする。が、思ったようにそろわなかった……………

「Aのワンペアだ……………」

「ふふっ、運がいいわね……………」のワンペア。」

ふっ、ギリギリだったな……………

### 第4ゲーム

9：徐　　ダ：15

ディーラー：徐倫

今んとこいたちこっこな状態だな……………ここいらで勝負に出るか！

カードはクラブの3、ダイヤの4と8、スペードの5と7と、ストリートが狙える。ダイヤの8をチェンジすると、上手い具合にダイヤの6が来た。行ける！

「コール。ストレートだ。」

「……Qの3カードよ……やるわね。」

なかなかいい勝負になってきたな。こっから畳みかけるぞ！

## 第5ゲーム

12：徐　　ダ：12

ディーラー：ダービー

次は役<sup>フタ</sup>なしか。三枚チェンジしたら、Qの3カードになった。

「コールだ。」

「あら、その役で来ちゃうの？」

「「「「「！？」」「」「」「」

なんだと！こいつには、私の役が見えている………！

「……………何のことだ？」

「ふふっ、とぼけなくていいのよ？私はフルハウスだから。」

くそっこいつ、イカサマしているのか？慌てて、ネギたちに目配りをする。

「いえ……今のところ、怪しい動きは……」

「私の方も……」

「手の動きにも注意してたけど、怪しい点はなかったわ。」

「視線や仕草にも何も……」

四人には見えてなかったか……だが、ただのブラフハッターリかもしれない……ここは、まだ様子をみよう……

## 第6ゲーム

9：徐　　ダ：15

ディーラー：徐倫

ヤツがイカサマしている証拠はない……それに、ポーカーは相手の「役」が見えたとしても意味はない。自分の役は変えられないからな……だが、何か引っかかるな……さっきの行動……カードは、QとAの2ペアだ。

「コールだ。」

「ふふっ、『QとAの2ペア』ね。」

「!?」

「こいつ……」

「だが、今のに怪しい点は……」

ヤツも手札を見せる。ジョーカーを交えたストレートだ。

どうなっているんだ……………？ヤツは私の役が見えている上に、ヤツの方が役が上……………？やはり、ヤツはイカサマをしているのか！？  
だが、方法は？どうやって私の手札を見て、なおかつ自分の役を勝たせている？

## 第7ゲーム

6：徐 ダ：18

ディーラー：ダービー

そう思つて迎えた第7ゲーム。ふと、ダービーの手が山札へ延びたとき、『あるもの』が見えた。  
そうか！あれなら、自分の手札を勝たせることができる！だが、どうやって私の手札を……………？それがきかりだ。

結局このゲームはヤツの勝ちだった。

駒はそろった……………だが、まだ何か足りない……………決定的な何かが……………

現在7ゲーム終了

3：徐 ダ：21

ダービーが優勢。

廃ビル1階

のどか、夕映、ルーテシア、アルフ、アギト VS マイク・O

「『イノセント・スターター』ッ!!!」

のどかは自分たちに迫るバブル犬に向かい、近いほうには拳を、遠い方へは子亀を放つ!だが、バブル犬はふわりとそれを避けて、その内の一匹が夕映に迫り

ガブウウッ

「なあっ!?!」

「ゆえッ!!!」

夕映の足に『噛みついた』!だが、噛みついたただけには止まらず、

噛みついた先から夕映の足から血管へと進入してきた！

「こ……これは！わ、私の体内に！？」

「ゆえッ！！」

のどかは夕映に近づこうとするも、バブル犬が容赦なくのどかに迫る！

その時！

ドガガガガッ

「え？」

黒い影がのどかの前に現れて、バブル犬を蹴散らした！  
驚くのとのだが、その影をよく観察した。

2 m近いカブトムシなどを思わせる体に、四つの赤い目、首にはマフラーをつけていて、某特撮ヒーローを思わせる。

「えと……あ、ありがとうございます………」

「……………」

それは言葉を発さず、ぺこりと会釈した。

「あ……………あれは……………？」

夕映がいきなり現れた人（？）に驚いたその時

バアアンツ

「……………え？」

噛みついていていたバブル犬が破裂して、夕映の足に太い『釘』が突き刺さっていた……………

「あ……………あああああああああッ！！！」

「ゆえ……………！！！」

部屋中に夕映の叫び声が木霊する。

「我が能力『チューブラー・ベルズ』は、金属を膨らまして『動物』の形にし、相手を追跡する……………そして、体内へ進入して破裂する世界だ。」

マイク・Oは、静かに告げる。いつの間にか彼は、鉄骨の近くに来ていた。

「！ガリユー！アギト！行って！！！」

「おう！」

「……………！！！」

ルーテシアは黒いそれ　人型召喚獣『ガリユー』とアギトに指示する。

ルーテシアのポケットから飛び出たアギトは、火球を形成して鉄骨に投げつけ、ガリユーはマイク・Oに迫る！

ガリユーの攻撃はバブル犬により阻まれるも、火球は鉄骨を熱し、焼き切った。まだ熱いのか、鉄骨は赤く熱されていた。

「……考えたな。熱すれば私は膨らませない世界というわけか……」

マイク・Oが静かに賞するも、今度はガリユーの回し蹴りが迫る！

「！危ないッ！！」

「！……」

が、のどかの声に一歩引く。瞬間！

ズドオツ

「……！！」「」

ガリユーとマイク・Oの間に『鉄板』が降ってきた！！ガリユーは足を少し切ってしまうが、後一步前に出ていたら、片足は切断されていただろう……そう思ったルーテシアは、ぞつとした。

だが、恐怖は去った訳ではない。気がつくと頭上には、白鳥の形をした風船が数体いた。

「ふむ……すでに鉄板を『バブル鳥』に変えていた世界だが……気づかれたか……なかなか勘のいい世界だな。だが、我が『チューブラー・ベルズ』は防御シールドにして、君たちへのギロチン処刑の世界を兼ねたッ！！もう後戻りはできないぞ………すでに許される世界ではない。後悔する世界は与えないッ！！」



マイク・Oは、のどかたちに指を指しながら叫ぶ。

『頭脳』と『体力』

二つの戦いは、決着へと向かっていく

t o b e c o n t i n u e d . . . .

## #32 / ダービー・ザ・リベンジャー ? (後書き)

32話です。

・今回は『頭脳』と『体力』の二つの戦いです。話の展開上、『体力』が少ないですが……………

・徐倫目線は新しい試み。ゲームをしている目線からだど、おもしろさが増すかなと思ひまして。

・VSマイク・O。マイク・Oは、キャラクター、能力ともに好きなキャラですし、のどかたちを足止めするには、彼の『チューブラー・ベルズ』は効果的だと考えました。

・次回、ダービー戦&マイク・O戦クライマックス！果たして勝つのは……………？

では！

#33 / ダービー・ザ・リベンジヤー ? (前書き)

徐倫 VS .ダービーの『頭脳戦』

のどかたち VS .マイク・Oの『肉体戦』

二つの戦いは、決着へ向かっていた

### #33 / ダービー・ザ・リベンジャー ?

廃ビル1階

(な……………何ですかこれは……………さつきから一体何が起  
っているですか……………!?)

夕映は混乱していた。

ネギたちを追ってこの廃ビルに入ったら、変な黒人男性が現れて、  
風船の犬が自分たちに襲いかかり、虫みたいな生物や手のひらサイ  
ズの人が自分たちを助け、自分の足には太い釘が刺さっている……

……………  
これが、混乱しないでいられるだろうか? いや、『できない』。少  
なくとも、今の夕映には無理だった。

「……………あきらめたらどうだ? 我が『チューブラー・ベルズ』は  
すでに君たちを包囲している世界だ……………逃げ場はない!」

男　マイク・Oは、のどかたちに言う。すでに勝利を確信して  
いる様子だ。

ふと、夕映は入り口をみる。入り口には特に多くのバブル犬があり、  
逃げ出せそうにない。だが、夕映は見た。入り口の影に『誰がいる』  
!?

「あ……………あなたの他に……………誰か『仲間がいる』ですか……………  
?あなた以外に……………ここに誰かいるですか!？」  
「……………?いや、このビルには私と上にいる『ダービー』だけの世  
界だが……………?」

『ダービー』は誰かは知らないが、このビルには彼と後一人が上の  
階にいるだけらしい。では、入り口の『アイツ』は……………?

#33 / ダービー・ザ・リベンジャー ?

廃ビル5階

### 第8ゲーム

3 : 徐 ダ : 2 1

ディーラー : 徐倫

ヤツのイカサマの方法は読めた。だが、どうやって私の手札を当て  
たんだ?それだけがわからねえ!

「どうしたの?早くカードを見たら?ふふっ」

うるせえよ、気持ち悪い笑みを浮かべるな!目が笑ってねーから怖  
いだろうが!……………ん?『目』?

この時、私の中にある考えがひらめいた。

そうか！これは盲点だった……………

確かにこれなら……………！

だが、だとしたら『誰が』……………？

考える……………「ここまでの流れを思い出すんだ……………！」

……！そうか！！

「……………？どうしたの？私はもうカードをチェンジしたわよ？」

いきなり徐倫が黙り込んだため、ダービーは不思議に思う。

「まさかとは思うけど、私の父の時のように、ビビらせてゲームから降ろすなんて考えてるんじゃないでしょうね？」

「いや……………ところで、一つ聞きたい。」

「？何かしら……………？」

「もしお前がイカサマをしているとして、私がそれを見つけたら、お前は『負け』を認めるか？」

徐倫の質問に、ダービーだけではなく、ネギたちも不思議がる。なぜ徐倫は、このタイミングでそれを聞くのだろうか……………？

「……ふふっ、何を言い出すかと思えば……ええ、『認めるわ』。イカサマを見破られるのは、博打打ちにしてみれば恥ずべき事……素直に負けを認めるわ。ただし、『見破れたら』の話だけど、ね。」

ダービーは、自信ありげに答えた。

「……………ありがとう。」

ダービーに礼を言うと、徐倫は『ストーン・フリー』を出し

ドグシヤア

「……………!?!?」「……………」

「それを聞いて安心したわ。」

ティアナの顔面にストーン・フリーのパンチをお見舞いした!

「徐倫!?!?」

「テイ……………ティアを!?!?!?」



徐倫の行動に、全員が驚くと同時に疑問を投げかける。殴られたティアナは、離れた場所のテーブルに、激突した！  
その時だった……

シユンツ

「……………ん？あれは？」

千雨は、ティアナの体から『白い何か』が飛び出たのを見た。素早く『エンゼル』の籠手を装着すると、それを捕まえる。

「これは……………ヤツの『スタンド』についていた『仮面』か！」

そう、それはダービーの『ポーカー・フェイス』についていたものと同じ、『スタンドの仮面』だった。その裏を見ると丸いくぼみがあり、そこに『チップ』がはまっていた。  
そのチップを見て、千雨はすべてを察した。

「……………なるほど、そういうことか！」

「え？」

「どういうこと……………？」

ネギヤスバル、チンクには、何のことなのかわからない。

「よーするに、『誰かが後ろから手札を見て、それより強い役にした』ってところだろ？」

「ああ、明日菜たちと一緒にティアナの『魂』を奪って、そこに仮面が取り憑いていたわけだ。多分それがこいつの能力だ。そして

ガシィッ

「ううっ……………」

徐倫はダービーの右手をつかみ、ワイシャツの袖を破く。するとそこから

バラバラ

「か！カードが『袖の中から』……………！」

「柄の同じ『カード』を袖の中から出して、自分が有利になれるカードを引いていたんだ。多分オットーの時も同じ手口だったんだろう。こいつが見えなかったら、分からないままだったわ……………そんなところはほめてやる。」

「う……………ううっ……………（まさか……………私のイカサマが……………）」

ダービーは徐倫の推理力に戦慄した。戦慄して、恐怖を覚えた。それはつまり……………

ポーン

「……！」

「アアッ」

「ああッ！4人の魂が！」

「戻ってくるッ！」

「しまった！うっかり魂を……！」

「やれやれ……魂が解放されたつてことは、あんたの「心」が負けを認めたということね……！」

チップが元の『魂』に戻り、それぞれの身体へ戻っていく！

「大丈夫か？お前ら！？」

「……う……ん……？」

「でも、よくティアが操られてるつて分かったね？」

「簡単な消去法だ。オットーとスバルは私たちと一緒にだつたし、ネギと千雨、それにチンクの位置からじゃあ私の手札はみえない。なら、ティアナしかないだろ？」

「ジョースター家……まさかこれほどとは……！」

徐倫の洞察力に感服するダービー。父である『ダニエル』や叔父の『テレンス』が、徐倫の父承太郎に敗北した理由が分かった気がした。

「……逃げるッ……！」

ガタッ

「あ……ッ……！」

あまりの恐怖に逃げ出すダービー！徐倫たちは追おうとするが……

……

ドグシヤア

「……………！！」「……………」

「がっ……………???.?」

突然スタンドが現れ、ダービーを殴り倒した！

左半身は青、右半身は赤を基調としたボディに中央に左右を分けるように金のラインが入ったロボットのようなデザインで、目はゴーグルのようになっており、口はなくガスマスクのようだ。頭はまるで花魁の髪型のように大きく、後光が差すように角が生えている。また、頭部や手の甲、腰には大極図が描かれていた。

『残念だったねダービー。』

『空条 徐倫をなめてかかるからこうなるのさ。』

スタンドから『二つ』の声が発せられた。一つは声変わり前の少年、もうひとつは、少年と同世代くらいの少女のものだ。

「あ……………あなた『たち』は……………!!」  
『悪いけど、連れて行かせてもらうよ!!色々聞きたいことがあるからね!!』』

二つの声が同時に発せられると、スタンドはダービーをつかむ。

「おいッお前は一体……………」

「その人をどこへ連れていく気ですか!?!」

『ああ、君たちにはいずれ、うちの『お嬢様』から直々に話されるよ。』

『今いえるのは、私たちは君たちの敵ではないことくらいだよ。』

『それまで、気長に待っててね』』

スタンドはそう言うと、シュッとダービーごと消えてしまった。

「消えた!?!」

「『オエコモバ』の時と同じだ!何の反応もなく『転移』した!!」

ダービーは倒せたものの、新たな謎が生まれた……………

「……………で、何で私は鼻を折るほどの怪我をしてるの?」

「それについては後で説明するから……………」

廢ビル1階

(……………彼女の見た者が何者かは知らない世界だが、敵である可能性が高い世界だな……………)

マイク・Oは夕映がみたという人物に警戒しながら、のどかたちを追いつまむ。

「……………ガリユー、アギト、2人について！」

「……………」

「分かった！」

ルーテシアの指示で、アギトとガリユーはのどかと夕映につく。

「お前、私から離れるなよ！」

「あ……………あなたたちは一体……………？」

「……………それは後で説明する！」

手のひらサイズの頼りないながらも、力強く夕映に叫ぶアギト。彼女もスタンド使いと戦うのは初めてだが、非戦闘員である夕映を守る思いがあった。

「……………上っ!!」  
ポウウツ

上から来るバブル鳥に火炎弾を放つアギト。バブル鳥は元の鉄板に戻り、半分には焼き切られて落下する。だが、すぐに別のバブル鳥が二人に迫る!

「ち……………数が多すぎるっ」  
「元々ここは改装に使う機材が多いです……………それを使っているのでは……………」

すでに周りには二十を超えるバブル鳥やバブル犬がのどかたちを囲っていた。それらは今にも飛びかかってくる勢いだ。

「これで終わりだ。すでに我が『チューブラー・ベルズ』の処刑準備は完成した世界!一斉に飛びかかれては、ひとたまりもない世界だ!行け!!」

マイク・Oが叫ぶと同時に、バブル犬たちがのどかたちに襲いかかる!

もうダメかとのどかは諦め、強く目を瞑る。

(……………?)

だが、痛みはやってこない。痛みを感じる間もなく死んだかと思いのどかは目を開ける。

「……えッ!？」

目を開けたのどかが見たのは、あれだけいたバブル犬たちが見当たらない、だだっ広いビルの内部だった!

「こ……………これは!?!どこだ!我がバブル犬たちはどこにいった!?!?!?!?!」

どうやらマイク・Oにも事態が飲み込めないようだ。では、誰が……………?

「これを待っていたわ……………マイク・O、あなたがこの部屋にある金属をすべて『チューブラー・ベルズ』の配下に置くこの時を!」

不意に入り口から声が、まだ幼さの残る少女の声が聞こえた。そちらを見ると、のどかたちと近い年くらいの少女がいた。

身長は夕映より少し高いくらいで、白髪に近い銀髪の髪を縦ロールにしており、服装は黒を基調としたゴシックロリータ服で、左手を隠している。

『お人形さんみたい』

それが、この少女に対するのどかの第



一印象だった。

「！ばつ、バカな！？あなたは……………！」

「このビルは以前、私が使ったことがあるの。すでに『見取り図』は手に入れていたわ。サルシツチャの『アンダー・ザ・レーダー』は地図上にあるものを手元に寄せたり、逆に地図上に転移させる能力！すでにバブル犬たちは、ビルの4階に転移させてあるわ。」

見ると、少女の後ろには長い銀髪の男がいた。その手元には地図があり、それを覆うようにスタンドが存在していた。

「ル…………『ルル・ベル様』！？なぜあなたがここにッ!？」

「マイク・O…………彼女、『宮崎 のどか』は私にとって重要なスタンド使いなの。傷つけられては困るわ……………」

「えッ?」

ルル・ベルと呼ばれた少女に『重要なスタンド使い』と言われて、戸惑う。

(わ…………私が重要なスタンド使い……………!?もしかしてこの人……………!?)

「まさか…………私たち以外でスタンド使いを生み出しているのは……………」

「……………!？」

「だから、あなたにはそれを命で償ってもらおう!」

言うやいなや、いきなり猛スピードでマイク・Oに近づくるルル・ベル！すでにスタンドの両腕が出ており、マイク・Oにラッシュを放った！

ズドドドドドド

「ぐああっ!? (か……彼女の能力が私に!?)」

「……………君たち、目を瞑っている! トラウマになりたくなければな……………」

男 サルシツチャに言われて、訳も分からないまま目を瞑るのどかたち。

唯一目を開けていたガリユーは、これから起こることをルーテシアが見なくて良かったと、心から思った。

ルル・ベルのラツシユを喰らったマイク・Oは、徐々に「浮いていく!」それは『ラツシユの反動』ではなく、まるで『空中に吸い寄せられる』かのようだ!

「な……………なぜ……………あなたが……………!?!」

「あなたは知らなくていいことよ……………永遠にね。」

「う……………ウゴアアアアアアアア」

マイク・Oが断末魔の叫びを上げると

バンッ

まるで風船のように『破裂した』……………

「……………マイク・Oの処理は私が。」  
「お願いね。ああ、もう目を開けてもいいわよ？」

ルル・ベルが言うと、のどかたちは目を開ける。すでにマイク・Oの死体はなく、あるのは血の跡だけだった。

「な……………何なんですかあなたは……………！？」  
「それはまたの機会に。今回は偶然通りかかったただけよ。隠れた場所にある金属をもあいつが配下におくのを待ったから時間がかかったけどね……………」

ルル・ベルは「一応」申し訳ないように言う。

「……………あなたが私の能力を？何のために？」  
「……………いずれ分かるわ。」

ルル・ベルはそれだけ言うと、音もなく転移していった。

ルルニー・S・ダービー      スタンド名：ポーカー・フェイス

行方不明 再起不能

マイク・O スタンド名：チューブラー・ベルズ 死亡 再起不能

ティアナ・ランスター この後、仗助に鼻を治療してもらう。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CARD」

> i 3 5 9 1 — 4 0 6 <

スタンド名 ポーカー・フェイス

本体 ルーニー・S・ダービー

破壊力 E スピード D 射程距離 D

持続力 A 精密動作性 B 成長性 E

能力 賭けで敗れた相手の『魂』を奪い、チップの形に変える。また、敗れた相手の肉体に『仮面』を取り憑かせて、操ることができ

### #33 / ダービー・ザ・リベンジャー ? (後書き)

33話です。

・『イカサマは心理的盲点をつくこと』……………かつてダニエル・  
J・ダービーはそう言いました。今回の盲点は「仲間」です。キャ  
ラの立ち位置とか、スタンドのデザインとかが伏線になってました。  
・ダービーをさらったスタンドのモチーフは『磁石』。モデルは気  
づいたらダブルのヒート・トリガー（磁石ⅡS極とN極Ⅱ青と赤Ⅱ  
ヒート・トリガー（笑））頭部は『戦慄の子供たち』のジャケット  
での宝野 アリカさんの髪型です。宝野さんは、ジャケットのたび  
にインパクトのある衣装を着ていて、曲とともに印象に残ります。  
イメージではメダ ットな感じ。

・久々のお嬢様。そしてルル・ベルのスタンドがちらり。マイク・  
Oの死亡シーンは、原作での死に方とあまり変わりません……………か  
なり残酷ですが……………

・今回はエヴァのお見舞いの話です。やっとここまで来た感じがし  
ます……………

では！

#34 / 吸血鬼の家にお見舞いに行こう (前書き)

前回、ダービー達を退けた徐倫たちだが……

## #34 / 吸血鬼の家にお見舞いに行こう

女子寮

徐倫と千雨の部屋

「で、どういう訳か説明してもらえますかッ？」

テーブルにどっしりとかまえ、スバル達に問う夕映。ネギたちは完全に困っていた。

(ど……どーすんですか兄貴！こりゃー説明するまで帰ってくれやせんぜ！)

(で……でも、夕映さんまで巻き込むなんて………)

(で……でもどうやって納得させるの?)

正直に答えれば夕映を戦いに巻き込んでしまうし、かといって、夕映を納得させるような嘘が見つからない……

(そこで問題だ！この面子(私、ネギ、徐倫、明日菜、スバル、ティアナ、のどか、カモ)でどうやってあの綾瀬を納得させるか?)

3択 ひとつだけ選びなさい

答え？ぷりちーなちうたんは突如納得させるアイデアがひらめく

答え？仲間がきて助けてくれる

答え？この面子じゃ無理。巻き込んでしまっ。）

（……………私が<sup>マル</sup>をつけたいののは答え？だけど、期待はできないわね……………ゆえちゃんを納得させることができそうな、例えば承太郎さんとかがあと数秒の間に都合良くあらわれて、アメリカンコミック・ヒーローのようにジャジャーンと登場して『まってました！』と間髪助けてくれるってわけにはいかないわよ……………）  
（じゃあどうするのよ！？）

全員があたふたしている中、動いたのは徐倫だ。

「分かった夕映、話そう。」

「徐倫！？」

「悪い千雨、私にも無理だ……………こいつの頑固さは私もよく知ってるしな……………答えは？だ。」

徐倫でもダメだったのかと諦める一同。  
だが、

「……………なるほど、つまりあれは『手品』の練習だったんですね。」

「ああ、ああやった方が緊張感出るしな。でもあの人駆け出したから色々失敗しちまったんだよ。ケガはそんなに深くなかっただろ？」

「……………ええ、傷跡も残ってませんしね。」

その考えは覆された。



某スケベ亀顔負けな徐倫の巧みな話術（曾祖父直伝<sup>ジユセフ</sup>）で、夕映は徐倫のウソを信じ込み、『あれは手品の練習だった』と納得してしまった。

（す……すごいですね空条さん……）

（うん、すごいけど……）

（あいつ、私らまで欺くなんて……）

（詐欺師になれるんじゃない？）

助かったが、徐倫の手口に呆れる一同だった。

というわけで、答えは？でした。正解者に拍手

#34 / 吸血鬼の家にお見舞いに行こう

グリーンドルフィンストリート麻帆良

206号室

「……で、お前を助けた奴……『ルル・ベル』って言ったか？  
そいつがお前やネギを矢で射抜いたっていうんだな？」

「はい……本人はそう言っていました……」

夕映と別れ、内緒で206二〇六に集まった一同。

のどかを助けた『ルル・ベル』という少女……助かったが、謎だらけな少女だ。

「……それに、おまえ等を襲った「マイク・O」の話と照らし合わせる、『矢』は盗まれた以外に『もう一本』あつて、千雨を狙つてる連中とは別の勢力らしいな……」

「……『矢』は破壊されたものを含めて『6本』あるんですよ？  
じゃあ、その一本は……」

「……一本、心当たりがある。」

承太郎の言葉に、全員が承太郎の方を向く。

「『吉良 吉影』のオヤジが所持していた矢だ。」

「！き……『吉良』の……！？」

「た……確かにあの矢は見つからないままツスけど……！」

吉良 吉影　かつて仗助の故郷「杜王町」で15年に渡り48人の女性や、自分を邪魔する者を人知れず殺してきた殺人鬼。仗助たち杜王町の住人が倒した殺人鬼の父親が所持していた『矢』は、

吉良を倒した後も見つからないままだった。

「ああ、それと一本だけ行方が知らないままの矢がある。それが一本ずつそれぞれの勢力に渡っているのだろう。」

「分かりやすくすると、こんな感じか？」

### 矢の行方

矢A 虹村 形兆が所持し、音石 明が奪ったもの。1999年に、SPW財団が保管している。

矢B 『吉良 吉廣（写真のオヤジ）』が所持していたもの。1999年から行方不明だが、承太郎は『聖王教会』に保管されていた『矢』はこれでは？と推測している。

矢C イタリアのギャング『ポルポ』が所持していたもの。2001年に破壊された。

矢D 2001年までポルナレフが所持していたもの。イタリアのギャング『パッショーネ』により保管されている。

矢E 2年前、空条 承太郎がアメリカで発見したもの。SPW財団が保管している。（徐倫やまき絵は、この矢でスタンドに目覚

めた。)

矢F 不明。『ルル・ベル』が所持している？

「 確か、吉良のオヤジは『爆発』により天に召されたはずだ。それが原因で『矢』がミッドに転移した可能性がある。」

「なるほど……………管理外世界からミッドに転移するのに一番多いケースに、大規模な爆発に巻き込まれるというのがあります……………有り得ないわけではありませんね！」

承太郎の仮説にフェイトも賛同する。

「……………とにかく、向こうが敵じゃないと言ってはいるけど、警戒した方がいいわね……………そいつらの目的も分からないし……………」

徐倫がそうしめて、その場は解散となった。

翌朝 月曜日  
麻帆良学園女子中等部廊下

(スタンド使いたちの襲撃も活発化してきている……………この間エヴァンジェリンさんは満月までって言うていたけど、それまでスタンド使いたちが待つてくれる保証はない！)

ネギは『果たし状』片手に廊下を歩いてた。これ以上スタンド使いと戦いが激化する前に、エヴァンジェリンとは決着を付けたい。  
(逃げずに立ち向かうんだ！そのための立ち向かうものなんだから！)

そう意気込んで、ネギは教室のドアを開く。

「おはようございますッ！エヴァンジェリンさんいますかッ!？」  
「あ、ネギ先生。エヴァンジェリンさんならまだ来てないですが。」  
「……………あ、そうですね。」

意気込んで入ったが、まだ来てなくて気を落とすネギ。そこへ、杖助が入ってくる。

「おーネギ、おはよーさん。エヴァンジェリンのやつ、風邪で休むつて連絡きたぞ。」

「え？『風邪?』」

(……………魔法使いな上に吸血鬼のアイツが、風邪ひいて寝込む訳ねーよな?)

ネギに耳打ちする仗助。一般的に吸血鬼は『不老不死』だ。風邪ひいて寝込むなど、有り得ない。

「……………仗助さん、HRお願いします！」ダッ  
「っておい！ネギ!？」

クラスを仗助に頼み、ネギは駆け出した。

「ま……………間に合っ……………ってネギ!？」

「すみませんアスナさん！エヴァンジェリンのお見舞いに行きます…!!」

「え?ちょ、ちょっとー!？」

明日菜が止めるのも聞かず、ネギは走り去っていった……………

麻帆良学園都市内でも特に自然が多い場所を、ネギは歩いていた。

「えーと……『クラス名簿』によると、エヴァンジェリンさんは『寮』とは別の所に住んでるのか……『桜ヶ丘4丁目29』……あ、ここかな？」

着いたのは、森の中に建つログハウスだった。墓場に建つ屋敷や古城を想像していたネギには意外だった。

「へえ〜〜案外すてきな家だなあ……………」

「少なくとも、吸血鬼が住んでる家のイメージじゃねーな……………」  
「そうですね承太郎さん。……………承太郎さん!？」

いつの間にか、承太郎がネギの隣にいた。

「な……………何で承太郎さんが!？」

「……………あのブチャラティに聞きたいことがあってな。で、君は？」

「あ……………実はエヴァンジェリンさんが風邪で休みで……………」

「……………『吸血鬼』がか？」

承太郎は怪訝そうな顔をする。承太郎も吸血鬼である「DIO」と戦った戦士だ。その吸血鬼が風邪で休むとは思えなかった。

「……………まあ、やつは『石仮面』で吸血鬼になったわけではないらしいからな……………オレの知る吸血鬼とは勝手が違うかもしれんな……………」

「ごめんくださいーい、エヴァンジェリンさーいん、ネギですー  
ー家庭訪問に来ましたー」

ネギはドア横の呼び鈴を鳴らすが、誰も出てくる気配はない。

「は……………入りますよー？」

ガチャッ

「おい、勝手に入っているのか……………？」

家に入るネギとともに承太郎も入る。中は……………

「わわっ！？中は結構ファンシーだ！？」

「……………こーいったトコはそこら辺のガキと大差ねーな……………」

ぬいぐるみや人形などが所狭しと置いてあった。吸血鬼らしく血を抜かれた死体の一つや二つ転がった室内を想像していたネギは、吸血鬼らしさがひとかけらもないこの部屋に驚き、承太郎はエヴァンジェリンが容姿相応の趣味を持っていることを知る。

そこへ

「どなたですか……………？」

「ビクウッ」

「……………なんだ、あんたたちか。」



奥から茶々丸とブチャラティが出てきた。

「あ…ちや茶々丸さんにブチャラティさんですか。あ、えーと、この間はどうもすいませんでした。」ペコペコ

「いえ、こちらこそ。」ペコペコ

「……………で、エヴァンジェリンは？」

「あいつなら、風邪こじらせて寝てるぞ。」

ブチャラティの言葉に、ネギは本日二度目の驚きを見せる。

「え？でも不老にして不死である彼女が風邪なんかひくわけないでしょう？」

「その通りだ。私は元気だぞ。」

いつの間にか、パジャマ姿のエヴァンジェリンが二階から降りてきていた。

「ふっ、空条 承太郎も一緒か。だが、魔力が十分でなくとも、貴様ごときひよっこをくびり殺すことくらい、わけはないのだぞ？」

「マスター、ベッドを出ては……………」

「エヴァンジェリンさん！！」

エヴァンジェリンを見つけて、ネギは果たし状をエヴァンジェリンに突きつける。

「……………？何だそれは？」

「は、果たし状です！僕ともう一度勝負してくださいッ！」

「おい、『お見舞い』じゃなかったのか？」

「それに、そいつは次の満月までお預けだって……………」

「そ、それにちゃんとサボらないで学校に来てください！このままだと卒業できませんよ！」

承太郎とブチャラティのつつこみをよそに、ネギはエヴァンジェリンに言う。

「いや、だからそれも『呪い』のせいで出席しても卒業できないんだって。まあいい。じゃあここで決着をつけるか？私はいっこうにかまわないが……………」

「……………いいですよ。その代わりに、僕が勝ったらちゃんと授業に出てくださいね！」

「おいエヴァ……………」

「……………やれやれだぜ。」

両者は戦闘態勢をとり、辺りに緊張した空気が立ちこめる……………

茶々丸はエヴァンジェリンを心配そうに見る……………

そして……………

ぼてっ

エヴァンジェリンがぶっ倒れた……

「わーっ！？」

「む………すごい熱じゃないか………風邪って本当だったんだな………」

承太郎がエヴァンジェリンの容態をみる。茶々丸とブチャラティがエヴァンジェリンを運ぶ準備をする。

「すまない、二階のベッドに寝かせてくれ。」

「あ、はい！」

ブチャラティの指示で、ネギは彼とともにエヴァンジェリンを運び出した。

「ずいぶん無理をしたみてーだな………」

「マスターは風邪のほかに『花粉症』も患っていますので。」

「………本当に吸血鬼なのか、あいつは？」

承太郎はこの時、自分の中の吸血鬼のイメージ（主にDIO的な）が崩れた。

「で、オレに話つてのは？」

エヴァンジェリンをネギに任せ、ログハウスから出て、承太郎に問うブチャラティ。

承太郎はブチャラティを見据えたまま、コートの内ポケットに手をやる。

「……………お前は、6年前コロッセオで『死んだ』らしいな。」

「！……………エヴァから聞いてはいたが、もうそこまで調べたのか……………SPW財団とやらは……………」

「そこで聞きたい。お前は」

承太郎は、内ポケットから手を出す。手には「写真」があった。

「6年前に、同じくコロッセオで死んだこいつを知っているか？名前は『J・P・ポルナレフ』……………」

「！……」

「ポルナレフ」の名前と写真　彫りの深い顔に、パンクロックカ  
ーのようにたてた銀髪の男　ブチャラティは目を見開く。  
その男のことは知っていた。

忘れるわけもない。

あの時の

「……………知っていたら、何だつてんだ……………!?」  
「やはりな……………やつの死には、不審な点が多い。同じ場所でお  
前が死んでたんなら、色々知ってそうだったんでな。」  
「……………」

承太郎が説明するが、ブチャラティは黙ったままだ。

「わかった、話そう……………」

しばらくして、ブチャラティは静かに話し始めた……………

話は、ブチャラティが所属していた組織の幹部になり、誰もその正  
体を知らないボスの娘　トリツシュの護衛任務を彼のチームに  
与えられた所から始まった。

ボスに反感を持つ裏切り者の襲撃を乗り切り、ヴェネツィアにいる  
ボスの元までトリツシュを連れてきたが、ボスは、自分の手で自分

の足取りになるトリツシユを殺害するために護衛させたことを知り、トリツシユを守るためにボスに離反したブチャラティは、そこでボスの「時を消し飛ばす」スタンド『キング・クリムゾン』に敗れる。だが、チームの新人りの力もあり何とかヴェネツィアを脱出し、トリツシユの記憶をたよりにボスの正体を探ろうとし、その時に、同じくボス　ディアボロを倒そうと、ディアボロの正体を探す者を探していたポルナレフと知り合ったという。

「彼とコロッセオで落ち合う手はずだったんだが、同じくディアボロもポルナレフの存在に気づいていたんだ……それで、ディアボロと交戦になって……」

「そいつに敗北した……というわけか……」

「ああ……だが、彼は『希望』を残してくれた……彼が教えてくれた力『レクイエム』を、その新人り　」

「ジョルノ・ジヨバアーナが手に入れて、ディアボロを倒したんだ。」

「!?!」

『ジョルノ・ジヨバアーナ』の名前を聞いて、承太郎は目を見開く。

「『ジョルノ』だと……!? その新人りは、『ジョルノ・ジヨバアーナ』というのかッ!？」

「あ、ああ……そうだが……?」



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
. . .



### #34 / 吸血鬼の家にお見舞いに行こう（後書き）

34話です。

・サブタイトルは『漫画家の家へ遊びに行こう』から。

・夕映を納得させる徐倫の話術。ジョセフもあの話術がなければ、天才的イカサマ師の異名は得られなかったでしょう。

・この小説内での『矢』の行方を簡単に表記。吉良の矢は未だ行方知らずなので、聖王教会にあったのはこの矢にしました。転移理由は他のリリなのクロスオーバーものによくある転移理由から（笑）

・ネギとエヴァの夢のくだりは、原作通りです。

・ブチャラティとの会話で、承太郎はブチャラティとジョルノの繋がりを知りました。『スタンド使いとスタンド使いは引かれ合う』  
……………これが物語にどう影響を与えるかは、お楽しみということ。

・次回、エヴァ編クライマックス！エヴァとの決着の始まりです。

では！

**#35 / 闇夜の襲撃者!! (前書き)**

あけましておめでとーございますー!

新年一発目にして、エヴァ編クライマックスの開幕です!

### #35 / 闇夜の襲撃者!!

1888年

ウインドナイツロケット

風の騎士たちの町

「ふん、あの若造　『ツエペリ』が探していた「石仮面」の力を試してみたが……………この程度か……………」

金髪の少女　エヴァンジェリンは、目の前の男に「わかりだといわんばかりに言う。」

「GUUUUU……………このディオが……………こんな小娘にイイイ……………」

「世界の半分も知らぬクセに、エラそうな口を叩くなよ……………同じ『吸血鬼』でも、年季が違うのだよ。」

傷ついた男　　ディオにそう言うと、エヴァンジェリンは踵を返す。

「ン？オイ御主人、トドメササナクテイイノカ？」

「興ざめだ。帰って寝る。」

「！……………このおれに情けをかけるというのか……………！！！」

立ち去ろうとするエヴァンジェリンに、ディオは叫ぶ。エヴァンジェリンはディオをまるで養豚所の豚でも見るかのように冷ややかな目で見下ろす。

その冷ややかな目に、ディオは悟った。この小娘は、自分など眼中にないのだと。

エヴァンジェリンが立ち去った後も、ディオは悔しそうに地面を見つめるしかできなかった……………

#35 / 闇夜の襲撃者!!

麻帆良学園女子中等部  
コンピューター室

証明を落とした室内にはパソコンのモニターの明かりだけが光源だった。そこには、2人の人影があった。

「……………どうだ？」

「予想通りです。やはり『サウンドマスター』のかけた「登校地獄」の他にマスターの魔力を押し込んである『結界』があります。この結界は学園全体に張り巡らされていて、大量の『電力』を消費しています。」

「ふん、20年も気づけなかったとはな……………しかし、『魔法使い』が電気に頼るとはなー……………えーと……………『ハイテク』ってやつか？」

「私も一応その『ハイテク』ですが……………」

パソコンを使い、学園のデータベースに侵入した茶々丸と、報告を聞くエヴァンジェリン。

「まあいい、おかげで今回の『最終作戦』が実行できる訳だ。……

……………そうだよな？」

「そうです。」

「よし。予定通り「今夜」決行するぞ！ブチャラティにもそう伝える。ふふふ……………坊やの驚く顔が目には浮かぶ……………クククク……………

アーーーーッハッハッハッハーーーー」

あーおかしいと、わざわざ高いところに登って笑うエヴァンジェリン。相当機嫌がいいようだ。

だが茶々丸は、少し不安そうだ。

「ん？どうした茶々丸？何か気になることでもあるのか？」

「い、いえ……………あの……………」

「？」

エヴァンジェリンに問われて、くちごもる茶々丸。そして、少し黙った後、

「……………申し訳ありませんマスター。ネギ先生はすでにパートナーと『バックティオ仮契約』を結んでいます。」

「何！？それは聞いていないぞ！なぜ黙っていた！？相手はッ!？」

「……………相手は『空条 徐倫』です。何故報告しなかったのかは……………自分でもわかりません……………申し訳ありません……………」

茶々丸の報告に驚くエヴァンジェリンだが、すぐに冷静になる。

「ふん、まあいいさ。もはや奴に「パートナー」がいようが、関係ないからな。開始まで後『5時間』だ。行くぞ茶々丸。」

言つとエヴァンジェリンは飛び立とうとする。だが

ビッターーーン

「へぶうッ」

「マスターッ!?!」

思いっきりつまづいて転んだ……………

「まさか、セッコに続き『ダービー』と『マイク・O』がやられるなんてな……………」

「おまけに、マイク・Oをやった奴は『正体不明』……………ダービ

「も行方不明ときた……………」

暗い室内で、男たちが話す。すると、男の内のひとりが、奥に座る女性に話しかける。

「すいませエン奥様、よろしければ私が直々に出向かいますか?」

「いいえブラックモア……………すでに「彼」の部下が『やつ』を援護しに向かったわ……………」  
『やつ』のスタンド 『スペーススマン』  
が、確実に息の根をとめることでしょう……………フッフ……………」

「……………信用できるんだろうな?その『スペーススマン』ってスタンドは……………」

女に向かい、ひとりの男がこえをかける。

黒い帽子に黒いコートとズボンを着用した黒づくめの男だ。だが、その目は真っ赤に充血をしており、それが男を印象付けていた。

「ええ、数日前に目覚めたとはいえ、強力なスタンド使いよ。安心していいわ、『リゾット』。」

男 『リゾット』に向かい、女は余裕の笑みを浮かべて言う……………

学園都市内  
購買近く

「で、エヴァンジェリンさんはまた襲ってきそうなの？」  
「今の所は何とも……でも、今日は教室に来てましたし、考え直してくれたんじゃないかなあって思いますが……」

放課後、明日菜、徐倫、スバルと話しながら歩くネギ。

「あまり安易な考えをするなよ。吸血鬼ってのは、100年以上待つ位執念深いらしいからな……」

「ま……マジで？」

「それが本当なら、エヴァンジェリンもまだ諦めてないんじゃないか……」

「……」  
「い、イヤだなあ空条さん……クラスメートをそんな風に疑ったりしたら……」

忠告する徐倫に対して、ネギはあくまで『先生』としてエヴァンジェリンを信じるようだ。

ふと、スバルは購買が賑やかなのに気づいた。見ると、なにやらセールをやっているようだ。スバルは、近くにいたのどかに声をかける。



「どーしたの？」

「あ……ナカジマさん……」

「知らないのスバル？今日の夜8時から一斉に『停電』だよー深夜12時まで。」

「学園都市全体の年2回のメンテです。」

「あ……そーいえば……」

隣にいたハルナと夕映に説明されて、スバルは昨日フェイトが話していたのを思い出した。

( 停電か……何か嫌な『胸騒ぎ』がするな…… )

「じゃあ、僕見回りに行つてきますのでー」

「はい」

「がんばんなー」

「スバル、私らも見回りしたほうがいいかもしれない……」ヒソ  
「え？う、うん……？」

スバルは徐倫の言ったことが分からなかったが、とりあえず、今夜徐倫や千雨たちと共に見回りに行くことにした。

午後8時30分

女子寮

「うっくん、真つ暗な寮ってなかなか怖いねえーカモ君。」

カモと共に寮を見回りしていたネギは、カモに話しかける。だが、当のカモは何やら「異様な気配」を察知していた。

「?どうしたのカモ君?」

「兄貴!!何か異様な『魔力』を感じねーか!?停電になった瞬間現れやがった!!」

「え?『魔物』でもいるっていうの?」

「分からねえがかなりの『大物』だ……まさか『エヴァンジェリン』の奴じゃ……」

カモの推測に、ネギはえっと声を上げる。ネギは、エヴァンジェリンは更正してもう襲ってこないと思っていたためだ。

「だから兄貴は甘いんだって!そんな簡単に奴が諦めるはずないだろッ!」

「で……でも……」

『チュミミイ〜ン……』

ふと、『タスク』の鳴き声が聞こえた。見ると、どこかを指している様子だ。タスクが指した方を見てみると

ひた……ひた……

「ま……まき絵さん……!? な……ななな……ダメですよ！  
『ハダカ』で外出しちゃあ……」

裸のまき絵がいた。それに対してネギは見当違いの注意をするが、そこに『異様性』を感じ取っていた。

「ネギ・スプリングフィールド……エヴァンジェリン・A・  
K・マクダウエルさまが、きさまにたたかいてもらう……1  
0ぷんご、だいいくじょうまで……」  
「?!?!?」

普段とは明らかに雰囲気の違い、あえて言うなら『操られたように』  
話すまき絵。これは

「な……これって……」  
「!分かったぜ兄貴! あいつエヴァンジェリンに『噛まれたこと』  
あるだろ!! 真祖に噛まれたら『操り人形』だべ!」  
「えっ……うそ!?!」

ネギが驚いている間に、まき絵はリボンを駆使してまるで某蜘蛛超人  
人よろしく建物から建物へ移動していった。

「な……す……スタンドが加わっているとはいえ……」  
「ありゃあ『半吸血鬼化』してるぜ……エヴァの魔力が封じられて  
るってのが仇になったんだ!」

自分の甘い判断が生徒を危険にあわせてしまった　　ネギの頭の中には、その考えから罪悪感が芽生えた…………

「　　だから言つたるおーネギ……………」

ふいに、背後から声が聞こえた。振り向くと、陰から仗助と徐倫が出てきた。

「魔力が弱いからってよおおおー、油断したらケガするってなあー！。」

「ひ、東方先生……………！」

「やれやれだわ……………ネギ、これから『作戦』を伝える！カモは明日菜のトコに行け！ここからは私らのスタンドで立ち向かうッ！！」

徐倫の号令の元、エヴァンジェリン戦の作戦が伝えられたら……………

同時刻  
桜通り

「なあ、私たちは本当に行かなくていいのか？」

「エヴァには『波紋』はあんま効果ないらしいし、私が行ってもあんま戦力にはなんないだろ。」

ベンチに腰掛けた千雨は、隣にふよふよ浮いたアギト話す。くじ引きでグループを決めた結果、千雨はルーテシアとアギトの二人と組むことになった。今は、トイレに行ったルーテシアを待っている所だった。

「しかし、きれーだなーこの『花』。ええーと……………『サクラ』

……………つつつたか？」

「ああ。ミッドには桜ないのか？」

「ああ。こんなきれーなの、始めてみたよ……………」

アギトが桜に見とれているその時だった。千雨は、ある『異変』に気づいた。ベンチから「手が離れない」！？

「ジャポネ日本の『花見』つてよオオオオー……………」

ふいに声がして、二人はそちらを向く。そこには、一人の男がいた。まるで山菜の一種ぜんまい薇のようにカールさせた金髪に、縁の厚いメガネをかけた男だ。服装は、水色のジャケットに、縦のストライプが入

った高そうなズボンをはいていた。

「『花』を『見』ながら料理とかを楽しむから『花見』っていうのはわかる。スゲーわかる……………」

男は、静かに話す。千雨たちが聞いているかどうかはおかまいなしだ。

「けど、秋にもみじを見に行くのを『紅葉狩り』って言うのはどーいうことだア……………？『見に行く』のに『狩り』って言うんだぜエ……………！」

いきなり、男が怒りに顔を歪ませた。

「キノコを取りに行くから『キノコ狩り』！ブドウを取りに行くから『ブドウ狩り』ッ！！なのに何で『紅葉狩り』は『見に行く』のに『狩り』って言うんだア…？何で『紅葉見』って言わないんだよオオオオ…ッこれって納得いくかア……………おい？オレはぜんぜん納得いかねえ……………」

男は一通りしゃべると、いきなり桜の木を殴り始めた！

「くそがああ…ッオレをナメてんのかア…ッ！！『紅葉見』でいいだろうがッ！！クソツクソツクソツッ！！」

男がキレている様子を、二人は見ていることしかできなかった……

「な……………なんだアイツ……………？」

「さあな……………多分だが、やつは敵スタンド使いだ！さっきから手や尻がベンチから離れないと思ってよく見たら、『凍り付いて』いや

がった……………」

見ると、確かに千雨の周りには『霜』がおりている!?

「アギト……………おめー確か炎扱えたよな……………悪いが、周り溶かしてくれないか?」

千雨はのんきそうに言うてはいるが、実際は心底、敵に対して『恐怖』していた……………」

公衆トイレ  
ある個室

「……………」

ルーテシアは、動けないでいた。すでに用はたしおえたのに、だ。何故なら

「……………おしりが離れない……………」

便座と尻が『凍り付いている』からだった……………

スタンド名    ホワイト・アルバム  
本体    ギアツチヨ

t o b e c o n t i n u e d . . .



## #35 / 闇夜の襲撃者!! (後書き)

35話です。

・サブタイトルは元ネタなしです。特にいいのなくて……

・冒頭でディオを打ち負かしたエヴァ。世界なしで気化冷凍法のみじゃあ、エヴァには勝てないだろうと思って。でも、世界があったらディオに軍配があがるでしょう。

・両右手サイドから、ギアツチヨの他の『スペースマン』は、次回登場予定です。ちなみに紅葉狩りのくだりは大学で耳にした会話から押していこうと思ってるコンビです。  
ら。

・千雨とアギト。なかなかない組み合わせですが、個人的にはこれから押していこうと思ってるコンビです。

・ルーテシアの災難再び(笑)用をたしおえたからよかつたけど、「最中」だったらどうなっていたか……考えただけでふるえが止まりません。

・今回はネギVSエヴァ、千雨&アギトVSギアツチヨ、そしてスペースマンの登場です。

では!

#36 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ? (前書き)

ついにエヴァンジェリンとの最終決戦！

だが、敵スタンド使いたちも攻めてきて、さらに激戦と化する麻帆良学園！！

#36 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ？

グリーンドルフィンストリート麻帆良  
入り口前

「ノーヴェ！」

「の、ノーヴェさーん！」

「ホンヤ！ティアナ！」

マンションの前に集まっていたナンバーズと合流したのどかとティアナ。エリオたちは、他の場所にいるらしいのでここにはいないが、もう少ししたら合流するらしい。

「エヴァンジェリンさんが動いたって聞きましたが……………」

「ああ、今ネギや徐倫、それに仗助さんが向かっているらしい。私らは念のために待機だ。」

「まあ、空条や東方みたいな実力者が一緒だし、心配は無用だとは思うが、念のためにな……………」

チンクがのどかに諭す。先日の『セッコとランボ』との戦闘で、二人の実力　スタンドという限られた力を上手く使う戦い方を見たチンクだからこそ、説得力があった。

「まあ、一応この辺りも見はった方がいいわね。のどか、あなたは『インゼントイ・スターター』の子亀で周りを見張って。ノーヴェやウェンディはいつでも出られるように　」



麻帆良学園都市内  
商店街

「寮の方で、何かあつたらしいな……………」

「そうだな………… 『スタンド使い』 たちがいるとはいえ、心配だし戻るか？」

停電の闇に染まった商店街を歩く四つの人影があつた。

一人はサイドポニーにした黒髪で小柄な少女 桜咲 刹那、もう一人は、中学生には見えない位スタイルが良く、色黒で、修羅場をいくつも潜り抜けたような鋭い目を持った龍宮 真名、そして、承太郎とフェイトだ。

「………… いや、スタンド使いがいるなら、私たちは不要だろう。」

「えらく冷静だな。そんなにやつらに信頼を置いてくれてんのか？」

冷静に答える刹那に対して、承太郎が言う。確かに麻帆良こゝにいるスタンド使いたちは『杜王区』の面々と比べても実力者揃いだ、相手は『柱の男』ともやり合った吸血鬼だ。心配しない方がおかしい。

「いえ………… ですが、ネギ先生やナカジマさんもいますし、そんなに心配は ン？」

ふと、刹那はこちらに誰か駆けてくるのが見えた。人数は多いが、

その中に知った顔があった。

「宮崎さんに……………ランスターさん？」

「あ……………承太郎さんに……………桜咲さんたち……………」

「どうしたの？そんなに慌てて？」

「！また『消えている』ッ！！」

「フェイトさんツスタンド使いです！周りに……………特に『頭上』に気をつけてください！」

ティアナがフェイトたちに向かい叫ぶ。4人には何のことだか分からないが、とにかく「ヤバイ」状況というのは分かった。その時だ

「……」

刹那は背後に『殺気』を感じて振り向く。が、なにも見あたらなかった。

「……………ふう、すみません、気のせいでした……………少し神経質になっ  
っていました……………」

「……いや刹那……………そんなことはないよ……………」

「……………やれやれだぜ……………こんなに『近づかれる』まで気づ  
かなかつたなんて……………」

「……………？」

だが、承太郎やフェイトが『戦慄』の表情をしているのに気づくと、

全員が「頭上を見ているのに」気づいた。自分も見上げてみると

「ッ!!!?!」

頭上に『鎧武者』がいた！それも、身の丈『14m』ほどの！

鎧には所々に『SWORD』や『BLADE』と書かれており、兜には左右にバツファローを思わせる角があり、額にあたる部分には大小の『V』を繋げたような角もある。顔には『般若』と『骸骨』を組み合わせたような面をかぶっており、闇夜と相俟って、その恐怖をかきたてた。

そんなものが、刹那たちを『跨いだ』形で、そこに立っていた。

「1」……………こんなのが何で……………私たちに気づかれずに……………!?!」

「この間の『ヴェルファイヤー』といい、最近のスタンドはあんな『デカイの』が流行ってるの?」

「あ、それは私も思った。」

フェイトとノーヴェがどうでもよさそうな会話をする中、鎧武者は

拳を振りかざし、パンチを浴びせる。

一同はギリギリでかわし、承太郎とフェイトは攻撃に入る！

「プラズマランサー！」

「スタープラチナッ！！」

フェイトの『プラズマランサー』とスタープラチナのオラオラが鎧武者に迫る！だが

「……！？」

二人の攻撃が当たる瞬間、鎧武者は忽然と『消えた』！

「まただ！また『消えたぞ』！」

「まさか………あんな『巨体』が『消えた』だと！？」

全員が鎧武者を探するとき、承太郎はフェイトの後ろに陰が見えた！  
それはあの鎧武者だ！

「！フェイトッ！！」

「！！」

ドグシャアッ



承太郎に叫ばれて、フェイトはようやく背後の鎧武者に気づいたがすでに遅く、鎧武者により地面にたたきつけられてしまう！

「フェイトさんッ!!」

「一瞬で……………やはりやつは『瞬間移動』の能力……………ッ!!」

チンクは、鎧武者が『瞬間移動』のスタンド能力だと気づく。

あの巨体で『瞬間移動』の能力だと、かなり厄介だ。

ただでさえこの間の『ヴェルファイヤー』にてこずったのに、それに『瞬間移動』が加わったら、どこからあんな攻撃がくるかわからないからだ。

「全員一カ所に固まって!やつの攻撃を絞るのよッ!!」

ティアナが全員に指示を出す、承太郎は冷静に鎧武者を見ていた。

「待てティアナ……………まだ『瞬間移動』と決めつけるのは早いぜ……………」

……………  
「えっ!?!」

承太郎の言うことが分からないティアナだったが、それ所ではなくなった。鎧武者が手を挙げたかと思うと、『太刀』がその手に収まっていた!

「!!!ヤバいッ!!!」

ドガアアッ

鎧武者が太刀を振り下ろす瞬間、ティアナたちはその場を去った。

「しゅツ…………『瞬間移動』って決めつけるなって……………!？」  
「やつの今の『瞬間移動』には、数秒『タイムロス』があった。瞬間移動なら、タイムロスは「ねえ」はずだぜ？」  
「た……………確かに……………」

承太郎の説明に、ティアナとのどかは納得する。

瞬間移動、あるいはワープ等は、一般的に「タイムロスなく一瞬で移動する」ことを言う。だが、鎧武者の瞬間移動にはタイムロスが存在した。

「こいつは「瞬間移動」かもしれないが、別の何かという可能性もある。『注意深く観察して行動しろ』……………だぜ。観察しろというのは……………見るんじゃあなく観ることだ……………聞くんじゃあなく聴くことだ……………でないと……………これから死ぬことになるぜ……………!」

承太郎の言葉に、二人は気を引き締める。

スタンド名 スペースマン  
本体名 夜叉丸

女子寮 大浴場

明かりがなく、暗闇の大浴場に、骨董魔道具アンティーク（スバルたち曰わく『原始的なアームドバイス』）をフル装備したネギと、それに付き添うように来た徐倫とスバルがいた。

「きましたよエヴァンジェリンさんッ！どこですか！？」

すると、大浴場の一角にある屋根のあるスペースに、明かりが灯つた。

「ッ！ッ！ッ！」

「ここだよ坊や。まさか先日と同じ布陣でくるとはな……………」

そこには、セクシーなボンテージに身を包んだ金髪の『美女』と、メイド服に身を包んだ茶々丸、まき絵、裕奈、亜子、アキラの5人、そしてブチャラティがいた。

「！？あなたは……………」

「ふ……………」

「ッ！ッ……………誰ッ！！？」

スッテーン

3人のボケに、金髪美女はすっころんだ。そして

ボンツ

「私だ私イイイイーッ」

「「「あーっ。」「」」

『幻術』を解き、元の幼い容姿に戻ったエヴァンジェリンに、三人は納得する。

「ったく、だから『幻術』なんて使わねーでそのままで行けっ言っただのに……………」

「うるさいッ！……………まあいい。『満月』の前で悪いが……………今夜ここで決着をつけて、坊やの『血』を存分に吸わせてもらうよ。」

余裕の笑みを浮かべるエヴァンジェリン。だが、ネギも負けられなかった。

「そうはさせませんよ……………僕が勝って、悪いコトするのはやめてもらいます！」

「ネギ、そこは『僕』たちが……………だろ？」

「そうそう。」

2人の訂正に、ネギは苦笑する。2人は自分の生徒だが、2人には適わなかった。

「それはどうかな？……………やれ。」

エヴァンジェリンがパチンツと指を鳴らすと、まき絵たちがネギたちの前に立ちはだかった。

「……………やはりそう来ましたか……………」

「まき絵を使いに来させたから、茶々丸とブチャラティ以外にもい

ることは想定していた……………」

「だから、私たちは『作戦』を練ってきた！」

「……………何？」

3人の言葉に、エヴァンジェリンは眉をピクリとひそめる。

「それは

「」

クルッ

「『逃げる』」

ダッターー

「……え？」  
ズコーーッ

いきなり「逃げ出した」3人に、茶々丸とブチャラティは呆気にとられ、エヴァンジェリンは再びすっころんだ。

「……ッてコラーッ！何思いつきり逃げてるんだ！お前らッ早く追えッ！」  
「……あ、はい。」

いち早く復活し、呆けていたまき絵たちに指示を飛ばすエヴァンジェリン。

「……ま、当然『追ってきますよね』。」  
「こいつらは任せませ……『楓』、おじさん……！」

ブワッ  
「……！？」

すると、まき絵たちの前に『布』が一枚降ってきた。そこから

「ドラララララララララアアア……ッ」  
ズババババッ







布のあつた場所には、大量の刀が突き刺さっていた……

長瀬 楓（14）

スタンド名 夢幻

桜通り

千雨（スタンド名 アニバーサリー・オブ・エンゼル）+アギト（  
コンデバイス  
融合機） VS ギアツチヨ（スタンド名 ホワイト・アルバム）

アギトに氷を溶かしてもらった千雨は、すぐにギアッチョと距離を置いた。ギアッチョのスタンド能力は詳しく分からないが、『氷結系』の能力には違いなかった。とにかく、ここは距離を置いてなるべく近づかないに限る。

「ほう……………オレと距離を置くか……………利口な奴だな。」

「ああ。お前の能力はヤバそうなんだな……………」

「へ……………分かってんじゃねーか……………よッ!!」

言うと、ギアッチョが猛スピードで千雨に迫る!

ビュオツ

「くっ『武竜』ッ!!」

ガギインツ

パンチを放つギアッチョに対して、千雨はカウンター気味に逆手の突きを放った。そして小太刀が拳と交わったときに気づいた。ギアッチョの体を『氷が覆っている』!?

「オレのスタンドは、超低温の世界を作り出す『ホワイト・アルバム』!すでに周りの水分を集めて凍らせた!後、一度だけ親切に教えてやるが、あまり長い時間ふれない方がいいぜえー?」

ビキキキ……………

「!?!ちいッ」

ギアッチョの言うとおり、小太刀の先端が凍り始めていた。慌てて離脱しようとする千雨だが、凍る速度が早い!その結果

ブツン

「!ああああわ…私の拳がッ!」

凍らされて、千雨の拳が切断され

ニューー

ピンピンピン

パッ

「あ……あ……『あるッ！』」  
ズコーーッ

てはいなかった。

一瞬速く手首をまるめたので助かったようだ。  
だが、切断されたと思ったアギトは、思いっきりずっこけた……

「ってオイッ！何こんな時に大ボケかましてんだよッ！！」

「いやあー、ギリギリだったぜ……『春蚕しゆたん』を手放したのは痛かったがな……」

「名前ついてたんだ、あの刀……」

見ると、ギアツチヨの手元に小太刀が一振りあった。

「まあ、おかげで対策は思いついた。要は『近づかなければいいだけ』だろ？」

「……………何？」

言っと、千雨は『エンゼル』を身に纏い、素早く離脱する。そして、近くに落ちていた空き缶を拾い

「秘剣！ 『降<sup>ふる</sup>彗<sup>すい</sup>宮<sup>くわう</sup>』 ツ！！」  
ゴカアッ

まるで野球のノックのように打ち出した！ 打ち出された空き缶は、  
猛スピードでギアツチヨに迫り、

ドグシャアッ

「げあッ！？」

氷を突き破り、ギアツチヨの鳩尾に命中した！

### 降<sup>ふる</sup>彗<sup>すい</sup>宮<sup>くわう</sup>

戦国時代、鉄砲が伝わる以前には、飛び道具といえは弓矢が主流の  
時代、弓矢を持たない侍は、遠くから矢を射ってくる敵に対する攻  
撃手段がなかった。

そこで考案されたのが、刀や槍で落ちている兜や鎧を打ち出す攻撃  
手段である。

双燕天翔流でもこの攻撃手段が考えられ、唯一成功したのがこの『  
降<sup>ふる</sup>彗<sup>すい</sup>宮<sup>くわう</sup>』であり、開祖である長谷川 赤<sup>あか</sup>犬<sup>いぬ</sup>齋<sup>さい</sup>は、五里先の敵大將を

射抜いたと伝えられている。

ちなみに、野球やゴルフで使われる和製英語「フルスイング」は、この技の威力にあやかっつつけられたと言われている。

民明書房刊『日本の飛び道具百選』

「今なんかどーでもいい情報流れなかつたか？」

「まあ、原作でも民明書房ネタはあつたから気にすんな。」

メタ的な会話をする2人だが、油断はならない。ギアツチヨは数メートル吹っ飛んだが、転がりながらも纏った水分を『スーツ』のような形にしていく！

それは『鎧』のような形で、ギアツチヨの全身を包み込み、足には『刃』が スケート靴のような刃がついていた！

それを使い、氷上を『滑るように』千雨に迫ってくる！

「チエツ！！まさか俺と同じ『身に纏う』スタンドだとはな……しかし負けねえ……テメエはここで死んでもらうぜ……」

「！あいつ……チサメと同じ……しかも速いぞ……」

「ああ……………だが！」

近づいてきたギアッチョが千雨にふれる前に、千雨はアギトをむんずと掴み、そのまま空へ上がる。

「あいにく、スピードなら私の『アニバーサリー・オブ・エンゼル』も自信があるんでな！」

「……………甘いぜ！」

千雨はギアッチョの余裕に疑問符を浮かべるが、ようやく気づいた。ギアッチョの近くには

「み……………『水飲み場』！」

「やっと気づいたか！『ホワイト・アルバム』ッ！！」  
ドバシャアアアア

ホワイト・アルバムの能力により、水飲み場の水道管が『破裂』した！

破裂した水飲み場から、水が『噴火』の如く吹き出し、それは上空の千雨までも『濡らす』！

「し……………しまっ！」

「チサメッ！！」

「『上空』なら安全とも思ったのかああー？そんなこと、オレが何の対策もなく襲うと思ったのかああー？」

いいながら、ギアツチヨは千雨から滴る水を凍らせて、ロープのよ  
うに千雨の元まで「登ってくる」！

「ヤバい！チサメ、早く振り払え！」

「ダメだ！つ、翼が凍って……………」

「遅いぜ！ホワイト・アルバムツ！」

ドグシャアアア

ギアツチヨの拳が、千雨にたたき込まれた……………！

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 「PRIVILEGE CADE」

スタンド名 牙<sup>タスク</sup>

本体 ネギ・スプリングフィールド

破壊力 B スピード C 射程距離 B

持続力 C 精密動作性 D 成長性 A

能力 両手両足の爪を回転させて物を切ったり、弾丸のように発射  
できる。発射した爪は再成して、いくらでもって補充できるようだ。

射程距離は10m程度。また、回転の摩擦により地面を削るように移動できたりもする。



## #36 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ? (後書き)

36話です。

・サブタイトルは『ファイア&アイス炎&氷!』から。

・『ヴェルファイヤー』に続く巨大スタンド『スペースマン』。デザインの元ネタはるるうに剣心の不二です。能力は『謎』重視で考えています。どんな能力かはまだ秘密。スタンド名はザ・キラースの楽曲から。

・承太郎の『観察』のくだりは、ティアナやのどかには必要な言葉と考えて入れました。特にティアナには、心に染みる言葉でしょう。

・VSエヴァンジェリン。戦力分散として楓を入れました。スタンド名は水樹 奈々さんの楽曲から。ちなみにギアッチョとかけたわけではありません(笑)

・降彗宮は、ぶっちゃけ男塾仕様な技(笑)フルスイングの当て字から思いつきました。

・次回、千雨の戦いの決着からです。

では！

#37/雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ? (前書き)

ネギとエヴァンジェリンとの最終決戦が始まる中、千雨とアギトは  
スタンド使い ギアツチヨに襲われていた！

#37 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ?

暗闇に包まれた麻帆良学園都市内を、蒼く光る『道』が張り巡らされ、そこを滑るように走る影　スバルだ。側には、並行するよ  
うに飛ぶネギと、杖の後ろに座る徐倫がいた。

「どうだスバル！エヴァンジェリンは追ってきているかッ!？」

「うんッ！少し高い高度で飛んできてる!！」

スバルは後ろを確認しながら叫ぶ。ブチャラティは見当たらないが、作戦通りエヴァンジェリンたちは追ってきている。

「後は『あの場所』に行けば……………」

「ああ、だが、少しばかり『ダメージを』与えた方がいいかもな。ネギ！『タスク』で狙えるか!？」

「少し難しいですが、やってみます!！」

そう言っつてネギは『タスク』を撃ち出そう振り向くが

「ぬう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ッ」

「「「おああああ!」「」」

巨大な「氷の塊」を投げようとするエヴァンジェリンがいた……………

「は……………発想のスケールで……………ま……………ま  
けた……………」

徐倫が呟くのと、

「『マレウス・アクイロニス  
氷神の戦槌』 ツー!!」

エヴァンジェリンが「氷の塊」を投げるのは、

ドグシャアアアアッ

ほぼ同時だった……………

#37 / サンダーフェイス 雷&氷! ?

(ぐっ……………ヤロー……………)

ギアツチヨの拳を喰らった千雨は、内心毒づいていた。『アニバーサリー・オブ・エンゼル』のおかげで『打撃』自体は何ともないが、腹部がすでに『凍結』を始めていた。

このままでは、すぐに身体ないぶも凍ってしまおう。そう千雨が考えていると、ギアツチヨは第二撃の体制に入った！

(仕方ねえッ！こうなったら )

千雨は、ある「決断」をする。それは

「『ホワイト・アルバム』！！」  
ドグシャアッ

ギアツチヨの一撃が千雨を襲うと、千雨は地面に向かい落ちていく！そして

ポツシヨオーー

「ち……………チサメエエエエツッ!!」

「ふんっ、砕け散ったか……………低温世界で動ける物質はなにもなくなる……………すべてを止められる!オレの『ホワイト・アルバム』が完璧なのはそこなのだ!」

着地したギアツチヨが、勝ち誇ったように言い放つ。だが、彼が千雨の落下地点を見たとき、その目は『疑問』を抱いた色となる。落下して砕け散ったなら、『死体』があるはずだ。だが、死体<sup>それ</sup>がどこにもない!?

パチパチパチパチ

「!?!?」

ふと、拍手が聞こえる。『上空<sup>ウツク</sup>』からだ。見上げたアギトとギアツチヨが見たのは

「ブラボー!おお……………ブラボー!!」

『アニバーサリー・オブ・エンゼル』を脱ぎ、「寝たままの姿勢で宙に浮く」千雨だった！

「し……しんじられん！何故オレのホワイト・アルバムを喰らったのに……怪我もよく見ると軽傷だッ！何でピンピンしてんだよこいつはッ！？それに……やつのがなぜ『宙に浮くんだ』！？」  
「ったく……お前には心底やられたって思うよ……私の隠してた『能力』ちからをここまで使わせたんだからな………！」

言うと、千雨は宙で前転しながら着地する。その際に、再び『エンゼル』を装着するが、その姿は『変貌していた』！

「これだ！甲冑をはずした『アニバーサリー・オブ・エンゼル』！」  
「……！」

千雨の『アニバーサリー・オブ・エンゼル』は、ほとんどの甲冑をはずしていた！

千雨の首から下を黒いぴっちりしたボディスーツが包み込み、その上を胸部と股間をまるでビキニのような防具を付け、背中の翼はパイプのような骨組みのみとなっている。残った甲冑といえば、籠手とブーツくらいだ。

「あつけにとられているようだな。まあ、種を明かすと、お前の能力で身体が凍る前に『防御甲冑』を脱ぎ去ったわけだ。砕け散ったように見えたのは、エンゼルの甲冑が『弾け飛んだ』だけ………だから私は軽傷ですんだんだ。」

「な……なるほど………」  
「くっ………だが、防御甲冑がない分、今度喰らったらオメーは死ぬってことだよなあー。」

ギアッチョは千雨が生きていたことに驚いたものの、小馬鹿にしたように言う。確かに防御甲冑のない今の『アニバーサリー・オブ・エンゼル』は、明らかに防御力が低下している。次に『超低温』を喰らってしまったら、確実に千雨の命はないだろう……

だが、千雨はふふん、と笑い、

「ああ、だが無理だな。」

と余裕を浮かべながら言い放った。そして

「何故なら、お前はもう、私に『追いつけない』！」

一瞬でギアッチョの『後ろに』回り込んだ。

「！くっ……………！」

ブンッ

ギアッチョはすぐに腕を振るい、振り向きざまにリアットを放つ！が、すでに千雨はギアッチョから数メートル離れた位置にいた。

「……………これは……………！？」

「確かに防御力は低下したが、甲冑を脱ぎ捨てた分身軽になった。見えたか？私の動きの『軌跡』が？それほどのスピードだ！その気になれば『スタープラチナ』よりも速く動く自信が、私にはあるッ（時止められたら終わりだけど……………）」

ギアッチョを見据えて、自信たっぷりと言い放つ千雨。すぐに近く



に落ちていた大きめの『石』を拾い、

「そして喰らえッ 『降彗宮』 ！！」  
ゴカアッ

再び『降彗宮』を放つ！

バツギイイーン

「！！」

「!?!」

だが、放たれた石はギアツチヨに当たる前に空中で『弾かれる』!?!

「なるほど………確かにお前のスピードはヤバいな………だがすでに説明したはずだッ！ 『超低温は全てを止める』！となッ！それは攻撃を止めるという事ではない！超低温の世界では動く物質は何もなくなるとい事だッ！動く『気体』は流れる『液体』となり、『液体』は全て止まって『固体』となるという事だッ！ちなみに『空気』はマイナス二一〇で『固体』となって凍り始めるッ！見えな

いか？『止まった空気』が見えないか？よく見るよ！」

ギアッチョが言う間、弾かれた石は空中で何度も跳ね返り

「！チサメツ！！」

バグオオーン

「ガフツ……なツなにイ！！」

千雨の右肩に食い込んだ！

「『ホワイト・アルバム・ジェントリー・ウィープス！（静かに泣く）』すでに空気の凍った壁を作っていたぜ！！『スタンドのパワー』はかなり使うが、もう何者だろうとこのギアッチョに『空き缶や石』なんぞ打ち込めないようになツ！」

かつて『拳銃使い』と戦った際に学んだ教訓が、こんな所で役に立つとは思ってもいなかった。だが、相手が飛び道具を使うなら、この技 『ジェントリー・ウィープス』は有効だ。これならば、『あの女』の元へ千雨の首を差し出せるだろう。

「そして喰らえッ！『ホワイト・アルバム』ッ！！」

そしてギアッチョは、千雨にトドメを刺すべく接近する！

「チサメエエエエー……ッ」

ボワアアアッ

「！？」

だが、それはアギトの放った『火球』により阻まれる！何とか踏み

とどまる事で回避するギアツチヨだが、火球は『フォークボール』のように変化し、地面へ衝突する。そしてその結果

ボシューウウウウ

「うおっ!？」

超低温まで『冷やされた』地面と『炎』により、『水蒸気』が辺りを包み込む!

「や……………ヤロー……………これを狙って……………」

「チサメツ!今の内に!」

「ああ、サンキューメルスイなアギト!」

どこからか声が聞こえるが、どこからかが分からない。ギアツチヨは、千雨たちを見失っていた……………

「大丈夫かチサメ？」

「ああ、傷はそんなに深くねえよ。しかし考えたな。『冷やされた地面』に『炎』を当てて『水蒸気』を発生させるなんて。」

ギアツチヨから数十メートル離れた草むらで、千雨とアギトは話していた。

千雨は先ほどのアギトの作戦に舌を巻いていたが

「い……いや………実は手元が狂っただけで………」

「偶然かよ………」

偶然と知り、あきれ顔となる。

「だが、思わぬ収穫だ。考えたら当然だよな、やつの『超低温』に『炎』は有効的だって事は………」

「ああ、私の炎なら、やつの氷を溶かせる！」

そう、アギトの炎ならば、ギアツチヨの超低温に十分対抗できる。だが、千雨はまだ不安そうだ。

「けど、それだけじゃあやつには勝てない………何かそれにプラスできれば………」

千雨が顎に手を当てて考えていると、アギトは自慢げに言う。

「ふっふーん。チサメ、私にいい考えがあるぜ。」

「何？」

「ここはこの『烈火の剣精』アギトさまに任せな！『アレ』をやればいいんだよ！」



ようやく水蒸気が晴れると、ギアツチヨは千雨を探し始めた。

「チエツ！あいつのそばにいた『チビ』……………炎が扱えたのか……………しかし、あいつ『スタンド』なのか？にしてはちよいと口が達者すぎるぜ……………『ミスタ』のスタンドよりも頭良さそうだったし……………」

ギアツチヨが疑問に感じたことを口に出していると、突如、頭上から『火球』が降り注いだ！

「ッ！！」

一瞬早く気づいたギアツチヨは、ギリギリでかわすと、すぐに飛んできた方向を見た。恐らくは、さっきの『チビ』だろう。千雨から離れて、火球を放った際に千雨が攻撃する手筈だったのだろうが、そうはいかない！そう考えたのだ。

だが、見上げてもなにもいない。もう別の場所に移動したのかと思いい、キョロキョロ見回していると



『まさにシンプルな名前だな…』

『SIMPLE PLUS』となった千雨は、ギアツチヨを見据えて言い放った。

さて、なぜ千雨は再びその姿を変えたのかを説明させてもらおう。

アギトは、『ユニゾンデバイス融合機』と呼ばれるデバイスである。ユニゾンデバイスとは、所有者と融合を果たすことによって驚異的な能力向上を果たす機能を有するデバイスである。そして、アギトには『炎熱変化』という、魔力を炎熱に変える特性がある。

つまり、アギトとユニゾンした今の千雨 『SIMPLE PLUS』は、『超スピードと火炎攻撃』を兼ね備えた状態なのだ！



『魔法とスタンドの相性が不安だったがよおー、何とか成功してやれやれってとこだなあおー。』  
「ああ、後は私の技とスピード、アギトの魔法と炎熱の『タツグ技』と行くぜッ!!」

言つと、千雨は石を拾う。そして

「秘剣!」 『降慧宮!』

「『プロミネンス・シュートッ!!』」  
ゴカアッ

降慧宮を放つ!しかも、今度の石は『燃えていた』!

「ちっ!」 『ジェントリー・ウィープスッ』!!」

ギアッチョもジェントリー・ウィープスを発動させるが

シュウウッ

「げっ!?!」  
ドグシヤアアッ  
「うがあっ」

『凍らせた空気』が炎で溶かされて、ギアツチヨはモロに食らう!

『よし!チサメ、トドメだ!』

「ああ!行くぜッ!!」

言つと、千雨は剣を構え、そのままギアツチヨに向かい走り出す!

「『奥義!時雨月華・不知火ッ!!』」

ズバババババババババババッ

「なッ!つぎゃあああああああ!」

ギアツチヨは為す術もなく、炎の力が加わった連続突きを喰らい吹き飛ばす!

「ぐっ.....あがぐ.....」

「ん？まだ息があるぞこいつ？」  
「手加減はした……………すぐには死なせない。お前には聞きたいことがあるからな。」

スタンドを解除して、倒れたギアッチョを見下ろしながら千雨は質問をする。

「なに、簡単な質問だ。『私の命を狙っているやつ』についてだ。」  
「……………ちつ、仕方ねえな……………元々あの『女』にはそんなに  
尽くす理由はないしな……………」

ギアッチョは、静かに話し始めた。

「あの女はよおー……………お前のオヤジ……………『ポルナレフ』  
に恨みがあるのさ……………」

「！父さんに……………！？」

「そうさ……………やつの名前は知らねえ……………名前を聞いたが、  
多分『偽名』だ……………だが、やつを知る『目印』がある……………」

ギアッチョの話を静かに聴く千雨とアギト。だが、千雨は次に聞いた言葉に、耳を疑う。

「やつは……………『左手が……………右手』なんだよ……………」

「！？」

「左手が……………右手？」

アギトには意味が分からなかったが、千雨にはそれだけで驚く理由としては十分だった……

「左手が右手……まさか、あの一族がッ!？」

「へっ……知ってるならいい……まあ、オレみてえなスタンド使いたちは……まだまだやつのもとにいる……これから先は……もつとしんどく……なるだろう……な……」

最後の言葉を言い終わると、ギアッチョは息を引き取る。

アギトは黙ったままの千雨を見つめることしかできず、周りには静寂だけが残った……

|             |                  |              |
|-------------|------------------|--------------|
| ギアッチョ       | スタンド名: ホワイト・アルバム | 再起不能         |
| ルーテシア・アルピーノ | 再起可能。            | だが、尻に凍傷を負った。 |

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #37/雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ? (後書き)

37話です。

・冒頭の発想のスケールで負ける徐倫はワムウ戦から。意外と好きなシーンなので。

・千雨キャストオフ&クロックアップ！(笑)こう言うとカブトっぽいですが、実際はポルナレフのシルバー・チャリオッツの能力を受け継いだけです。千雨は翼による飛行能力が附加されているから、チャリオッツより速いですが。

見た目は、ナンバーズの戦闘服に骨組みのみの翼とビキニアーマー、籠手とブーツを追加した感じ。

・アギトの『合体』宣言。最初はアクエ オンネタの予定でしたが、この間夜中にテレビで『紅蓮編』の映画やってたのを見て感化されちゃいました(笑)

・千雨、アギトとハイパーキャストオフ……………もといユニゾンイン！マジでカブトっぽいな(笑)

見た目は少し鋭利的な鎧となりましたが、千雨自身はポルナレフをベースに変化しています。

名前はALII PROJECTのアルバム『COLLECTION SIMPLE PLUS』から。ちなみに『Anniversary of Anger』もこれに収録されています。

・今回はエヴァ&スペースマンとの決着です！いよいよエヴァ編もクライマックス！！『PHANTOM MINDS』ガンガン聴きながら頑張ります！

では！

#38 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ? (前書き)

エヴァンジェリンとスペースマン……………

二つの戦いに、決着の時を訪れる……………！

エヴァンジェリン編、ついに完結ッ！！

#38 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！？

1986年  
イギリス  
英国 ロンドン

暗い真夜中のロンドンを歩く小さな陰がふたつあった。一人は10歳ほどの少女で、もう一人　いや、『もう一つ』は、彼女の腰位の大きさのある『人形』だ。

「……………ふん、J〇J〇のやつめ……………『仕事が忙しいからジヨナサンの墓参りを代わりにしといてくれ』だと？ふざけおつて！」  
「ソーヤツテ『ブータレ』ナガラモ来テル御主人モ御主人ダガナ。」  
「うるさいッ！！」

ケケケケと笑う人形　　チャチャゼロを怒鳴りつけるエヴァンジエリン。

あのヘラズ口をたたくトツポイ男に会ってからウチの御主人は変わったと、チャチャゼロは思っていた。以前の御主人なら、こんな頼みごとなど受けなかつただろうに。  
あんなノーテンキ男のどこが良いのだろう……………？  
チャチャゼロには、それが分からなかつた。

「　　フム、ロンドンか……………懐かしいな……………」

「「！？」」



不意に、背後から声がした。男の声だ。  
振り向いたエヴァンジェリンは、その男に、生涯で一番であろう『  
恐怖』を抱いた。

心の中心に忍び込んでくるような凍り付く眼差し、黄金色の頭髮、  
透き通るような白い肌、男とは思えないような怪しい色気  
以前、100年ほど前に出会った『石仮面』の吸血鬼！J.O.J.Oか  
ら聞いた、大西洋から蘇った吸血鬼！J.O.J.Oの祖父、ジョナサン・  
ジョースターの肉体を乗っ取った吸血鬼！こいつは

「貴様……………」『D.I.O』ッ！！」

「こんばんは、ダーク・エヴァンジェル闇の福音……………100年ぶりかな？」

男　　ディオ・ブランドーは、静かに言う……………

「……………J.O.J.Oからお前が復活したことは聞いていたが、何だ？  
100年前のリベンジにでも来たか？」

「いや、ただ私が新たに手に入れた力　　スタンド『幽波紋』と名付けた  
力を試したくてな……………部下にやらせてもいいが、実戦で試した  
くてこの辺りを回っていたら、ちょうど良さそうな相手がいてね…  
……………」

D.I.Oはどこか色っぽい、だが、それでいて冷たい声で言う。それ  
がエヴァンジェリンには気にくわなかった。

「ふん、言うではないか……………（幽波紋……………確かJOOJOが言ったな……………）」

言つと、魔法の射手の発射態勢に入るエヴァンジェリン。そして、発射しようとして……………

ボゴオツ

「「!?!?」」

腹に『風穴』が空き、そのまま後方に吹っ飛ぶ！

ドゴシヤアアツ

「御主人ツ!!?!?」

「がつ……………い……………今のは……………?」

「ふむ、いくら『ハイ・テライト・ウォーカー吸血鬼の真祖』といえど、我がスタンド……………  
ザ・ワールド世界』は見えないようだな……………」

言いながら、壁に衝突したエヴァンジェリンに近づくDIO。

「どれ、『魔法』で変化した吸血鬼がどれほど『不死身』なのか試

してやるっ……………」

そう言うと、DIOは手を掲げる。  
エヴァンジェリンには見えないが、彼のスタンド 『ザ・ワールド』も、手を掲げており、手刀を喰らわせようとしていた。  
そして、その手が振り下ろされた時

ドグシャアッ

「……？」

「ヌウウ……………これは……………」

DIOが『打撃らしき攻撃』を喰らい、弾かれた！

「ったく、『吸血鬼退治』の依頼を受けてはるばるロンドンまで来たら……………」

不意に声がした。そちらを向くと、2人の男女がいた。  
女の方はフードと、目元を覆う陶磁器のような仮面を着けていて、顔は確認できない。

男は赤い髪を短く切り、ローブの下は動きやすそうな服装で、その手には長い杖を持っていた。

「ロリコン趣味な吸血鬼が幼女襲ってる場面に出くわすなんてなあー。」

「いや、腹に空いた穴が治り始めておる……あやつも吸血鬼じゃろっ……」

「……貴様、何者だ？」

DIOの質問に、男はニヤリと笑い、答えた。

「『ナギ・スプリングフィールド』……人はオレを『千の呪文の男』と呼ぶ！」

これが、闇の福音と千の呪文の男の出会いだった……………

ダーク・エヴァンジェリオン・マスター

#38 / サンダーフェイス 雷&氷！ ？

「クッソー、エヴァのやつ、ド派手な技使いやがって……………」

『氷神の戦槌』をかわしたものの、ネギと離れてしまった徐倫は、毒つきながらもスバルたちを探すべく周りを見回していた。

「う〜ん……………あれ？」

ふと、背後の建物から声がした。スバルだ。振り向いた徐倫が見たのは……………

「わっ、わっ、何これエエエエエッ!？」

「スバルウウウウー……ッ!?」

建物の壁からスバルの下半身が『生えて』、足をジタバタ動かしている光景だった……………

「 『ステイツキイ・フィンガーズ』……………壁にジッパーをひつつけて、そこにその娘こを入れてジッパーを閉じた……………これで一対一だ。 」

その時、スバルの下半身の近くから、ブチャラティが姿を表した。すぐ側でスバルが足をバタバタ動かしているため、当たらないよう気を付けながら徐倫に近づいてくる。

「ブチャラティ……………!」

「ちょうど良い……………この間は『セツコ』のやつに邪魔されたかな……………決着をつけよう!」

言いながら、ブチャラティは徐倫との間合いを詰める。

( 徐倫こいつには『ステイツキイ・フィンガーズ』のジッパーは通用しない…………… )

間合いを詰めながら、ブチャラティは考える。

( それはブチャラティあいつも承知のハズ…………… )

同じく、ブチャラティとの間合いをはかりながら、徐倫も考える。



「イノセント・スターターッ!!」  
「レイストーーーーーームッ!!」  
シュバババアアアーーーー

のどかとオットーの攻撃が夜叉丸に迫るが、夜叉丸は消える事で回避する。そして、探している内に、気づいたら背後にいるのだ!

「ぴゃーーーー」  
「回避ッ!!」  
ドガアッ

ティアナの号令で、夜叉丸の太刀から回避する。

攻撃して、姿を消され、背後をとられて回避  
先ほどからこ  
れの繰り返しだ。

そんな時、刹那が一気に夜叉丸との距離を縮め、野太刀 夕凧  
を振るう!

「神鳴流、斬鉄せ  
ガシイッ  
刹那ッ!!」



だが、刹那が技を放つ前に、夜叉丸は刹那を捕まえた！真名がすかさず拳銃（本人曰わくモデルガン）を放つが、夜叉丸は『刹那を残して』再び消えた。

「……………！？」

それを見て、のどかとティアナは疑問を抱く。

（あいつ……………何で刹那を『手放した』の……………？）

（瞬間移動なら、手放す必要はないはずなのに……………）

「……………なあ、あいつ観察してて気づいたんだけどさ……………」

ふと、ノーヴェがのどかたちに話しかける。その顔は、焦ったような、不思議そうな表情だ。

「何で今まで気づかなかったんだっていうような素朴な疑問なんだけどさ……………今話すべきなのか分からないけど……………」  
「……………？何？何に気づいたの？」

ティアナの問いに、ノーヴェは答える。

「あいつ、何であんなにデカいんだ？」

ノーヴェの疑問に、2人ははっとしたようになる。

「そうか……………それなら『タイムラグ』の説明もつく……………」

「…！」

「それに手放したのも……………分かった！能力の正体が！」

「えっ、ほ、本当かッ!？」

「ええ、やつの能力は……………」

桜通り

「千雨ちゃん！」

「千雨さん！」

「お、アスナたちッ！！！」

寮の方から走ってくる明日菜と、別方向からギンガのウイングロードに乗ってきたエリオとキャロ、そしてギンガに向かい手を振るアギト。一方の千雨は、先ほどの『ギアツチヨ』の言葉にシヨックを受けたのか、うつむいていたが、平気なフリをして明日菜たちの方を向く。

「大丈夫ですか！？ルーちゃんから念話を受けて来たんですけど……」

「ああ、もう倒したよ。『ホワイト・アルバム』という『超低温』のスタンド使いだった……強敵だったぜ（当然私ほどじゃないがねという確固たる自身の気持ちはあるがね）。」

「そう……あの死体は、学園の人をお願いして、私たちはネギ君の方へ」

ギンガがそう言いかけたときだ……

「すまないが、ここから先は一人しか通れぬぞ。」  
「……………ッ!?」

不意に声がした。振り向くと、ローブを着て、目元を陶磁器のような仮面で隠した女性がいた。その手には、黄金色に輝く剣が握られていた。

「あ……………『新手』ッ!?」

「こんな時にか……………!」

「だが、一人通った後、主等が私に手を出さなければ、私も手を出さないと約束しよう……………」

女の言葉に、千雨は眉をひそめる。手を出さなければ手を出さないなど、なぜ言うのだろうか……………?

「ずいぶん余裕じゃねーか、え?」

(どうします?このまま一斉に……………)

エリオがそう進言するが、

ポンッ

「え?」

「エリオ、後は頼む。」

なぜかにこやかな千雨と明日菜にそう言われて、呆気にとられた。

「え?ち、チサメさんたちは……………」

「え?私たち?」

「それはもちろん……………」



「……………それは『感心』しているんですか？それとも『呆れて』いるんですか？」

明日菜たちが飛んでいった方を見ながら言う女に、エリオは聞く。すでにこちらは戦闘態勢だ。

「どちらかと言えば『呆れ』の方が強いかのう……………しかし、興ざめじゃな……………しかたない。」

すると女は、剣を放り投げて、腕を組んだ。

「主等に『7秒』やろう……………それまで私は、主等の攻撃を避け続ける。主等の攻撃が当たったら、主等の勝ちじゃ。どうじゃ？」

女の申し出に、エリオたちは戸惑ったが、動いたのはギンガだった。

「……………7秒でいいんですね？」

「ギンガさんッ！？」

「うむ、来るのはお主か……………？」

構えているギンガを見て女は聞くと、耳元に手をやり、着けていたと思われる滴型の大きなイヤリングを手に持った。

「『合図』じゃ……………落ちてから『7秒』以内に攻撃を試してみよ……………」

言つと、そのイヤリングを放り投げた。そして、

コツーーーン……………

それが落ちたと同時に、ギンガは駆け出した！

「はあぁッ！！」

ブンッ

「……………」

ギンガの左ストレートを女は軽く避ける。続けざまにギンガは攻撃するが、それを女はひらり、ひらりと避けていく。その動きを見て、ギンガは疑問を抱く。

(……………何？この女の動きは……………？まるで『攻撃が来るのを知っているかのような』動きよ……………？)

一瞬、ギンガは彼女のスタンドが『読心』の能力かと思ったが、承太郎がそのスタンド使い 徐倫が倒した『ダービー』の叔父は倒したと言っていたので、違うと考えた。  
ならば、この動きは……………？

「……………3秒前。」

避けながら、女は静かに言う……………

「2……………1……………0。」

そして、0になったとき……………

「……………タイム・オーバー。」

ズガガガガガガガガガガ

「!？」

「ギンガさんツ!？」

ギンガに『連打によるダメージ』が打ち込まれた!女は何もしていないのに、だ!

「……………私のスタンドの名は『ファントム・マインド』……………ほんの『7秒』未来めいに存在するスタンド……………つまり、スタンドが7秒後で攻撃したら、きっかり7秒後にそやつはダメージを受ける……………」

女は、吹き飛んだギンガに向かい言い放つ。

「み……………『未来』に存在するスタンド……………だから私の攻撃を回避できたのかツ!？」

「そうじゃ。まあ、今回は片目で未来を見ていたがら避けられたが、本来は未来を見ている間は行動出来ないからな……………7秒以内に



私を倒すのが、攻撃回避する唯一の方法じゃ。おかげで避けるのがギリギリじゃったわ……………」

言っと、女はギンガたちに背を向ける。そして、右手を挙げる動作をする。

「では、私はこれで。じゃが、これだけは言っておこう。やつらの裏には、さらにデカいやつがある……………気を付ける！」  
「えっ、ちょ、ちょっと!?!」

エリオは女を止めようとするが、女は音もなく消えていった……………

女の正体

謎

スタンド名    ファントム・マインド

7秒後の未来に存在するスタンド。ゆえに未来の予測可能。ただし、未来を見ている間は行動不能（片目で見れるが、行動は限られる）。

麻帆良学園都市  
湖 つり橋

クリュスタリザルネオリス  
「こおる大地ッ！！」

ガキキイイイイン

「わーっ」

エヴァンジェリンの放った魔法にネギは吹き飛ばされ、地面に投げ出されてしまう。

「ふ…なるほどな。この『橋』は学園都市の『端』だ。（ダジャレじゃないぞ？）私は『呪い』によって学園の外にでられん。ピンチになれば学園外に逃げればいい、か………意外にセコい作戦じゃないか。え？先生………」

橋に降り立ち、ネギに近づくエヴァンジェリンと茶々丸。ネギは倒れ込んだままだ。

「………次のあなたのセリフは『これで決着だ！』という………  
………  
………  
「悪いが、これで決着だ！………はっ！」

ネギがエヴァンジェリンのセリフを言い当てたと同時に

パシィィィィィン

「ッ！！」

エヴァンジェリンたちの足元に魔法陣が浮かび、そこから無数の『風の縄』が伸びてエヴァンジェリンたちを掴む！

「なっ……………！！こ……………これは……………『捕縛結界』ッ！？」

「……………や、やったーっ……………やっチツたアアアア……………ッ！引つかかりましたねエヴァンジェリンさん！もう動けませんよ！これで決着けりです！」

勝ち誇り、エヴァンジェリンに言うネギ。徐倫たちとの作戦通り、エヴァンジェリンをこの結界まで誘き出して捕まえた今、エヴァンジェリンには為す術はない

「……………なかなかやるではないか坊や……………私を欺けたのはJ0 J0以来だぞ……………ふふふ……………アハハハハハハッ」

はずだった。

「茶々丸。」

「はい、マスター。結界解除プログラム始動。…すみません、ネギ先生……………」

チユィィィィン……………

「……………え！？」

突如茶々丸から鳴り出した音に、ネギは驚く。





ンやな。」

ネギの言葉に、エヴァンジェリンは面白いと、戦闘態勢に入る。

「やつの能力が分かったって!？」

ウエンディに肩を借りてやってきたフェイトは、チンクからの報告を聞いてオウム返しに言う。目の前のチンクや刹那たちでさえ、困惑した様子だったが。

「ああ……と言っても、見つけたのはティアナとノド力だが………  
…」

チンクが振り向いた先では、のどかが前髪に映し出したリーダーを睨みつけ、ティアナとノーヴェが夜叉丸に攻撃を仕掛けているが、すぐに姿を消されてしまっていた。

「 やっぱり思った通り……………あれは『瞬間移動』じゃない……………」  
「……………?どついついことですか?」

刹那が不思議そうに聞くと、のどかが振り向いた時、夜叉丸の太刀が振り下ろされた!

「ホンヤツ!!」

ドガアツ

「ひゃわツ!?!」

なんとかギリギリでノーヴェが助けたが、今度は拳が振り下ろされる。

「クロスファイヤー! シュウウウーートツ!!」

ゴパアアツ

そこへティアナのクロスファイヤーが放たれるも、夜叉丸は再び消える。

「……………さつき消える前にこっそり『子亀』をひつつけておいた……………」  
『子亀』の位置は私が全て把握できる……………だけど、『瞬間移動』の能力なら! 何で! 『子亀』が『移動しているのか!?!』」  
「……………?」

ノーヴェに抱えられながらのどかは話す。それを聞いていた一同は、何となくだが、のどかの言いたいことが分かった。

「ランスターさん! 五時の方向! 約1.5メートルツ!!」

「了解!」

ゴパアアッ

のどかの指示通りに、ティアナは魔法弾を放つ！  
向かった先は、1.5メートル先の「地面」！  
そして、弾が着弾したとき

ドガアッ

「うわッ!？」

ドシイン

「「「「「「「「

.....え!？」「「「「「

尻餅をついた夜叉丸が現れた。だが、大きさがおかしい。明らかに  
『チンク位』しかない.....？

「あなたは、『瞬間移動』したんじゃない.....」「大きくなっ  
た」状態から、一瞬で「小さくなって」、私たちの足元を通っただ  
け.....」



「……………！まさか、こいつの能力はッ!?」

刹那は、ようやく夜叉丸の能力を察した。つまり、夜叉丸の能力は、

「そう、あなたは『大きくなったり小さくなったりする能力』……

……！だから瞬間移動にタイムラグがあつて、桜咲さんを手放した……

……………桜咲さんに能力がばれないために……………!」

「あ……………ああ……………」

のどかに追いつめられた夜叉丸は、完全に怯えていた。

「……………なるほど、あれだけデカいものが消えたら、当然『自分

より高いところ』を見渡す……………その隙に足元を移動したのか!

そして太刀がいきなり現れたのは、『小さくした太刀』を大きくし

たからか!」

「それで刹那を……………しかし、こんなくだらないことだったとはな……………」

チンクと真名が感心していると、承太郎が口を開いた。

「『くだる』『くだらねー』は、所詮本体の頭の使い方次第……………

それがスタンド使いの『強さ』だ。実際、オレのジジイは髪の毛一本動かす力さえない最弱のスタンド『恋人』<sup>ラブリース</sup>に殺されかけたしな……

……………」

「マジツスカ!?!」

「マジだ。体内に進入されて、内側からジワジワとな……………さて、後はこいつをブチのめすだけだな!」

「ひいっ!」

承太郎はスタープラチナを出して、夜叉丸に迫る。

その時、紐が緩んでいたのか、夜叉丸の兜と面が外れ、夜叉丸の素顔が暴かれる。  
面の下は

「うっうっ……………」

「ごめんなさい……………」

「な……………」

「……………」

まだ小さい、下手したらネギよりも年下の「女の子」だった……………」

「い……………」いきなり『矢』に刺されて……………」  
「……………」それで襲うように脅されて……………」

「……………」殴るんスカ？」

「……………」ちよいとムリだな……………」

完全に怯えてポロポロと涙を流す女の子を前に、すっかり毒気を抜かれた承太郎。そこへ、ティアナが女の子に近づき、ひざをついて女の子の頭を撫でる。

「……………」もう、悪さしちゃダメよ？」

「……………」う……………」ウワ……………」ごめんなさい……………」

「……………」い……………」

「……………」あ……………」

「……………」ち……………」

ティアナに抱きついて泣き出した女の子を見て、承太郎はそう呟い

た。

夜叉丸Ⅱ本名：夜叉丸 雪子（麻帆良第7小学校4年生） スタ  
ンド名：スペーススマン 悪さをしないことを条件に再起可能。

つり橋

ネギ&明日菜VS・エヴァンジェリン&茶々丸（千雨とカモは傍観）

「行くぞ……………私が『生徒』だとうことは忘れ、本気で来るがい  
い、ネギ・スプリングフィールド！」  
「……………はい！」

ティアナたちが夜叉丸を蹴散らした一方、こちらでも決着が着こうとしていた……

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

2人が呪文を詠唱しているなか、明日菜に茶々丸が接近戦を持ちかける。

「てええいッ！！」

ブンッ

「！！」

明日菜がハリセン 『ハマノツルギ』を振るうが、茶々丸は難なくかわす。が、

「てやッ！！」

ゴシヤアッ

「う……………」

すかさず回し蹴りを放つ明日菜！そして

「魔法の射手氷の17矢！！」  
サギタ・マギカ セリエス・グラキアーリス

ドッ

「うつつ……………魔法の射手雷の17矢！！」  
サギタ・マギカ セリエス・フルグラリス

ドガアッ

2人の魔法の射手がぶつかり合う！だが、弾幕合戦は終わらない！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、  
ウンテテリーギンタオズズウクトゥス 闇の精霊29柱！」

「（えっ、に……29人！？）ら、ラス・テル・マ・スキル・マギ  
ステル……」

いきなりの弾数に驚くも、ネギも詠唱をする！

「魔法の射手連弾・闇の29矢！！」  
サギタ・マギカ セリエス・オブスクーリー  
「魔法の射手連弾・光の29矢！！」  
サギタ・マギカ セリエス・ルーキス

ドドドパアアッ

「うくっ……」

「ネギッ！」

「マスター……」

お互いの魔法弾の打ち合いは、今のところ互角 いや、ネギが  
ぎりぎり追いついているといった所だ。

ラチが明かないと感じたネギは、一気に決めることにした！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、  
来れ雷精風の精！！」  
ウエニアント・スピアサマダレス・フルグリエンテース  
「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック、  
来れ氷精闇の精！！」  
ウエニアント・スピアサマダレス・オブスクーランテース  
「えっ……！？」  
「フフッ」

エヴァンジェリンも次に賭けたのか、呪文を、しかも、ネギと同種  
の魔法を打ち合う気だ！

「雷を纏いて吹けよ南洋の風！！」  
クム・オブスクラテチネイスターヌビツチアリス  
「闇を従え吹けよ常夜の氷雪！来るがいい坊や！『闇のふぶ』」  
ニウイス・テンベスタース・オブス

ガンッ

「!?!?」

エヴァンジェリンが呪文を詠唱し終えようとしたその時、右わき腹に『弾丸のようなもの』が突き刺さる!これは

「まさか 坊やの『爪弾』ッ?!?いつの間に……………は

っ!『魔法の射手』を撃ち合っている最中にかッ!!」

「へへへっ、またまたやらせていただきましたアーン!

そう、ネギはエヴァンジェリンと『魔法の射手』を撃ち合っている最中に、『タスク』の爪弾を撃ち出して、迂回させてエヴァンジェ

リンに当てたのだ！

大技を打ち合おうと持ちかけるように詠唱したのも、注意を自分に向けて爪弾が気づかれぬようにするため！！

そして、当たったこの一瞬をネギは待っていた！

『いいかネギ、戦いはな、』騙したやつ』が勝つんだ……………』

ネギは、徐倫の言葉を思い出していた。

『中国の兵法書「孫子」には、「戦いとは欺くこと」という意味の言葉がある！つまり、相手を怒らせて心を動揺させれば隙が生じる！そこを突くんだ！』

そう、今のエヴァンジェリンには『隙』がある！今ならば！

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス  
「雷の暴風！！！！！」

ズバアアアアアアツ

「な……………ツ！？」

ドグオオオン

「マスター……………ツ」

ネギの最大魔法『雷の暴風』が、爪弾を喰らい隙ができたエヴァン

ジェリンに炸裂した！

「や……………やるではないか小僧……………二度も私を欺くとはな……………」

『雷の暴風』を直に喰らいボロボロのエヴァンジェリンは、皮肉を込めてネギに賞賛の言葉を送る。すでに電力の回復で結界も復活したため、エヴァンジェリンは力を発揮できないでいた。

「少しズルかったけど、これで僕の勝ちですよ！もうこれで悪いコトもやめて、授業にもしっかり出てもらいますからね！」キュッキュッ

「……………わかったよ……………確かに今回は負けだな……………ちょっと待て、何だ今の擬音は？」

見ると、ネギが『クラス名簿』に何か書いているところだった。のぞいてみると、エヴァンジェリンのところに『僕が勝った』だの色々書かれていた。



「って何書いてるんだ！やめんか！」

「えー、だつて……」

「大体何だあの戦法は！？まじめな坊やらしくないぞ！？」

「あ、それは空条さんの曾お祖父さん仕込みでして……」

「何イツ！？JOOJOOのツ！？道理で汚い手だと思ったらツ！！」

「……なあ、エヴァンジェリンっていつもこうなのか？」

「いえ、こんなに楽しそうなマスターは、ネギ先生が来てからで……」

「……」

「そうなんだー」

先ほどまでのピリピリした空気はどこえやら、エヴァンジェリンがギヤーギヤー喚く声が、夜の湖に木霊した……

「……ほう、あの『闇の福音』を打ち負かしたか……」  
「ね？来てよかったでしょう？」

橋の支柱から一部始終を見ていた仮面の女に、ルル・ベルは話しかける。

「しかし、まさかあの『老いぼれ』の曾孫から戦法を学ぶとはな……まったく、あやつあやつの戦い方は、あやつあやつの一族のみに留めてほしいのう……」

「確かに、まじめな彼には不釣り合いかもしれませんが……」  
クス

「ふん………大きくなったな、ネギ。」

「く、空条さ………ん！何がどうしたの………！？返事してよ………ッ！」

壁に埋まったままのスバルは、徐倫とブチャラティの音が聞こえなくなつたため、不安そうに徐倫を呼ぶ。だが、徐倫は答えない。  
なぜなら………

「……………」  
「……………」

どれほど壮絶な戦いだったのか……………？それは戦っていた本人たちにしか分からないことだが

徐倫とブチャラティは、見事なクロスカウンターが決まった状態で、『立ったまま』気絶していた……………

空条 徐倫およびブローノ・ブチャラティ この後ネギたちに発見され、無事に治療される。  
スバル・ナカジマ 同じく、無事に救助された。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「 P R I V I L A G E C A D E 」

> i 7 8 3 4 — 4 0 6 <

スタンド名 スペースマン

本体 夜叉丸 雪子

破壊力 E スピード B 射程距離 なし

持続力 A 精密動作性 B 成長性 C

能力 自分を含め、ものの大きさを自在に『拡大』、『縮小』できる。倍率は最大1.3倍、最小で3/5分の1で、それより大きくも小さくもできない。

なお、武者鎧はスタンドではなく、ただのコスプレである（太刀はレプリカ）。

#38 / 雷&氷(サンダー・アンド・アイス)！ ? (後書き)

38話です。今までで一番気合い入れたら、今までで一番長くなりました( ^ | ^ ; )

・100年前にDIOを打ち負かしたことが、エヴァとナギの出会いに繋がる……この後は、ナギと仮面の女がDIOを退けて、その後、原作通りにエヴァの封印になります。

・壁から生えるスバルの下半身はお気に入り(笑) ジタバタしてるあたりとか(笑)

・仮面の女の正体は……もちろんあの人は( ^ | ^ ; ) なぜ出てきたかは、今後のお楽しみということでしょうかm | | m  
スタンド名は水樹 奈々さんの楽曲から。映画公開前日記念!……だからではありません(笑)

・スペースマンは拡大縮小の能力。かつてホルマジオは、『くだる』『くだらねー』は頭の使いようと言いました。ちなみにスペースマンは『ラブ・デラックス』や『アクトン・ベイビー』のように本体と一体化したスタンドですので、スタンドの象はありません。

・エヴァ戦決着!意表を突いた勝ち方ですが、ジョセフを意識したら、こうなりました。

・クロスカウンターのまま気絶する2人……マジでどんな戦いだっただんでしょね( ^ | ^ ; )

・今回は『京都・修学旅行編』前の幕間です。

では！

#EX/幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第2回放送(前書き)

これまでの『ストライカーズ・オーシャン』は！(CV:立木文彦)

「みんなには、この『矢』を探して欲しいんよ。」

「空条 徐倫よ。よろしく、スバル。」

「俺たちはこれを『立ち向かうもの』と、そう呼んでいる！」

「これは……………ぼ！僕の爪がッ！」

「これからは『牙』と、そう呼ぶといい！」

「この世には、良い魔法使いと悪い魔法使いがいるのだよ……………坊や。」

「おいてめえッ！……………オレの髪型が何だとコラアッ！」

「デイベイイイイイン！バスタアアアアアッ！」

「またまたやらせていただきましたアーン！」

「……………やれやれだわ。」



#EX/幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第2回放送

三人(以下:三)「幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第2回放送―― Y E A A A A H !」

ドンドンパフパフ――

徐倫(以下:徐)「えー皆様、もう1月も終わりますが、明けましておめでとございます。パーソナリティの空条 徐倫です。」

千雨(以下:千)「長谷川 千雨です。」

ティアナ(以下:テ)「ティアナ・ランスターです。」

徐「さて、『前回とメンバーちゃうんけ!』という人に説明すると、実はこのコーナーのメンバーは毎回各テーマに合ったメンバーでお送りするシステムとなっています。」

千「前は『メインヒロイン三人』だったが、今回のこの面子はどんなテーマなんだ?」

徐「今回は『良識人三人』だ。」

テ「徐倫はボケもこなせるけどね……………」

千「まあ、その辺りは言わない方向で……………」

徐「それじゃあ、始めるとしますか!」

二人(以下:二)「おー!」

幕間ラジオ

『ジヨジヨのリリカルな放課後』

第2回放送

(オープニングBGM：音石 明のライトハンド奏法)

【第2章を振り返ろう】

テ「やっぱりライトハンド奏法で始まるのね……………」

千「映画公開したし、水樹 奈々使いたかつたらしいがな……………」

徐「さて、第2章は原作のエヴァ編に相当したわけだが、物語にも進展があつたな。」

テ「ええ、黒幕やその目的とかね。」

千「私が狙われたり、敵の正体が『左手が右手』の一族だとかね。

他には、ジヨジヨ本編ではありえないような巨大スタンドの登場も、スゴいことだったよな……………」

徐「いやいや、第3部の『力』<sup>ストレンクス</sup>という先駆者がいたから、満を持し

での登場だったんだぞ？」

テ「船ならあり得るけど、ロボと鎧武者はあり得ないでしょ！！まあ、スペースマンは謎重視だったから良いけど……………」  
徐「あ、そういえば、スペースマンの本体の夜叉丸 雪子っていただろ？」

テ「ええ、雪子ちゃんがどうしたの？」

徐「詳しく描写されなかった上にフルネームはオリジナルだが、あいつ原作キャラだぞ。」

二「えッ!？」

徐「ほら、『ネギま!』10巻の86時間目にいた……………」

千「ペラッ(コミックスをめくる音)ってこいつかよッ!？確かに気ちっちゃそうで簡単に脅されそうだけど!」

テ「よく手元にあつたわねコミックス……………あれ?じゃあ『麻帆良祭』で再登場するの?」

徐「ああ、鎧武者の格好でスーパー戦隊よろしくヴェルファイヤーと一緒に巨大戦やる予定だそうだ。」

テ「それはそれで盛り上がりそうね……………ポジション的には2号ロボ?」

千「そこまで作者の気力が持つか疑問だがな。」

徐「』とにかく頑張ります』というコメントが届いてるぞ?」

テ「後は、ナンバーズ参戦も大きな出来事よね?」

千「まあ、出番を与えようとはしてるが、場所が見あたらなかったがな……………ただでさえメインキャラ30人以上いる原作なんだぞ?」

徐「ちなみに作者は仗助おじさんとチンクを良いコンビにしようとしてるぞ。」

テ「確かにセットで出るときがあるわね。」

徐「後これはネタバレになるんだが、ディードとオットーは京都で残酷な再開を果たすぞ。」

千「マジかよ……………」

徐「詳しくはWebで。」  
千「いや、元々Web上だよッ!!」  
テ「てか、所々でボケるのやめてよッ!!」  
徐「いや、ツッコミ役オンリーだとつまんないかなって……」  
千「さすが徐倫。私たちにできない事を平然とやってのけるッ」  
テ「そこにシビれないしあこがれないけどね……」

### 【ティアナについて】

テ「つてえっ!? 私ッ!?!」  
徐「ああ、正しくは【作者が意識した訳ではないけど、この作品のティアナが野上 良太郎並に不幸なことについて】だ。」  
テ「正式名称が長い上に余計なお世話よッ!!」  
千「確かに、『ホル・ホース』の銃弾を喰らって一時撤退したのを皮きりに、数々の不幸があつたな。ルーテシアのは意識してるけど。」  
徐「一応、ここにティアナの不幸を表にまとめたものがある。」  
テ「まとめんでいいッ!!」

ティアナ・ランスター、不幸の数々

その1 ホル・ホースの『<sup>エンペラー</sup>皇帝』に挑むも、銃弾を足に喰らい全治2週間（#09）

その2 アヌビス神に操られ、千雨に無数の斬り傷をつけられる（後に仗助に治してもらったが）（#17～19）

その3 エヴァンジェリンの『武装解除』で全裸にされる（#23）

その4 ダービーに賭けて敗北し、イカサマのために操られた上、徐倫に顔面パンチを喰らう（#31～33）

徐「まあ、こんなもんだな。」

千「もつとある印象があったけど。」

テ「じ……………自分で見てもこれはヒドいわね……………」

徐「後、不幸とは違うけど、この小説で初めて『中の人』ネタやったのもティアナだったな。」

千「そういえば……………ポーボボのメンマだったか？」

テ「他の作品でよくひぐらしをネタにされるけど、ポーボボでイジ

るのはここくらいよ……………」

千「元々ネギま！にボーボボ出演者が多いからじゃないか？近衛とか、ネギ先生のお父さんとか、長瀬とか。」

徐「ちなみに作者は一時期、野中 藍が出演してたアニメを3作品見た時があつたぞ。意識したわけじゃないのに。」

二「マジでツ!？」

徐「ボーボボ、ネギま！（一期）、ぱにぽにの3作品だ。」

テ「確かに時期は一致してるわね……………」

千「ツツコミ1人にボケ2人か……………」

テ「まあ、野中さんでツツコミはビュティ位だしね……………」

徐「それじゃあここいらで、第3章の予告編をみてくださいか!！」

三「」どづぞツ!！」

学園長からの第2指令

親書を届けよッ!!

新たな敵

「千の呪文サウザンド・マスターの男の息子が聞いて呆れるわッ!!」

「どうも、神鳴流ですう~~~~~~~~お初に~~~~~~~~。」

「この程度か西洋魔導士ッ!!」

突然の再会

「僕は岸辺 露伴……………漫画家だ。」

「僕に同じ事を二回も言わせないでくれ……………」

「『エコーズ3FREE』ッ!!」  
スリーフリーズ

「何で残り4発なんだクソッ!!縁起悪いッ!!」

そして

「私は『ルル・ベル』……………どっぞよろしく。」

動き出す少女ッ!!  
ルル・ベル

魔法、スタンド、魑魅魍魎……………闇が蠢く京都を舞台に、新たな戦いが幕を開ける!



「……………パンツーマル見え。」  
「Y E A A A H ツ！！」パンツ  
ピシガシゲツゲツ

t o b e c o n t i n u e d . . .

テ「って何で最後パンツーマル見えッ!?!」  
千「やるとしたらどいつらだよッ!?!」  
徐「てかついに露伴先生参戦ッ!?!ヤバい!ネギとかスバルがヤバ  
いよッ!?!」

三「ハアー……………ハアー……………」

徐「あ……………ある程度ツツコんだ所で、……………ついに『ヤツら』も  
動くのか……………」  
千「パツシヨ―ネとルル・ベルたちだろ?未だに目的不明なルル・  
ベルの目的も判明する訳だな。」  
テ「そうね……………あれ?じゃあ、ポルナレフさんは……………?」

二「アッ!？」

テ「パッションが来るなら、可能性はあるわよね？」

徐「た……………確かにあり得るな……………」

千「だ……………大丈夫かな……………私と会っても……………?」

徐「何トリツシユみたいに緊張してんだよ?大丈夫だって。」

テ「あ、もう時間みたいよ?」

徐「それでは、次回の放送をお楽しみに!」

三「アリーヴェ・デルチ」

(エンディングBGM:チーズの歌)

t o b e c o n t i n u e d . . .

#EX/幕間ラジオ『ジョジョのリリカルな放課後』第2回放送(後書き)

前書きからぶっ飛ばしてみました(笑) Wでの立川さんのナレーションは良いですね(笑)

次回からの京都・修学旅行編も頑張りますので、よろしくお願いします。

では!

#39 / 学園長からの第二指令：「親書を届ける！」（前書き）

第三章 『炎の京都』

始まります。

#39 / 学園長からの第二指令：「親書を届ける！」

イタリア

ネアポリス

街中を、高そうな黒い車が走っていた。車内には、三人の男女が乗っている。

運転をしているのは、穴だらけのスーツを着て、イチゴの柄のネクタイを着けた金髪の男。

一人は、肩出しのセクシーな服を着て、赤みがかった髪をアップにした女。

そしてもう一人は、黒いスーツのあちこちにテントウムシのアクセサリーを付けて、金色の髪を、前髪は三カ所でカールさせ、後ろは短い三つ編みにした男だ。

やがて車は、とあるマンションの前に止まると、車から三人が出てくる。

「『裏切り者』？」

「ええ、四年前に、解散させた『麻薬密売チーム』が離反してきたんだ。そいつらは返り討ちにしたんだが、リーダーの『サルシツチャ』と、彼の腹心である双子の『ソル』と『ルナ』が正体をくらましていたんだが、つい最近、『日本』で目撃されてな……………」

穴だらけの服の男が、女に話す。

「でも『トリツシュ』、カタギの君が、僕ら『ギャング』の仕事に

首をつっこむもんじゃないと思いますが……………」

「あのねえ、『ジヨルノ』、久しぶりに会ったのに、一分もしない内に別れようとしたから、無理矢理着いてきたのよ？しかも『ミスタ』もいるらしいじゃない？」

女 トリツシュ・ウナは、男 ジヨルノ・ジョバーナの言葉をつつばねた。

トリツシュがジヨルノと穴だらけの服の男 パンナコッタ・フーゴと、これから会うグイード・ミスタが会うのは、かれこれ一年ぶり 『彼ら』の墓参り以来だ。

そもそもこの三人が一緒なもの、数十分前ジヨルノとトリツシュが街角のカフェで偶然出くわしたからである。そこですぐに別れようとしたジヨルノの態度にトリツシュが腹を立て、無理矢理着いてきたわけだ。

三人はエレベーターで六階まで上がり、ミスタの部屋を目指す。今ごろミスタの所へ、偵察に向かったサーレーとズツケエロから定期連絡が入っているはずだ。

「それにしても皮肉なものね……………」

ふと、トリツシュが口を開いた。

「かつて『裏切り者』として追われていたあなたたちが、今度は『裏切り者』を追う立場なんてね……………」

それを聞いた二人は苦笑した。

部屋に着いた三人は、チャイムを鳴らした後、勝手にドアを開けて中に入る。すでにミスタには連絡しているため、何の問題もない。  
……らしい。

「ミスタ、失礼します……………」

ジヨルノが部屋に入ると、矢印の付いたニット帽をかぶった男  
ミスタがどこかへ電話をしていた。

「おいッ何で出ないんだよ『サーレー』ッ！さっきから『三回』もかけてるのにッ！！次で『四回目』だぞッ！！早く出てくれッ！オレに次をかせさせないでくれッ！！」  
「……………？どうしたミスタ？サーレーに何の用なんだ？」

電話に向かい怒鳴りつけるミスタを見て、フーゴが問いかける。すると、ようやくミスタはジヨルノたちが来たことに気づいた。

「おうジヨルノ……………ってトリッッシュまで？」

「それは後で説明します。それで、何か問題でも？」

ジオルノに問われると、ミスタは顔を曇らせて、デスクの上に『亀』と一緒に置いてあったラップトップパソコンをいじると、画面をジオルノたちに向けた。

「……………サーレーたちからの定期連絡で、やつらからこんなフザケた『動画』が送られてきたんだ……………」

その動画を見たジオルノたちは、最初は何の映像が分からなかったが、しばらく見て愕然とした。

「ミスタッこれは何の冗談だッ!!」

その映像には

「それはオレが聞いてえよッ!!さっきからサーレーに連絡しても出ねえんだよッ!!」

かつての仲間

「そんな……………何で……………」

ブチャラティが映っていた……………



#39 / 学園長からの第二指令；「親書を届ける！」

グリーンドルフィンストリート麻帆良  
206号室

「『左手が右手の女』  
たんだな……………」

確かに『ギアッチョ』はそう言う

「ああ、間違いないよ。」

承太郎の言葉に、アギトは頷いた。隣では、千雨がうつむいて黙ったままだ。

「……………？『左』手が『右』手？」

「左が……………右？」

「いったいどういこと……………？」

明日菜、ネギ、スバルが首を傾げる。他もそうだ。確かに気いたら混乱する言葉である。実際はなしていたアギトも、訳が分からない様子だ。

そこで口を開いたのは承太郎だ。

「……………千雨の父、J・P・ポルナレフの妹　つまり、千雨の叔母だな。そいつは、左手が右手の男に殺された。」  
「……………!?」「……………」

全員が息をのむが、承太郎は構わず話し続ける。

「名前はJ・ガイル……………『吊られた男』の暗示を持つスタンド使いだ。そいつはポルナレフに妹の仇として殺された。そして、そいつの母親でDIEOにスタンドを授けた『エンヤ』という老婆も、左手が右手だった……………多分その女も、その血縁者だろう……………だから千雨を狙っているだろう……………」

「……………ッ！ちよ、ちよっと待てよ！」

全員が黙って聞いていた中、ヴィータが口を開いた。

「じゃああれか？今回の事件は、逆恨みの復讐だっというのかよッ！？」

「……………まあ、要約したら、そういうことだな……………それも、異世界を巻き込んだ、はた迷惑極まりない……………な。」

「……………何で……………」

全員が暗い気持ちになっている中、今まで黙っていた千雨が口を開いた。

「何で……………何で今になって……………何で……………ツ!？」

千雨の呟く声に、誰も答えることはできなかった……………

翌日

STARBOOKS COFFEE

「長谷川さん……………大丈夫かな……………？」

「まあ、徐倫がいるから大丈夫だとは思うけど……………」

「『両右手』側のスタンド使いたちも、一夜で二人もやられたら慎重にしてくると思います……………」

STARBOOKS COFFEEで一休みしようと来たネギ、明日菜、スバルの三人。

あの後、千雨がすっかり気を落としてしまい、誰も口を開かなかつ

たために、流れ解散となった。千雨は徐倫が介抱していったために大丈夫だとは思うが、あの千雨があそこまで落ち込んだため、ネギたちは心配だった。

（まあ、次に連中が攻めてきたら、ブチのめしやあいいんスよ！）  
「……………カモ君、スタンド戦ってそんなに簡単じゃあ……………」

ネギがそう言おうとして席に着こうとしたとき

「ぬ……………」

「あ……………」

「ん……………」

エヴァと茶々丸、ブチャラティの三人に加え、徐倫と千雨の二人と鉢合わせした……………

「こ……………こんにちはエヴァンジェリンさん。空条さんたちも……………」

「おう。」

「フン！気安く挨拶を交わす仲間になったつもりはないぞ！」

気さくに返事をする徐倫に対して、エヴァンジェリンは冷たく突き返した。

「そういえば長谷川 千雨、貴様大変らしいな？親父のせいで命を狙われてるとかで。」

「……………はんッあんたに心配されるとはな。」

「強がっても無駄だぞ？貴様が怯えているのはバレバレだからな……………」

……………」



後ろでひそひそ話す四人に、なのはの親友『A』が聞いたら著作権の侵害で訴えられそうな叫びを上げるエヴァンジェリン。だが、すぐにそれは暗くなる。

「……………だが奴は死んだ。10年前にな……………」

「え……………」

「私の『呪い』もいつか解いてくれるという『約束』だったのだが……………まあ、くたばってしまったのなら仕方なからう。おかげで、奴の『強大』な魔力によつてなされた私の呪いを解ける者はいなくなり、20年の退屈な学園生活だ……………」

どこか遠い目をしながらはなすエヴァンジェリンに、全員静かに聞いていた。だが、明日菜とスバルは、あることに気づく。

「あれ？でもさあ……………ネギ君って……………」

「そうよ。その何とかゆーお父さんを追ってるんじゃないか？」

「は、はい。でもエヴァンジェリンさん僕、父さんと……………『サウザンドマスター』と会ったことがあるんです！」

「……………何だと？何バカなことを言っている。『奴』は確かに『10年前』に死んだ！！お前は奴の『死に様』を知りたかったのではないのか？」

ネギの言葉に、エヴァンジェリンは疑問の声を上げる。ネギは、それに静かに答える。

「違います！大人はみんな僕が生まれる前に父さんは死んだって言うんですけど……………6年前のあの雪の夜……………僕は確かに『あ

の人』に会ったんです……………その時に、『この杖』をもらったんです……………だからきつと、父さんは生きてます。僕は父さんと同じ  
『立派な魔法使い』になりたいんですよ。」

ネギは、杖を見つめながらはなす。それを黙って聞いていたエヴァンジェリンは、信じられないという顔をした。

「や……………奴が……………『サウザンドマスター』が生きているだと……………!?」

「え? 『京都』ですか?」

「そうだ。どこかに奴が一時的に住んでいた『家』があるはずだ。奴の死が嘘だというなら、そこに何か手がかりがあるかも知れん。」

サウザンドマスター　　ナギが生きていることを知り気分が良くなったのか、ナギについて語り出すエヴァンジェリン。

話によると、ナギが昔使っていた家が日本の古都 『京都』 にあるらしい。

「京都ですかッ！？ええーと、日本のどの辺でしたっけ……………！？困ったな…………… 休みも旅費もないし……………」

手がかりが見つかったが、そちらへ向かえそうにないネギ。だが

「へー、『京都』か……………」

「ちよーどいーじゃんか？なあ？」

「そーだな、良かったじゃんネギ。」

「え？」



「『修学旅行』？京都に？」

「そ。来週から四泊五日。」

帰宅したスバルは、しおりを見ながらティアナたちに話す。来週から3 Aは、京都・奈良へ修学旅行だ。

「私も中学は京都だったけど、スゴく良いところだったよ。どこに行くか決まってるの？」

「ええーと、私はアスナや宮崎さんたちと一緒に班だから……」  
「京都か……」

スバルがフェイトたちと話していると、部屋に承太郎と仗助が入ってくる。手には、資料を数枚持っており、なにやら難しい顔で見つめていた。

「東方に、承太郎殿？」

「今、スピードワゴン財団から連絡があった。」

いうと、承太郎は資料を皆に見せる。そこには

「『京都』の嵐山付近で、『ティード』が見つかったらしい……」

ナンバーズが探していた末妹、<sup>ナンバー12</sup>デイドが写っていた……

「で、デイドが……京都で!?!」

バキィッ

「は……………!」

何かが折れる音が部屋に響く。

そちらを向くと、オットーが『折れた観葉植物の枝』を見つめていた。

その顔は、普段見せない『憎しみ』の表情だ。

「……………なら、さらった奴らも京都に?」

「……………確証は得られないが、多分な……………」

「なら!今すぐ京都へッ!」

「お……………落ち着けよオットー!」

興奮したように飛び出そうとするオットーを、ノーヴェが止める。  
それをティアナとチンクは、オットーを心配に見ていた。

(デイドのことになるとオットー、いつもと違う顔をのぞかせる  
…鬼気迫るからこの話題には触れにくいのよねえ……………)  
(ああ、心配だな……………憎しみにでバカな行動をとらなきゃあいいの  
だが……………)

「オットー、気持ちは分かるがよおー……………向こうの戦力が  
わからない以上、こっちも準備をする必要があるぜえ……………  
出発はそれからだ!」

「……………」

仗助の言葉にオットーは気を落ち着かせる。

(すまんな東方……………)

(なあに、良いってことよ。)

そんな仗助に、チンクはそつと感謝をする。

「……………しかし、今まで身を隠してた連中が、何で今になってしつぽを見せたんだ？」

アギトが不思議そうに口に出す。確かに連中　恐らくは『両右手の女』の勢力　は、今までデイドの情報を漏らさなかった。なのに何故、今になって彼女の情報が舞い込んで来たのか　？

「……………インヒューレントスキル<sup>S</sup>っつーのはよおー……………」  
不意に、仗助が口を開いた。

「スタンドに近づくための技術<sup>ちゅうか</sup>なんだっただったら何ら不思議はねーぜえ……………」  
「?どういうことツスカ？」

仗助の言っている意味が分からないという風に、ウエンデイが訪ねる。仗助は、静かに答えた。

「『スタンド使い』と『スタンド使い』は、お互いに『引かれ会っ運命にあるんだ。まるで、『小指と小指が赤い糸で結ばれた、運命の恋人』みてーにな……………」

仗助の言葉に『理屈』はなかったが、『説得力』があった。

現にこの『麻帆良学園』には、敵味方関係なくスタンド使いたちが集まっている。

それが『矢』に選ばれた者の、  
あるいは生まれつきスタンドを持った者の運命さだめなのだろうか？

それは、誰にも分からなかった……………

同時刻

女子寮 徐倫と千雨の部屋

「かんさいじゅじゅつきよーかい？何それ？」

「はい、なんか西洋魔導士ひまじを嫌っている人たちらしくて……………」

「そいつらが、『3 A』……………つーかネギの京都入りを拒否してんのか？」

大事な話（魔法関連）があると云うので、木乃香に聞かれたらマズいために徐倫たちの部屋で話すネギたち。

なんでも『関西呪術協会』なる組織の総本山が京都にあるらしく、学園長が理事を務める『関東魔法協会』とは昔から仲が悪いらしい。そして、今年魔法先生が修学旅行に同行することを知ると、それに難色を示してきたらしいのだ。

「で、いーかげん仲直りしたいつつーんで、その『親書』を渡してほしいって学園長に頼まれたのか。」

「はい……………」

ネギの話聞いて、話がだいたい分かった徐倫。つまりは、修学旅行中にその親書を関西呪術協会の族長<sup>オサ</sup>……………もとい長<sup>おさ</sup>に渡せばいいわけだ。

「はあ、面倒くさくなってんのな、また……………」

「あうう……………ごめんなさい……………」

「こらこら、子供にあたらないのッ」

ネギに向けたわけではないが、まいったように呟く千雨。今回の事件で狙われている身としては、これ以上何かトラブルに巻き込まれることはごめん被りたかった。

「ネギ、おめーそれに加えて親父さんの手がかり見つけたいんだろ？」

「は、はい…それに、関西呪術協会から『妨害』を受けるかもしれないし……………」

「兄貴、また忙しくなりそうなんですさあ。徐倫の姐さん、手伝ってくれませんかねえー？」

「……………ま、仕方ないわね……………」

「大変なのは先生だけじゃねーけどな……………」  
「やれやれだわ。それ、頼む必要はないわよ？」  
「あ……………ありがとうございます！」

三者三様の答えを聞き、ネギは感謝をする。

イタリア  
ネアポリス

『これは……………！？』

男は映像を見て、信じられないという声を出す。

6年前、『ディアボロ』との戦いで命を落としたブローノ・ブチャ  
ラティが生きていて、同じく生きていた『地中を潜行する男』と戦  
っている……………

何故死んだはずの彼が生きているのか……………？それがこの映像の謎  
だ。

「…………映像は、トリックとか、CGとかじゃあないよな…………？」  
「ああ、そいつは確認した。日本製のビデオだから、すっげーきれいに映ってるぜ。」

パソコンに食いつきながら、フーゴとミスタが話す。確かにこの映像はきれいに映っている。流星は日本製。

男がそう思っていると、二人の懐かしい顔が映った。

一人は、背の高い帽子とコートの男だ。

歳はとっているが、あの男を見間違えるはずはない。確かにあの男だ。

そして、もう一人は

『…………千雨！』

「え？」

男の呟きを、ジヨルノが聞きとり振り向く。

そこには、全長30cmほどの『亀』がいた。だが、声を発したの  
は亀ではない。

亀の背中についた鍵<sup>キ</sup>、そのの宝石の部分から男が、頭をパンクロッカーのような髪型にした隻眼の男が、上半身を出していた。





「ソ……………『ソル』と…『ルナ』ッ！」

「！！！？この子たちがッ！？」

「お久しぶりですね、ボス。」

少年　　ソルがジヨルノに言う。

「本当に久しぶり。」

少女　　ルナがジヨルノに言う。

「4年ぶりですね、ボス。」

ソルとルナの二人が、同時に言う。完全に息がぴったりだ。

「テメエら……………よくもまあぬけぬけと顔を出せたなアアアア  
—————！」

「よせミスタッ！！！」

拳銃を取り出して二人に向けようとするミスタを、フーゴが制する。

「……………君らは、ブチャラティが生きている理由を知っているというのか？」

ジヨルノは二人に警戒しつつも、問いかけた。二人はイタズラっぽくフフフ……………と笑う。

「ああ、知ってるよ。」

ソルが言う。

「でも、タダでは教えられないんだよね。」

ルナが言う。

「教えてほしかったら一週間後、日本の京都まで来て！」  
二人が同時に言う。

するとソルは、懐から封筒を取り出して、ジヨルノに向かい放る。

「そこに地図と、『紹介状』が入ってるよ。」

「地図の場所で、私たちの『お嬢さま』が待ってるよ。」

「それじゃあ一週間後に！」

言い終わると、二人は立ち去ろうときびすを返す。

ジヨルノたちが止めようとするが、ふと、ソルが立ち止まる。

「そうそう、来るときは亀の中の『彼』も一緒に来てね。ブチャラ

テイの事は『彼』の娘　　チサメも関係しているからね。」

「『！！！？』」「『！！！？』」

ソルは言い終わると、再び振り返り部屋を出て行った……

「ポルナレフさんの」

「娘……………」

「あの時の……………ポルナレフさんの『葬式』の時のあの子が……………」

……………!?!?」

『千雨が……………』

全員が、特にポルナレフがショックを受ける中、ジヨルノが口を開く。

「……………行きましょう、京都へッ!」

「ジヨルノ?」

「確かにサルシツチャやあの双子は『裏切り者』ですが、ブチャラテイの事を知っているなら聞き出す必要がある!それに、その事にポルナレフさんの娘が関係しているならば、彼に助けられた『恩』を返すのは今だッ!」

ジヨルノの言葉に、ミスタたちは強く頷いた。

「　　そうか、ジヨルノ・ジヨバアーナは来てくれそうか……………」  
ソルから電話を受けた男は、そう返した。  
短く切りそろえた髪に、ワッフルや碁盤の目を思わせる剃り込みを入れた髪型とアゴヒゲをしており、白い丸に黒い丸を組み合わせた上着を着た男だ。

「はい、来週を楽しみにしてると良いよ。お嬢さまにもそう伝えて。」  
「分かった。」  
プツ

電話を切った男は、ソルたちのいう『お嬢さま』の元へ戻った。そちらではお嬢さまこと、ルル・ベルが『ELEMENTS』を熱唱していた。

「おう『ウエカピポ』。あの双子、何つつてた？」

席に座っていたホル・ホースが男　　ウエカピポに問う。隣にはサルシツチャもいた。

「……………ジヨルノ・ジヨバアーナたちと接触できたという事だ。」  
「それなら大丈夫だろう……………多分他の面子、特にポルナレフも来るだろうな。」

「ああ、というか　　」

ウエカピポは、未だに熱唱しているルル・ベルを見る。  
このカラオケボックスに来たのも、ルル・ベルが「平成ライダーの

歌8作品全部歌うわよ!!」と言い出したからだ。

「まだかかるのか？」

「あの人は、マイクを握ったら離さないタイプだからなあー……」

……

「やっと剣だ。後3作品だから我慢しろ。」

ホル・ホースたち三人が呆れる中、ルル・ベルの歌声（しかもスゴく上手い）が響いた……

ルル・ベル（14歳）

趣味 歌うこと（アニソンから洋楽、演歌まで。）

ただしサルシツチャ曰く『マイクを握ったら離さないタイプ』……

#39 / 学園長からの第二指令：「親書を届ける！」（後書き）

39話です。

・サブタイトルは『ボスからの第二指令：「鍵<sup>キ</sup>をゲットせよ！」』から。前は第一指令だったので。

・動き出すパッション。無理やり着いてきたトリッシュは、彼女らしいかなと思ひまして。

・両右手の女の存在を知る六課&スタンド使いたち。千雨は立ち直ったかのように見えますが、まだ少し引きずってる感じです……

・デイドの情報が舞い込んできて、オットーのすぐに駆けつけた気持ち爆発寸前。この時のオットーは、チリ・ペッパー編の億泰を参考にしました。

・ソルとルナ登場。コンセプトは『息がぴったりな双子』、デザインは太極図です。

名前はそれぞれイタリア語で太陽と月。

・熱唱お嬢さま（笑）この辺りから、ルル・ベルの本性を暴いていきます（笑）

・今回は、麻帆良に嵐が吹く……！！？

では！

#40 / 家出少女がやってくる！ (前書き)

修学旅行前、徐倫たちに新たなトラブルが舞い込む。

## #40 / 家出少女がやってくる！

ミッドチルダ

聖王医療院

「それでは、お大事に。」  
「はい、お世話になりました。」

院の入り口から、一人の若い女性が出てくる。それに、金色の小さな影がかけだしてくる。

「ママッ!!」  
「ヴィヴィオ!」

出てきた女性　　なのはは、自分に向かいかけてきた影を抱き留めるも、利き手である左手にギプスを着けているためよろけてしま

う。  
ガシィッ

「っと、大丈夫かい、なのは?」  
「ゆ、ユーノ君……………」

それを、後ろから長い金髪とメガネをかけた男性　　ユーノ・スクライアが受け止める。

「1」……………ごめんなさい、ママ……………」  
「あ、大丈夫だよ、ヴィヴィオ。」



抱き留めた少女　　ヴィヴィオが申しわけなさそうに下りると、  
なのはは笑ってヴィヴィオに話す。と、

「はい、その子持ちの夫妻ー！ー！周りから暖かい目で見られ  
とるから、いつまでもイチャついとらんで、さっさとタクシーに乗  
らんかい！」

少し離れた所に停めてあるタクシーから、はやてが大声で呼んでき  
た。周りを見ると、暖かい目で人々が見ていたのによやく気づく。  
二人は顔を赤くすると、ヴィヴィオの手を引いてタクシーまで早足  
で向かった……………

#40 / 家出少女がやってくる！

修学旅行二日前

麻帆良学園都市　世界樹広場付近

「そうか、なのはさん退院したのか。」  
「うん。と言っても、『条件付き』でねえ……………」  
「条件？」

麻帆良最大の名物ともいえる『世界樹』の側にある世界樹広場へ向かう、いつの間にもやらお馴染みとなった徐倫、千雨、スバル、ティアナの4人とデイエチとノーヴェ、彼女らを先導する刹那。6人は刹那から、着いてきてほしいと頼まれて、現在、世界樹広場へと向かっていた。

「うん……………完治するまでレイジングハート　なのはさんのデバイスなんだけど、それを没収よ。」  
「そうか……………」

「なのはさん、ほっといたら無理しても仕事しちゃうから……………しばらくお休みもらって実家で滋養だつてさ。」  
「……………あんま頑張りすぎないといいんだが……………あ！」

いい考えが浮かんだと、千雨が手をポンツと打つ。

「なあ徐倫、『トニオさん』とこにつれてくのはどうだ？」  
「ああ！そりゃあ良いな！」  
「…………トニオさん？」  
「……………」  
「着きましたよ。」

スバルたちが聞く前に、刹那が着いたと報告する。ふと、徐倫は気づく。

「……………？『休日』なのに、人が誰もいない……………？」  
「確かにいないな……………休みは結構賑わうのに……………？」

「それは、わざわざ学園長の許可をいただいて、人払いの結果を張ったからです。」

「……………？」  
「……………」

ふと、広場上部から、声がした。見ると、二人の女性がこちらに向かい下りてきていた。

ひとりには、長い金髪を腰まで伸ばし、左右をリボンで留めて赤十字の入ったベレー帽をかぶった少女で、徐倫たちとは違う、修道女を思わせる黒い制服を着ている。

もう一人は徐倫たちと同じ中等部の制服を着ており、左右を団子にして、何故か竹箒を持っている。

「連れてきましたよ『高音さん』。」

「……………誰だ？」

「片方は『聖ウルスラ女子高』の制服だが……………？」

「ウルスラ？」

聞き慣れない学校名に、ティアナが聞く。

「ああ、ミッション系の女子高だよ。」

「『ミッション系』……………と言うことは、隠密行動や銃器の使用法、ダンボールの隠れ方とかを学んで、将来的にはスネーク的な立派な特殊作業員に……………！」

「いや、ミッションって任務そっちの意味じゃなくてな……………！」

今まで主に戦闘訓練をする毎日を送ってきたせいか、『ミッション』任務』という考えを持つノーヴェのとんちんかな考えに千雨がつつこもつとするが

「あら、我が校の校風をよくご存知で。」  
「……………嘘オツ!?」

ウルスラ高の少女の意外すぎる返答に、徐倫たちどころか隣にいた少女をも、驚きの声を上げる。

「『ダンボールの隠れ方にキレがある』と、スネーク先生にほめられました。」

「いや、何でその人が講師としているのよッ!?何?あなたメタルギア破壊しに行くのッ!?」

「私、ウルスラに進学考えてたけど、止めようかな……………」

「私も……………」

「そうした方がいいよ……………」

ウルスラ高のイメージが崩れ、進学を止めようと思う二人だった……………

「さて、自己紹介をさせてもらいます。私は『高音・D・グッドマン』……………ウルスラ女子高の二年生です。こちらは私のパートナーの

「さ、『佐倉 愛衣』です。」

二人の少女　高音と愛衣の自己紹介に、千雨はあることに気づく。

「今『パートナー』って言ったな?あんたら『魔法使い』なのか?」  
「ええ、そうですわ『スタンド使い』さん。」

千雨の言葉に、高音が答える。

「……………で、その魔法使いさんらが、私らに何の用ツスカ？」  
「ふふふ……………それは」

すると高音は、徐倫たちに向かい『ビシィッ』と指を指す。

「あなた方スタンド使いに、『決闘』を申し込むためですッ！」  
「はいイィッ!？」

高音の言うことが分からず、思わず相棒的にすつとんきょうな声を上げる二人。

「今、この麻帆良で起こっている事件……………全てはあなた方と同じスタンド使いによるものとお聞きました。」

「もうそこまで広まってるのか……………」

「あなた方は私たち麻帆良側と聞きましたが、正直、私はスタンド使いなんていう得体の知れない者たちと共同戦線を張るのはごめん被ります！」

「私らからすりゃあ、魔法使いあんならも得体が知れないけどな……………」

「そこで！実際に戦ってスタンド使いがどれほどのものなのか確かめようという考えに行き着きまして、ここに決闘を申し込みますわッ……………」

一通り喋ると、再び徐倫たちに指を指す高音。そんな様子を見て、二人はため息をつく。

「やれやれだわ……………なんかメンドくさそうなのに目を付けられたわね……………」

「ブライド高そうだよあの人……………どうする？」

「決闘受けるまで帰してくれそうにないし、仕方ない……………」

二人は『渋々』決闘を受けることにした……

「じゃあ、私たちは介添え人として、この決闘が公平なものであると見届けるわ。」

「ええ、お願いします。」

ティアナが高音に言うと、スバルたちも困うように散らばる。

「……………で徐倫、勝算はあんだろっな？」

「ああ、ちょうど『試したい奴』があるしな！」

千雨の質問に、徐倫は懐から『あるもの』を出す。それは

「……！ぱ、『<sup>バクティオー</sup>仮契約カード』ッ……！？」

「まさか……………既に仮契約をッ！？」

そう、ネギと徐倫が仮契約を交わした証、『仮契約カード』だ。ただしこれは、カモの力で作ったパートナー用の複製コピーであり、オリジナルはネギが所持している。

「おい徐倫！試したい奴ってまさか……………」

「ああ、『アーティファクト』ってやつだ。明日菜にもあったし、私のも試したくてな。」

「おいおい、大丈夫かよ！？使ったら『俺、参上ッ……！』って言ってポーズとるだけとかかも知れないだろッ！？」

「さすがにそれはないから大丈夫だろ……………」

「……………フツ、仮契約を交わしていたのには驚きましたが、まだ使っていないとは……………これでは、勝負は火を見るよりも明らかッ！」

徐倫に指を指しながら、高音は高らかに叫ぶ。それを見た徐倫は、やれやれといったようにため息をつく。

「いちいち人に指を指さねーで下さいよ先輩……………まあ、出たところ勝負ってとこツスカね〜」。

徐倫はカードを、高音は杖を構えながら、一定の距離をとりジリジリと、相手の出方を見る。

そして、お互いが駆けだそうとした。

その時！

ドンッ！

「「？」」

「あ、ごめんなさーい」

歳が二桁行くか行かないかの女の子が高音にぶつかり、そのまま進行方向にいたディエチにもぶつかったあと、走り去っていった。

「な……何あの子……？人払いの結界をすり抜けてきた……

……？」

「あいつは……？いや！見間違いだ！きつとココナツツのスジかなにかだろ……」

「いや、どうやら見間違いじゃなさそうだぞ徐倫……」

千雨に言われて高音とディエチの方を見ると

「ん？」

「え？」

生まれたままの姿の二人がいた……

そしてきっかり13秒後……







(兄貴たちに？何の用だったんスカね？)

「さあ……………」

「あらアスナさん。どうかしましたの？」

と、そこへあやかが明日菜へ話しかけてくる。そこで、明日菜は思いついた。

「あ、いいんちよ。ねえ、東方先生の『妹さん』って知ってる？」

「妹……………？ああ、『静ちゃん』のことですか？」

「うん、何か『家出』しちゃったらしいんだけど、おじいさんが調べたら何かネギとこのかが関係してるとか何とか……………」

明日菜の話に、あやかは思い当たる節があった。

「恐らくはジョースターさんの「ハーミット・バーブル隠者の紫」の『念写』ですわね。それで二人が写ったということは……………」

(二人の近くに、その『妹さん』がいるって事ツスね？)

「なるほど……………って妹さんアメリカにいるはずじゃあッ!？」

「あ!？それがネギ先生が写ったという事は……………日本にッ!？」

ようやく事態を飲み込んだ二人と一匹。すぐさま明日菜は、木乃香に電話をかけた。

原宿  
とある雑貨屋

チャツチャカスチャラカスツチャンチャン

「ん？あ、アスナからや。」

「着メロ笑点なんですね……………」

雑貨屋で何やら色々見ていた二人の元へ、明日菜から電話が来る。

ピッ

「はいな〜〜？」

「あ、このか？今どこ？」

「ん〜〜？今原宿の雑貨屋さんやけど、どしたん？」

「うん…………えーと、あ、近くにちっちゃい女の子いない？ネギより年下くらいなの！」

「え？えーと……………あ！」

明日菜に言われた木乃香が周りを見渡してみると、見つけた。

肩までかかる黒髪をツイントールにした頭にはサングラスを乗せ、服装はリボンが数個ついたピンクのワンピースを着て、肩には白と赤の水玉模様のポシェットを下げた八歳くらい女の子で、何やらサングラスがかかったタワー状のディスプレイを見ている。

> i 1 0 7 4 1 — 4 0 6 <

「おったけど……………あの子がどうしたん？」

「あ、いたの？多分その子、東方先生の妹さんだから、目を離さないで！」

「え？『東方先生』の？」

「？東方先生がどうしたんです？」

「！？」

「東方」という言葉を聞いた女の子　　静・ジョースターは、木乃香の方を向くと、木乃香と目が合ってしまう。そして、数秒見つめ合った後……

「……………」ダッ

「あっ逃げた！？」

「ええっ！？ネギッ早く捕まえてっ！！」

「えっ！は、はいっ！！」

明日菜の声が木乃香の携帯から聞こえ、静を追おうとするネギだが

……………

パッ

「「えっ！？！？」」

「な……………なんやあれ！？手品みたいに消えてもーたでー！不思議ー！」

「ええッ!?!」

(あの、いいんちよの姐さん、もしかして妹さんも……………)

「あ！そうでしたわ……………『透明になれる』スタンド 『アクトン・ベイビー』の能力ッ！！透明になって逃げられたッ!?!」

数分後

グリーンドルフィンストリート麻帆良 206号室

「分かった、原宿だな！」

明日菜から電話を受けた徐倫は、静の居場所を聞くと、千雨たちへ指示を飛ばす。

「静は原宿だ！スバルとティアは私らと現地へ向かうぞッ！」

「う、うんッ」

「はい、これはバカには見えない服ッスよ~~~~」

「って人の服で遊ばないでよッ！！」

「完全に他人事だなお前ら……………」

ウエンディとセインが透明になったデイエチの服で裸の王様ごっこをしているのをよそに、徐倫たちは駆け出した。

「空条さんッ」

「お、刹那。準備できたか？」

「はい…………でも、こんなのどうするんですか？」

途中徐倫は刹那から頼んだものを受け取る。  
それは

原宿

「はあっ……………はあっ……………ど、どこに行ったんでしょっか……………」  
「あかん……………また見失っでもうた……………」

あれから静を見つけては姿を消されるのを繰り返して、原宿中を走り回ったネギと木乃香、そして先に合流していた明日菜は、すっかりくたびれてしまった。

パッ

「きゃはははッ おにさんこーちら」  
「あ！あんな所にッ!？」  
「あ、あんのガキイイ……………」  
「か……………完全に遊ばれとる……………」

いきなりネギたちから少し離れた場所に、静が姿を現す。その姿は、完全に遊んでいる様子だ。  
その時！

「こらーッ 静アアアアア……………」  
「げ!」「く、空条さんッ」  
「徐倫！ 静ちゃんはこっちやえ……………」

徐倫たちが、こちらに走ってきた。それを見た静は、すぐさま姿を消す。

「また消えた!」



「甘いな静ッ私が『何の対策もなく』来たと思うか？」

言っていると徐倫は、先ほど刹那に用意してもらった物を取り出す。

それは、『赤い色水』の入った2リットルのペットボトル3本だ。

徐倫はそれを空中に投げ、

「オラオラオラアアッ！！」

ドバシャアアッ

殴りつけて水を辺りに撒き散らす！

「な……………何を！？」

「色をつけてるんだよ……………！あいつを探すためになッ！！」

当然撒き散らした水は地面に赤い色をつける。すると、

ポワワワワーーーー

「ああッ！！」

「あ、あれはッ！！」

赤い色水が『かかっている場所が一方所、しかも不自然に『丸い形』でかかっている場所がある！

「見つけたぞ静ッ！お前の『透明にする能力』が仇になったなあ

あ！スバルッ！

「りよーかい！」

ガシィィッ



「そもそも何で家出なんかしやがったんだお前はッ!」

「そうだッ!手荷物のポシエットにはパスポートなんてないし、あるのはお菓子とちよっとのお金(アメリカドル)だけじゃないか!どーやって日本<sup>こゝ</sup>まで来たッ!」

「う……………そ、それは……………り、リサリサおばあちゃんが悪いのよ……………」

「ん?師匠が?」

リサリサという名前に、千雨が反応する。

リサリサ　本名エリザベス・ジヨースターは、千雨や彼女の『姉弟子』の波紋の師匠であり、仗助や静の祖母だ。今はニューヨークでのんびり暮らしていると聞いているが、時折千雨が訪ねると稽古をつけてくれる。

「だって……………おばあちゃんが私がとっておいた『プリン』を食べちゃうから……………」

「『ええー!』っ!?プリン一個で『不法入国』ッ!!?」

静の言葉に驚きの声を上げる一同。静は少しビクつくが、すぐに弁解する。

「い、いや……………本当は西海岸辺りに行くつもりでさ……………ラスベガスとか。私の『透明』の能力を駆使して空港まで行って飛行機に乗ったんだけど……………間違っつて『国際線』に乗っちゃって……………」

「……………」  
「何やってんだよ……………」

「意外と行動力あるわねこの子……………」  
「それで折角だから、日本を観光しよっかなーってさ。」  
「何が折角だ不法入国者がッ」  
「で、てきとーに乗った電車で『マホラ』まで来て、てきとーにぶらぶら歩いてたら徐倫お姉ちゃんが何かひどいこと言われてたからさ。得体が知れないとか、胡散臭いとか……………」  
「それで高音さんにあんな事を……………」  
「で、間違っつて他の人も攻撃しちゃったから、逃げるように原宿まで……………」  
「そして現在にいたる、と。」

静の話を聞いて、呆れかえる一同。すごい行動力を持つが、所詮は子どもといった所だろうか……………」

「とにかく、不法入国の件はSPW財団が何とかするから、おめーはアメリカに帰れっ！じじいも心配してんだろうよ。」  
「……………確かに、心配してるよね……………だが断る。」  
「……………ハアッ！！？」

静が帰ることを跳ね返した事に、全員が声を上げる。

「リサリサおばあちゃんが謝るまで、私家には帰らないからッ！！」  
「って何意地張つてんだお前はッ！！」  
「というわけで、私お兄ちゃんのとこに泊まるから。」  
「勝手に決めてんじゃねーよ！！」

「うわー……………意外と意地っ張りだよあの子……………」  
「能力にはやられたけど、中身はまんま子どもねえ……………」  
「あれで先生とあんま歳変わんないんだがな……………いや、先生が大  
人びすぎてるだけか……………」

「やれやれだわ……………」

静の様子を見ながら、明日菜たちは呟いた……………

静・ジョースター（八歳）

スタンド名：アクトン・ベイビー　自分及び周囲の物を透明にする能力。

仕方なく、しばらくの間仗助の部屋に泊まることになった。

高音・D・グッドマン　今回はお流れとなったが、いつか必ず再戦すると（涙目で）約束させた。

ダイエチ　静に謝られ、今回だけは許すことに。

近衛　木乃香　徐倫に今回の事は全て手品だと説明され、納得した。

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #40 / 家出少女がやってくる！（後書き）

40話です。

・サブタイトルは『ジャンケン小僧がやってくる！』から。サブタイトルだけだと3部のあの子っばいけど、静でした（^| ^;）

・なのはさん退院。でも、復帰はまだ後になるかも……………名前出し、『トラサルディー』での話を書こうと考え中。

・高音登場。ミッション系のくだりは、私がミッション系と最初聞いたときの想像から（笑）

そして高音は、ここでもこんな役割（脱げ担当）です（笑）

・静・ジョースター（透明の赤ちゃん）登場。実はアクトン・ベイビーってラブコメ向きのスタンドだと、最近気づきました。捕獲までは、あっさりさせました。

・次回、いよいよ修学旅行当日です！

では！

# 41 / 新大阪行き超特急(前書き)

ストライカーズ・オーシャン

相関図

> i 4 1 7 7 — 4 1 5 <

## # 4 1 / 新大阪行き超特急

京都

とある料亭

「では、こちらへどうぞ。」

「ど、どうも。」

「……………噂に聞いてはいたが、ずいぶん丁寧だな、『ニホンジン』  
つてのは。」

料亭に着いたジオルノとトリツシユ、そして亀を持ったミスタの三人（フーゴは、ジオルノがいない間の組織の切り盛りのため、イタリアに残っている）は、ある部屋へと案内される。

「この部屋です。」

「どうも。」

そして、部屋の襖が開くと、中には男が三人。

「お、来たか〜〜、ポルポルく〜〜ん。」

『！！ほ……………ホル・ホースツ！？』

「来たね。」

「来たね。」

「「やっぱり来たね、ボス！」」

「ソルとルナ……………それにサルシツチャツ！」

「……………」



ホル・ホース、ウエカピポ、そしてサルシツチャに、ソルとルナ、  
そしてゴシツクロリータ服の少女

「初めましてジヨルノ・ジヨバアーナ。私は『ルル・ベル』……  
どうぞよろしく。」

ルル・ベルがいた。

# 41 / 新大阪行き超特急

翌朝

修学旅行一日目

大宮駅

「おはよーございます東方先生、ウエザー先生ッ!」

「おうネギ!」

「おはよう。ネギ君」

「おはようございますスバルさん!早いですね?」

修学旅行当日、早めに来た教員勢や待ちきれずに始発で来た生徒たち、そして少し眠そうなスバルの元へ、生徒以上にウキウキしたネギが来る。

「スバルさんも待ちきれずに早めに来たんですか?」

「いや、実はオットーに付き合わされて……………」

(あー、オットーの姐さん、違う意味で待ちきれそうになかったからなあ……………)

今回、デイドを探すため京都へ向かうことになったナンバーズ及び機動六課は、ネギたちの修学旅行に合わせて出発する手筈になっていた。

それを聞いてオットーは当日までそわそわしっぱなしであったため、チンクたちは宥めるのが大変だったという。

「……………それで、オットーさんは?」

「あっちでティアたちと『テント』畳んでるよ……………」

「テントって……………『昨夜から』ッ!??」

「早く来すぎだろ!『ドラクエ』買っんじゃねーんだぞ!??」

まさかの『昨夜から野宿』に驚きを露わにするネギたち。

ある意味生徒以上に気合いの入ったオットーに、感心しているのか

呆れていいのか分からなかった……

「……まさか駅で『野宿』するハメになるとは思わなかったわ……」

「まったくだ……バイト先で『新年』迎えた作者の気持ちがちよつと分かった気がするよ……（実話）」

テントを畳み、荷物をまとめながらティアナ（まだ眠い）とノーヴェ（寝不足でイライラ3割増）が話していた。  
尚、野宿するハメになった原因であるオットーは

「離してくださいチンク姉様！！何故行かせてくれないんですツ！？」

「だから落ち着け！団体行動を乱すなんて、お前らしくないぞオットーッ！！」

チンク、ディエチ、ウェンディ、セインに取り押さえられていた……

「あんなに取り乱すなんて……よっぽどデイドが心配なのね……」

「ああ……あんなオットー、見たこと無いよ……」

デイドが心配でいてもたってもいられない様子のオットーを見ながら、二人はそう呟く。  
その時だ。

パシャツパシャツ

「……？」

不意にシャッター音がした。音の方を見ると、肩にスケッチブックをかけた男が一眼レフでオットーたちのやりとりを撮影していた。それを見たティアナは、男の無神経さに怒りを覚えた。

「ちよつとあなた、何してるのよッ!？」

「ン………すまないな。あんな風に取り乱す人間を始めてみたからな………」

男はカメラから目を離すと、ティアナに平謝りをする。

そして再び写真を撮ろうとしたため、ティアナはカメラのレンズに手をやり、カメラを下げさせた。

「だからって、勝手に撮影していい理由にならないでしょうがッ!」

「………チツ、分かったよ………」

男は何かブツブツいいながら、その場を立ち去って行った。

「まったく！無神経な人もいたものね！」

「あいつ、スケッチブック持ってたけど、なにやってる奴なんだ……？」

「知らないわよ！ほらオットー！他の人に迷惑だから、ギンガさんたちが来るまで待ってなさいッ！！」

少しイライラしたように、ティアナはオットーに怒鳴りつけた。

9：45

新幹線

「んーと、今のが5班だから……」  
「後一班ですね」

東京駅まで向かうあさま506号に乗り込んだネギたち3 Aは、各班の確認をしていた。

「あの、先生方……」

「あ、桜咲さん……と、ザジさん？」

「あれ？おめーら『6班』は……二人だけか？」

「はい……私が6班の『班長』だったのですが、エヴァンジェリンさん他『2名』が欠席したので、6班はザジさんと私の二人だけになりました……」

見ると、刹那の他に、黒い肌に銀髪、そして顔に施したピアロのようなメイクが特徴のザジ・レイニーデイが、少し困ったようにしていた。 いや、ザジは無表情だ……いつも通り……

「えっ……そ、そうですか……困ったな……」

「（やっぱりエヴァは来れねーのか……）分かった、他の班に入れてもらえ。」

「はい……」

「……」 コクリ

仗助の提案に、二人は返事をする。（ザジは頷いただけだが……）そして他の班の班長に話したところ、3班と5班がそれぞれ二人を入れてくれることになった。

「それじゃあアスナさん、桜咲さんを、いいんちょさんはザジさんをお願いします。」

「はいはい。」

「分かりましたわネギ先生。」

「え……」

ふと、木乃香が刹那と一緒にという事に反応する。

「あ、『せつちゃん』……………一緒の班やなあ……………」

「あ……………」

刹那は木乃香に対して軽く会釈すると、すぐに席へと向かっていってしまった。

「あ……………」

「……………？（おい、あの二人何かあったのか？）」

（さ……………さあ？）

「ふう……………今頃奴らは新幹線かあ……………」

一方こちらは麻帆良学園。

『登校地獄』の呪いで学園からでられないエヴァンジェリンは、校舎の屋上で惚けていた。

「マスターは呪いのせいで修学旅行にいけず残念ですね。」

「……………おい、何で残念なんだ？別に私は……………」

「いえ、行きたそうな顔をしていましたので……………」

少しズレた発言をする茶々丸に対して、エヴァンジェリンがつつこむ。

「ふん、まあナギが生きているなら、その『情報』が手に入るかもというのはあるがな……………それも、手は打ってあるし。」

京都の方角を見ながら、エヴァンジェリンはそう呟いた。

「わっわっ、ノーヴェノーヴェツ！動いたツスよほらッ！！」  
「当たり前だろうが、うっせーな……………」

一方、東京駅から『ひかり213号』に乗り換え、発車時刻となり動き出した新幹線に、何故か学生のようにハシヤぐウェンディをう



ざったがるノーヴェ。

「今頃、3あつち Aもハシャいでんじゃないか？」

「徐倫は表立ってハシャがないだろうが、他はハシャギまくりだろ  
うな。」

「えー？そつなの？」

「うん、修学旅行って結構テンション上がるから、きつとね。」

「……………ちよつと待って。この新幹線『変な奴』が乗ってるわ……………」

ティアナの言葉に、全員が振り返る。

「……………誰だ？それは……………」

「お前らだよッ！！」

とぼけた回答をする静とブチャラティに対して、手を添えながらつ  
っこみを入れるアナスイ。

……………アナスイ？

「ってあんたもでしょうがッ」  
スパコーリン

何故かいるアナスイの頭に、『ツッコミ用』とかかれたスリッパで  
ひっぱたくティアナ。#16以来25話ぶりの登場でも、彼はこん  
な役目だった……

「……安心しろ、俺は学園長に頼まれたんだ。徐倫たちはともか  
く、『魔導師おまえらの中にはスタンド使いとの戦いになれてない奴もいる  
から』ってな。」

ティアナにひっぱたかれた場所をさすりながら、アナスイが説明す  
る。

「ちなみに私は留守番がイヤで着いてきました 透明になって。」

「よし、次の『名古屋』でおりなさい。ウエンデイ、この子よろし  
く。」

「え〜〜〜〜ッ!?!」

ティアナからの無情な通告に非難の声を上げる静とウエンデイ。静  
は仕方がないが、ウエンデイは完全に巻き添えだ。

「そ、それで、ブチャラテイさんは……?」

「俺はエヴァに頼まれた。ネギに着いて行って『サウザンド・マス

ター』の情報を手に入れろってな。」

「なるほど……………」

「ついでに『生八つ橋』を買ってこいと頼まれた。」

「前者がなかったらただの『パシリ』だよねそれ……………?」

ブチャラティが着いてきた理由を聞いて頷くエリオとディエチだが、後のを聞いて頬を釣り上げる。

その時だ。

ヒュンッ

「ん?今何か通ったか?」

何やら小さくて黒い何かが通り過ぎたのを見て、通路をのぞき込むチンク。だが、

「わーッ!?退いてくださッ」

「え?」

ドガアッ

「ッゲエエッ」

のぞき込んだとたん、ネギが走ってきて思いっきり衝突してしまっ。

「チンク姉ッ!?!」

「ネギくんツどうしたの？」

「痛たたたた……ああッ！し、『親書』が……！？」  
「『親書』……？」

小さくて黒い何かが飛んでいった方を見ながら、ネギが嘆く。

「や……ヤバい！あの『ツバメ』に、親書を奪われちゃったんだ  
ッ！！」

「何イッ！？」

カモの話に驚く一同だが、黒い何か　ツバメは既に車両の端だ。

「ああっ！もうあんな所に……！」

「問題ないぜッ！！」

アナスイが叫んだときだ。

ガシイッ

「……ああッ！？」

床から『腕が生え』、ツバメを掴んだ！

「『ダイバー・ダウン』……新幹線に潜行させた！これで捕まえ  
何イッ！？」

だが、よく見るとつかんだのはツバメではなく、甲冑の兜のような

マスクだった……

「か……………」 『変わり身の術』！？しかもこのマスクはッ！」

「トランティス！？懐かしいよッ!？」

どうやったのかは不明だが、マスクのせいで不忍池の悪魔超人のような姿に見えてしまうダイバー・ダウンが、そこにいた……

「逃げられたか……………」

「そ、そんな……………」

全員が嘆く中、ティアナはあることに気づいた。

「……………」 あれ？ 『セイン』は？」

「……………」 え？ 「……………」

のどが渇き、男は自販機で飲み物を買おうと外に出た。

『先生』に突然『京都に行こう』と無理矢理誘われたが、彼はあまり不満は無かった。まあ、『先生』は元からあの性格だし、京都へは行ったことがないので、少し楽しみかなあとは思っている。

そして外に出たとき、彼は『小さくて黒い何か』が向かってくるのを見た。よく見ると『ツバメ』だ。

何故ツバメが新幹線（こゝろ）にいるのか不審に思った彼は、自分の『能力』（スタンド）でツバメを捕まえようとした。

その時だ。

ガシイッ

「!？」

「とつたどオオオオオーッ!!!」

壁から女の子が『生えてきて』、ツバメを捕まえた。だが、彼のスタンドは既にツバメに『攻撃している』。

つまり

ズドンッ

「うわっ!？」

ツバメは『重くなっている』のだ……

「な………何これ!？『重い』ッ!？」

いち早くツバメが逃げたのを確認したセインは、自分のIS

『デープ・ダイバー』でアナスイ同様新幹線に潜行してツバメを追跡したのだ。

そして、ツバメを捕まえたと思ったら、急にツバメが床にめり込むほど『重くなり』、セインはつかんだ右腕から床に倒れてしまったのだ。

それは端から見たら、イナバウアーのように背を反らしたポーズに見えなくもなかった。

「き………君は!？」

「えッ!？」

声がして振り返ると、自分より背が低い小柄な男がいた。ISを使っているのを見られたのにも焦ったが、問題は『他にあった』。男の『そばに立っているものだ』！

小柄な男よりも背が低く短い手足を持った機械的な印象の外見、頭部にいくつも付けられたハザードランプのようなもの、そして腰に付けられた『3』と描かれた腰布　これは！

「ス……………スタンド　」

だが、セインの意識はそこで途絶えた。

「……………さん！セインさん！」

「……………あれ？私……………」



「セイン！気がついたか！」

セインが気がついた事で、ネギたちは安堵の表情を浮かべる。

「私……………どうしてたの？」

「親書握って気絶してたんですが……………何があっただんですか？」

ネギに言われて、セインは思い出した。

「そ……………そうだ！ツバメ捕まえたと思ったら、急にツバメが『重くなつて』、んで、近くにスタンド使いがいたんだけど……………あれ？そこからさきが思い出せない……………？」

（多分、そいつのスタンド攻撃を受けたんツスね……………親書が無事だったから良かったが……………！）

「じゃあ、また魔法使いとスタンド使いが……………！」

カモとネギの仮説に、全員が息をのんだ。

「ふふふつ……………あんなもの、逃がすわけが無いだろう……………！」

この時誰も気づいてなかった。

近くの扉から、ネギたちの様子を見ていた男の存在に……………

t o b e c o n t i n u e d . . .

「 P R I V I L E G E C A D E 」

3 A 修学旅行各班員

〓 班長

|     |    |    |
|-----|----|----|
| 1 班 | 柿崎 | 美沙 |
|     | 釘宮 | 円  |
|     | 椎名 | 桜子 |
| 鳴滝  | 鳴滝 | 風香 |
| 文伽  |    |    |

2班

古菲

春日 美空

超 鈴音

長瀬 楓

葉加瀬 聡美

四葉 五月

3班

雪広 あやか

朝倉 和美

空条 徐倫

那波 千鶴

長谷川 千雨

村上 夏美

Z a z i e R a i n y d a y

4班

明石 裕奈

和泉 亜子

大河内 アキラ

佐々木 まき絵

龍宮 真名

5班

神楽坂 明日菜

綾瀬 夕映

近衛 木乃香

早乙女 ハルナ

桜咲 刹那

宮崎 のどか

スバル・ナカジマ

欠席者

絡繰 茶々丸

E v a n g e l i n e · A · K · M c D o w e l l

## # 41 / 新大阪行き超特急（後書き）

41話です。

・サブタイトルは「フィレンツェ行き超特急」から。

・ルル・ベルとパツシヨーネが接触しました。今後の展開をお楽しみに。

・昨夜から野宿はお気に入り。オットーは我慢の限界らしかったですが、駅まででギリギリ止められました（笑）

・久々のアナスイ。ぶっちゃけ今まで忘れてました（笑）

・ダイバー・ダウンVS・ディープ・ダイバー。名前と能力が似てる二人の今回の対決は、変わり身をされたとはいえ、ディープ・ダイバーに軍配。ちなみにキ 肉マンネタは途中で思いつきました（笑）

・二人の男の正体は分かる人には分かるでしょうが、詳しくは次回以降ということ。

では！

#42 / 京都観光中異常発生中（前書き）

京都修学旅行1日目。

だが、その影では……………

## # 4 2 / 京都観光中異常発生中

麻帆良学園

学園長室

徐倫やスバルが京都に向かった頃、承太郎は学園長室で学園長と、金髪にめがねの女性

葛葉くすのは 刀子とこからの報告を聞いていた。

「人造魔導師？」

「はい……………長谷川 千雨さんとアギトさんを襲った『ギアッチョ』というスタンド使いを検死した結果、体内から人工魔導回路などが多数発見されました。恐らくは

「チンクが言っていた、ブチャラティ以外の『5人』の内の一人か……………ということは、スカリエッティは『両右手の女』と面識があった事になるな……………」

刀子からの話から推測する承太郎。

チンクが言うには『人造魔導師』として蘇生したスタンド使いは、ブチャラティを含めて6人 つまり、ギアッチョが倒された今、後『4人』のスタンド使いが『両右手の女』側についている事になる。

「……………おい、『スカリエッティ』に会うことはできるか？」

「はい、交渉はしてみます……………」

承太郎に言われ、刀子は部屋から出て行った。

京都  
清水寺付近

「ノーヴェノーヴェ……、似合うツスカ……？」

「……………似合うんじゃないか？」

「ん……？なにイー、その反応は……？」

府内にある貸衣装屋で『舞妓はん』の格好をして出てきたセインとウエンディが感想を求めるも、ノーヴェの反応は素っ気のないものだった。

「ほらオットー！早く出るツスよ！」

「わっ……………ちよつとウエンディ姉様ッ!？」

ふと、ウエンディに引つ張られる形で、同じく舞妓はんの格好

二人に比べて化粧は薄め　　をして出てくるが、相当困惑した様子だ。



「こ……こんなことしてる場合じゃあ……」

「まあまあ、今は京都をエンジョイするッスよ……！」

「そうそう、焦っても仕方ないよ……！」

デイドが心配で仕方がないオットーだが、ウエンディとセインはまさにウキウキしながら話す。

「でい、デイエチ姉様！姉様からも二人に」

オットーは、近くにいたデイエチとチンクに助けを求めるが……

「ねえ、オットーにはこっちの簪かんざしのほうが似合うんじゃないかな？」

「いやデイエチ、こちらを捨てがたいぞ？」

「ちよつとオオオーーツ！？」

こちらもエンジョイしていた。

オットーは涙目で「お前もかブルータス」と言いたげな顔で叫ぶが、叫びも虚しく姉たち（ノーヴェ除く）のおもちゃにされていた。

「ははっ、オットーも災難だねエー。」

「そうね……てか何でいるのよ？名古屋で降ろしたはずよね？」

「セインに拾ってもらいました」

「セイン、後で裏来なさい。」

少し離れた場所でティアナと静がコントをしながらナンバーズのやりとりを見ている中、ブチャラティがノーヴェに話しかける。

「いい姉妹じゃないか、お前のところは。」

「……まあな。」

ノーヴェは、照れたように言う。

ここのところ、オットーはディードの事で頭がいっぱいだっただ。それは、京都に着いても同じどころか、むしろ余計酷くなっていた。そんなオットーを見てられなくなったのが、貸衣装屋を発見したウエンデイが、セインと画策して貸衣装屋に引つ張り、今に至るわけだ。

結果、オットーはウエンデイとセインどころか、ディエチとチンクにまでいじくられるハメになっていた。

「まあ、あれであいつがリラックスできたらできたで、それでいいんだが　　!？」

不意に、ノーヴェは『何か』を感じ取り、辺りを見渡す。

(……何だ『これ』は……? 誰かいるのか?)

「ノーヴェ姉様……! た、助けてエエエ……!」

「ほらノーヴェ、そろそろ助けてあげなさいよ。」

ティアナに言われ、ノーヴェはオットーを助けに行く事にした。

この時、ノーヴェは気づかなかった。

自分たちの後ろを『亀を持った男』が通り過ぎたことに……

#### # 4 2 / 京都観光中異常発生中

清水寺

舞台下の茶店

「ふえ〜〜……結構高いなあ〜〜」

「そうだね。」

「あそこから飛び降りるのは、結構勇気いりますよねえ〜〜?」

「……………お前、何で普段そのサイズじゃないんだ?」

『清水の舞台』を見上げながら団子をほおぼるリインとアギトを見ながら、アナスイが訪ねる。

現在の二人は、普段の全長30センチの手のひらサイズではなく、ネギたちと同じ、10歳ほどの容姿をしている。

「いやあー、この格好『燃費』悪くて……………」

「すぐに疲れちゃうんですよ……………」

「……………なるほど。」

「むぐむぐ……………それにしても……………もぐもぐ……………静かで良いところですね……………ゴクンッ」

団子を食べながら話すギンガ。だが、アナスイはそちらを見ようとはしない。見たら負けだと思っている。なぜなら

「……………いや、確かに『奢る』とは言ったよ？でもさ……………だからつてあんなに食うか普通……………?」

「……………そういえば、スバルもあれくらい食べますね……………」

「それ、先に言ってくれないか?」

ギンガの横には、冗談のように皿が山積みになっていた……………その光景を道行く人が見る度に、アナスイは人々の視線が痛くて仕方なかったという……………

「なあ、これ学園長から『経費』として請求できないかな?」

「多分ダメだろ……………」

「やっぱし……………?」

アナスイが諦めかけたその時だ。

「あれ?ラインのお団子が……………?」

「ん?もう食っちゃまったんだろ?とぼけても、もうおかわりはさせないからな。」

「いえ、あと『1本』あつたはずなのに……串ごとないなんて……？あれれ??？」

突然団子が消えたと言い出すリイン。辺りを見渡すが、地面に落とされたわけではないらしい。

『ガツガツ……ウメエエエエ』

『バクバク……ゲプイイ』

『くくん?』

ふと、足元から甲高い声が出た。覗いてみると……

『ウエエエエーン、オレラニモソレ分けてくれよオオオオオオ！』  
『ソーダゾ』No.2『！』No.3『！オメーラダケズリージャ  
ネーカ!』

普段のリインたちよりも小さい、約3センチ程で、滴型の頭をした銀色の『妖精』のようなものが4匹、団子を取り合っていた。4匹にはそれぞれ2、3、6、7と番号が額に振られており、どうやらその番号で呼び合っているようだった……

「て……てめえら……スタンドかッ!!」

『『『エッ!』?』』

「コラー……リインのお団子返すですよ……ッ!!」

『ゲエエッ!コイツラニハオレタチが見エテンノカアッ!?』

『二、逃げるオオオオ……!!』

「あ！逃げるなですうー！ーッ！！」

逃げるスタンドを追うラインだが、小さいためなかなか捕まらな  
い。

「あんな小さいのもいるんだなスタンドって。しかも4匹も。」

「ありや『群生型』だな。『複数体』で『1能力』のスタンドだ。」

アナスイがのんきに解説していると、「音羽の滝」の方が騒がしく  
なってきた。

「ん？A組あいつらが来たか……おいチビ！さっさと行くぞ！ギンガ！お  
めーもいつまでも食ってんじゃ」

アナスイが叫んだ瞬間、彼は気づいた。

ギンガに向かい何か飛んでくる！？

「危ねえッ！！」

「え！？」

アナスイは叫ぶと同時にギンガに飛びかかる！その瞬間！

ズガガアッ

「なっ！？」

無数の矢が、ギンガのいたあたりに突き刺さった！

「あ……………危なかった……………おい、大丈夫……………か……………」

矢を避けたのはいいが、ようやくアナスイは気づく。自分がギンガを『押し倒す』形になっている事に……………

「あ……………いや、こ、これはだな……………」

「あ、いや、その、助けてくれて、あ、ありがとう……………」  
「ごいます……………」

飛び退くアナスイに対して、顔を真っ赤にしながらも感謝するギンガ。

「うん？なんだこの矢？」

両者に気まずい空気が流れる中、アギトは矢の内の一本に『手紙』が付いているのに気づく。俗に言う『矢文』だ。

「……………で、お前はいつまでギン姉に引っ付いてんだ？おらアツ？」

だが、アナスイはそれどころではないようだ。偶然目撃したらしいスバルが、鬼のような形相でアナスイに迫っていたからだ。

尚、スバルが見たのはアナスイがギンガを押し倒した（ように見えただけ）所だけなので、経緯は知らず、結果のみでこの行動にでて





「あれ？そういえばリインは？」  
「もうあんなことしちゃダメですよ〜？」  
『『『ハローイ。』』』  
「仲良しになってるッ!？」

嵐山

ホテル嵐山

「やっぱりセインの姐さんを襲った奴の仕業に違いねえよ兄貴!!」

「うん……………」

「やっぱり、スタンド使いと魔法使いが手を組んだのかな……………」

ロビーの一角でネギ、カモ、スバル、仗助が話し合う。

清水寺では、地主神社では落とし穴を仕掛けられあやかとまき絵が巻き添えにあい、さらに音羽の滝には『酒』を仕込まれたために、あやかを含めた数名が酔いつぶれてしまった。

「ネギーー！」

「あ、アスナさんたち。」

そこへ、明日菜、徐倫、千雨、刹那がやってくる。

「とりあえず、酔った人たちは部屋で休んでると言っておまかしましたが……………」

「やっぱりスタンド使いたちか……………」

「多分……………リイン曹長やアギトもスタンドに会ったって言ってるし、間違いないと思う……………」

「（アススイさんは数えないんだ……………）セインさんが会ったっていうスタンド使いというのが気になりますね……………」

ネギがそう言うと、仗助は近くに置いてある小さめの冷蔵庫に近づく。……………冷蔵庫？

「……………だそうだとセイン。どんなやつだった？」

仗助が言った後、冷蔵庫の扉がひとりでに開き、中からセインがズ

ルーーつと出てくると、ネギたちもズルーーつとずっこけた。

「……………なんで私が冷蔵庫の中にいることがわかったの？」

「お前、頭脳がまぬけか？冷蔵庫の中身を全部外に出して……………」

「いや、それ以前にホテルのロビーに冷蔵庫があること自体おかし  
いだろツ！どっから持ち出したんだ冷蔵庫こなものツ！？」

いち早く復活した千雨が、セインと仗助のやりとりにツッコむ。だ  
が、

「まったく、だからよそうって言ったんすよ。」

「おめーもノリノリだったじゃねーか！」

「まあ、不自然だとは感じてたけど……………」

「大丈夫ですかお嬢様？」

「うん、平気。」

「つてお前らもいたのかよツ！？」

「どーやって入ったのこんな人数！？」

「オレとセインの能力だ。」

ナンバーズやルーテシア、ブチャラティが冷蔵庫からぞろぞろと出  
てきたために、千雨と明日菜は声を荒げて叫んだ。

「あれ？オットーは？」

「部屋で休んでるよ。ティアやギンガが見てるから、大丈夫だと思  
うよ。」

スバルの質問に答えるディエチ。どうやら、昼間ウエンディたち  
におもちゃにされて疲れたらしい……………

「で、そのスタンド使いつてのはどんな奴だった？」

「あ、うん。ええーと……………背はチンク姉と頭一つ高いくらいの小柄な人で、天然っぽい金髪だけど、日本人だったよ。」

「随分小さい人なのね……………」

「で、スタンドはチンク姉くらいの大きさで、むき卵みたいにつるんとした頭で……………」

「いちいち私で例えるな……………ネギとかでもいいだろ。」

「あ、ゴメン……………」

『小さいもの』の例えに使われた事に頭がきたのか、セインに文句を言うチンク。

「で、頭に車のハザードランプみたいのがたくさん付いて……………」

「ん……………」

「あれ？」

ふと、スタンドの象ヴィジョンの特徴に見覚えがあると感じた徐倫と千雨、そして仗助。そして

「あ、後腰の布に『3』って描いてあったよ！」

「『『エコーズ』ウウウウツ!?』……………」

それは、最後の特徵で確信へとなった。

突然3人が叫んだため、ネギたちは驚いた。

「せ……………『背が低くて』『重くするスタンド』で『3』って言

「つたら……………」

「康一の『エコーズ』しかねーよ……………」

「えっ？3人ともそのスタンド使い知ってるんですか？」

「ああ……………オレの親友の『広瀬 康一』ってやつだ。何で京都にいるかは知らないが、とにかく敵じゃあないぜ。」

「ええっ!？」

今まで敵だと思っていたスタンド使いが、実は仗助の親友だときいて、再び驚きの声を上げる一同。

「それじゃあ、攻撃してきた理由も分かるな。いきなり新幹線に『ツバメ』が、しかも『手紙をくわえて』いたら、不審に思うのは当たり前だ。」

「確かに……………セインさんじゃなくて、式神を攻撃したのか……………」

仗助の言葉から、ブチャラティと刹那が頷く。だが、セインはあることに気づく。

「……………あれ？じゃあ何で記憶がないんだ？」

「……………それにも心当たりがある……………出来れば魔法のことは知られなくなかったが……………」

「えーと、『ホテル嵐山』……………うん、ここだな。」

ぼく（広瀬 康一）は今、京都は嵐山にあるとあるホテルへ、同行した『彼』と来ている。

さて、何故ぼくらがこんな所に来ているのか、まずはその話をしよう。

事の発端は一週間前に遡る。

一週間前、今まで我が家に居候していた彼の収入がようやく安定したため、我が家から出てマンション暮らしになる事になったのだ。そうしたら彼は、『今まで転がり込んでいたお詫び』と、ぼくを京都への取材に旅行として連れて行ってくれと言い出した。

そして今朝、出版社に寄っていた彼と『大宮駅』で合流して東京駅から新幹線に乗ったのは良かったが、飲み物を買いに通路へ出たばかりは、何故か新幹線内を飛ぶ『ツバメ』に遭遇したのだ。しかも、口には何やら大きい封筒のようなものをくわえているではないか。ぼくはそれが『スタンド』<sup>スタンド</sup>によるものだと直感し、自分の能力

『エコーズACT3』<sup>アクトスリー</sup>の技、その名も『エコーズ3FREEZE』<sup>スリーフリーズ</sup>でツバメを『重くした』のは良かったが、突然新幹線の壁から『女の子』が『生きてきた』のだ！しかも、たった今『3FREEZE』

をかけたツバメを掴んだため、女の子の手は床にめり込んでしまっ  
た！

ぼくは女の子に話しかけようとしたが、突然、彼女の体が『めくれ  
た』ではないか！振り返ると、いつのまにやら『彼』がいた。彼の  
スタンド『天国の扉』ヘブンズ・ドアーの作業らしい。

彼は早速、『本』になった女の子に書かれた『情報』を読み始めた。  
ぼくらは最初、彼女をぼくたちと同じスタンド使いだと思っていた  
が、実際はぼくらの予想の斜め上を行っていた。

何と彼女（読んで分かったが、名前は『セイン』というらしい）は  
『魔法』が存在する異世界『ミッドチルダ』で生まれた『戦闘機人』  
という生体兵器、いわゆるサイボーグだということではないか！しかも、  
ぼくらの乗ったこの新幹線に乗っている麻帆良学園の生徒の中にも、  
何人か『魔法使い』がいると聞いて、彼の目には希望とやる気がム  
ンムンわいていた。こうなった彼は、もうどうにも止まらないこと  
を、ぼくは知っている。漫画の『ネタ』にするために、彼女や、他  
の魔法使いたちを追い回すに違いない。

ふと、大勢の足音が聞こえた。誰か来たらしく、彼はセインに『今  
あった事は全て忘れる』と書くと、『ヘブンズ・ドアー』を解除し  
てぼくと一緒にそそくさと退散していった。

そこからは、京都を観光しながら彼女たちの後をつけていき、清水  
寺から慌てるようにバスが出てしまったため、彼女たちが宿泊して  
いるホテルを突き止め、現在に至るわけだ。

「はあ、何で私が……………」

ふと、髪を鈴の付いたリボンでツインテールにした女の子が出てくる。すると彼は、彼女に話しかけた。

「やあ、君、麻帆良学園の生徒かい？」

「？何よあんた？」

「ああ、僕は漫画家の『きしへ岸辺 ろはん露伴』という者なんだが、君らの学校に『子ども先生』がいるときいてね。少し取材をしたいのだが……」

彼 露伴先生が彼女に聞く内容には、何らおかしい点はない。むしろ自然なくらいだ。

「ふーん……？そういえば聞いた名前ね、岸辺 露伴って………確かにその子ども先生はウチの担任ですけど」

彼女がそう言いかけた途端、

ドギユウウウーーン

露伴先生のスタンド、ヘブンス・ドアが発現し、女の子は本になっってしまう！

「……って！いきなり何やってるんですか露伴先生ッ！？」  
「いや何、彼を取材する前に、彼の印象を知りたくてね。もちろん、『魔法使い』としての、ね。」



そう言うと露伴先生は、本になった衝撃で気絶した女の子に近寄り、本のページをめくろうとして、その手が止まった。

「……！な、何だこの子はッ！？」

「？？どうしたんですか？」

「ば……バカな……僕の『ヘブンズ・ドア』には嘘は付けない……だが！これは……この『神楽坂 明日菜』の記憶は……」

「大半が『袋とじ』になっていて！ほとんど読むことができないッ！……」

ぼくは今になって思う。

それが世界の存亡を知る、

ほんのささいなきっかけだったと……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
. . .

## # 42 / 京都観光中異常発生中（後書き）

42話です。

・サブタイトルは、荒木先生の短編『死刑執行中脱獄進行中』から。  
・やっぱりウエンディたちなら、舞妓はんになってハシャグはずだろうと思いました。そして、それに巻き込まれるオットーもお気に入りです。

・ピストルズ登場。あいつらなら、リインと仲良くなれるはずだと思います（笑）

・新ジャンル「ギンアナ」（笑）二人の進展は、今後アナスイが認めたくないくらい親密になっていくかと（笑）

・冷蔵庫から出てくるセインは『呪いのデーボ』から（笑）今回のお気に入りです。

・康一&露伴登場、そして、終盤は康一目線です。康一は4部での狂言回しな役割でしたので、今回少しやらせてみました。

・「魔法等で記憶を封印された人がヘブンス・ドアで本にされたら、一体どんな風になるのだろう？」と、ある日考えた時がありました。そして行き着いた考えが、今回の『袋とじ』です。明日菜の記憶にどんな謎があるかは、今後の展開をお楽しみに。

では！

#43 / 京都で生まれたならず者 ? (前書き)

ネギたちがにいるホテルへ、漫画家岸辺 露伴が来る!

一方、関西呪術協会には……………

### #43 / 京都で生まれたならず者 ?

「ちょっとあんさん！聞いてませんえ！！何やあの人数はツ！？」

京都のどこかにある部屋、そこでメガネをかけた黒い長髪の女性が、目の前の女性につっかかる。

「おまけに『管理局』までおるやないか！ほんまに大丈夫なんですしやるなツ！？」

「大丈夫よ。やつらの主力スタンド使いのうち、数名は酔いつぶれてぐっすりだし、一番厄介な空条 承太郎も、今は関東……そして我がスタンド使いたちとあなた方呪符使いや神鳴流剣士が手を組めば、最早敵なし！」

「……………その言葉、信じてええんですな？」

メガネの女は、疑いの眼差しを女に向けながら問う。

「ええ。最も、私の目的は果たせてもらうわ。あの二人は別行動になるけど、ウエストウッドを着かせるわ。」

女が『左側の右手』をやった先には、角刈りにした髪と鍛え抜かれた体をした男と鷲鼻で長髪の男、そして奇妙な仮面を付けた二人の男女がいた。

そのうちの一人、仮面の女の手には、一振りの刀が握られている。

「頼んだわよ、『アヌビス神』！」

#43 / 京都で生まれたならず者？

「うーむ、分かん。だが、だからこそ、僕の『好奇心』をくすぐるんだよなあー！。それが『人の性<sup>さが</sup>』というべきものだ。僕はそう思う！」

先ほどから露伴は、『本』にした明日菜のページをめくりながら、そう呟いていた。

「あの、露伴先生………そろそろこの子戻した方がいいんじゃないか………？」

「何を言っただ康一くん！こんな事、今までなかったんだぞ！僕の『ヘブンス・ドア』で開いた記憶がこんなものなんて………ん？」

ふと、露伴はあるページに目が止まる。そこには、こう書かれていた。



ではなく『エンゼル』の小太刀を突きつけて脅す。

「わ……………分かったよ。分かったから、小太刀それは下げてくれ……………  
……………ちえっ。」

「ちえって言った？今ちえって言ったかコラ！？」

露伴は千雨のスゴみに気圧され、残念そうに明日菜を戻すのだった。

ホテル嵐山

ロビー

「『岸边露伴』？」

「ああ、97管理外世界じゃあ結構有名な漫画家で、俺の実家のあ  
る『杜王区』に住んでんだが、8年前にスタンド使いになってな。  
その関係で知り合ったんだ。」

「へえ、東方先生って、漫画家さんと知り合いなんですかあ。」



「仗助がミッド組に露伴について話す中、ネギは尊敬の眼差しを仗助に向ける。」

「そんな良いもんじゃねーよ……アイツわがままで強引な奴でよ  
おー、漫画を面白くするための『リアリティ』を追求するために  
『奇行』に走るときまであるし……」

「ふんっ、ぼくの漫画の良さが分からない君に言われたくないね！」  
不意に、入り口の方から声がした。振り返ると、小柄な男と、二十  
代後半の男を連れる徐倫と千雨がいた。

男は筆のような黒髪に、ギザギザの緑色のヘアバンドを付け、イヤ  
リングやジャケットのボタン、さらにはベルトのバックルには『ペ  
ン先』を模したアクセサリを付け、肩にはスケッチブック、首に  
は一眼レフカメラを下げている。

「じよ、仗助くん……」

「やっぱりお前か、露伴……康一も久しぶりだな。」

「つて、あぁ……お前は『大宮駅』の!？」

「ん？君はあのときの……」

ノーヴェに叫ばれて、露伴も気づいた。この少女（ノーヴェ）は、  
大宮駅でティアナと一緒に露伴に詰め寄ってきた少女だと。

「あ……あなたが『岸边 露伴』なのか……?」

「いかにも。ぼくは岸边 露伴、漫画家だ。」

「大体の話は康一さんと露伴先生に聞いた。『取材』で京都に来る  
途中、あのツバメを見かけたそう。後はチンクや桜咲の推測通り、  
セインじゃなくツバメを攻撃して、セインを『本』にしたそうだ。」



「おめーらも興味示してんじゃねーよッ!」  
スパパパソコン

露伴の読み上げる千雨の情報に興味を持ち、のぞき込もうとする明日菜とネギに、『しんどいわ!』と書かれたスリッパによる連続ツッコミを放つ徐倫。

「……………スリッパ、何種類持ってるの?」

「全部で8種類だ。」

「結構あるんだね……………」

「さて、結構面白い情報が得られたなあ〜。『URL』『メモ』  
たし、後でじっくり観覧してあげるよ、『ちうたん』」

露伴はそういうと、ページの端に『今起きた事はすべて忘れる』と  
書くと、『ヘブズ・ドア』を解除する。  
解除すると同時に千雨は目を覚ます。

「ああー、こいつの『ヘブズ・ドア』か?それは  
だなあ……………」

「いや、もういいです……………」  
「……………?」

だが、本当に『何も覚えていない』らしく、『ヘブズ・ドア』  
の説明をしようとするが、ネギにもういいと言われてしまい、不思議に思う千雨だった。

長谷川 千雨 後になって『ヘブンズ・ドア』に自分がかけられた事に気づいた上、露伴やネギたちに『ちづ』の事がバレた事を知り、必死で口止めをするハメになった。

ホテル嵐山

露天風呂

「……ふいひい……」

「ちよつと3人ともー、何かおやじ臭いよ？」

「そうだぜ？東方のダンナはともかく、兄貴やエリオの坊ちゃんまで……」

おやじ臭く息を吐くネギ、仗助、エリオの3人に苦笑する康一とカモ。

現在は麻帆良学園の教師たちの入浴時間だが、康一、露伴、エリオ、ブチャラティの3人は、こっそり湯に浸かっていた。

「しかし、疑っちまってすまなかつたな康一に露伴のダンナア。」  
「いや、いいよ。スタンド使いたちとの連戦で、疑心暗鬼になってたんだよね。（スタンドに長く関わってきたとはいえ、オコジヨと普通に話してるぼくって……………）」

「まあ、オレも昔『ト二オ』の奴を疑った事あるしな……………」

かつて、スタンド使いとの連戦でスタンド使いの料理人『ト二オ・トサルデー』を疑った事を思い出す仗助。

料理に混ざり、料理に含まれる成分で人の体を健康にするスタンド『パール・ジャム』の使い手である彼は、「うまい料理を食べさせたい」という思いでスタンドを使っていた。仗助と康一の友人の虹村億泰むいすけ曰く『天使のような料理人』だ。

「所で、さつき『神楽坂 明日菜』の記憶を読んだんだが……………ん？」

仗助たちに話しかけた露伴だが、彼の元に、湯船に浮かんだ『桶』が流れてくる。桶にはお湯が張られており、中には

「あれ？ネギにエリオたち。」

「みんなも入ってたですか？」

リンとアギトが浸かっていた。

「り、リン曹長！？」

「何で2人が……………はっ！？」

いきなりの闖入者に驚くネギとエリオだが、露伴と康一が2人を凝

視しているのに気づく。

「……………しゃ……………喋るオコジヨの次は……………よ、『妖  
精』!?!」  
「……………へええ……………」

驚いて口をパクパクさせる康一。対して露伴はと言つと

ガシッ

「へうッ!?!」

「ずいぶん小さいなあ……………一体どついう構造なんだ……………  
……………?」

「へ?あ、あの……………ひあうッ!?!」

リインを掴んで、あちこち触り始めた。端から見たら、アブナイ光景だ。

「て、てんめエエ……………」の

それを見ていたアギトは、両手に火球を出して露伴に投げつけようとするが

「……………この変態がアアアア……………!」  
ドグシャア

「へぶツ!？」

それよりも早く、徐倫とスバルの跳び蹴りが飛んできた。すると、少し困惑した様子の刹那も入ってくる。

「ナ、ナカジマさんに空条さん……………ってネギ先生!？」

「え?何でネギくんや東方先生が!？」

「今は教師の入浴時間だよ。聞いてなかったのか？」

あきれ顔で、鼻血を出す露伴を『治し』ながら三人に聞く仗助。ちなみにネギ、エリオ、康一は、三人をみないように背を向けていた。

「……………というか、ここは男湯じゃあなかったか？」

「多分、脱衣場だけ男女別になった『混浴』だな。」

ブチャラティの疑問に、スバルと徐倫の裸体を見て鼻息を荒げながら答えるカモだが……………

「……………」

ドガアッ

「ぐおあっ!？」

徐倫に無言で踏みつぶされた……………

「ったく、このエロオコジヨは!」

「すみませんでした先生方。すぐに出ますので」

刹那がネギたちに言い掛けたその時。

「ひゃあああ~~~~~ッ」

「!?!」

「い………今は『このかさんの』!?!」

「『このかお嬢様』ッ!?!まさか奴ら、このかお嬢様に手を出す気か………ッ!?!」

「え? 『お嬢様』………?」

刹那の木乃香の呼び方に違和感を覚えるが、今はそれどころではない!

「お嬢様ッ!?!」

「桜咲!?!」

「兄貴!きつとまた『関西呪術協会』の嫌がらせだぜッ」

「う、うん!脱衣所の方から聞こえたよ!?!」

駆け出した刹那に続き、ネギや徐倫、スバルも駆け出す。

「お嬢様ッ!?!」

「大丈夫ですかこのかさん!?!」

そして、脱衣所で四人が見たのは

「~~~~~ウキッキ~~~~~」

「いやあ~~~~~ん」

「ちよっ………ネギ!?!何かおサルが下着を………ッ!?!」



「おい神楽坂！こいつらお前の『親戚』だろ！？何とかしろッ！！」  
「ちよつと千雨ちゃん！それどういう意味ッ！？」  
ズルッ

こザルに下着を奪われそうになる明日菜、木乃香、千雨の三人がいた……………

「ええっ！？一体コレは……………！？」

「こ……………このこザルども……………！！このかお嬢様に何をするかあああああアッ！？……………斬るッ！！」

こザルが木乃香を辱める様（ように刹那には見えたが、実際は下着を取っただけ）を見て、いつの間にか抜刀した野太刀『夕凧』を構える刹那。

「きやつ！桜咲さん何やってんの！？剣<sup>それ</sup>ホンモノッ！？」

「ちよ、ちよつとダメですよ桜咲さん！」

「そうだよ！！おサルを斬ったらカワイそうだよッ！！」

「な、何するんですか2人とともに！？こいつらは低級な『式神』です！斬っても紙に戻るだけで……………」

こザルを斬ろうとする刹那を止めるネギとスバル。刹那は困惑しながらも説明するが……………

「オラアッ！！！」

ドグシャアッ

「ムギヤアッ」

「空条さんッ！？」「」

隣で徐倫の『ストーン・フリー』が、思いつきりこザルをブチのめ

していた。

「……………確かに、紙に戻るだけだな……………スタンドを殴ったような感触に似てるが……………」

「！おい、お前らがバカやってる間に近衛が……………」

「ひゃあ~~~~~!?」

「~~~~ウキキ~~~~」

「お嬢様ツ!!」

こザルに連れていかれる木乃香に向かい、刹那は夕凧を構えながら駆け出す！そして

「まことに勝手ながら、助太刀いたすぜツ!!」

「……………！感謝します！神鳴流奥義ツ!!」

「双燕天翔流奥義ツ!!」

ズザザザザザンツ

「百烈桜華斬ツ!!」

「雷鳴月華ツ!!」

「~~~~ムギアアアアアツ!!」

刹那と千雨の広範囲攻撃により、こザルたちはただの紙に戻る！

「桜咲さんツ」

「木乃香は無事か……………!!」

不意に、徐倫は近くの木に気配を感じる。すかさず近くにあった風呂桶を持ち、投げるフォームに入る！

「そこオツ!!」

ギアアアンツ

「……………フン。」

ガサッ

「えっ?」

「……………チツ、逃がしたか……………」

だが、投げられた風呂桶よりも早く、その気配は逃げていったようだ。

「すみません長谷川さん。しかし、今が……………」

「せ、せつちゃん……………なんかよー分からんけど、助けてくれたん

?あ、ありがとう。」

「!あっ……………いや……………」

千雨に礼を述べる刹那だが、木乃香に礼を言われて、顔を赤くする。そして、

バシヤアッ

「ひゃっ!?せ、せつちゃん!?」

抱いていた木乃香を離してしまい、そのまま走り去ってしまった…

……

「???何だ今のは……………?」

「さあ……………?(曹長、今のうちに。)」

(はいです。お願いします、ブチャラティさん。)

「……このか……やっぱり桜咲さんとは何かあったの……?」  
「……うん、アスナや徐倫にも、ちゃんと話してへんかったよね……」

風呂から上がったネギたちは、木乃香から話を聞いていた。

木乃香は、麻帆良に来るまでは京都にある広くて静かな屋敷で育ったのだが、山奥にあったため友達が一人もいなかったらしい。

そんなある日、屋敷に客人（後で刹那に聞いたら、『神鳴流』の師範だったらしい）と共に、刹那が付いてきたのだという。

刹那と木乃香は仲良くなり、当時から剣道（神鳴流）をならっており、怖い犬を追い払うなど、危ないときは守ってくれたりもしたらしい（ネギたちは、今も守っているように思えたが……）。

だがその後、刹那は剣の稽古で忙しくなり、あまり会わないようになったまま木乃香が麻帆良に引越す、中一の時刹那も麻帆良（トキ）に来

て再会出来たのだが

「……………何かウチ、悪いことしたんかなあ……………せつちゃん、昔みたく話してくれへんよーになってて……………」

「このか……………」

「……………」

淋しそうに話す木乃香に、ネギたちは何とも言えない表情になる……………

……………

木乃香が部屋に戻り、ネギ、明日菜、スバル、徐倫は、部屋にいなかった刹那を探すことにした。

「……………このかさん、淋しそうでしたね……………」

「うん、普段のこのかなら、あんな顔絶対にしないもんね……………」

「あ……………そういやあ、中1ん時、ちょっと落ち込んだ事あったかな……………?」  
「そういえば……………水くさいなあ、何にも話してくれなかったなんて……………」

四人が話していると、前からウエザーが歩いてくる。

「……………ネギくんか。A組の奴ら、修学旅行初日の夜にしては静かだな……………まあ、他の客に迷惑にならないからいいがな。」  
「そ、そうですね……………。騒がせどころか、みんな寝ちゃいましたからね……………(お酒で……………)」  
「……………今回、また何やら大変らしいな……………俺でよければ、いつでも呼んでくれ。」  
「あ、はい！ありがとうございます、ウエザー先生！」

ウエザーはそう言うと、また見回りに歩いていった。

「……………ウエザー先生のスタンドって、「天候を操る」んだっけ？」  
「ああ。結構強いぜ。でも、先生には悪いが、出る間もなく終わっちゃまつかもな」

徐倫がそう言うと、スバルやネギは苦笑する。

この後日、実際にウエザーの能力に助けられるのだが、それはまた別の話。

ホテル  
入り口

「あー、好奇心で聞くんだが桜咲くん…それは、何をしているんだい？」

脚立に乗り、入り口の上部に『呪符』を貼っていた刹那は、不意に後ろから話しかけられて振り返る。そこには、浴衣に着替えた露伴がいた。

「……………露伴先生ですか。これは「式神返し」の結界です。」

「ふう〜〜ん……………」

(……………漫画家というのは、みんなこんななのか……………？東方先生は、このまま私たちに『取材』と称して着いてくる気だと言っていたが……………大丈夫なのか？この人を巻き込んで……………)

興味深そうに呪符を見つめる露伴に、刹那は不審な顔になる。

仗助や徐倫には聞いていたが、『漫画のネタ』になりそうなものを見つけたら、自分が大げがしようが、ヒドイ目にあおうが、死なない限りあらゆる体験を「作品に生かそう」とするらしい。

『芸術家気質』とでも言うのだろうか？刹那には露伴の漫画に対する情熱が分からなかった。

「あ、いたいた、桜咲さん！」

「あ、露伴先生もいましたか……………」

そこへ、ネギたちがやってくる。それに続くように、チンクや仗助たちもロビーに集まってきた

「それ、『呪符』だよな？桜咲さんも『日本の魔法』を使えるの？」

「ええ、剣術の補助程度にですが……………」

刹那の説明を聞き、スバルは『ベルカ式』に近いものだと、自己解釈した。

「<sup>ヤツラ</sup>関西呪術協会の嫌がらせがかなりエスカレートしてきました……………このままでは、このかお嬢様にも被害が及びかねません……………」

「そうだな……………それに、アギトたちが『露伴先生以外のスタンド』に出会ったと言ってた……………『デイド』の事を含めると、『左手が右手の女』が絡んでいる可能性もある。」

刹那の話に、チンクが付け足す。

「桜咲、オメーも京都出身と聞いた。襲ってくる敵について、知っていることを教えてくれ。」

「敵は恐らく、『関西呪術協会』の一部勢力で、『陰陽道』の『呪符使い』、そして、それが使う『式神』です。」

仗助に言われ、刹那は話し始めた。

呪符使いは古くから京都に伝わる日本独自の魔法『陰陽道』を基本としているが、『呪文』を唱える間無防備になる弱点はネギたち『



西洋魔術師』と同じらしい。

故に、西洋魔術師が『従者』パートナーを従えているように、上級の術者は『善鬼（前鬼）』や『護鬼（後鬼）』という、強力な式神をガードにつけているのが普通だという。

さらに、関西呪術協会は、刹那の『京都神鳴流』と深い関係にあるらしく、呪符使いの護衛に神鳴流剣士が付くこともあるらしく、そうなたら非常に手強いという……

「……………それに、先ほどチンクさんも言っていました、今回は『スタンド使い』も関わっている可能性もあります。そうなたらもう……………」

「な……………なんかヤバそうだね……………」

「……………今の話からすると、神鳴流は『敵』と考えていいのか？」

徐倫が問いかけると、刹那はうつむく。

「はい……………彼らにとってみれば、西を抜けて東に付いた私は言わば『裏切り者』……………でも、私の望みは『このかお嬢様をお守りする』ことです。仕方ありません……………私は……………お嬢様を守れば満足なんです。」

それを聞いて、先に口を開いたのは今までメモを取っていた露伴だった。

「ん……………漫画のキャラクターにしたら好かれるタイプだよ、君はッ！！」

「露伴先生……………」

「よーし、分かったよ桜咲さんッ！！」

「桜咲さんがこのかの事嫌ってなくてよかった！それが分かれば十分！！私たちも協力するよッ！！」

「か……神楽坂さんたちまで……………」

露伴に続き、明日菜とスバルが刹那の背中をバンバンたたきながら言う。

「やれやれだわ……………決まりね！」

「はい！関西呪術協会から、クラスみんなを守りましょッ！！」

「「おオーーーーーッ！！」」

ネギがそう言うと、それに賛同するように、スバルたちが叫んだ。

ロビーのネギたちの様子を、離れた場所から見ていた陰が二つあった。

「さて、こちらも動きましょつか……………ホル・ホース、ジョルノさんたちに連絡を。」

「はいよ、お嬢様。」

彼女　　ルル・ベルも、動き出す準備が整っていた……

t o b e c o n t i n u e d . . .

### #43 / 京都で生まれたならず者 ? (後書き)

43話です。

・サブタイトルは「砂漠で生まれたならず者」から。ちなみに『太臈もて王サーガ』の帯にも、同じタイトルがありました(笑)

・アヌビス神再び。誰に憑いたかはお楽しみに。

・ツツコミ用スリッパの元ネタは言わずもがな(笑)

・露伴にとって『魔法』は宝の山ですから、色々やります(笑)あ  
の後、S・フィンガーズでこっそり脱出しました。

・この小説では千草の一派と『両右手の女』勢は組んでいるため、  
スタンド使いが何人もいます。スバルやネギたちには、いくつもの  
激戦が待っています。

・動き出すお嬢様たち。彼女たちの目的も、次回から徐々に明らか  
になります。お楽しみに。

では！

#44 / 京都で生まれたならず者 ? (前書き)

徐倫たちが団結する中、関西呪術協会の魔の手がせまる  
!

#44 / 京都で生まれたならず者 ?

「さてと、話がまとまった所で、ネギ、オレとお前で外の『見回り』だ。」

「あ、そうですね！」

仗助に言われてついて行くネギ。

本当はまき絵の『グロウン・キッド』とパンデモ……もとい、のどかの『イノセント・スターター』に外を見てもらおうと考えていたのだが、2人は音羽の滝で酔いつぶれてしまったため、今はぐっすりだ。

「じゃあ桜咲やスバルなんかは各班室を見回ってくれ。後露伴、お前は不審な動きをするヤツを見かけたら」

「大丈夫だ。問答無用で『本にする』よ。」

( )( )ていうか、露伴このひとの方が不審者なんじゃあ……………？)( )

声には出さないが、明日菜たちはさり気なく失礼な事を考えていた

……

「東方、私もついて行こう。」

「チンクさん。」

「そうか、別にいいぞ。」

( やっぱり眼帯の姐さん…………… )

チンクを加えた3人は、入り口に向かう。カモは何やら勘違いしたようだが……………

「……………ところで東方、以前から気になっていたのだが……………」  
「ん？なんだ？」

チンクに話しかけられ、仗助が振り返った矢先

ドシン

「きゃあッ！？」

「うおッ！？」

タオルの入っているワゴンを運んでいた女性と衝突してしまった……………

「ご、ごめんよ……………」

「いえ、こちらこそ申し訳ありませんお客様！」

幸い、中のタオルは無事だったため、女性はそのままホテル内に入っていた。

「大丈夫ですか東方先生？」

「何をしているんだお前は……………」

「いや、お前が話しかけるから……………」

3人が話すのを、女性はメガネを直しながら見ていた。

「ふふ……………入れてくれておーきに。」

「ウキッ」

「ウキキッ」

「ムキヤキヤキヤッ」

彼女が怪しく笑う中、『こザル』が何匹かワゴンから顔を出していった……………

#44 / 京都で生まれたならず者？

現在、『ホテル嵐山』には麻帆良学園の生徒以外にも、一般の客が泊まっている。その中には、六課やナンバーズたちも含まれており、明日菜たちとは別の階に5部屋取っていた。

「じゃあ、その『岸边 露伴』って人は『味方』なのね？」  
「ん~~~~」……まあ、味方っちゃあ味方だな……信用しているかどうか『灰色』の人だけ……あ、康一さんは信用しているから。」



偶然部屋から出てきたティアナたちに、徐倫とスバル、刹那の3人は、歩きながら露伴たちのことを話していた。

「…………でも、大丈夫なんですか？その人を巻き込んで？」

「あ~~~~、平気平気。止めでも絶対着いて来るし…………それにあいつ、下手したら親父より強いし。」

「…………え！？…………」

徐倫の話に、5人は思わず声を上げる。

千雨に以前聞いた話では、承太郎は『史上最強のスタンド使い』と謳われるほどの実力者らしい。

それよりも強い露伴とは一体……………？

「あれ？」

ふと、トイレの前に明日菜、夕映、千雨、そしてアキラがいることに気づく。

「アスナ、どうかしたの？」

「あ、徐倫。」

「……………このかさんがなかなかおトイレから出てこなくて……………」

かなり我慢している様子の夕映が話す。

どうやら千雨たちは、ふたりの様子が気になったらしい。

コンコンッ

「お嬢さま、大丈夫ですか!？」

「……………このかさん!私もう~~~~……………」

『入つとりますえ〜』  
「「……………」」

ノックしたことで木乃香がいることは確認出来たが、千雨と徐倫は違和感を覚える。  
そして、

「こ……………このかさん……………」  
ドンドンドンッ

『入つとりますえ〜』

「……………！！！！」

それは、夕映の激しいノックにより、『確信』へと変わった。

「……………神楽坂さん、空条さん！」  
「うん。」

三人は確認すると

「オラアッ！！」

「お嬢様、失礼をッ」  
バキィッ

トイレのドアを蹴り開ける！

『入つとりますえ〜』

「！これは……………」

「お……………お札』が『喋ってる』ウウウウウ！？」

そこには木乃香の姿はなく、代わりに『呪符』が便器に張り付いて

おり、そこから声が発せられていた。

「しまったア！」

「『騙された』アアアア！！！」

「な……………何でもいいから、このかさんいないなら私におしっこさせてください……………！」

ホテル嵐山の側にある渡月橋のたもとには、仗助、ネギ、チンクの3人がいた。

「で、話つてのは何だ？」

「ちよいとちよいと姐さん……………、<sup>アニキ</sup>子どもの前でたあ、見かけによらず大胆なんすねエエ……………」

カモが何やら勘違いしてムツホムツホと嫌らしい笑みをする。

「？何の話か分からないが、東方、お前のその『首のキズ』なんだ

が。  
「えっ？」

チンクに言われて、ネギとカモは、仗助の首に比較的新しいキズがあることに気づいた。

「以前『セツコ』の奴に蹴られた時のキズだな……………お前の『クレイジー・ダイヤモンド』は、『自分のケガ』は治せないのか？」  
「……………お察しの通り、『自分のスタンド』で『自分のキズは治せない。』」  
「な……………ッ!？」

仗助の告白に、ネギとカモは驚愕する。

「そ、それじゃあ、東方の旦那がやられたら、一体どーするンスか!？」

「……………誰かが治すか、死ぬかだな……………」

「そんな……………」

「……………誰か『治癒魔法』が使えばいいんだが……………『シャマル殿』がいれば話は早い……………」

チンクが呟いた時、ネギのケータイが鳴った。

「……………アレ?アスナさんからだ。」  
ピッ

「……………ネギごめん!!このかがゆーかいされちゃった!!」

「えエ……………!？」

「……………ッ!？」

ネギに話しかけようとしたチンクだが、不意に気配を感じる。頭上うへ

からだ。そちらを見上げると

「　　！あれはッ！？」

「「え？」」

ズシンッ

「うおっ！？」

「……………お、おサルッ！？」

デカイサルが降ってきた。だが、よく見ると何か『人』らしきものを抱えている。  
それは

「あら、さつきはおーきに。かわいい魔法使いさん」

「！！このかささんッ！？」

「何イ！？」

「ほなさいなら。」

「ま、待て！！」

木乃香だった。ネギたちは立ち去ろうとするサルを止めようとするが、

「もがッ！？」

「こ、コイツら……………！！！？」

「ザルにじゃまされてしまい、逃亡を許してしまつ。」

「ドラララララララアアア！！！！」

「『<sup>タスク</sup>牙』！！！！」

「ステインガーツ!!」  
ドガガガアッ

何とかこザルたちを撃破した三人だが、木乃香を抱えたサルは、すでに橋の真ん中辺りだ。

「ネギ!」

「ネギ先生!!」

「チンク姉!」

そこへ、明日菜や徐倫、刹那、千雨、アキラやスバルたちフローワード、更にノーヴェやアナスイが来た。

「アスナさん!」

「すまない、姉がいながら、逃がしてしまった。」

「追っわよッ!!」

「ああッ!!」

すぐに追おうとする一同だったが、ノーヴェが何かに気づく。

「……………? ちょっと待て、何か聞こえるぞ……………?」

「え?」

言われて一同は耳をすますと、何やらバイクのエンジン音が聞こえた。それも、一つや二つではない。

「すごい沢山のバイクのエンジン音だな……………暴走族か?」

「京都にもいるの?こんな時に、関わりたくないわね……………」

ティアナがそう呟いた時、スバルは橋の方を見て、目を見開く。







「どつでもいいのッ!？」  
「どつします?」手に別れるなら……………」

ネギがそう言い掛けたとき、千雨がどこかを見つめているのに気づいた。

「……………長谷川さん？」

「悪い先生、私は行けない。」

「「えッ!?!」」

「何せ、『お客さん』の相手しなきゃなんないからなあああー  
……………」

千雨が見つめる先には、いつウイングロードに乗ったのか、フェンシングの防具のようなデザインのもの、のっぺりとした仮面を付け、陣羽織に胴当てを身に纏った女がいた。そしてその手には

「なあ、『アヌビス神』？」  
「「「「「!?!?!」」」」」

妖刀と化したスタンド『アヌビス神』が握られていた……………

「……………一目で私と気づくとはな。約束通り、貴様に果たし合いを申す!」

「約束した覚えはないが、受けて立つぜエ……………『アンバーサリー・オブ・エンゼル』ッ!?!」  
ドンッ

言うと、千雨は『アンバーサリー・オブ・エンゼル』を身に纏い、アヌビス神目がけて突っ込んだ！

「長谷川さん！」

「アヌビス神は千雨に任せよう。チンク、念のために千雨のところに行ってくれ。」

「……分かった。」

アヌビス神と激しく交戦をする千雨を見ながら、徐倫はチンクに言う。

その後、簡単なながらも話し合った結果、ネギ、仗助、明日菜、徐倫、スバル、刹那で木乃香をさらったサルを追い、残りでアキラとアナスイを助けることとなった。

スタンド名 バイシクル・レース

本体 不明

桂川 川岸

アナスイ（スタンド名：ダイバー・ダウン）、アキラ（能力名：鉄球No.1、鉄球No.2）、ティアナ（デバイス名：クロスミラージユ）、エリオ（デバイス名：ストラーダ）、キャロ（デバイス名：ケリュケイオン）、フリード、ノーヴェ（武装：ジェットエツジ）

VS・

バイシクル・レース（本体：不明）

『GRUUUUUUUUAAAAA』

「クソ！コイツラは世紀末からでも来たのか！？愛で『いまにも落ちてきそうな空の下で』バイク乗り回しやがってッ！！」  
「分かりにくいネタ盛り込まないでッ！」

アナスイにツツコミながら、アキラは鉄球を投擲する。狙いは『腕だ。』

ドグシャアッ

『ギ……！？』

アキラの狙い通り、鉄球はバイシクル・レースの内の一体の腕に当たり、そのままシルシルと回転する。そして

グンッ

『！！？ギ！？ギ！？』

『ギギイ！？』

その一体の腕が独りでに『曲がり』、カーブをしてしまう！そして、それに気づいたもう一体のバイクに真っ直ぐに向かい……………

ドグオオオン

『『グギヤアアアア』』

衝突し、そのままお互いに大破した。

パシィッ

「良しッ！！」

「やるな！だが……………」

アナスイは周りを見渡す。

周りには、まだまだ『バイシクル・レース』が走り回り、二人を囲んでいた。

「……………数が多すぎる……………群生型で実体化してる分、かなり厄介だ……………」

アキラが毒突いた時、一団からバイクが数台突っ込んできた！バイクはウイリーしながら、しかもいつの間にか鋭いスパイクが着いた前輪を掲げながら、アキラたちに迫る！

「！ダイバー・ダウ……………」

ダイバー・ダウンの拳がバイシクル・レースに向けられたその時

ゴオオオオオツ

「ッ！?!?」

ドグオオオン

巨大な火球が一台に直撃し、バイクが炎上した！見上げると、そこには巨大な陰があった。その陰から、三つの何かが降りてくる。

「ハアアアアツ！！」

ズバアツ

「グギヤアアツ」

「シユートバレットオオオオオツ！バレットF！」

ドババババババツ

「ゲツ!?!」

ドグオオオンツ

「ゲヤアアアアアアツ」

何か ティアナ、エリオ、ノーヴェエは、迫っていたバイシクル・レースたちを、ものの数秒で片づけた！

「大丈夫、二人とも？」

「ティアナ!?!」

「状況は………『最悪』だな。」

囲まれた状況に、ノーヴェエが舌打ちする。

「………っか、上の「アレ」何だよ………?」

上の巨大な陰を指さしながら、アナスイは素朴な疑問を打ち明ける。

「ああ、『フリード』よ。」

「え、？『フリード』！？フリードって、あのフリードっ！？」

「あ、そういえば二人とも、あの状態のフリード見るの、初めてでしたね。」

あつけらかんと言うティアナとエリオに、アキラとアナスイは信じられない表情をする。無理もない。徐倫やネギたち麻帆良組は、普段の小さなフリードしか見ていないからだ。

「詳しい話は後よ！今はこいつらを」

「そう、今はこいつらを追っ払うのが、先決だぜエエーーーーー  
ー。」

「コッコッ！?!?」「」「」「」

不意に声がした。背後からだ。

振り向いた先にいたのは、茶色いシャツにテンガロンハット、滑車の付いたブーツを履き、禁煙パイプをくわえた男

「お、お前は……………」

「ホ……『ホル・ホース』ッ!？」

エリオとティアナが、驚愕の声を上げる。

そこに立っていたのは、「支配」と「権力」を暗示する『エンペラー皇帝』の  
カードのスタンド使い、

「よお~~~~~、足の怪我は大丈夫かい？お嬢ちゃあああ  
~~~~~ん。」

ホル・ホースだった。

京都駅

ネギ（スタンド名：牙^{タスク}）、徐倫（スタンド名：ストーン・フリー）、スバル（デバイス名：マツハキヤリバー）、仗助（スタンド名：クレイジー・ダイヤモンド）、明日菜（アーティファクト名：ハマノツルギ）、刹那（武装：夕風）

VS・

サル女（仮）

「待てッ！！」

木乃香を連れ去ったサルを追い、サルの乗り込んだ電車に乗り京都駅まで来たネギたちはサルを追いつめたが……

「……フフ、よーここまで追ってくれましたな。」

「あっ！さっきの……！？」

「おサルが脱げたッ！？」

サル（着ぐるみ）を脱いだ女は、余裕の笑みを浮かべる。

「逃がすわけねーだろーがッ！！行くぞ、お前ら！」

「……はいッ！」「」「」

仗助の号令の元、ネギたちは駆け出す！明日菜と徐倫は懐から『仮契約カード』を取り出し、カモに教えられた呪文を唱える！

「^{アデアット}来たれッ！！」

ギヤアアーンッ

二人が唱えると、アーティファクト武器が現れる。

明日菜には、鋼鉄製らしきハリセン 『ハマノツルギ』が、

徐倫には、鏢じょうや柄えに星の装飾が施されたロングソード 『コウ
ウントユウキノツルギ』がそれぞれその手に握られた！

「お、これが私のアーティファクトか。」

「ちよつと、何で徐倫は普通に剣で、私はハリセンなのよッ!？」

「えッ!？そ、そう言われても……………」

明日菜がネギに文句を垂れるが、今はそれどころではない。二人は
刹那とスバルと共に、サル女（仮）に己の得物を振り下ろす！

だが！

ガキインッ

「「「!!!?!?!?!」」」

三人の得物はサル女（仮）に当たる前に、脱ぎ捨てられたサルのは
か、熊のぬいぐるみのようなものと、スマートなゴリラのようなも
のに阻まれた！
そしてスバルは

「よお姉ちゃん、ちよいとオレの相手をしてもらっぜ。」
「な……………あなたは!?!」

角刈りに鍛えられた体の男に阻まれていた!

「な……………何よこいつら!?! 増えてるし!」
「さっき言った呪符使いの『式神』です!」
「ホホホ、ウチの『猿鬼』に『熊鬼』、それに、とつときの『猿鬼導』は、なかなか強力ですえ! さらに、『あの女』に借りたその男、『ウエストウッド』は、強力なスタンド使いと聞いとる! もはや敵なしや!」

サル女(仮)は、木乃香を連れて立ち去ろうとする。だが、それを黙って見過ごすような明日菜たちではない!

「このか! このオオオオオ!」
「オラオラオラオラアアアツ!」

明日菜は着ぐるみのサルのような『猿鬼』、徐倫は熊のような『熊鬼』にそれぞれ得物を振り下ろす!

ズツバアアアアン
「ムギヨツ!?!」
「なツ……………!?!?」

二人の攻撃が通り、猿鬼と熊鬼は一刀両断されて、元の紙に戻ってしまっ!

「あ…あれー？倒しちゃった？」
「……………？（今は？）」

明日菜は不思議そうに首を傾げ、徐倫は今の剣の感触に違和感を覚える。

まるで、バターか何かを切ったような、今の感触を……………

「な……………何か分からないけど、行けそーよ！そのゴリラは私たちに任せてこのかを！！」

「す、すみません、お願いします！」

猿鬼導を相手していた刹那は、木乃香を連れ去ろうとするサル女（仮）に向かい、飛び出す！

「このかお嬢様を返せエー……………ッ！！」

「えエ……………い。」

「なッ！？」

ガキインツ

「くっ……………」

「きゃあああ……………」

だが、サル女（仮）に刃が届く前に、突如現れた陰に、刹那の太刀が阻まれてしまう！陰は着地に失敗してスツ転んだが……………

（こ……………この『剣筋』……………まさか神鳴流剣士が護衛についていたのか！？）

「あいたたー……………すみません、遅刻してしても……………どうも……………」
『月詠』つくよみ「いいです……………おはつに……………」

神鳴流剣士に驚いた刹那だが、その姿　　のんびりしたメガネの

少女に、一瞬呆気にとられた。

「え…………お…………お前が神鳴流剣士…………？」

「はい…………見たとこ神鳴流の先輩さんみたいですけど、護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいわすわ……………。ではいきます……………」

月詠が言った瞬間

ダッ

「むっ！」

ガギギギギギギギギギ

「ぐ……………！？（意外にできる！？マズい！！）」

月詠の二刀流に押されてしまう！

刹那は『対化け物』用の三尺（約90センチ）の野太刀（斬馬刀ともいう）に対して、月詠は打ち刀と脇さしの二刀流だ。

本来野太刀は、『斬馬刀』の異名の通り敵将を馬ごと斬り倒すことを目的に製造された刀剣で、その大きさと重量ゆえに小回りが利かないのが難点だ。

それに対して月詠は二刀流。

小回りの良さで、刹那が不利だった。

「桜咲さん！？ぐっ……………！？！」

刹那の元に向かいたい明日菜だが、猿鬼導の猛攻撃によりその場から離れられない！

「こいつ……強い！」

「さすがは『とっておき』って訳だな……！！！」

悪態をつく二人。そしてスバルは

「ウリィイヤアッ……！」

ボゴオオッ

「ゲエプッ」

スバルが放った回し蹴りが、ウエストウッドのわき腹に突き刺さる！

「（この人のスタンド……『接近戦』には向かない能力みたいだ……さつきからみて直感した。戦いは主に本体であるあの人自身
が『肉弾戦』によるものだし。一瞬スタンドの象が見えたが、それ
では攻撃してこなかった……ならば！）スタンド能力を出す前に
！再起不能にするッ……！」

スバルがそう決定し、右拳の一撃を放とうと腕を上げた時だ。それは、突如やってきた！

「相棒バディッ！！」

「！？」

ゴカアッ

マツハキヤリバーの警告に、スバルは障壁を張ると、障壁の後方に何かが勢いよく激突する！

「い……………今のは！？はッ」

スバルは気づいた。後方から再び何かが迫るのを！

それは

ドゴオオオオオ

「い……………」 「隕石」ッ！！」

2つの『隕石』だ！

驚くスバルだが、すかさず障壁を張る。だが、一発間に合わず、右腕を深く傷つけられてしまう！

「うああああッ」

ダメージに声を上げるスバル。そんな中、隕石はウエストウッドにも迫る！だが！

シユゴオオオオオ

「！！」

隕石は、ウエストウッドに当たる前に『燃え尽きた』！

(い… 『隕石』を自分に向けてひきつけるッ！ただしこいつ自身には絶対に命中せず、皮膚一枚の所で岩石は燃え尽きてカスになる！)

ウエストウッドのスタンドを理解したが、かなりヤバい事に変わらない。

隕石を落としてくるタイミングは相手次第。それを読みとることは

難しかった。

(右腕のキズは深い……………一か八か、あれをやるしか)

「ム、ギョアアアアア」

「来るッ!!」

猿鬼導が、明日菜たちに迫る!

「無駄だ! 防御は出来ねえッ!!」

ドゴオオオ

「! また……………」

隕石がスバルに向かい落下してくる!

そして

ドグシャアッ

「ム ギャッ!？」

「……………は?」

ドゴオオッ

「え?」

「……………何?」

隕石が、スバルたちからはるか後方に落下し、猿鬼導は、突如降ってきた『モノ』に押しつぶされた。
それは

「ろ……………ロードローラーだ……………」
「……………だな。」

そう、『ロードローラー』だ。道路工事なんかに使われる、あの『ロードローラー』だ。

「なッ……………何でロードローラーが？」

「さ……………さあ？……………」

スバルたちだけではなく、刹那や月詠、ネギたちも、突如降ってきたロードローラーに、ポカンと呆気にとられていた。

「少し派手すぎたかしら？」

「まあ、ロードローラーなんてチョイスした結果ですしね。」

ふいに、ロードローラーから声がした。

見ると、いつの間にか、ロードローラーの上に二人の男女がいた。

一人は、腰まで伸ばした銀髪に鋭い青い瞳、藍色のスーツに黒いコートを着込んだ男。

もう一人は、白髪に近い銀髪を縦ロールにした、ゴシッククロリータ服を着て、左手を隠した翠色の目をした少女だ。

そして、男の手元には『地図』らしきものがあり、それを覆うようにスタンドが発現していた。

八角形の板にそれより一回り小さい透明の球体がはめ込まれており、コンパスの針のような足が四本生えた、機械的なデザインのスタンドだ。

「『アンダー・ザ・リーダー』……隕石を地図上から移動し、ロードローラーを突き落とした！　驚かしてすまなかったな。」

言つと男

サルシツチャは、明日菜たちに会釈する。

「な………何なんやあんたらはッ!？」

「私？私は　」

サル女（仮）が、声を荒げると、少女はサル女（仮）に向き直り、静かに名乗った。

>i10565—406<

「ルル・ベル。」

ルル・ベル一味

本格参戦!

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CAFE」

>i8001—406<

スタンド名 アンダー・ザ・リーダー

本体 サルシツチャ

破壊力 なし スピード なし（転送するスピードはA） 射程距

離 地図上ならどこでも

持続力 A 精密動作性 A 成長性 D

能力 地図上にあるものを自分の所に持ってきたり、逆に自分の所から地図上の好きな所に転移させたりできる。

ただし、本体が地図上にいないと発現しない。また、世界地図のよ
うな、範囲の広い地図では使えない（最低でも、1：5000、00
0の地図でないが無理。）。

#44 / 京都で生まれたならず者 ? (後書き)

44話です。

・ 仗助のクレイジー・ダイヤモンドの解説。今まで入れてなかったので、ここで説明しました。

・ バイシクル・レース登場。いわゆる『戦闘員』のような役割として考え出したスタンドです。「シンケンジャーVSゴーオンジャー」のCMでナナシ連中がバイク乗り回すのを見て思いつきました。スタンド名はクイーンの楽曲から。

・ フリード巨大化。今までしてなかったので、アナスイたちの衝撃は相当なものです。

・ オリジナル式神『猿鬼導』^{エンキドウ}。頭数合わせに必要なだったのでだしました。名前は『エンキ』繋がりでグレンラガンの『エンキドウ』から。

・ ロードローラーネタ発動(笑) 今までずっと温存してました(笑)

・ ルル・ベル一味本格参戦。古株に分類されるサルシツチャのスタンド『アンダー・ザ・リーダー』のヴィジョンと能力も、今回初めて詳しく描きました。

スタンド名はダニエル・パウターのアルバム名から。

・ 次回、ルル・ベルのスタンドと、その目的が明らかに !

では!

#45 / そいつの名はルル・ベル ? (前書き)

ついに動き出したルル・ベル一味!

果たして、その目的とは………!

#45 / そのいつの名はルル・ベル？

桂川 川岸

「……………よくまあ、顔が出せたわね……………ホル・ホース！」
睨みつけながら、ティアナは怒気を孕んだ台詞をホル・ホースに放つ。
スタンドの存在を知ったあの日、ホル・ホースと遭遇したティアナは、ホル・ホースのスタンド『皇帝』^{エンペラー}の弾丸に、右足を射抜かれていた。

「おいおい、女の子がそんな顔するもんじゃないぜエー？ かわいい顔が台無しじゃねーか。」

「ふざけるなッ！！ お前のやったことを忘れた訳じゃないぞッ！！」
軽口を叩くホル・ホースに対して、今度はエリオが怒鳴る。アキラたちも既に戦闘態勢だ。

「おっと、危ない！」

言うやいなや、『皇帝』を引き抜き弾丸を放つホル・ホース。弾丸の行く先は

ドンッ

『グギヤアアッ！！』

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」」

背後から迫っていた『バイシクル・レース』に命中する!

「い、一台迫っていたのか……………き……………気づかなかった……………」

……………」

「……………あんた、何のつもりよ……………?」

「見ての通り、助けたのさ……………!?!」

『皇帝』を構えながら、キザに答えるホル・ホース。

「ホル・ホース、無駄口を叩いてないで、さっさと行くぞ。」

不意に、再び声がした。振り向くと、短く切りそろえた髪に碁盤の目を思わせる剃り込みを入れた髪型とアゴヒゲをして、白い丸に黒い丸を組み合わせた上着を着た男がいた。その男を見て、アキラとアナスイは驚愕の表情をする。

「お……………お前は……………『ウエカピポ』!?!」

「生きていたのか……………ッ!?!」

男 ウエカピポは答えず、周りのバイシクル・レースを見回していた。

「つもる話もあるだろうが……………そいつは後回しだ。今は

」

ウエカピポはそう言いながら、腰のホルスターの留め金を外す。中

には

「！！て……………『鉄球』！？」

アキラの持つものとは違う、14のパチンコ玉ほどの小さい鉄球が付いた『鉄球』が出てきた。それは、手のひらでシルシルと音を立てて回転している。

「こいつらを倒すぞ。情報では『バイシクル・レース』というスタンドで、精密な動きは苦手な、『質より量』の典型的な群生型スタンドだ。」

ウエカピポがそう言うと、ホル・ホースはニヤリと笑う。

「それじゃあ行くところか！華麗に……………激しくッ！！」

#45 / そいつの名はルル・ベル？

京都駅

「何イイ!?!」

「ルル・ベル!?!?」

「それって……………!?!?」

『ルル・ベル』と名乗った少女に、ネギたちは声を上げる。ルル・ベルは疲れたと言い、ロードローラーに腰掛けた。

(本屋ちゃんやネギのスタンド能力を目覚めさせたスタンド使い! 能力はわからないけど、強力なスタンド使い! もう一つの矢を持った娘! コソコソして何かムカつく娘!)

「お前がルル・ベルだと……………? 何故今になって出てきたんだ……………?」

仗助の質問に、ルル・ベルは仗助を見ずに答える。

「 宣戦布告のためよ……………あなたたちにね!」

ルル・ベルは、サル女(仮)を右手で指さして言い放つ。サル女(仮)は指さされて驚くが、疑問に思う。

「う……………ウチらに宣戦布告って……………? あんさんらに恨み買う覚えは……………!?!?」

「ああ、正確には、あなたたちと手を組んだ女 『聖王教会』から矢を奪って、『長谷川 千雨』の命を狙う『ヴィオレッタ』に

対してよ。」

「えッ……………!?!」

ルル・ベルの言葉に、ネギたちは再び声を上げる。千雨を狙う女の名前を知ったことにも驚いたが、ルル・ベルの目的にも驚いた。

「は…長谷川さんの命を狙う連中に宣戦布告って……………!?!」

「そいつらに敵対してるってことは、お前を『味方』と考えていいのか……………?」

徐倫の質問に、ルル・ベルはコクリと頷く。だが、何かを察したのか、上空を見る。
そこには、

「俺たちに宣戦布告だとオオoooooooooo?ふざけんじゃねえぞ小娘がッ!」

ウエストウッドが引き寄せた3発の隕石が、ルル・ベルに迫っていた!

「あ、危な」

スバルが声を上げる前に、サルシツチャはロードローラーから飛び退き、ルル・ベルは

oooooooooo

「うつツ、座ったままの姿勢でジャンプを!？」

ロードローラーに腰掛けた姿勢のまま跳び隕石を回避すると、そのままウエストウッドに迫った!

「悪いけど、あなたみたいなの『下つ端』に用はないの
サイケデリック・インサニティ』!！」

ルル・ベルが叫ぶと、彼女のスタンドが発現する。

左半身は『サイケデリック』という名を冠しているだけあり、緑をベースに赤や黄色、ピンクの極彩色なまだら模様の、筋肉質な亜人の姿で、レンズのような青い目と歯がむき出しになった顔、そして黒い革のようなベルトを巻き付けて、ボクシングのグローブのようになった左手が特徴だ。

一方、右半身は銅色で丸みを帯びたロボットののようなデザインで、あちこちに赤い矢印や危険を示す三角と『!』のマークが描かれ、肩や腰からは歯車が覗いており、横に細長い長方形のランプのような黄色い目と、口にあたる部分のスリット、そして額から背中にかけて伸びた太いパイプを持った頭部を持っている。

以上のように、左右がまるで異なる二つのスタンドをむりやり繋ぎ合わせたようなデザインのスタンドだ。

ルル・ベルはウエストウッドの元まで猛スピードで近づくと

ドグシャアッ

「ぐおッ!？」

『サイケデリック・インサニティ』の右アッパーをお見舞いした!

殴られたウエストウッドは派手に吹き飛ばが……………

「うぎゃああー………ってあれ？何だ……？スタ
ンドのパワーはあんまないのかよオ！？人並み位だぜエー……
ー？ビツクリさせやがって！」

そんなにダメージはないようだ。

殴ったルル・ベルはというと、スバルの側にシュタツと着地し、ウ
エストウッドに背を向けて歩き出した。

「……………え？あれ？あいつ倒さなくていいの……………？」

「ええ。もう彼は『再起不能』よ。」

「は……………？」

スバルはルル・ベルの言うことが分からなかった。ルル・ベルはウ
エストウッドに一発アップパーを喰らわせたただけ。それなのに、も
う『再起不能』とは……………？

「ヘイ！オレはまだピンピンしてるぜエー……？それなのに、
もう『再起不能』にしたなん……………て……………
……………？」

余裕の笑みを浮かべていたウエストウッドは、そしてスバルや明日
菜、徐倫たちは、ようやく異変に気づいた。

「……………ねえ、あいつ『滞空時間』長すぎないか？」

「あ、徐倫も気づいた？」

そう、アッパーを喰らって吹っ飛んだウエストウッドは、『未だに滞空していた』。
いや、それどころか

「……………あのお兄さん……………どンドン『上昇』してるよーな
気がするんは、ウチだけやろか……………?」
「……………いや、私にもそう見える……………」

ウエストウッドは、明らかに『上昇』していた！

「こ……………これは！オレの身体が！『空の方に引っ張られている』ウ
ウウウウウウウウウ！?!?!?!?」

「ようやく気づいたようね？これが私の『サイケデリック・インサ
ニティ』の能力！『サイケデリック・インサニティ』に『殴られた
もの』は、『殴られた方向』に『重力の方向を変更される』!!」

皆さんもご存じの通り、地球上の万物には「重力」が働いている。
その方向は常に『地球の中心』に向かい引っ張られている。
だが！ルル・ベルの『サイケデリック・インサニティ』はその『法
則』を幻覚的にねじ曲げるのだ!!

「安心なさい。大体30m位上昇したら、能力が解けて元の方向に
戻るわ。」

「じゅ……………重力」の能力……………!!」

『サイケデリック・インサニティ』の能力に、サル女（仮）は戦慄する。もはや彼女に余裕はなく、冷や汗をダラダラ垂らしていた。

（や……………ヤバい！まさかウエストウッドが敗北するなんて……………

…こうなったら、このかお嬢様を連れてさつさと）

「セラテンデキム・スピリトゥス・
アエリアーレス・コエウンテス風の精霊17人、集い来たりて敵を射て！」

「……………！しまったッ!？」

逃げようとするサル女（仮）だが、ルル・ベルに気を取られている内に詠唱をしていたネギに、ようやく気づいた！

「もう遅いです！魔法の射手連弾・雷の17矢ッ!！」
サギタ・マギカ・
セリエス・フルグラリス

ドババババババツ

「あひいっお助け　　あら……………?」

だが、サル女（仮）を指していたと思われていた魔法の射手は、サル女（仮）の横を素通りし、はるか後方に行ってしまう……………

「ホ……………ホーホホホホ！何やねん！この程度かいな！この」

「あなたは次に『ノーコン西洋魔導師がッ!』と言う。」

「このノーコン西洋魔導師がッ!　　はっ!？」

ネギが言い当てたのにサル女（仮）が驚愕したその時！

ゴッ

「あ。ペッ!？」

サル女（仮）の後方にあった『街灯』が、サル女（仮）の頭に降ってきた!当たった衝撃で、女は抱えていた木乃香を手放してしまい、木乃香はそのまま階段下まで落ちていくが、

ガシィッ

「ふうッ、ネギよオオオ……やるんならやるって言うてくれよなアアアア~~~~~!!」

「あ、すみません東方先生。」

駆けつけた仗助がナイスキャッチする。

「魔法の射手」を外したと見せかけて、後方にある街灯を撃ち落としたのね……」

「顔に似合わず、なかなか『キレイ』るな……」

ネギの頭脳プレイに舌を巻くルル・ベルとサルシツチャ。
刹那の方も、月詠をねじ伏せたようだ。

「……………くっ、まさかここまでやるとは……………猿鬼導ッ!」
ドゴオッ

「ム、ギアアアア!」

「!こいつまだ……………!?!」

パアアンッ

断末魔の叫びと共に破裂した……………

「オ・ルヴォワール（さよならよ！）」

「そんな……………猿鬼導まで……………！？くっ」

千草は舌打ちをすると、額に『弑』と書かれた猿鬼弑式を呼び出す。
そして

「おぼえてなはれエエー……………！！」

「あっ！逃げた！」

猿鬼弑式に抱えられる形で、月詠共々逃げ出した。

近衛 木乃香、奪還成功！

天ヶ崎 千草、月詠 逃亡、再起可能。

ヴィヴァーノ・ウエストウッド スタンド名：プラネット・ウ

エイブス 数分後、重力が元に戻り落下。一命は取り留めたが、

全身複雑骨折により再起不能。

ルル・ベル及びサルシツチャ ネギたちに連れられ、ホテル嵐

山で話を聞くことに。

桂川 川岸

「 だいぶ片づいたな。」

ホル・ホースとウエカピポの協力もあり、もう殆どが敗走する『バ
イシクル・レース』を見ながらつぶやくアナスイ。

ホル・ホースは『皇帝』を体内に納め、ウエカピポも鉄球をホルス

ターにしまっていた。

「……………まさか、あんたたちに助けられるなんてね。」

「でも、何で助けくれたんです？」

当然とも言える質問をホル・ホースに投げかけるティアナとエリオ。ホル・ホースはキザっぽく笑い、禁煙パイプを上下させる。

「いや〜〜〜、あん時は悪かったなア〜〜〜〜〜。実はあの時、オレは『ある女性』に頼まれて『両右手の女』の組織に「密偵」として潜入してたんだよオ。」

「密偵……………スパイって事か？」

ノーヴェが言うと、ホル・ホースは「そういう事だ。」と答える。次に口を開いたのはアナスイだった。

「で、お前が何で生きてるんだウエカピポ？二年前、「プッチ」の野郎にやられたとばかり思っていたんだが……………？」

アナスイの言葉に、ティアナたちはハッと息をのむ。

徐倫たちの話では、徐倫やまき絵、千雨たちは二年前、『プッチ』と言う男によりスタンドが目覚め、彼の計画に利用されそうになったらしい。

幸いその計画は徐倫たちにより阻止され、プッチも再起不能にされたという。

「……………オレは二年前、プッチに利用されて、お前たちと戦った。だが、最終的にプッチに裏切られ殺されかけた。ここまでは、お前たちも知ってる通りだ。」

に、『ミスターHG』さんじゃあねーか。」

「フン、ホル・ホース……『オエコモバ』と共に勝手な行動をした後姿をくらましたと思ったら、まさか貴様が密偵だったとはな……おまけに私の『バイシクル・レース』をここまでは破壊するとは……」

長髪で鷲鼻の男　　ガデイ・R Uは、怒気の混じった声で話す。

「ここでお前を始末してもいいが、こちらもお前の雇い主を知りたいのでな……」

仮面の男　　ミスターHGも話す。こちらはまだ冷静な声だった。

「悪いが、連れて行かせてもらっぞッ！！」

ガデイ・R Uがそう叫び、HGと共に飛び出した！

ドガアアッ

「……？」

だがそれは、突如彼らの前に降ってきたものにより阻まれる。

それは……

「ア……………アヌビス神!？」

アヌビス神を握った、仮面の女だった。

シユタツ

「いやぁー、派手に飛ばしすぎたかア?……………ってホル・ホー
ス!?それにウエカピポまでツ!?!？」

「チサメツ!？」

ふと、『アニバーサリー・オブ・エンゼル』の防御甲冑を外して、
所々にキズを負った千雨が降りてくる。チンクも一緒だ。

「グツ……………まさか、『スタープラチナ』のスピードを上回る速
度で突撃しつつ『弧牙車』を放つとは……………!!！」

「……………まあ、おまえにはそんな位しないと勝てないしな……………」

「アヌビス神が苦戦するとは……………なるほど、今までの刺客たち
がことごとく敗北する訳だ……………」

千雨の予想外の攻撃に舌を打つアヌビス神を見て、ミスターHGは、
今までの刺客たちを倒してきた千雨や徐倫たちに納得していた。

「……………だが、今のはもう『憶えたぞ』!次には、貴様のスピー
ドは、私には通じんツ!！」

剣の切つ先を千雨に向けて言い放つアヌビス神。だが、千雨にはまだ『余裕の笑み』があつた。

「……………ごもつとも。だが無理だな。」

「無理？私はお前だけではなく、スタープラチナのスピードすら憶えているのだぞ？」

「なぜなら、お前にとても『ゾツ』とする「とっておき」をおみせするからだ。」

「ほう……………どうぞ。」

未だに余裕を崩さない千雨に、アヌビス神は苛立ちにも似た感情を抱きつつ、千雨を睨む。

瞬間

895

ズウラララア

「……………!?!?」

「な!?なんだ…!?千雨が6……………いや…7人にもふえたぞツ
「っ」

一瞬にして、千雨の姿が『7人に増えた』!

「これは……………幻影……………いや、残像ツ!!」

喰らった瞬間、バックステップで後退するアヌビス神。仮面はピシピシと音を立てながら、亀裂を走らせていく。

「ま……………まさか、そんな手があったとは……………」

亀裂が走る仮面に気を止めず、アヌビス神は話し続ける。その時、仮面がパキンッ、と音を立てて割れると、アヌビス神が取り憑いていた少女の正体が明らかになる……………

「えッ!？」

「その顔は……………まさか!？まさかそんな……………ッ!？」

チンクとノーヴェェが青ざめる。

その少女は、腰まで伸ばした茶髪にカチューシャをして、赤みがかった瞳をしている。だが、その顔は

「オットー？……いや……『デイド』かッ！
！！？」

「千雨、確かに今のも『憶えたぞ！』」
全員が驚愕する中、ナンバースが末妹『デイド』に憑依したアヌ
ビス神は、静かに言い放つ……

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

> i 5 7 7 5 — 4 0 6 <

スタンド名 サイケデリック・インサニティ

本体 ルル・ベル

破壊力 C スピード A 射程距離 C (重力の範囲は約30m)

持続力 B 精密動作性 B 成長性 C

能力 サイケデリック・インサニティが殴ったものは、殴った方向へ『重力の方向』を変更される。
この能力に連続で殴られると、様々な方向への重力に引っ張られて、「破裂」する。

#45 / そいつの名はルル・ベル ? (後書き)

45話です。

・サブタイトルは「そいつの名はディアボロ」から。

・ホル・ホースとウエカピポ。実はこの二人、「誰かとコンビを組んでこそ実力を発揮する」という共通点があります。そこから生まれました。

・ルル・ベルのスタンド『サイケデリック・インサニティ』は、重能力の能力。少し『C MOON』と被りますが、応用がきくため、注意してます。ラッシュはブチャラテイのフランス語ver.です。デザインは、右半分は遊戯王の『アンティークギアゴーレム』、左は『キング・クリムゾン』のイメージ。スタンド名は、ALIP ROJECTのアルバムから。

・ガディ・Ruと、ミスターHG。ガディは『ポニョ』のフジモトなイメージ。HGの仮面は『目つきの悪い青ピクミン』をイメージしてください。

名前は、ガンダムSEEDDESTINYに出てきた戦艦から拝借。HGはまだ秘密。

・アヌビス神が憑依したのはデイドでした。次回あたりに『ツインブレイズ』プラス『アヌビス神』の二刀流が炸裂する予定です。

では！

#46 / そいつの名はルル・ベル ? (前書き)

アヌビス神に操られ、敵として立ちはだかるデイド!

#46 / そいつの名はルル・ベル？

さかのぼる事2ヶ月ほど前

ミッドチルダ

海上保護施設から数十km離れた海域

ザッバアアアアッ

海面に巨大な影が浮上してきた。「鮫」だ。しかもよく見ると、何やら人らしきものが背鰭にしがみついている。

ふと、鮫に近づくと一隻のボートがあった。乗っているのは「釣り人」らしき人物だ。

「お、来たか……………」

「どうだった『ホルマジオ』？『戦闘機人』は入手できたか……………」

釣り人は、鮫の背鰭にしがみついていた剃りの入った赤い坊主頭に猿顔の男　ホルマジオに問う。

「ああ、問題ねえぜ。だが『スクアーロ』、本当に『一人』で良かったのか？」

ホルマジオは、手にした『酒瓶』を釣り人　スクアーロに見せながら言う。中には

「ああ、あの女の『実験』には、一人で十分だ。すぐに戻るぞ。」
言っとスクアーロは、ボートを発進させた。

酒瓶の中には、まるでボトルシップのようにすっぽりと入った『デ
イド』が、瓶を中からガンガンと叩いていた……………

#46 / そいつの名はルル・ベル？

現在

桂川 川岸

長谷川 千雨 スタンド：アニバーサリー・オブ・エンゼルVS・

アヌビス神 本体：ナンバーズ No.12 デイード

「デイードツ!？」

アヌビス神が本体として操っている人物 デイードに、ノーヴ
エが悲痛な叫びを上げる。

「アヌビス神……………! (抜いた者を操り『本体』にするスタンドの
妖刀……………まさかデイードを操るとは……………ツ!)」

チンクはアヌビス神に、いや、アヌビス神を抜かせたであろう『左
手が右手の女』に怒りを覚え、唇を噛む。

「どうした千雨?……………かかってこないのか……………?」
(いや、かかってくるはずがない……………まさか探していた戦闘機人
が敵として立ちはだかるとは、思いも寄らなかつただろうからな…
……………!)

傍観していたガディ・R Uはほくそ笑む。

彼女は『ヴィオレッタ』の実験のためにさらってきたが、ガディの
発案でアヌビス神を無理やり抜かせたのだ。

デイードが逆らっても、『手駒』として使えるように……………

(退き時だな…今の内に私は「アレ」を用意して、撤退の準備を
)

「……………つたく、なかなか良い趣味してんな、お前らの親玉はよオ。
」

波紋の影響を受け、アヌビス神は麻痺した体を立て直そうとするが、うまく動けないでいた。

「よし、後は…………… ウェカピポツ動きを止めてくれッ!」
「…………… 了解した。」

千雨に言われ、ウェカピポは『鉄球』を投げる体制に入る。

(ウェカピポの『壊れゆく鉄球^{レッキング・ボール}』で動きを封じ、やつの刀を完全に破壊する!これでようやくアヌビス神との因縁が終わるッ!
!)

ウェカピポが鉄球を投げた時、千雨の頭の中では、すでにアヌビス神の再起^{リタイア}不能が浮かんでいた。
だが

「アヌビス神イイイイイイイイイイイインッ!」
ゴウッ

「何イツ!?!?!?!」
「チンク姉ッ!?!」

突然、鉄球の進行方向にチンクが現れる!

(アヌビス神!貴様が『刀剣』ならば!私の『ランブル・デトネイ

「あゝ、言わんこつちやない…………『左半身失調』だ。」
「…………？何ですかそれ？」

アナスイの口から出た単語『左半身失調』に、エリオは首を傾げる。

「………… ウェカピポの鉄球は、私の一族とは違う、『壊れゆく鉄球』レッキング・ボールと呼ばれる、王族護衛の戦闘のための鉄球の能力なんだ。衛星をまともに喰らっても死ぬけど、顔をかすつたら、その衝撃波で十数秒、脳は『左側を認識しなくなる』感覚に襲われて、戦闘不能になるんだ…………」

「………… え？…………」

アキラの説明に、テイアナたちは絶句した。

チンクは『右目を失明している』。つまり、元々右側が見えない。
プラス

+ 左半身失調。

つまり……………

(ま…………… 全く見えないイイイイイツ)

完全に戦闘不能だった……………

「な…………… 何だか分かんが、助かったのか？身体のシビレも取れたぜ……………」

チンクがレッキング・ボールの能力を喰らった中、波紋の力から復活したアヌビス神が呆気にとられたように呟く。

「……………アヌビス神、ここは退くぞ。」

「ガデイ・R U!？」

いつの間にか、ガデイ・R UとHGがアヌビス神の側にいた。

「既に『準備は整ったからな』アアッ!！」

ブオンッ

ブオンブオンッ

ブオンブオンブオンブオンブオンブオンブオンブオンッ

「!バイクのエンジン音……………!?!？」

「また『バイシクル・レース』かッ!！」

だが、そのエンジン音は、もはや爆音に近いレベルだ。それは、段々と千雨たちに近づいてくる!

そして、それは現れた！

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ

「なっ！？あれは……………ッ！？」

来たのは、全高2mにも及ぶ三輪バイクだ！

タイヤには鋭いスパイクがあり、前輪の泥除けには龍の頭、後輪のサイドにはミサイルが付いた翼、さらにヘッドライトには宝玉を持つ龍の手が付いた翼龍を模したバイク、運転席には、ガトリング砲がまるでリーゼントのように頭部に鎮座して、特効服を着込んだエイリアンが、巨大な斧を肩に担いでこちらを睨んでいる。

「『バイク・レース“フルアーマー総長”』ッ！！群生型ゆえに、今まで分散していたスタンドエネルギーを一台に集中することで誕生する、バイク・レース最強の姿だッ！！」

「お前……………こんな隠し玉を……………！！」

バイク・レースの最強形態『フルアーマー総長』に驚愕する一同。

もはや総長どころの問題じゃない姿だが、とにかくヤバい事は確かだ。

「こいつの馬力は相当な物だ。もったいないが、今回はこれで『逃げ切れさせて』もらっつッ！！」

「ふん！……………千雨、再び勝負はお預けだ。だが、次こそは絶つ……………対に負けんッ！！」

「ま、待てッ！！」

ノーヴェが止めようと駆け出すが、HGの身体から『緑色の腕』が出てくる。そして、手のひらを向かい合わせるような構えを取ると

「エメラルド・スプラッシュュッ!!」

ドツバアアアー……ッ

「ッ!？」

ドツガアアッ

「うおッ!？」

「緑色のエネルギー波」を地面に放ち、目くらましにする!

一瞬、足を止めるノーヴェだが、その一瞬の内にガディたちははるか遠くまで走り去っていた……

「くそッ!!」

「………すまん、姉としたことが、頭に血が上って………」

「チンク………」

左半身失調から回復したのか、チンクは自らの失敗に恥ずかしげに謝る。

「気持ちには分かるが、そういう時こそ冷静になることが大切だ。奴は再び現れるだろう……その時こそ、彼女を助けよう。」

「……………ああ。」

ウェカピポにたしなめられ、チンクは落ち込んだように返答した。

(……………奴の今の技は……………まさかッ!?!?)

一方、ホル・ホースはHGが出した技に、HGの正体を察知していた。

その正体は、かつて空条 承太郎たちとともにDIOを倒すためエジプトへ向かった、『あの男』だった……………

> i 1 0 7 4 2 — 4 0 6 <

ホテル嵐山

とある一室

「で、これはどういう状況なの？」

ホテルに戻り、本部として機能している部屋にホル・ホースとウエカピポを連れたいアナたちは、目の前の光景に呆れ半分の表情になる。

中では……………

「あ、ティアお帰り。」

「つてホル・ホースッ！？何であんたがいるのよッ！？」

「お前……………ウエカピポかッ！？生きてたのかよッ！！」

「ああ、二人ともお疲れ様。悪いんだけど、この状況何とかしてくれないかしら……………？」

SPよろしく、黒いスーツにサングラスのネギ、明日菜、スバル、徐倫に囲まれたルル・ベルが、困ったように風にホル・ホースたちに訴えかけていた……………

それを見た千雨とノーヴェは、呆れたようにこう思った。

() (てか、何で修学旅行にSP服それ持って来てんだよ……………?) ()

麻帆良学園

グリーンドルフィンストリート麻帆良

学園長たちとの話し合いの関係で、ティアナたちには明日合流する予定だったフェイトは、通信回線を開き、ルル・ベルの事情聴取に立ち会っていた。

「名前が『ルル・ベル』、1993年12月5日生まれ……………
…スタンド名は「サイケデリック・インサニティ」で、重力を操る能力……………ここまでで、間違った点はないわね？」
「ええ、問題はないわ。」

ティアナの質問に、ルル・ベルは気にしないように答える。その様は、どこか優雅にさえ見えた。

「それじゃあ、本題よ。あなたの目的。スバルたちの話じゃあ、千雨の命を狙う『ヴィオレッタ』と言ったかしら？彼女の一味と対立してるらしいけど、理由は？」

ティアナは、早速核心を突いてきた。

ルル・ベルが『ヴィオレッタ』と対立する理由　ルル・ベルと彼女の関連も知りたかったし、そのためにスタンド使いを生み出していた事も、今だに謎だった。

「　それは……………」

ルル・ベルはしばしティアナを見つめたまま黙った後、布で隠していた左手に手をかける。
ルル・ベルが隠していた左手の布を取ると、そこには

「それは、私がヴィオレッタの『娘』だからよ。」

「「「「「ッ……!?!?」」」」」

ルル・ベルの『左手』は、

『右手』だった……

ホテル嵐山

「ひ…………左手が右手…………！？」
「娘だと…………ツ！？」

ルル・ベルの告白に、ティアナたちは息をのんだ。
ルル・ベルは両手の平をティアナたちに見せているが、何度みても、彼女の左手は右手だ。

「……………見せといて言うのも何だけど……………あまりみないでくれる？結構気にしているのよ……………」

「あ……………」

と、ルル・ベルは不機嫌そうに左手を引っ込める。普段隠している位だ。恐らく、左手がコンプレックスなのだろう。

「じゃ、じゃあ何？あんた、お母さんを止めるために、スタンド使いを生み出して、対立してるわけ！？」

「……………ええ、そうよ。ネギ君やのどか、他にも何人かいるけど、麻帆良のスタンド使いの大半は、私やお母さまが生み出した者よ。」

「……………親娘でスタンド使いの生み出し合いつて……………」

「壮絶な親娘喧嘩だな……………管理局を巻き込むレベルなんて……………」

明日菜の質問に対するルル・ベルの返答に、皆は、感心していいのか呆れていいのか、分からない表情をしていた……………そこへ、再びルル・ベルが口を開く。

「……………お母さまは、ポルナレフの妹を殺した『J・ガイル』の妹よ。逆恨みでポルナレフを殺すつもりでいたけれど、6年前、コロッセオで『ディアポロ』により殺されたため、その『罪』を娘である千雨に着せるつもりよ。……………まあ、そのあたりは、あなたたちも察してるだろうけどね。」

ルル・ベルの言葉に、ティアナたちは頷く。

「でも、お母さまの能力は戦闘向きではなかったの。『左手で触れ

たものの能力を打ち消す『能力……故に、お母さまは他のスタンド使いを集めて、復讐の為の軍団を作り上げたのよ。』

ルル・ベルが側にいたサルシツチャに目をやると、サルシツチャはコートの内ポケットに手をやる。そこからは

「！それは……………！」

「お婆さまの残した、この『矢』を使つてね。」

承太郎たちの推測どおり、最後の「矢」が出てきた……………

「……………この矢は、一体どうしたの？」

「お母さまが持っていた物を持ち出したのよ。結果として、『聖王教会』にあった『矢』が盗まれてしまったけれどね……………」

少し申し訳なさそうに、ルル・ベルは言う。

「……………復讐に駆られるお母さまは、正直見ていられなかったわ……………」

……………復讐以外に何も考えないようになってしまったんだもの……………
「だから、止めさせるために矢を……………」

ネギが聞くと、ルル・ベルはええ、と頷いた。

「でも、お母さまを止めるには、お母さまの集めた軍団は大きくなりすぎていた……………強力なスタンド使いに加え、どこで情報を入手したのか、ミッドのスカリエッティとも繋がりがあった……………そして、『彼』が表れたわ……………」

「彼……………」

「彼について詳しいことは、私にも分からないわ……………でも、一目見ただけで、ヤバいと感じたわ……………」

『彼』を思い出したのか、ルル・ベルは身震いをした。

「彼は、お母さまにある情報を与えたわ。『矢』の更に先にある『レクイエム』に匹敵する『力』の存在を……………ただ、それについても今調査中よ。」

「オレが潜入したのはいいが、いい情報は得られなかった……………何か知ってると思ってる」

ルル・ベルに代わり、ホル・ホースが口を開く。
ふと彼は、近くにあったスーツケースを開ける。中からは

ドサッ

「うわああッ!？」

「えッ!？この人って……………?」

「ダ…………『ダービー』ッ!？」

かつて、徐倫とのポーカー対決に敗れたスタンド使い
ルーニ
ー・S・ダービーが、縛られた状態で出てきた
気絶していおり、とりあえず生きているようだ。

「こいつを聞いただしてみたんだが、なぐんにも知らなかったわけよオ。」

「じゃあ、あの時の『半分コスタンド』は……………」

「ええ、私たちの仲間よ。今は別行動だけ。」

ルル・ベルは、スバルが『半分コスタンド』と呼んだ事に苦笑しつつ、そのスタンドの本体であり、現在はあの3人と行動している『双子』を思い浮かべていた。

「まあ、そのあたりは調査を続行するわ。まだ手はあるし。」

再びティアナを見据えると、ルル・ベルは右手を差し出した。

「……………正直、私たちだけではお母さまの軍団は倒せないわ。今までの行為については謝るわ。だから……………」
「手を組みたい……………つてことかしら？」

ティアナに言われ、「そうよ。」とルル・ベルは答えた。

「ホントにそう思ってるの？」
「ええ。」

明日菜にも聞かれ、ルル・ベルは答える。

そして

「…………オラアッ!!」「…………」

バギイッ

「プギヤウッ!?!」

ネギ、徐倫、明日菜、スバルに殴られた。今までのルル・ベルのしてきた行為は、正直許せないものがあつたからだ。ネギやのどかが矢に射抜かれた事が、特にだ。

「それは仲なおりの『握手』のかわりよ、ルル・ベル。」

「ええ……………あ、ありがとう……………ブ……………協力感謝するわ……………」

……………」

鼻血を吹き出しながら、ルル・ベルは徐倫たちに感謝するルル・ベル。口調は普段と変わらないが、鼻血まみれで痛々しかった……………」

「今度やつらが襲ってきたら、私たちで倒すわよッ!!」

「……………ええッ!!」

機動六課&麻帆良学園&ルル・ベル一味

同盟結成!!

なお、ルル・ベルの鼻は、この後仗助に治してもらった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

> i 8 3 1 6 — 4 0 6 <

スタンド名 バイシクル・レース

本体 ガディ・R U

下っ端

破壊力 C スピード B 射程距離 A

持続力 A 精密動作性 D 成長性 D

総長

破壊力 A スピード B 射程距離 A

持続力 B 精密動作性 C 成長性 D

能力 バイクやスクーターに取り憑き、実体化したスタンド。

バイクに乗ったエイリアンのような姿になり、複数体で暴走族のよう
うに行動する。

また、個体数が1体になれば、分散していたスタンドエネルギーを
1体に集中させることでパワーが増した「^{フルアーマー}総長フォーム」を発動で
きる。

#46 / そいつの名はルル・ベル？（後書き）

46話です。

・千雨は『波紋使い』でもあるので、波紋による一時的な痺れをやってみました。波紋がスタンドに近づくための技術というのは、SBRの10巻から。

・チンクにレッキング・ボールは、かなりキツイです（笑）左右が全く見えないもん（笑）

・『バイシクル・レース“フルアーマー総長”』&HGの正体。技からして『彼』ですが、まだ秘密にしときます

・ルル・ベルの正体は、『左手が右手の女 ヴィオレッタ』の娘でした。「母親のために頑張る娘」という点ではフェイトに似ていますが、「母親のために従った」フェイトに対してルル・ベルは「母親のために反発する」等、若干違いがあります。

・少し重くなった今回ですが、次回は一休みで奈良で我らが本屋ちゃんの出番です。

では！

#47 / 宮崎 のどかは恋をする(前書き)

激戦の修学旅行一日目から一夜明けて

#47 / 宮崎 のどかは恋をする

「ルル・ベルが……………ッ!？」

帰還した千草から報告を聞いた女と、隣に付き添っていたブラックモアと、同じく帰還したガディ・R Uは驚愕の表情を露わにする。

「まさか……………行方不明になっていたルル・ベル様が……………」
「すいませェン奥様……………2年前、わたくしが目を離さなければ……………」

ブラックモアは、申し訳なさそうに女に謝罪する。

白髪に近い銀髪をシニヨンにして、浅黒い肌につり上がった銀の瞳、そして動物の牙を模したイヤリングを付け、シヨールとドレスを身に纏った女性　　ヴィオレッタは、『左の右手』の親指の爪を噛みながら、イライラしたように呟く。

「あの娘こつたら……………いなくなっと思ったたら、一体何を考えてるの……………」

「どうする？ 場合によっては、お前の娘を『殺す』ことになるが……………」

冷酷なまでにヴィオレッタに問うリゾット。

ヴィオレッタは、しばらく考えた後、リゾットに告げた。

「……………構わないわ。」

#47 / 宮崎 のどかは恋をする

翌朝

修学旅行2日目

ホテル嵐山

「まあ、昨夜そんな事が……………」

「うん……………もう大変で大変で……………」

「正直まだ疲れてるし……………」

まだ眠いのか、目を擦りながらあやかやまき絵たちに説明する明日菜たち3人。

無理もない。昨日は色々な事が起こりすぎた。サルだの、暴走族だの、ロードローラーだの……………

「とりあえず、ルル・ベルについては『味方』と言っているが、ま

だ警戒しておくぞ。一応、ブチャラティが見張ってるから
「あらあら、ずいぶん信用されてないのね、私たち……………」

徐倫が話そうとしたとき、ルル・ベルが歩いてきた。後ろにはブチャラティもいる。

「ルル・ベル……………」

「！あなたが『ルル・ベル』さん……………ですか？」
「ええ、はじめまして。」

あやかとまき絵が驚く中、ルル・ベルは挨拶をする。ふと、まき絵が思い出したように口を開いた。

「あ、そーいえば、なんかのどかと夕映を助けてくれたらしいね？
ありがとうー！」

「……………ええ、あの時はたまたま通りかかったただけけどね。」

思い出したようにルル・ベルはいうと、きびすを返すルル・ベル。ふと、彼女は去り際に呟いた。

「宮崎 のどか……………あの娘ことは、一度ゆつくりと話をしたいわね……………ふふ……………」

「……………え？」「……………」

ルル・ベルの呟きに5人は反応するが、ルル・ベルは何事もなかったかのように、すたすたと立ち去ってしまった。

「ほ、『本屋ちゃん』とゆつくりと話をしたいって……………？」
「そつえば、ルルあいつ・ベルが宮崎のことを『重要なスタンド使い』
って言ってたって、ルーテシアたちが言ってたな……………」

「『イノセント・スターター』が？一体、何を……………？」
ルル・ベルが立ち去った後も、徐倫たちはうんうんと首を傾げている……………

3年A組 出席番号28番 宮崎 のどか
彼女は、ある決心をしていた。

『彼』と出会ったのは、今から2ヶ月程前だ。
出会ったその日に、階段から落ちた自分を助けてくれた。

その日からだ。彼に対して、『特別な思い』が芽生えたのは……………
彼は、自分のクラスの『担任』で、『魔法使い』で、自分と同じく
「矢」に射抜かれた『スタンド使い』……………

そう、彼女は彼に

ホテル嵐山

ロビー

「2日目は『奈良』か……………うーん……………『担任』の僕はどうしたらいいんだろう……………」

朝食を食べ終えたネギは、考え事をしていた。
ルル・ベルの問題は一応解決はしたが、自分には『親書』を届けるという『任務』があった。

(昨日の騒ぎで親書を届けられなかったけど……………今日も奈良だし……………あのおサルのお姉さん(『千草さん』だっけ?)の事も気になるし……………)

「あー…ね、ネギせんせい……………」

「あ…宮崎さん?」

ネギが考えていると、のどかが話しかけてきた。普段から内気な彼

女だが、今日は特にもじもじとしている。
ネギが何だろう?と思っていると、のどかは意を決したように、口を開いた。

「よッ……………よろしければ今日の『自由行動』……………5班と私たち一緒に回りませんか……………ッ!?!」

「え……………?えーと……………あの……………」

突然のどかに言われキョトンとするネギだが、少し考える。

5班には、「天ヶ崎 千草」らが狙う木乃香がいるし、明日菜や刹那、スバルもいる。他の班は『六課』の他に、ルル・ベルがホル・ホースたちを向かわせると言っていたため、被害はあまり及ばないだろう。ならば

「わかりました宮崎さん!今日は僕、宮崎さんの5班と回ることにします!」

「えッ……………あ、ありがとっございますッ!お、お忙しいのに……………」

事情を知っているためかしこまるのどかに対し、ネギは「大丈夫ですよ。」と言うのだった。

奈良公園

「わーっホントに鹿が道にいる~~~~ッ」

「結構デカいんだな~~~~。」

のどかと約束したネギは、5班と3班と行動していた。

3班も共にいる理由は、ルル・ベルが『のどかが重要なスタンド使い』と言った事が気になった徐倫たちが、のどかを見張りたいと考えたからだ。

幸い、3班の那波なは 千鶴ちずるや村上むらかみ 夏美なつみ、それにザジたちはそんなに深く散策するような性格ではないため、3班は5班との行動を共にできた。

ちなみに陰では

「鹿煎餅買ってきましたよ~~~~.....っつわッ!?めっちゃ寄ってきたッ!?」

「アハハハッオットー人気者ツスね~~~~。」

「餌くれるって分かるのね~~~~。」

「.....あれ?引つ張られる?」

「っつてディエチッ!髪カジられてるよッ!?」

「ええッ!?ちょ、ちよっと、これ食べ物じゃないよ~~~~。」

ッ！！」

ナンバーズとギンガが、鹿と戯れていた。

(…………… ノーヴェ、分かっているとと思うが、今はまだディードの事は皆には)

(…………… うん、分かってる……………)

ウエンディたちから少し離れた場所で、ノーヴェに念話を飛ばすチンク。

実はノーヴェたちは、まだディードの事を話していなかった。テイアナたちにも口止めしているため、他の姉妹たちは、ナンバーズディードの事を知らないでいた……………

一方、ネギを誘ったのどかは

「スゴイスゴイ！見てくださいアスナさん……………わあーッ」

「ハイハイ…ガキねエー……………」

「……………えへへ……………ネギ先生……………」

鹿に煎餅をあげてハシャぐネギを見て、うつとりしていた。が、

『告白』のよのどか！今日、ここでネギ先生に想いを『告白』するのよッー！！」
「……………えっ、ええ……………ッ！？そ……………そんな無理だよー……………」

突然のハルナの提案に、『無理だ』と否定するのどかだが、ハルナは更に押してくる。

「無理じゃないわよッいい！？修学旅行は『男子』も『女子』も浮き立つもの！『麻帆良学園恋愛研究会』の調査では、『修学旅行期間中』の『告白成功率』は『87%』を越えるのよッー！！」
「ははは……………はちじゅうなな？」

「しかもッ！ここで恋人になれば、明日の『班別完全自由行動日』では！二人っきりの『私服ラブデート』も……………！！」

ハルナの強引な説得に圧倒されるのどか。夕映はハルナの強引さに（またテキトーな…）と呆れていたが、

（ラ、ラブラブデート……………ネギ先生と……………87%で……………）

のどかは顔を赤くして、すっかりその気だった……………

「大丈夫！今のあなたならいけるって！！よし、まずはネギ君と『二人つきり』にならなきゃね！行くよ夕映ッ！」

「ラジャです！」
ダッター

「あッ、ちょ……………まだ心の準備が……………」

作戦開始とばかりに駆け出すハルナと夕映に、のどかは後ろから声をかけるしかできなかった……………

一方、こちらはネギ、明日菜、刹那、徐倫、千雨、スバルたち。

「今んとこ、サル女千草もルル・ベルも、動きはねーな……………」
「うーん……………」

「昨晚、スタンド使い一人に式神数体がやられたし、恐らく今日は大丈夫だと思うが……………」

「念のために、スタンド使いのいる班を含め、各班に『式神』を放っておきました。何かあれば分かります。このかお嬢様も、私が『陰から』しっかりお守りしますので、皆さんは、修学旅行を楽しんでください……………」

刹那はそう言うが、スバルは『陰から』の部分が気になった。

「何で「陰から」なの？」

「そうよ、隣にいておしゃべりでもしながら守ればい〜のに〜。」

「ッ！いつ、いえ…私などがお嬢様と気易くおしゃべりなどする訳には……………」

「……なーに照れてんだよ。」
「なっ……別に私は照れてなどっ!!」

何故か顔を赤くする刹那。どうやら何かあるらしいが、徐倫や明日菜は面白そうにからかいだした。

と……

「アスナにスバルウウーッ!一緒に大仏見よーよーッ!」
「良ければ、空条さんや長谷川さんもーッ」
ドギヤアアアーッ
「……へぶッ!」「」「」

明日菜たちが夕映とハルナに突き飛ばされ、さらに、

「せつちゃん、お団子かってきたえ。一緒に食べへん……?」
「えっ……」

お団子を持ち、木乃香が刹那に詰め寄ってきた。木乃香のいきなりの誘いに、刹那は後ずさった。

「ちょッ……お前ら!何だよッ!?!」
「いーからいーから」
「え?ちょ、ま、ええ……」

「す、すいませんお嬢様!私、急用が……ッ」
ダッダー

「あん、何でお嬢様って呼ぶんー」

そのまま明日菜たちは連れ去られ、刹那は木乃香から逃げるように走り出してしまった……

「あ……あれー？」

ネギを一人残して……

一人取り残されたネギは、しばらく呆然としていたが、ふと、後方から声をかけられた。

「あ……ああああのー……ネギ先生……」

「あ、宮崎さん……なんか、みんな行っちゃいましたね……二人で回りましょうか。」

「えッ……あ、はい！喜んでー……（……よしッ……うん、私がんばるー……）」

ネギと一緒に回るようになったのどかは、告白する決心をした。

数十分後

大仏殿

「全く……何やってんのよ、あの子は………」

明日菜たちをネギから遠ざけ、あやかを千鶴たちに頼み足止めさせた後、のどかたちを陰から見ていた夕映とハルナは、呆れていた。あれから見ていたが、のどかはネギに告白しようとはするのだが、うまく言えないというか、とんちんかな事を言っていた。大仏が大好きだの、大吉だの……
そして、今は

「お……お尻がハマっちゃいましたアアッ」
「えーーーーーッ!!!」

大仏の鼻と同じ穴をくぐり抜けようとして、お尻がハマっていた……

「だ……大丈夫ですか？引つ張りますから！」
グイイイイ
「へううう………すみません先生ー！」

のどかの手を引き、のどかを引き抜こうとするネギ。だが……

スッポーーーーン
「キヤーーーーッ」
「うわッ!?!」
ドシューーンッ

勢い余って、のどかは穴から飛び出してしまう。その結果

「あたた……ひゃあッ!?!」
「うひゃやああッ!?!」

のどかがネギに『馬乗り』してしまい、ネギはのどかの「スカートの中」を見てしまう!

「す……すいませんーッ」
ババッ

「い……いえ、こちらこそ……ッ」

顔を真っ赤にし、慌てて飛び退くのどか。もはや、恥ずかしくて仕方なかった。

「（あああああ……全然「告白」できない上に……こんなはしたない姿を見せてしまって……やっぱり私（ごめんなさいーッ
ーッ）

ダッターー

「ああッ宮崎さんッ!!?」

恥ずかしさが限界に来たのか、のどかはその場を走り去ってしまった……

「 やれやれだわ。何だったんだあいつら?」

「ったく、『大仏見よー』って誘つといて、とつとどっか行つちまうし……」

一方、こちらはハルナたちにネギから遠ざけられた徐倫たち。ネギたちとはぐれてしまった(というか、はぐれさせられた)ため、仕方なく奈良公園内をぶらぶらと歩いていた。

「もー、何でこのかから逃げるのよ〜?」

「し、…「式神」に任せてあるので、お嬢様の『安全』は大丈夫で

す……」

「そーじゃなくてさア、何でしゃべってあげないのー？」

徐倫と千雨の少し前を歩く明日菜とスバルは、刹那に問う。

昨日から気づいてはいたが、刹那は木乃香を避けているようだ。それを、木乃香は寂しそうにしていたため、二人は聞いていたのだ……

「それは……その……私が親しくして、「魔法」のことをバラしてしまう訳にはいかないし……やはり『身分』が……」ぶつぶつ

「何ぶつくさ言ってるんすか……？」

「……徐倫、ありや何かあるな……」

「ああ……まあ、それは『このかと刹那の』問題だ。私らがむやみに口出しする必要はねエよ。」

「……だな。」

ぶつくさ言って言葉を濁す刹那を見て、二人はそう考えた。

と、その時だ。

ガサッ

「ん？」

「「「「「？」「」「」「」

物音を聞き、そちらを振り向く一同。そこには

「ハアハア……あ……明日菜さん……たち……?」

「……君は……『宮崎さん』?」

「ど、どうしたの「本屋ちゃん」?何かあったのツ!?!」

涙を浮かべ、息を切らしたのどかがいた。

「マジでツ!?!」

「えエーーーーーッ!?! ネット、ネギくんに『告った』のーーーー
ーーーーッ!?!」

近くの茶店に場所を移し、のどかの話を聞いた一同は、明日菜やスバルのように大声を出すわけではないが、全員が驚いていた。

「は、はいーーーーー………いえ、『しよつとした』んですけど…
…私、ストロイなので、失敗してしまっ………」

「マジかよ………」

「ほ……本気だったんだー………」

のどかがネギに告白しようとしていたのには驚いたが、それが本気と知り、逆に感心しだす一同。
そこで、刹那が口を開く。

「でも、ネギ先生はどう見ても『子供』では……………どうして……………」

「そ…それはー…ネ、ネギ先生はー……………」

刹那に問われ、のどかは話し出した。自分がネギを思う理由を……………

「普段はみんなが言うように『子供っぽく』て『カワイイ』んですけど…時々『私たちより『年上』なんじゃないかなー』って思うくらい頼りがいのある『大人びた』顔をするんですー」

「…えーと……………」

「そうか？」

「……………確かにまあ、最初は『足手まとい』かと思っただけど……………」

のどかが真面目に話すために、聞いている明日菜たちの方が逆に恥ずかしくなってきた……………

「それは多分、ネギ先生が私たちにはない『目標』を持って……………それを目指しているも『前』を見ているからだと思います……………本当は、遠くから眺めてるだけで満足なんです。それだけで私、勇気もらえるから……………」

のどかは、遠くの空を見ながら、明日菜たちに打ち明ける。

「でも、今日は自分の気持ちを伝えてみよっと思って……………」

そこまで言つと、のどかはふと、刹那や千雨の方を見た。

「ん……………？どうかしたか？」

「えへへー……明日菜さん、ありがとうございます。スバルさんも……………桜咲さんや空条さんたちも、怖い人だと思ってましたけど、……………そんなことないんですねー……」

「……………え……………」

のどかに言われ、刹那、千雨、徐倫は一瞬呆気にとられた。のどかはスッキリしたのか、すくつと立つと、

「……………何だかスッキリしました。私、『行ってきます』……」。

「……………タッター……」

「あ、本屋ちゃん!？」

明日菜たちに礼を言い、駆け出した。

「ちよ、ちよつと……………『行く』って……………?」

「いやあ姐さん、俺つちは感動したぜ!」

「宮崎さん……………もしかして……………!??」

明日菜は訳が分からない様子だが、スバルはもしやと思った。のどかは

「……………なあスバル、私ってそんなに怖いかな……………?」

「えッ!?!ええーと……………」

ちなみに、徐倫は軽く傷ついていた……………

その頃、ナンバーズとギンガたちはというと

「大丈夫ですか、ディエチ姉様？」

「ううう……………2cmくらい食べられた……………」

「腹壊さなきやいいけどな、鹿。」

「……………ノーヴェ、それどういう意味？」

涙目で鹿にカジられた髪をさわっていたディエチだが、ノーヴェの一言に怒ったように振り返る。

実際、奈良公園の鹿には鹿煎餅以外あげてはいけない決まりになっているのに、鹿に菓子やら果物やらをあげる人がいると問題になっているが、ノーヴェのそれはディエチに対して失礼だ。

「あれ〜〜〜？あれってネギくんにホンヤじゃないっすか
〜〜〜？」

「あれ、本当だ。」

ふと、ウエンディは150m程先にネギとのどかがいることに気づく。

なお、ウエンディやノーヴェ、他にはディエチやセインたちは、何故かのどかの事を『ホンヤ』と呼んでいる。

恐らくだが、明日菜他数名がのどかを『本屋ちゃん』と呼んでいるのが原因と、徐倫は考えていた。

だが、ノーヴェにこの事について徐倫が聞いた所

「えっ、『ホンヤ』っていう名前じゃないのッ!？」

という答えが返ってきたという……

この後数日間、ノーヴェはこの事をネタにセインやウエンディにいじくられていたという。

閑話休題。

見ると、のどかがネギに対してなにやらあわあわとテンパっている

ようだが、何か話そうとしているようだ。

「……………？何だろ？」

「何か話しているようだ……………」

気になったのか、ノーヴェたちは少し近づいてみた。そして

「あ…あの……………先生……………私……………」

「何だ？」

「まさかッ!？」

「私、ネギ先生のこと、出会った日からずっと好きでしたッ！！私
……私、ネギ先生のこと、大好きですッ！！！」

「……………え？」

「なんだってエーーーーーッ！！ムグッ」

ウエンデイが大声をあげるが、セインが口をふさぐ。ネギは、突然の事に顔を赤くして固まってしまった。

「……………え……………あ……………」

「……………あ、いえー、わ、分かってます……………突然こんなこと言っても迷惑なのは……………せ、『先生と』『生徒』です……………ごめんなさい……………でも、私の気持ちを知ってもらいたかったので……………」

「おいおい！確かに聞いた今の言葉は……………マジかよ……………たまげたぜ……………ホンヤのやつ……………」

ノーヴェが思わず呟く中、のどかは固まったままのネギに話していた。そして、

「失礼します、ネギ先生ーッ」

「あ……………」

のどかは走り去ってしまった。

残されたネギは、今起こった出来事に混乱しているのか、その場に

立ち止まったままだ。

「えと……………あう……………ああ……………ああああ……………」

この修学旅行、初日から色々なことが起こりすぎた。そのためかネギの頭の中は……………

告白された？ このかさんとはせがわさん守らないと

大好きですー おサルが敵…ルル・ベルさんは 刹

那さんちよつとコワイー…空条さんオラオラオラオラオラオラア
スナさんしんしょわたすースバルさん『スタンド』

パンク寸前だった。その結果、

ドテーン

「キヤーーーーーッ!？」

「ネギイイイッ!？」

ブツ倒れた。

倒れた瞬間、ノーヴェたちと同じように隠れて見ていたらしい明日
菜やスバルたちが飛び出してきた。

「ネギツちよつとしっかりーッ」

「兄貴イーツ」

「って、お前らもいたのかよ……………」

「いやあ、偶然なんだぞ？」

気絶したネギを抱えながら、明日菜はネギに呼びかける。徐倫はノ
ーヴェたちがいたのに呆れながらつつこんでいた。

「……………（宮崎さん…あんなおとなしそうなお子なのに…勇氣…
…あるんだな…………）」

刹那はのどかが走り去った方を、少しうらやましそうに見つめてい
た。

「……………」

同じく、のどかの告白の様子を見ていた者がいた。

「……………どうぞやら、早めに手を打った方が良さそうね……………」

そう呟くと、ルル・ベルはその場を静かに立ち去った。

ネギ・スプリングフィールド 知恵熱でブツ倒れるも、数十分
後に起きた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

#47 / 宮崎 のどかは恋をする（後書き）

47話です。

・サブタイトルは『山岸由花子は恋をする』から。千雨の時の話同様、のどかの告白の話にはこれしかない、初期のころから考えていました。

・ヴィオレッタの容姿は、まんまOVAのエンヤ婆です。あれって、周りの街みたいジャスティスに『正義』の幻影だったのかな？未だに少しわかりません……………

・前回少し重くなってしまったので、ナンバーズは基本ほのぼのす（笑）鹿に後ろ髪力ジられてるディエチがお気に入り（笑）

・ルル・ベルの目的は、2、3話したら判明するかも？

では！

#48 / 朝倉 和美の収穫（前書き）

のどかに告白されたネギだが……

本人は真剣に考えていた。

「ネギ先生、どうされたんですの？」

「昼の『奈良公園』で、何かあったの？」

「うひゃアツ!？」

そこへ、ネギの様子が気になったのか、あやかとまき絵が話しかけてきた。後ろには、裕奈や双子の鳴滝姉妹　ツリ目でツインテールの姉風香と、シニヨンでタレ目の妹史伽もいた。

「い……………いやあの、誰も僕に『告った』りなんか……………」

「えッ!？こ、告ったアアアツ!？」

「えーッッそれホントネギ君ッ!？」

「誰からされたのッ!？」

(し……………しまったアアアアア……………ッ)

うつかり口を滑らせ、『告られた』事を言ってしまうネギ。

「え……………あ、いや、こ……………酷ーな墮ー天使　夢ーに矢ーを放ーつ……………つもりでで修学旅行を楽しみましょうね……………?ハイ。」

「……………歌詞は『僕ら墮天使』じゃありませんでしたっけ？」

「……………ぼ……………僕、ウエザー先生たちと打合せがあるのでこれでーッ……………」

ドッヒュー……………ン

「あ、ちよつと待ってよネギくウウウん!？」

「誰が」「誰に」告ったんですの……………ッ!？」
ダッター……………

何とか誤魔化そうとするも誤魔化しきれず、ネギはその場を逃げ出し、あやかたちはそれを追う。

「う~~~~ん……………大丈夫かしらねえ、あのガキンちょは……………」

「もう、なにもかも『一杯一杯』って感じだね、ネギ君……………」

「10歳なのに、色々と背中にのし掛かりすぎなんだよなあ、ネギは……………」

陰から見ていた明日菜、スバル、徐倫は、苦笑しながらネギを心配していた。

「逃げ足早いなあああッ見失っちゃったよ！」

「どーすんの、いいんちょッ!？」

ネギを追っていたあやかたちは、ネギの逃げ足（魔法による身体強化付き）により、見失っていた。

「うーん……………」A組のうちの誰か『何かをした』のは確かなようですわ……………このまま「謎」にしておくわけにはいきませんわね

……」

とにかく気になって仕方がないあやかたち。どうにかして『真相』を解明したかった。

「……ここは……『彼女』の出番ですわッ!」

#48 / 朝倉 和美の収穫

3 A・3班 班部屋

「なぬ!?! 『教師と生徒』が『淫行疑惑』ウウー……ッ!?!」

班部屋で、デジカメに今日撮影した写真のチェックをしていたツリ目に赤毛を後ろで束ねた髪型の少女(余談だが、若干ウエンディと髪型がかぶる……)朝倉 和美は、あやかたちからの情報に声を上げた。

「そーなんだよ朝倉! 大変なんだよッ」

「ンン~~~~~~~~そりゃア大スクープだねエ~~~~~……」

…ま、「事実」ならだけど……それならばッ!!」

そう言うと、朝倉はカメラを構えて、スクツと立ち上がった。

「『スクープあらば、即参上ッ!!』 『麻帆良学園報道部突撃班』
にして『3 A公式カメラマン』!この朝倉 和美にお任せあれッ
!!」

「ええ、そのあなたを見込んで、「調査」をお願いしたいのですわ。

「OKOK!で、『ホシ』は誰よ? 『新田』? 瀬流彦?」

「それが、かくかくしかじか……」

朝倉に説明するあやかたち。(かくかくしかじかで説明が済む小説
つて便利)

「えーと、つまり『ネギ先生が誰かに告白された』……と……

つつかそれ全然『淫行』じゃないっつツ!!」

「なッ…何をおっしゃいますか!充分「許されざる行為」ですわッ
!!」

あやかたちやや拡張された表現につつこむ朝倉。だが、あやかたちは朝倉に調査を強要する。

「とにかくッ!ネギ先生に『誰』が『何』をしたのか調査してほしいのですわッ!!」

「頼んだよ朝倉ーッ」

「スクープじゃないもんには興味ないんだけどなあ……」

……しかしまあ、ひよんなことが「大事件」につながる事もあるし

……一般市民の期待に応えるのも、『報道記者』の仕事かもねえ。

「
まあ、とりあえず調査してみようと、朝倉は班部屋を出る。彼女の背中に向かい「頼んだよー」と、あやかやまき絵の期待の言葉が投げかけられた。

（って言うか、『告白』なんついたら「アイツ」位しかないじゃん……………）

3 A・5班 班部屋

班部屋でのどかは一人、ネギに告白した事についてジュースを飲みながら考えていると、突如、ノックが聞こえた。

コンコンッ

「おーい入るよー。本屋いるー？……お、ちょうど『一人』か
」
「はい、何ですか朝倉さん？」

入ってきたのは朝倉だ。その手には、何故か「ボイスレコーダー」
が握られていた。

「うん、聞きたいことがあってさあー……あなた、ネギ先生と
『寝た』って本当？」

「ブウウウー……ツ！？」

いきなり変な質問をされて、のどかは飲んでいたジュース（ラベル
には『メルテツディン・パルム・フェノメノン』と書かれている）
を吹き出した。

「なツ……なななななななななな……そんなこっし
てないですうううー……ツ！！」

「ナハハハ、冗談冗談。今日ネギ先生に『告った』んだってなあゝ
……」

で、どうだったん？」

のどかに吹きかけられたジュースを拭きながら朝倉はのどかに聞く
と、のどかは顔を赤くしてもじもじし始めた。

「え……ど、どどどどどーと言われましても……私は『自
分の気持ち』を伝えたかったです……だから　お返
事は最初からいらないとゆーか……」

「へえー……で、ネギ先生の気持ちは気にならないの？」

「いえ……もう満足……とゆーか……あの……聞くの

……「こわいのでー……」

急に声が小さくなるのどか。それを見た朝倉は……

「アツハツハツハツ！かわいいーなー宮崎はー…… だめだよー
ー『小学生』じゃないんだし、そんなんじゃないよーいや、
まあいいかアーーーーー」
ぐりぐり

「あーーーーうーーーー？」

恋に弱気なのどかがかわいかったのか、頭をぐりぐりとなで始めた。のどかは訳が分からないようだったが、朝倉に内緒にするように言い、朝倉は部屋から立ち去った。

カチッ

「……ほいつ、『取材終了』と。……はあーあ、やれやれ
……こんなじゃあ、『記事』にもならないよ……」

部屋から出た朝倉は、ボイスレコーダーのスイッチを切る。

「ま、みんなが知ったら騒ぐだろうし、この件は『秘密』にしといてやるか。『ゆっくり進む恋』もあるさね……………」

「ほう、それは『どんな恋』なんだい？」

「うん？そりゃあ、ネギ先生と宮崎が……………って誰ッ！！？」

うっかり誰かにしゃべってしまいそうになる朝倉だが、寸前で踏みとどまった。

振り返ると、ギザギザのヘアバンドにペン先のアクセサリーの男

岸辺 露伴だ。

「ああすまん、僕は漫画家の岸辺 露伴だ。」

「えっ！岸辺 露伴ッ！？あの有名な！？」

「ああ。『京都』に取材に来たんだが……………全く、京都は観光客だらけで窮屈だよ……………今日は『金閣寺』と『銀閣寺』を見てきたんだが、金閣寺のあれは何なんだよ？ただ『金ピカ』で『派手』なだけじゃないか！あんなのどこがいいんだ……………？

それに比べて、『銀閣寺』の「落ち着いた雰囲気」はいいね

え……………！僕は「グッ」ときたよ！」

「は……………はあ……………（この人、『銀閣寺派』かあ……………）」

一方的に話した後、手にしたパンフレットの「銀閣寺」を見ながら、露伴はうっとりしたように語るのを見て、朝倉はどつでも良さそうな事を知った。

「それに、色々分かったこともあるぞ。たとえば、「〜どす」なんて、『舞妓さん』位しか使わないとかね。」

「あー、そうですね〜。私のクラスメートにも『京都出身の子（木乃香）』がいますけど、全く使いませんよ〜。」

「あ、やっぱりそうなのかい？いやあ、軽く『偏見』持ってたなあ
~~~~~てつきり」方言」と思っていたよー！。」

何故か共感する二人だった。

「それで、『ゆっくり進む恋』ってのは」

「えっ！？あ、いや……その……」

露伴がいきなり話を戻したため、朝倉は焦った。

正直、のどかとネギの恋は、しばらく様子を見てあげた方がいいと  
思い、朝倉は『黙っている』ことにしていた。

故に、いくらクラスに関係ないとは言え、今ここで露伴に話すのは  
正直マズい。

朝倉が露伴にどう言い訳しようか考えていると、意外な言葉が露伴  
の口から出た。

「まあ、話したくないなら、黙っていればいいよ。僕も無理  
に聞かないしね。」

「えっ？あ、そ………そうですか………アハハ。」

露伴にそう言われ、朝倉は安心して頭を掻き、笑いながらその場を  
去った。

だが、朝倉は知らなかった。露伴が内心

( まあ、後で『ヘブンズ・ドア』で「読めば」いいし )

と思っていたのを……………

「はぁー、まさかあの「岸边 露伴」が、このホテルにいるとはねえー……後で『取材』してみようかな？ しっかし、ウチのクラスは平和だねえ……。何か、こう『血沸き』『肉躍る』ような「大スクープ」でも、どっかに転がってないもんかねえええ……」

そんな事をぼやきながらホテル内をぶらついていた朝倉は、ふと、目の前をフラフラと歩くネギを見つけた。

（あらー、何か『悩ん』じゃってるなー……10歳の少年には、『告白』はちよつと『シヨッキング』だったかな……）

何やら落ち込んでいるというか、悩んだ様子のネギを見て、朝倉は心配になってきた。ネギは朝倉に気づかないまま、とぼとぼとホテ

ルの外へ出て行く。

「ん？」

ふと、朝倉はネギの足下を子猫が通るのを見た。

そして、子猫はネギの先をいき、道路に座り込むと、顔を洗い出す。

そこへ

ブロロロロロ……

「ん……………！ああッ、ネ、ネコがッ！？」

ようやくネギが子猫に気づいたときには、子猫にワゴン車が迫っていた！

ダッ

「あッ……………！？」

朝倉が声を出す前に、ネギは子猫に向かい駆け出した！

(し……死んだアアアーーーーッ！？ネギ先生いいーーーーッ)

朝倉が止めようと走ったその時







ホテル嵐山内

(…………アレが何かはわからないけど！あの『オコジヨ』が言っていた「魔法」という単語が本当なら！ネギ先生は『魔法使い』ということになる！！)

ホテルの一角を、朝倉はぶつぶつ呟きながら歩いていた。

「( …… 考え直してみたら、私が撮った写真の中にも、いくつかがおかしいの」がちらほらあったような…………… 私とした事が、こんな特大スクープを見逃していたとは…………… ) だがッ！私は諦めないわよッ！！こうなったら …… !」

「うわッ!?!」

いきなり叫んだため、偶然曲がり角から現れた村上 夏美が驚いたのもお構いなしに、朝倉は実行に移った。



「って！なんでお前がいるんだよッ！！」

しばし、ルル・ベルの雪のように白い肌に見とれていたネギだが、  
仗助に言われ、慌てて目を手で覆った。

「そっ、そうですよッ！今は先生しか入れないはずですよ！？」

「見とれてたクセに、何言ってるのよ……まあ、誰も見てなかったから、こっそりとね。」

頭に乗せたタオルをとり、顔を拭きながら、ルル・ベルは何ともないというように言う。

「ところで、あなた宮崎 のどかに『告白されていた』みた  
いだけど……」

「ぶうッ！！な！何で知ってるんですかッ！！？」

「まあ、色々とね。まあ、とにかくその告白 ん？」

ルル・ベルが何か言おうとするが、ふいに、何かに気づいた。そちらを見ると

「「「……………？」」」

『腕の生えたハロウインのカボチャ』が、『リカちゃん人形』をグイグイ動かしている場面だった……………

「り……………リカちゃん人形が動いてるツ！！！？」

尚、カモにはスタンドが見えないため、リカちゃん人形が「ひとりで」グイグイ動いているように見えている。

ホテル内

とあるトイレ

（ひとりでに動くリカちゃん人形なんて見たら、ネギ先生は怪しんで『魔法』を使う！これで、ネギ先生の『魔法』を引き出す！）

朝倉の手元にはデジカメがあり、画面には驚いた形相のネギたちが写っている。

朝倉は自身の能力　名付けて『ハロウィン』を操り、ネギの魔法を引き出そうと考えたのだ！

（二年前、偶然落ちていた『矢』を拾ったときに『鏃』で手を怪我してから見えるようになったこの力……矢はその後捨てたけど……カメラから出てきて、『遠くの景色を撮影』できるこの能力！今まで私の周りに『見える人』がいなくて、誰も知らないこの『ハロウィン』ならッ！！）

朝倉はスクープゲットを確信していた。

だが、朝倉はある『重大なミス』をしていた。

朝倉のミス。それは

「ん？ネギ先生、手をこつちに向けたぞ？  
ついに『魔法』を出すかッ!？」

朝倉が興奮気味に叫んだ瞬間、

ズババツ

「うわッ!?か、カメラがッ!??!?!?」

ネギの牙がタスクハロウインを切断したと同時に、カメラが切断された!

朝倉のミスは、『自分と同じ力を持った者の存在を知らなかった』  
ことだ……………

「先手必勝……………!タスクである『カボチャ』を切り裂きました!」  
「でかしたぞ、ネギ!」

場所は戻って大浴場。

タスクでカボチャ（ハロウイン）を切り裂いたネギは、カボチャの

いたあたりを探っていた。

「あのリカちゃん人形……スタンドが動かしてたんすか？」

「ええ。スタンドが世間一般で言う『超能力』と呼ばれるのは、こんな事よ。スプーン曲げのトリックが「力任せ」なのと同じでね。」

不思議そうに呟くカモに、ルル・ベルが解説する。

つまりは、スプーンを持った一人の後ろから、もう一人がスプーンを『力任せ』に曲げている訳だ。

「あの『カボチャ』……何だったんでしょね？」

「さあな………何か攻撃してくる訳でもなく、リカちゃん人形動かしてただけだもんな………」

「あの動き　多分だけど、スタンド使いになりたてで、スタンドが私たちに見えないと思ったやつじゃないかしら？」

ルル・ベルの推測に、2人はなるほどなと頷いた。

「なるほど……だからリカちゃん人形を………」

「すると犯人は「愉快犯」な訳か？ただ脅かしたかっただけの？」

「さあ……？ただ、私には『様子を探っている』ようにも見えただけ………遠隔操作のカボチャ型スタンド………私も知らないスタンドだわ………」





「っっっ!?」

ネギたち3人が振り向くと、3体のハロウィンが迫っていた!

「タスク牙ッ!!」

「ダイヤモンドクレイジー・Dッ!!」

「サイケデリック・インサニティッ!!」

ズガガガガガガガッ

3人が各々のスタンドを発現させ、ハロウィンに攻撃する!ネギの『タスク』が切り裂き、クレイジー・Dが殴り、サイケデリック・インサニティIが破裂させる!



慌ててハロウィンで攻撃する朝倉だが、ハロウィンはサイケデリック・Iをボカボカ叩くだけで、全くダメージはない。

「……………『遠隔操作型』故に、戦闘力は低いみたいね。さて、話を聞かせてもらいましょうか？でないと」  
「わ、……………わかった、話すから！」

サイケデリック・Iの威圧に、朝倉は降参するしかなかった……………

## ホテル嵐山

## 六課の部屋

「なるほど……………つまり、今麻帆良で『魔法使いと超能力者の壮絶な戦い』が繰り広げられてるわけね……………」  
「大げさに言えば、そうなるわね……………」

朝倉の返答に、ティアナが答える。

その後、朝倉から事情を聞いたネギたちは、『口外しない』ことを条件に朝倉のインタビューに答えていた。

自分が自覚していなかったとはいえ、スタンド使いの増員は、正直ありがたかった。

「しかし、カメラを介して発現する、カメラのスタンドか……」

「うん…何故か『カボチャの型』だったから、単純に「ハロウィン」って名付けたんだ〜。」

明日菜や徐倫らと共に朝倉が撮った写真を見ながら呟くチンクに、朝倉が説明する。

その写真には

「あっ、これ『タスク』じゃない?」

「こつちには『スタープラチナ』が写ってるよ……」

「『クレイジー・ダイヤモンド』や、『ストーン・フリー』が写ったのもある……スタンドって、映像や画像に写らないんじゃないかな?」

本来『写らない』はずの、『スタンドの象』が写っていた。

「なるほど、『スタンドが取り憑いた』カメラで撮ったから、『スタンドが写る』訳ッスね。」

「スゴいですよ朝倉さん！これ、スタンドが見えない人には、重宝しますよ！」

「え？そ、そうかなあ~~~~~？」

ネギにほめられ、朝倉は照れたように頭を掻いた。

「ふう、……………これで問題が一つ減ったぞー！」

「よしよし、良かったわね、ネギ。」

徐倫らと一緒に部屋を出たネギは、問題が一つ減った安心感から、大きく伸びをした。

「まあ、朝倉が二年間も『無自覚』だったのには驚いたけどね〜」

「周りに見える奴がいらないと思いついてたらしいぞ。」

「そうなんだ……………あれ？朝倉さんは？」

「あつちでカモさんと話していましたが。」

スバルが疑問に持つが、刹那が説明した。

すると、6人の元ヘルル・ベルがやってきた。

「しかし、私の知らないスタンド使いがいたなんてね……………  
そうそう、ネギ君、さっきの話なんだけど。」

「えっ、あ、はい……………?」

いきなり話をふられ、ネギはキョトンとする。

「その『告白』、すぐに『断りなさい』！」

「……………!?!?!?」「……………」

ルル・ベルが言ったことに、6人は目を見開く。

「な……………何よ!?!?何でネギが断らなきゃいけないのツ!?!?たしかに、『教師と生徒』の間柄だけど……………だからって、何であんたがそんなこと言つのよツ!?!?」

訳が分からないという表情の明日菜が、ルル・ベルにつっかかる。  
そんな明日菜に対して、ルル・ベルはすましたように言った。





「それじゃあ、私はこれで。」

とんでもない爆弾を投下した張本人は、それだけ言つとさつさと立ち去つてしまった。

残されたネギたちはと言つと……………

「……………ええ……………」

「……………ツ!?!?!?……………」

しばらくしてから、6人の叫び声がホテル内に響いた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CAFE」

> i 1 0 6 9 6 — 4 0 6 <

スタンド名 ハロウィン

本体 朝倉 和美

破壊力 E スピード C 射程距離 A

持続力 A 精密動作性 C 成長性 C

能力 デジタルカメラやビデオカメラを介して発現する能力。

射程距離内で自由に撮影することができる、『歩く遠隔操作カメラ』のスタンド。

スタンドの象<sup>ワイジョン</sup>を出さずに、カメラに取り憑かせてつかうことも可能。

スタンドが取りついているため、普通は撮影できない『スタンドの象』<sup>ワイジョン</sup>も撮影することができる。

複数体出せるらしく、最大6体操縦できるようだ。

カメラを介して発現しているため、スタンドのダメージはカメラへのダメージである。

## #48 / 朝倉 和美の収穫（後書き）

48話です。

・サブタイトルは『しげ重ちーのハイヴェスト収穫』から。

・ネギのごまかしは、イカサマサイコロの時の仗助+私の空耳から（笑）

・朝倉と露伴。この出会いが何をもたらすのか、それはお楽しみに。

・この作品にはしずな先生がいないため、違う形で朝倉が探りに出てます。サブタイトルの通り、朝倉は重ちーのように『スタンド使いだと自覚していないスタンド使い』にしてみました。『ハロウィン』の能力も、ハーヴェストを多少意識しています。スタンド名はドイツのロックバンドから。

・ルル・ベルの告白には、実は訳があります。それは、後2〜3話したら判明する予定。

では！

#49 / 愛と欲望のキッス ? (前書き)

今回、ギャグが多めになってます。ご注意ください。

## # 49 / 愛と欲望のキッス ?

ホテル嵐山

ネギと仗助の部屋

「あああああ……僕は……僕はどうしたら……」  
「で、ネギはあんな状態になった、と……」

明日菜たちに事情を聞き、頭を抱えて悩むネギを見ながら仗助は咳いた。

昼はのどかに、そしてつい先程ルル・ベルにと、一日に2人の女子に告白されたネギは、先程よりも更に激しく悩んでいた。

「しかし、宮崎はともかく、ルル・ベルのやつは昨日今日会ったんだぜ？それなのに、何でネギは『アニメ一話見逃したらアスナが死んだ』みたいにシヨック受けてんだ？」

「ちよつと、そのネタ持つてこないでよ！……ネギはね、あれよ、、『どつちの気持ちも無駄にできない』性格なのよ」。

何故か、アニメ一期の最終回付近で例える徐倫につっこみつつ、徐倫に説明する明日菜。確かにあれの前話を見逃したら、かなりのシヨックを受けるが。

「つーか、ルル・ベルはいつネギに惚れたんだ？」

「うーん……ルルちゃん（ルルちゃんルル・ベルのこと）、スタンド使いを生み出してたから、その時にネギ君見かけて一目惚れ

とか？」

「なるほど、それならあり得るな。」

スバルの推測に徐倫が賛同する。

しかし『ルルちゃん』とは……いつの間に呼び名を付けたのやら……

……

「うつつ……会ったのは昨日だけでも……でも、その「気持ち」を無駄には……でも宮崎さんの告白も……でも……ああ

あああ……」

「あー、こりゃあ重症だな……」

頭を抱え悩むネギを見ながら、仗助は呟くしかなかった……

#49 / 愛と欲望のキッス ?

「んじゃ東方先生、ネギをお願いね。」

「おう。おめーらも、新田先生に見つかんねーように気をつけるよ。見つかったら、厄介だしな。」

見回りのために部屋を出る明日菜たちに、仗助が言う。ネギはだいぶ落ち着いたのか、眠り始めていた。

(ルル・ベルのやつが『あやか』並にベタ惚れなら『寝込み』を襲いかねないが、念のためにな。)

(今のいいんちよには「リミッター」がかかっているから心配はないけど、ルル・ベルにそれがあるとは限らないしね……………)

堅物で融通の効かない新田先生に聞かれたら色々と面倒なので、小声で話す一同。

上の階からは、A組の皆がやかましい声が聞こえていた。

(あいつら……………)

(昨日お酒のせいで寝ちゃったから、その分ハシャぐ気満々だね……………)

徐倫たちが呆れていた、そんな時だ

「コリアアツA組ッ!!! いい加減にせんかアーーーーッ!!!!!!!!」

(……………ほーら、あーなった……………)

新田先生の怒鳴り声が、上階から聞こえてきた。

「昨日は珍しく静かだと思えば…いくら担任のネギ先生が優しいからと言って、「学園広域生活指導員」のワシがいる限り、好き勝手はさせんぞッ!!!」





「あこがれるウ！」

新田先生が立ち去った途端、A組一同が徐倫を称えだした。

(な……………何かスゴいポジションにいるんだね、空条さんって……………)

(まあ……………徐倫って、結構勇気あるからね、良くも悪くも……………)

「でも、退出できないのは、変わりないよね……………？」

「！あ……………朝倉さん……………!？」

と、いつの間にか壁に寄りかかり腕を組んだ朝倉が、嘲笑してあやかたちに話しかけてきた。

「ねえ、このまま夜が終わるのはもったいないでしょ？私から、『ゲーム』の提案があるんだけど、A組で派手にやってみない……………?」

「ゲーム……?」「何それ……………？」

「賛成……………!」「反対……………!」「正座やダー……………」

「な、何を言っているんですのツ!?そんなの、委員長として……………」

「……………」

朝倉の突然の提案に、A組一同は賛否両論、あやかも反対していた。

「その名も!」ネギ先生の唇を奪え!ラブラブキッス大作戦!……………」

「許可します!委員長としてツ……………」

「切り替え早ッ!!?」「」

ゲームの内容を聞くまでは……

「……徐倫、いいんちよの「リミッター」が外れたわよ?」

「あ、ヤバいなこれ……あやかもう止まんないぞ……修学旅行のテンションに任せて暴走する……」

暴走を始めるあやかに、徐倫たちは呆れていた……

「ルールは簡単ッ!!」

1. 各班代表二人で参加
2. 武器は「枕」のみ。それ以外は認めません。
3. ゴールは、ネギ先生の「唇」!奪い取った者の班が優勝。
4. ただし、新田先生に見つかったら、文句言わずに正座!死して屍拾うものなし!

優勝者には、豪華景品がもらえるよー」

「……おー……!」「」「」「」

(みんなテンション高いねえ……)

(「ゴールが『ネギの唇』ってのが気になるな……朝倉のやつ、何考えてるんだ……?」)

朝倉の行動が気になる徐倫だが、今はあまり派手に動けない状況だ。すぐに朝倉に聞き出そうとしたが、それは叶わなかった。

「ふふっ、面白そうね……………」

「「「?!?!?」「」

背後から、こんな声が聞こえてしまったのだから……………

三人は振り返るが、そこには誰もいなかった。

「い…今の声は……………」

「ルル・ベルツ……………」

「まさか……………ゲームこれに乗じて、ネギを『(性的な意味で)襲う』  
気がッ!！」

どうやらこのゲーム、かなり厄介なことになりそうだ……………

『ラブラブキッズ大作戦』開始数分前

## 六課の部屋

「 という訳で、ネギ君の『貞操』がかなりヤバいらしいから、私たちの部屋でネギ君を預かる事になったよ。」  
「 ……姉たちが見回りに行っている間に、そんな事が……………」  
「 ……たたく、十歳<sup>ガキ</sup>の唇奪って、何が楽しいんだよ……………」

見回りから帰ってきたチンクとノーヴェエに、経緯を話すデイエチ。  
当のネギはというと、まだ寝ている。寝ているままセインが、起こさないよう注意しつつ『デーパー・ダイバー』で連れてきたためだ。

「 ……まあ、ホンヤの事もあるし、邪魔されたら可哀想だし……………」  
「 ……まあね……………あ、さっきアスナに気いたンスけど、何かそのゲームの様子を『生中継』するらしいツスよ？」  
「 ホテルのテレビジャックするって、やりすぎだろ……………」

ノーヴェエが呆れていると、オットーがテレビに手を伸ばすのを見た。



「「「「「本当に何をやってんだあああああああ！!?」」」」」

意外な人物の登場に、ナンバーズ全員が叫んだ。

「何あの人解説なんか引き受けちゃってんだよ!?!」

「面白そうなので、解説引き受けました。」

「届いたアア!?!ノーヴェエの心からの叫び、露伴先生に届いたツスよッ!?!この部屋盗聴されてんじゃないツスか!?!」

「いや、偶然でしょ。」

ノーヴェエとウエンディがつっこむ中、ディエチだけは冷静だった。

ホテル嵐山

露伴と康一の部屋

この部屋で、朝倉と露伴は実況をしていた。ちなみに、康一はカモ

と一緒に機器の操作をしている。「何で僕が……」と文句を言いつつもそつなくこなすあたり、彼の人の良さが伺えるだろう。

「では、ここで選手の紹介ですッ!！」

『ラブラブキッス大作戦』選手紹介

- 1班 鳴滝 史伽&風香姉妹
- 2班 長瀬 楓&古菲
- 3班 雪広 あやか&長谷川 千雨
- 4班 明石 裕奈&佐々木 まき絵
- 5班 綾瀬 夕映&宮崎 のどか

「本命はいいんちよのいる3班!だが、バカレンジャーの『武闘派』!長瀬とくーふえの2班も強敵だあ!」

「僕としては、一見おとなしそうな二人のいる5班に注目したいですな。」

(何気にちゃんと解説してるし……)

「問題児双子コンビの1班や、運動部コンビの4班など、どこも強者ぞろいッ!さあ、果たしてネギ先生の唇を奪い取るのは誰なのかッ!——!」

朝倉が実況する中、カモはほくそ笑んでいた。

(ムフフフ……この『ラブラブキッス大作戦!』を利用して、兄貴との『仮契約』を乱発!そうすりゃ、「仲介料」でうっはうはだぜエ~~~~~)

そう、今回の黒幕はカモだったのだ!





瞳孔がハートマークになり、鼻息の荒いあやかを見て、千雨は説得を諦めた……  
すると

「ん……？」

「へ？」

「あら？」

曲がり角で、裕奈たち4班と鉢合わせしてしまった。

「いいんちよ！」

「まき絵さん！？くっ………！」

モフンッ

「くっぺうッ！」「くっぺうッ！」

両者が見合ったかと思うと、二人同時に枕で攻撃した！  
だが、

「な………何で………私が………？」

まき絵の振るった枕は、どついう訳か千雨を直撃した………  
そのままよろけながら後ずさる千雨だが………

(お、エモノがいつぱいネ)  
タタタタタ………

「へ？」

(チャイナクロススプリットアタ~~~~~ツク!)  
モギヤアツ

「オグオアアツ!?!」

乱入してきた古菲の一撃(枕越し)を喰らい、派手に吹っ飛んでしまった!

吹っ飛びながら、千雨は思った…

てか、別に交叉クロスしてないじゃん!

ドグシャアアアツ

「うおっ!?!なっ、何だア!?!」

突然、目の前を横切った物体に、新田先生は慌てて後ろに引いた。物体は、新田先生の右手にあった扉に派手に突っ込み、破壊音を響かせた。

「な、何だ？何が起きたんだ……！？」

「……あ、その声、新田先生ツスカ？」

「！？は、『長谷川』か！？一体……何………が………」

謎の物体X 否、千雨の声を聞き、問いただすために扉の中を見た新田先生だが、次の瞬間、口が塞がった。  
なぜなら、千雨は

「……あ……、やっぱり『東大寺』のおみくじあたるなア  
……『水難の相』出てたもん………」

ブリッジをするような形で、便器に頭をつっこんでいたのだから……  
……  
そう、千雨が突っ込んだ扉は、『御手洗い』だったのだ………

「……………何があったか、話してくれるか？」

あまりにもありえない光景に目が点になっていた新田先生だが、とりあえず聞いてみることにした。

「いやね、班部屋近くのトイレに空条が入ってたから、どうか空いてるトイレないかなあ〜って探してたら、突然、飛んできた枕越しにドロップキック喰らいまして……………いや、空いてるトイレ見つかったからいいんですけどね……………」

「そうか……………まあ、トイレなら退出許可したのは私だが……………」  
とりあえず、それらしい言い訳をする千雨。色々とありえないが、筋は通っていた。

「あ、私は自力で出るんで、新田先生はソイツらを。」

「わ、分かった。無理そうだったら、言ってくれたまえ。」

意外と余裕そうだったので、新田先生は千雨が飛んできた方向へ、吹っ飛ばした犯人を探しに行った。

### スポットン

「……………ふう、何とか誤魔化せたな……………さて、部屋帰るか……………  
……………出る前に『明石』の悲鳴が聞こえたが……………ま、私にやあ関係ないがな。」

数分後、自力で脱出した千雨は、班部屋へと歩いていった。

長谷川 千雨  
撤退  
明石 裕奈  
脱落

ホテル嵐山 外

ホテルの外壁、屋根のすぐしたにある出っ張りを、コソコソと這う形で進む二つの影があった。

「ゆ、ゆえ〜〜…何でこんな『部活』みたいなことしてるの〜  
〜?」

影 のどかは、先行する夕映に向かい聞いていた。

「私の見立てでは、このルートが最も『安全』かつ『速い』のです。ネギ先生のいる『教員部屋』は端っこですので、どうやっても敵や新田先生と当たってしまいます……」

「そっか……だから裏手の『非常階段』からすぐに中に入れば……でも、『非常口』には「鍵」がかかっているかも……」

地図を見せながら説明する夕映に、のどかは不安を漏らす。

「こんなこともあるのかと、あらかじめ鍵を開けておいたです。」

「ゆ……ゆえすごい……さすが……」

「コラのどか！お礼は目的を……」

「「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア」」

「「ツ！！？」」

二人の会話は、突如響いた悲鳴により中断された。

「い……今のは……」

「鳴滝さんたち！？」

「キヤアアアアアアな、何これ！？オクラが……オクラがアアア

アーーーー！」

「回って……跳ねて……か……か……」

「カムチャツカナイトファイバ~~~~~」

「……………」

悲鳴に次いで叫びが聞こえた後、急に静かになると、二人は訳が分からず固まった。

(ゆ…………… ゆゆゆゆゆゆゆえ~~~~~！何が起こってるの！？向こうで一体何が起こってるのオオオオオオーーーー！！？)

(わ…………… 分かりません！分かりませんが…………… 鳴滝さんたちに何かあったのは確かです……………！)

混乱してはいるが、とりあえず「鳴滝姉妹がピンチ」という事は理解した二人。

恐る恐る非常口の扉を開いた二人が目にしたのは

「……………！そ……………そんな……………」

非情にも





生八つ橋まみれになり気絶した鳴滝姉妹だった……

「スツゴく『ニツキ（生八つ橋に練り込まれている香辛料）』臭いッ！！？オクラは？」

「鳴滝さんたちッ！！」

『ジャンプ三大ツッコミ師』の一人、某鼻毛漫画の少女みたいなツッコミを放つのだかに対し、夕映は鳴滝姉妹に近寄るが……

「ダメでしょ、食べ物を粗末にしたらッ！！」

「ゆえ、正しいけど間違ってるよッ！？」

微妙にズレた声のかけ方をする夕映。どうやら、まだ混乱しているらしい。

「命に別状はなさそうですね……誰がこんな事を……？」

「まあ、八つ橋で死ぬなんてことありえないし……！？」

夕映に対してつつこみを入れるののだが、不意に、夕映頭上に気配を感じる！

「ゆえッ」

グイイッ

「！？」

のどかはすかさず『イノセント・スターター』で夕映を引きつける  
と、夕映のいた場所に、銀髪のコスロリがペナントを振り下ろしな  
がら「降ってきた」!

「 あら、勘がいいのね……」

「 ……! …… あなたはいつぞやの……! 」

「 ルル・ベルさん! 」

何故か右手に『京都』と書かれたペナントを持ったルル・ベルは、  
怪しげな笑みを浮かべつつ、のどかたちに振り向いた。

「 まさか…… 鳴滝さんたちはあなたが……? 」

「 ええ、「邪魔者」は早めにつぶした方がよいしね……」

小馬鹿にしたように言うルル・ベル。夕映はむっとした表情をして、  
ルル・ベルにつかつかと近寄ると……

ゴッ

「 あたッ! 」

「 夕映! 」

どこから取り出したのか、ハードカバーの哲学の本でルル・ベルを  
殴った!

「 ダメでしょ、食べ物を粗末にしたらッ! 」

「 ……えっ、そっち! 」

「 おじい様が言っていました…… 食べ物を粗末にする女性は、粗  
末にしたしっぺ返しを受ける、と。 」

「 ……えっ、そうじ! 」

だが、殴った理由が『天の道を往く』ような事だったため、のどかとルル・ベルは呆気にとられた……

「しかし……鳴滝さんたちを『邪魔者』と呼ぶとは……もしかあなた……」

「いきなり話戻したわね……ええそうよ、宮崎 のどか、あなたにネギ君とキスされたらこまるのよ……まあ、双子は私の障害になりそうだったからね……」

「えっ……!?」

夕映に殴られた所をさすりながら、ルル・ベルは説明した。

「……のどかを名指しとは……のどかッ！この人は私が食い止めます！早くネギ先生の所に!!」

「えっ、う、うんッ!!」

哲学の本を二冊装備した夕映に後押しされ、のどかはネギの部屋に向かい駆け出す。だが！

「させないわ!」

シュババババツ

「ペ、ペナントが!？」

「のどかッ!!」

無数のペナントが、まるで捕らえるかの如くのどかに襲いかかる！

「てやー！ーッ！！」  
パシパシパシパシパシッ  
「「「！？」」」

だが、突如伸びてきた『鞭のようなもの』に、ペナントが全て撃ち落とされた！

「い……今は……！」  
「……あら、もう来たのね……」

「全く……何か企んでるとは感じていましたが……こんな事だったとは思いませんでしたわよ！ルル・ベルさんッ！！」

いつの間にチームを組んだのか、あやかとまき絵が、威風堂々と構えていた。

鳴滝姉妹      脱落

t o b e c o n t i n u e d . . .

## #49 / 愛と欲望のキッス ? (後書き)

49話です。

・サブタイトルは『愛と復讐のキッス』から。

・アニメ一期のくだりは、私の実体験です(笑) あれにはマジでビビりました(笑)

・原作でも修学旅行2日目は楽しい雰囲気だったので、今回はギャグを全面に押し出してみました。参考資料はポーボボと銀魂です。

・ルル・ベル乱入。若干キャラが崩壊してます(笑)

・次回、ルル・ベルの告白の真相が明らかに

!?

では!

#50 / 愛と欲望のキッス ? (前書き)

今回も、ギャグ全開です (^| ^;) )

## #50 / 愛と欲望のキツス ?

「さあッ、大変な事になってまいりましたアッ!!」

実況する朝倉は、興奮したようにマイクに叫んでいた。

「突如現れ、鳴滝姉妹を何故か『生八つ橋まみれ』にして脱落させた乱入者と遭遇してしまつた5班の図書館探検部コンビッ! 助太刀するかの如く参上した3班と4班の合併チームも加わり、乱入者の撃退に挑みますッ!!」

「というか、誰なんでしょうねあの娘? (本当は知ってるけど。)

「……………な、何か大変な事になってきたよ……………?」

横で機器を操作していた康一は、隣にいたカモに話しかけた。だが、当のカモは……………

「いや、ルル・ベルの嬢ちゃんと仮契約すりゃあかなりの戦力になるッ! こりゃあ使えるぜえーッ!! いやー、しかし嬢ちゃん、いつの間に兄貴にホレたんだあ……………?」

「……………」

全く問題視していなかった。

少しイラついた康一は、

ピシッ

「ピヤウッ!?!」

『ピシッ』の文字を、カモに食らわせた。

ホテル嵐山

とある部屋

「なあ、本当に何もなくなっていいのか?」



「良いんだ。本人が自分一人でやると言っていたんだからな。」  
「そうか……………あ、それポン。」  
「ん、そうか……………」  
「しっかし、お嬢が『あんな趣味』だとは知らなかったねエ……………」  
ヒョイ  
「…………… 本人も、本当は語りたくない事だったらしいからな……………  
あまり詮索するなよ？」  
「そうかい……………」パチッ  
「ロンだ。」バンッ  
「うおっ!？」

ブチャラティを加えたルル・ベル一味の男性陣は、雀卓を囲いながらそんな話をしていた……………

## #50 / 愛と欲望のキッス ?

「……………何か、ホテルが騒なかがしいですね。」  
「…………… 始まったらしいな……………」

外を見回りにしていた徐倫、エリオ、キャロの3人（徐倫は当初、ガキのお守りともらしていた）は、ホテル内が騒がしいのに気づいた。

「もーちよいでスバルらと合流だったんだが……………どうやら、さっさと戻った方が良さそうね。」

「そうですね……………」

「やっぱり、ルル・ベルさんが何かしてるんでしょうか……………」  
「？」

キヤロが疑問をもらしたその時だ。

「 ああ、そうやで。」

「 「ッ！？」 「」

不意に、背後から声をかけられた。

振り向くと、そこにはエリオ達位の少年がいた。腰まである黒い髪を後ろでまとめ、生意気そうなツリ目に不適な笑みを浮かべた口、服装は学ランをはだけさせ、下はTシャツ一枚だ。

だが、この少年の外見で最も目を引くのは、頭に鎮座した『犬耳』と、ズボンから飛び出した『尻尾』だ。

時折ピコピコと動いているため、どうやら飾りではないらしい。

「ルル・ベルのねーちゃん、何や『今夜告る』言うてな、オレは別にかまへんけど、あんたらが邪魔するかも言うて、足止め頼まれたわけや。」

「君、ルル・ベルさんの仲間？（何か、アルフさんみたいだな……………」

…）」

（『今夜告る』？そのための足止めって……………？）

少年に問いかけるエリオだが、一方徐倫は、少年の言葉に違和感を感じた。

「ああ、犬上いぬがみ 小太郎こたろうや。よろしゅーな、チビ。」

「なッ……………！君だって、僕と同じくらいの背じゃないかッ！」

(……………あれ？)

「はんッ、けど『耳』の分、オレのが上やで。」

「いや、それはズルいよ！ていうか何だよその耳！？おしゃれのつもり？はつきり言つて変だよ！尻尾も。」

(この2人……………？)

エリオと少年　小太郎が口喧嘩している中、徐倫とキヤロは、あることに気付いた。

「これは『自前』やどアホッ！！ハツ目　無名異の舌と同じで。」

「自前？何、それ本物モノホンなの？君、使い魔か何か？ていうか、無名異つて誰？」

「誰がやッ！！オレは『狗族』くそくのハーフや！ジャパニーズ・狼男ウルフマンッ！！無名異知らんのか？るる剣読んどらんのか？」

「へえ、97世界しちじゅうちにもいるんだ、君みたいな変なの。ごめん、『京都編』きょうとまでしか読んでないや、るる剣。」

「何やとっ！？いや、おもしろいで『人誅編』じんしゅうも。」

(……………この2人、声ソツクリだ……………)

ルル・ベルの目的よりも、そっちが気になって仕方がない2人だった……………

## 六課の部屋

「ルル・ベルッ!!」

「やっぱり動いたか……………」

テレビで様子を見ていたノーヴェ達は、ルル・ベルの登場に歯をかみしめた。

だが、ディエチやセインは

「か……………」『カムチャツカナイトフィーバー』……………」

「な……………」何であやかな恐ろしいことを平然とできるんだ…

……………」

ルル・ベルが鳴滝姉妹にした行為に震えていた……………」  
カムチャツカナイトフィーバー

「確かに恐ろしいが……今はそんな話してる場合じゃないから……」  
「どうするチンク姉？出るか？」

チンクに進言するノーヴェ。だが、チンクが口を開く前に、

「いえ、ノーヴェさん。」

「「「「「！？」」「」「」」

ネギがそれを止めた。いつの間にか起きたらしい。

「ネギっ！？」

「お、起きてたのか……！？」

「ええ。みなさんが叫んでいたのです……」

「「「「「あ、すみません。」「」「」」

自分たちのせいでネギを起こしてしまったと知り、謝るナンバーズたちだった。

「あ、いいですから……それはともかく、ルル・ベルさんと宮崎さんの問題は、僕が解決しないといけないのです。」

「で、でもネギくん……」

「大丈夫です。少し寝たら気持ちもちよっと落ち着きましたし、それに、いつまでも先延ばしにはおけないし……」

「ネギ……」

何やら決心をしたのか、その目には『迷い』はなかった。

「何か騒がしくなってきたね……………」  
「ルル・ベルめ……………ついに動いたか……………」

新田先生に見つからないようにホテル内を見回りしていたスバル、ティアナ、明日菜、刹那の4人は、ホテルの騒がしさが増してきたのに気づき、ルル・ベルの仕業と感づいた。

「ネギ君が心配ね……………一旦向かきましょう。」  
「ええ。」

ネギが心配になり、一旦ネギのいる六課の部屋へ向かう事にしたスバルたち。

だが、ある通路に出ると、そこにいたのは、

ドシインッ

「「あйтツ!?!」」

「「「」」……?」「」

楓と古菲が、正面から衝突していた。

「……何してるのよ、あんたたち……?」

「あ、アスナにスバルたち。」

「うむ……実は『能力者』困まれてしまっただけ……」

「えっ!?!」

困められたと聞き、周りを見渡す一同。だが、いたのは……

「ニャ~~~~」

「「」」……『ネコ』?」「」

そう、ネコだ。ロシアンブルー種の子ネコだ。

>i9962-406<

だが、楓と古菲は、その子ネコに警戒していた。

「気を付けよアスナたち……そのネコ、スタンド使いだ!」

「えッ、こんなちっちゃな子ネコが………?」

楓の警告に、明日菜は信じられないというような声を上げた。

そんな中、ティアナはハツとした。

「そういえば、承太郎さんが『才能があれば、犬やドブネズミですらスタンド使いになれる』って言っていたような………」

ティアナが呟いた時、子ネコの体表に『矢印』を組み合わせて描かれた「緑青と茜色の眼」がいくつも現れた!

それらは子ネコの体表を伝い床に流れ、船虫の如く壁や天井に滑るように移動していくと、最後に現れた大きめの「金色の眼」が、猛スピードで明日菜らに迫る!

「!あの『眼の模様』みたいのがスタンド………!?」

「固まったらマズいわ!散開ッ!」

ティアナの号令の下、四人は散らばるように跳んだ!

「待てッ!!今動いたら………」



ドシインッ

「「「「あйтツ!?!?!」」」」

はずだった……

バラバラに跳んだはずの4人は、何故か自分が跳んだ方向にいた他の皆と『衝突していた』!?!?

「あッ……あれ!?!?おかしいな?みんなとは別の方に跳んだはずなのに……!?!?」

「!?!?あれ?」

明日菜は気付いた。いつの間にか、『金色の眼』が自分らの「足元にある」ことに!

「これがヤツの能力でござる……この『無数の眼』で囲まれた範囲内で『動くもの』全ての「方向感覚」を狂わせ……『金色の眼』に向かわせる!?!」

「つまり、他とは『別の方向』に動いているつもりでも、結局は『同じ方向』に向かっている訳ね……」

ティアナが解説して、ようやく明日菜たちは納得したが、かなり厄介だ。

このようなタイプは本体を叩くのが一番だが、方向感覚を狂わされたらそれも叶わない……

「(だからと言って「狙撃」しようにも、それも『狙いの方向』を狂わされる……『眼のエリア外』に出ようとしても、それも『方向を狂わされて』終わり……)こーいったタイプのスタンドって、よく考えたら……何気にかなり『無敵な』能力なんじゃあないの

「……………」

「ねーねーアスナー、さっきから何の話してるアルか〜〜?」  
「ニヤ〜〜?」

ちなみに、古菲はスタンドが見えない。

本体名                    初音<sup>ハツネ</sup>(ネコ)  
スタンド名                ワイルド・アイズ

### 教員部屋付近

ルル・ベルVS・のどか、夕映、あやか、まき絵

「あなたの目的は、ここまで来れば言わずとも一目瞭然！悪いですが、そんなことさせませんわッ！！まき絵さん、鳴滝さんたちを！」

「りょーかい」  
シユルルンツ

あやかに言われ、離れた場所にいた鳴滝姉妹をリボンで引き寄せるまき絵。

2人が無事なのを確認したあやかは、のどかに向き直り、『ビシィツ』と優雅に構えた。

「『宮崎 のどか』さんツ！察するに、今日先生に「告白」したのはあなたのようですね……………あなたのその『<sup>ライバル</sup>勇氣』に敬意を表し、あなたをわたくしの『正式な好敵手』と認定しますわッ！！」

「えッ！？い、いえー…そんな……………」  
「いいんちよ……………何をこんな時に……………」

いきなり何を言い出すかと、夕映は呆れ顔であやかをみる。だが、あやかはそれに構わずに話し続けた。

「よって、今回は『塩』を送らせてもらいますわ！宮崎さん！早く『ネギ先生のもとへッ』！！」  
「えっ！？」

あやかの言葉に、二人は先程とは違う意味で驚いた。

普段から『ネギ先生LOVE』を掲げているあやかがネギとの「キス」を諦めるなんて、思いもしなかったからだ。

「さあ、早く」

だが、2人の返事など聞く気がないのか、あやかはのどかに早く行くよう背中を押すが……………

ガラッ

「あー……、すっげー言いづらんだがよー……

……ネギ、今部屋にいねえぞ？」

「……」

突然仗助が部屋から顔を出し、ある意味空気を読めていないセリフを放ったため、5人はフリーズした……

そして数秒後



言つと、ルル・ベルは背中に手をやり、何かを掴んだ。それは

「あなた達2人には、『京都三大土産』最後の一つ　『木刀』  
で相手してあげるわ!」

「……………それ、観光地ならどこでも売ってますわよ?」  
「洞爺湖とかね。」

木刀だった。

「……………つーかお前ら、あんま騒ぐんじゃねーぞー?」

ロー

「ええーと……………宮崎さんは……………」

のどかたちとルル・ベルが離れたのを確認して部屋を出たネギは、  
とりあえずロビーから探すことにした。

「あつ……………ネギ先生……………？」

「あ……………宮崎さん……………」

そんなとき、のどかが後ろにいることに気付いた。どうやら、今ロ  
ビーに来たらしい。

「あ……………あの、お昼の事なんですけど……………」

「えっ……………い……………いえー……………あのことはいいんです……………聞いてもら  
えただけで……………」

突然、昼間の『告白』について振られたため、のどかはあわあわと  
テンパリ始めた。

ネギの方も、顔を真っ赤にしていた。

「……………いいんですか？小太郎さんとエリオくん置いて来ちゃって……………」

「……………いいんだよ。あのままロゲンカさせときゃあ……………ん？あれは……………」

一方、小太郎から何とか逃げた徐倫とキャロも、何やら2人の様子  
に気づき、陰に隠れた。

「……………すみません宮崎さん……………ぼ、僕、まだ『誰かを好きに……………」

なる』とか……よくわからなくて……いえ……もちろん、宮崎さんの事は『好き』です……でも僕……クラスのみんなの事が好きだし……あ……それにあの……やっぱし『先生』と『生徒』だし……」

「い、いえ……あの……そんな……」

ネギの返事に、のどかは申し訳なさそうになるが、ネギは話し続ける。

「だ……だから僕、宮崎さんにちゃんとしたお返事はできないんですけど……その……」

あの、と、『お友達』から始めませんか？

「……はいッ。」

ネギの提案に、のどかは快く答えた。

『友達から』      それがネギの出した答えだった。

「あの、徐倫さん……あれで良かったんですかねえ？」

「まあ、恋なんてそんなモンだよ。宮崎みたいな性格は、<sup>タイプ</sup>ゆっくりと進めて行った方がいいんだよ……」



「『友達から』……………ねえ……………まあ、良いとしまし  
よう……………」

「「「「「「!?」「」「」「」

のどからが安堵の息を漏らした時、通路の方からルル・ベルが来て  
いた。その体には、千切れたリボンが巻き付いている……………

「ルル・ベルさんッ!?!」

「まさか……………いいんちよ達が……………?」

「ああ、あの2人は無事よ……………でも、もう少ししたら、追いついて  
くるかもね……………」

普段と同じように、余裕の笑みを浮かべるルル・ベル。だが、すぐ  
にそれは、獲物を狩らんとする猛禽類の瞳 否、ハート型の  
瞳に変わった!

「悪いけど、私はせつかちなの……………行くわよオオオッ!」

言うやいなや、ルル・ベルは駆け出した!

「させませんよッ!?!のどか!早くネギ先生とッ!」

「えっ!?!えっ!?!」

何がなんだか分からないネギをよそに、ルル・ベルから庇うように  
同じく駆け出した夕映!さらに……………

「させませんわよッ!?!」

「ごめんゆえッ逃がしちゃったッ!?!」



(あ……………あそこまで完璧なルパンダイクは始めてみたぞ……………ル  
ル・ベルめ……………どこであんな技を……………！？いや、それよりも…  
……………)  
「ネギツ逃げろオオオオオオ！！」  
「いや、もう手遅れですわ……………！！」  
「のどかアアアアアアツ！！」  
徐倫たちの悲痛な叫びもむなしく、ルル・ベルはついに、ネギの肩  
に手を置いた。

そして、そのまま

「邪魔よ。」  
ドンッ



なななななななななな！?!?!?!?)

すぐに離れたが、あり得なさすぎる展開に混乱する2人。しばし、沈黙があたりを包むが、ふと、ネギは気付いた。

「……………あれ?じゃあ、ルル・ベルさんは……………?」  
「え?……………」

ネギに言われ、夕映も気付いた。  
恐る恐る、ルル・ベルの方を向くと

ズッキュウウウー……

「……………え……………えええええ……………」

ルル・ベルが、のどかの唇に自分の唇を押しつけている最中だった……………  
その行為に、のどかやネギたち、更に、テレビにかじり付いていた者たちを含めた全員が、フリーズした。

しばらく押しつけていたルル・ベルだが、のどかが勢いよく、ルル・ベルから無理やり離れた。

「!? なッ!? 何を……………!?!?」

「好きですッ!! 付き合って!!!!」

「……………はい?」

突然のキスに混乱するのどかだが、更に告白され、目が点になった。

「あなたが好きなのよオツ!! 一目見たその時から!! ずっと、ずっとよッ!! かわいらしい瞳に、大人しい仕草……………もう、私の好みだったわ!!」

そんなのどかに構わず、ルル・ベルは続けた。意外にも、惚れた理由はスバルの推測通りだったりする。

「そしてあの時、そう、『夜叉丸』との戦いの時! 勇気を振り絞り、『スペーススマン』の謎を解いたあなたを見て! 『恋の炎』はさらに燃えたわあ!! 『気弱なのに、勇気があるなんて』ってね……………もう、あなたのことしか考えられないのよオオオ!!」

「あ……………あの……………?」

妙なハイテンションで愛を叫ぶルル・ベルに対し、のどかは完全に引いていた。

「お願いッ! 私だけのものになって!! あんな男に汚される位なら、私が汚してあげるわッ!!」

「え……………ええええ……………」

終いには、この小説の存亡が危うくなりかねない事まで言い出すルル・ベル。

お願い、それ以上はやめて……やっと50話まで行ったんだから……

……

「大丈夫よ……ハアハア……最初は『圧迫祭り』から始めて……

その先は」

「当て身。」

トンツ

「うつ！？」

ドサツ

と、何か完全に目が『イツちゃってる』ルル・ベルが、いきなり気絶した……

「全く……ようやくネコから解放されて来てみれば……」

「ラ……ランスターさん！？」

気絶したルル・ベルの背後には、いつの間にもやらティアナたち4人がいた。

「……悪い、私としたことが、フリーズしてたわ……」

「あー、大丈夫大丈夫……」

「しかし……今のはどういう状況だったんですか？」

どうやら最初から見ていなかったスバルたちに、ようやく復活したネギたちを交え徐倫が語った。

「……私らは、ルル・ベルの告白を『自分も「ネギが」好きだから、私だけのものになれ』って受け止めていた……」

「あの人、そんな事言っただんですか……でも、実際は……」  
「『自分も「私が」好きだから、私から手を引け』って意味だったんですね……」

夕映とのどかが徐倫に続いた時、ネギたちは気絶するルル・ベルを見ながら呆れていた……

「……おい、新田来たぞッ!!」

「ヤバッ!？」

徐倫の一言で、ネギたちは気絶したルル・ベルを連れ、撤退していた。

「……あれ？結局私一人!？」

一人、ロビーで正座する裕奈を残して……

綾瀬 夕映 『ネギ先生の唇を奪え!ラブラブキッス大作戦!  
!』優勝。

だが、のどかをさしおいて自分がネギとキスしてしまった嫌悪感で、その夜眠れなかった……

宮崎 のどか どうやらルル・ベルに魔法的才能があったらしく、  
『ルル・ベルとの仮契約』が成立した。

明石 裕奈 一人寂しく朝まで正座してた。



t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

名前 ルル・ベル

年齢 14歳

1993年12月5日生まれ

好きなもの 紅茶、お茶菓子、女の子、ゴスロリ、歌うこと（アニソンから洋楽、演歌まで。ただし、マイクを握ったら離さないタイプ）

嫌いなもの 男、キムチ

よく見るドラマ 「科捜研の女」シリーズ

備考 母は『左手が右手の男』J・ガイルの妹『ヴィオレッタ・ガイル』で、彼女も『左手が右手』である。

J・ガイルの復讐に燃える母が見ていられなくなり、それを阻止しようとしてスタンド使いを各地で集めていた。

過去にインドで浮浪者に『口では言えないようなひどい行為』をされた影響で男嫌いになり、同姓、つまり女性しか『恋愛対象』として見れなくなった。

現在は宮崎 のどかに恋をしている。

スタンド名 『サイケデリック・インサニティ』

## #50 / 愛と欲望のキッス ? (後書き)

50話です。とりあえず一言……

こんなオチでごめんなさいm( | | )m

・冒頭の麻雀のシーン、あまり詳しく書かれていないのは、私が麻雀詳しくないからです( ^ | ^ ; )

・小太郎はどういう扱いにするか色々考えて、ルル・ベル側にしました。後、小太郎とエリオは中の人同じらしいですね(笑)

・初音登場。実は初期でルル・ベルに撫でられていたネコです。能力『ワールド・アイズ』。こういう能力って、意外と強いですよ。ハーヴェストとか、アトム・ハート・ファーマーとか。

・スタンド名は水樹 奈々さんの楽曲から。名前は、Wのネコと組み合わせると……(笑)

・ルル・ベルは『百合』でした(笑)ルル・ベルのキャラ考えてる時にふと閃きました。小説に「GL設定」出てませんが、ちゃんと『小説家になろう』側に確認はとりました( ^ | ^ ; )

・次回、激闘の3日目！今までギャグに全力全開だったため、少しペース落ちるかも……

では！

# 5 1 / 本山上陸作戦（前書き）

修学旅行3日目。

激闘は、嵐の前のよつに静かに訪れる……………

## # 51 / 本山上陸作戦

宮崎 のどかが『奈良公園でネギに告白』をしたころ……

ミッドチルダ 軌道拘置所

「なんだと……！??」

軌道拘置所でスカリエッティと面会し、「人造魔導師」として蘇生したスタンド使いたちについて話を聞いていた承太郎は、蘇らせた6人のスタンド使い ブチャラティとギアッチョ以外の4人について聞いていたが、スカリエッティの覚えている限りの名前を聞いて信じられない顔をした。

その名前はリゾット、ホルマジオ、スクアーロ、そして

「そいつに、間違いはないんだな……！??」

「あ……ああ、間違いはないよ……今言つた『4人』を、人造魔導師として蘇らせたのは私だ（このプレッシャー……これが空条 承太郎か……！）」

ガラス越しとはいえ、承太郎の圧倒的な<sup>プレッシャー</sup>圧力に若干圧倒されながら

も、スカリエツティは普段通りの余裕な素振りで答えた。

「彼女の注文で、彼には脳に特殊な措置を施してあります。」  
「それを使えば、何の問題もないわけか……………」  
「やれやれ、随分楽しめるオモチャだったろうな……………」

モニターに映るウーノとトーレの話聞いた承太郎は、怒りとあきれの混ざった呟きを漏らした。

なお、クアットロの分のモニターもあるが、彼女は映っていない。  
と言つのも……………」

「お願いです殺さないでお願いです殺さないでお願いです殺さないでお願いです殺さないでお願いです殺さないで……………」

「……………相当トラウマらしいな……………」

「まあ、『首子ヨン』になった訳だしね……………私も全裸にされたし。」

「……………」  
ブチャラティの名前を聞いた途端、独房の片隅で膝を抱えてガクガクと震えていたからだ……………」

翌朝

修学旅行3日目

「うう……………まだニツキ臭い……………」

「全く……………何だったんだ、アイツはア……………」

「あら、鳴滝さんたち。おはようございます。」

目が覚めた鳴滝姉妹が、体の臭いを嗅ぎながら大広間に入ってきた。

「あ、いいんちよ、おはよー。」

「あ、そうだ。ねえ、ボクたち結局あれから気絶しちゃったから分からないんだけど、昨夜は誰が勝ったの……………」

「え……………」

「……………ギクウウツ……………」

突如、史伽から発せられた疑問に、あやかだけではなく他の生徒、特に5班の面々が肩を震わせた。

「な……………鳴滝さん……………？できれば今その話は……………」

「え……………何で……………」

「そうですよ……………教えて下さいよ……………」

「え、いや、ですから……………」

あやかが何とか話をそらそうとするが、2人は食い下がらない。普段ならそれを話題ネタに茶化す他のクラスメートたちだが、昨日の結果を知っているためその話題にはふれないようにしていたため、内心冷や汗ものだ。

一方、当の優勝した夕映は

「ぶつぶつ……私は……ぶつぶつ……なんと愚かしい事を……親友を差し置いて……ぶつぶつ……その『想い人』と口付けなど……いえ、あれは事故のようなものです……ぶつぶつ……ですが……だからといって、『キスをした』という事実は変わらない……私は……私はなんという……ぶつぶつ……」

「ゆ……ゆえ……?」

鳴滝姉妹の一言が引き金になり、何やらヤバいスパイラルにはまっていた……

ハルナは心配そうに声をかけたが、夕映はぶつぶつといつまでも呟いていた。

(うーん……綾瀬に景品カード渡すべきなんだろうけど……渡せないよなああ~~~~~)

ちなみに、景品の『仮契約カードバフティオー』を手にした朝倉も、困り果てていたりする。

この後、釘宮たちから結果を聞いた鳴滝姉妹は、「聞かなければ良



かった……………」と、微妙な表情となったそうなの……………」

ホテル嵐山

休み処

「全くもー……………あのお嬢様はッ」

「まあまあアスナー……………」

一方、明日菜は昨夜のルル・ベルの行動にご立腹だった。それをなだめるスバルたちだが、明日菜の苛立ちは収まらない様子だ。

「……………あれから話を聞いたが、ルル・ベル<sup>あしゅ</sup>、昔起きた出来事が原因で、『女性しか愛せない』らしいが……………」

「だからって、本屋ちゃんに無理やりキスするのはどうなのよッ！

「?あ……………」

「いえ……………もう良いですよ……………アスナさん……………私は気にしてませんから……………ふふ……………」どよーん

「み…宮崎さんー……………」?

うっかり口を滑らせたときを押さえる明日菜だが、すでに遅かったらしく、のどかは暗い笑いを浮かべていた……………

「ま……………まあ、あのお嬢さんとの仮契約は成立して、この通りカードもあるわけなんすけど……………試しに『アーティファクト』でも呼び出してみますか?」

「え?あ、アーティファクト……………ですか?」

と言うとカモは、のどかが数冊の本を周りに浮かべ、そのうちの3冊を手元で開いているデザインの絵が描かれたカード(原作とは微妙にのどかのポーズが違う)を手渡した。

「おうよ!ルル・ベルの嬢ちゃんアーティファクトは兄貴程の魔力はないから『身体能力強化』はできねえが、道具くれえなら出せるはずだぜ。」

「は……………はあ。じゃ、じゃあ試しにー……………」

カモに進められるがままに、のどかは「ア……………アデアット来たれ」と呪文を呟いた。すると……………

ドオオー……………

「ふあッ……………」

「……………本?」

「だね……………」

現れたのは、【DIARIUM EJUS】と表紙に書かれた『本』だ。呼び出した際の強い発光に、のどかは驚いたが、本を落とすことなくキャッチした。

「ま…前にアスナさんたちがするのを見たけど、やっぱり不思議――」

「まあ、私は慣れてるけどね」

「……中は真っ白ですー……あれ？」

パラパラと本をめくっていたのどかは、一ページ目に、文字と絵が浮かび上がるのを見つけた。

「ええーと……4月 日曜日……昨日ですね……」

「何だ？絵日記か？」

徐倫たちも気になって本を覗くと……

4月 日 木曜日

昨日は、ルル・ベルさんに唇をうばわれちゃいました。まさか、あんな趣味だとは思いませんでしたので、ものすごい驚きですー！。いつかは、わたしもロマンチックなキスをネギ先生と

「!?!?!?!?!」

パタンッ

あまりの内容に本を閉じるのどか。

「……………今は、おめーの『心境』か、宮崎?」

「へやあッ?!?!?!?!?!?その……………はい……………」

少し聞きづらそうに問う徐倫に、のどかは蚊の羽音のような声で答える。

恐らく、この本の能力は

アーティファクト

「『人の思考を読む本』

みたいね……………」

「ですね……………」

「おお!こいつああ使い方によっちゃ異常に強力なアイテムだぜ!」

「え……………あの……………」

「あんたはしばらく黙ってなさいッ!!」モギヤアッ

「バウッ!?!」

何やら嫌らしい笑みを浮かべるカモを明日菜が踏み潰す。

そんな時……………



「あのな、私はおめーが宮崎のコト『好きだ』って事を怒ってる訳じゃあないんだよ。ドコのどいつが誰に告ろーが、私の知ったこつちゃあねーんだ。けどなあ~~~~、お前の『愛情表現』は『度』を越してんだよ！告り方とか、その後の行動とかよオー~~~~」

「う~~~~た~~~~確かにやりすぎたかなあ~~~~とは思ってたけど~~~~」

「分かってんなら、しばらく行動は自重しろ！」

説教されて少し落ち込んだ様子のルル・ベルを見て、徐倫は『もう懲りたろう』と思い、最後に注意して立ち去ろうとした。

ルル・ベルは、怯えるのどかの前まで行くと、頬を赤く染め、もじもじしながらのどかに話しかけた。

「のどか~~~~昨日はごめんなさいね。私、昔男の人にヒドいとされてから、男の人を好きになれなくて~~~~それ以来、同じ性別しか好きになれないの~~~~でも~~~~「誰かを本気で好きになる」のは、あなたが初めてなの~~~~それで~~~~あの~~~~と、『友達』でいいから~~~~あの~~~~」

「ルル・ベルさん~~~~はい、そういう事でしたら~~~~」

ルル・ベルの正直な気持ちを聞き、とりあえず「友達」という間柄になった2人。

のどかの返事を聞いたルル・ベルはぱあつ、と笑顔を見せる。離れてそれを見ていた徐倫は、（あいつもあんな顔するんだなあ）と思った。

「~~~~ねえ、今日は確か『完全自由行動』よね？私、あなたと行きたい場所があるんだけど~~~~」

「はい……………どこですかー？」

「ノクターンノベルズ（18禁ページ）  
「オラアッ」  
メメタアア

全く反省していなかった……………

「じゃ、コイツは私に任せる。」

「うん、よろしく。」

「全く自重してませんでしたね……………」

「ていうか、悪化？」

「色々台無しッスね……………」

「あう……………」ブルブル

ストーン・フリーのロープでぐるぐる巻きにされた、気絶するルル・ベルを担いだ徐倫を見送りながら、ネギ達は各々の感想を述べた。

数十分後

渡月橋の袂

「さて、みんなも自由行動だし、今日こそ「親書」を渡しにいけるぞー！」



「よーやくってカンジだなあー……」

今まで、ルル・ベルやら、のどかの告白やらで、親書を届けられなかったネギ。今日こそは『関西呪術協会』の本山へと向かえそうだ。

「このかさんは刹那さんやティアさんがいるし、長谷川さんも、護衛をかねての同行だから、何かあってもスグに動ける。ルル・ベルさんも空条さんが何とかしてくれるみたいだし。」

「まあ、ちうっち（＝千雨）は護衛が必要なほど『ヤワ』じゃねーだろうがな。」

「全くだ。……ってちうっちいうなオコジョッ!!」

いつの間にか、ネギの近くに明日菜、千雨、スバル、そして、ノーヴェとオットー、ブチャラティが来ていた。

「あ、皆さんおそろいで。」

「ああ、徐倫は後から追いつく手筈だ。すぐにでも出れるぞ。」

千雨の号令の元、一同は歩き出した。

「　　そうか、彼奴（まげやつ）がこちらに向かったか……………」

「　　ああ、多分夕方には着くよ。」

「　　ねえ、そろそろ教えてくれない？」

「　　彼らの『目的』はいつたい何だい？」

「　　……………言っただはずじゃ。時が来れば、いずれ教えるとな……………」

とある和室、ソルとルナと会話する仮面の女性は、まだ時ではないと2人を納得させる。

「　　……………ま、そう言うなら仕方ないさ。」

「　　お嬢様にも、あまり深く聞くなって言われてるしね。」

「　　それじゃあ、僕／私達は戻るよ。」

相変わらず息のあつた同時会話を残し、2人は部屋を後にした。

スツ…

「　　良いのですか？あの子がこちらに来れば、『彼ら』も……………」

2人と入れ替わるように部屋に来た細身でメガネの男は、心配そうに女性に話しかける。

「　　……………妾（めかけ）としては、そちらの方が都合じゃがのう……………上手く行けば、事がスグに終わらせられる……………!!」

「　　しかし、それでは」

「　　……………分かっておる……………あの子には、総てを話す日が来たやもしれんな……………」

「……………ここが関西呪術協会の本山……………?」  
「何か……………出そうな雰囲気だな……………」

電車に揺られ、さらに数十分歩いた一同は、ついに関西呪術協会の  
本山の麓、巨大な鳥居の前までたどり着いた。

「よし!こつから先は敵の本拠地だ!!気を引き締めて行くぞツ!  
!」  
「あいよッ!」  
(何か、この人がリーダーやってると、しっくりくるなあ……………)

明日菜がそんな感想を抱きながら、一同は山に入り始める。

「ふふふふふ………来おったわ。」

本山入り口にある竹林から女　天ヶ崎　千草は、ネギ達が来たのを見て、笑みを浮かべた。背後には三つの陰がある。

「千雨も一緒のようだな………今まで着かなかった『決着』、今ここで着けさせてもらっぞ………ッ!!」

ナンバーズ末妹、デイドに取り憑いた『アヌビス神』は、千雨を確認すると、闘志で目をたぎらせた。

「へっ、端から見たら、アヤしい趣味に見えるぜエー。アヌビス神さんよオーー!!」

もう一人は、短い金髪をツンツンに逆立て、青いジャケットはボタンをせず、下のワイシャツも裾がはみ出ている、明らかに「チンピラ」にしか見えない男だ。

「お二方………あまり油断せぬように。」

最後の一人は、コメカミのあたりに後方に延びる『角』を持ち、緑色の長髪で目を閉じた少女で、薄茶色のマントを着込んでいる。

「ふんっ………それで『鏡史郎はん』、あんさんの能力は  
「ああ、『仕掛けてあるぜ』エ〜〜………すでに「発動」してる!」

鏡史郎と呼ばれたチンピラ風の男は、馬鹿にしたような、それでいて自信にあふれたように笑う。

「さいですか……………ほな、後は頼みますえ……………」

そう言つと千草は、その場を後にした。

「千雨……………お前はこの『アヌビス神』が絶ッ……………対に倒すッ……………新  
たに手に入れた、『この能力』<sup>ちから</sup>でなッ!!！」

同じ頃

ここは、関西呪術協会本山からしばらく歩いた所にある茶店。

「……………そうですか、ブチャラティが来ましたか。」

「うん、来るよ。」

「でも、敵が何か『罖』を仕掛けたみたい。」

「ブチャラティは大丈夫だろうけど、スタンド使いが何人かいるからヤバいかもね!」

茶店で抹茶をすすっていたジオルノ・ジョバーナは、ソルとルナの話の聞くと、茶碗と代金を置くと、立ち上がった。

「ごちそうさまでしたー。行きますよ、ミスタ、トリッシュ!」

「はいよ、ボス。」

「いよいよ再会ね……………」

ネギ達が本山に入ってから、さらに数十分後

「……………やっぱりついて来るんですね……………」

「まあ、予感はしていたがな……………」

「大丈夫かな?」

ルル・ベルをどうにか『処理』した後、のどか、ルーテシアと合流し、関西呪術協会本山へ向かう徐倫。だが、彼女らは気づいていた。自分たちの後ろに、

「ほら康一君！後もう少しだから、頑張れよー！」

「……………それ、もう何度目ですか……………？」

露伴と康一が付いてきているのを……………

どうやら場所はネギを『読んで』調べたらしく、時ごととしても、すぐに追いついてきている。

「……………まあ、危険はねーだろ。2人とも強いし」

「はあ……………？」

徐倫の話を、のどかは首を傾げながら、とりあえず相槌を打っていた。

本山まで、5人はまだ歩く。

その先にある「出会い」も知らずに……

t o b e c o n t i n u e d . . . .



## # 51 / 本山上陸作戦（後書き）

51話です。

・サブタイトルは『ヴェネツィア上陸作戦』から。

・冒頭の承太郎とスカリエッティ。承太郎が聞いた名前はもちろんHGの本名です。正体はまだ秘密  
ちなみに怯えるクアットロはお気に入り（笑）

・ルル・ベルは基本自重しません（笑）下手したら、この小説が18禁になります（笑）

・アヌビス神と新キャラ2人。内一人はネギま！原作キャラです。彼女を今出した理由は、後ほどに。

・動き出すパツショーネ組、そして露伴たちも。再会は近いです…

……

・次回は、ついにオットーとディードが……

では！

#52 / リード・マイ・マインド ? (前書き)

京都修学旅行3日目。

再会は、突然に起こる……………

## #52/リード・マイ・マインド？

空条 徐倫がスタンド『ストーン・フリー』に目覚め、スタンドの事件に関わるようになったのは二年前、母に進められ麻帆良学園女子中等部に入学するため、アメリカから日本へ来たばかりの頃だ。

寮に入り、荷物の整理と入学式の準備も済み、後は明日の入学式を待つだけとなったある日、『匿名』で小包が届いた。

中には、石で出来た『鏝』が入っていた。

「趣味の悪いインテリアだなあー……いや、こないだ挨拶した『サクラザキ』の部屋には「鎧甲」があつたな……『火』って兜に付いた………」

鎧甲あられよりかはマシかな？と思った徐倫は、小包から鏝を取りだそうとして、

ザクッ

「~~~~~つたあ~~~~~ツ!?指切つたあー」

ドガシャー……ン

鏝の先で人差し指を怪我してしまった。

怪我は大したことないかすり傷だが、怪我したことに慌てた徐倫は小包から勢いよく手を引き、ちやぶ台をひっくり返した。鏝はその反動で玄關のあたりまでスツ飛んで行った。

「……………何騒いでんだよ徐倫？何、この矢？」

「……………なんでもないよ……………その辺に飾それつといて、鏝。」

鏝を拾った千雨に、徐倫は少し恥ずかしそうに、ひっくり返したちやぶ台を直しながら言った……………

「所で、その紙袋は？」

「なッ！？……………何でもいいだろッ！！」

ちなみに、徐倫が千雨の趣味を知るのは、これから更に一週間後だつたりする。

事件が起きたのは、入学から数日後だ。

寮に帰る途中、徐倫は『ウルスラ高』の生徒が数人、麻帆良中の生徒をイジメているのを見かけた。

それがクラスメートの『イズミ』だと徐倫は気づいた。入学からまだ数日しかたつてないとはいえ、クラスメートがイジメられるのを放っておくほど、徐倫は非情ではなかった。

その中に割って入った徐倫により、その場は何とか切り抜けた。

だが、今度は徐倫が標的にされたらしく、その中でリーダー格らしい『ゲエス』という女子生徒が、後日、徐倫に突っかかってきた。

適当に誤魔化してやり過ぎそうとした徐倫だが、突如、身長が「10cm」にまで縮んでしまった!?

そのまま、寮のゲエスの部屋まで連れて行かれた徐倫は、ゲエスが突然この力、「グーグー・ドールズ」に目覚めた事を聞かされた。

徐倫を『ペット化』しようと思論んだゲエス。

だが、心から強く願った徐倫に伝えるかのように発現した『糸』に気づく。徐倫はそれを駆使して脱出を試みるが、グーグー・ドールズに襲われる!

だが、徐倫はさらに気づいた。

「糸が集まれば『立体』になる……………この「概念」!」

人型になった『糸』で、グーグー・ドールズを撃破し、ゲエスに二度と悪さをするなと脅した徐倫。

徐倫は名付けた。

この力は 『ストーン・フリー』！

それから、徐倫の学生生活は変わったと言えるよう。

『サンダー・マツクイーン』というストーカーが千雨に襲いかかった事を期に、千雨が同じ力を持つ事を知り、この力が『スタンド』という事も知った（ちなみに、千雨の趣味を知ったのも、この時だ。）。

父 承太郎が『矢』を追って麻帆良に来たが、「ホワイト・スネイク」という謎のスタンドに承太郎の『記憶』と『スタンド』を奪わ

れ、取り戻す決意を固めた。

バカレンジャーに勉強を教えている内にか司令官コマンドーにされた上、部屋に押し入られた時、まき絵と楓が矢で怪我をし、スタンドに目覚めた。

「取り立て人　マリリン・マンソン」を操るミラシオンに襲われたのを切り抜けた時、それを見ていたらしいアナスイに勝手に惚れられ、以来しつこく付きまとわれたが、『ポーク・パイ・ハット』小僧に襲われた時、アナスイもスタンド使いだと知った。

当時担任だったウエザーにスタンド『ウエザー・リポート』により助けられた事もあった。

そして夏、黒幕である「エンリコ・プッチ」神父が承太郎の記憶から『天国』に行く方法を知ったために、それを阻止しようとアメリカに渡り、DIOという男の息子たち　ウンガロ、リキエル、ヴェルザスの3人を倒し、ヴェルザスにより記憶を取り戻したウエザーの最凶の能力『ヘビー・ウエザー』も、偶然アメリカに取材に来ていた露伴により再封印後、プッチの野望をギリギリで阻止し、承太郎の記憶とスタンドも取り戻した。

濃厚すぎる数ヶ月が過ぎ去った後、徐倫たちは比較的平和な日常を過ごしていた。

スバル・ナカジマが、潜入捜査のために転入してくるまでは……………

#52ノリード・マイ・マインド？

歩けども歩けども、延々と続く千本鳥居をひたすらに歩くネギ達。すでに30分近く歩いているが、未だにこの千本鳥居を抜け出せずにいた……………

「なあ、いくら何でも、長すぎないか……………?」

「確かに……………山の『面積』も考えて、もう「出口」が見えても良いはずなのに……………?ん?どうしたチサメ?」



千雨の疑問にノーヴェエが返事すると、千雨は何故か意外そうな顔をする。

「いや、お前から『山の面積』なんて「知的なセリフ」が出るなんて思っていなかったから……………」

「確かに。」

「失敬なッ!？」

何故かオットーにまで賛同され、怒ったように怒鳴りつけるノーヴェエ。千雨はともかく、オットーに、それも普段と変わらない口調で言われたのはショックだった……………

「ハア…………ハア…………もう…………京都一周分くらいは…………ハア…………走ったわよ……………」

「やっぱり、何かおかしいですね……………」

「ああ…………アスナ、お前はここで休んでろ。オレたち2人は、先に行つて、様子を見てみる。」

明日菜をスバルたちに任せ、ネギと共に様子を見に行くブチャラテイ。

「…………ノーヴェエさんの言うとおり、全然出口が見えませんか。」

「確かに…………むっ、誰かい…………ッ!?!？」

前方に誰かいるのを確認した2人は、走るスピードを緩めるが、それが誰か気付いて、目を見開く。

それは…………

「えっ？何で2人が『後ろから』来るの!？」

後方にいるはずの、明日菜たちだった!

「こっ……これは……!？」

「もしや……」  
ダッ

「あッ、ブチャラテイさん!？」

ブチャラテイは何かに気づいたのか、再び後方に向かい走り出した。そして、数秒後。

「ッ!」

「えっ!？」

「やはりだ……また皆の所に着く……オレの『歩幅』から計算して、半径500m!その端から先に行くと、反対側に堂々<sup>ドド</sup>巡りする!どうやら閉じ込められたらしいな……この『千本鳥居』の中に……!」

「ええー!ッ!？」

「何で先生とナカジマがいながら気づかなかったんだよッ!？」

青ざめたブチャラテイの言葉に叫ぶ明日菜たちだが、千雨の言葉も正しかった。ネギとスバルは「勝手の違う魔法だし……」と申しわけなさそうに指を合わせる。

「……………あっさりかかりましたね……………」  
「罨」に……………」  
「うーむ……………千雨なら案外見破れるやも思ったが……………」  
「妙に執着するなアー、あのチサメってガキに。」  
「ふふふ……………あの歳であの強さ……………承太郎やポルナレフに匹敵する強さだ……………血がたぎるのだよ……………我が「剣の達人」としての血がなアッ!…」  
「……………血、流れてませんよね？」  
「刀だけに。」  
「……………まあね。」

「ここが『関西呪術協会』とかいう組織の『本山』……………」  
「？」

「うん、間違いはない。ネギくんの『記憶』を読んだから確かだ。」

ネギたちが千本鳥居に閉じ込められたと気づいた頃、入り口には徐倫たちが到着していた。

「何か、『伏見神社』つてのに似てるね。」  
ひよこっ

「あー、ホントだ。ガイドブックのそれと似てるや。」

「アギトちゃん……………で、出てきて大丈夫？」

ガイドブック片手(?)にルーテシアのポケットから出てきたアギトに、のどかがおどおどした様子で話しかける。

「ん?大丈夫だろ、誰も近くにいないし。」

「つか、ちゃんは止める!とアギトが付け加えると、徐倫はルーテシアとのどかに向き直った。

「よし、一応ココは『敵地』だ。簡単に指示を飛ばせるように、ハンドシグナル 要は『サイン』だ。そいつを2つ教えとくぞ。」

言っと、徐倫は右手の親指と人差し指で○<sup>マル</sup>を作った。

「これがOKで、」

次に、人差し指で前の方を指すサインを作った。

「これがGOだ。そんで……………」  
「あの……………私たちならスタンドを使えば……………」  
「私らは念話で。」

次のサインを作ろうとした徐倫に、のどかが控えめに進言する。  
確かにスタンドや念話を使えば、水中でも会話が可能だ。

「……………それもそうだな。」  
「なあ……………なんだあ……………、ハンドシグナルなら私も知ってたのに。」  
言うと、アギトは手をパンツと叩き、次にピースサインをする。そして、OKをした後に、手を目の上に当てた。

「……………パンツーマル見え。」  
「Y E A A A H ツ！！」パンツ  
訪ねるようにアギトにルーテシアが聞くと、アギトはルーテシアの手をパンツと叩いた。そして2人はピシガシググツ、と手を組んだ。

「敵地に乗り込むって時に、くだらねえ事やってねえで、とつとつ  
ッ！」

徐倫はつつこみを入れようとしたが、不意に『何か』を感じ取った。

「……………この『感じ』は……………（あの時と……………」リキエル  
や『ヴェルザス』の時と同じ……………！！）」  
「く……………空条さん……………?）」

徐倫の様子がおかしい事に気づいたのどかが、心配そうに話しかけ

たその時だ。

「ヘイ、てめえら！なああ~~~~にコソコソしてんだア~~~~  
~~~~?」

「~~~~!?!」

背後から、亀を持ったニット帽の男に、拳銃を突きつけられた。とつさにアギトはルーテシアの後ろに隠れ、徐倫はゆっくり振り向くと、男に話しかけた。

「その訛り方と顔立ち……………アンタ、イタリア人か?ここ、アンタん家?」

「おっと、会話が成り立たないアホがひとり登場~~~~~~~~質問文に対し質問文で答えると、テスト0点なの知ってたか?マヌケ。」

「ひどい言われようだな……………とにかく、『イタリア人のアンタ』に、私らが「日本の神社」の前で何をしようが、関係ないだろーが！『銃刀法違反』で警察サツを呼ばれなくなったら、とつとと失せやがれッ!!」

「ジヨ、徐倫ちゃん……………!」

徐倫が喧嘩腰で男に怒鳴るのを見て、康一はあわててなだめようとした。

(あんな風にいつて……………もしヤツが発砲したらどうするつもりだよ

ッ！！）

（まさか…………『ストーン・フリー』で止める気が……………？）

露伴までも、珍しく動揺する。確かにストーン・フリーの精密さがあれば、弾丸を止めることは容易いが、相手がヴィオレッタの配下という可能性もある。拳銃が能力のスタンドスタンド使いとも考えられる。危機を感じた康一がエコーズを発現させようとしたが、それはいらぬ心配となった。

『……………「コーイチ」？コーイチなのか！？』

「えっ……………！？」

どこからともなく、声が聞こえたからだ。

声の主を捜そうと、徐倫たちはキョロキョロと周りを見るが、それらしき影は見当たらない。

「……………知り合いか？「ジヨルノ」？」

「じよるの？」

「ジヨルノだつてッ！！！？」

男が、何故か手に抱えた亀に呼びかけた名前に康一は驚いた。なぜならその名前は…………

（デイ……………『DIO』の息子にして、イタリアでギャングをしている彼の名前！何でこいつはその名前を……………！？）

康一は男をみると、男は何故か、亀を地面に置いていた。
すると……………

ズルウウウウウウウ

「……!?」

「かつ!? 亀からッ!?」

「えッ!? えええええーッ!?!?!?」

「亀」から『人が出てくる』という、衝撃的な光景が、徐倫たちの目の前に広がった……

「ジョ……………ジョルノ・ジョバァーナッ!」

「久しぶりだな、コイチくん。」

「さて、困ったぞ……………」

一方、こちらは閉じ込められたネギたち。

ちょうど良い所に休憩所があったため、トイレ休憩の為に足を休めた一同は、話し合いをしていた。ちなみに、千雨は現在トイレ中だ。

「コイツが『呪術協会』の仕業なら多少厄介だな。スタンドなら本体をブチのめしゃあ解除されるんだが、魔法、それもこーいった『結界』みたいなのは、結界の「要」になるモノを探さなきゃならねえ……………」

「ブチャラテイさんには、ソレが何か分からないんですか？」

「……………すまない、エヴァのおかげで西洋魔術の『知識』はあるんだが、さすがにそこまでは……………」

ネギの質問に、ブチャラテイは申しわけなさそうに答える。一応ノ―ヴェの方にも目をやるが、こちらもダメそうだ。

「つまり、この術をかけたヤツを探して出る方法を聞き出さないと、かなりヤバいつてコトね？」

「ああ。まあ、向こうから攻めてこないと、話にならないが……………！?」

ブチャラテイが言った、その時だ。

「伏せるッー!!」

「えっ!?!」

ズドドドドオオオオオン

「…………ツ!?!?」「…………」

ブチャラテイが叫んだ瞬間、休憩所のトイレの壁と傘が『爆発』した!

「てッ、敵襲ッ!?!」

「千雨ちゃんッ!?!?!」

スバルが周囲に目を張り、明日菜がトイレの千雨の無事を心配して叫ぶ。しばらくして煙が晴れると……

「……………い、一応無事だ。無事なんだが……………」

煙の中から千雨の声が聞こえ、ホッとするネギたち。だが、煙が晴れると……………

「無事なんだが……………ギリギリ『無事じゃなくなりそう』だ……………
……………ッ」

「「「「「！!?」「「「「「「」

デイドに取り憑いた「アヌビス神」の刀を、『エンゼル』の小太刀で鍔迫り合いしている千雨がいた！

「デイド……………デイド……………！!?」

「アヌビス神ッ！！」

「野郎……………『爆発』と同時に切りかかってきやがったッ……………」

「千雨よ……………今度こそは絶……………」

「……………それはいいんだけどよぉー……………せめてパンツはかしてくれない？」

アヌビス神に、恥ずかしげに告げる千雨だった……………

「デイド……………何で……………何で……………！!?？」

「オットー！気持ちは分かるが、しっかりしろッ！！」

パンツをはく千雨を急かすデイドを虚ろな目で見つめながらぶつぶつ呟くオットーに、ノーヴェは叱咤する。

(最悪だ……………このタイミングでアヌビス神アイツが攻めてくるなんて……………)

「デイドッ！！」

「…ってオイ、オットー!?!」

「ん?……………ああ、貴様が『オットー』か。この「デイドの記憶」から読み取ったから知っているぞ……………」

「何……………!?!」

「……………デイドさんはあの刀……………『アヌビス神』に操られてい

るんです……………本体がすでに死んでいて、本体がないスタンド
……………デイドさんを解放するには、まず」

「アヌビス神を手放させるか、あるいは破壊するしかない……………」
「……………!?」「……………」

不意に、声が出た。アヌビス神　デイドのものではない、少
女の声だ。

「ですが、アヌビス神の相手は長谷川　千雨です。あなた方は、私
たちがお相手いたします。」

振り返ると、緑の長髪に後方へ伸びた角を持った少女がいた。そし
て、少女の周りを、「小型のプロペラ機」が飛行している。

「仲間かつ!!」
「……………調シムと申します。」

「（周りを飛んでいるプロペラ機があの人スタンドの能力……………さっきの爆
発はあれがやったのかッ）ブチャラティさん、ここは」

ブチャラティに話しかけるネギだが、当のブチャラティは、『驚愕』
の表情で『プロペラ機型のスタンド』を見つめていた。何故なら、
そのスタンドは

「ば……………バカなツ!?アレは『ナランチャの』……………オ
レの「仲間」のスタンド……………『エアロスミス』ッ!」
「……………えっ!?」

ブチャラティが叫んだ瞬間、かつての彼の仲間『ナランチャ・ギル
ガ』の能力であった『エアロスミス』が、両翼の機関銃を撃ちまく
りながら、ブチャラティたちに向かい突っ込んできた!

「うおっ!?!」
「ブチャラティッ!」

『エアロスミス』の機関銃を避け、散り散りになる一同。『エアロ
スミス』は何故かブチャラティを執拗に追っていき、近くにいたノ
ーヴェも共に襲われていた。とにかく、2人は他の面子に被害が及
ばぬよう、皆から離れる。

「全く、鏡史郎さんもハデなことを……………」

「キョウシロウ……………」

「アンタの他にも、仲間がいるの……………」

残ったネギ、明日菜、スバルは、調と名乗った少女と対峙する。

「ええ、『富良野 鏡史郎』という方が。今はどこかに隠れている
ようですが。そして……………」

調は、マントで隠れた手を出した。手には、

「ッ！『仮契約カード』!？」

「まさか……………ミニステル・マキ従者かッ!？」

「あなた方の相手は、私です。アデアット来たれ。」

ギヤアアアーーーーン

調が静かに告げると、手元にバイオリンが一つ、握られていた……………

「ククク……………ようやく貴様との決着を着ける 때가来たようだな。
千雨よ……………！」

「ああ。私も出来たら、お前とはもう縁切りしたいいな。」

すでに『アニバーサリー・オブ・エンゼル』の鎧を脱ぎ捨てた高速移動形態となった千雨は、アヌビス神と対峙していた。

「デイド……………」

遠くから見守るオットーは、心配そうに見つめる。

彼女としては、すぐにでもデイドを助けるためにアヌビス神を破壊したかったが、2人の間にはなにやら圧倒的な空気が流れているため、割って入れなかった。

「千雨よ……………貴様の能力は理解した。故に、私も策を講じる事にした。これにはッ！」

バツ

「…!?」「…」

いきなり、アヌビス神は己の本体である刀を宙に投げた！刀はクルクルと回転しながら落ちてくると、アヌビス神はそれを右手でキャッチ！だが、左手には

「勝てるかなッ！！千雨ッ！！」

左手には、『バトン』のようなものが握られており、先端からヴウ
ンと音を立てて、『魔法刃』が現れる。

「『ツインブレイズ』プラス『アヌビス神』……………二刀流ッ！」

瞳を邪悪に輝かせ、アヌビス神はまるで死刑申告を告げるように、
言い放った。

本山 千本鳥居

長谷川 千雨VS・アヌビス神

ネギ・スプリングフィールド＋神楽坂 明日菜＋スバル・ナカジマ
VS・調

ブローノ・ブチャラティ＋ノーヴェVS・エアロスミス(?)

三つの戦いの火蓋は、同時に切って落とされた……………

t o b e c o n t i n u e d

「PRIVILEGE CADE」

>i9963—406<

スタンド名 ワイルド・アイズ

本体 初音

破壊力 なし スピード B 射程距離 最大約30m

持続力 A 精密動作性 D 成長性 なし

能力 周りを多数の『目』で包囲する。その範囲内で動くものはすべて方向感覚を狂わされ、『金色の目』へと向かってしまう。

#52/リード・マイ・マインド ? (後書き)

52話です。

・二年前の事に関して質問があったため、簡単にですが書いてみました。内容は6部とさほど変わりませんが、まき絵たちの参戦で色々と変わっていると思って下さい。

・一番最初の再会はジヨルノと康一から。ちなみにこの後、アギトとピストルズの再会もありました。

・次いで、オットーとデイド、最悪の再会。そして調登場。エアロスミスが調のスタンドっぽく出てましたが、実際は鏡史郎でした。能力は後ほど。

・『アヌビス神』プラス『ツインブレイズ』がようやく出せました(笑)ですが、アヌビス神はまだ何かを隠しています。お楽しみに。
では！

#53ノリード・マイ・マインド ? (前書き)

千本鳥居で行われる三極の戦い!

#53 / リード・マイ・マインド ?

ネギ・スプリングフィールド + 神楽坂 明日菜 + スバル・ナカジマ

VS・調

バイオリンを構えた調と対峙するネギたち。あのバイオリンは『アーティストファクト』だ。ただの楽器バイオリンな訳がない。

「……………では、『演奏』を一つ……………」

「何が演奏よっ！てか、アンタ声ちっちゃいのよっ！！」

（あのバイオリンの能力……………音による『催眠』？あるいは「幻覚作用」？）

スバルたちが調のアーティストファクトについて考えを巡らせる中、調は弓を弦にかけた。そして

ギギイイー——

「……………って下手なんかいッ！！？」

あまりの下手さにつっこみを入れた。

その時だ！

ゴカアッ

「コッッ………!?!」「」「」

近くにあった石の手すり粉々、に『破壊』された!

「い………今のは………?」「」

「特殊音波による、純粋な『物理攻撃』です!」

スバルの眩きに、マツハキヤリバーが応える。

「よく分からないけど………要するに、ただの下ツ手くそな演奏じゃないってわけね………?」「」

「まあ、そういうワケです。では、もう一曲………!」「」

「コッバッ!?!」「」

明日菜とスバルが声を上げるのに構わず、調はバイオリンの弓を走らせた。

調（本名不明）

アーティファクト…狂気の提琴

#53ノリード・マイ・マインド？

ブチャラティ+ノーヴェVS・『エアロスミス(?)』

ネギたちが調と対峙している一方、ブチャラティとノーヴェは『エアロスミス』の砲撃から逃げていた。

ノーヴェのシールドで何とか防いでいるが、『エアロスミス』は尚も追尾してくる。

それを見て、ブチャラティは疑問を浮かべた。

「……………妙だな……………攻撃が『正確すぎる』……………?」

「ん?それがどうしたんだ?」

ブチャラティの呟きに、ノーヴェが聞き返す。

「いや、『エアロスミス』は『CO₂(二酸化炭素)』を感知して「遠隔操作」できる分、攻撃は大雑把になってしまっただ。それがこんなに『正確に攻撃してくる』という事は……………」

エアロスミスの砲撃をかわしつつ説明するブチャラティ。そこまで聞いて、ノーヴェは気づいた。

「！そうか、敵は『近くにいる』ってワケか！」

「ああ……………む！そこかッ！」

人影に気づいたブチャラティは、先端が尖るよう竹にジッパーをひつつけると、それを開いた。そして、

「『ステイツキィ・フィンガーズ』！！！」

ドシューウ

やり投げのように『投げた』！エアロスミスが慌てたように竹に集中放火するが、竹の勢いは止まらず、

ドスウツ

「うおっ！？」

地面に突き刺さると、その近くから男 富良野 鏡史郎が出てきた。ブチャラティたちとの距離は、大体15mほどだ。

「お前が本体か！」

「……………ちっ、バレちゃあしかたねえ。おうよ、オレが本体だ。名前は、富良野 鏡史郎。」

鏡史郎が名乗ると、ブチャラティは鏡史郎を睨みつけた。

>i10697—406<

「何故、お前が『エアロスミス』を扱える？それは、死んだ俺の仲間のスタンドだぞ……………」

「へえ、そうなんかい。知らなかったねエ……………」

鏡史郎のふざけた態度に、ブチャラティとノーヴェエはイラツとする。だが鏡史郎はそれにも構わず、エアロスミスを突っ込ませた。

「喰らえツ『エアロスミス』ッ!!」

鏡史郎が叫ぶと同時に、エアロスミスは砲撃を放つ！だが、

ドロドロオオオ……………」

「!!?」

エアロスミスの弾が当たる前に、エアロスミスと、放った弾丸がドロドロに『溶けた』!?

「ちイツ、『時間切れ』か!ツいてねエなア!!」

「時間切れ……………」

鏡史郎が悪態をつくのを見て、ノーヴェエは聞き返した。すると、エ

アロスミス「だった」銀色の液体が、ノーヴェに付着してきた！

「うわッ！な、何だぁー！ー！？」

驚くノーヴェだが、液体はみるみる内に形を変え、やがて、人型となった。それは……

「！！？クッ……………『クレイジー・ダイヤモンド』ッ!？」

仗助のスタンド、『クレイジー・ダイヤモンド』だった。

「ほう……………こりゃ『当たり』引いたかなア」

鏡史郎が言うと同時に、クレイジー・ダイヤモンドが拳を振るつた。とっさに2人は避けるが、ブチャラティの服の袖がパツクリと切られた。

「……………なるほど、さっきは『オレに触れた』訳か……………」
「何……………？（確か、さっきの『アロスミス』は、ブチャラティの仲間のスタンド……………という事は……………ふ……………
……………触れた人間が過去に出会ったスタンドに化ける』能力……………
……………」

ブチャラティの言葉から、鏡史郎のスタンド能力を推測したノーヴェ。確かにそれならば、先ほどの「時間切れ」という言葉にも納得

がいくし、死んだ人間のスタンドに化けたのも説明がつく。

「ヘエ、オレの能力に気づいたかア……………そうだ。オレの『リード・マイ・マインド』は、さっきの「銀色の液体金属」みたいな姿が本当の像だ。ワイジョン後なア…………『姿形を変える』だけじゃあねエゼ……………」

2人は最初、なんの事か分からなかったが、気づいた事があった。

「『能力』も、再現出来るんだぜエー？」

パツクリ切れていたはずのブチャラティの袖が、『直っていた』……………

本体名：富良野 鏡史郎

スタンド名：リード・マイ・マインド

長谷川 千雨VS・アヌビス神憑依デイド

「ウツシャアアアアアッ！」

「ぐっ、……………ウオオオオオオアアア！」

ガギギギギギギギイイイ……………ン

アヌビス神の刀とツインブレイズで連続に切りつけてくるアヌビス神に、千雨も負けじと小太刀を振るう。だが、攻めるアヌビス神に対し千雨は防戦一方といった感じだ。

「ちいっ……………（こいつ……………今までで一番の太刀筋だ……………これまで私とやりあって、その中で着実に進化していったのか……………けど！）だからってエ……………ッ！！」

シュピイイイイン

「！？」

「消え……………？」

瞬間、アヌビス神とオットーは、千雨を『見失った』！？

「どこ見てんだ？」

「ッ！！？？」

「くっ……………！」

ガギイイイーン

突然、アヌビス神の背後をとり、切りかかる千雨！だが、アヌビス神はとつさに背後に双剣を背後に回して防御する。

「危ない危ない……………お前は『残像』を残すほどの速さを持っているんだっただな……………お前のスピードを『憶えて』いなければ、防げなかった……………だが、今は憶えていたスピードよりも、少し速かったか？」

「へっ、そうかよ……………（やっぱりこの状態バレてるのはまずかったなあ……………）」

（だが今の攻撃……………）

離れて見ていたオットーは、デイドの髪が数本、はらりと宙に舞うのを見た。

（アヌビス神は一瞬、反応が遅かった……………）

（つまり、アヌビス神は私のスピードを憶えているが、完全に追いついてる訳じゃあないんだ……………）

千雨も、オットーと同じ事を考えていた。

アヌビス神は千雨のスピードに加え、承太郎のスタープラチナや千雨の父ポルナレフのシルバー・チャリオッツのスピードも憶えている。だが、千雨の本来のスピード エンゼルの甲冑を脱いだスピードを、完全に憶えたわけではないのだ。

「…いや、『出せない』からだ。何故なら
…というのも、千雨はまだ『本気のスピード』を出していない……

（さっきのが、今の私が出せるギリギリのスピード……それ以上出したら『リキエル』の時みたく……）

実は、千雨が『アニバーサリー・オブ・エンゼル』の甲冑を脱いだ状態で作せるスピードに限界があった。ある一定の速度以上を出すと、千雨の体が持たないのだ。

実際、二年前にリキエルのスタンド『スカイ・ハイ』と戦った際、ロツズに追いつかれないスピードを出し、内臓の一部が潰れた事があった。

「（とにかく、今はこのスピードと技量ワザで
）振り切るッ

「！！」
「シュババババババババババババ」

「なッ！？これは
」

瞬間、アヌビス神の上空を、無数の千雨が取り囲んだ！

「……………霧幻月華・陣！！」「……………」

「『霧幻月華』の強化版かッ！だがッ！！」

「なるほど……………なかなか『味な』防ぎ方をしますね……………」

感心したように、調は呟いた。彼女の目の前では、スバルがその瞳を「金色」に光らせた『機人モード』になり、ネギたちの盾になるように立っていた。

「『音波』と『振動波』という違いがあるが、お前のアーティファクトと私のIS「振動破碎」の原理は同じだ。だから『相殺』できる。」

「でも……………でも、その防ぎ方だと、スバルさんが……………」

ネギが心配する通り、スバルの右手からは血が流れていた。相殺できるとは言え、直接触れる『振動破碎』に対し、音波を『遠距離』に放つ狂気の提琴とでは、スバルが不利だった。

「（タイミングが一瞬ズレて傷ついた……………もしも完全にズレたら、スバルは……………）スバル！ネギ！一気に決めるわよ！」

「えっ？あ、アスナ？」

『ハマノツルギ』を手にした明日菜が、前に出た。

「『アレ』は私とスバルが防ぐから、ネギはアイツに近づいて、一
気に決めなさいッ!!」

「え……………あ、はいッ!!」

いきなり明日菜が仕切りだしたのに一瞬戸惑う2人だが、すぐに目を調に戻した。

「行くわよ!!」

明日菜が叫ぶと、3人は駆け出した!

「……………無駄なことを……………」

咄くと、調は弓を走らせる!

放たれた音波はスバルたちを襲うが、スバルの振動破砕と、明日菜のハマノツルギで防ぐ。そして、その距離が縮まった時

「^{タスク}牙ッ!!」

ドババババツ

「きましたか……………だがッ!!」

ギイイイイン

「防いだ!?!」

「だがアッ!!」

牙を止められたが、3人はさらに攻撃を仕掛ける。だが……………

……

ガシイイイ

「「「!!!?」」」

突然、三人を『木の根』が縛ってきた!?

「私の種族特有の『能力』です。私の攻撃が『音』だけだと思って油断しましたね……………」

「ちよつと! 私聞いてないわよッ!?!」

「言ったら意味がないでしょう?」

明日菜の叫びに対しご丁寧につっこむ調。そうしている間にも、木の根の締め付けは強くなっていく。

「あっ……………ぐう……………」

「し……………締め付けてくる……………」

「くっ……………(し……………振動破砕……………(……………」

スバルが振動破砕を使おうとしたが、

ギシィイイ

「あうっッ……………」

「させませんよ……………そんなこと……………」

さらに強く締め付けられ、封じられてしまっ……………

三人を封じた調は勝利を確信し、背を向けて歩き出した。

「さて……………アヌビス神は大丈夫でしょうから、鏡史郎さんの方に行きますか……………」

「ガリッ」「ガリガリッ」「ガリッガリッガリッバキッガリッ」「ガリガリ」「ガリ」
「……………?」

ふと、何か奇妙な音が、そう、何か『堅いもの』をかじったような音がした……………

調が音の方　　自らの後方を振り向くと、そこでは……………

「バリバリッバキッ」「ガリガリガリガリッ」「バキバキッ」
「なっ……………!？」

ガッキイイイイイイイイ
「なっ……………何イイツ!？」

アヌビス神に向かい小太刀を切り上げた千雨は、信じられないという表情で声を上げた。
上に向かい双刀を突いていたはずのアヌビス神だが、千雨の刀は『交差する二本の刀』に阻まれた!？」

「ふっ……………まさか、何の対策もないと思っただか……………?」
「な……………何だよそりゃあ……………ッ?」
「お前に勝つため身につけた新たな力……………その名もツド
ドシューウウウー……………」
「!？」

瞬間、千雨の両側から刀が袈裟懸け、逆袈裟に襲いかかってきた! 慌てて飛び退いたために、千雨は胸にかすり傷を作った程度ですん

だが、アヌビス神の、いや、アヌビス神に憑依されたデイドの姿を見て絶句した。

デイドの両肩には、先端がとがり、横から見たら異形の顔に見える肩鎧を身にまとっていた！その両目に当たる部位にある球体からは、それぞれ機械の腕が生えており、それらには刀が握られていた！

「『エターナル・ブレイズ（無限刀剣）』だッ！！」
「ばかなッ……………『スタンドの鎧だとッ』！？」

オットーは（彼女にしては珍しく）声を上げて驚いた。

確かに、ゲンヤと承太郎から『ISはスタンドに近づくための技術』
だとは聞いていた。だが、それが何故デイドにスタンドが発現しているのか……………？

そんな風にオットーが考えを巡らせていると、千雨がはっとしたように声を発した。

「てめえ……………まさか『矢』で…！」
「えッ！？」

「その通りだ！このスタンド『エターナル・ブレイズ』は、
矢の力でデイドのIS『ツイン・ブレイズ』が昇華した能力だあ
ッ！」

アヌビス神の話聞いた2人は、再び黙ってしまった。

「あの女は、『コイツ』を試すために戦闘機人が欲しかったらしい
……………ISをスタンドに昇華させる実験のためになあ……………」

「何イ……………！？」
「まさか……………その為にデイドを……………ッ！？」

だが、その斬撃は突如現れた『光弾』により阻まれた！

「…………… ヴィオレッタ、アヌビス神…………… お前達は許さない……………

…………… ツ！」

「オ…………… オットー!?!」

「ちいつ（アイツはこの体には手を出さないとふんでいたのだが……………
……………
……………）」

光弾を放った張本人　　オットーは、その目を怒りで染めながら
呟く。予想外の出来事に、千雨とアヌビス神は驚愕する。

「手を貸すよチサメ！これ以上、デイドの体を好き勝手させない
ツ……！」

「あ…………… ああ。」

正直、千雨もオットーが加勢してくれるとは思っていなかったため、
申し出された事に戸惑った。

（スタンドの刀は僕が『抑える』。君はその内にアヌビス神をデ
イドから……………）

（分かった。）

戸惑いながらも、千雨たちは小声で話し合い、アヌビス神に飛びか
かった。

「捕らえる！『レイストオオオオオム』ツ……！」

シユババババババアア

「ウツシャアアアアアアアアア……！」

アヌビス神は『エターナル・ブレイズ』の刀でレイストームの弾を弾いたが、

バキイイッ

「ぐうつ………!!?」

その衝撃で、刀身が破壊された!

「ここだあッ!!」

その隙を千雨は見逃さず、一気に小太刀を突き出す!

「う甘いわアッ」

シャキイイイイン

「何ッ!?!」

「ウツシャオアアアアッ」

だが、千雨の小太刀がアヌビス神に届く前に、『エターナル・ブレイズ』の刀身が『治った!?!?』

治った途端に、アヌビス神はその4刀と双剣の六刀を千雨に振るう!

ガッシイイイ

「!?!」

「なッ!ニヤニイーッ!?!」

だが、それは『光る輪』に腕を縛られたために止められた!

「『レイストーム』……………砲撃弾にバインドを混ぜて放った……………」

……

「オットー……………」

オットーの機転に、アヌビス神は歯を噛み締める。そして、千雨は一瞬戸惑うも、トドメに入る!

「おおおおおッ奥義!!」

千雨は高く飛び上がると、コマのように回転しつつアヌビス神に向かい逆手二刀を突きつける!

「雷鳴月華・天ツ!!」

ズババツバアア

「グオアアッ!?!」

千雨の放った二連撃は、アヌビス神　　デイドの胸を切り裂いた!

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

> i 1 0 5 6 1 — 4 0 6 <

スタンド名 エターナル・ブレイズ（無限刀剣）

本体 No. 12 デイド

破壊力 B スピード A 射程距離 C

持続力 A 精密動作性 A 成長性 D

能力 デイドのインヒューレント・スキル『ツインブレイズ』が、「矢」の力でスタンドに昇華した能力。

刀を持った4本の腕を持つ大きい肩当てのようなスタンドで、本体の意志で自在に動く。また、刀身は破壊されても瞬時に再生する。

#53 / リード・マイ・マインド ? (後書き)

53話です。

・鏡史郎の能力は『記憶』のスタンド『リード・マイ・マインド』。分類で言えば、SBRの「シビル・ウォー」に近いかも。スタンド名はザ・キラーズの楽曲から。ガチャピンが出てくるPVが印象的な曲です。

・調の能力防御は途中で思いついたもの。遠距離型と接近型等の違いはあれど、2人の能力は似通っている事に気づきました。

・デイド、スタンド使い化。これは以前、いつもこの作品の挿し絵を描いて下さるハニーさんから頂いた『スバルのスタンド』をヒントに思いついたものです。「ISがスタンドに近づくための技術」というのも伏線になってました。

スタンド名は水樹 奈々さんの『ETERNAL BLAZE』から。『BLAZE (炎)』と『BLADES (剣)』がかかってます(笑)

・アヌビス神戦決着！この結末は次回、とんでもない事に！

では！

#54 / リード・マイ・マインド ? (前書き)

千本鳥居内三極の戦いも、いよいよ大詰め！

#54 / リード・マイ・マインド ?

バッキイイイイッ

「うおっとッ」

「た……………助かった……………の？」

突然、自分たちを締め付けていた木の根が折れて解放されたネギたち。

「でも一体何が……………？ん……………？」

締められていた場所をさすりながら、訳が分からないという顔で呟いたスバルは、ふと、木の根の根元に、何かいるのに気づいた。

それは……………

「キキッ」

「キキキッ」

「……………び……………」

「ビーバー……………？」

そう、「ゲツ歯目ビーバー科」に属する動物『ビーバー』だ。だがネギたちは、そのビーバーたちが普通ではない事に気づいた。

なぜならそのビーバーたちの胴体は『灰色』で、『無機質なブロック状』だったからだ。

明らかに、『石のブロック』である。

「このビーバーは……………まさかスタンド!？」

「えっ? (何……………? この感じ? 前にも感じたような……………)」

ネギらがビーバーに驚愕する中、スバルは『ある感覚』に捕らわれていた。そう、『そこに誰がいる』ような……………そんな感覚に……………

「『ゴールド・エクスペリエンス』……………石の柱に生命を与え、ビーバーにした……………」

不意に、調の背後から声がした。

ふと見ると、いつの間にか康一と、金髪の前髪を三つのカールにした男がいた。

その背後には、まるで競輪のヘルメットを被ったような頭に肩には翼の飾り、そして腰や手の甲に施されたテントウムシの装飾が特徴的な金色のスタンドが立っていた。

「こ、康一さんと……………?」

「えと……………隣のあなたは……………?」

「……………ジヨルノ……………ジヨルノ・ジヨバアーナだ。」

#54 / リード・マイ・マインド ?

「オラオラア！どーしたよオ！？」

ドバババババババババ

「ぐっ……………」

「ま……………マジでクレイジー・Dの能力まんまなのかよ……………！？」

一方、ノーヴェとブチャラティは鏡史郎の『リード・マイ・マインド』が化けた『クレイジー・ダイヤモンド』のラッシュから逃れていた。

(鏡史郎^{やっ}の言う『制限時間』がどれくらいなのかは分からない……………だが、制限時間が来たとしても、また他の記憶を読み取られてスタンドに化けられる……………意外と厄介だな……………)

ブチャラティがそう分析するが、手はない訳ではない。

(こーいったスタンドは、本体を叩けばいいんだが……今のヤツのスタンドは『近接パワー型』……迂闊には近づけない……)「やっぱ……一筋縄じゃいかないな……」
「へッ!さっきまでの威勢はどーしたよオ!？」

ノーヴェの弦きを聞き取ったのか、鏡史郎が挑発するように言つが、内心ではホツとしていた。
というのも

「くらいやがれエツ!！」
グオオオツ

「来たツ!？」
(は……速い……? 右か!?)

ノーヴェがそう考えた瞬間

「左です!ノーヴェさんー!ーッ!ー!」
「!?!?!」
ドガアッ
「な……何イツ!？」

突如響いた声に、2人は素早く飛び退いた！

「い……………今のは……………?」

「行け! 『セックス・ピストルズ』ッ!!」

ガンッガンッガアアーッン

「銃声ッ!？」

『『『イイイ……………ハアア……………!!』』』

「!？ピ……………ピストルズッ!？」

次に聞こえたのは銃声だ。後、何やら甲高い声が3つ聞こえ、そのまま弾丸が通り過ぎるのが目視できた。

「ちッ」

ガキンッガキンッガキンッ

だが鏡史郎はそれに臆することなく、弾丸を弾いて防御した。

「……………ちっ、弾いたか……………」

「あれは……………クレイジー・ダイヤモンド!？」

「……………!」

ゴオッ

「うわつとオ!？」

ふと、自分たちの背後から声が出たかと思うと、鏡史郎の頭上からガリユーがかかと落としを繰り返すが、鏡史郎はとっさに避ける。

「ガリユー! ルーお嬢様かッ!？」

「ノドカ……………そ……………それにお前は……………ッ!？」

2人が声がした方を見ると、『アーティファクト本』を開いたのどかとアスクレピオスを装着したルーテシア、そして

「よお、久しぶりだな、ブチャラテイ。」
「何かコイツ等、お前の知り合いなんだって？」

徐倫と、拳銃を構えたニット帽の男 グイード・ミスタがいた。

「ミスタ……………何故お前が……………!?!」
「ブチャラテイ、再会を喜ぶのは後だ。今はコイツをブチのめすんだろ？」

「ちイツ、援軍かよオ!!」
ゴオッ

「あッ!右ですノーヴェさん!!」
ブオンッ

「何ッ!?!」
「上ッ!?!」

ドガアッ
「つりゃッ」
ゴスウッ

「ぐあッ!?!クソオオオッ!?!」
「み……………右つしる回し蹴りだそつですー!」

ゴオツ

「なッ……………！？何でエ……………！？」

「アライイツ！！」

「ウリイイヤアツ」

ドグシャアツ

「ぐえぷウツ！？」

鏡史郎は次々にクレイジー・ダイヤモンドの攻撃を繰り返すが、のどかのサポートを得たノーヴェとブチャラティにことごとくかわされ、あまつさえ反撃を喰らってしまった。

ドロドロオオ

「！腕が……………」

「ちイツ……………もうそんなにたつたのかアツ！！」

と、突然『クレイジー・ダイヤモンド』が溶け始めた。時間切れが近いらしい。

「クソウ……………（あのガキ……………オレの攻撃が全部読まれた……………

そんなヤツがいるなんて、あの女から聞いてねエーぞ……………いや、

今はそれよりも、新しいスタンドを仕入れにやアな……………ん？）」

ふと、鏡史郎は徐倫を見た。

「（そういやア、あのガキの親父『時を止められる』んだったなア

……………こうなりや、一か八か（『リード・マイ・マインド

ツ！！』そのガキの記憶を読みとれエエエエエー……………ツ！！」

ドロドロオオ

「何イツ！？」

「何だこいつはー！？」

鏡史郎が叫ぶと、『クレイジー・ダイヤモンド』だった『リード・マイ・マインド』は再び銀色の液体金属のような姿になり、徐倫に迫り、徐倫の足に引っ付いた！

「ジョリーン！そいつはふれたヤツの記憶を読み取って、そいつが過去に出会ったスタンドに化けるぞツ！それに、姿だけじゃあなく能力まで再現しちまうツ！！」

「何ツ！？」

「そんな……………まさか『スタープラチナ』を！？」

あれ？」

『リード・マイ・マインド』の能力に戦慄する徐倫たちだが、ふと、のどかは手元にある鏡史郎の心を読んでいた「いどのえにつき」を見た。そこには

「さあツその姿を見せるツ！！」『リード・マイ・マインド』 オオオ
「……………」

そして、『リード・マイ・マインド』はその姿を再び変え始めた。
その姿は

トマトに顔と腕が付いたような、群棲型スタンドだった。

「「「「は？」「」「」

「……………」？」

「パ……………」『パール・ジャム』……………」？」

そのスタンド 「パール・ジャム」を見た一同は、あっけに取られた顔をし、鏡史郎も、叫んだ顔とポーズのまま固まっていた……

「あの一……………」

そんな入り辛そうな場に、のどかが手を挙げて声を出した。

「な、何かその人、どのスタンドになるかは自分で決められないそうですねよー……………」

「……………」つまり、どんなスタンドになるかは、ランダムで決まるって事が……………」？」

ミスタの問いに、のどかは小さく頷いた。

そんな中、鏡史郎は汗をダラダラ流して、「は……………ハハハ……………」

と、力なく笑っていた。

……後の一人は、確か『重くするスタンド』使い……………」
「大丈夫、スバルちゃんたち？」
「えっ、うん、平気。ちよつとアザになっただけ……………」

心配そうに声をかける康一に、明日菜は大丈夫と答えると、ネギは康一に話しかけた。

「康一さん、あの人は特殊な『音波』で、物質を破壊します。それに、さっきの木の根も要注意です！」

「『音波』……………」

康一はネギのアドバイスをオウム返しすると、しばし考える仕草を見せ、不意にニヤリと笑った。

「なるほど……………ありがとう、ネギ君のお陰で、何とか勝てそうだよ！」

「えっ……………」

「……………ほう、私に勝つおつもりで？」

不敵な笑みを浮かべる康一に対し、調は小馬鹿にしたように聞き返す。

康一はジオルノに目をやると、ジオルノは『ゴールド・エキスぺリエンス』で殴りかかった！

「ゴールド・エキスぺリエンスッ！！」
ゴオッ

「……………甘い！」

だが、ゴールド・Eの拳に臆せず、調は弓を走らせて『音波の壁』を作り防御する。

「音！これがあの少年の言っていた彼女の能力かッ！」

「分かってくれて光栄です！」

言っや、調は再び弓を走らせ、ジオルノの足元の石畳を破壊する！

「くっつっ！」「ああッ……………」

たまらず飛び退くジオルノ。次いで調は、康一に向かい音波を放つ！

ゴガアッ

「うわっつとー！」

「康一さん！えっと、ジオルノさんッ！！」

ネギが悲痛な叫びをあげる中、康一は『エコーズ』を出した。だが、ネギたち3人は疑問を持った。

「昨日みたエコーズとは、デザインが違うのだ……………」？

「行けッ『エコーズACT1』ッ！！」

康一が叫ぶと、エコーズはなにやら『文字』のようなモノを、調に向かい投げつけた。不意を突かれたのか、調は防御が間に合わず、それを喰らってしまった。

「くっつっ……………」？

だが、特に傷ついた様子はなく、ダメージはないようだ……………」

「……………ふう、なにかと思えば……………何もおこらないじゃないですか……………悪あがきはお終いですー！」

言つと、調はバイオリンの弓を走らせる

「「「.....?」「」」

だが、いつまでたつても何も起こらない。不思議に思ったネギたちはあたりを見渡し、ジヨルノは感心したような顔をし、康一は不敵にニヤリと笑っていた。

「な!?!?どうなっている!?!何故何も起こらないツ?わ.....私の狂気の提琴が.....!?!?!?!?」

ギーコギーコギーコギーコ

一番訳が分からないようなのは調だ。自らが自信を持つ音波攻撃が、急に発動しなくなったからだ。調はパニックになったのかひたすらに弓を走らせるが、下手くそなバイオリンの音が鳴るだけだ。

「甘くみたね。僕の『エコーズ』は、重くする以外にも能力があるのさー!」

「なッ!? バカなッ! スタンドは『一人一能力』のはずッ!？」

「ああ。だが、僕の『エコーズ』は、「成長」するスタンドなんだ。成長する度に、能力も『変化するッ』! 今の『エコーズ ACT1』の能力は、「音を染み込ませる能力」でね。さっきの一撃から、『君の音波の波長』を調べて、その音を『バイオリンに染み込ませて』もらったよ!」

「音波の波長」と聞いて、調ははっとした。

「ま……………まさか……………お……………同じ『音波を当てて、打ち消した』と言うのッ!？」

騒音公害の対処法のひとつに、『消音スピーカー』というものがある。

騒音源の音を拾い、それと逆相になるような音を作りスピーカーから出力し、結果的に打ち消しあって「騒音レベルを下げる」ことを目的としたものであり、「ノイズ・キャンセラー」ともいう。

先ほどのスバルもこれと同じ原理で、似たような音や振動波を当てれば打ち消される訳だ。

「でも、スバルさんが『発動後に打ち消した』のに対して、康一さ

んは『発動前に打ち消した』！つまり！！」

「あの子の音波を……………完全に封じた……………！！」

ネギたちが感心する中、調は青ざめていた。だが、不意にふつ、と笑うと……………

「だがッ、私にはまだこれがッ！！」

調がそう叫ぶと、周囲から無数の木の根が表れた！そして、それらは一斉にからみつき、縛り上げた！

『調』を。

「！?!?!?がつ?!?!?……………これはッ?!?!?!?!?」

「ものに『生命』を与え、新しい命を生み出す……………それが『ゴールド・エクスペリエンス』！石畳に『生命』を与え、木の根にした……………」

「わッ……………私よりも先に木の根を……………!?!?」

締め付けられ苦しみながらも、調は声を絞り出した。その声は、絶望に染まっていた……………

ズシャアアアアツ……………

オットーのバインドが外され、千雨から受けた傷でディードが倒れ込んだ。

「……………い、一応手加減はしたが……………」

少し焦った様子で呟く千雨だが、ディードの手には未だアヌビス神の妖刀が握られていた。

「だめだ……………まだ握っている……………」

「さっさと刀を破壊しなきゃ、また来るな……………」

千雨がそう呟いた時……………

「なるほど、オットーが攻めてくるのを想定していなかった

……………だが、もう『憶えた』！」

「……………」

アヌビス神が、ムクリと起き上がった。

「だが、オットーの戦闘は、すでにデイドの体が憶えている！もうその手段は絶対に、絶対に絶対に絶つ~~~~~」
「~~~~~対に喰らわんツ！！」

言つと、アヌビス神は再び『エターナル・ブレイズ』を発現し、構えた。

「ちつ、（出来ればやりたくなかったが、こうなりや仕方ねえ………
…）オットー、今からちよつと『シヨツキング』な事するから、目を塞いどけ。」

「……………悪いけど、それは出来ないよ。何としてもデイドを救うと決めたんだ。」

オットーのその言葉を聞き、千雨はやれやれとため息をついた。そして、右手で『突き』の構えを取った。

「行くぞツ！」

「応ツ！！」

言うや、2人は同時に地面を蹴った！

千雨は右手で突きを放つ。

狙いは アヌビス神の妖刀が握られている、デイドの『左手』！！

（腕にダメージを与えて……………アヌビス神を手放させる気か！）

（甘いわ千雨ツすでに貴様の間合いは『憶えている』！その距離からでは！私の左手には届かんツ！！）

千雨の小太刀の長さは約60センチ。

それに千雨の腕の長さを含めても、今の位置からディードの腕を突くのは不可能だと、アヌビス神は考えた。

だが、

ググー……ー

「なッ……！？」

「ニヤニイツ！？」

ドスウウッ

「ゲッ！」

千雨の腕が急に手元でグーンと『のびた』！？

間合いがのびた為に、アヌビス神は腕にダメージを受ける！
そして

「な………何だ？………今のワザは………？」

「……………誰が教えるかよ。」

腕の長さが戻った千雨は、『エターナル・ブレイズ』を解除して崩れゆくアヌビス神に向かい呟いた。

再びデイドは倒れ、アヌビス神の妖刀は地面に突き刺さった。

「こ……今度こそ終わったのか……………？」

「ああ。だが、アヌビス神はまだ生きている。どーにかしないと、また襲ってくるな……………」

「エンゼル」を解除した千雨とデイドに駆け寄るオットーは、さでどうしたものかと考える。

地面に突き刺さったアヌビス神を抜けば、操られるのがオチだ。

オットーの『レイストーム』なら破壊出来るだろうが、「折れた刀身」でも行動できるかもしれない。

2人が悩んでいると、不意に声をかけられた。

「いやあ……………影から見ているが、なかなかいい勝負だったねえ……………」

出てきたのは露伴と、亀を持った女性だ。

「！ろ、露伴先生……………」

「こんな所まで着いてきたのかよ……………ホント、漫画の事になると……………」

と言いかけて、千雨はあることを思いついた。

「露伴先生、ちょっとお願いがあるんすけど」

地面に突き刺さったアヌビス神は、誰かが自分を引き抜いたのに気がつき、早速操った。

「む？この体は……オットーか！？意外にも間抜けなやつだなあー！ツ妹と同じ目に遭うとはッ！！」

オットーの間抜けぶりにあきれながらも、アヌビス神は早速千雨を発見した。他に2人いるようだが、関係ない。

「千雨、貴様のあの技の原理は知らんが、確かに憶えたぞッ！！次こそは」

アヌビス神が言い終える前に、千雨の隣にいた男が手を上げた。そして

「ヘブンス・ドアッ！」
バァァーッ

瞬間、オットーの体が本のように『めくれた』！

そしてそれは、アヌビス神の妖刀にも進行していき、そのままアヌビス神もろとも吹っ飛んだ！

（なッ！！何だ今のはッ！？あいつのスタンド能力かッ！！）

アヌビス神が驚く中、男はアヌビス神に近づき、アヌビス神のめくれたページに、こう記した。

『握った人間を操れない。』

アヌビス神 再起不能。

この後スバルが柄に「京都」と書いて、シグナムへの土産にした。はやてによると、たまにレヴァンティンやザフィーラと『会話』しているらしい。

デイド 救出成功。

千雨が手加減したお陰か、命に別状はなかった。

宮崎 のどか ノーヴェたちが行った『拷問』がトラウマになった。

富良野 鏡史郎 徐倫の提案で連行される。

再起可能

t o b e c o n t i n u e d . . .

気がつくくと、調はベッドに横たわっており、側には『あのお方』がいた。

「ルミリオ様……………」

「気がついたかい、調？まさか、キミが敗北するなんて……………」

ルミリオと呼ばれた少年が調の頭を撫でながら言うと、調は恥ずかしそうに眉を下げた。

「申し訳ございません……………油断しました……………」

「仕方ないさ……………まさか彼らが出てくるなんて、ボクにも予想できなかった……………彼女には、ボクから伝えておこう。キミは、ゆっくり休むと良い。」
「……………はい。」

調が頷くと、ルミリオは部屋を後にした。

調 再起可能

t o b e c o n t i n u e d . . .

「P R I V I L A G E C A D E」

> i 1 0 5 6 6 — 4 0 6 <

スタンド名 リード・マイ・マインド

本体 富良野 鏡史郎

破壊力 E スピード B 射程距離 A

持続力 C 精密動作性 E 成長性 E

能力 ふれた人物の出会ったことのあるスタンドにランダムで変身する、液体金属のようなスタンド。

制限時間は、一体につき15分が限界で、15分たつと、元の液体金属のような姿にもどり、能力も解除される。

#54ノリード・マイ・マインド ? (後書き)

54話です。

・鏡史郎の『リード・マイ・マインド』の弱点は、「運任せ」という事。能力は恐ろしいですが、微妙に使い勝手悪いです……………拷問のアレは言わずもがな(笑)

・調(音波+植物)VS康一(音)+ジヨルノ(生命)は、相性最悪な戦いに……………
『ノイズキャンセル』を知ったときに、康一VS調をやりたいなあと考えて実現した戦いです。

・アヌビス神戦決着。千雨の最後のアレは『波紋』の代名詞である『ズームパンチ』の応用です。アヌビス神の末路は、最初から考えてました(笑)

・最後に出てきた『ルミリオ』は、『ネギま』のフェイト・アーウエルンクスです。『なのは』の方のフェイトと被らないために改名しました。どことなく漂う格好良さが彼らしいでしょ?(笑)
名前はトヨタのカラーラルミオンから。

・今回は、千雨の再会と、木乃香やティアナたちに迫る陰をお送りします。

では!

#55 / キタツラ兄妹 ? (前書き)

ずっと更新が滞っていてすいませんm()m
ストライカーズ・オーシャン#55、ようやく更新です！

#55 / キタツラ兄妹 ?

「 本当に、お久しぶりです…………… ブチャラテイ……………」

「……………」
「 ジョルノに…………… トリツシュまで…………… 何でまた京都（こゝろ）に……………」

「……………!?!?」

千本鳥居から脱出したネギたちは、傷を負った者たちの治療を兼ねて、近くにあった河原で休憩をしていた。

オットーとルーテシアはデイドを介抱し、スバルは徐倫たちとで集まり、露伴は「今まで操ってきた人間の記録が書いてある」と、興奮気味でアヌビス神を読んでいた。ちなみに、アヌビス神は本にされた際、柄が巻物のような状態になっている。

「…………… あの、空条さん…………… あの人たちってもしかして……………」

「 ああ…………… ブチャラテイのかつての仲間たちだ……………」

「 やっぱり……………」

徐倫の説明に、スバルらは納得したように頷いた。彼らの話す様子を見れば、どのような仲かは、簡単に想像がついた。

「 いえ、実は『組織（パッションオーネ）』の裏切り者が日本にいと聞いて、部下に探させに行かせた所、あなたを見つけたという知らせを聞きましてね…………… その情報を知ったらしい『ルル・ベル』が、僕たちに接触してきたんですよ。……………」

「 ルル・ベルがッ!?!?」

「あの娘、そんなトコにまで『アミ』張っていたなんてね……………」

ジヨルノの話に、皆はルル・ベルの情報網と行動力に感心と呆れの混じったような顔をした。まさか、イタリアのギャングの情報まで掴んでいるとは……………」

「まあ、その裏切り者 『サルシツチャ』 もルル・ベルの側にいたからな。」

「何!? あいつ、パツシヨーネの構成員だったのかッ!？」

ミスタの付け足した言葉に、ブチャラティが声を上げた。

話によれば、サルシツチャはかつて組織の『麻薬密売チーム』のリーダーだったらしく、ジヨルノの方針でチームが解散、その後の保証はすると言ったのだが、それに反発するチームのメンバーが、ジヨルノを暗殺未遂したらしい。

それにサルシツチャは責任は自分にあると申し出て、『裏切り者』とされて組織から追われる身となったのだという。

だが、実際サルシツチャは暗殺に関与していない事が後に判明した。

主犯と名乗り出た『ラザニエ』によれば、リーダーである自分が責任という事にしると言ってきたらしい(ちなみにその後、ラザニエはジヨルノの監視下で監禁されているらしい)。だが、それを知った時には、サルシツチャは自分の右手と左手であるソルとルナを連れて、行方知らずとなっていたという。

「表向きには、『裏切り者の粛清』という名目で探していました。探し出したら、コッソリヨーロッパの片田舎にでも隠すつもりでしたか……………」

「その心配はなかったという訳か……………」

「……………随分、部下思いな方なんですな……………」

サルシツチャの意外な過去に、皆が息を飲む。

「……………『スタンド使いとスタンド使いには「引力」があり、無意識のうちに引かれ合う』……………一つのことで、ここまで引き合わせられるなんて……………」

「ある意味、そのヴィオレッタって女に感謝しねーとな……………こうしてまた、ブチャラティと話が出来たわけだしな。」

ミスタが笑いながら、皮肉ったように言うと、違いないとスバルたちは苦笑いする。

「……………『こつち』は問題なく再会できたな……………」

「問題は……………」

徐倫と明日菜が心配そうに見つめる先には、ジヨルノの持ち込んだ『亀』が、ノンキそうに甲羅干しをしていた。

気づいた時、千雨は八畳位の部屋の中にいた。

部屋には、ソファとテレビ、冷蔵庫といった家具と、車椅子に腰掛けた男性がいた。

その男は、千雨にとって身近すぎ、だが、遠い人物だった……

「……………その、なんだ……………久しぶりだな……………千雨……………」

「と……………父……………ちゃん……………!?!」

#55ノキタツラ兄妹 ?

ネギたちが千本鳥居を脱出したころ

京都 シネマ村

「 で、ハア……………いきなり刺客にハア、狙われて、ココにゼエ…、逃げ込んだワケね……………ハア」

「はい……………すみません、『念話』苦手なもので……………」

肩で息をしながら話すティアナに、刹那が謝る。近くにいるチンクやギンガ、アナスイも息を切らしている。

「……………まあ、これだけ人がいれば、あちらさんも下手に手を出してこないだろうな。」

「だろうな……………」

息が整ったのか、アナスイが周りを見ながら言う。

周りには刹那の言うとおり、修学旅行生をはじめとした観光客が大勢いる。こんな中なら、さすがに連中も派手に手出しをできないだろう。

「だが、スタンド使いの中にはそんなのお構いなしって輩もいるからなあ……………まあ、ヤツらにそんな外道野郎はいないだろうがな。」

「はあ……………」

こいつはえらく楽観的だなあと思いつながら相槌を打つチンク。

「せつちゃ~~~~ん」

ふと、刹那を呼ぶ声がした。振り向くと、そこにはいつの間にか着物に着替えた木乃香がいた。

「お、お嬢様、その格好は!？」

「知らんの? あっちの更衣所で着物貸してくれるんえ。」

ふと見ると、確かに更衣所と書かれた看板の建物から、着物に着替えた観光客が何人か出てくるのが確認できた。

「……………ん?」

木乃香と刹那が話す中、ティアナはふと、更衣所から誰か出てくるのを見た。

一人は黒い着流し姿の少年、もう一人は白い着物の少女で、どちらも同じ髪型だが、少年は黒、少女は白い色をしている。

「似合ってるよ、ルナ。」

「ありがとう、ソルも似合ってるよ。」

「フフフフ……………ウフフフフ……………」

2人は手を繋ぐと、まるで小さな子供のようにスキップしながら去っていった。

(随分仲がいい2人ねえ……………カップルかしら?)

(……………あの2人、顔が同じに見えたのだが……………?)

ティアナとチンクは、スキップで立ち去る2人を見ながらそう思った。

「ホレホレ、せつちゃんも着替えよ ウチが選んだげるー」

「えっ、いえお嬢様ツ！私、こういうのはあまり……………」

「ええやんかー、ほれ、アナスイさんらも」

「…………えっツ！？」

いきなり木乃香に進められたティアナらは戸惑った。まさか、話しかけられるとは……………

「どーせアナスイさんはジョリンにシカトされたんやろ？それにスバルちゃんの親戚（木乃香には、ティアナやチンク達の事はこう説明してある）ゆーその子も、『伊達 正宗』やる気満々みたいやし。」

「いや、決めつけるなよツ！？」

「それに、眼帯これは正宗やる気で着けてきたワケじゃ……………」

「ほな行こか……………」

戸惑う5人を、木乃香は無理やり更衣所まで引つ張って行った。

そして数十分後、新撰組の格好をした刹那とアナスイとギンガ、伊達 政宗の格好をしたチンク、そして、坂本 竜馬の格好をしたティアナが更衣所から出てきた。

「 何で、私たちは男物の扮装なの？」

「夕凧が死ぬほどそぐわない……………」

「というか、詳しい事は知らないけど、新撰組と竜馬が一緒にいる

のはおかしいんじゃない？」

「まあ、細かいことは気にせんと、似合っとるえ。こっちこっち。」

そう言つと、木乃香は刹那を連れて土産物屋に行った。

アナスイらは、遠くから見ている事にした。

「これ、意外と重いな……………」

「動きづらそうね……………」

一方、アナスイたちから離れた場所では

「ただの『仲の良い2人』にしか見えませんが……………」

「いやー、これは間違いないよ！」

刹那が巻き込まないように突き放したはずの夕映とハルナが、こっそりと見ていた。

ハルナは、何やら勘違いしている様子だが……………と、

「確かに、あの二人はアヤシいわね。」

「うわッ!? あ…………… あんたは昨夜の!?!」

「たしか…………… ルル・ベルさん!?!」

いつの間にか、2人の背後にルル・ベルがいた。何故か頭にタコとコンブをひっかけ、ピチピチと活きのいいカツオを脇に抱え、磯の香りを振りまいているが……………

「全く…………… 空条 徐倫にヒドい目にあわされたわ……………」

(ジョリーン何したの!?!)

「あ、これあげるわ。それにしても」

「いや、渡されても困りますが……………」

ハルナにタコを、夕映にカツオを渡し、木乃香と刹那の様子を見るルル・ベル。

「桜咲 刹那…………… 彼女は、『私と同じ匂い』がするわ……………」

「『磯の香り』ですか?」

「いや、そうじゃなくて。」

「やっぱり!?! いやぁーそうじゃないかと思ったよ!」

「そっち系同属」のアンタが言うなら間違いない!と言うハルナを呆れ顔で夕映がみた、その時だった。

「そうはさせんぞッ！このかお嬢様は私が守るッ！！」

「キヤー！ッ！せつちゃん格好えー」

ギョッ

「わッ！？い、いけませんお嬢様……………」

刹那が月詠の芝居に乗ったのかと勘違いしたのか、刹那に抱きつく木乃香に、刹那は焦る。

「やっぱり……………あの二人、『そういう関係』みたいね。」

「やっぱりッ!？」

「またバカなコトを……………」

夕映は呆れるが、2人は完全にそうだと決めつけていた。

「ふふ……………そーおすかー……………ほな、仕方ありまへんなー……………」

なぜか嬉しそうにいいながら、月詠は右手の手袋を取ると、刹那にポイツと投げつけた。

「む……………」

「このか様をかけて『決闘』を申し込ませてもらいますー……………30分後、場所はシネマ村正門横「日本橋」にてー……………ご迷惑かと思えますけど、ウチ……………「手合わせ」させて頂きたいんですー……………逃げたらあきまへんえー、刹那センパイ……………」

「ゾクウツ……………」

「ほななー……………。助けを呼んでもかまいまへんでー……………」

最後に怪しい笑みを浮かべると、月詠は再び馬車に乗って去った。

「せつちゃん……」

「…行くの？」

「（仕方が無い……やるしかないか…）ええ……」

月詠の視線におびえた木乃香を背に、刹那はそう答えた。と、

「　　なんだが、大変そうね。」

「「「キヤアアアツ！！？」」「」」

「ル……ルル・ベルさん！？」

いつの間にか、背後にルル・ベルがいた。後ろからは、ウキウキしたハルナと、呆れ顔の夕映が、こちらに近づいてきた。

「気付かれずに背後に回るのが好きなんですか？あなたは……」

「結構ね。それより、話は聞いたわ。」

「任せて！ここは、私たちが手助けするわ！」

「えっ、いや、その……」

ハルナらのいきなりの申し出に、刹那は困惑する。

（ちょっと！どういつつもりよ！？てか、そのコンブどついたの？）

ルル・ベルの腕を引っ張り、小声で咎めるティアナ。

(いや、なんかあの「ハルナ」って娘、止めても着いてきそうなん
ですもの。それより)

頭についたコンプを取ると、ルル・ベルは『サイケデリック・イ
ンサニティ』を発現させ、その手をティアナに置いた。

(こうすれば、念話に近い形で話せるわ。)

(わ、ホント。)

(それより、あの子らに関しては安心して。今シネマ村には、私の
配下のスタンド使いが3人いるわ。彼女らに危害が及ばないように、
影から守らせるわ。)

(!あなたの他に、3人!?)

ルル・ベルの申し出に、ティアナは念話で声をあげる。

(ええ。まあ、実質は『2人』だけねどね。まあ、任せておきなさい。
い。)

言っと、ルル・ベルはサイケデリック・インサニティをしまう。
ふと、木乃香の方を見ると、木乃香は足元に何かいるのを見つけた。

「ニャ~~~~~」

「ん?何や、この猫ちゃん?」

それは、ロシアンブルーの子猫だった。

甘えているのか、木乃香に頭をスリスリとこすりつけている。

「あら、珍しいわね、『初音』が初対面の人にこんなに懐くなんて。」

「

「この子、初音ちゃんいうん？かわえー」
「ニャ~~~~」

幾分か落ち着いたのか、木乃香はしゃがむと、初音の頭を撫でる。
ふと、刹那とティアナは気づいた。

（あの子猫って、昨夜の……………）
（ルル・ベルさんの飼い猫だったのか……………）

「あ、良かったら抱いていていいわよ。初音は『幸運を呼ぶ星ネコ』
って、近所では有名なの。」

「そーなん？初音ちゃん、よしよーし」
「ミャ~~~~」ゴロゴロ……………」

木乃香に抱かれ、のどを鳴らす初音。ティアナたちが見ると、昨日は気づかなかったが、額に逆さの星のような模様があるのを見た。

「さて、（これで近衛 木乃香の護衛は大丈夫よ。初音は懐いた人物の危機には敏感ですもの。）」
「えっ。（ど…どうも……………）」

ルル・ベルに小声で言われ、刹那は礼を言う。

「さてと…………… 2人とも、私たちは「勝負服」に着替えましょうか。」
「お、いいねえ」

ルル・ベルの提案に、ハルナは夕映を連れてノリノリで更衣所に向かった。

更衣所内

「話は聞いたわね？」

和服に着替えながら、ルル・ベルは背後にいるであろう『2人』に話しかける。

「もちろんだよ。」

「あのお嬢様を守るんでしょ？」

「そちらは初音に任せたわ。あなたたちは、敵の迎撃よ。手厚く迎えてあげなさい。」

「了解だよ、お嬢様」「」

2人は言うと、直ぐに気配が無くなった。

「これで準備はいいわね……頼んだわよ、「キタツラ兄妹」。」

「月詠とやらめ……………面白そうな事を……………」

「アタイらは、空条の小娘に二年前の復讐が出来ればいいんだが…

……………」

「遊ぶ？準備運動にはなるよ。」

シネマ村の一角、何やら3人の女性が話していた。

「ま、そりゃいいわな だれが行くよ？」

「 我にやらせる。体が鈍ったとは言わぬが、肩慣らしにはち
ようどよい。」

「別にいいよ。私は最後まで。」

古風な話し方の大柄な女性は、ほかの2人に許可されて、前に出
た。

「では、『伊賀の三羽鴉』が一翼、『綺初』、参らせてもらおう！」

シネマ村

日本橋前

30分後、それぞれが思い思いの格好をして、刹那たちは「日本橋」前まで来ていた。

ちなみに、初音は木乃香に抱かれて心地よさそうにしている。

「ゴロゴロ……」

「すっかり懐いてもーた……」

「人見知りしやすい初音が、ここまで懐くなんて……」

花魁おいらんの格好をしたルル・ベルが少し羨ましそうにする中、初音は木乃香にすっかり懐いていた。

「ふふふ……ぎょーさん連れてきてくれておーきにー！。楽しく

なりそうですなー」
「「!?!」」

不意に、橋から声がした。見ると、ウキウキしたように刀を構えた月詠がいた。

「ほな始めましょうかーセンパイ」

月詠は、怪しく笑いながら、そう言った。それを見た木乃香は、おびえたように刹那の後ろに隠れた。

「……せつちゃん……あの人……なんか怖い…………気をつけて…………」

「……安心して下さい、このかお嬢様、何があっても、お嬢様をお守りします。」

木乃香を安心させようと、笑顔で木乃香に語りかける刹那。と、

「ヒューヒュー　お熱いねえ〜」
「そのまま押し倒しちゃいなさいッ!」
「なッ!?!何を!?!」
「「??!」」

何故か、ハルナとルル・ベルがはやし立て始めた。特にルル・ベルなんかは、鼻息が荒くなっている。

「何やってんのよ、あの子達は……………」
「確実にルル・ベルは『仲間』増えたって思ってたんな……………」
「まあ、彼女の力借りられるのは助かるけど……………あの2人に危害が及ばないように」

ギンガが苦笑しながら言った、その時

グオオオオオオ

「ッ！危ねえッ！！」

ドグシャアッ

「「「！？」」」

ギンガに向かい、何か飛んできた！

いち早く気づいたアナスイは、ギンガに『ダイバー・ダウン』を
潜行させ、素早く砕いた！

「あ……………アナスイさん……………」

「今のは！？」

顔を赤らめるギンガに対して、ティアナは飛来物を見た。
それは、薄い茶色の『レンガ』だった。

「レンガ？誰がこんな物を………？」

「あらら〜、あの人ら』 ったら、余計な手出しはいらんのに
〜」

「レンガだと………？まさか………?!」

レンガと聞いたアナスイは、ある予感がした。

「ちょっと、大丈夫だった!? なんか飛んできたみたいけど……

…?」

「早乙女ツ!? 近づくんじゃあ………」

心配そうに駆けてくるハルナに対してアナスイが怒鳴りつけた、
その時!

バクウンツ

「『『『!!?』』』」

地面からレンガの壁が現れ、アナスイ、ギンガ、チンク、ハルナ
を包み込んだ!

「ハルナツ!？」

「やはり……………この能力は」

「ギンガさんッ!」

「くっ…………『インサニティッ』!!!」

包み込んだレンガの箱に向かい、ルル・ベルはサイケデリック・インサニティの拳を喰らわせるが……………

バガアアッ

「!?!いない……………!?!」

「そんな……………!?!」

そこには4人はおらず、空洞になっているだけだった。

「余計な手出しがありました、これで心置きなく死合えますなあ、センパイ」

「月詠……………!」

心配そうに箱を見る刹那に向かい、月詠は嬉しそうに告げた。

レンガの壁が開くと、アナスイたち4人は、広い倉庫のような場所にいた。

「ここは……………」

「やはり、これは「あいつの能力」か。」

「あ、あれえー……？」

不思議そうに辺りを見渡す3人に対して、アナスイはこの能力に心当たりがあった。

そう、これは『2年前』のあいつのスタンド

「ふむ、何やら懐かしい顔がいるな。」

不意に声がしたかと思うと、アナスイたちの周りにあつたレンガの壁が、バラバラになって一カ所に『飛んでいった』！
それらは再び組み合わさり、ある形になった。

人が一人入れそうなサイズのかまくら状の胴体に、それよりは小さいかまくら型の頭を持ち、横長に数個抜けた穴からはぼんやりと光が2つ灯っていて、それが目らしい。

腕は大きく力強い印象を与えるが、脚はレンガを縦に積んで細いため、アンバランスな体型のゴーレムのような姿だ。

その影から、大柄な女が出てきた。多分、アナスイ位はあるのではないだろうか。

肩までかかるウェーブのかかった黒髪は重力に逆らったように逆立ち、鋭い眼光を放つ切れ目を持っていて、左目には翼のマークがついた眼帯をしている。

へそを出したタンクトップの下には鎖帷子くさりかたびらを着込み、下はとび職のようなズボンをはいている。

「やはり……………」『アンチエイン・ワールド』……………」山陸の綺初『ツー!』」

「久しいなあ、ナルシソ・アナスイ。我を覚えているとは、光栄だぞ。」

古風なしゃべり方で女　綺初は、アナスイに静かに言い放った。

> i 1 0 5 9 8 — 4 0 6 <

山陸の綺初

スタンド名

アンチエイン・ワールド

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CAFE」

名前 初音

性別 メス

年齢 推定1歳前後

種族 猫、品種はロシアンブルー

性格 のんびり、だが、自分や周りの危機には敏感。

好きなもの かまぼこ、鮭の刺身、毛繕い、ルル・ベルの膝

嫌いなもの 焼き魚、わさび、雨

趣味 ルル・ベルの膝で昼寝

知能 子猫とは思えないくらい高い。

備考 日本のとある街でノラ猫になっていたのを、ルル・ベルが偶然見つけたスタンド使いの子猫。経緯は不明だがスタンドに目覚めていたため、捕まえるのに苦労したそうだ。

ノラ猫だった時期が長かったためか人見知りをしやすく、自分が認めた人物にしか懐かない。

スタンド名 ワイルド・アイズ

#55 / キタツラ兄妹 ? (後書き)

55話です。

・サルシツチャの過去をちらり。サルシツチャは、クールに見えて実は熱い性格、というイメージです。

・千雨とポルナレフの再会。今回は詳しく書きませんでした。詳しい話は次回以降 (^| ^ ;)

・シネマ村でのコスプレは、各キャラを考えてやっています。最初はチンク姉の正宗しか決まってませんでしたが、ティアナが銃使うから竜馬、後は新撰組が複数いたほうが見栄えいいかと思って。

・ソルとルナの名字はキタツラ。由来はパスタの名前からです。

・伊賀の三羽鴉登場。楓が甲賀なので、対になるように伊賀の忍にしました。

・三羽鴉の一番手、山陸の綺初。名前は『陸の鳥』という事で、鳥のキウイからです。後の2人は、水と空の鳥からそれぞれ付ける予定です(でもカラスはいない(笑))。ちなみに、能力もそれに合わせています。スタンド名は、水樹 奈々さんの楽曲から。

・次回は、月詠&綺初戦、そして、キタツラ兄妹の活躍です。

では！

#56ノキタツラ兄妹 ? (前書き)

アナスイたちに迫る伊賀のくノ一、山陸の綺初!

#56 / キタツラ兄妹 ?

シネマ村

日本橋

「ほな、始めましょかー！ー。」チャキ

「待て月詠ッ！こちらには非戦闘員が………」

「あゝゝ、そーいえばその人がおりましたなゝゝゝ、そんじゃゝゝ………」

刀を構える月詠に対して刹那がそう言うと、月詠は懐から札を数枚出した。そして。

「おいでゝゝゝ、『白ちゃん』たちいゝゝゝ」

ポポポポボンッ

「……！！？」

全長50センチほどの白いつきたての餅のようなでろんとした体に、短くて太い四本指の腕、ニタリと笑ったような真っ黒な唇の口だけがついた、なんだか気持ち悪いものが数体出てきた。

「……き、キモッ！？」

「なっ！？何だその気持ち悪いのはッ！？」

「やー！ん、センパイまでひどおすなゝゝゝ、白ちゃんたちを気持

「ち悪いなんて……。」

「これを気持ち悪いって言わないで何が気持ち悪いのよッ!? 今晚夢に出てきそうじゃないのッ!」

月詠が「白ちゃん」と呼ぶそれを見て、刹那たちは気持ち悪がって非難の声を上げ、木乃香と夕映は完全に引いていた。

ちなみに、この白いものは『モチテグチ』という妖怪の一種であり、スタンドや式神ではない事を、ここに明記しておく。

「いつてらっしやあ〜〜〜〜い」

「〜〜〜〜デユフフフ〜〜〜〜ン」

「ボヨヨ〜〜〜ンッ」

「ギャー〜〜ツ一斉に来たアアア〜〜ツ!」

「ティアさんッ! お嬢様をッ!」

「ええ! こつちよッ」

「ああ、せつちゃん……………!」

モチテグチが一斉に飛び出したのを見て、ティアナは木乃香の手を引いてその場を離脱し、刹那は何体かを切り捨て、月詠に向かっていく。

「ガキイイイイ〜ンッ」

「最近の神鳴流は妖怪を飼っているのか?」

「あの子達は『カワイイ』だけで無害ですう、御安心を〜」

「いや、カワイくもないから……………」

「それに、ウチは刹那センパイと剣を交えたいだけ」

「ガギンッ」

鏝迫り合いをしながら月詠がそう言った瞬間、刹那は直ぐに飛び退いた。

バトルマニア
「戦闘狂か、付き合わんぞッ」

「まあまあ、そう言わんと〜〜」

「それに、早乙女さんたちは……………」

「ああ、何や『ヴィオレッタ』はんの雇った「忍者」さんの仕業でしてー。」

「!?(お母様が忍を?)」

モチテグチをあしらいながら月詠と刹那の会話を聞いたルル・ベルは、アナスイらを連れ去った人物の正体を聞いて疑問を抱いた。

(スタンド使いの忍……………まさか『伊賀の三羽鴉』?あの面子で大丈夫かしら……………?)

心配しながらも、モチテグチが襲いかかってくるために、ルル・ベルはそれらをいなしていく。

#56 / キタツラ兄妹 ?

「……………ナニコレ?どゆコト?」

ハルナは、目の前にそびえ立つゴーレム 『アンチエイン・ワールド』に混乱していた。

漫画的には面白い展開だが、自分は二次元ではなく現実リアルに生きる人間だ。こんな展開など、有り得ない。

「チンク、その娘を……アナスイさん、あの人、あなたに「久しぶり」って言いましたよね？知り合いですか？」

今にも「私、聞いてない！」と叫びそうなハルナをチンクに任せ、ギンガはアナスイに問う。

「……………アイツは『山陸の綺初』。見ての通りスタンド使いで、『伊賀の三羽鴉』という、伊賀流に属する女忍者だ。

二年前、『プツチ』に雇われてアメリカで俺たちと戦い、三人とも徐倫や千雨の機転で敗走したんだが……………」

「そうだ。あの女子中学生2人に負け、我ら3人のプライドは踏みにじられ、今まで築き上げた我らの信用もがた落ちだ！それだけではないッ！！」

そう言うと、綺初はどこから出したのか、一枚のフリップを取り出した。そこには、縦に伸びた二本の棒グラフが、三年前からの数値で表されていた。

「見る！ただでさえ甲賀に裏の仕事を取られているというのに、貴様らに負けたという情報が広まったために伊賀への仕事が減り、更に下回ったんだぞッ！！」

「あのフリップ、わざわざ作ったのかな……………」？

「お陰で『最強』のチームだった我らは『最弱』の汚名を着せられ、上忍から中忍に降格され、来る仕事も地味で微妙なモノばかり！最近になって、ようやく「反省十分」とされて上忍に戻り、そして今回の任務！！貴様らに復讐して、『汚名挽回』させてもらっッ！！」

完全に言い切ったという顔の綺初。だが、

「あのー、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』するものだとおもいますが……………」
「……………」

ギンガに間違いを指摘され、顔を真っ赤にして黙ってしまった。

「ええいッ！黙れ黙れエッ！！」
（何か、カワイイぬいぐるみ集める趣味バレた時の『トーレ』みたいだな……………）

綺初の行動が姉に似ていたためか、何か親近感を覚えるチンクだった。

「今の内に……………」
「あ、う、うん……………」

少し戸惑いながらも、チンクに従い逃げよようとするハルナ。だが、

「逃がすかッ！『アンチエイン・ワールド』！！」
ゴゴオオッ
「なっ、もう一体ッ！」

何と、もう一体の『アンチエイン・ワールド』（こちらは、目らしい光が一つのみ）が現れ、ハルナ達の行く手を阻んだ！

「くっ……………ステインガーッ！」

チンクはすかさずステインガーを数本、単眼のアンチエイン・ワールドに投げつける！だが！

バクウウンッ
「ッ!?」

単眼の体が開き、ステインガーが全て飲み込まれた！
そして、再び体を閉じると……

バガアアアッ

「えっ!?」

「チイッ」

何と、双眼のアンチエイン・ワールドの体が開き、単眼の中にあるはずのステインガーが『飛び出した』！

スカカカッ

「今のは……ッ!?まさか、私たちも「ああやって連れてこられたの?」……レンガで包まれると、他のレンガに『転移』される能力……ッー!」

「……そうだ。ヤツの『アンチエイン・ワールド』のレンガが密閉した容器で物を包むと、もう一つの密閉した容器に転移される……

……それこそ、射程距離内ならアンチエイン転移させる……」

「……さっきみたいにレンガでの直接的な物理攻撃だけじゃあないわけね……」

アナスイから能力を聞いたギンガだが、次の瞬間、単眼と双眼が再びレンガにばらけ、4人を取り囲むように別の形に組み合わせあった！

「うっっっ、これは……」

アナスイたちの周りには、レンガの柱が縦横無尽に建ち並び、それらは、まるで神殿の柱や縁に見える……

「我流伊賀忍法『石管柱結界』せきかんちゅうけつがい！かつて貴様らを苦しめた、我の必殺布陣だ！」

「これは……………ヤツのスタンドの『必殺の形』じゃねーか……………
…やる…本気だ……………」

アナスイがそう呟いたのと同時に、綺初はレンガの柱の中に消えた。どうやら、中は『空洞』になっているらしい。

「『空洞』？……………まさかッ！？」

ギンガが気づいた瞬間、綺初が入ったとは別の箇所の柱から、クナイと手裏剣が数発飛んできた！

「くっ……………」
スカカカアッ

「……………ああやって自らのスタンドに姿を眩まし、その中から攻撃を仕掛けてくる……………これが『アンチエイン・ワールド』の戦術！
！」

クナイと手裏剣を避けながら説明するアナスイ。

「……………だったらッ！！」

それを聞いたギンガは素早く『ブリッツ・キャリバー』を装着し、
『アンチエイン・ワールド』に接近する！

（このレンガを破壊すれば！あの人は転移する場所が限られる！！）

そう考え、柱に回し蹴りを放つ！

「待て！迂闊に攻撃したら」

バガアアツ

「なっ！！？」

ガツシイイイ

アナスイが叫んだのもむなく、ギンガの蹴りが当たる前に柱は再びレンガにばらけ、ギンガの脚を拘束してしまった！

（しまった！アンチエイン・ワールドの能力で……………ツ！！）

『阿呆がツ！私のスタンド能力を忘れたかツ！！』

どこからか綺初の声が聞こえると、ギンガの近くの柱からクナイが飛んできた！

「ギンガツ！！」

「しまっ……………」

「全く、意外とせっかちなんだね。」

「こういうスタンドは、冷静に対処した方が正解だよ。」

ズババババアアツ

「『ツッ!?!?』」

ギンガにクナイが当たろうかという瞬間、左右が赤と青のスタンドが、クナイを跳ね返した!

「あ……………あのスタンドはッ!?!?」

チンクは、そのスタンドに見覚えがあった。

左半身は青、右半身は赤を基調としたボディに中央に左右を分けるように金のラインが入ったロボットのようなデザインで、目はゴーグルのようになっており、口はなくガスマスクのようだ。頭はまる

で花魁の髪型のように大きく、後光が差すように角が生えている。また、頭部や手の甲、腰には大極図が描かれているスタンド。そう、このスタンドは

(あの時……………『ダービー』を連れ去ったスタンド……………確か、ルル・ベルの仲間という……………)

「ごめん、探してたら遅くなっちゃった」

不意に、チンクとハルナの背後から声がした。
振り返ると、先ほど『更衣所』でチンク達より先に着替えていた2人がいた。

「え……………だ……………誰？」

「お前たちが、あのスタンドの……………？」

「僕は、『ソル・キタツラ』。」

2人の内、黒髪の少年が名乗った。

「私は、『ルナ・キタツラ』。」

2人の内、白髪の少女が名乗った。

「初めまして、よろしくね」

2人が、同時に言った。

「あ、ああ……………」

『……………？何だ貴様等は？どうやらスタンド使いのようだが……………』

「君が、『山陸の綺初』だね？」

「噂は、予て聞いているよ。」

「それでも、僕ノ私達2人の敵じゃあないね。」

『……………』

キタツラ兄妹がそう言った瞬間、姿を隠してはいるが、アナスイたちは綺初の表情がひきつったのが分かった。

『成る程……………では、一言だけ言っておこう……………二年前、私が学んだコトだ……………』

少し苛ついたような、綺初の声がした。

「……………!?!?」

その時、ギンガは自らの足を拘束するレンガが動いたのに気づいた。そして……………

『慢心は、自らの身を滅ぼすぞ!』

「避けてッ!」

グオオオオオオオ

ギンガが、拘束しているレンガごとスタンドに『蹴りかかった!?!?』

バガアアアアア

「なっ!?!?」

だが、スタンドは『半分に分かれて』、それを回避した!

「ああ、それは分かってるよ」

「でも、私達の能力は、あなたみたいな相手が得意なの」

「だから、何の問題もない！」

スタンドはキタツラ兄妹の元に戻ると、右半身はソルに、左半身はルナに着いた。

「これは……！？まさか、あのスタンドはッ……！」

「そう、これが僕のスタンド、『ラッシュ』！」

ソルは、自らのスタンドの名を呼ぶ。

「そして、私のスタンドの『ダッシュ』！」

ルナも、自らのスタンドの名を呼ぶ。

「僕ノ私達のスタンドは、『二人で一能力』なのさ」

二人が言った瞬間、『ラッシュ』と『ダッシュ』は再び『合体』した。

ソル・キタツラ スタンド・ラッシュ
ルナ・キタツラ スタンド・ダッシュ

シネマ村

日本橋

一方、こちらは月詠と斬り合う刹那。

ガギギギギギギイーン

(く……………キリがないな……………)

月詠の反撃を与えない猛攻に、刹那は苦戦していた。ルル・ベルと夕映も、モチテグチに苦戦しているようだった。

バチコーンッ

「デュフンッ」

「ふう……………流石は『堅い魚』と書いて『カツオ鰹』……………結構役立ちます

ね……………」

「ね？役に立ったでしょ？てやっ！！」

ペチーン

……………訂正、結構善戦していた。カツオとコンブで。

「……………何気に戦闘力高いな、綾瀬さん……………（ルル・ベルさんは、コンプに見せかけて『スタンド』使っているみたいだが……………）」
刹那がそう思った時、周りにいた観光客がざわついていているのに気づいた。
そちらの方を見ると

「ッ！お嬢さまッ！？」

何と、城の天守閣の屋根で、木乃香とティアナが千草と、その背後にいる鬼が持つ「弩砲」ほどある大矢で狙われていた！

「しまった！誘導されたのッ！？」

「……デユフフ……ン……」

ぼよ……ん

「くっ……………行かせない気ね……………（でも、あちらには……………）」

ルル・ベルは木乃香達の元に行こうとするが、モチテグチに行く手を阻まれてしまう。刹那も、月詠に阻まれている様子だった。

「ふふふ……聞こえとるか、お嬢さまの護衛桜咲 刹那ッ！」

天守閣の屋根から、千草は刹那に向かい叫んだ。

「見ての通り、この鬼が『矢』でピッタリとお嬢さまを狙っとる！お嬢さまが大切なら、手え出さんときいッ！！

あんたもやで、管理局の魔導師……ちよいとも動いたら射たせてもらいます……」

千草は勝利を確信していた。

今、鬼が構えている『矢』には、ルミリオに渡された『特殊な仕掛け』が施されており、「AMF」に似た「エネルギーの膜」で包まれているのだ。

もちろん木乃香を狙うワケではないが、上手く行けば邪魔な管理局員を一人消せる！そういう寸法だった。

「……」

「……聞いてとるんかコラッ！？お嬢さままで！」

だが、ティアナと木乃香は屋根の一点を見つめていて、千草の話も聞いているのか分からなかった。

「……あなたに『コレが見える』のは意外だったけど……しばらくじっとしてて。」

「あ、はい……」

そう木乃香に言うと、ティアナはクロス・ミラージュを千草に向け

「しっかりとしなさい！あつちには『初音がいるのよ』ッ！」
「！？？……あつ……！」

ルル・ベルに言われて、刹那は思い出した。
初音のスタンド……『ワイルド・アイズ』の能力を！

ドガアアッ

「！？ツな、何……！？？」

鬼が放った矢は、まっすぐに『天守閣の屋根』に突き刺さった！

「さすがね……」「鬼の矢の狙い」を、『私たちから逸らした』！
「初音ちゃん、えらいえ……」
「ミヤ……」

そう、初音は屋根に『ワイルド・アイズ』を展開し、鬼の矢を『金色の眼』に向かわせたのだ！

「！ま……まさかその子猫……スタンド使い！？」
「ようやく気づいたようね……さあ、大人しくしてもらいましょうか？」

そう千草に警告すると、ティアナは初音が『ワイルド・アイズ』をしまうのを確認してから、青ざめる千草に詰め寄った。

その時だった。

ゴオオオオオオ……
「「「ん？」「」」

ふと、何かが飛んでくる音が、上空からした。
3人がそちらを見ると……

(.....なんだ.....？なんだ、奴らのあのスタンドは.....！?)

綺初は、『アンチエイン・ワールド』の中で焦っていた。なぜなら、今自分が身を潜めている以外の柱は.....

「どうしたんだい？来ないのかい？」

『ラッシュ』を背に立たせたソルが、挑発するように聞く。

「さっきまでの威勢は、どうしたの？」

『ダッシュ』を背に立たせたルナも、挑発するように聞く。

「..」
「..」

スタンドを構え、二人は『同時に柱に攻撃した』！！

ドグシャアアアッ

そして、それが同時に当たった瞬間

ギョオオオオオオオ.....

「！またか……………ッ！」

柱が殴られた部位を中心に、勢いよく『吸い込まれた』！

コローーーーーン……………

部位が完全に吸い込まれると、そこには直径3cmほどの『球体』があった。

よく見ると、周りには同じような球体が転がり、レンガの柱はそこいらにコルクのように丸く切り取られたように途切れていた。

「二人が『同時に攻撃したもの』を……………『圧縮』する能力……………ッ！！」

「だから……………『二人で一能力』……………！」

アナスイと、未だ拘束されたギンガが感心したように呟く。

(くっ……………なれば奥の手ッ！)
グンッ

「！ま……………またッ!？」

再び自分を拘束するレンガが動くのを感じるギンガ。だが、今度は

ガシイッ

「えっ!？」

ガシガシイッ

「ま……………まさかッ!？」

脚だけを拘束していたレンガ以外にも、両腕と胸、もう一方の脚にもレンガの拘束が施された!

『我流伊賀忍法』かいらいせきか『傀儡石枷』! ゆけッ!!』

グオオッ

「みんな避けてー!ーッ!？」

そのままギンガは、先ほど同様に『アンチエイン・ワールド』に引っ張られる形で、キタツラ兄妹に殴りかかった!

ドグシャアッ

「うーん、厄介だねこれは……………」

「圧縮したら、彼女ごとやっちゃうしね……………」

「さて、どうしようか……………?」「」

素早くそれを避けた二人は、いつもと同様に話す。口振りは普段どおりノンキそうだが、その表情は困った様子だった。攻撃しようにも、ギンガを傷つけずに攻撃するのは難しい。今、ハルナの側にいるチンクも、それは同様だろう。

「オメーらはそーいう風にしか話せねーのか……………? まあいい。こ

「こはオレに任せろ。」

「え？」

「あなたが？」

そう言うと、二人の前に立つアナスイ。

「アナスイさん！避けてエエツ！！」

グオオオオオ

それでもギンガが迫ってくる！

だが、アナスイは冷静に『ダイバー・ダウン』を出し……………

ズボオオオ

「……………ツ！！！？……………」

ギンガに拳を食らわせた！

だが、様子がおかしい。

拳どころか、右半身が『ない』！？

皆がそう思った瞬間

バツコオオオーン

ギンガを拘束していたレンガが、全て砕かれた！

「まさか………ダイバー・ダウン！くそ………まさかヤツが………
くそッ潜行させて………」

「私の体内に『潜行』して………『内側から』砕いた………」
「確かに………外側からじゃあ『アンチエイン・ワールド』が避け
たり攻撃してくるけど………」

「内側からだったら………近づいてきた時に一撃喰らわせれば良い
！」
「ま、彼にしかできない芸当だけだね」「」

「大丈夫か、ギンガ？」
「えッ！？あ………ひゃい………」

アナスイに尋ねられ、顔を真っ赤にして答えるギンガ。
アナスイはそんな事は気にせず、柱の一本　　まだキタツラ兄妹
の攻撃を受けていない柱を見た。

「さて、綺初は……………あそこだな……………」

「あ、それは僕らに任せてよ。」

「あんなの見せられたワケだし、私たちも良いとこ見せないかね。」

言つと、二人は転がっていた球を拾い……………

「『ラッシュユノダッシュ』ッ!!」「」

ゴッ

スタンド 『ラッシュ』と『ダッシュ』で同時に「殴りつけた」
!すると……………

ゴッパアアッ

「『なッ!?!』『』『」

圧縮されていたレンガが、まるで押さえていたものをなくしたバネ
のように、飛び出したッ!!

『ッ!?!?く……………』

ドグシアアアアッ

そのままレンガが、柱に着弾したッ!!

「!いない……………!?!」

だが、そこには綺初の姿はなく、空洞になったレンガの柱しかなか

った。

「くそ……………別の場所に『レンガの容器』を用意して……………」
「ま、深追いする必要はねえだろ。（ヤツのスタンド……………かなり成長してる……………それに、応用もきかせてやがるな……………となると、他の二人、『帝』^{みかど}と『すずめ』も……………）」

さらなる危機を感じ取るアナスイ。

そんな時、今まで黙っていたハルナが口を開いた。

「ちょ……………ちょっと！何だったの一体ッ!？」

「早乙女……………」

「さっきから、レンガが襲ってきたり！ギンガさんはいきなり変身するし！それに……………」

「さっきアナスイ先輩や、その二人の後ろに『立っていたものは何ッ!?!?』」

「『『『『ツ!?!?』』』』」

ハルナの一言に、一同は目を見開く。

今、ハルナは何と言った?

アナスイや、キタツラ兄妹の『後ろに立っていた』

?

まさか !

「早乙女……………お前……………まさか

!?!?」

「……………で、何があったんですか？フエイトさん……………」

一方、シネマ村の駐車場に移動したティアナ達。彼女らの前には、先ほどのワゴン車と、それに乗っていた承太郎、フエイト、アルフ、ヴィータがいた。

ちなみに疲れたのか、木乃香と夕映はワゴン車内で眠っている。

「い、いやー、実は、アリサに借りてた車、車検に出さなくちゃいけないようになったらしくて……………それで、承太郎さんが知り合いからこの車を借りただけ……………」

「ヴィータがダツシユボードにあったスイッチ押ししたら、なんか知らないけどいきなり『ジェットエンジン』に点火して……………」

「ジェットエンジンッ!？」

「何でワゴン車にそんな物がッ!？」

「ちなみにさつき他のスイッチ押ししてみたんだが、『光学迷彩』や『潜水機能』、『無人運転』まで出来たぞ。」

「ボンドカーですかそれー!？」

「で、麻帆良からホンの『十分』たらずで京都まで『飛んできた』訳だ。やれやれ…『ヤツ』に『スピードワゴン財団』の技術者を紹介したのは失敗だったかな……………」

『多摩41すR2 D2』というありえないナンバーのワゴン車を

見ながら、エンジンの調子が悪いからと財団の技術者を紹介したのを後悔する承太郎だった。

だが、改造をお願いした『彼』もそうだが、それを実行した技術者も技術者だと思っティアナだった。

（ていうかコレ、かなりの高さから衝突したのに、キズ一つないなんて……………）

「あれ？承太郎さんにフエイトさん!？」

と、そこにアナスイたちがやって来た。

その内アナスイとギンガは、何やら深刻な顔をしている。

「あら、あなたたち……………」

と、ルル・ベルが話しかけた時……………

ガシィッ

「!？」

「ルル・ベル！お前に聞きたいことがある……………!」

「な……………何かしら……………?」

アナスイに捕まれて、ルル・ベルは困惑したように尋ねた。

「お前……………『早乙女を射抜いた』のか……………!？」

「……………!？」

アナスイの質問に、全員が目を見開いた。

「……………いいえ、そんなはずは……………!そういえばその子、のどかを射抜いた時に……………」

「……………アナスイ、ルル・ベル、詳しい話は車内で聞こう。刹那、道案内を。」

「は、はい……………」

承太郎に言われ、全員車に乗り込んだ。

「そういえば承太郎さん、天守閣思いつきりぶつ壊しちゃいましたけど……………」

「……………天ヶ崎 千草つつたか？そいつのせいにした。」

「ビドッ!？」

山陸の綺初 再起可能

天ヶ崎 千草 後日、シネマ村から高額の請求書が届き、愕然とする。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

>i10599—406<

スタンド名 アンチエイン・ワールド

本体 山陸の綺初（本名：久留須 綺初）

破壊力 B スピード C 射程距離 A

持続力 A 精密動作性 B 成長性 C

能力 土に取り憑き、レンガの姿になったスタンド。このレンガを組み合わせで作った『密閉した容器』にもものを入れると、別の『密閉した容器』に転送される。

#56 / キタツラ兄妹 ? (後書き)

56話です。

・モチテグチ登場。月詠はバトルマニア且つゲテモノ好きという設定にしました。

・綺初は『ギャップ』を意識したキャラ。後、トーレも乙女です(笑)

・アンチエイン・ワールドは、『閉じ込めたら瞬間移動』という、『転送装置』をモチーフにしたスタンド。ただ、『密閉しなければならぬ』という制限がありますが。

・ソルとルナのスタンド『ラッシュ』と『ダッシュ』。『二人で一能力』というのは、見た目も含めてまんまダブルですね………反省スタンド名は水樹奈々さんの楽曲『RUSH & DASH!』から。

・ハルナスタンド使い疑惑浮上。目覚めた経緯や能力は次回以降になります。

・承太郎さんがワゴン車を借りたのは、もちろんあの人です(笑)でも、財団の技術者による改造で、当時よりパワーアップしてます(笑)

・次回は本山到達、そしてハルナの疑惑を探ります。

では!

#57 / 京都嵐警報！ ? (前書き)

『^{ジョルノ}GIORNNO

【伊】日、明けた白目という意。

BUON GIORNO

ブオン ジョルノで「おはよう」。

この辺でやっときます(笑)

#57 / 京都嵐警報！ ?

「……………すまなかつたな……………私の過去の『復讐』のせいであ……………」

『亀のスタンド』の中で、千雨とポルナレフは話していた。

ポルナレフは、自らの復讐が原因で千雨の命が危険に曝される事になったのを、気にしていた。

「い……………いや、父さんが気にする事じゃあねえよッ！要は、アイツらの『逆恨み』だろ？」

「千雨……………」

「私はホラ、母さんやりサリサ師匠に死ぬほどシゴかれて十分強いからさ……………それに、徐倫やネギ先生とかもいるし……………だからさ、安心して大丈夫だから……………」

正直、千雨ははたから見ても無理をしているように見えた。だが、千雨が必死に父、ポルナレフに自分のせいだと思ってほしくないのが、ポルナレフには分かった。

「……………ありがとうな、千雨……………」

「……………ま、まあ……………どういたしまして。」

こうして、事件の渦中にいる親子は、およそ十年ぶりの再会を果たしたのだった。

「所で、あの『ルーテシア』という娘………名字は、『アルピーノ』と言ったか？」
「ん？ああ、確かそうだったぞ。」
「そうか………（似ていると思ったが、やっぱり………）」
「？」

#57 / 京都嵐警報！ ？

関西呪術協会本山

中腹部

「じゃあ、近衛たちを連れて、承太郎さんたちもこっちに来るんだな？」

亀から出た千雨は、刹那から電話があり、承太郎が借りたワゴン車に乗った木乃香たちがこちらに向かっているという事を、ネギ達から聞いた。

「うん。………ただ、少し厄介な事になっているらしくて………

……」

「『厄介な事』?」

「早乙女が……スタンド使いらしい……」

「ハアッ!？」

徐倫のセリフに、千雨は驚愕の声を上げる。

「まあ、私らも聞いたときは驚いたよ……だが、アナスイの『ダイバー・ダウン』が見えたらしい……それに、綺初たち『三羽鴉』も『ヴィオレッタ』側についたらしい……」

「やつらまでッ!？………何か、今まで以上にメンドくさくなつてねーか……?一人を除いて。」

「確かに奴らは厄介だな………一人を除いて。」

「その一人が誰かは知りませんが………」

「とにかく、『強い人たち』なんですネ。」

何やら厄介そうなスタンド使いの参戦に、そのうちの一人を除いて警戒する徐倫たち。

尚、その『一人』がはるか遠くでクシャミをしたが、それを徐倫たちが知る由もなかった。

「まあ、何とかなるでしょ。このかたち、後どんくらいで着くのかな?」

「親父が車借りたのが『あの人』だからなあ………すぐに到着すんじゃない」

ズガシャアアアンツ

「？何かスゴい音しなかった？」

「……………どうやら着いたらしいな……………」

「「「早っ!?!」」」

「だぁーかぁーらぁーっ！あの『仮面のダイバー』や『半分こ仮面』は何なのかって聞いているのっ!!」

「ハルナ、さつきから何を訳の分からない事を言っているですか……………?」

どうにか無事に承太郎たちと合流し、本山の山頂を目指す徐倫たち。先ほどからハルナはアナスイやギンガに質問攻めをしているが、アナスイらは相手にしないようにしていた。

ちなみにキタツラ兄妹の姿はないが、手薄になったホテル嵐山の警備に向かっているの、何ら問題はない。

ルル・ベルがのどかに向けて熱烈な視線を送っているのは、ある意味問題だが……………

「すみません……………成り行きとは言え、綾瀬さんまで……………」

「また、巻き込んだじゃったね……………」

「あー、大丈夫だろ。いざとなったら露伴先生いるし。」

「……………私、一昨日の晩にジョリーンが言っていた意味が分かったわ……………」

「私も……………」

先ほどの戦いで、露伴の『ヘブンス・ドア』の力の真髄を見た明日菜とスバル。

本人は無意識とは言え、『書かれたらその通りに行動してしまう』能力は、確かにある意味スタープラチナよりも強いかもしれない……………

「お、あれが入り口じゃないか？」

久しぶりに再会した康一と話をしながら歩いていた承太郎は、目の前に入り口らしき門があるのを見た。

それを見たネギ達は、山の入り口よりもヤバそうな雰囲気を感じ知した。

（着いたか……………）

（ココは関西呪術協会の本拠地！何が出て来るか分からない！ここは慎重に……………）

徐倫やネギ達がそう考えている中、承太郎やアナスイ、ギンガたちは

「……………お邪魔しまーす。」

「……………ってちよつとー……………」

普通に入っっていった。

「ちよつと!?!ココは敵の本拠地なんだよ!?!ギン姉まで!?!」
「え?ああ、大丈夫よ。さつき刹那から聞いたのだけどココ」

「……………お帰りなさいませ、このかお嬢様————」
「……………へ?」

一同が門をくぐった瞬間、大勢の巫女さんが出迎えてきた。
呆気を取られるネギ達に、ティアナが説明を続ける。

「……………ココ、『関西呪術協会』の『総本山』で、このかの『実家』
なんですつて。」
「……………ええええ————ツ!?!」

「ちよつ!?!何それ!初耳だよ!?!何で桜咲さん先に言ってくれな
かったのーツ!?!」

驚いたまま刹那に聞いただすスバル。徐倫らも、事情を聞きたそう
だ。

「す、すみません……今御実家に近づくとお嬢様が『危険』だと思
っていたのですが……」「シネマ村」では、それが裏目に出てしまっ
たようですね……………」
「ナルホド……………逆に『総本山』に入っちまえば『安全』って訳だ
な。」

徐倫の言葉に、刹那は小さく頷いた。その時だ。

「あ、ジヨルノ様たちも、お帰りなさいませ。」

「ルル・ベルさんも。」

「ええ。ありがとう。」

「あの人は？」

「すみません、今出ております。」

「……………あれ？」「……………」

何か、ジヨルノたちとルル・ベルが、巫女さんたちとフレンドリー
に話していた。

「あれ？何でジヨルノさん達、そんなフレンドリーなん？」

「いえ、実は僕たち、ルル・ベルの『知り合い』という女性の紹介
で、総本山ココに泊まっているんです。」

「交通が不便だがな。」

「……………はアッ！！？」「……………」

「……………」

今度は、刹那を含めた全員が叫んだ。未だに状況の読めない夕映と
ハルナは首を傾げているが。

本山に入ってしまったネギ達を、じっと見ている陰があった。

「ちいッ、コラヴィオレッタはんッ！あんたが『追わんでえー』ゆーから放つといたら、「本山」に入れて手出しできんやんかッ！
！デイドも向こうの手中やしー！」

陰、千草は通信を開いてヴィオレッタに怒鳴りつけていた。そんな千草に、ヴィオレッタは涼しい顔で告げる。

「ご安心を千草。すでに手は打つてあるわ。」

「無理やる！既に『アヌビス神』は再起不能リタイアしとるで！仲間やったから『エターナル・ブレイズ』は心強かったが、敵になったら

「私がデイドに与えたのは、『アヌビス神』と『エターナル・ブレイズ』だけではないわ。」

「何？」

ヴィオレッタの打ち明けた事に、千草は顔をしかめる。

「そろそろ、『ガディ・R.U』と共にそちらに着くはずよ。こついた『状況』において、最適な能力者がね。」

「つまり、アナタの『協力者』が関西呪術協会の長と知り合いなよね。」

「ええ。お母様に近づいた『あの男』の事を調べていたら、あちらから接触してきたの。ただ、彼女の素性は私にも分からないわ……」

「……」
「ふうん……」

総本山の屋敷内にある大広間に案内された明日菜らは、呪術協会の長を待つ間にルル・ベルの話聞いていた。

「……あれ？でも『総本山』が『このかの実家』って事は……関西呪術協会の『長』って」

「いやあ、お待たせしました。」

明日菜がある事に気づいた時、大広間の奥にある階段から、中年くらいのやせた男性が現れた。

「ようこそ、明日菜くん、木乃香のクラスメートさんたち、それに担任のネギくんと承太郎さんたちも。木乃香の父の『近衛 詠春』えいしゅんです。」

男 詠春が名乗ると、木乃香が彼に抱きついた。

「『お父様』、久しぶりやー……」

「こら木乃香、皆さんの前だろう。」

抱きつかれた詠春は、照れたように、だが嬉しそうに木乃香に注意する。

「このかの親父さんが、『西』の長だったのか……」

「これは、予想できなかったな……そっぴゃあ、京都出身だったね……」

「し……渋くてカッコイイかも……」

「ア、……アスナって、そういう趣味なんだ……」

詠春と木乃香のやり取りを見て、徐倫らは感想を漏らす。

「あ、あの、長さん、これを……『東の長』、麻帆良学園学園長近衛 近右衛門から、西の長への『親書』です。お受け取りください。」

そこへ、本来の目的である『西の長への親書』を渡すネギ。

「ええ、確かに承りましたよ、ネギくん。大変だったようですね。」

「い、いえ………」

言つと詠春は、ネギから渡された親書を開けると、一番初めの紙には、

下もおさえれんとは何事じゃ！

しっかりせい婿殿！！

というメッセージが、学園長のイラスト付きで書かれていた。

「（はは……相変わらずお義父じつとさんは手厳しい……）……いいでしょう、「東の長の意を汲み、私たちも東西の仲違いの解消に尽力する。」とお伝えください。任務御苦労！ネギ・スプリングフィールド君！」

「は、はい！」

こうして、学園長から託された『親書を渡す』という任務は完了した。

詠春は『今から山を下りたら日が暮れる』と、今日は屋敷に泊まるよう勧められ、ネギたちはお言葉に甘えることにした。（旅館の方には身代わりを放ってくれるらしい。）

「いやあ、いいお湯だったねえー」

「意外といいわね、二ホンのお風呂って」

「え、あ……うん……」

「……あー、ハルナの事がまだ残ってたわね……アナスイの『ダイバー・ダウン』が見えたらしいケド……」

夕食を振る舞われ、さらに風呂にも入らせてもらった明日菜、スバル、トリツシユは、廊下を歩いていた。

「まあ、その辺は承太郎さんやブチャラティに任しとこ。敵も屋敷こいに迂闊に攻め入らないでしょ。」

「だと良いんだけど………（何だろっ………この『胸騒ぎ』………?）」

スバルが、どことなく不安そうに呟いた時だ。

前方の曲がり角で、ズシャアッ、という倒れ込むような音がした。

一方、屋敷内のトイレでは………

「あ、千雨にオットー。」
「ランスター。」

ティアナとルーテシアがトイレに入ると、千雨とオットーが手を洗っている最中だった。

「何でルーテシアお嬢様と一緒に？」

「……………トイレが怖くて……………」

「え？その年齢で？」

「いや、ほら、ルーテシア二回もトイレで『災難』にあつたらしいから……………」

ティアナが説明すると、思い出してしまったのか、ルーテシアは小刻みにふるえてしまった。軽くトラウマになっているらしい……………

「あー、分かるぞ。私も二年前を境に、時々トイレで災難に合うから……………」

「そういえば、今日もあっていましたね……………」

「……………そう。」

千雨の話聞いて同族がいることを知ったためか、少し希望が持ったような眼差しを千雨に向けると、開いている個室に入るルーテシアだった。

「で、あなたたちの方は？」

「私は普通に用を足しに。オットーは、デイドを連れてな。」

「さっきよつやく目を覚まして……………それでトイレに行くって言うから。」

安心した表情で話すオットーを見て、ティアナはそう、とだけ言った。

麻帆良に来た当初からデイドの事で余裕のない様子だったオットーだが、ようやく落ち着いたようだ。

ドッジャアアア……

「……とりあえず、何ともなかった……」

「……良かったな。」

「デイド、長いなあ……」

「確かに……まあ、その辺は気にしないでやれよ。個人の自由だ。」

ルーテシアが個室から出てきて、そう千雨が入った時だ。

デイドの入っていた個室が、ギギギイと音を立てながら、ゆっくりと開いた……

少し時間は遡り……

屋敷内、徐倫たちにあてがわれた部屋

現在、ここには徐倫、アナスイ、ギンガ、夕映、のどか、ルル・ベル、フェイト、アルフが、ハルナを囲うようにして座っていた。ちなみにルル・ベルがのどかに寄り付こうとしているが、アナスイがガツチリと頭を掴んで止めている……

「あの、のどか……これは一体……？」

「あ、……だ、ただ大丈夫だよー？」

「さてハルナ、質問だ。お前、『コイツ』が「見えるか？」」

困惑する夕映をのどかが大丈夫だと言う中、徐倫は『ストーン・フリー』を出した。

「うおっっ！？徐倫！あんたまでっ！？」

「？ハルナ、何の話です？空条さんも……？」

（ゆえは見えてないんだー……）

ハルナは『ストーン・フリー』に驚いているが、夕映には見えていないのか、何のことか分からない様子だ。

「え？何言ってるの夕映？徐倫の後ろに……」

するとハルナは、側においてある自分のカバンからスケッチブックを出すと、手にしたペンで徐倫の後ろから出るストーン・フリーを描いた。

「こんな風に、何て言うか、『守護霊』？みたいのが出てるジャン！？」

「……………？いえ、私には……………！」

目を凝らして徐倫の背後をみる夕映だったが、ふと気づいた。

「空条さん、先ほど『見えるか？』と聞きましたね？ということは、『見える人』と『見えない人』がいて、ハルナは『見える人』だと言うことですか？」

「……………さすが夕映、話が早いなあー！。」

（く、空条さん！お、おお教えちゃっていいんですかー！？）
（ま、ここまで巻き込んだじゃあ、仕方ねーだろ……………コイツ、やけに『勘』がさえてるし……………）

のどかと徐倫がひそひそと話すのを見ていたハルナと夕映だったが、ふと、夕映は気づいた。

「……………？ハルナ、いつの間に『スケッチブックをめくった』ですか？」

「え？あ、あれ？」

徐倫とストーン・フリーが描かれているはずのスケッチブックのページは『白紙』になっていた。

「おかしいなあー？1ページも『めくっていない』のに……………描いた絵が見当たらないなんて……………？」

「！？ハ、ハルナー、そ、その『ペン』は……………！？」
「へ？」

不思議そうにスケッチブックを見ていたハルナだが、のどかに言われて自分が握っているペンが『変質している』事に気づいた！

ペン先は銀色でカラスの頭を模しており、頭には『G』と書かれているのでGペンがモチーフだと思われる。

薄い緑色の軸には三日月のような模様がペン先の元から後部にかけて施されており、後部には鳥とジェット機の翼を組み合わせたような翼が付いており、全体的に見るとジェット機のコンソールドに見えるフォルムだ。

「あ、あれ……？こんな『ペン』じゃなかったのに………？」
「まさか………ペンがハルナの………だが、何故絵が消えたんだ………？」

そう不思議に思って徐倫がスケッチブックに手をやった時だ

ズポアアアアアッ

「……ッ!?」「……」

徐倫の手は、スケッチブックに『沈み込んだ』!

「な!こッ、これは………ッ!?」

「まさか………これがハルナの………!」

徐倫がハルナの『スタンド能力』に気づいたその時

バアアンツ

「！！？」

「チ……………チンクさん？」

「みんな……………今すぐ逃げろオツ！！」

いきなりふすまが開くと、必死の形相でチンクが叫んだ。

ドサアアツ

「グウウツ……………」

「！！ノ、……………ノーヴェエ！？」

スバルは、倒れ込む音の先にいた少女　　ノーヴェエを見て心配そ
うな声を出した。見ると、ノーヴェエは肩から血を流していた。

「大丈夫！？怪我しているけど」
「近づくなッ！！」

明日菜が心配そうに駆け寄ろうとするが、ノーヴェエはそれを突っぱねるように叫んだ。

「やられた……………アイツら、『デイド』に罫を張っていたんだ……………すれ違った時に……………肩ヲやられた……………」
「えっ……………ッ！？」

ノーヴェエが苦しそうに告げた言葉に、3人は息を飲む。だが、明日菜は気づいていた。

(ノ……………ノーヴェエの『口』……………いつの間にか「耳」まで裂けて……………まるで！あの口はッ！！)

だが、ノーヴェエの変化はそこで終わらない！皮膚はウロコが覆い初め、手の爪は鋭く伸び、首も伸び出した！

「ア……………アイツハ！ソウして『姿』ヲ変えるンダ！……………『爪』デ攻撃して……………支配下にオク『能力』なんだ！『カスリ傷』でも感染スル！そうやって『内側』カラ……………総本山ヲ攻め落とす作戦だったんだ！！」

ノーヴェエの苦しさを増す声と比例して、さらに変化は進んでいく！口は前に伸び、足の骨格も変わりだしていた！さらに、その変化の『極めつけ』は！

「し……………しっぽ『オー！！！？』」
「逃げロツ！！コノ敵ハ……………ヤバ……………ス……………ギルツ……………」

「！」

トカゲを思わせるしっぽが生え、その『変化』は終わりを告げた。

鳥を思わせる顔つきだが、その全身にはウロコが覆い、鋭い牙と爪を持ち、長いしっぽの『爬虫類』だ。

薄い赤の体表を持ち、黒い背面には『I』と『X』に見える赤い模様が交互に並んでいた。

そう、この生物は

デイドの入っていた個室の扉が開いたので、千雨たちはそちらを見た。
見た。

見て、ひきつった笑みを浮かべた。

「……は？」

そこにいたのはデイドではなく、巨大なトカゲを思わせる生物

> i10695—406 <

スタンド名 ラッシュ（右半身）&ダッシュ（左半身）

本体 ソル（ラッシュ）とルナ（ダッシュ）

破壊力 B スピード C 射程距離 B

持続力 B 精密動作性 B 成長性 C

能力 ソルとルナがそれぞれ半身ずつ持った、『2人で一能力』のスタンド。

このスタンドが『同時』に攻撃した地点を中心に、直径1メートルを『直径3センチの球体』に圧縮する。圧縮したものは、再度攻撃されると元に戻る。

#57 / 京都嵐警報！ ? (後書き)

57話です。

・サブタイトルは『サルディニア島嵐警報！』から。

・ポルナレフと千雨の会話。ポルナレフがルーテシアについて何か知っているようですが、詳細は後になります。

・ルル・ベルの『協力者』は、あの『仮面の女』です。

彼女の正体はある意外な人物で、この物語の鍵を握っています。

・ハルナのスタンド。今はヴィジョンと能力の鱗片だけですが判明させました。詳しくは次回。

・ラストで『恐竜化』。『ネギま！』を読み返して、この場面ではこれしかないと考えていました。ただ、描写が難しい……

・次回は、恐竜の巣窟と化した総本山からの対処と、新たな敵の登場を予定。お楽しみに。

では！

#58 / 京都嵐警報！ ? (前書き)

年内に更新できて良かった……………

恐竜たちの巣窟と化した総本山！

「随分久しぶりじゃねーか、ポルナレフ……………」
『承太郎……………』

徐倫がハルナの尋問（？）をしているのと同じ頃、承太郎はとある一室でジオルノたちが所持していたスタンド使いの亀 ココ・シャンボの内部で、ポルナレフと対話していた。

（彼がポルナレフのかつての仲間か……………さっき会った時もそうだったが、なんつー圧力だよ……………）
（彼の圧力……………何だこれは？何か……………『別の力』が働いているような……………？）

『ココ・シャンボの所持者だからと、近くで見っていたジオルノ、ミスタ、そしてブチャラテイの3人。承太郎は時折チラリとみる程度で気に留めていない様子だが、内心ジオルノがいる事に気まずい状況だった。』

『その……………何だ、色々とすまないな、千雨の事……………』
「気にするな。元を質せば、J・ガイルのせいなんだからな。」

承太郎が気軽に言うと、ポルナレフはホッと肩をなで下ろした。

「……………所で話は変わるが、お前、『ディアボロ』にやられた後、時空漂流したらしいな。」
「え、あ…ああ……………」

承太郎が切り出した話に、ポルナレフは狼狽え、ジオルノたちは目

を見開く。

「スバルのオヤジから聞いたんだが、お前、そんな時「陸士108隊」に保護されて、『メガーヌ・アルピーノ』という女性陸士と仲良くなったらしいな……………」

『……………まあな。』

なぜか気まずそうに承太郎から目を反らすポルナレフ。気のせいかな汗の量も多い。

「オヤジさんのヤツ、オメーの名前聞いてビックリしてたぜエ……………まさかオレと知り合いだとは知らなかったらしくてなア……………」

……………」

『ま……………まあ、そうだろうな……………時空漂流者だし……………』
「……………千雨にはまだ言っただろな。あの……………！」

承太郎は言い終えようとした時何かに気づいたのか上を、亀の外を見上げた。

「……………?どうかしましたか……………?」

「……………外が、妙に騒がしい……………」

「……………何?」

言っつや否や、承太郎は外に飛び出した。出た先には

「……………ニャー!?か……………亀から!?!」
「バレた……………」

黒いボブカットでネコ耳と尻尾を持つ少女と、左右に大きな角を持った少女が、部屋の畳と床板をはがし、その下から細長い木箱を取り出している最中だった。

「……………やれやれ、見た所巫女さんじゃねえな。ネギ君達が対峙したっつう「調」とかゆうヤツの仲間か……………」

二人が慌てる中、承太郎は臨戦態勢をとる。後ろでは、亀からジヨルノ達が出てきていた。

「ど……………どっしょう環タメキ!!?!」
「……………落ち着いて暦ヒメ、勝てない相手ではない。」

暦と呼ばれたネコ耳の少女に対し、環と呼ばれた角の生えた少女は焦った様子ながらも冷静に話す。

「……………ほう、随分と「ヨユー」ぶっこいてんじゃねーか。この状況で、テメーラに『勝ち目』があるとでも?」

環の態度に、『スタープラチナ』を出して臨戦態勢の承太郎が言う。背後のジヨルノ達も、それぞれスタンドを発現させていた。

「いえ、ただ、あなたの方こそ状況をよく見ていただきたいなと思

います。」

「……………何？」

環の言葉に、承太郎は眉をひそめた。その時、部屋のふすまが慌ただしく開いた。

「じよ、承太郎さんたち！」

「早く逃げて……………！」

入ってきたのは千雨、ティアナ、ルーテシアにオットー、そして

「すでに本山は、我々に『占拠』されていますから。」

数匹の『恐竜』だった……………

#58 / 京都嵐警報！ ？

「ノ…………ノ…………ヴェ…………？」

恐竜に変わり果てたノーヴェの姿を見て、スバルが恐る恐る話しかける。

「……………グヴヴ……………」

だが、ノーヴェはそれに反応する事なく、唸り声を上げるのみだ。どうやら、既に精神も支配され、恐竜と化してしまったらしい……

「な……………何かヤバそうよ……………」

「逃げた方がいいんじゃないか……？」

「で、でも、ノーヴェは……………」

明日菜とトリツシュがスバルに提案するが、スバルは躊躇ったように呟く。その時

明日菜とスバルは直ぐに飛び退こうとしたが、不意にグイイツ、と背中を引っ張られる。

「こつちよ。」

「トリツシュさん!？」

「『スパイス・ガール』!」

トリツシュは、二人を近くにあつた灯籠の後ろに引っ張ると、「+」や「-」、「x」、「÷」の数学記号が各所に施された女性型スタンド　『スパイス・ガール』で、灯籠を攻撃した!

ノーヴェはそのまま、灯籠目掛けて突っ込んでくる!

グニヤアア

「「え?」」

「……………ギ?」

だが、ノーヴェが灯籠に激突した瞬間、灯籠の上部の穴に首と腕が『ハマった』!？」

「私の『スパイス・ガール』が殴ったものは!『岩』だろうが『鉄』だろうが!ゴムのように『柔らかくなる』!！」

トリツシュが言い放つと同時に、灯籠の上部が本体から離れ、ズズウン、という重低音と共に落ちた。

「ギヤース！ギヤース！」ジタバタジタバタ

「や……………柔らかくなくても、『重さは変わらない』のね……………」
「ちようど良い『枷』になったわね。さあ、今の内にジヨルノ達と
強力しましょう。」

灯籠の重さで身動きがとれず、ジタバタと足掻くノーヴェを尻目に、
トリツシュは二人を連れて立ち去ろうとする。

「……………あの、トリツシュさん……………一つ聞きたいことがあるんで
すが……………」

「「？」「」

だが、スバルは冷や汗を垂らしながら一方向を見ていた。二人もそ
ちらを見ると

「グルルルルルル……………」

「アウツアウツ」

「ギヤアアアアアス！」

十数匹の恐竜が、三人の行く手を阻むようにひしめいていた……………

「ネギ！」

声のした方を見ると、杖を構えたネギがおり、肩に乗った力モが信じられないと声を上げていた。

「ギャース！」

ドンツ

「くっ……」デフレクシオー 『風楯』！」

ドガアアツ

と、恐竜が一匹ネギに襲いかかり、ネギはそれを障壁を張って弾き飛ばす。

「ネギ君！」

「スバルさん！今の内に二人を連れて大浴場に！」

「なっ……アンタ、何言ってるのよ！？そんな事……」

「大浴場で、刹那さんとこのかさんが待っているんです！もしこのスタンドがこのかさんを狙う目的なら、このかさんが危険です！」

ネギの言うことに、はっとなる三人。だが、このままネギを置いていく訳にはいかない。

「~~~~~あーもうツ！」

急にスバルがじれったいという風に叫んだかと思うと、リボルバーナックルを装着、光弾を数発恐竜たちに向かい発射した！
だが、恐竜たちは先程同様にジャンプする事で難なくかわし、光弾は地面付近へ落下する。

ガシイッ

「……ギヤース!?」

「……なッ!?」

「バインド!?」

だが恐竜たちが着地した瞬間、蒼く光るバインドに拘束された!

「覚えててでちょっとの間しか拘束できないから、今の内に早くッ
!」

「あ、……うん。」

「結構やるわね、あなた……」

「ギヤース!?」

「ギヤース!」

バインドでもかく恐竜たちを尻目に、スバルたちは木乃香の元へ走った。

「……何とか撒いたみたいね……」

一方、こちらは恐竜たちから逃げて、ある部屋に隠れた徐倫、夕映、ハルナ、のどか、チンク、アルフ、ルル・ベルたち。
アナスイたちとははぐれてしまったが、まああの面子なら大丈夫だろう、とは徐倫談である。露伴に限っては、恐竜の動きをじっくり観察する余裕があったし。

「チンク、ありゃあ一体……………」

「分からん……………巫女さんが数人うづくまって苦しんでいたから、心配して近づこうとしたら急に恐竜あのようになって……………」

マジで、とアルフが思った（流石にまだ夕映たちの前で声を出せない。）一方で、徐倫はこの状況がスタンド攻撃だと確信した。

「で……………ではこの状況はその『スタンド』という超能力によるものだと……………」

「ええ。そうなるわ。」

「マジで！？私超能力者ツ！？」

「そ……………エスパーそれとは違うかな……………」

一方で、のどかとルル・ベルは夕映とハルナに『スタンド』や『魔法』について説明していた。いきなり非現実的な現実リアルを聞かされただけに、二人のシヨックは大きいようだった。

「そ、それでなんだけどハルナー、いつ『矢』に射抜かれたか、覚えはないー？」

「え？うーん……………？あ！あの時かも！！」

「いつかしら？正直、私にも覚えがないんだけど……………」

「うん、ネギ君やスバルが麻帆良に来る一週間位前だったかなー！」

曰く、図書館島でのどかが倒れているのを発見し、抱きかかえた時に右手人差し指の根元を少し怪我したらしく、ほら、と見せられた右手には、確かに言われないと分からないほど小さな傷があった。

「なるほど、多分だけど、そんな小さな傷だったから、スタンドの覚醒に時間がかかったのね……………」

ルル・ベルが自分の推論を呟くと、ふすま近くで外の様子を伺っていた徐倫が近づいてきた。

「そんじゃあハルナ、お前の能力を^{スタンド}確認しておきたい。」

そう言つて、徐倫はハルナにペンとスケッチブックを差し出した。

「え？く、くく空条さん、何でこんな時にー？」

「私の推測が正しければ、ハルナの能力があればこの場を脱出できるかもしれない……………」

ハルナが困惑しながらペンとスケッチブックを受け取る中、徐倫の言葉に全員がハルナに注目する。

ドツギユウウーーン

「スタンドは発現したな。そんじゃあハルナ、まずは夕映を描いてみてくれ。できれば全身像で。」

「お、OK……………？」

未だに首を傾げたハルナだが、徐倫の言うとおり『スタンドの発現したペン』で、スケッチブックに夕映を描いた。だが描き終わると、夕映の絵は徐々に消えていった。

「あ！？あれえー！？」

「消えた……………ひよっとして、さっきの徐倫の絵も今みたいに……………」

「……………夕映、その『ページ』に触れてみてくれ。」

「え……………あ……………はい？」

夕映は分からない様子ながらも、徐倫に言われるままにページに触れると

ズボオオツ

「……………ツ！？」

先程同様、夕映の腕がスケッチブックに『めり込んだ！？』

「なツ！？……………これって……………！？」

「やはりな……………夕映、もっと奥につつこめ。」

「なツ！？何を言ってるですか空条さん！？」

「いいからツ！」

グイイッ

「キヤーーーーッ！？」

「ゆえーーーーッ！？」

いきなりの徐倫の指示に夕映は戸惑うが、徐倫はそれに構わず夕映を無理矢理つつこんだ。すると、夕映は全身がスケッチブックに沈み込んだ！

「ゆ、ゆえーッ!?どこーッ!?」

『のどかー!私はここですよー!』

夕映の声のする方を見ると、それはスケッチブックからだった。見ると、ページには『消えたはずの夕映の絵』が描かれていた!?

「やはりな……ハルナのスタンド能力は、『絵に模写^{かい}たものを、絵の中に閉じこめる能力』!」

「おおッ!つてか、何この凶悪っぽい能力!」

『何でも良いですけど、それを確かめるのに私を使わないで下さい
ー!ーッ!』

その頃、木乃香と刹那は大浴場にいた。

偶然にも二人は恐竜と遭遇はしなかったが、屋敷中のピリピリと殺気だった雰囲気、木乃香は不安そうに刹那の服をぎゅっ、と握っていた。

「せつちゃん……………」

「お嬢さま、私から離れないように。」

「うん……………」

既に『夕凧』を抜刀して構えている刹那は、背にいる木乃香にそう笑いかけた。

(先程のナカジマさんからの念話から察するに、敵はスタンド使い……………だとすると狙いは)

刹那がそう考えた時だ。

二人の背後にあつた浴槽の湯船がゆらりと波打った!?

「!」

ギュワンッ

「!?!」

瞬間、刹那の『夕凧』の刃が煌めき、背後にいた人物をかすった! その人物は湯船の湯を撒き散らしながらバック転をして、水面に『

立った』。

「…………やるね。まさか一瞬で感じられるなんて。」

「子供……………!?!」

そこにいたのは、ネギより少し年上の白髪の学生服を着た少年だった。

「少しはできるようだね。でも　油断しすぎかな。」

瞬間、飛び散った湯の水たまりから、木乃香に向かい何か飛び出した!

「!?!」

さっ

「ッ!?!」

だが、木乃香はその『何か』をとっさに避けた。

(『クラッシュ』を避けた……………?バカな!?!近衛　木乃香がスタンド使いという情報は入ってない!?!)

予想外の事態に、少年は目を白黒させる。だが、頭を掠ったらしい木乃香の右こめかみを見て、理由を察知した。何故ならそこには

「ハアアアアッ」

「！」

キーン

少年が考えを巡らせる中、刹那の『夕凧』の一閃が迫り、少年はそれを障壁で防ぐ。少年は防ぐまま呪文を詠唱し、刹那に向けて『魔法の矢』を放つも、刹那はギリギリで避けた！

「くっ……………」

「以外と粘るね。でも」

瞬間、木乃香の元へ再び何かが迫るも木乃香はすつと避ける。

だが、その先には……………

ガシィッ

「きゃああッ！」

「お嬢さまッ!?!」

いつの間にか、そこには片方の角が折れた『鬼』が立っており、木

乃香をガツシリと捕まえ、気絶させた！

「油断大敵だ よッ！」

バツシイイイイイッ

「！しま……………ッ」

木乃香に気を取られていた刹那は、少年の放った『戒めの矢』に捕縛されてしまった！

少年はそのまま木乃香に近づくと、木乃香の頭から出ている『ソレ』を掴み、

ズルウウウウー

「!？」

一気に『引っこ抜け』た！

『ソレ』は、直径が約20cm程の藍色のCDのようなDISCディスクで、光に反射して表面に『独特な描写で描かれたマンガらしきもの』が見えた。

「『ホワイトスネイク』の『DISC』か。こんなものが彼女に「入れられていた」なんて……………しかもこのスタンドは……………」

少年はそのDISCを見ながら、仮にこのスタンドを近衛 木乃香が意識して使用したらと考えゾツとした。

「き、貴様アッ！」

「悪いね。僕としては彼女に興味はないけど、千草さんがうるさい

からね。」

少年はDISCをポイツと放ると、そのまま水たまりに近寄った。刹那には見えていないが、その水たまりには『鮫』型のスタンド

『クラツシュ』が待機しており、ヒレで少年を掴んでいた。

「まあ、目的のモノも手に入ったし、僕は退散させてもらうよ。それじゃあ。」

「なっ、待っ……………」

待てと言い切る前に、少年は何処へと転移してしまった。

千雨とティアナ、ルーテシアは、開いた口が塞がらなかった。

暦と環も、塞がらなかった。

何故なら

「 やれやれだぜ。思ったより手こずったな。」

「 デイード、大丈夫ッ!？」

彼女たちの目前では、承太郎が帽子の位置を直し、オットーが血を流すデイードを抱き抱え、ジヨルノが亀コ・ジャンボを抱え、ブチャラティがやれやれとため息をつき、ミスタが弾丸たまを込め直していた。

そして周りには、体のあちこちに青あざを作った巫女さんが、ある者は畳の上で、ある者は畳から『生えた』樹木の上で、またある者は畳に空いた穴でノビていた……………

このような状況になった経緯を説明すると、ティアナたちと一緒に入ってきた恐竜たち数匹に対して、承太郎が『オラオラ』をブチかまし、恐竜の内2、3匹が巫女さんに戻るも、難を逃れた数匹（スタープラチナが見えるデイード等）が尚も立ち向かってきたため、ミスタが『生命の与えられた』弾丸を畳に放ち、それから成長した樹木で恐竜の動きを封じ、ブチャラティが畳にジッパを引っ付けて空いた穴に恐竜を落とし、そのまま承太郎とジヨルノが再起不能にした訳だ。

「何というか……………容赦ないわね、あの人たち……………」

「だね……………」

「さすがは承太郎さん……………」

「あわわ……………」

ティアナたちがそう呟いたその時、そばのふすまがバァンツ、と開き、刀を構え、肩で息をする詠春と、合流したらしい露伴と康一が現れた。

「長さん……………」

「やはり、目的は『ソレ』でしたか……………!!」

詠春は暦が持った木箱を見て、潜入してきた者たちの目的を察する。

(長が自ら……………それ程重要なモノなの……………?)

皆が一瞬考えを巡らせていた瞬間、暦と環は懐からカードを取り出しました。そして

「アテアット来たれ。」

「……………ツ!?」「……………」

気が付くと、曆と環の姿が消え、承太郎たちは無数の立方体の浮かぶ、無限とも思える空間にいた

!?

「これは……………?」

「何だこりやアツ!? 『端』が全く見えねえぞ!? 四方八方が何十kmも先まで続いているみてえだ……………!?」

「やられた!! これは「結界空間」よ!! さすがに、こんな広大なものは初めて見たけど……………」

「まさか…………… 僕たちをこの空間に閉じこめて「出さない」気がツ!?」

「何イツ!?」

ティアナとオットーの推測に、全員が息をのんだ。

「アーティファクト『無限抱擁』。」

「!?!」

気が付くと、承太郎たちのいる場所から数十m離れた立方体の上に消えたと思っただけの環がいた。

「この『無限の広がり』を持つ「閉鎖結界空間」に出口はありません

んよ。理論的に、脱出は『不可能です』。」
「例えあの『DIO』を殺した『最強のスタンド使い』であるあなたでも、これにはお手上げでしょう。」
「！！」

環が言い放った言葉にジヨルノが同様したが、二人はかまわずに姿を消してしまった……………

(くっそー……………)

一方、屋敷内の、大浴場に近い廊下の屋根裏。

(大浴場まで屋根裏は続いてないし……………でも廊下したには恐竜がうじゃうじゃ……………早くどっか行ってくんないかなあ…………………………)

(ア……………アナスイさんと二人つきり……………あう……………)

アナスイと二人つきりという状況に、ギンガは真っ赤になった顔を両手で覆った。

「おお、無事だったかギンガさん。」

「え、ええ……………」

「え？オレは？」

ズルウウ

「いやアー、考えたね徐倫！」

「まさか、ハルナの能力で恐竜たちを閉じこめるとは……………」

「あなたたち！？」

アナスイが相変わらずぞんざいに扱われる中、同じようにハルナやルル・ベルたちが、紙の中から出てくるのを見て、ギンガは驚いた。だが徐倫は恐竜たちを閉じこめた紙を拾うと半分に折り曲げ、ポケットからセロハンテープを取り出すとグルグルと紙に貼り付けた。

「あの一、く、空条さん、何を一？」

「いや、万が一『抜け出せないよー』な。」

のどかの質問にそう答えると、同じようにポケットからホッチキスを取り出して、針で柱に紙を張り付けてしまった。

『ギヤース！ギヤース！』

「なるほど……………これは抜け出せないですね……………」

「ネギたちとは大浴場で落ち合う手筈だ。行くぞ。」

張り付いた紙を見て夕映が感心していると、徐倫が皆に言った。

その時だ。

『人間位の大きさ』の戦闘ヘリがいた……………

「ちゅ……………中途半端な大きさッ!？」

「徐倫、ありゃあ……………?」

「ああ……………『エナジー・フロウ』……………「乱気流のすずめだ……………」

空条 徐倫を発見した黒羽^{くろつう} すずめは、思わず右手の指を鳴らした。

亜麻色の、所々跳ねたボブカットの髪型に、まだあどけさの残る顔の右目には、翼の装飾が施された銀色の片眼鏡^{モノクル}をかけ、グレーと白のパイロットスーツを着た、徐倫たちと同じ年位の少女だ。

「見つけたよ空条 徐倫。二年前の屈辱、ここで晴らすッ!」

すずめは指を二度鳴らすと、レバーを前に倒した。

『伊賀の三羽鴉』の一人、『乱気流のすずめ』
スタンド名は『エナジー・フロウ』

グリーンドルフィンストリート麻帆良

206号室

現在、シャーリーが留守番をする六課の部屋には、6人の来訪者が来ていた。

その内の一人、黒いロングヘアの三十代前半程の女性は、向かい合ったエヴァンジェリンと暮を打っていた。

パチッ

「む……………」

エヴァの一手に、女性は眉を潜めた。すると、脇からにゅっと金髪の陰が現れた。

「ここがいいんじゃない？」

「あ、コラー！」

「あら、確かにそうね」
パチッ

「ぐっ……………この童こどもは……………！」

「こら、ヴィヴィオ！！！」

エヴァンジェリンがヴィヴィオを睨んだため、脇に立っていた女性は、慌ててヴィヴィオを抱き抱えた。

怪我也大分回復したため、ヴィヴィオと一緒にスバルたちに差し入れとして実家の喫茶店のケーキを持ってきたのだが、現在修学旅行に向かっていると聞いて肩透かしを食らっていた。どうやら、はやてやフェイトの連絡ミスらしい。

仕方なく今夜はヴィヴィオと、仗助を訪ねてきたこの女性と一緒に、六課の部屋に泊まることにしていた。

「ちよつとルールを教えただけなのに、なかなかいいセンスしてるのお〜。」

「あの一手は、『マスター』ですら見落としていたようです。」

なのはが来ていると聞いた学園長と、エヴァンジェリンと一緒に連れられて来て、今お茶を入れている茶々丸は、先ほどのヴィヴィオの一手に感心していた。

すると、学園長の携帯電話から『残酷な天使のテーゼ』の着メロが鳴り響いた。

「はいもしもし。おお、ウエザー君か！」

「……………たまに思うんだが、その着メロやめた方がいいぞ？」

引き気味のエヴァンジェリンのつつこみに目もくれず、学園長はウエザーとの通話を続ける。

「何！総本山が！？うむ……………では長も……………！」

「おそらくは……………承太郎さんがいるからと油断してました……………」

……………ネギ君によれば、恐竜はオレが何とかできるらしいので、今エリオ君たちと本山に向かっていきますが……………」

「うむ、助っ人か……………しかしタカミチは今海外じゃ……………」

……………ほ……………」

どうしようかと学園長が悩んだが、彼は気づいた

「ん？何だジジイ、マヌケヅラして？」

「何かあったんですか？」

「？」

自分の手元には、切れる札ジョーカーが『三枚』あることに……………！！

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CAFE」

名前 久留須 綺初

異名 山陸の綺初

年齢 25歳

出身 伊賀

階級 上忍

身体的特徴 180近い身長、左目に眼帯

得意料理 魚貝類たっぷりのパエリア、ただし、何故か味噌味

備考 伊賀出身のくノ一で、『伊賀の三羽鴉』というチームのリーダー格。

古風な話し方でプライドが高いが、言葉を言い間違えたり、重要書類をすっかり置き忘れたりするなど、意外とおっちょこちょい。左

目の眼帯は、昔任務中に失明したキズを隠すもの。

自分は『考えるよりも行動する方が向いている』と自負しており、計画をするのは仲間の一人に任せ、自分はもう一人と共に作戦を実行する担当に就いている。

スタンド名 アンチエイン・ワールド

#58 / 京都嵐警報！ ? (後書き)

58話です。遅れまくって、マジすんませんm(ー)ー)m

・ポルナレフとルーテシアの関係が薄々発覚。ディアボロにやられた後、どうやって生き延びていたかを妄想した結果生まれた設定です。

・暦と環登場。彼女たちが狙ったものと、承太郎たちがどう切り抜けるかは、次回をお楽しみに。

・トリツシユ本領発揮。スパイス・ガールって柔らかくするだけだから、『イタくはないけど重い』という枷を作ってみました。

・ハルナのスタンドは、原作のアーティファクトをスタンドっぽくした感じ。次回、詳しい能力が判明します。

・木乃香は、DISCでスタンド使いになっていました。果たして、ルミリオが恐怖する能力とは……………？

・おすすめ登場。三羽鴉の服装には、必ず頭部に『翼』のアイテムが施されています。

名字はカラス(crow)、スタンド名は川田 まみさんのアルバムに収録されている曲から。

・最後に登場した切り札^{ジョーカー}三人。最後の一人は、あるジョジョキャラです(今まで名前だけは出ています)。

・今回は年明けになります、本山脱出から妖怪百人組み手くらい

までは行きたいです。お楽しみに。

では、良いお年を！

59 / 京都嵐警報！ ? (前書き)

総本山激闘編！

59 / 京都嵐警報！ ？

京都府内

某旅館

「あーもう！退屈だよ、退屈！」

旅館のある一室で、少女がふてくされながら畳の上に仰向けになっ
た。

見たところ、17〜18歳ほどだろうか。薄いグレーに染めた髪は
腰まで伸び先端がカールして、額には翼が描かれたゴーグルをつけ
ている。そしてその金色の眼は年頃の少女には似つかわしくない鋭
さを持っていた。

上は迷彩柄のビキニの上に黒いチェックのパーカー、下はジーンズ
と、まるでビーチに泳ぎに来たような服装だ。

「確かにアタイの『イエロー・サブマリン』は今回役立たずだけど
よオーー、だからって『待機』はないだろ、待機は！」

少女は誰に話している訳でもなく文句を垂れる。こんな事なら、あ
のルミリオとかいう子供ガキの『付いて来る？』という誘いに乗ればよ
かったと、今更ながら後悔する。

「……………しっかし、あのルミリオってガキといい、ヴィオレッタの
おばちゃんといい、一体何を考えてるんだ？アタイたちにも詳しい
目的を教えてくださいな……あの『本山』に、一体何があるんだ

「？」

少女はしばしうーんと考えていたが、よいしょ、と起き上がり、ちやぶ台の上の八つ橋に手を伸ばした。

「……………ん~~~~まッ！雇われのアタイがそんな事気にしても仕方ないか。ヤボってもんだろ、ヤボって！」

少女はそう言うと、八つ橋を口にひょいっと放り込んだ。

彼女こそ、『伊賀の三羽鴉』の一角、『漣の帝』こと皇^{すめみかど}帝である。彼女の活躍は、またの機会となるだろう。

#59 / 京都嵐警報！ ?

「厄介なヤツが来たなあオイ……………」

襲ってきたヘリコプター 『エナジー・フロウ』を見て、徐倫

はげんなりしたように呟いた。だが、そんな事お構いなしに、『エナジー・フロウ』は徐倫たちに向けて機関銃を放った！

「ギャー！ツ！？」

「くっ……………」

カンツカンツカンツカンツ

ギリギリでフェイトがシールドで防ぐと、エナジー・フロウはプロペラが垂直になるように変え、フェイトたちに向かって突っ込んできた！

「なっ……………！？」

ギャリリリリリ

シールドにプロペラが当たり、火花が飛び散る。その隙に、徐倫がエナジー・フロウの底面に回り込む！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラアーーーーッ！！」

ドガガガガアアッ

「！！」

ストーン・フリーのオラオラが、エナジー・フロウの土手っ腹に吸い込まれた！

ドオオオンッ

「やった！」

「お……………思ったよりもあっけなでしたね……………」

エナジー・フロウが爆散したのをみてハルナは歓喜し、夕映は肩すかしを喰らったように呟いた。

だが、エナジー・フロウを倒した徐倫は渋い顔をしていた。

「いや、……………来るぞ！」

徐倫が叫んだ瞬間、機関銃の弾丸が飛んできた！

「ウワアアッ!？」

「今のは……………!？」

砲撃された方を見ると、そこには

バラバラバラバラバラバラバラ……………

「ウっソーン!？」

「団体さんのお出ませ……………」

十数体のヘリコプターの編隊が迫っていた……………

「……………今のは小手調べだよ。腕が鈍っていたら、アタシガツカリだしね。」

ふと、編隊の中の一機から声が、まだ幼さののこる、少女の音が聞こえた。すると、編隊から薄いピンクのカラーリングで、向かって

右側に翼のマーキングが施されたヘリが前に出た。見たところ、隊長機なのだろう。そうフェイトが思った瞬間、信じられない事が起きた。

ヘリの尾翼に節が出来て伸びたかと思うと、180度回転。そのまま底面にスライドして先端が90度曲がってつま先になる。さらにコックピットとプロペラの部分が左右に別れ、右にはガトリング砲、左にはプロペラの装備された腕となる。最後に、別れた中から胴体が現れると、青いゴーグルの中央がY字にスリットが入ったヘルメットのような頭部が現れた。

そう、これは俗に言う『可変型ロボット』だ！

「変形したアアアーツ!？」

「あれが、あのスタンドの能力!？」

「……………あれ?前にもあんなスタンドあったような……………」

以前、似たようなスタンドがあったような気がしたが、まあ今は気にしないでおう。

「来たかすずめ……………」

「すずめ?さっき言っていた、伊賀の三羽鴉の一人!？」

「いかにも。アタシは伊賀の三羽鴉が一人、『乱気流のすずめ』!」

すると、ロボットの頭部のスリットに合わせて左右と上部にスライドして、すずめが顔を出した。だが、その姿は……………

頭部にあるコックピットに、全身がすっぽり入るような小さな姿だった……………

「本体ちっちゃッ!？」

「どこの七本槍ッ!？」

「も……………もしかして、あれがあのも『エナジー・フロー』というスタンドの能力……………?」

夕映が、頭部にいるすずめを見て呟くように推測する。

「……………ああ。あんな風に、スタンドの取り憑いた模型に、同スケールに縮小して乗り込むんだ。しかも、あんな風に編隊を組んで襲ってくるんだよ……………」

アレ模型なんだ。とヴィータが思った時、他の機体も変形した!機体は同型だが、色はダークグリーンで、ゴーグルが赤いのが違う点だろう。

「他のも変形した!？」

「やる気マンマンな訳か……………」

エナジー・フロウの編隊を見て、徐倫はウンザリしたように呟くと、ストーン・フリーを出して臨戦態勢に入る。だが、それをハルナが手で征した。

「徐倫、ここは任してくれない？」

「ハルナ……………」

ハルナの申し出に徐倫は首を傾げる。ハルナのスタンドは、お世辞にも戦闘向きではないからだ。ハルナはそれに気づいたのか、ニツと笑う。

「大丈夫。私の考えが正しければ、アイツに勝てるはずだよ！」

「……………何をやる気かは知らないが、任せていいんだな？」

「モチロン！」

自信満々にサムズアップするハルナを見て、徐倫は不安ながらも託してみる事にした。

「……………そんな勝手、させないよッ！」

面白くないのは、徐倫との戦いを望んでいたはずめである。コックピットのハッチを閉じ、右腕のガトリング砲を構え、弾丸を発射する！

ガギギギギギンッ

「!?」

「危なっかしいなオイ！目覚めたばっかなんだからよぉ〜、無茶すんじゃないぜッ！」

だが、すかさずヴィータがシールドを張る。

「ヴィータ！」

「コイツの『お守り』は私に任せな！お前らは、早くお姫さまの所にッ！」

「ちよつと！何で私がアンタの世話になんなきゃ……………」

ハルナが文句を言うが、エナジー・フロウの編隊が襲ってきた！

「早くッ！」

「……………ッ済まない！」

ヴィータとハルナにエナジー・フロウを任せ、徐倫たちは大浴場へと入っていった。

大浴場前廊下

ヴィータ＋早乙女 ハルナVS 乱気流のすずめ

ガラッ

「桜咲さんッ！」

「先生たちッ！」

徐倫が大浴場に入る少し前、窓からネギたちが入ってきたのを見て、ようやく戒めの矢から解放された刹那が声を上げる。

「このかはッ……………!?!?」

「……………すみません、私が付いていながらッ！」

刹那が悔しそうにうなだれる。ふと、スバルは落ちているDISCに気づいた。

「ん？なにコレ……………?」

ガラッ

「ネギたちッ！」

「空条さん！」

スバルが『それを』拾ったとき、徐倫たちが大浴場に入ってきた。このかは？と聞こうとした徐倫だが、うなだれる刹那を見て察したのかぐつとこらえた。

「……………刹那、今は後悔してる場合じゃあねえ。さっさとこのかを助けに行くぞ……！」

「……………!?!?」

徐倫の激励に刹那は黙って頷く。

「ジヨルノや承太郎さんたちの安否が不明なのが気がかりだけど、あの連中が何かをする前にコノカちゃんを救出するのが先ね。」

「そこで、私たちには取るべき行動が二つある。」

- 1 恐竜たちとその能力者を倒し、屋敷を脱出する。
- 2 天ヶ崎 千草らが行動を起こす前に倒し、木乃香を救出する。

「……………一番の問題は 1 ね。あの恐竜たちから抜け出すのは、ハッキリ言って難しいわ。」

徐倫の提案にルル・ベルが珍しく不安そうに呟く。だが、それにネギと明日菜が答えた。

「あ、それはもう大丈夫よ?」

「すでに手は打ってあります。」

「……………え?」

全員が驚く中、ネギはかまわないように説明する。

「直に、恐竜たちは無力化します。そのうちに 2 を実行しまし
よう。」

「……………ずいぶん手際がいいな、ネギ。何をする気だ?」

徐倫の質問に、ネギはいたずらっぽくニツと笑い「それはお楽しみ

」とサムズアップする。

「……………何だかよく分からないけど、とにかく脱出の手はずはある

わけね。」

「うん。ただ、『ソレ』がくるまで身動きできないんだけど……」

「ご心配なく」

ズルウウウ

「『ウオオツ!?』」

と、いきなり床からセインが又ウッと出てきた。

「セインさん！」

「“先行隊”として来たよ!“潜行”してね」

「……スバル、オメーこーゆーダジャレいうやつってよーっ、ムショーにハラが立ってこねーか！」

どや顔のセインに徐倫が眉を潜めるのを見て、スバルは苦笑するしかなかった。

「……よし、セインのISで脱出できる！」

「……非戦闘員もいる訳だし、二手に分かれよう。流石に綾瀬を置いていく訳にはいかねえしな。」

話し合いの結果、ネギ、明日菜、刹那、スバル、徐倫、ルル・ベルが木乃香奪還に向かい、フェイト、アナスイ、ギンガ、チンク、のどか、夕映が残り、恐竜化のスタンド使いを撃退する事となった。

同時刻

アーティファクト『無限抱擁』内

「デイド、大丈夫!？」

未だに気絶するデイドを揺するオットー。周りに立つティアナも、心配そうに見つめる。すると、デイドが「うーん……………」とうなされる。

「デイド!」

「うーん……………サイがあ……………サイと、ゴリラと、チーターがああぁー……………」

「……………とりあえず大丈夫そうだ。寝言言ってるし。」

「……………ていうか、何よ今の動物の羅列? ビーストウォーズ?」

デイドの寝言にティアナは眉をしかめた。

「どうだ、ルーテシア?」

「……………ダメ。通信も出来ないし、ガリユーも呼べない……………」

「……」
「そうか……完全に閉じこめられたな……」

一方、ルーテシアはアスケレピオスで通信を試みていたが、通じない上にガリユーの召喚も無理だった。

「となると、やっぱりあの環とかいうやつを倒すしかねーな……」

千雨はそう言いながら、もう一つ気になる事があったため、そちらを見やる。そちらでは、承太郎とジオルノがにらみ合っており、ミスタとブチャラティは戸惑いを隠せないでいた。

(アイツ……DIOの名前が出た途端、顔を変えやがった……)
「……承太郎さん、聞きたいことがあります。」

緊迫した状況の中、口を開いたのはジオルノであった。承太郎は普段と変わらない様子であったが、内心では冷や汗ダラダラであった。

「あの子が言ったこと……あなたがディオを……『父』を殺したというのは本当ですか？」

「……ッ!?」「」「」「」

ジオルノの一言に、ティアナたちは息を飲む。

「ディオが……父……!?」

「まさか……(『リキエル』や『ヴェルザス』と同じ……ッ!

?」
「……」

ピタッ

「……………ッ!?」「……………」

だが、その拳が承太郎に当たることなく、すんでのところでピタッ、と止まり、放たれた際の衝撃波で承太郎の帽子が吹き飛んだ。

「……………まあ、『一度も会ったことのない父親の仇が目の前にいる』なんて言われても、正直ピンとも来ませんしね。ただし、後で話は聞かせてもらいますよ?」「……………」

ジヨルノはゴールド・Eをしまい、承太郎に背を向けながら言った言葉に、息を飲んでいた皆はふう、と安堵する。

「ふう……………こんな時にヒヤヒヤさせないですよ……………」
「……………承太郎さんの帽子とったトコ、始めてみた……………」
「確かに……………ああなっただな、承太郎さんの頭……………」

徐倫ですら見た覚えのないのに、と千雨が思っている中、承太郎は帽子を拾ってホコリをはたくと、再び深々とかぶりなおした。

「やれやれだぜ。とにかく、あの二人と外の連中を倒したら話してやる。スバルとギンガ、それにノーヴェを交えてな。」

「えっ……………」

(おいおい、何でそこにナカジマやノーヴェが出てくるんだよ!?)
いきなり出てきた三人の名前に千雨たちは困惑するが、ジヨルノは周りを見てある一点を見やる。

「……………分かりました。まあ、あの二人の居場所は『分かります』。ここから西南西に37・35kmです。」

「へっ?」

「……………何でそんな正確に?」

ジヨルノが断言したことにティアナたちが目を点にしていると、ジヨルノは自分の、『テントウムシのブローチがない右胸』を指す。

「さつき恐竜たちを攻撃した時、僕の『右胸のブローチ』に生命を与えてあのコヨミとかいう娘のマントにつけたんです。その生命エネルギーが、37・35km先にあるんです。」

「いつの間に……………」

「37・35kmか……………『エンゼル』の甲冑外したスピードで3分つてトコだな。」

千雨はそう言いながら『エンゼル』を装着すると、素早く「防御甲冑」を外す。

「承太郎さんたちは亀の中に。私が奴らのトコまで運びます。」

「ああ。」

「頼むわ。」

承太郎たちが亀に入ると、千雨は『エンゼル』で飛び上がった。

本山付近にある河原

「おお！やるやないかアンタ！まさかヴィオレッタはん、あんなスタンド使いを送つといたとは……………」

ルミリオが捕らえた木乃を見ながら、千草はうれしそうに言う。気絶している木乃香は今、猿鬼が抱き抱えていた。

「ふふ……………こうなつたら『あの場所』までお嬢様を連れて行けばウチらの勝ちやな。」

「侮らない方がいい。向こうには強力なスタンド使いや魔導師、何よりジョースター家がいる……………」

「心配する必要はあらへん。『アレ』さえ手に入ればもはや敵はない……………」

ルミリオの忠告を気にせず、千草はすでに勝利を確信したように笑みを浮かべていた。それをみたルミリオはやれやれ、とため息を

付いた。

「待てッ！！」

「！？」

だが、千草たちが立ち去ろうとした時、背後から声をかけられた。振り返ると、そこには臨戦態勢のネギたちがいた。

「そこまでだ！お嬢様を返せッ！！」

「ふん、またあんたらか。よくもまあ、あの恐竜たちから抜け出せたなあ……………」

「おいアンタッ！明日の昼には『援軍』が来るらしいからよオ、諦めたらどうだッ！？」

徐倫たちは叫ぶが、千草はふふんと鼻で笑っただけだ。

「援軍ねえ……………確かに厄介やが……………まあ、それはさておき、アンタらにこのかお嬢様の『力』の鱗片を見したるわ……………」

言うやいなや、千草は水面に『立つと』奇っ怪な呪文を唱えた。すると……………」

ズズズズ……

「……ッ!?」

水面に魔法陣が浮かび上がったかと思えば、そこから2m大の鬼やカラス天狗のような鳥族うつく、巨大な口のナナシ連中や妖狐族、その他諸々の妖怪たちがうようよと現れた!

「アイツ……このか姉さんの魔力でありっただけ召喚しやがった!

「な……何かやばい事に……」

大勢の妖怪たちに囲まれて、明日菜たちは顔を青ざめる。

「……いや、誰かあまりにもナチュラルにナナシ連中がいることにつっこみなさいよ?もう『バレンタイン大戦』終わってるわよねえ?」

と、唯一呆れ顔のルル・ベルが(久々に)冷静につっこむ。

「スペシャルゲストなのでした。」

「カラクリテ！？いや、ナナシはまだしも何でアンタまでいるのよッ！？」

いつの間にか、『大蛇邪血党』幹部のカラクリテまでいた（詳しくは『侍戦隊シンケンジャー番外幕 月光の侍』をチエツク。）

「（何か変なのまで来たなあ……………まあいつか。）ほな、アンタらはそいつらの相手しときい！！」

「あつ……………！？」

ズズウンツ

「おおっと、とおせんぼやッ！」

「ツ……………！！」

飛び上がる千草たちを追おうとする明日菜だったが、鬼の一人が立ちふさがった。

「なんや、久々に召喚よばれた思ったら、相手は幼い嬢ちゃん坊ちやんかいな。」

「悪いな嬢ちゃんたち、呼ばれたからには手加減できんのや。恨まんといてな。」

「ちょ……こ、こんなの……さすがに私」

「アスナ、落ち着いて……………大丈夫だよ！」

さすがに妖怪の大軍に怖じ気づいたのか、ガタガタと震える明日菜をスバルは励ます。

（ネギ、時間がほしい。）

(はい……ラ・ステル・マ・スキル・マギステル……)

徐倫が耳打ちをすると、ネギは呪文を詠唱する。そして

フランス・バリエサステンイ・ウエルテンティス
「風花旋風風障壁ッ！！」

ゴアアアッ

「「「うおッ!?」「」」

ネギたちの周りを竜巻が壁のように発生し、ネギたちを取り囲んだ!

「これは……」

「風の『障壁』です。ただ、2、3分しか持たないので、手身近に作戦を……」

凄まじい竜巻が吹きすさぶ中、竜巻の中央は台風の目のように静かであるために作戦会議をするネギたち。すると、徐倫が口を開いた。

「ルル・ベル、お前のあいつ等の相手できるか?」

「?まあ、出来ないことはないけど……?」

「空条さん、いったい何を……?」

刹那が不思議そうに聞くと、徐倫は両手の指先を合わせるような形をとる。

「『ネギと明日菜、それにスバルで木乃香を助けに行く』……」
「残ったメンツであいつ等の相手をしてから木乃香の元に行く』、つまり、ハサミ撃ちの形になるな……」

徐倫の言葉に、皆ははっとする。

「ネギと二人がいればよォー、あの連中に十分対抗できるはずだぜエー？それに、しばらくすりゃあウエザー先生ら援軍も来る！それまでは私らで時間を稼いで、木乃香の助け出す！ドゥーユーアンドンスタン（理解したか）？」
「……イ……イエス！」

明日菜、スバル、ルル・ベルは、右手親指を上げて応えた。

「む、そろそろのようなのでした。」
「待たせよって……カラクリテの兄さんがたも、協力たのみませ？」

『旋風風障壁』が止みかけるのを見て、カラクリテと妖怪たちのリーダーらしい鬼が意気揚々と獲物を構える。そして、『旋風風障壁』がやんだ瞬間

「『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
雷の暴風』ツー!!」

ドッパアアッ

「『『おおお……ッ!?』』」

「西洋魔術師かあッ!?」

ネギの『雷の暴風』が20体近くの妖怪を巻き込んで空に放たれた！
雷の奔流が消えたかと思えば、そこに走る影が。杖にまたがったネ
ギと明日菜、それに追うように『ウイングロード』を駆けるスバル
だ。

「アニさん！逃がしちまったぜ!?!」

「20体は喰われたでした……」

過ぎ去ったネギたちを見つめながらリーダー鬼とカラクリテはやれ
やれとため息をついた。

「……………大丈夫です。落ち着けば敵ではありません。空条さんの言
うとおり、ルル・ベルさんや空条さんのスタンドなら、あいつ等に
十分対抗できます。」

「確かにな。ま、せいぜい『チンピラ100人に囲まれた』程度だ
と思えばいいな。」

「……………それって安心して良いかどうか微妙ね……………」
「?」

リーダー鬼が振り返ると、そこには『コウウントユウキノツルギ』
を構えた徐倫と『夕凧』を抜いた刹那、そしてスタンド『サイケデ
リック・インサニティ』を構えたルル・ベルがいた。

「ほう、なかなか勇ましいお嬢さん方なのですた。」

「行くぞ！」

「はい！」

徐倫がかけ声をかけると、三人は駆け出した！

一方、千草たちは山中にある小さな湖に来ていた。

湖の中湖畔から少し先には『祭壇』があり、さらに、湖の中ほどには『注連縄しめなわ』が巻かれた大きな岩があった。

「あつちに見える大岩にはなあ、危なすぎて誰にも召喚できひんゆー」『巨躯の大鬼』が眠つとる。18年だか前に一度暴れた時には今の長とサウザンドマスターが『封じた』らしいけどなあ……………でも、それでもお嬢様の『魔力ちから』があれば制御「可」能や。

……………ご無礼をお許しくださいとお嬢様。でも、何も危険はないし、痛いこともありませんから……………」

木乃香にそう囁くと、千草は儀式を始めた……………

「！ネギくん、何か強力な魔力が　　！」

「はい！………あの人、何かやらかす気なんじゃあ………」

異様に強い魔力を感じ取り、スバルとネギの顔に焦りの色が浮かぶ。

「いそぐわよ！早くしないと　　ッ！？」

と、明日菜が叫ぼうとした時、三人の目の前の木の『頂点』に、金髪のツインテールにキツイツリ目の少女が立っているのが目に入った！少女の異様に三人が戸惑った時、少女の左目がカツと見開かれた。

「相棒ッ！！」

ポウンッ

「ッッッ！？」

「マツハ・キャリバー」の警告した瞬間、三人の前方が『燃え上がった』！？

「マツハ・キャリバー」がギリギリで障壁を張ってくれたが、発火の衝撃で三人は地面に落下してしまう。

ドシャアアッ

「くっ……………」

「新手……………！？」

「ふむ、空条 徐倫がいないのは残念だが……………まあ良い。」

「ッッッ！？」

「悪いが又シラ、ここから先は『通行止め』だぞ？」

「私たちが相手になる…！」

着地した先には、左目に眼帯をつけた女性

『山陸の綺初』と、

先ほどの少女がいた……………

ホテル嵐山

「東方先生！」

「む、瀬流彦先生ツスか。」

ホテル嵐山のロビーでそわそわと立っていた仗助に、瀬流彦先生が駆け寄ってくる。

「3 Aの生徒たちは『無理やり』寝かしつけました。新田先生には、適当に理由をつけて気にしないように言っておきましたので。」
「そーツスか。（無理やりって部分がちよい気になるが……………」後
はウェザー先生らに任せるとしますかねえー……………」

仗助がそう返して、ふう、とため息をついてソファーに腰掛けると、瀬流彦先生も隣に座る。

「大丈夫だと良いんですけれどねえ……………」

「まあ…後は、承太郎さんに任せるしかねえツスかねえ……………」

仗助がそう呟いた時だ。二人に近づく影が二つあった。

「じゃあ仗助、一つ頼みたいことがあるんですけど

「……………」

「私の『左手』、治してくれませんか？」

「!？」

「な……………ッ、あんたはッ!？」

高町　なのはと、黒いロングヘアの女性が立っていた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE C A D E」

スタンド名 エナジー・フロー

本体 乱気流のすずめ（本名：黒羽 すずめ）

破壊力 A スピード B 射程距離 C

持続力 A 精密動作性 C 成長性 C

能力 戦闘ヘリやジェット機等、『空を飛ぶ乗り物』の模型に取り憑いて実体化するスタンド。

取り憑いた模型を人間大にして、本体を『搭乗』させる。この際、本体は実際の乗り物との比率で小さくなる。そして、本体の意志でロボットに「変形」させることができる。

また、複数体憑依させて本体をリーダー機とした編隊を組むこともできる。この際、仮にリーダー機が撃墜された場合、別の機体に本体を転移させ、リーダー機を引き継がせる。

#59 / 京都嵐警報！ ? (後書き)

59話です。

・帝顔見せ。口癖は結構好きです。名前は皇帝ペンギン、スタンド名はビートルズから。

デザインイメージは、原作のストーン・オーシャン第7巻でウエストウッドに解放された女囚人。特に活躍がなかったのに印象に残ってるんだよなあ、あの人たち。

・『エナジー・フロウ』はトランスフォーマーと、劇中にあるように『忍風戦隊ハリケンジャー』のサーガインがモチーフです。ハルナの試したいことは次回。

・承太郎の告白。ヴェルザスたちはプッチにそそのかされたのかと思ひまして。で、ジョルノの場合はこうなりました。

・妖怪軍団+カラクリテ率いる外道衆。……………すいません、遊んでます(^ - ^ ;)

・^{ホムラ}焰&綺初参戦。今回はこの二人VSネギたちからになります。

・なのは、完全復活確実！一応、『アイツ』戦には間に合う予定です。

では！

#60 / 京の鬼神蘇生実験 ? (前書き)

恐竜戦、決着！

#60 / 京の鬼神蘇生実験 ?

「WAAAAAAAAANNABEEEEEEEEッ!!」
「スドドドドグオオッ」

「『ギャーースッ』」

トリツシユの『スパイス・ガール』のラツシユが恐竜たちに吸い込まれ、恐竜たちが数匹吹き飛ばす!

「よしッ!くそ野郎ッ!!」

「なるほど……………一味……………違うのね……………けど……………」

正直言つて、アナスイたちの現状は『最悪』であった。

大浴場から出て縁側に回ったアナスイたちの周りには数十匹の恐竜たちがうごめき、アナスイたちを取り囲んでいる……………

「……………大浴場から出た途端にコレかよ……………今日は厄日かぁぁぁ……………」

「今日“も”の間違いでは?」

夕映が毒を吐くが、アナスイに気にしている暇はない。恐竜が何体かこちらに向かつて飛び出してきたからだ。

ドガッ

「グエッ!?!」

「『ダイバー・ダウン』……………床に潜行して壁にした……………喰らえッ!!」

ゴシヤアッ

「ギャーースッ」

だが、その恐竜はいきなり振り返った床板に激突し、アナスイはそれを潜行して恐竜に拳をお見舞いした！

「スゴい……………」

「アナスイ！……………改めて考えてみたらなあ————やつスタンド……………以外と出来るスタンドだな……………」

今までバカにしててゴメンとチンクが心で謝罪していると、恐竜が一匹チンクに向かい走り出して来た！

「ッ！！」

気づいたチンクがさかさずステインガーを投げるが……………

シュンシュンッ

「なっ……………?!」

ガシイッ

「があっ……………」

「チンクさん！」

恐竜は恐るべき動体視力でステインガーを見切り、すべて避けられてしまい、チンクは恐竜の両足で組み伏せられてしまった！

「バカな……………何だこの動体視力は……………!?!」

「おい……………その君だ……………君の事だ。君は今何をした？今捨てたよ

な？その『ナイフ』を捨てたよな？この大地に……」

不意に声がした。まだ若い男の声だ。見れば、庭にひしめく恐竜たちのうち一匹に男は乗っていた。

短い金髪の七三分けで神経質そうな顔の唇には口紅が塗られている。見たところ三十代前半だろうか。フードの付いたコートを着込み手には革製の手袋、胸にはバラの花が付いていた。

「今捨てたよな？その『ナイフ』の話だ。そういうものとかゴミとかを適当にポイ捨てるって行為はだな……この「大地」を敬っていないことの証明だ……そんなに君は偉いのか？君はこの恵みある『大地』よりも偉いつていいのか？」

「だ？誰だ？」

「まさか……！？」

「ふむ、大地を尊敬しないゲス者とはいえ、わたしの方から礼節を欠くものなんだな……自己紹介をさせていたどころ。わたしの名は『フェルディナンド』。地質学・古代生物学者だ。『フェルディナンド博士』と呼べ。二年ほど前、『ヴィオレッタ嬢』と出会い、この『能力』を身につけ、『スケアリーモンスターズ』と名付けた。そして本山を落とすためまずディードを恐竜化させて潜入、そしてディードが屋敷の巫女全員を感染させたんだ。」

「何………ッ!？」

フェルディナンドと名乗った男の話にチンクが声を上げる。学者が何故ヴィオレッタに加担しているのか？という疑問が湧いたが、それどころではない。すでに傷ついた右手から恐竜化が進んでいた。

「ま………マズい!」

「後は天ヶ崎 千草が作戦を完遂させ、『例のモノ』を手に入れれ

がつっこむ。

「そこまで言うなら、真面目にやるわよ？」

ルル・ベルがそう言うと、近くにあった大きい岩を『サイケデリック・インサニティ』で持ち上げ、空中に放った。そして、

「オルオルオルオルオルオルオルオルオルオルオルオルオルオルオルオル……」

そのまま岩にラッシュを叩き込む。すると、岩は空中に少しずつ上がっていき……

「……………あの、確かルル・ベルさんのスタンドが連続で殴ったものって、様々な方向の重力に引っ張られて「破裂する」って言ってませんでしたっけ……………？」

「……………あ。」

刹那に言われて徐倫は気づいた。だが、既に遅く、岩には亀裂がいくつも入っていき……………

バゴオオオツ

空中で破裂し、その破片が妖怪や徐倫たちを襲った！

ズダダダダダダダダッ

「コッコッギャー……！？」

「ルル・ベルてめー……」

「くっ………神鳴流対魔戦術絶対防御！『四天結界独鈷鍊殻どくこくせんかくッ！！』」

ブオツ

岩の破片が弾雨の如く降り注ぐ中、刹那は懐から短剣を四本取り出すと、札と印を組み正四面体の結界を展開させ徐倫と共に防御した。

「『グラビティ・ボム重力炸裂弾』、近接パワー型である『サイケデリック・インサ

ニティ』の持つ唯一広範囲攻撃よ。」

「それは良いけど私らまで巻き込むなよッ!？」

(やるのが大胆だなーこの人………宮崎さんへの告白といい………)

当のルル・ベルは、近くにいたナナシ二体を盾にして涼しい顔で解説していた………

「い、今のはヤバかったのです………」

「今ので六割くれえやられたな………やるねえ、あの嬢ちゃん………」

岩の破片が降り止んだ中、リーダー鬼とカラクリテは冷や汗をダラダラかきながら呟いた。まさかあんな手段に出るなんて思ってもいなかった。

「……………だいぶ減ったし、一気に決めましょうか。」

「……………次アレやる時は前もって言ってくれ。」

徐倫がルル・ベルにつっこみつつも、残りの妖怪に突っ込んでいった。

「『アンチエイン・ワールド』ッ!！」

ゴシヤアッ

「わーっ!？」

一方、綺初と金髪の少女、焰ホムラと戦うネギたち。

綺初が呼び出した『アンチエイン・ワールド』の巨体から放たれるパンチがネギと明日菜を襲い、二人は慌てて回避する。

「くっ……………」

「んもー！こんな事してる場合じゃないのにー！ーッ」
「悪いがこつちも仕事なんでね……………」

冷酷な表情で『アンチエイン・ワールド』の拳を振るう綺初。だが、すぐさまアンチエイン・ワールドは体を再びレンガ状に分解し、それを直列に繋ぎ何本も両腕の辺りにタコのように装着し、鞭のように振るった！

ズドドドドツ

「わー！ーッ！？」

二人は何とか避けるが、その猛攻は続くのだった。

「……………」

カッ

「！また……………」

一方、スバルは木々の生い茂る森で焰と対峙していた。

（睨んだだけで発火する……………なんて厄介な……………ッ！？）

と、スバルは気づいた。森の木々の至る所に、小さな袋のようなものがぶら下がっていることに。

（あれは……………？）

スバルが不思議に思ったその時、小さな『何か』が袋を斬り裂き、中の粉が少量こぼれ落ちた。

「？」

ポツ

「……………ッ!？」

その粉がスバルの目の前まで舞った瞬間、粉が『燃え上がった!？』

「がっ……………今は……………!？」

すんでのところまでバックステップし回避したスバル。だが、目を凝らして気づいた。自分の目の前から『小さい黒い何か』が飛んでいき、焔の左目に入っていた!？

「まさか……………今のがあなたの!？」

「……………気づきましたか……………そう、私のスタンド『バーニング・ハート』は、常に私の左目に潜んでいる。だが!」

焔は再び左目を見開いた。瞬間、スバルには見えていないが左目に潜む『バーニング・ハート』が超高速で飛び出し、近くの木に突っ込んだ。すると、その木は一瞬で中ほどから燃え上がった!

「それが分かったとしても、詳しい能力までは分かりませんまい?」

「……………」

バーニング・ハートが左目に戻りながら、焔は冷静に言った。

スタンド名 バーニング・ハート
本体 焰（本名不明）

アーティファクト 『無限抱擁』 内

「ム！」

『アンバーサリー・オブ・エンジェル』で飛行していた千雨は、目の前の立方体でくつろぐ暦と環を発見した。距離は約400メートル。

「あんにやる〜くつろいでやる……！」

『少々ム力つくな。よし千雨、作戦は練られた！後は任せな。』

「承太郎さん？」

承太郎がいきなりココ・ジャンボから出てくると、『スタープラチナ』で亀を掴み

「オラアッ」

ドギヤアアアン

「んなッ!？」

曆らに向かい『ブン投げた。』

「! なっ、何!? こっちに向かって何かくる!？」

「!」……この風を切る音!」

「「コ・ジャンボ 亀だぜ。ほれほれ、ジヨルノも敵も防御しないとぶつかるぜ?」

「アンタ鬼かよッ!？てか重ッ! ちよ、一回休まして。」

亀を投げて余裕をぶっこく承太郎に千雨は叫ぶが、いくら剣術を扱
うとはいえ女子中学生に承太郎の体重を支えられるはずがなく、近
くの立方体に不時着するのだった。

「この圧倒的パワー、まずい! 激突するッ!」

「くっ……」

ココ・ジャンボが迫る中、暦は素早く自らのアーティファクトを取り出した。そして

ガシィイツ

「……………今のは!？」

暦らが『何かをした』らしいが、とにかく互いにダメージを受けな
いままジヨルノのゴールド・エクスペリエンスで着地できた。

「……………なるほどな。」

「あれなら、いきなりこの空間にいた事も説明がつかますね……………」

「なら、やるべき事は一つだな。」

「これだけの結界空間を展開しておいと『幻覚』じゃあなく『出口
もない』となると、魔法理論から考えて

1・術者は展開中結界内に必ずいる

2・術者を倒せば脱出できる

の二点は予測可能。」

「にやるほど 分かりやすいなー……、後はどこにいたって
ワケね。」

「な……………何故私たちの居場所が……………?!はっ!？」

ティアナとジヨルノ、ミスタの三人が歩み寄る中、暦はようやく自分のマントの内側にテントウムシのブローチが付いているのに気づいた。

「まさか……………発信機!？」

「ま、似たようなモノですよ。」

「不覚……………」

「こ…このお!」

すかさず、暦は再びアーティファクトを取り出した!

「アーティファクト!」ホーラリア時の回る

「

ドグシャアッ

「ッ!？」

だが、それが発動するより前に暦は『地面にたたきつけられていた』

!?

「『スタープラチナ』……………時は動き出した。」

「承太郎さん!？」

いつの間にか暦の目の前にいた承太郎は、スタープラチナを出したまま言い放った。

「遠くから見て分かった。コイツのアーティファクトは『時間操作』の能力だ。つまり、指定した範囲の時を『遅くし』、移動や防御をしていたんだ。いつの間にかこの境界内にいたのも、それが理由だ。だが、私のスタープラチナなら攻撃可能だ。」

「くっ……………」

「ひとまず数百キロ転移して……………」

暦のアーティファクトが破られたために環たじろいだが、すかさず転移しようとする。が……………

「『ゴールド・エクスペリエンス』ッ!!」

ドッ

「!?!？」

ジヨルノが素早く近づき、ゴールド・Eの拳を叩き込んだ!

「環ッ!？」

環がゴールド・Eに殴られるのを見て暦が声を上げるが、環は衝撃がキているのか動きがない。

「……………（これは？）」

当の環は、自分に今起きている事で頭がいっぱいだっただ。今の環は、自分を含めて全ての動きが『ゆっくりなのだ』！？

「な……………何が……………！？」

「『ゴールド・エクスペリエンス』が生きたものを殴ると、生命エネルギーが注がれて感覚が『暴走する』。今彼女には動きが全て遅く感じているはずだ。」

正直ジョルノに説明されてもよく分からない暦だが、今環がピンチなのは分かった。

そんな時、亀の中から露伴が出てきた。

「さて、正直何か便利すぎて「チート」な気がするが、コレが一番手っ取り早いんでね。」

そのまま身動きの出来ない環に『ヘブンス・ドア』で『結界を解除する』と書くと、『無限抱擁』は解除された……………

「……………ふう、脱出は成功したわね。承太郎さんが亀投げた時はマジでビビったけど……………」

「さて、誰の差し金かは知りませんが、『それ』を返してもらいましょうか？」

詠春が暦と、ようやく復活した環に語りかける。既に二人のアーティファクトは封じられているため、もはや打つ手はなかった……………すると、

バキッバキッ

「「ギャーッ」」
「！」

突然、恐竜が数匹部屋に潜入してきた！

「オラオラオラアアーッ！」
ドガガガアアッ

「今のうちに……」
「う、うん！」
「あっ！？」

恐竜は承太郎がオラオラで撃退したが、その瞬間の間隙を見て二人は逃げてしまった。

「くっ……」
「ああ……」

承太郎たちが『無限抱擁』から脱出した頃、アナスイたちはフェルディナンド率いる恐竜たちに迫っていた。

「くそっ……」

「手こずったが、もはやこれまでのようだな。」

フェルディナンドが勝ち誇ったように言うと、恐竜たちに襲いかかるよう命じた！

「おおつぶてかいてんげき大礫回天撃ッ！！」

ドガガガアアッ

「わーーーーーッ！？」「」

綺初がレンガを組み合わせて作った巨大なハンマーを振り回し、ネギと明日菜に攻撃し、二人は派手に吹き飛ばされた！

ドサアアッ

「ぐっ……」

「フム、あちらも大分進んでいるようだな。我は足止めが任務だが、まあ、こんなものだろうな。」

倒れて白い息を吐く二人に対して、綺初は顎に手をあてながら言った。

「……………は、……………ははは……………」
「？童わっは、何がおかし……………？」

だが、突然笑い出したネギを不振に思った綺初だが、気づいた。

(息が……………『白いッ！？』)

「ははは……………いえ、間に合ったらしいので安心してしまつて……………
…体を思いつきり動かしていたから、すっかり暖まつて気づきませ
んでしたよ……………息が白いの、気温が下がっているからですよ。」
「ま……………間に合ったのね……………」
「ッ！童！貴様何をしたッ！？」

安心したように笑うネギと明日菜に、綺初は叫んだ。

「いや、ネギは『電話』しただけよ。さつき屋敷から『コール』し
ただけ。『ウエザー先生』にね！」
「ウエザーだと！？……………なるほど、あやつの『ウエザー・リポー
ト』なら気温を下げるのも可能！だが、気温を下げて何が……………」
「かつて、地球上に君臨した恐竜が『絶滅』した理由には諸説あり
ます。隕石衝突説、海退説、火山噴火説、それに……………」

「温度の低下説！」

「な……………何だと……………ッ!？」

フェルディナンドは狼狽していた。

アナスイたちを襲わせようとした途端、恐竜たちがうずくまり、身を振るわせながら元の巫女さんに戻ってしまったのだ。

「これは……………」

「『ウエザー・リポート』……………本山一帯の気温を真冬並に下げた……………」

アナスイたちも驚いていると、ふいにウエザーが現れ、歩み寄ってきた。

「ウエザー先生!!」

「そうか! 恐竜と言えど『は虫類』、つまり『冷血動物』ッ!! 寒さに弱いのは当たり前だよなあー!」

「ああ、最も発案はネギ君だな。」

「あ……………ああ……………」

解説しながらフェルディナンドに近づくウエザー。フェルディナンドは恐竜たちが無力化された為に狼狽しながら後ずさりするしかなかった。

「さて、こーいった能力つてのは、大抵本体は無力なんだよなあ!」

「今までのお返ししないといけませんね、アナスイさん。」

コキコキと指を鳴らしながらフェルディナンドに近づくアナスイとギンガ。フェルディナンドはひいつ、と短く悲鳴を上げると、身を怯ませる。そして、

「う、うわあああー!」

「ダッダー!」

「あ、逃げた!」

「しかも内股ですね。」

「逃がすかッ!」

逃げ出したフェルディナンドを追おうとするアナスイたち。だが、

ドツバアアツ

「がっ……………ッ」

「何ッ!?」

突然、異形の腕がフェルディナンドの胸を貫き、フェルディナンドは血を吐いた!

「な……………何だとオオオー……ッ」

『フェルディナンド、キサマハモウ『用済み』ダ。「アレ」ノ行方サエ分カレバ、モハヤ用はナイ。』

「がふっ!き、貴様は……………ッ!?」

『サツサト死ニヤガレッ!!』

ドツバアアツ

「ぐえッ」

異形が腕を引き抜くと、フェルディナンドは血反吐を吐きながら倒れ込み、そのまま動かなくなってしまう。

「『キヤアアツ』」

「ッ!?お、お前は……………!?!」

夕映とのどかが悲鳴を上げるが、アナスイとウエザーはそれどころではなかった。その異形、スタンドに見覚えがあったからだ。

目の部分から手すりのような部位が後ろに伸び、胸には渦巻きなどの模様、腰には羽のような腰みのが付いたスタンド……………

「ばかな…………『アンダー・ワールド』…………だと…………」
「ヴェ…………『ヴェルサス』ッ!？」

『ソウダ。『レクイレム』ヤ『天国』ヨリモ『上』ノカガアルラシ
イカラナ。今日ハコレ位にシテオク。ダガ、次ハナイト思エツ!!』

スタンド 『アンダー・ワールド』はそう言つと、煙のように
消えてしまった…………

フェルディナンド：スタンド名 スケアリー・モンスターズ 死亡、
再起不能

本山の巫女さんたち

重軽傷者（主に原因は承太郎たちのオラオラ） 32名

行方不明者（後にハルナの能力で閉じこめていた所を発見） 15名

寒さで風邪を引いた者 23名

以上を含めて150名全員の無事を確認。

ハルナが叫ぶと、スケッチブックから何か飛び出し、『エナジー・フロウ』を三機斬り裂いた！

「今のは……………？」

「やっぱり予想通り……………」

そこにいたのは、騎士の鎧をまとった女性のような姿をしているが足はなく、代わりに円錐状のものが伸び、右手が大きな両刃の刀と一体化している、白黒の存在だった。

「思った通りね。『実在するものを模写したら絵に閉じこめる』のなら、逆に『実在しないものを描いたら』、『絵から出てくる』わよねッ！！」

「何……………ッ!？」

「なるほどな……………」

と、すずめが驚愕しヴィータが感心していると、しばしヴィータが考えたように顎に手を当て、口を開いた。

「よし、決めた。」

「何を？」

「お前のスタンド、『ペンのスタンド』というよりは『絵画のスタンド』という方が正しいかもしれない。それ故に名付けよう。お前のスタンド、これからは『ドロウ・ザ・ライン』と呼ぶと良い！」

シンプルながら、その力強い名前をハルナは気に入ったように笑顔を見せた。

「よしッこのまま行くぞッ!！」

「おつよー！」

そのままヴィータはアイゼンを振りかざし、ハルナは描いたスタン
ド、名付けて『剣の女神』を向かわせた！

早乙女 ハルナ

スタンド名 ドロウ・ザ・ライン

「なるほど、これで恐竜たちは無力化したわけですか……………しかし、
現状は変わらないですよ？」

「くっ……………」

炎があちこちから上がる森の中、焰が冷静にスバルに言い放つ。

「悪いですが、あなたたちをココから先に行かせません！」

そして、そのまま左目をかっと思開いた！

その瞬間、焔の左目からまるで固まったマグマのような体表に、所々ひび割れて赤いマグマのように光り、目の辺りはつり上がった稲妻型のひび割れがあり、腰から下はなく紐のようなもので左目の瞳孔と繋がっているスタンド『バーニング・ハート』が飛び出した。

『バーニング・ハート』がスバルにその手を触れようとした、その瞬間

ドンッ

「ッ！？」

二人の目の前に巨大な『手裏剣』が現れ、『バーニング・ハート』はスバルに触れる前にその手裏剣に触れた。

ゴウッ

「！？」

ドロオオオ……

「何！？」

その手が触れた瞬間、手裏剣の一部が真っ赤に燃えて溶けてしまった。

「何と……鉄製の手裏剣を溶かすとは……」

「長瀬さん！？」

すると、不意に近くの木陰から楓が現れ、『バーニング・ハート』の熱に感心していた。

「あの熱量……いや、もしかその能力、『自然発火』では？」
「え？」

「理科は苦手でごさるが、ものには『燃える温度』があると聞く。お主のスタンドは、一瞬でその温度にする能力と見た。」

一瞬で手裏剣を溶かした能力に、楓がその能力を分析した。すると、焔が感心したようにほう、と呟いた。

「……なるほど、中々の分析力ですね。その通りです、私の『バーニング・ハート』は、触れたものを一瞬で燃やす『自然発火』の能力です。そのスピードは、銃弾に匹敵します。」

焔が未だ余裕そうな風に言う。

「ナカジマ殿、ココは拙者にお任せを。」

「え？で、でも……」

「拙者の能力ならば、あやつに十分対抗できる。だから。」

「う、うん……気を付けてね……」

楓にそう言うと、スバルはその場を走り去った。

焔 スタンド名：バーニング・ハート

V S

長瀬 楓 スタンド名：夢幻

「貴様ら、中々やるではないか！だがアア！」

綺初は叫ぶと、『アンチエイン・ワールド』で殴りかかる！だが…

……

「おりゃあッ！！」

ドグシヤアッ

「何ッ！？」

突然黒い陰が現れたかと思えば、振るわれたアンチエイン・ワールドの拳を打ち砕いた！

「へっ！やっぱりルル・ベルのねーちゃんに着いて正解やな！おもしろーなことになったる」

「ア、アンタは………！？」

陰　小太郎は面白そうにそう言うが、二人は訳が分からない様

子だ。だが、『ルル・ベル』の名前が出たことから仲間だと思えた。

「おいお前、このねーちゃんはおれが相手さしてもらっわ！」

「え？てか、誰よアンタッ!？」

「あー、その辺は後回しや！はよ行きな！」

しばし混乱する二人だが、渋々従い木乃香の元へ走った。

『鬼神』復活まで、残り十数分……

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

スタンド名 バーニング・ハート

本体 焰（本名不明）

破壊力 A スピード A 射程距離 B

持続力 C 精密動作性 B 成長性 E

能力 物質にはそれぞれ「燃える温度」が存在する。焔の左目に潜むスタンド『バーニング・ハート』は、触れたものの温度を一瞬でその温度に変える「自然発火」の能力である。時間差で燃やすことも可能なようだ。

焔は通常、髪の毛や小麦粉などの粉を使い、何も無い所を燃やしているように見せかけているらしい。

#60 / 京の鬼神蘇生実験 ? (後書き)

60話です。

・サブタイトルは『柱の男蘇生実験』から。

・『重力炸裂弾』はルル・ベルの能力から思いついた技。ただ、自分も防御しないと危ないです。

・焔はスタンド使いにしました。スタンド名はサバイバーの楽曲から。

・承太郎たち脱出。正直露伴便利すぎ(汗)
京都編のみの登場だから良かったけど……

・恐竜の無力化にウエザーを活用。今回は『相性』が戦いの鍵によるかなあ(笑)

そして『アンダー・ワールド』登場。ヴェルサスは最初から出す予定でしたが、今回は顔見せのみです。

・ハルナのスタンド『ドロウ・ザ・ライン』真の能力。元々『描いたら実体化』の逆を考えていて、それを組み合わせたのがこのスタンドです。スタンド名はエアロスミスの楽曲より。

・楓VS焔。バーニング・ハートはシンプルに『自然発火』の能力でなければ鉄を一瞬で燃やせません。今回は楓の『夢幻』が本格的に登場予定です。

では！

6 1 / 京の鬼神蘇生実験 ? (前書き)

京都関西呪術協会本山の戦いもクライマックスへ!

61 / 京の鬼神蘇生実験 ?

「逃げられましたか……………」

逃げた暦たちが出た方を見ながら、詠春は悔しそうにそう呟いた。そこへ、ティアナが詠春に話しかけた。

「長、あの箱は一体……………」

「……………あの中には、ある人から預かった『ロストロギア』が封印されているんです。詳しくは私も知りませんが、少々やっかいな物らしくて……………」

「ロストロギアが……………」

詠春の説明に、オットーが首を傾げる。

その中身が何かは分からないが、ヴィオレッタが欲しがるほどの強力なものと考えられた。

「……………まあ、アレの中は三日前に『新巻鮭』とすり替えてありますかね。」

「えッ!？」

「すり替えたって……………偽物ってこと?」

「てか何で新巻鮭!？」

だが、奪われた『それ』が偽物と知って驚くティアナと、何故新巻鮭なのかつつこむ千雨。

なお、新巻鮭は先日詠春の知り合いの筋肉バカダルマから季節はずれで送られてきたらしい……………

「ええ、本当の中身は、あそこの『灯笼』の下に埋めてあります。」

そう言って灯笼を指さす詠春だが、その先には

「うう……………あああ……………」
「！？ノ、ノーヴェツ！？」

恐竜から人に戻りかけたノーヴェツが、うずくまって唸っていた……………

1328

61 / 京の鬼神蘇生実験 ?

「大分減ったな……………」

妖怪たちとやりあっていた徐倫は、最初よりも減った妖怪たちを見

渡しながら呟いた。

「今なら間に合います。速くネギ先生たちと……………」
ズズズウウツ
「何ツ!?」

だが、安心したのもつかの間、近くの岩のスキマからナナシ連中が這い出てきて、刀や刺さす又またを振りかざして意気揚々とうなり声を上げる。さらに

「きえええああああッ!」

「!?!」

ガギイインツ

「なかなかやるな小娘!だが某それがしを他の連中と一緒にしては困るでッ
!?!」

ズガガガガガガッ

「ぐっ……………こいつ別格か……………ッ」

徐倫に向けて、鴉のような姿の烏族が猛攻を仕掛けてきた!

「徐倫!」

「烏族……………!今行きま……………」

ガギイインツ

「ツ!?!」

「行かせないのですでした。」

「残念やったな、神鳴流のねーちゃん!」

「カラクリテ……………ッ!」

「こいつらも動き出したか……………」

徐倫の元へ向かおうとした刹那たちだが、その行く手をカラクリテ

無駄口を言いながらも、ホル・ホースは『皇帝』で妖怪たちを撃ち抜いていく。だが、そんなホル・ホースに烏族が四体接近してきた！

「儂の名は鉄印。」

角のような飾りを頭に付けた烏族が名乗る。

「施琥。」

嘴くちばしに牙のような飾りを付けた烏族が名乗り、背中の羽を一本手に取る。

「邪枢斗。」

頭の左側を亀の甲羅のような物で覆った烏族が名乗ると、背中の羽を二本取る。

「渦暗。」

頭と胸の右側を卵の殻のような物で覆った烏族が名乗ると、羽を三本取る。
そして

「「「羽手裏剣攻撃！」「」「」
バパーーーーーーッ

一斉に羽を二人に目掛け投げつける！

「……………ふっ。」

だが、ホル・ホースは余裕に笑うと、体制を低くした。その肩にウエカピポが鉄球を着弾させると、ホル・ホースの肩で鉄球が回転し、『衛星』が羽手裏剣を撃ち落とす！

「あれッ!?」

四体の烏族が驚いたのもつかの間、衛星は四体の頭をかすり、『左半身失調』を起こした。

「そらよオツ！」

ガアアアー……ンッ

「……アギヤアッ」「……」

その時をホル・ホースが見逃す訳もなく、すかさず『皇帝』で撃ち抜いた！

「すごい……」

「ここは俺たちに任せな！」

「この数なら、俺の『鉄球』^{レッキング・ボール}とホル・ホースの『皇帝』で十分だ。行け！」

ウエカピポに言われ、刹那^{かたじけ}は忝ないと言い三人は駆け出した。

「急ぐぞ！千草^{あいつら}のやることが何かは分からないが、さすがにネギたちだけじゃあ不安だ……ッ！」

「はい……ッ」

走りながら話す徐倫と刹那。すると、ルル・ベルが徐倫に話しかけた。

「徐倫、すこし痛いかもしれないけど、我慢して？」

は？と徐倫が返答する前に、ルル・ベルは『サイケデリック・インサニティ』で徐倫を殴った！

「なッ……………何を……………」

「刹那、徐倫にすっかり捕まって。」
「え？」

よく分からないながらも、言われるがままに徐倫に捕まる刹那。すると、『インサニティ』の能力で徐倫の体は殴られた方向　　つまり上空に引っ張られた！

「わあああああッ！？」

「と、飛んで……………い、いや、『サイケデリック・インサニティ』で殴られたから……………落ちている』のか……………」

「あ、もう少し右ね。」「チョンッ

「微調整も出来んのか……………」

「た、確かにこうやって『落下して』移動するなら、速く着きそうですね……………」

『落下』するスピードを実感しながら、刹那はそう呟いた。

「……………」カッ

「む！」

ゴウッ

一方、焰と対峙する楓。

『バーニング・ハート』で次々に発火させていく焰だが、楓はそれを素早い動きで避けていき、一度掠った程度のダメージしか与えられなかった。

一方の楓も、『バーニング・ハート』を警戒してうかつに近づけない状況だった。

「うーむ……………なかなか厄介な能力スタンドでござるなあ……………」

「……………それを一撃もまともに喰らわないで言われても、皮肉にしか聞こえませんがね……………」

楓が呟いた事に焰は少しむくねながら言う。

「（だが、不審な点があるな……………探ってみるか……………）はっ！
シュバババツ
「なッ!？」

楓は素早く巻いていたマフラーを振るうと、振るった先から手裏剣が十数枚焰に向かい飛来する！

焰は『バーニング・ハート』で焼き払うが、それでも何枚かは焰の脇の地面に突き刺さった。

「…………やはりか、どうやらお主のスタンドは、一度に燃やせる数が限られているようでござるな。」

「！まさか、それを探るために……………！？」

楓の洞察力に息をのむ焔。

『バーニング・ハート』は焔の左目と繋がっているという形状のため、発射したらヨーヨーのように一度左目に戻らなければならぬという弱点があるのだ。それゆえに、一度に燃やせる数に限界があった。手裏剣を数枚燃やしそこねたのは、そのためだ。

「それならば、拙者にもお主を討てるチャンスがある……………」

楓はそう言いながらマフラーに手を入れると、マフラーから巨大な両刃刀とクナイを数本とり出した。

「……………（あのマフラー……………さっきから色々出てきているが、まさかあれがスタンドか？猫型ロボットのな。）」

「参るッ！」

ドンッ

「！『バーニング・ハート』ッ！！」

楓がクナイを投げつけながら焔に向かい走り出したため、焔は『バーニング・ハート』でクナイを燃やし、刀を振りかざした楓に対してはバックステップで回避、バーニング・ハートが左目に戻るまでの間に、楓との距離を取った。

「く……………なんとという素早さ！魔法もスタンドも無しにこんな身体能力なんて……………！」

「いやあ~~~~、昔少し変わった老人に『不思議な力』を教わってなあ ほっ！」

軽口を叩きながら、再度焰に手裏剣を放つ楓。焰はそれを燃やし、燃やしきれなかったものは横に飛んで避けた。だが、その瞬間楓は焰の左側に接近した！

「くっ……………！？」

焰が接近した楓に気づいた時には、楓はすでにマフラーに手をやり、また武器を取り出そうとしていた。

「……………なめるなッ！！」

ポポポッ

「むっ……………！」

楓が手を抜き取る前に、焰は戻ってきたばかりのバーニング・ハートでマフラーに火をつけた！

「これでああなたのスタンドは無力！勝った！」

マフラーを燃やした事に、勝利を確信する焰。だが、楓はニヤリと口元を上げた。その時

「惜しいなあ……………お主の着目は良かったが、我が『夢幻』は、お主のスタンド同様にもっとシンプルな能力どござるよ。」

「!？」

背後、つまり焰の右側から声がした!

振り返った先にいたのは、「マフラーが燃えていない楓」と、背後にはスタンドが立っていた。

長い円錐型の頭部には手裏剣のような×字の中に金色の丸い一つ目がとまり、そろばんの目のような胴体を持ち、口らしき部位に付いた戦闘機のパイロットのようなマスクからチューブが左胸を繋ぐように伸びている。

同じく円錐形の肩からはパイプのような細い二の腕と球体間接、腕は二の腕の5倍は太く手袋のような大きい白い手をしている。胸から下はなく、先端にヒトデのようなアームの付いたコードが5本伸び、楓の体を掴んでいた。

「『夢幻』ッ！」

ガシィッ

「!？」

スタンド 『夢幻』は焰の頭を掴み、そのまま近くの木に叩きつけた!

「がっ……………ッ!？」

「いやあ、惜しかったでござるなあ」

「あいや、マフラーに着目したのはよかったでござるよ?」

叩きつけたてを放して、焰に向かい話す『二人の楓』。だが、その内の一人がまるで陽炎のようにゆらめくと、煙のように消えてしまった。

「ま！まさか、それが噂に聞く『分身の術』！？始めてみた！？……あれ？」

楓の分身の術に驚く焔だが、木に叩きつけられた自分の現状に疑問を持った。なぜか、木から離れず動けないのだ。

唯一動かせる右手で自らを触って、焔は気づいた。

「なッ！？は、貼りついて……！！？」

焔は現在、右手と左右の足以外を、まるでエジプトの壁画のような状態で木に『平たく貼り付いていた』のだ！！

「『夢幻』は、今のお主のように、ものを『平たく貼り付ける』能力でござる。いやあ、以外と仕事の時とか役に立つのでござるよ」
「は、貼り付ける……まさか、あらかじめ武器をマフラーに張り付けて、使う時に立体に『戻していた』のか！！」
「いかにも」

焔の推測に、笑顔で答える楓。そのまま踵を返して歩き出すと、落ちていた手裏剣や両刃刀を拾い、『夢幻』を使い貼り付ける。

「あ、ちなみに以前興味本位で調べたのだが、ほっておいたら大体三カ月ほどで自然に戻ったでござる。それでは拙者はこれで」
シュバツ

「え、行っちゃうの！？私放置！？てか三カ月って言った！？三カ月もこのまま！？ちょッ！だ、誰かーーーーーッ！？」

一瞬で消え去った楓に戸惑う焔。

右側から攻撃を喰らったため左側はシールなどで言う粘着面のよう
に反対側に張り付いている。それゆえに左目の『バーニング・ハ
ト』は使えないため木を切り離す事も出来ず、森に焔の若干涙が混
ざった声が響くだけであった……

「ノーヴェ姉様……大丈夫ですか？」

「う……あ……オ……オットーに……チサメ？」

ノーヴェは人の姿に戻りながら俯いていたが、オットーと千雨の姿に気づきそちらに振り返る。

「大丈夫か？これ何本に見える？」

「あ……………5本？」

「うん、大丈夫そうだな……………」

右手を二本、左手を三本指を立てて確認する千雨。

ノーヴェはふらつきながら立ち上がると、上部のない灯籠に手を置きながら二人と顔を向ける。

「えーと……………スバルらに恐竜のこと警告して……………だめだ、そこから先が思い出せねえ……………」

「どうやら今まで恐竜化していたようだが……………」(けど、長さんの話ではあのあたりにロストログアが……………？何ともないの？)

ティアナが疑問を抱くが、当のノーヴェは未だふらつきながらも身体に異常はなさそうだ。

そう思っでティアナがノーヴェに近づこうとしたその時だ。

ドガシヤアアンツ

「何ッ!？」

突然二つ隣の部屋の障子が爆発で吹き飛ばされたかと思えば、ヴィータとハルナが爆煙から飛び出し、後を追うようにへりから変形した『エナジー・フロウ』が数体飛び出してきた!

「ヴィータ副隊長!？」

「あれは『エナジー・フロウ』！？すずめまで来ているのかよッ！？」

『エナジー・フロウ』の姿を確認して千雨が声を上げた。すると、ピンク色の隊長機『エナジー・フロウ』から指を鳴らす音が聞こえた。

「当然だよな。厄介な能力だけど、さすがに目覚めたてのスタンドじゃあ『エナジー・フロウ』の包囲網からは逃れられないよねッ！」
「あつちやく、さすがにあの数に剣じゃあ不利だったかあ……………」
「早乙女！……………それがお前のスタンドか……………」

ハルナに近づきながら、千雨はハルナが『ドロウ・ザ・ライン』で描いた戦乙女ヴァルキリーを見ながら呟く。

「長谷川 千雨か……………君の抹殺もアタシたちの任務に入っているからね。2年前の恨みも含めて殺やらせてもらっよッ！！」

ドガガガガガガッ
「うおおあッ！？」

すずめは指を二度鳴らすと、千雨とハルナに向かいガトリング砲で集中砲火を浴びせた！

「千雨ッ！！」

「『エコーズACT3』！隊長機を狙えッ！！」

『YES SER！3FREEZEッ！！』
ドゴシヤアアッ

「！？」

康一が叫ぶと、『エコーズACT3』は『3FREEZE』を隊長

機に喰らわせ、地面にめり込ませる！

「今だ！」

「了解ッ！！」

康一が叫ぶと、ティアナは隊長機に向けて魔法弾を放ち、その機体を破壊した！

「やった！」

「……………いや、まだまだ！！」

「え？」

隊長機が破壊された事に声を上げるハルナだが、千雨は警戒体勢を崩さず未だ残る『エナジー・フロウ』を見渡していた。すると……………

「……………あー、さすがにびっくりしたなあ……………」

「……………ツ！？」

突然すずめの声がかかと思えば、『エナジー・フロウ』の内一体の色がダークグリーンからピンク色に変わり、頭部がスライドしてすずめが姿を現した！

「そんな……………」

「残念だったね。隊長機を潰されても別の機体に転移して隊長機を引き継がせられる……………それが『エナジー・フロウ』の編隊だよ！」

すずめはそう言い放つと再びコックピットに戻り、そのままガトリング砲を放った！

「きゃー……」

「くそうツ、隊長機以外は無人機なんじゃあ『ヘブンス・ドア』はきかないし……『ACT3』で重く出来るのは一度に一つだけ……正直かなりヤバいッ！」

ミスタが拳銃を撃ち、ブチャラテイが『ステイツキイ・フィンガーズ』で『エナジー・フロウ』を分解し、ジヨルノが『ゴールド・E』の拳を振るつも、『エナジー・フロウ』の猛攻は止まらない。

「な……何が……？」

ゴウツ

「！？ノーヴェ姉様ッ……」

未だ体調が優れないのか、頭を押さえながら周りをみるノーヴェ。だが、そんな彼女に向かい左腕のプロペラを回転させながら『エナジー・フロウ』が一機迫ってくる！

「マズい……ノーヴェッ！」

「……ッ」

ティアナが叫ぶが、『エナジー・フロウ』はすでにそのプロペラをノーヴェに振り下ろしていた！

「!」
シユンッ

「ッッッ!?」「」「」

だが、ノーヴェエにプロペラが接触するという瞬間、ノーヴェエは驚異的なスピードでそれを『回避』した!

「何ッ……………!?!」

「い……………今の反応速度は、ノーヴェエ姉様の基準速度を上回っている……………!?!」

オットーは今のノーヴェエの反応速度に驚くが、『エナジー・フロウ』は足の先に付いたテールローターを回転させながらノーヴェエに蹴りを放つが、これもノーヴェエは素早く避けた。

『エナジー・フロウ』はそれでも連続で蹴りを繰り返すも、ノーヴェエはそれを次々と避けていった。

「な……………なんか普段より、相手の動きが良く見えるような……………?」

「あいつ……………M 18!さっさと片付けるッ!」

すずめはいらついたように指を七回鳴らすと、ノーヴェエを襲っていた機体に命ずる。すると、『エナジー・フロウ』の胸が観音開きに開きバズーカ大の銃口が顔を出し、ノーヴェエに照準を合わせた!

「ッ！ノ」

ティアナが叫ぶが間に合わず、『エナジー・フロウ』のエネルギー砲はノーヴェエに向けて放たれてしまった！

ギョーンッ

「ッ！？ま……………また……………！？」

「……………！？」

だが、それをもノーヴェエはかわす！
かわせた事にノーヴェエ自身も驚いていたが、すかさず『エナジー・フロウ』に回し蹴りを喰らわせた！

「ウリイイイヤアアアアアアアアアッ！！」

ドゴシヤアアッ

「な……………今のは……………ッ！？」

「ッ！？ノーヴェエ、その『脚』は……………」

ノーヴェエが自身の体の『違和感』に戸惑う中、ティアナは『は虫類のようなノーヴェエの右脚』に驚く！

「バカな……………『恐竜化のスタンド』が、まだ生きているなんて…

……………ッ！？」

「よそ見は禁物だよ？」

ティアナが考えを巡らす、すずめはそれでも攻撃の手を止める気

はなかった。

すかさず残った機体を集め、ノーヴェや千雨たちを囲むような陣形をとると、徐々に追いつめようとする。

「撃ち抜けッ『レイストオオオオオム』ッ！」

ズドドドドドドツ

「なッ!？」

だが、陣形をとった『エナジー・フロウ』は、オットーの放った『レイストーム』に次々と破壊されてしまった!

「助かるよ………今までバラバラに『分散』していたから撃てなかったが、『陣形』をとってくれたお陰で撃ち抜けた。分散していたら、みんなに当たるかもしれないからね。」

「し………しまった!大局を見誤ったか………くっ!」

すずめは短く舌打ちすると、乗っている隊長機を空高く飛び上がらせた。

「仕方ないね。今日の所は見逃すよ。だが長谷川 千雨、そしてノーヴェと言ったね、次はないと思う事だねッ!」

「あ、ちよつと!？」

すずめはそう叫ぶと、『エナジー・フロウ』をへり形態へ変形させ、空のかなたへ飛び立ってしまった。

「行っちゃった………」

「ほつとけ。ヤツの事だ、どのみちまた来るだろうよ。」

ティアナがすずめの行った先を見つめながら呟いた事に、千雨が溜

め息混じりに言う。ティアナはそう、とだけ言つと、自分の両手を見ながら狼狽えるノーヴェに近づいていった。

「大丈夫だった、ノーヴェ？」

「え？あ、ああ……………」

未だ戸惑った様子ではあるが、ノーヴェはそう答えた。

「本当に大丈夫……………？恐竜化がまだ残っているみたいだったけど……………」

「い、いや……………本当に大丈夫だよ……………」

大丈夫だと強がるノーヴェ。

「……………！」

だが、遠くから見る詠春は気づいていた。ノーヴェの左腕から

(……………『アレ』は彼女に行きましたか……………ならば、問題はないでしょう。)

「まだかかるのかい？」

「もう少しや！そう急かさんと待ったときいッ！！」

『鬼神』復活の儀式をする千草と、付きそウルミリオ。退屈になってきたのか千草に訪ねるルミリオに対し、千草は少し焦るよう叫んだ。

「そう……彼らが来るよ。」

「何イッ!？」

そうルミリオがあくまで冷静に言って向いた先には、杖に乗ったネギと明日菜、そしてウィング・ロードを駆けるスバルが迫っていた！

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CAFE」

名前 黒羽 すずめ

異名 乱気流のすずめ

年齢 15歳

出身 伊賀
階級 上忍

身体的特徴 亜麻色の所々跳ねたボブカットの髪型、左目に着けた翼の装飾の施された銀色の片眼鏡^{モノクル}

得意料理 オムライス（帝曰く、卵のフワフワ加減が絶妙。）

備考 伊賀出身のくノ一で、『伊賀の三羽鴉』の一員。

うっかり者の綺初、お気楽思考の帝に比べてしつかりしているためかチームの頭脳的存在であり、三羽鴉の作戦は彼女の発案である事が多い。

常に冷静であり、声だけでは感情を読み取り辛い。だが以外と負けず嫌いでムキになりやすく、その点は年相応といえる。

自分の作戦がうまく行った時や嬉しい時に、右手の指をならす癖がある。

利き目は左であり、左目の片眼鏡には拡大鏡の機能が備わっている。

スタンド名 『エナジー・フロウ』

61 / 京の鬼神蘇生実験 ? (後書き)

61話です。

・ホル・ホースを襲った烏族は言わずもがな(笑) ちなみに名前は『ドクター・フー』というイギリスのドラマに登場したダーレク四人衆のメンバーから。

・『夢幻』の能力はど根性ガエルからヒントを得ました。焰の言うとおりマフラーに武器を貼り付ければ荷物かさばなくて便利かなあって思います。

デザインモチーフは独楽こまで、全体的にどことなく遊戯王チックなイメージ。手とかは『時の魔術師』みたいな感じ。

・すずめ撤退。ノーヴェに何があつたかは次回以降で。

・今回は本山ルミリオ戦からスタートです、お楽しみに。

では！

#62 / 京の鬼神蘇生実験 ? (前書き)

「PRIVILEGE CADE」

カラクリテ

【身長】 205cm 二の目時・68m

【体重】 95kg 二の目時・28t

【得意武器】 大女頭碎球おおめずのさいきやう

壊れたからくり人形のような、虫の喰った木材のような、アヤカシである。

手足や腰がバネになっており、武器である大女頭碎球を持って腕を伸び縮みさせてトリッキーな攻撃を得意としている。

また、自身もものを造ることが得意で、仲間や自分の武器を開発するのが趣味らしい。

現代の伝承に『ろくろくび』という妖怪がいるとされている。ろくろくびは、首を自在に伸ばす妖怪らしい。おそらくはカラクリテが自身の武具である大女頭碎球を持って腕を伸ばした姿が、『ろくろくび』伝承のルーツであろう。

#62 / 京の鬼神蘇生実験 ?

「……………環、これを見てどう思う……………?」

「どう見ても……………『シャケ』です……………」

逃走の最中、火が残っているので恐らくは焔が戦っていたと思われる森の中で追っ手がいない事を確認した二人は、待ちきれずに奪った『モノ』の中身を確認していた曆と環は、その中身が新巻鮭だと知って呆然としていた……………

「え……………?何?私たち、ニセモノを掴まされたわけ……………?」

「多分……………相手の方が一枚上手だった……………」

「そ、そんなあ……………ル、ルミリオ様が私たちにに任せてくれたたのに……………」

涙目で落胆する曆と、ショックで肩を振るわせる環。すると、そんな二人に話しかける声が。

「……………大丈夫よ二人とも……………少なくとも私よりはマシだから。」

「……………?」

二人が声のした方を見ると、そこには木に貼り付いた焔の姿が……………

「焔アアア……………」

「な……………何があつたのツ!??」

「……………ゴメン、助けて……………」

この後二人は、引つ張つてもとれない焔を一時間かけて木の一部分と切り取つて持ち帰つたのだつた。

62 / 京の鬼神蘇生実験 ?

「そらアッ！」

ゴガッ

「く…………ツ」

小太郎が『アンチエイン・ワールド』に向かい黒い『氣』を纏つた拳を喰らわせると、アンチエイン・ワールドは防いだ右腕の一部を碎かれて一步下がる。

「ハン！デカい『ナリ』のクセに、思つてたよりも弱っちいやないか、オバハン！」

「おぼツ……………我はまだ25歳だー！ツ！」
シュババババツ

老けて見られたのがしゃくに障つたのか、アンチエイン・ワールドのレンガを散弾の如く放つ綺初。小太郎はそれを軽々と避けながら

いったん距離を置くと、陰の中から黒い狗　　狗神いぬかみを呼び出すと、
アンチエイン・ワールドに向かい飛び込ませた！

ドガガアアッ

『『キヤーンッ』』

「げっ……………」

だが、放たれた狗神はレンガの集中砲火を浴びて無残にも蜂の巣よりもヒドい状態で散ってしまった……………

「油断しすぎなのではないか……………？先ほどの童の方が出来たぞ？」
「くっ……………」

綺初に呆れられて、短く舌打ちをする小太郎。綺初は構わずにアンチエイン・ワールドを再び人型に合体させると、小太郎に向かい拳を振り下ろした。

ドーンッ

「「ッ！？」」

だが、小太郎に拳が当たる前に『巨大な手裏剣』によってアンチエイン・ワールドの腕が切り離された！

「今のは……………！？」

「あいやすまぬ、何やらピンチのようであった故、勝手ながら手を出させてもらった次第でござる」

「…！」

声のした方を見れば、そこには木の上で糸目を微かに開いた楓の姿があった。

「貴様……………長瀬 楓ッ…！」

「あんたはルル・ベルのねーちゃんが言うてた……………」

「いやあ、お手腕は中々なようではあるが、多少なり油断をする嫌いがあるようでござるな……………」

隣に降り立った楓のつつこみに、小太郎は不機嫌そうに膨れる。綺初は苦虫を噛み潰したような顔をして、楓を睨みつけた。

「長瀬 楓……………ここで会ったが百年目！積年の恨み、今ここで晴らさせてもらっぞッ…！」

叫ぶやいなや、綺初はアンチエイン・ワールドを人型から分解して柱と梁に再構築した形態 『石管柱結界』で楓と小太郎を包囲した！

「来たか……………坊主、行けるか？」

「坊主やない、犬上 小太郎や。さっきは油断しただけや、全然行けるで！」

「それは頼もしいでござるなあ……………行くぞッ!！」

楓が叫ぶと、二人はアンチエイン・ワールドに向かい走り出した!

「ええい!まさかあのアヤカシ共から抜け出すとは!！」

湖で儀式をしていた千草は、こちらに向かい飛んでくるネギたち三人を見て舌を打った。そんな千草とは対照的にルミリオは冷静に札を取り出すと、先ほど木乃香を連れ去った悪魔を呼び出した。

「ルビカンテ、彼らを止めて。」

「……………」コクリ

悪魔はルビカンテ小さく頷くと、翼を羽ばたかせてネギ達に向かい飛び立った!

「あいつ、何か呼び出した!？」

「低級悪魔だ!」

「うん!」

ルミリオが呼び出し、こちらに向かってくる悪魔をルビカンテ目視したネギ達。

「「「!?」「」」
ドガアッ
「「キヤアアッ」」

だが、ルミリオまで後少しという時、ネギ達の前に『何か』が現れると、回し蹴りをスバルに喰らわせ、吹き飛んだスバルが衝突して明日菜と共に橋の上へ落ちてしまった!

「アスナさん!スバルさん!」

「よそ見している場合かい?」

「!?!」

二人を心配するネギだが、一瞬でネギに近づいたルミリオに阻まれてしまう。ルミリオは、自分の後方に降り立った人物に目をやる。

「……………意外だね、まさか『キミ』が来るなんて。」

「……………」

明日菜とスバルは、自分たちを蹴り飛ばした相手を見た。

真っ黒な学ランの上に腰の下まで覆う同色のマントを着込み、腰まである長い三つ編みにした金髪の上に、ハートマークや『石の仮面』を模した金色のアクセサリを付けた学生帽をかぶっている。

足には黒に金のラインが入った鉄製と思われるブーツを穿き、マントからちらりと見える腕にも、同じような籠手を装着していた。

だが、その顔は

(な……………)

(何で……………)

(何で唐草模様ーーーーッ!?)

唐草模様の、目だけ合いた覆面だった……..
ちなみに先述の三つ編みは、覆面の後ろにあるジッパーの穴から垂れている。

「(相変わらずすごいセンスだなあ……..) まあいいか。キミならそんなに苦戦はしないだろうしね。」
「……………」

覆面の人物は小さく頷くと、スバル達二人に向かい猛スピードで飛び出した!

「な!?!」

「は、はや……………」

ドゴアアッ

「「があッ!?!」」

まるで飛ぶかの如き猛スピードに二人は目を見開くも、覆面は構わずに二人を殴り飛ばしてしまう!

「ぶ、二人ともッ!?!」

「どこを見ているんだい？」

「ッ！？」

ドガシャアッ

二人が覆面の人物に吹き飛ばされるのが気になるネギだが、迫り来るルミリオが跳び回し蹴りを放つ。ネギはギリギリで腕でガードするが、数m後方へ飛ばされてしまう。

「くっ……………何て重い……………」

「もろいね……………そんなことじゃあ、何も守れないよ？」

「……………！」

ルミリオの言葉にカチンときたのか、ネギは右手の『^{タスク}牙』の爪弾を回転させてそれを拳に装着すると、その拳をルミリオに向け振るう！

「……………」

ドオンッ

「ッ！？」

ギヤルギヤルギヤルギヤルッ

だがその拳は突如地面から現れた『石の壁』に阻まれてしまい不発となつてしまい、壁に切れ目は入ったが切り裂く事はできずネギは拳から血を流す。

「ほう、この一瞬で応用させて攻撃するなんて、この数ヶ月でスタンド能力をここまで使いこなすのか……………やるね。」

「……………君たちのおかげだね……………ッ」

「……………？」

皮肉を含めた笑みを浮かべるネギに、ルミリオは疑問に思った。

その時だ。

ドンッ

「！」

重く響く音が鳴ったかと思えば、ルミリオは自らが作り出した壁に縛り付けられてしまった！

ギユオオオオッ

「『戒めの矢』？……………いつの間に……………！？そうか、これは『遅^デイレイスベル延呪文』……………」

「君の戦闘力はかなりのものって聞いてるからね……………先に詠唱させてもらったよ……………この距離なら障壁も張れないだろッ！？」
「なるほどね……………少し見くびっていたよ……………」

口調は変わらないが、少し驚いた様子のルミリオをちらりと見たネギは、すぐさま木乃香の元へ向かう。

一方、覆面の人物　以下、この人物の事は『覆面』と表記すると戦う明日菜とスバル。

二人は何度も攻撃を仕掛けるが、覆面はそれを受け止めてカウンタ―にパンチを放つため、覆面には目立った外傷は見受けられなかった。

「あう……………」

「大丈夫、アスナ…？」

「大丈夫よ。アイツの覆面があまりにも緊張感がないから、油断しただけよ……………」

「た、確かに……………」

覆面のかぶる唐草模様の覆面を見てスバルは苦笑する。覆面は小首を傾げるが、すぐに構えをとり二人と向き合う。

「構えた……………！」

「今まで『受け身』だったのが、今度は攻めて来る気…？（でもアイツの攻撃、どこかで　？）」

スバルが疑問に思っても、覆面が突っ込んできた為に考えを止める。

ドガガガガガッ

「くっ……………」

「は……………、速くて重い……………っ何てやつ!？」

覆面の攻撃に二人は苦言を漏らした。

その時だ

ヴオオオア アアアアアア

「「ツ!?!」」
「……………!」

突如として、湖の中央の岩から巨大な『鬼』の半身が現れた
!

「こ………これはッ………!?」
「ふふふ………一足遅かったようすなあ………儀式はたった今終
わりましたえ………!」

木乃香の元へ向かっていたネギは、突如現れた鬼を見上げて驚愕す
る。

その鬼は青白い光を全身から放つ白磁色の四つ手の身体に、二本の
角を持つ顔の後頭部には一本角の鬼の顔がある異形の鬼だ。
見れば、その肩には木乃香を連れた千草の姿が見られた。

「二面四手の巨軀の大鬼、『リヨウメンスクナノカミ』。千六百年
前に討ち倒された飛驒ひだの大鬼神や……ふふふ………喚び出しは成功
やな………!」

鬼神 『リヨウメンスクナノカミ』の肩の上で勝利を確信した
笑みを浮かべる千草。ネギは愕然とした表情でスクナを見上げる。
こんな巨大な鬼神を、どうやって倒せるかなど検討も付かなかった。

「こ………こんな………(こんな巨体じゃあ、『雷の暴風』が効く
か分からないし………せめて、スバルさんが動ければディバインバ
スターで………!)」
パキインッ

「!」

「なかなかの善戦だったけど、残念だったね。」

ネギが考えを巡らせる中、『戒めの矢』からルミリオが脱出しネギに向かい歩を進める。

その時だ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「ッ!?」

「オラアアアアアアッ!」

ドオンッ

いきなり、上空から『何か』の雄叫びが聞こえると、次いで“それ”はネギとルミリオの間に猛スピードで落下した!

「ふう、何とか間に合ったみてえだなあー!」

「少々ギリギリな感じはしますが……」

「く、空条さん!刹那さん!」

降ってきたそれ 否、徐倫と刹那の姿を見て、驚きと喜びの混じった声を上げる。だがふと、二人を見て疑問がわいた。

「……あれ?ルル・ベルさんは……?」

そう、二人と共にいたはずのルル・ベルの姿がないのだ。ネギに問

われ、徐倫は振り向きながら答える。

「アイツなら今頃、『お客さん』を丁重におもてなししているぜ？」
「？」

ほんの数分前。

「おい、何かヤバい雰囲気じゃねえかッ!？」

ネギ達の元へ向かう徐倫たち3人。空中から見える湖からは膨大なエネルギーが、魔法使いではない徐倫でも分かるほどあふれ出ていた。

「急がないと、お嬢さまとネギ先生が……………」

「そんな心配、せんでも大丈夫ですえ？」

「ッ!？」

「たぁー!？」

ドオンッ

突然声がしたかと思えば、突如二刀流による斬撃が3人を襲った！

ドシヤアアッ

「ぐああッ!?!」

「今のは……?思わず能力を解除しちゃったわ……………」

どうにか着地した徐倫たち。その時

「なんや依頼主クライアントの千草さんがことを起こしとるみたいやけど……………」

「ッ!」

「うちには関係のないことですけどね、センパイ」

「月詠……………?!」

三人に斬りかかった人物：両刀を構えた月詠の姿を見て、刹那は背中を振るわせる。月詠は楽しそうでいながら、その目は『狂気』でらんらんと輝いていた。

「ほな、映画村では妙な横槍入れましたが、今度は邪魔はさせまへんで〜〜〜!」

「くっ……………こんな時に……………!」

じりじりと詰め寄る月詠に、徐倫と刹那は舌を打つ。二人とも臨戦態勢だ。

「……………」

スッ

「ルル・ベル?」

「あら、またアナタおすかあ〜〜〜?」

だが、そんな三人の間にルル・ベルが割って入り、徐倫らに手で制

した。

「ここは私に任せて貰うわ。あなたは近衛 木乃香の元へ。」
「何？」

「早くしなさい桜咲 刹那！早く彼女を助けて、お姫様だつこでキスの一つでもしてきなさい！」

「なッ！？何を言ってる！？」

「え？何？やっぱお前とこのかつて『そーい関係』なの？」

「い、いやッ！うちとこのちゃんはそういう関係やのーて……………」

ルル・ベルの発言と徐倫の表情に刹那は耳まで顔を真っ赤にしてうるたえだし、元来の京都弁が出てしまう。緊迫した空気がかなり緩和していた……………

「さあ早く！ここからならあの場所まで『サイケデリック・インサニティ』で一気に行けるわ！」

「……………頼む！」

「行かせまへんえ……………」

ルル・ベルが『サイケデリック・インサニティ』で二人を湖の方へ殴ろうとする中、月詠が三人にせまる！ルル・ベルは素早く二人を殴ると月詠に向き直り、二刀を『インサニティ』の両拳を交差させて受け止める！

「またうちの邪魔をしてえ……………何なんですかアナタは？」

「頼んだぞー！」という徐倫の叫びをバックにつばぜり合いをしながら、月詠は訝しげにルル・ベルに問う。ルル・ベルはふふっ、とだけ笑うと、その問いに答える。

「私は恋する乙女の味方　　そう、言わば『同性愛の為に戦う戦士』よッー!」
「……………何で同性限定なんですー?」

「　　ま、そーいうワケだ。今はこのかを助けてよおー!」
「あの『デカブツ』を止めることに集中するぞ!」
「は、はいッ!」

徐倫から経緯を聞いたネギは少し頼りないように返事をする。いくら徐倫らがいるとはいえ、あの大鬼を倒せるとは思えなかった。

「……………おしゃべりは済んだかい?」

三人の会話する様子を今まで聞いていたルミリオは呆れたように訪ねると、何やら奇妙な構えを取った。

「バーシリスケ・ガレオメテ・コト ヴイシユ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト、小さき王、八つ
クロー・ボドーン・カホヨイン・オンマトイン 足の蜥蜴、邪眼の王よ！」

「え、詠唱!？」

ルミリオが呪文を詠唱し始めたのを見て驚くネギ。すると、先ほど覆面の攻撃で湖に落下していたカモがようやく湖から出て、ルミリオの呪文に驚愕する。

「なッ!？あの呪文は……!？姐さん!奴の詠唱を止めるんだッ」

「え!？カモ君……!？」

「ダメです、間に合わないッ!」

「ブノエーン・トウトヤカクロフン・バライルサン 時を奪う毒の吐息を」

カモがあわてて叫ぶが、既にルミリオは詠唱を終え、その光る指をネギ達に向ける!

「ブノエー・ベトラス 石の息吹ッ!！」

ポウムッ

「コッコッッ!？」

詠唱した瞬間、周囲十数mに渡り灰色の霧が発生した!

「……………しまった、大きすぎたな……………」

後からルミリオがこんな呟いたが聞こえたが、気のせいと信じたい

……………

「な…何とか逃げれた……………奴はまだこっちに気づいてませんね…
…」

祭壇につながる橋の上、何とか霧から逃げ切ったネギ達。

「無事か、ネギ？」

「はい。でも空条さん、さっきのは……………？」

あの時　霧から逃げ出す際に、徐倫が素早く『コウウントユウ
キノツルギ』を振るった瞬間、霧が一部、まるでトンネルのように
晴れ、そこから三人は脱出したのだ。

「いや、まだ『確信』はないけど、この剣の能力がアーティファクト分かりかけてき
た……………」

「え？……………」
「た、確かにその『コウウントユウキノツルギ』は作られてから数
百年の間、一度も世に出たことがない故に能力に謎が多いものっす
けど……………」

そんなスゴいものだったのか、と今更ながら驚く徐倫とネギ。確かに
に仮契約してから修学旅行まで一度もアーティファクトを使ってい
ないため、あまり理解をしていなかったが……………

「……………」

そんな中、刹那はスクナの肩に乗る木乃香と千草を見て、決心を固めた目をする。

「……………お二人は今すぐ逃げてください……………お嬢さまは私が救い出します……………！」

「えッ!？」

「お嬢さまは、千草と共にあの『鬼神』の肩にいます。私ならあそこまで行けます……………」

「な……………何を言って……………第一!どうやってあんな高い場所まで……………!？」

刹那の進言に二人は狼狽える。いくら何でも、刹那があの大鬼の肩まで行けるとは考えがたかった。

「……………ネギ先生、空条さん……………私、二人にも……………このかお嬢さまにも『秘密』にしておいたコトがあります……………」

「……………何？」

「この『姿』を見られたらもう……………『お別れ』しなくてはなりません……………」

「え？」

「な……………何を言って……………？」

「しかし、今なら……………あなたたちなら……………!！」

刹那はそう言うと、『封じていたその力を』解放する。すると

バサアアアッ……

「……ッ！」「」

刹那のその背に、巨大な『一对の翼』が現れる……

「……………これが私の正体……………奴らと同じ……………『化け物』です……………」

後ろの二人を振り向きながら、刹那は恥ずかしげに言う。その目は、涙が浮かんでいた……………

「でもっ、誤解しないでください……………私の『お嬢さまを守りたい』という気持ち』は本物です！……………今まで秘密にしていたのは……………この『醜い姿』をお嬢さまに知られて、嫌われるのが怖かっただけ……………！私ッ……………」

刹那がそう吐露するが、そんな刹那に徐倫は……………

バッチイインッ

「きゃうッ！？」

背中をひっぱたいた……………

「ったく、なーに言ってんだオメーはよオオーーーーー！」

「いてて……………え？」

背中 of 痛みに悶えていた刹那だが、徐倫の一言に惚けた表情となる。

「オメーよオ、このかの幼なじみで、その後二年間も陰からずっと見守っていたんだろ？その間、アイツの『何』を見てたんだよ……………」

「…？」

私はちょっとビビったけど……と続けた徐倫は、刹那の肩に手を置き、その両の目を見つめながら話す。

「このかが『こんくらい』のコトで誰かを嫌いになると思っつか？なんねえよなあー！ー！ソんくらい、このかのことちよいと考えるりゃあわかんだろうがッ！」

「く……空条さん……！」

刹那を一喝した徐倫は後方で一部始終を惚けた表情で見ていたネギの方を見る。

「ネギ！私らで援護するぞ！」

「ハイッ！」

「空条さん……ネギ先生……」

「行ってください、刹那さん。」

「ルル・ベルじゃねえが、さっさとこのか助けてちゃんと話してきなッ！」

「は……ハイッ！」

刹那は二人にそう返事をすると、翼を広げて飛び立つ準備をする。その時、霧に包まれた祭壇の中からルミリオが現れた。

「……そこにいたか。（しかし、まさか無傷とはな……）」

「来たか……」

「ネギ先生……このちゃんの為に頑張ってくれて、ありがとう……」
「ざいます……！」

刹那はネギにそれだけ言うと、このかの元へ飛び立った！

「！あの翼……………烏族のハーフ……………！？」

「^{タスク}牙ッ！！」

ドバツドバツドバツ

「！？」

刹那を撃とうとするルミリオだが、それはネギの放った『^{タスク}爪弾』に阻まれてしまい、その隙に刹那はルミリオの射程距離外へ飛んでいった。

ドガアアツ

「わああッ！！」

「キヤアッ！！」

ドツザアアツ

「わっ！！」

「あ……………明日菜にスバル！？」

「く、空条さん……………！！」

その時、二人の反対側から覆面と戦っていた明日菜とスバルが飛び込んできた。後方を見れば、右腕をブンブンと回しながら覆面がこちらにゆっくりと歩いてきた。

「もう一人いたか……………っ！か何だよ、あの気の抜ける覆面……………」

「知らないわよ……………で、どーするの？」

「正直、あの二人に勝つのは難しいよ……………？」

四人は背中合わせになりながら打ち合わせをする。この二人と戦うのにこの面子ではキツイと感じた……………

【……………なかなか頑張ったね、みんな……………】

【僅かだが、貴様等の戦いを見せてもらったぞ……………】

「……………!?」「……………」

「この声は……………ッ!?」

そんな中、四人と一匹の頭に『二人の女性』念話が響きわたった。
だがこの二人は ……!?

【まだ限界ではないはずだぞ？意地を見せて見る貴様等ッ！】

【後一分半待っていて……………そうしたら ……】

【私らがすぐに終わらせてやる……………!!】

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE C A D E」

スタンド名 夢幻^{ムゲン}

本体 長瀬 楓

破壊力 C スピード B 射程距離 C

持続力 A 精密動作性 A 成長性 B

能力 ものを平たくして、別のものに『貼り付ける』。貼り付けたものは、能力を解除すれば一瞬で元の立体に戻る。貼り付けたちなみに解除しない場合、大体三ヶ月位で自然に元に戻る。

#62 / 京の鬼神蘇生実験 ? (後書き)

62話です。

・ 焔救出。まあ、どっちみちこの後3ヶ月はこのままですが……

・ 覆面の人物登場。学ランにマントで格闘家という出で立ちですが、ルミリオの言うとおりセンスがぶっ飛んでいます(笑) 正体はいずれ。

・ ルル・ベルVS月詠。ルル・ベルのセリフは色々台無しに……

・ いよいよ京都編もクライマックス!なるべくペース上げて頑張ります。

では!

#63 / レイジングハート・エクセリオンの逆襲(前書き)

京都編、最終決戦!!

#63 / レイジングハート・エクセリオンの逆襲

「そらよオツ!!」

ガンツガンツガアアンツ

「「「ギャー! ツ! ?」」」

ホル・ホースが『エンペラー』の引き金を引くと、妖怪たちの眉間トリガーにその弾丸が吸い込まれていった。

「オヤビン! またやられちゃいましたぜえ! ?」

「ええいくそ! カラクリテの兄さん方は水切れで帰っちまったし、あのスタンド使いとかいう連中、想像以上の実力や!」

ホル・ホースとウエカピポによってその数を四分の一以下にまで減らされ、更に頼みの綱の外道衆はナナシ連中を数十体残して帰還してしまつたために、リーダー鬼とその配下達は苦戦を強いられていた。

「よおーしウエカピポ、このまま押し切るぜえ! ツ!」

「ああ。」

二人はそう言うと、そのまま互いに弾丸と衛星を発射していった。

「ノーヴェの方は大丈夫か？」

「はい。今はデイドと一緒にオットーに看病してもらっています。」

一方、本山の屋敷にいる承太郎たち。

『亀』から出てきたフェイトは、出た先にいた承太郎と詠春にノーヴェの様態を話した。

「何か、『恐竜化』がまだ依存、という言い方でいいのか分かりませんが、しているせいかな、そのショックによるのが大きいかと……」

……後、恐竜化して寒さにやられたのか……」

「……そうですか。」

「……」

フェイトからの説明にそう返事する詠春。すると、ここで承太郎が口を開いた。

「……そろそろよお、話してくれてもいいんじゃないかねえか？」

「えっ……？」

「……何のことでしょう？」

言われた詠春は一瞬戸惑いながらも知らないという風に言っが、承太郎は引き下がらなかった。

「トばけてんじゃないかねえぜ？お前さん、あの灯笼の下にある『モノ』が何なのか、本当は知ってんだろ？」

「……………!?!」

承太郎の言った事に、フェイトは驚いた顔をし、詠春は承太郎の洞察力に冷や汗をかいた。

「……………侮れませんね、承太郎さん……………いいでしょう、お話いたします。」

そう言うと、詠春は静かに語り始めた。

#63 / レイジングハート・エクセリオンの逆襲

【後一分半待っていて……………そうしたら】

【私らがすぐに終わらせてやる……………!?!】

「……………この声……………まさか!?!」

「ああ……………『ヤツ』だな……………それに、もう一つの方は……………」

突如、脳内に響いた念話にネギたちは一瞬戸惑ったが、その語りかけてくる人物の『正体』に気づいた。

【ぼーや、さっきの戦い、作戦といい、見事だったぞ。だがな、貴

様は少し小利口にまとまりすぎだ。」

【まあ、それが良い所と言えなくもないけどね。】

【だが、今からそんなことじゃあ、とても親父にはとても追いつけんぞ？たまには後先考えず突っ込んでみたらどうだ？ガキならガキらしく、後の事は大人に任せてな！】

二人の言葉にネギは一旦息を大きく吐いた後、立ち上がった。

「ネギ……！」

「ネギくん！」

ネギが立ち上がったのを見て、明日菜たちは声を上げた。

「みなさん………行きましょう！」

「……おう！」

「来るのかい？………では、相手をしよう。」

「………」すっ

皆は叫ぶと、二人に向けて構え、ルミリオと覆面も構えなおした。

「シス・メア・バルス契約執行ッ！」

ギヤアアアッ

「てやーーーーーッ！」

「ハアアッ……！」

まずは、ネギに魔力を供給された明日菜が覆面に、徐倫がルミリオに仕掛ける！

だが、二人はそれを簡単にいなすと、カウンター気味に攻撃を放ち、二人は棧橋にたたきつけられてしまう！

ドガアツ

「グツ……………」

「キヤアツ」

「二人とも!?!」

二人がたたきつけられたことにネギとスバルは声を上げるが、気づいた時には二人の目の前にルミリオと覆面が現れ、二人に回し蹴りを仕掛けた!

「ぐつ……………」

「ああつ……………」

「なっ……………」

「ネギ……………」

二人が声を上げるが、ネギ達は二人に激突してしまった。

ルミリオと覆面は攻撃の手を緩めず、覆面は両手を前に出す構えを取ると、手をかいてんさせてその間に『水色の魔力』を蓄積させ、ルミリオは宙に飛ぶと、呪文の詠唱を始めた。

「ハイシリスケ・ガレオメテ・コトグイシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト、クラー・ポドーン・カホヨイン・オンマトイン・ト・フォーリス・エメイイ・ケイリ・カテイアーネイ・カコイ・テルゼウテイ足の蜥蜴、邪眼の主よ、その光、我が手に宿し、災いなる眼差して射よ!」

「……………!」

ルミリオはネギ達にその指先を向け、覆面は蓄積された魔力に向けて拳をぶつけた!

「リゅうがいつせん龍牙一閃……………!」

「……………しゃべったツ!?!」

「技名は言うんだ……………じゃなくて、『カコン・オンマ・ペトロセオース石化の邪眼』ツ!?!」

ドツバアアッ

覆面がしゃべった事に驚くネギ達をよそに、ルミリオは一瞬驚きながらもその指先から石化の光線を放ち、覆面は魔力の奔流をネギ達に向け放った！

バチンッ

「くっ……………！」

「アスナさん！」

ゴッ

「おおおお……………」

「空条さん！？」

だが明日菜はネギをかばうようにルミリオの魔法をハリセンに受け、徐倫は覆面の放った魔砲弾を斬り裂く形で防御した。

瞬間

「ウ……………オラアアア……………ッ！！」

バキイイインッ

「……………ッ！？」「……………」

二つの魔力は、まるで霧の如く消え去ってしまった！

「大丈夫、ネギ？」

「アスナさん……………」

「空条さん……………今のは……………」

「思った通りだ……………こいつの能力は……………」

「やはり、『魔力完全無効化能力』か……………だが空条 徐倫、君のそれは……………!?!?」

一瞬で魔力を消し去った明日菜にルミリオはその「能力」の正体を
知るが、それを徐倫も持つとは考えられず疑問に思うが、それに構
わず覆面は徐倫に向けて駆けだす。

ギユン

「龍爪貫手……………!」

そして、右手に魔力の刃を発生させて徐倫に向けて突きを繰り返した！

ガツギイイインツ

「……………!?!?」

だが、徐倫がその魔力刃にカウントユウキノツルギを当てた途端、
魔力刃は『砕け散ってしまう』！

「アーティファクト……………『カウントユウキノツルギ』……………こ
いつの能力は、言わば『共鳴』だ。」
「共鳴……………?」

覆面の拳を刀身で受けながら、徐倫は推測していた能力を説明する。

（『コウウントコウキノツルギ』だと!?……………まさかそんなものがジョースター家の手に……………!）

「こいつは、『同時に発現している同じマスターのアーティファクトと同じ能力になる』つつう能力なんだよ。だから、今はアスナの『ハマノツルギ』と同じ『魔力完全無効化』の能力が得られている。」

「なッ……………マジで?」

「マジだよ。よおしッ!このまま一気に行くぜッ!」

徐倫は叫ぶと、背後から『ストーン・フリー』を発現させた。だが、今のストーン・フリーは少し違った。

「ス、ストーン・フリーの……………サンガラスのデザインが変わってるッ!?」

「いや、それよりも腕の形状にっこもうよ!」

ストーン・フリーの右腕は両刃の剣のような形になり、肩にはとがった三角形方の肩当てがつき、サンガラスはXのような鋭利なデザインになっていた!

「『ストーン・フリー ソード・エディション』ッ!行くぜッ!」

言うと、徐倫は『ストーン・フリーSE』の右腕を覆面に向けて振りかざした!

「オラオラアアッ」

ズバアアッ

「……………ッ」

ネギとスバルがルミリオと覆面に一撃を入れたのと同じ頃、刹那もまたスクナの肩にいる千草と木乃香の元にたどり着いていた。

「なっ……………アンタは……………いつの間に……………ッ」

「天ヶ崎 千草！お嬢様を返してもらおうぞッ！！」

刹那は叫ぶと、千草に向け飛び出した！

「くっ……………近すぎる！スクナの力が使えん……………猿鬼導！！猿鬼導^{えんきどう}々……………
々……………」

千草は慌てて猿鬼導と、猿鬼導にもう一对腕が生えた猿鬼導々を呼び出した。

「ハアアアアッ！！」
ドンッ

「きゃああッ!？」

だが、刹那は一瞬で近づくと、猿鬼導、猿鬼導々を斬り裂いて木乃香を救出し、そのまま離脱していった!

「お嬢様!お嬢様、ご無事ですか……………」?

刹那は短く呪文を唱えると、木乃香の口に張り付けられた呪札を剥がした。その剥がれた反動からか、木乃香は目を醒ました。

「ん……………」

「お嬢様!」

「う…ん?…あ、せつちゃん……………へへ…やっぱりまた助けに来てくれた!」

木乃香は寝ぼけたように刹那を見ると、ホツとしたように呟く。

「お嬢様、どこか痛い所は?」

「え?あ、ああ……………なんや、あの人と言うとおり気持ちええだけやったわあ……………あちゃー、ウチはずかしい……………」

見んといてー、と恥ずかしがる木乃香を見て、刹那はホツとした笑みを浮かべた。

ふと木乃香は、刹那の背中に生える純白の翼に気づいた。

「……………せつちゃん、その背中のは…?」

「えっ…あ、こ、これは……………」

木乃香に聞かれて慌てる刹那だが、木乃香はクス、と笑うと刹那はきよとんと戸惑う。

「キレーなハネ…なんや天使みたいやなー。」

「や…やったか…!?!?」

一撃を喰らわせたルミリオと覆面がうずくまるのを見て、明日菜らは不安げに様子を探った。その時だ。

「……………身体に直接拳を入れられたのは……………初めてだよ。ネギ・スプリングフィールド……………ッ!」

「……………ッ!」キッ
ゴオッ

「ネギッ!」

「スバルッ!」

二人はネギ達を睨みつけると、拳を引いて殴りかかった!

ガシィィイツ

「……ッ!?」

だが、ルミリオの腕は『地面から生えた腕』に捕まれ、覆面は『桃色の輪』に捕らえられてしまった!

ズルウウウウウ

「……!? (影を使った転移魔法ツ!?)(
「うちの『ぼーや』が世話になったようだな、若造。」

「……(バインド!?)」

「アクセル・シューター!」

「!?!?」

「シュートッ!」

ドッガアアアアアッ

声が出たかと思えば、ルミリオは「自分の影から現れた少女」に、
覆面は飛来した数発の『桃色の魔法弾』に吹き飛ばされた!

「ああ!」

「な…」

「エ……………」

「これで『借り』は無しだな、ぼーや。」

「みんな、良く頑張ったね!」

「エヴァンジェリンさん!」

「なのはさん!」

現れた二人　　エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと高町

なのはに、ネギとスバルは歓喜の声を上げた。

「くっ…おのれえ、ヒヨっこの神鳴流剣士が…烏族のハーフやった

とは……だが、スクナの力を使えばすぐに……」

一方、木乃香を奪還された千草であるが、スクナの力ですぐにも取り戻そうと画策していた。

だが、刹那に気を彼女は自分の背後に迫る脅威に気づいていなかった……

ファサアア

「？マフラー………？」

ガシイイッ

「な、っ!？」

突然、千草の周囲にベージュのマフラーが舞ったかと思えば、それは千草の身体を固く『縛り上げてしまった』！

「な……んやこのマフラーは！固い!？」

「無駄よ。あなたにこれは解けないわ。」

あきれたような声をかけられて、千草はようやく自分の後ろにいる人物に気が付いた。

千草の後ろでは、腰まで届くブラウンのストレートの髪に、睨むようなブルーの目をした、三十代前半程の女性が、たばこを吹かしながらマフラーの片端を掴んでいた。

「このマフラーは『サティポロジア・ビートル』という虫の波紋伝導率100%の糸で編んだもの。簡単には解けないわ。」

「な…なんやアンタはッ!？」

女性は千草の質問に答えずに、掴んだマフラーの片端を引っ張って
栈橋の上にシユタ、と降り立った。

「エヴァ、言われた通り術者は確保したわよ。」

「すまん『リサリサ』。こーいったのは、術者が行動不能だとも
ともに動けず暴れるだけだからな。先ほどよりはやりやすい。」
「リ、リサリサばあちゃんまで!？」

『リサリサ』と呼ばれた女性の登場に徐倫が驚く中、エヴァンジェ
リンはネギの方へ向き直った。

「ぼーや、よくやったよ。だが、まだまだだな。いいか、このよう
な『大規模な戦い』での魔法使いの役目とは、究極的にはただの『
砲台』!つまりは“火力が全て”だ!！」

「は、はあ……」

「にははは、エヴァちゃんなかなかいい先生ぶりだね?」

「やかましい!とにかく、私たちが今から『最強の魔法使い』の『
最高の力』を見せてやる!いいな!よおおおおく、見ておけよ!
!」

「は、はい……」

「よし、いくよエヴァちゃん!」

スクナに向かいなのはと共に飛び立ちながら叫ぶエヴァ。

「こないだネギに負けたのがそんなに悔しかったのかなあ……」

「なのはさんは、今まで放置されてた鬱憤だろーな!……」

「あ…あの小娘、一体何をする気や……?」

千草が疑問を漏らした時だ。ふと空を見上げれば、緑色の髪をしたメイド。茶々丸が、その姿格好に似付かわしくない巨大なライフルを構えながら、ジェット噴射で宙に飛んでいた。

「マスター、『バインド・フリット結界弾』セツトアップ。」

【よし、やれ。】

「了解。」

茶々丸は機械的にそう答えると、ライフルのトリガーを引いた。ライフルから大きな発射音が轟いたかと思えば、スクナの周囲を球状の結界が包み込み、暴れるスクナの動きを封じてしまった！

「マスター、なのはさん、この質量相手では『十秒』程度しか拘束できません。お急ぎを。」

「十秒か……」

「ふ…十分すぎる時間だな!!」

ふたりはそう答えると、エヴァンジェリンは呪文詠唱の準備を、なのははレイジングハートを構えた。

「ト・シユンホライオン・デアアーコネート・モイ・ヘー・クリュスタリナー・バシレイアリック・ラク・ラ・ラック・ライラック、ト・シユンホライオン・デアアーコネート・モイ・ヘー契約に従い、我に従い、ト・シユンホライオン・デアアーコネート・モイ・ヘー氷の女王！」

「レイジングハート！」

「了解！」

エヴァンジェリンは強力な魔法の詠唱を行い、なのははレイジングハートに魔力を収束させる命をする。

エビデネーテとイオーニオンエレボス。ハイオーニエ・クリュスタレ
「来れ、とこしえのやみ！えいえんのひょうがー！！」

エヴァンジェリンが唱えると、スクナの周囲が一瞬にして『凍りつ
いたー』

「エヴァちゃん、一気に決めるよ！」

「そのつもりだ！私に命令するなー！！」

エヴァンジェリンはそう怒鳴り返す中、なのははレイジングハートの
の先端に集束された桃色の魔力を発射する姿勢に入った。

「バーサイス・ソニアイス・トン・イソン・タナトン・ホス・アタラクシア
全ての命ある者に等しき死を、是は、安らぎ也……………」
「スターライトオオー————」

「“こおるせかい”……………」
ピッキイイイイ

「ブレイカアアアアアアアアッ！！」

「スターライト・ブレイカー！」

ゴオオオオオオオオオオ

「……………ッ」

ドオオオオンッ

エヴァンジェリンの魔法で巨大な氷に封じられたスクナを、なのは
の『スターライト・ブレイカー』が貫き、打ち砕いた……………！！

「む……………」

同じ頃、月詠と戦っていたルル・ベルは、遠くの方でスクナが倒されるのを見て攻撃の手を休めた。

「あらあら、天ヶ崎 千草は負けてしまったようね……………」

「そうですねー、ウチももうお給料分は働きましたし、刹那センパイと戦えへんかったんは残念ですけど、もう帰りますっ。センパイによるしくお伝え下さいっ」

月詠はそれだけ言うと、そのまま消えるように立ち去ってしまった。

「行ったわね…さて、のどかは無事かしら。」

「ふうー、どーやら終わったみてえだなあ。」

同じ頃、ホル・ホースとウエカピポもスクナが倒されて消えたのを見ていた。すでに妖怪たちも2、3体にまで激減した。

「ま、勝負あつたみたいやな。アンタらの勝ちや。」

「ほななー、兄ちゃんたち。」

「なかなか楽しめたぞ、西洋の異能者！さっきの坊ちゃん嬢ちゃん達にもよろしゅうな。」

鬼達はそう言いながら、煙のように消え去っていった。

それを見送ると、ホル・ホースは「皇帝」^{エンペラー}を身体にしまい、ウエカピポも鉄球をホルスターに収めた。

「ふ、結構いい奴らだったじゃねえか。」

「さて、俺たちも屋敷に戻るか。」

「ふふふふ……アー……ッハハハハハッハー……！！
バアアカめ！伝説の鬼神か知らぬが、私の敵ではないわアッ！！」
高笑いするエヴァンジェリンに寄り添う無表情の茶々丸と、それを
苦笑しながら降り立つなのは。

「ご満悦だなあオイ……………」

「やったー すごい二人とも！！」

「あははー……」

「どーだぼーや、私のこの圧倒的な力、しかと目に焼き付けたか？
ん？」

「ス…スゴかったです、エヴァンジェリンさん。」

「そーかそーか」

すっかりゴキゲンなエヴァンジェリンと、対照的に恥ずかしげなのは。ふと、ネギは気づいた。

たしかエヴァンジェリンは20年前、自分の父ネギに『登校地獄』
の呪いをかけられて、麻帆良学園から離れられないはずだが…？

「でもエヴァンジェリンさん、『登校地獄』の呪いは？」

「あ、そうだよ！確か、学園の外に出られないんじゃないじゃなかったか？」

ネギに続いて、徐倫も気づいたらしく疑問を投げかける。

「それに、なのはさんも！確か、腕はまだ完治してないはずじゃあ
……………」

「あ、私のこれは、ここに来る前に仗助さんに『治して』もらった
から。」

「マスターの方は、強力な『呪いの精霊』を騙し続けるため、今現

在複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが5秒に一回『エヴァンジェリンの京都市行きは学業の一環である。』という書類にハンコを絶えず押し続けています。」

「今回の報酬として、明日私が『京都観光』を終えるまで、じじいには『ハンコ地獄』を続けてもらおうぞ。」

「5秒に一回」

そのフレーズを聞いた途端、ネギたちは学園長の安否を気にしたという……

実際、今学園長は大丈夫ではない状況だったりする。

「儀式の準備に時間がかかった上に、なのはさんの『レイジングハート』をミッドから取り寄せるのに時間がかかってしまいました、申し訳ございません。」

「そうなんだ、…まあ、助かったけど……」

「しかし、まさかりサリサばあちゃんまで来るとはなあ……」

ふと徐倫は、後ろで千草を尻に敷いたりサリサの方を向いた。

「まあ、私は静を連れ戻しに麻帆良に来たら、静は京都だつて聞いてね。麻帆良で待っていたら、今回の助っ人召集があったから、ついでに来たのよ。」

「ていうか徐倫、この人あなたの知り合いなの？」

二人が親しげに話すのを見て、明日菜が訪ねた。すると、エヴァンジェリン徐倫が変わって答えた。

「こいつは『エリザベス・ジョースター』、通称『リサリサ』。」「ジョースター……それって？」

「ああ。千雨の波紋の師匠で、徐倫の『曾々祖母』だ。」

「……はい？」

エヴァンジェリンが告げた事に、明日菜たち（千草を含めて）は一瞬訳が分からないように声をあげて、リサリサの姿を上から下まで見た。どう見ても、三十代前半程にしか見えなかった。

「まあ、それは後でゆっくり話すよ。……それで、お前はどつするんだ？」

「……ッ！！？」「」「」「」

徐倫が振り返った先にいたのは、斬り裂かれた唐草模様の覆面の右側から真っ赤な目で睨みつける覆面がいた。

覆面はマントを外すと、黒い籠手を着けた右手を構えた。

すっ

「そこまでだよ。」

「……！」

「あ、あんた……！？」

だが、不意に背後からルミリオが現れると、先ほど吹き飛ばされた学簿をかぶせた。

「キミをココで傷つけられるのはマズいからね。ココは、退くのが得策だよ。」

「……」

覆面は納得していない様子ではあったが、渋々構えを解いた。

「まあ、そういえ訳だ。今回は退くけれど、いずれはまた君たちの

前に現れると思うよ。」

「あ、あんた一体……………」

「……………いずれ分かるよ。それじゃあ。」

明日菜にそう答えると、ルミリオは覆面と共に転移魔法で立ち去ってしまった…

ルミリオ 再起可能

月詠 再起可能

天ヶ崎 千草 捕縛、再起不能

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

スタンド名 ストーン・フリー ソード・エディション
本体 空条 徐倫
破壊力 A スピード B 射程距離 1〜5m
持続力 A 精密動作性 B 成長性 A

能力 空糸 徐倫が、アーティファクト『コウウントユウキノツルギ』を装備した状態のみで発現できる、ストーン・フリーの特殊な姿。

右腕が両刃の剣のような形になっており、その分射程距離が伸びている他、『コウウントユウキノツルギ』の『共鳴』の能力が付加されている。

#63ノレイジングハート・エクセリオンの逆襲（後書き）

63話です。

・サブタイトルは『ゴールド・エクスペリエンスの逆襲』から。

・『コウウントユウキノツルギ』の能力は、仲間の力を借りる『共鳴』。ちなみにネギの従者限定ですので、のどかの『いどのえにつき』は借りれません。

そして、『コウウントユウキノツルギ』の能力が付加された『ストーン・フリーSE』。『コウウントユウキノツルギ』の能力以外は通常の『ストーン・フリー』と変わらないのであしからず。

・エヴァ、なのはさん、リサリサのコンボ登場（エナリコンボと呼ばないように（笑））。正直、リサリサの登場はどうするか悩みました……………

“こおるせかい”は、読み仮名が分かり次第ふりがなを振ります（汗）
・次回は京都編エピソードになります。

では！

#64 / 亀のスタンドに潜む真実(前書き)

戦いから一夜明けて……

#64 / 亀のスタンドに潜む真実

翌日 早朝

修学旅行4日目

(……………)

スクナを倒した翌朝、刹那は荷物を肩に背負って屋敷の門の前に立っていた。

(『あの姿』を見られた以上、もうココにはいられない……………お嬢さま……………申し訳ございません……………)

刹那は屋敷に一礼をすると、きびすを返してそのまま立ち去ろうとする。その時だ。

「……………行くのか？」

「！空条さん……………ネギ先生まで……………」

その門の前には徐倫とネギが立っていた。

「刹那さん……………本当に行くんですか！？このかさんはどうするつもりですか！？」

「い…一応一族の『掟』ですから……………お嬢さまを守るといっ『誓い』も果たし、神鳴流に拾われた私を育ててくれた近衛家へのご恩も返すことが……………」

「馬鹿。」

「は……?!」

突然徐倫に言われた言葉に、刹那は目を白黒させた。

「ったく、忘れたのかよ昨日言ったこと?どんな理由があるつと、お前がいきなり消えたらこのかが泣くぜ?」

「そ……それは……」

徐倫に問われて、刹那はごにごにと口を濁らせてしまう。

「そうですね!それに、正体がバレて大変なのは僕も同じです!だから、刹那さんも自分でこのかさんを守って下さいよ!」

「それは何か違いますか?しかしネギ先生……」

ネギがそう叫んだ時だ。ドコからか刹那を呼ぶ声がした。

「せつちゃんせつちゃん、大変やーーーーッ」

「大変よ刹那さーーーーん!」

「え!?な、何事ですか!?!」

慌てたように駆け寄ってきたのは、明日菜と木乃香であった。後ろからは、スバルや千雨たちも慌てた様子で走って来ている。

「実は、ホテルに放った私たちの身代わりの式神たちが暴走してるらしいのよ!」

「ええッ!?!」

「桜咲!式神ならお前の専門だろ!」

「せつちゃん、早よー!」

明日菜たちに説明されて驚く声を上げるネギと刹那。千雨たちはこ

れ以上自分の身代わりに好き勝手されたらたまったものではないと、そのまま本山を駆け下りて行った。

「……………ま、そーいう訳みただいませ？」

「……………仕方ありませんね。」

刹那はそう苦笑すると、皆の後を追うように走っていった。

「やれやれだぜ。騒がしい連中だな……………」

「元気があっていいじゃないですか。」

今までの様子を見ていた詠春と承太郎、なのは達は、微笑みながらそう話していた。

「所で……………」

ふと、なのはは屋敷の壁を見た。そこには

「あの娘、置いてかれてますけど………?」
「俺もアイツに聞きたいことがあったし、ちょうど良かったがな。」
「いやそужゃなくて、『壁にめり込んだまま』なんですけど………
……」

戻ってきて早々にのどかに飛びかかったため、のどかが反射的に放った『イノセント・スターター』の一撃により壁にめり込んだルル・ベルがいた………

#64 / 亀のスタンドに潜む真実

数時間後、身代わりの式神の暴走を止めたネギたちは、詠春に呼ばれネギの父　ナギ・スプリングフィールドがかつて京都にいた時に使っていた別荘に案内されていた。
幸いにも、修学旅行4日目は“完全自由行動日”であったため、行動することに制限はなかった。

「しかし、結構な人数で来ちゃったなあ………」

徐倫は、自分とネギの後ろを着いてくる面々を見ながら呟いた。
着いてきたメンバーは明日菜やスバル、ティアナとノーヴェをはじめ、刹那、木乃香、夕映、ハルナ、のどか、ギンガ、アナスイ、そして、いつの間にか復活して着いてきたルル・ベル（のどかに近づかないよう、ティアナに拘束済み）である。

「……まあ、承太郎さんがスバルたちに何か話があるつつつてたからな……………何だろ？」

徐倫がそう呟きながら歩いていると、目の前に昨日までの神主のような格好ではなく私服を着た詠春と、承太郎とジヨルノの3人が立っていた。

「いやー皆様、ご足労を。」

「長さん。」

「私服もシブい！」

「アスナ……………」

皆は詠春の案内で、ナギの別荘への道を歩き始めた。

「そういえば、千雨さんの姿がありません……………？」

「はい。実はさっきミスタさんを通じてポルナレフさんから連絡があつて、話したい事があるからと言って、ホテルで話しをしています。」

「そうでしたか……………」

（ポルナレフのヤツ、ついに話す気になつたか……………）

「あの、あの女の人…千草さんは……………」

「そちらは高町さんたちに任せました……………まあ、大丈夫でしょう。」

ネギと詠春が話していると、そこに徐倫が割って入ってきた。

「所で、あの白髪のカギについては……？」

「現在調査中です。今の所、『ルミリオ・アーウエルンクス』と名乗っていたことと、一ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修に来た事しか……」

おそらく偽装ですが、と付け加える詠春に、徐倫は頷いた。

しばらく歩くと、ネギたちの前に木に隠れるように三階建ての建物が見えてきた。ネギの別荘だ。

中に入ると、壁一枚がまるまる本棚になった内装が目にとまった。

「わ……」

「本がたくさん……」

「結構オシャレね……」

「ここに……昔父さんが……」

各々が室内の感想を呟いていると、早速室内の散策を始めた。書籍や食器など様々なものを見てみたが、ものが多いためネギに繋がる手がかりらしきものは見あたらなかった。

「どうですか、ネギ君？」

「はい、見たいものや調べたいものがたくさんあって……もう少し詳しく調べたいのですが、今修学旅行中なので……」

数十分ほど散策していると、詠春がネギに話しかけてきた。ネギの手にはネギの残したものらしき資料が多数あった。

「ハハ、またいつでも来て良いですよ。」

「ん……長さん、ココのカギは長さんが管理してるんスカ

「？」

ふと、ノーヴェが何かを見ながら聞くと、詠春が振り向いて答えた。

「ええ。そうですが…？」

「ふうーん……………」

ノーヴェがそう呟くと、こっそり“ソレ”を拾い上げた。

「ノーヴェ、承太郎さんがはなしがあるって。」

「ん？ああ、分かった。」

と、スバルが話しかけてきたため、ソレを放ってそちらに歩んだ。

（しかし、何であんなのがあるんだ？何で……………）

（女性用の下着なんか……………女装趣味でもあんのか？）

一方、徐倫たちとは別にポルナレフに呼ばれた千雨は、「ココ・ジャンボ」亀の中

にいた。

「……………えーと……………話つて、何？」

「ああ……………」

千雨に問われたポルナレフは、多少ためらった後口を開いた。

「……………実はな千雨、十年ほど前私が行方不明になったのは……………」

「『矢』を探して『ディアボロ』とかいう奴に返り討ちにあったんだろ？承太郎さんに聞いてるよ。」

「……………まあな。」

千雨に言われてポルナレフは苦笑すると、話を続けた。

「そのときディアボロのスタンド『キング・クリムゾン』の持つ時を吹き飛ばす能力で時間を『吹き飛ばした』影響か、時空にゆがみが生じてしまったようだな。私はそのゆがみに飲み込まれたんだ。」

「それで4年間行方不明に……………」

ポルナレフによると、その後何の縁かミッドの陸士108部隊の『女子トイレ』の個室で気絶していたのを隊士である女性に見えられた後、治療を受けてしばらく108部隊に保護されていたらしい。

「まさか、私のトイレに運がないのは親譲りなのか……？じやなくて……)ていうか、正直父さんが行方不明だった理由聞かされても、どう反応して良いのか……」

「……まあ、前置きはこれで良いとして、……実はその時発見してくれたメガーヌ・アルピーノに治療中も世話になってな……」

「アルピーノ？」もしかして、ルーテシアの？」

千雨が気づいたように問うと、ポルナレフはそうだと頷いた。メガーヌ・アルピーノとルーテシア・アルピーノ。名字が一緒だ。ファミリーネーム

「ああ、ルーテシアは彼女の娘だ。」

「やっぱり……」

「そして千雨……」

「お前の……『妹』でもある……」

「……………は？」

ポルナレフの告げた言葉の意味が分からず、千雨は思わず間抜けな声を上げてしまった。

「わ、私の……………『妹』って……………は？ちよッ……………ちよつとまて！え！？まさかルーテシアの父親って？まさか？え！？！？まさか父さん……………ッ！？」

「……………うん、まあ、そういう事だ。」

混乱しているため矢継ぎ早に言葉を繰り返す千雨に問われ、ポルナレフは頬をかきながら申し訳ないように答えた。

まあ、つまりはルーテシアが言っていた『第97管理外世界』にいるという父親というのは……………

「フザケンナー……………ッ！……」
ギャゴンッ

「……………そつか。もう、死んじゃってたんだ……………」
「ルルー……………」

ルルーテシアはそう呟くと、立ちすくむ二人を置いてその場を立ち去ってしまった…

「……………とまあ、そういう事だ。」
「……………」

承太郎は、スバルやジョルノ、徐倫たち五人に全てを話した。
ディオ・ブランドーとジョースター家の因縁を、
自分がDIOをエジプトで葬った事を、
そして、スバルやジョルノたちにジョナサン・ジョースターの肉体
の影響を受けたDIOの血が流れている事を……………

「そうだったんですか……………」
「スバルたちが…DIOの……………（そーいやー、スバルが転入して
きた時、妙な『感覚』を感じ取ったな……………アレって、ヴェルサス

と同じように、ジヨナサンの肉体の影響なんかな……………」

ジヨルノが頷き、徐倫がそう考えていると不意にスバルが口を開いた。

「そっかー…………じゃあ、空条さんと私たちって、親戚みたいなものなのかなあ〜？」

「…………まあ、遠すぎる気はあるがな……………」

「…………気には、ならないのかい……………」

スバルに対しジヨルノが問うと、スバルは頬をかきながら答えた。

「うん、まあ、気にならないっていったら嘘になるけど……………」

「まあ、今までのスバルたちを見ているからな。今さらそんなこと分かってても、特にどうこうはないよ。」

「そう、か……………」

スバルと徐倫の言い分を聞いて、承太郎は納得したように頷いた。
ギンガやノーヴェも、考えは同じのようだ。

「…………それより、問題はノーヴェの体にあの『恐竜のスタンド』が体に残っていることよね……………」

話を聞き終えると、ギンガが不安げにうつむくノーヴェを見つめながら口を開いた。

「……………そのことだが、長に話を聞いている。」
「長さんに？」

それに答えたのは、話し終えた承太郎であった。

詠春曰く、ノーヴェのちかくにあったあの灯籠の下にはある人物に預かったロストロギアが埋まっており、昨夜襲撃してきたフェルデイナンドや暦たちはそれを狙ってきたと言う事だ。

「……………そのロストロギアの正体は詳しくは知らないらしいが、そのロストロギアがノーヴェの『体内』に転移したのが原因だろう。」
「転移……………って！そんなヤバそうなのが私ンなかに！？」

先ほどまでの不安そうな顔が吹き飛び、慌てて自分の体をあちこち触るノーヴェ。それに皆が苦笑する中、ギンガが話しかけた。

「ま、まあ、そういう事なら麻帆良で精密検査ができるから、今異常が見あたらなければ帰ってからでも大丈夫だから。」

「そ、…そうか……………そうだよな……………」

ギンガにそう諭されて、少し落ち着くノーヴェと、それを黙って見つめる承太郎。

「……………」

実は昨夜、承太郎は詠春にノーヴェの体内のロストロギアの正体について説明は受けていた。だが、その正体が正体だけに、皆には打ち明けなかったのだ。

(いずれにしても、ヤツらがまた『アレ』を狙ってくる可能性はある……………警戒するに越したことはないな……………)

数時間後、ホテル嵐山に帰ってきた徐倫たちに明日菜やまき絵に楓、刹那を加えたメンツに、アナスイとウエザーが話しかけてきた。

「ヴェルサスが……………!?!」

「生きてたんだ……………あの人……………」

アナスイたちの口から語られた事実には、徐倫や楓、まき絵は驚愕の顔をする。

「ヴェルサス、って確か……………?」

「私やジヨルノさんと同じ、DIOって人の……………?」

「ああ…二年前にアメリカで『プッチ』に捨てゴマにされたと思っ
たんだがな……………」

アナスイがあきれ気味に言う。

その時、スバルが思い出したように懐をまさぐった。

「あ、そっだ……………」

「？」

「その、ヴェルサスさんと関係あるかは分からないけど、昨日話そびれちゃったから忘れてたよ……………コレ、大浴場で拾ってさ……………」

と言ってスバルが取り出した『ソレ』を取り出した時、五人の表情が強ばった。

『ソレ』は、直径20cmほどの、藍色のDISCであった……………

「あ、それは……………」

「デイ……………DISC！？何でDISCがッ！？」

「え？ええと……………コレって、一体……………？」

スバルが首を傾げていると、ウエザーがスバルからDISCを受け取った。

「このDISCは、『ホワイト・スネイク』の能力によって抜き取られた物だ。これは『スタンドのDISC』だな……………」

「ホワイトスネイク……………ってたしか？」

ウエザーや徐倫に説明されて、スバルはその名前に聞き覚えがあったので驚いた。

ホワイトスネイクと言えば、二年前に徐倫たちがその野望ごと打ち砕いた『エンリコ・プッチ神父』のスタンドである。その能力は、人の記憶とスタンド能力をDISC化させて奪い取ったり読んだりするものだ。

そのDISCの実物が、今自分の目の前にある物だというのが………？

「そ、そのDISCが、何で大浴場に……？」

「それなのですが………実はお嬢さまの頭から出てきまして………」「何だとツ！？」

刹那に説明されて、更に徐倫たちを驚愕が襲う。

「こ…このかにDISCが入れられていた………」

「ね、ねえジョリン、たしか残ったDISCって………」

『フム、『アノ者』ガ何処カへ隠したハズ………』

「ああ、そのはずだ…帰ったら「ヤツ」に確認だな………」

徐倫たちの言う人物が誰かは分からないが、とにかくDISCの所在は確認が可能らしい。

翌日、様々な謎を孕んだまま、麻帆良学園の三年生達は京都を後にした。

「フェルディナンドが倒され、あなたが送り込んだ小娘たちは惨敗
……例の『モノ』も手に入らず……無様ね。」

「……………」
「ル、ルミリオ様……………」

ヴィオレッタがルミリオをあざ笑うのに対して何も言えない曆と環。

「くっ…（悔しいが、何も言えないのも事実……………！）」

丸太に張り付いたまま歯を食いしぼる焰。そんな中、すり替えられた新巻鮭で調理したあら汁を食べ終えた学ランの人物が箸を置いた。陰で素顔は分からないが、腰まである金髪の髪が後ろで三つ編みにされており、立ち上がった際に波打つようにゆれた。

「大丈夫ですよ。『アレ』の在処は検討が出来ます。それに、」

言うと、その者の背後に黒地に金のラインが入った象ワイジョンが現れた。

「ボクも、この『ドラゴニア』に慣れたら出撃しますのです。」

「……………次こそは期待に応えなさいよ？協力してくれると言ったの

はあなたの方なんだから……」
「大丈夫だ。」

ルミリオはそう答えると、『ドラゴニア』をしまった金髪の人物に歩み寄り耳打ちした。

「キミは大丈夫なのかい？彼女らとやり合つのは
「大丈夫ですよ。上手く行けば引き込みますから。」
「そうかい……頼んだよ、『ホクト』。」

t o b e c o n t i n u e d . . .

「PRIVILEGE CADE」

名前 ソル・キタツラ&ルナ・キタツラ

1987年12月13日生まれ

年齢 16歳

好きなもの ソル：ルナ、ジンジャー・エール、ちくわの磯部揚げ
(日本に来てから気に入ったらしい)

ルナ：ソル、ミルクティー、白身魚のフライ（ソースは気分による）

嫌いなもの ソル：豆類、特にひよこ豆

ルナ：アルコール

備考 サルシツチャにつき添う双子。ソルとルナが順番に言った後に二人同時に話すというしゃべり方が特徴。

両親をギャング（パツシヨ^{パツシヨ}ネとは敵対していた組織）の麻薬の密輸を目撃した為に殺された過去があり、復讐のためにサルシツチャに近づき組織に入団、復讐を果たした後は、サルシツチャの側近として仕えているが、サルシツチャ本人としては『カタギ』に戻ってほしいというのが本音である。

両親が殺されて以来、2人は常に一緒である。それは「兄妹」というよりは、「恋人」にすら見えるほどの仲の良さである。

スタンド名 ラッシュユ&ダッシュユ

#64 / 亀のスタンドに潜む真実（後書き）

63話です。

・サブタイトルは『真実の口にひそむ真実』から。

・何となく気づいていた方もいたようですが、ルーテシアはポルナレフの娘、つまりは千雨の異母妹です。

実は伏線はありまして、ルーテシアが普通にスタンドが見えているような場面があったり、後はトイレでの災難とか（笑）

・スバルたちのルーツとノーヴェエの体内のロストロギアの話。ちなみに今さらですが、スバルたちのかけ声はDIOや吸血鬼たちの「WREYYYYYYYY」から取っています。DISCの所在を知っている「ヤツ」に付いては次回以降に。

・最後に登場した『ホクト』。実は結構重要なキャラになるので、お楽しみに。

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315i/>

ジョジョの奇妙な冒険 part6異聞録 ストライカーズ・オーシャン

2011年11月7日08時17分発行